

# 多摩川の洪水と環境変動 —近世多摩川洪水史と完新世段丘—

2001年

増 渕 和 夫

多摩川流域自然史研究会代表

# 目 次

I 多摩川における晩氷期の洪水氾濫 .....	1
— 秋留台地の形成と秋留原層 —	
1. 秋留台地の地形と地質 .....	1
2. 秋川、平井川の地形概観 .....	1
3. 段 丘 .....	5
4. 秋留原層 .....	34
5. 秋留原層の分布と堆積年代 .....	62
6. 秋川・平井川沿いの立川段丘の形成過程 .....	65
7. まとめ .....	66
謝 辞 .....	67
引用文献 .....	67
II 多摩川における縄文時代晩期から古墳時代の洪水氾濫 .....	71
— 完新世段丘の形成と洪水氾濫 —	
1. 多摩川・浅川合流点低地 —日野低地—における洪水氾濫 .....	71
2. 落川・一の宮における洪水氾濫 .....	72
3. 調布染地における洪水氾濫 .....	80
4. まとめ .....	81
謝 辞 .....	81
引用文献 .....	82

Ⅲ 近世洪水史にみる多摩川の洪水特性と環境変動 .....	83
1. はじめに .....	83
2. 年 代 .....	83
3. 対象地域 .....	84
4. 洪水発生件数と頻度 .....	84
5. 洪水氾濫の経年変動傾向 .....	91
6. 地域別（河岸、地形地域） .....	108
7. 洪水型 .....	118
8. 水害原因 .....	119
9. 崩 壊 .....	124
10. 土砂堆積 .....	124
11. 流 木 .....	125
12. 高 潮 .....	125
13. 流路移動 .....	125
14. 代表事例と自然条件 .....	126
15. 支 流 .....	128
16. 他の河川との比較 .....	133
17. 開発、治水と洪水氾濫 .....	151
18. 気候と洪水氾濫 .....	155
19. まとめ .....	175
謝 辞 .....	176
引用文献 .....	177
表1 多摩川洪水氾濫年表 .....	180

# I 多摩川における晩氷期の洪水氾濫

## — 秋留台地の形成と秋留原層 —

増 渕 和 夫・曾 原 利 満・藤 澤 正 一・向 山 静 夫

### 1. 秋留台地の地形と地質

秋留台地は北を草花丘陵、南を加住丘陵、西を羽生・伊奈丘陵に囲まれ、東で多摩川を挟み武蔵野台地に面し、東西約7.5km、南北約3kmの広がりがある。草花丘陵との間には多摩川支流の平井川が、加住丘陵との間には多摩川支流の秋川が流れている。草花丘陵は大仁田礫層から構成され、加住丘陵は加住礫層から構成される。大仁田礫層は分級が著しく悪く、直径1m前後の巨礫を交え、砂岩を主とし、これに泥岩、チャート及び閃緑岩を含み、礫の風化は進んでいる。加住礫層の礫種構成も草花礫層と同様であるが、礫層中にシルト層や砂層が挟在し、鍵層となる凝灰岩層も挟まる。草花礫層、加住礫層は上総層群飯能礫層に対比される。加住丘陵は丘陵地のほぼ中央を流れる谷地川によって、北側の加住北丘陵と南側の加住南丘陵とに細区分され、加住北丘陵が秋留台地や多摩川に面するあたりの多くにはバッドランド地形が形成され、あきる野市「六枚屏風岩」は東京都天然記念物に指定されるほど有名である。羽生・伊奈丘陵は新第三紀中新統の五日市町層群から構成されている。秋留台地を囲む丘陵地の西側には関東山地の一部を構成する山地が分布し、秩父層群や小仏層群からなっている。秋留台地の基盤は草花丘陵、加住丘陵と同様飯能礫層に対比される五日市砂礫層である。

秋留台地の高度は西端で海拔185m、東に向い緩やかに傾斜しており、台地の主体は多摩川を挟んで東に分布する武蔵野台地の立川面に対比される秋留原面からなる。秋留原面の東西の勾配は8.4/1,000であり、武蔵野台地の立川面の勾配は2.5/1,000であるから、秋留原面の勾配は大きいと言える。平井川、秋川沿いには多摩川沿いの青柳面や拝島面に対比される段丘面が分布し、さらに下位には完新世段丘面群が形成されている。

### 2. 秋川、平井川の地形概観

#### (1) 秋川

秋川は流域面積約168.8km<sup>2</sup>、河床水平延長46.2kmであり、流域面積では多摩川1,240km<sup>2</sup>の13.4%を占め、多摩川最大の支流である。源流は三頭山（標高1,527.5m）の南側斜面にあり、途中から東に転じて流下し、アサイ沢などの支流を合流して大平沢と名称を変え、

下流の九頭竜神社付近で、ハチザス沢と合流し、その下流では南秋川と呼称され、曲流しつつ全体として南東に流下、途中大小の支流を合流、本宿で浅間尾根の北側を流下していた北秋川と合流し、以降秋川と呼称される（角田, 1983）。本宿より下流では、養沢川などの支流を合流させつつ東流し、あきる野市伊那より下流では秋留台地と加住丘陵の間を東流、あきる野市平田ヶ崎で多摩川と合流する。養沢川と合流する落合より上流の秋川およびその支流では、山地を形成する固い岩盤を深く下刻してV字谷を形成して流下するが、その下流では河岸段丘を形成する（角田, 1983）。流域内の地質は関東山地の南東部を占め、関東山地は北西～東～東南部に八王子構造線、北西～南西に千曲川構造線、南～東南部に鶴川断層が走る地塊である（角田, 1983）。関東山地南部の地質は五日市-川上構造線（矢部, 1925）によって、北部と南部に限られ、北部に秩父層群、南部に四万十帯に属する小仏層群が分布する。五日市盆地には秩父層群と小仏層群に囲まれ、これらとは不整合関係あるいは断層で接する新生代第三紀中新世の五日市町層群が分布している（五日市盆地団体研究グループ, 1981）。五日市町層群は下部の秋川層と上部の網代層に二分され、それらは不整合関係にある。五日市盆地の東側に位置する伊那丘陵は、秩父層群とこれと断層で接する五日市町層群からなる。

秋川の縦断形（現河床縦断形図1）は、角田（1983）で明らかにされたように、三頭沢とハチザス沢の合流点付近と、南秋川と北秋川との合流点付近の本宿に遷緩点がある。三頭沢とハチザス沢の合流点付近の遷緩点より上流の河床平均縦断勾配は167/1000で、これより下流の遷緩点・本宿までのそれは27.4/1000である。本宿より下流の平均縦断勾配は6.6/1,000とさらに緩傾斜となる（角田, 1983）。

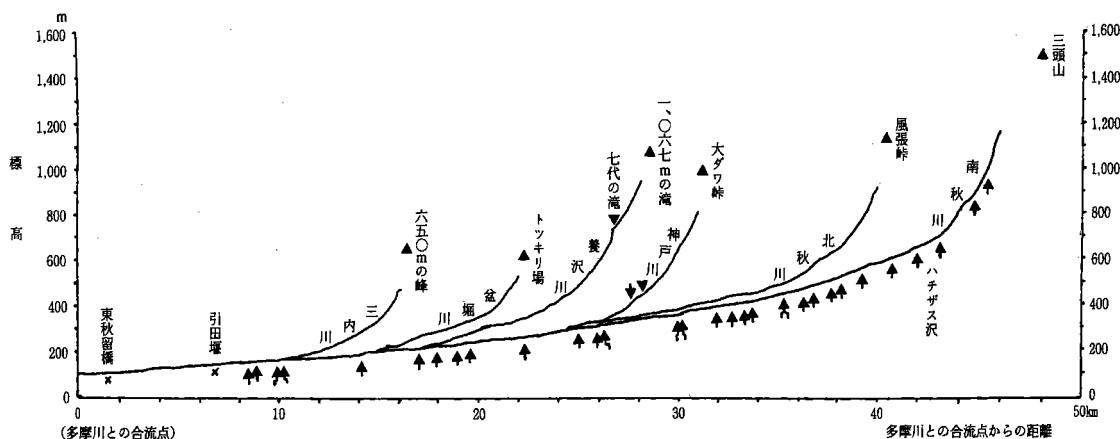


図1 秋川および主な支流の河床縦断面図（角田、1983による）

▲▼は支流の合流点の位置

## (2) 平井川

平井川の源流は、日の出山（標高902.3m）の東側山腹の不動沢である（角田, 1992）。不動沢はほぼ東に流下し、途中三ツ沢尾根の南側斜面からのいくつかの沢を合流させつつ、南東へ流路を転じ、滝本の不動堂前で、南西から流下してきた滝本沢と合流し、この付近から下流部を平井川と称している。平井川は日の出町を北西から南東へ流れ、幸神付近から流路を東に転じ、曲流しつつ東流、あきる野市草花下も川原で多摩川に合流する。渇水期には岩井橋下流から約2キロほどの下流の下諏訪橋付近まで涸れ川となる（米光, 1992）。流域面積は約38.1平方キロメートル、幹線流路延長約19.3kmである。流域内の地質は、幸神付近から上流域に関東山地を構成する秩父層群川井層が北西—南東方向の走向で分布している。川井層は主として含礫泥岩・砂岩泥岩互層及び砂岩からなり、チャート・石灰岩・塩基性火山岩をレンズ状に挟んでいる。平井川左岸の山地からはほぼ北から南に、右岸の山地からは矢越沢より上流では南西から北東に、矢越沢とその下流では西から東に支流が合流する。幸神付近から上流の平井川は、地質構造の影響を受け、流路が全体として北西から南東に向き、いわゆる適従河川、あるいは縦谷河川となっているとされる（角田, 1992）。幸神から下流の平井橋於奈淵にかけての平井川右岸の羽生丘陵、平井川左岸の八幡山付近（坂本、玉の内、塩田）には五日市町層群が分布している。日の出町北東部、馬引沢より東側の草花丘陵には、未固結の砂礫層からなる大荷田礫層が分布している。平井橋直下の於奈淵付近では五日市町層群高尾凝灰岩部層と大荷田礫層とが高角度の断層で接している。草花丘陵には大荷田川、鯉川、氷沢川、谷川、足下田川などが、ほぼ北から南に向かう直線的な流向を示して分布する。

図2に平井川の現河床縦断形を示す。タルクボ沢との合流点付近を境界に縦断勾配が大きく異なり、タルクボ沢より上流の平均勾配は142/1,000、その下流は12.6/1,000である（角田, 1983）。タルクボ沢より下流には、3つの遷緩点がある。幸神沢が合流する幸神付近と、北大久野川が合流する落合付近、及び玉の内川が合流する塩田付近である。幸神付近から平井川は南東から北東に流路を転じ、谷幅も広がる。北大久野川が合流する落合付近から、玉の内川合流点の下流、塩田の日の出町役場付近には、平井川流域でも広い氾濫低地が分布している。落合・日の出町公営住宅付近の氾濫低地は、平井川河床より2m前後高く、粘土や砂の混じる褐色～明褐色砂礫層から構成され、町役場付近の氾濫低地は河床より1～2.5m高い（角田, 1992）。平井川における氾濫低地の発達は、遷緩点の位置、即ち平井川の自然地形と関連していると思われる。

現平井川の河床形態は、山地部では西ノ入沢・矢越沢との合流点付近を境に上流部と下

流部で異なり、西ノ入沢との合流点付近より上流は谷幅も狭く、基盤岩が露出し、ときに直径1m以上の巨礫の点在もみられ、西ノ入沢との合流点付近より下流は河川敷や中州が形成され、礫の直径も人頭大から拳大のものが多くなり、礫径は流下するとともに、減少する傾向を示す（角田, 1992）。

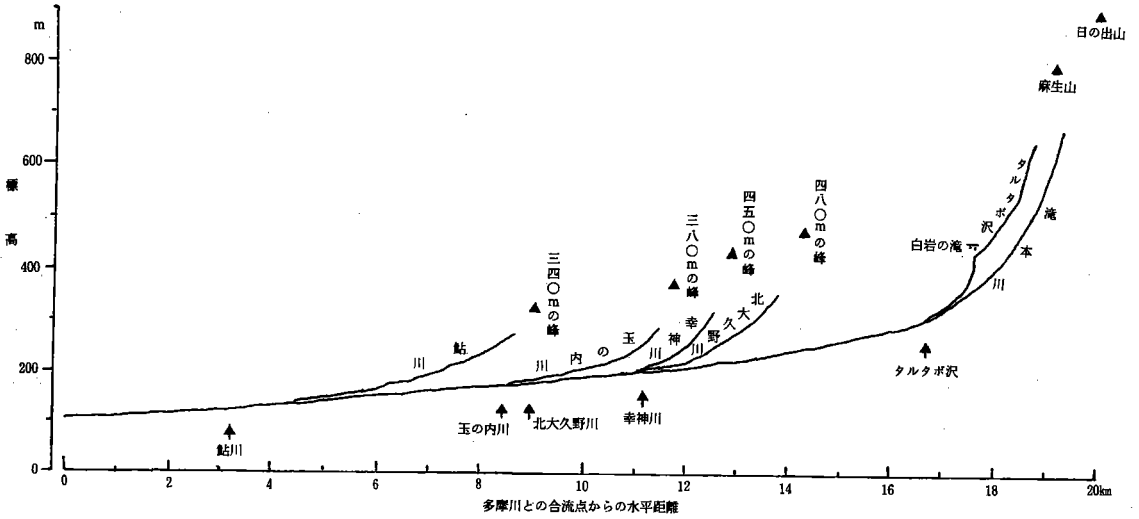


図2 平井川の河床縦断面図（角田, 1983による）

▲は支流の合流点の位置

### (3) 多摩川

源流域は標高2,109mの唐松尾根付近を水源とする丹波川と、標高2,057mの大菩薩嶺付近を水源とする小菅川である。両河川の合流する奥多摩湖の湖頭標高520mより下流を多摩川と呼称する。以後、秩父山地を東方に流下し、氷川集落付近で日原川を合流し、青梅市街地より下流の平野部に出た後、流路を南東に転じ、武蔵野台地と草花丘陵の間を流下して、平井川を合流、秋留台地の南東端で秋川を合流し、武蔵野台地や多摩丘陵からの浅川、野川などの支流を合流させつつ、東京湾に注いでいる。

丹波川を合わせた流路延長は約138km、流域面積1,240km<sup>2</sup>である。山間部の主流路が東西方向であるのに対し、支流の流向が一般に北西-南東方向であるのは、秩父層群、小仏層群の走向が北西-南東方向であり、北東に傾斜する衝上断層が発達する地質構造を反映しているとされる（高木, 1990）。高木（1990）が明らかにしたように、奥多摩湖湖尻小河内ダム付近より上流の落合一丹波間には二つの傾斜遷移点が存在し、その下流は流下距離に対し、およそ一つの指数関数として示される。

青梅市街地より上流の現多摩川の河床形態は、軍畑を境に、その上流は河床に基盤岩の

露出が顕著で瀬と淵が交互に出現する。軍畑より下流は河谷の屈曲部に砂礫堆の発達が著しい。青梅付近より下流の福生までは丘陵と台地及び河原のパターンからなり（内田, 1979）、福生～溝口間は網状流跡と砂礫堆の組み合わせパターンからなる扇状地性平野であり、中流部の溝口～鹿島田間は自然堤防と後背湿地の組み合わせパターンからなる自然堤防型平野であり、鹿島田より下流部は自然堤防・砂州と後背湿地の組み合わせパターンからなるデルタ平野とされる（門村, 1961）。福生より上流は、内田（1979）によれば、上流山地部にあたり、その下流が下流デルタ平野部となる。上流山地部は山地とそれに付随する台地と深い谷の最上流部のパターンと、これより下流の二つに区分され、その境界は青梅付近とされている。多摩川は上流山地部より扇状地を欠いて、直接、下流デルタ平野部へと移行するという特徴をもっていることになる。内田（1979）は扇状地を欠く理由として、多摩川が山地・丘陵・台地にはさまれて、扇状地を形成するだけの平面的スペースを欠いていることを挙げている。

### 3. 段丘

秋留台地には最高位の秋留原面以下、全部で9段の段丘面（図3；角田, 1981）が分布している。秋留原面は立川面、新井面は青柳面、横吹面、野辺面は拜島面に対比される（角田, 1981b）。角田（1981b）は小川面上に前田耕地遺跡があることから、その離水時期を今から1万年前かそれよりわずかに新しい時代とし、牛沼面の離水時期を牛沼遺跡（「清水遺跡」）から縄文時代中期前としている。表1に秋留台地の遺跡と地形面、時代を示す。秋留原面～横吹面「代継・富士見台遺跡」や、秋留原面「水草木遺跡」、「三吉野遺跡群井戸端地区遺跡」で縄文時代草創期の遺物が認められるとともに、秋留原面「三吉野遺跡群清坊地区遺跡」、東秋留駅西方「飯坂上遺跡」で先土器時代の遺物が認められているが、秋留原面では先土器時代、縄文時代草創期の明確な遺跡が検出されていない。新井面～横吹面の「雨間地区遺跡」は縄文時代前期以降の遺跡であり、縄文時代前期には離水していたと推定され、新井面、横吹面の多摩川沿いの段丘との対比（角田, 1981b）に、矛盾はない。遺跡番号A52は南郷面にあり、南郷面は縄文時代後期には離水していたと推定される。屋城面上の「中高瀬遺跡」は、縄文時代後晩期には離水していたと推定される。秋川氾濫面のA106は、秋川との比高差約5mで、古墳時代にはすでに氾濫の直接的影響下から脱していたと推定される。

平井川、秋川沿いの各段丘面河床縦断面投影図（図4）を、国土地理院平成10年発行1/25,000地形図「拜島」、「五日市」、東京都平成8年発行1/2,500地形図「羽生」「塩田」



表1 秋留野台地の遺跡と段丘面

遺跡番号	遺跡名	時代	住居址など生活址の時代	段丘面	海拔高度m	現河床面との比高	比較した河床面高度m
A 29	前原	縄中平		秋留原	175~80+	25~30+	秋川150
A 31	松岩寺	弥中		山麓	220	70	秋川150
A 36	山田古墳	古奈		牛沼	160	150	秋川145
A 37	天神東	縄中		小川	155~160	15~20	秋川140
A 42	菅生第一	縄古					
A 43	菅生第二	縄前古	古		160~180	19~39	平井川141
A 44	菅生第三	古		秋留原	160~170	19~29	平井川141
A 46		縄古		秋留原	150±	15±	平井川135
A 47	御堂上古墳群	古初~平		小川	138~150	3~15	平井川135
A 48	羽ヶ田	縄前・中・後	縄	秋留原	140~150+	9~19+	平井川131
A 49	北小宮	縄前~後古奈平	縄古	秋留原	140~150-	10~20-	平井川130
A 51		縄後		小川	135±	8±	平井川127
A 52		縄前		南郷	130~135	3~8	平井川127
A 54		縄前		丘陵斜面	160~170	45~55	多摩川115
A 55		縄早		丘陵斜面	150~170	35~55	多摩川115
A 56		縄早		丘陵斜面	160~180	45~65	多摩川115
A 57	橋場・江里	縄中後古平		秋留原~丘陵	160~170	45~55	多摩川115
A 60	慈勝寺前古墳	縄古奈		丘陵斜面	150+	40	多摩川
A 61		縄前		丘陵斜面	150±	40±	多摩川
A 62		縄前		秋留原	140±	30±	多摩川110
A 64	中高瀬	縄後晩古平	縄後晩	屋城	130±	8±	平井川122
A 65		縄古		野辺	130+	20+	多摩川110
A 66	森山古墳群	古		野辺	120~130+	10~20+	多摩川110
A 67	瀬戸岡古墳群	古終奈初	古	野辺	145~155+	4~14+	平井川141
A 68	石神	古	古	秋留原	140~150+	18~19+	平井川127~131
A 69	原小宮古墳群	古		秋留原	140~150+	18~19+	平井川127~131
A 70	松海道	縄中	縄中	秋留原	135+~140+	13+~18+	平井川122
A 72	静の郷	縄中		小川	155~160	15~20	秋川140
A 73	もみじ塚	近		野辺	160-	20-	秋川140
A 74	開戸	縄中後古奈平	縄(集積など)、平	小川	140+~150+	15~25-	秋川125
A 75	富士見台	縄早前中後古前中近	縄早(炉),中古	秋留原~横吹	155~165-	30+~40-	秋川125±
A 76	代継	縄早前中後古前中近	縄早(炉),中古	秋留原~横吹	155~165-	30+~40-	秋川125±
A 77	南蛙山	縄中後古	縄(土坑)	秋留原	150±	30±	秋川120
A 78	武者手ヶ原	縄古	縄	秋留原	150~155-	30~35-	秋川120
A 80	清水	縄	縄	牛沼	130~140	10~20	秋川120
A 81		縄中後		小川	130~135-	15±	秋川115+
A 82	余田	縄中後弥古中	古	秋留原	150±	30±	秋川120
A 83~				新井~横吹			秋川115
A 85	雨間地区	縄前弥古後			135~145+	20~30+	秋川115
A 86	雨間中郷(御屋敷山)	縄中		小川	120~135-	5~20-	秋川115
A 87	飯坂上	旧縄中		秋留原	140±	30±	秋川110
A 88	寺中・宅地附宮ヶ谷戸	縄前弥古	縄古	野辺	125~135	15~25	秋川110
A 89	前田耕地	旧縄草~後弥古奈平中近	縄草中後弥後平	小川	125±	15~20	秋川105
A 90	下原	縄中後		小川	130±	20±	秋川110
A 91	二宮・二宮森腰	旧縄草中弥古中近	縄前後弥古	秋留原	130~135+	13~18+	平井川117
A 92		中		小川	120±	10±	秋川110
A 93		縄中		小川	120±	15±	秋川105

遺跡番号	遺跡名	時代	住居址など生活址の時代	段丘面	海拔高度m	現河床面との比高	比較した河床面高度m
A 94	法林寺館	中		南郷	115~120-	10~15-	秋川105
A 95	二宮城跡	中		小川	120±	15±	秋川105
A 96				小川	120±	15±	秋川105
A 101	天神前	縄中古奈平中	縄(土坑)古奈平	秋留原	158~160	23~25	平井川135
A 103	淵上	縄中近		小川	150±	25±	秋川125+
A 104	水草木	縄早前中後弥古奈平中近		秋留原	180~185	30~35	秋川150
A 106		古中近		氾濫面	135+	5+	秋川130
A 108	新道通	縄古奈平~	古	屋城	140~150	5~10	平井川135
A 109	砂沼	縄後平中近		秋留原	180~185	30~35	秋川150
A 110	上賀多	縄古古代中~	古代	野辺	145~150	4~9	平井川141
A 111	阿岐野	縄早前奈平近		秋留原	170±	30±	秋川140
A 112	西龍ヶ崎	縄早前中後古近~	縄早後半(土坑)古	野辺	145~150-	20~25-	秋川125
A 113	南小宮	縄後古代近~	古代	南郷	136	6-	平井川130-
H 3		古		山麓	180~190	2~23	平井川177
H 4		古	古	山麓部、屋城面	180~210	9~39	平井川171
H 5		縄中		山麓	170~190	15~35	平井川155
H 6		縄中		小川	170~190	17~37	平井川153
H 7		縄中		小川	160~180-	8~28-	平井川152
H 8		縄		屋城	160~165		平井川152
H 9	西落合	縄弥	縄	丘陵裾部	190~195	23~28	平井川167
H 10	岳の上	弥古		秋留原	180~185	13~18	平井川167
H 15	三吉野遺跡群 宿通地区	縄		秋留原	170±	15±	平井川155
H 16		縄中		山麓	200	45	平井川155
H 17	三吉野遺跡群 清坊地区	旧縄前弥後古奈平中	弥後古	秋留原	165~170	13~18	平井川152
H 18	三吉野遺跡群 欠上・下モ原	縄弥古後奈平	弥古	秋留原	155~165-	14~22-	平井川141~143
H 21	三吉野遺跡群 宿通地区	平中近		小川	165±	10+~13	平井川152~155
H 22	道場	古奈平近		秋留原	175+	13+	平井川162
H 23	道場古墳群	古		秋留原	175+	13+	平井川162
H 24	三吉野遺跡群 井戸端地区	縄早前奈平近		秋留原	170±	30±	秋川140

A:あきる野市,

H:日の出町,

遺跡番号:東京都遺跡台帳市町村別No.

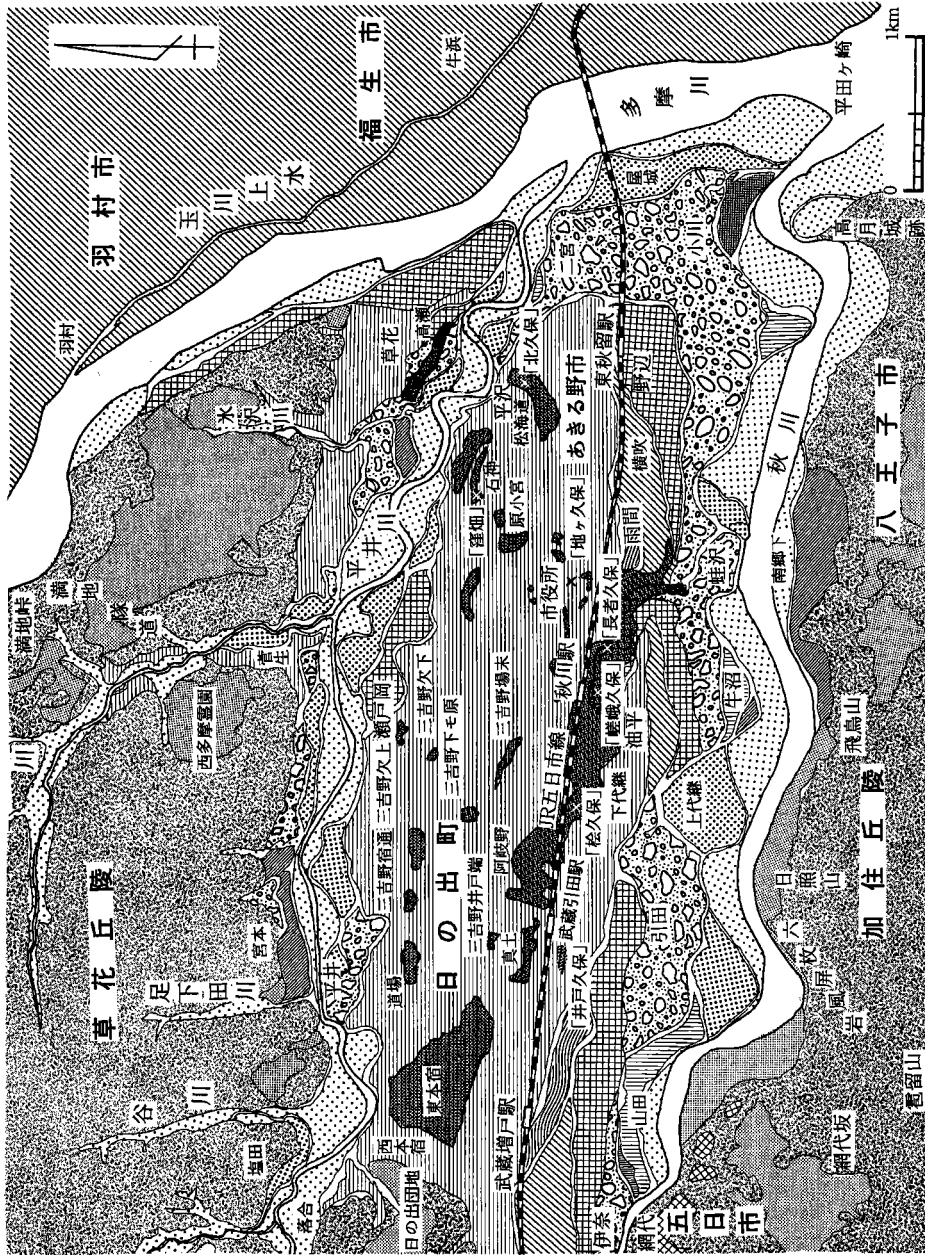
旧:旧石器時代,

縄:縄文時代,

草:草創期, 早:早期, 前:前期, 中:中期, 後:後期

弥:弥生時代 古:古墳時代 古代:古代 奈:奈良時代

平:平安時代 中:中世 近:近世



- |            |                |              |                  |        |
|------------|----------------|--------------|------------------|--------|
| 1 山地および丘陵地 | 2 秋川南岸の段丘面     | 3 秋留原面       | 4 新井面            | 5 横吹面  |
| 6 野辺面      | 7 小川面          | 8 寺坂面        | 9 牛沼面            | 10 南舞面 |
| 11 屋敷面     | 12 祀堂面         | 13 須河床および河川敷 | 14 人工改変地(盛土・埋立地) |        |
| 15 凹地      | 16 多摩川東岸の武蔵野台地 |              |                  |        |
- ×印(白、黒); 窪地地名位置、「」; 窪地名

図3 秋留台地および周辺地域の地形区分図 (1/50000)

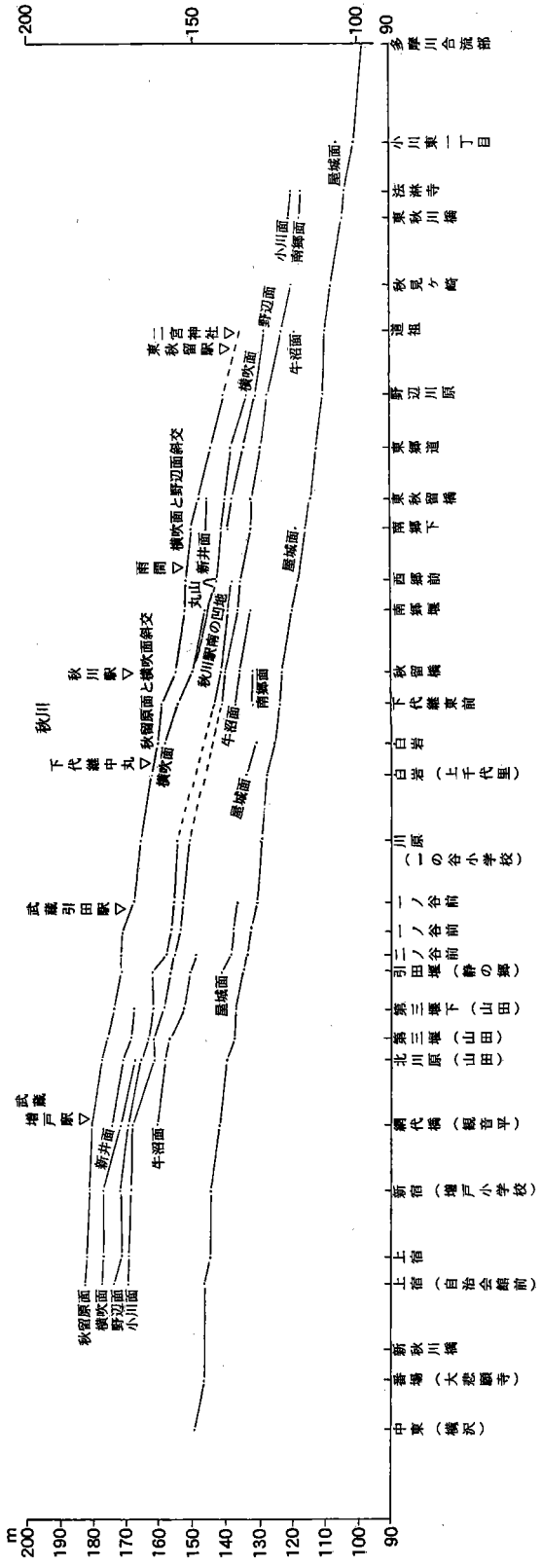


図 4-1 秋川段丘河床縦断投影図

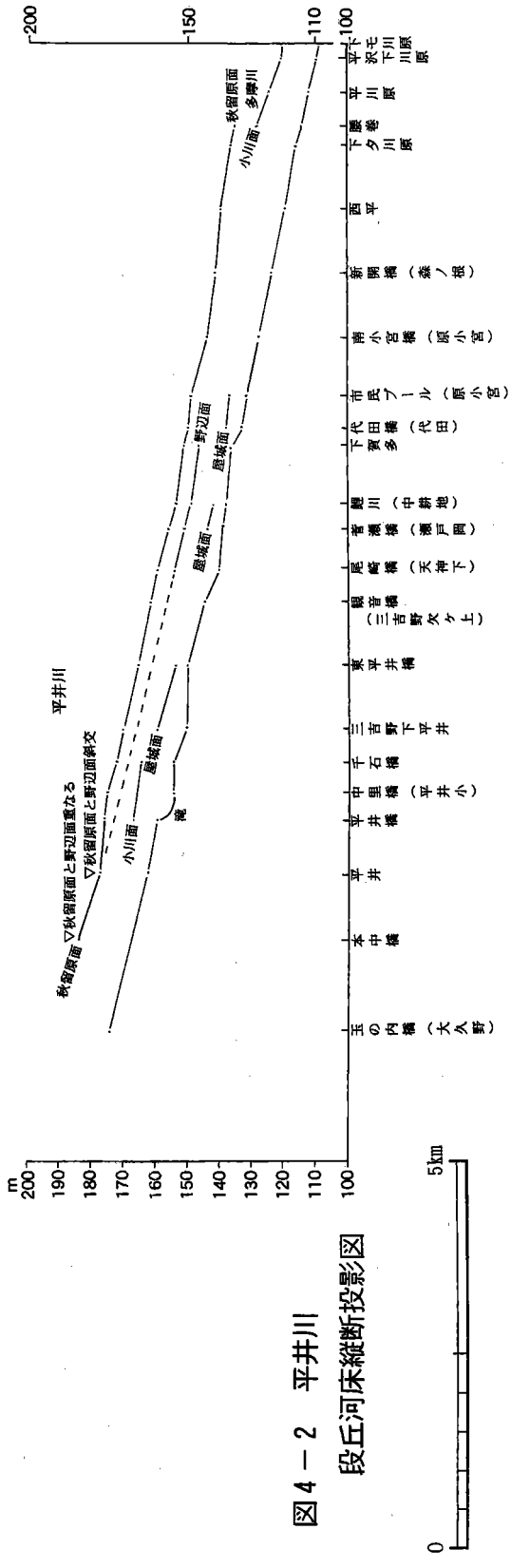


図 4-2 平井川 段丘河床縦断投影図

「瀬戸岡」「福生」「伊那」「増戸」「秋川」「東秋留」「引田」「戸吹」を元に作成した。河床面、段丘面海拔高度は1/2,500地形図から読みとった。各段丘面の横断形を図5に示し、すべての段丘面の横断形は、図の左側が、各川の左岸になるようにした。図6に露頭調査地点の位置を示す。

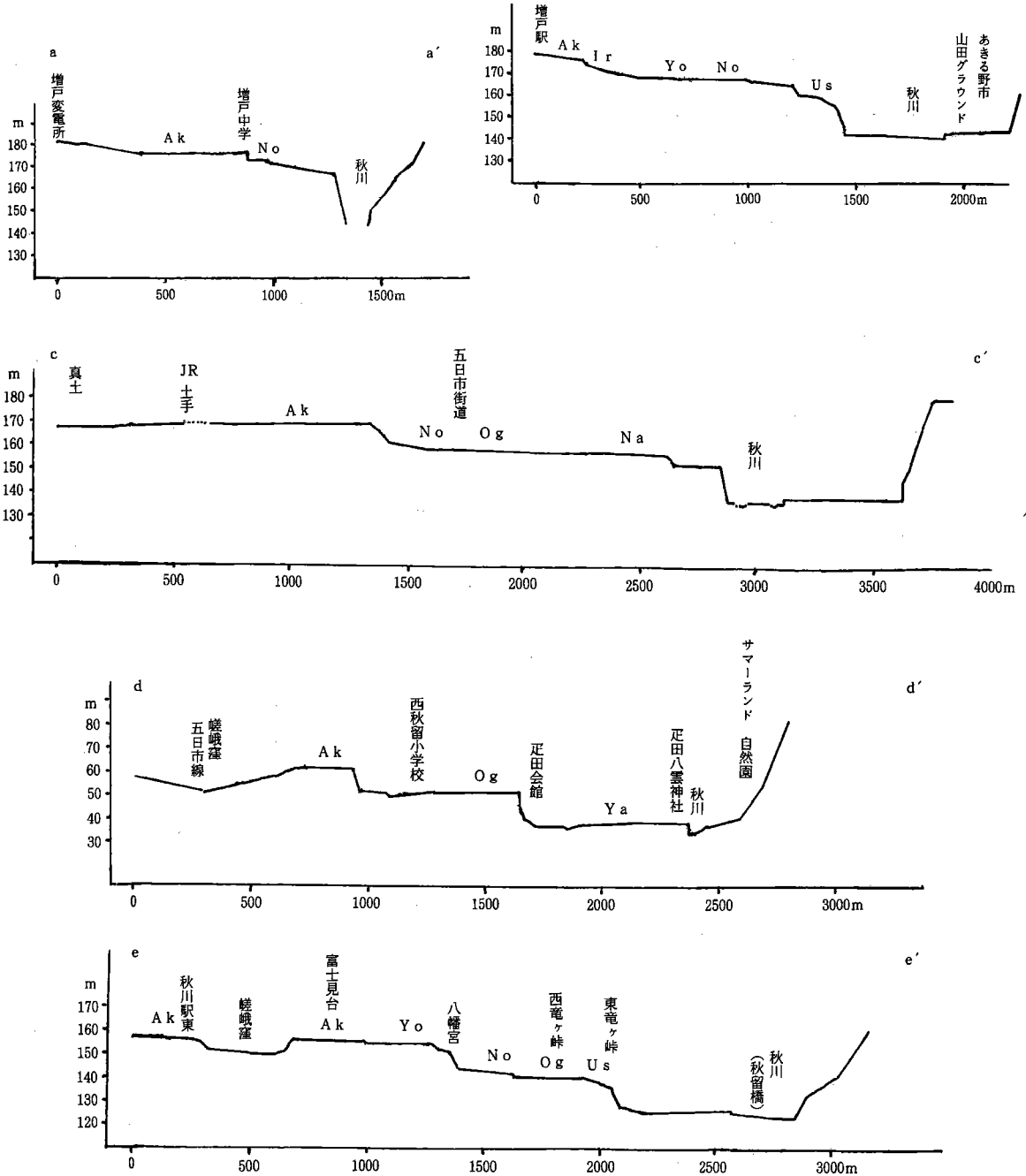


図5-1 段丘面横断形 (秋川)

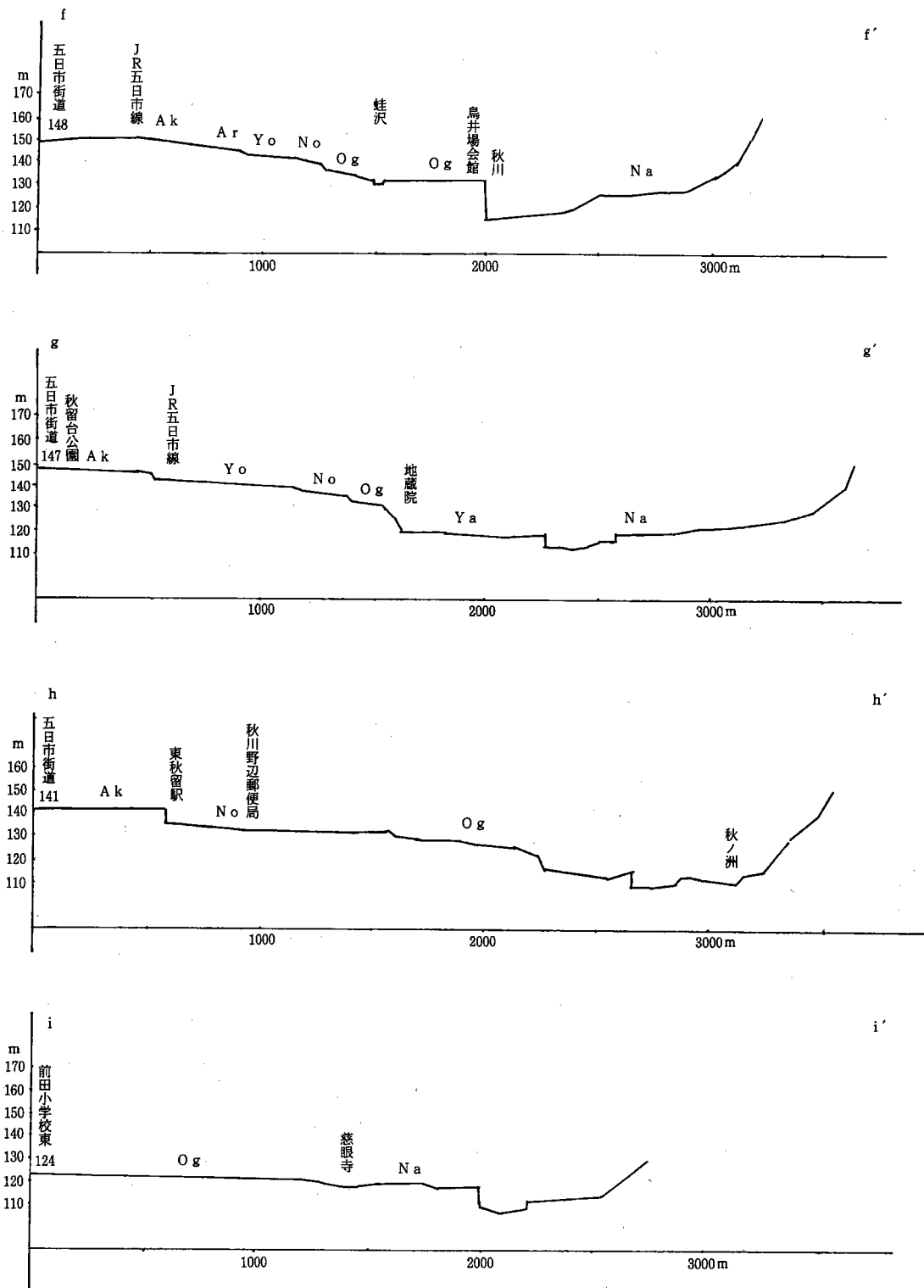


図 5 - 2 段丘面横断形 (秋 川)

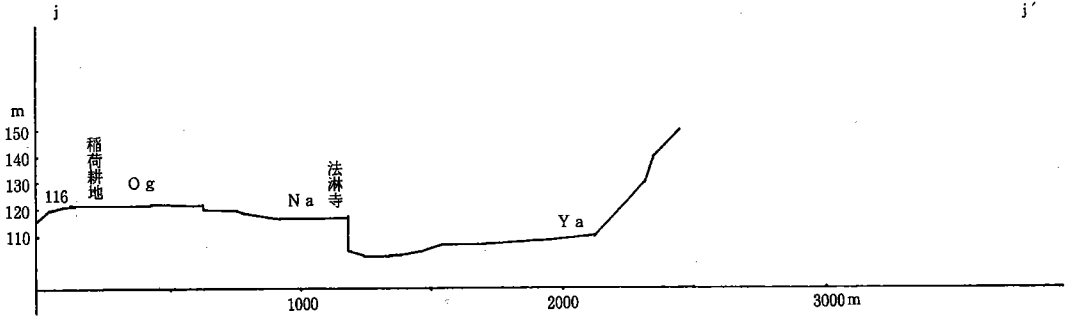


図5-2 段丘面横断形(秋川)

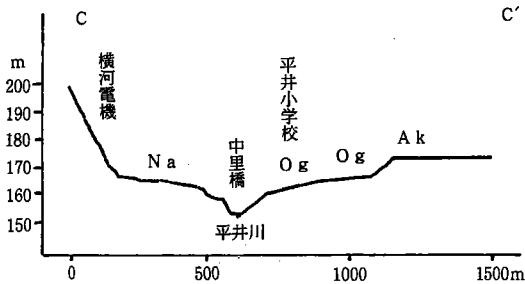
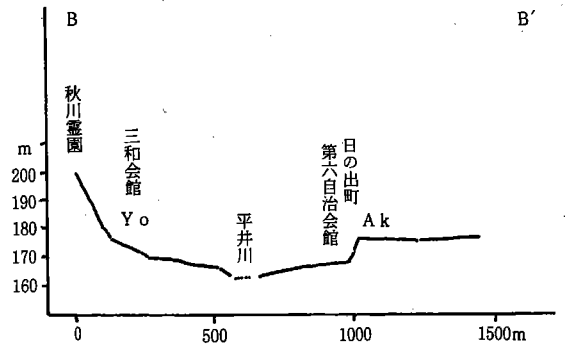
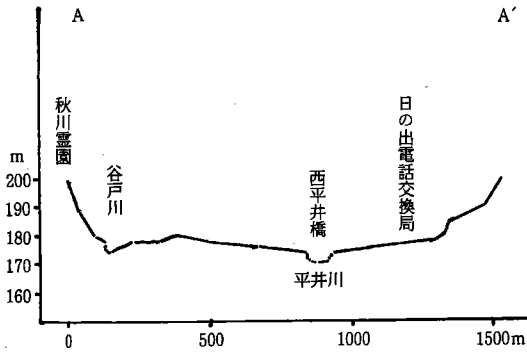


図5-3 段丘面横段形(平井川)

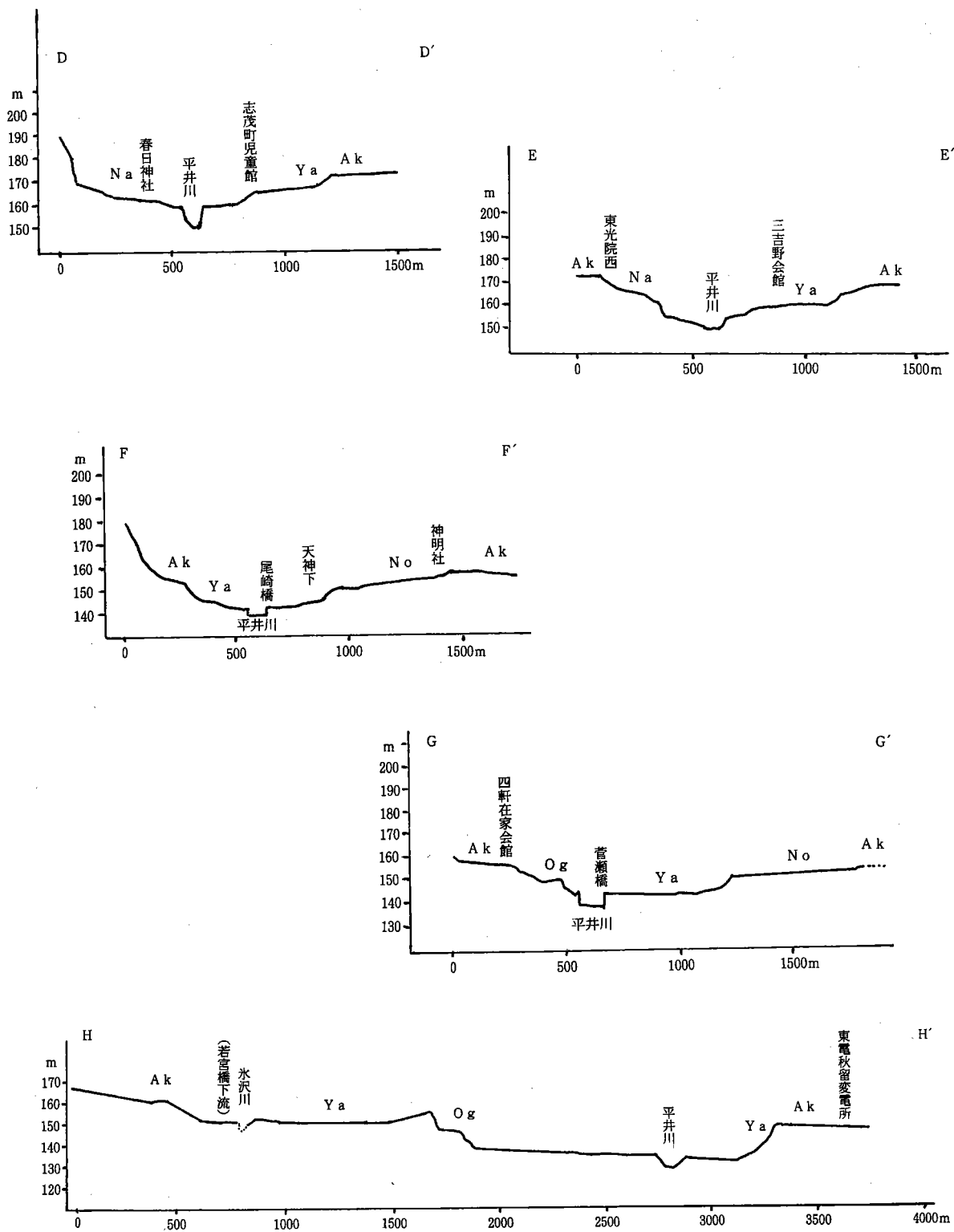


図 5 - 3 段丘面横段形 (平井川)



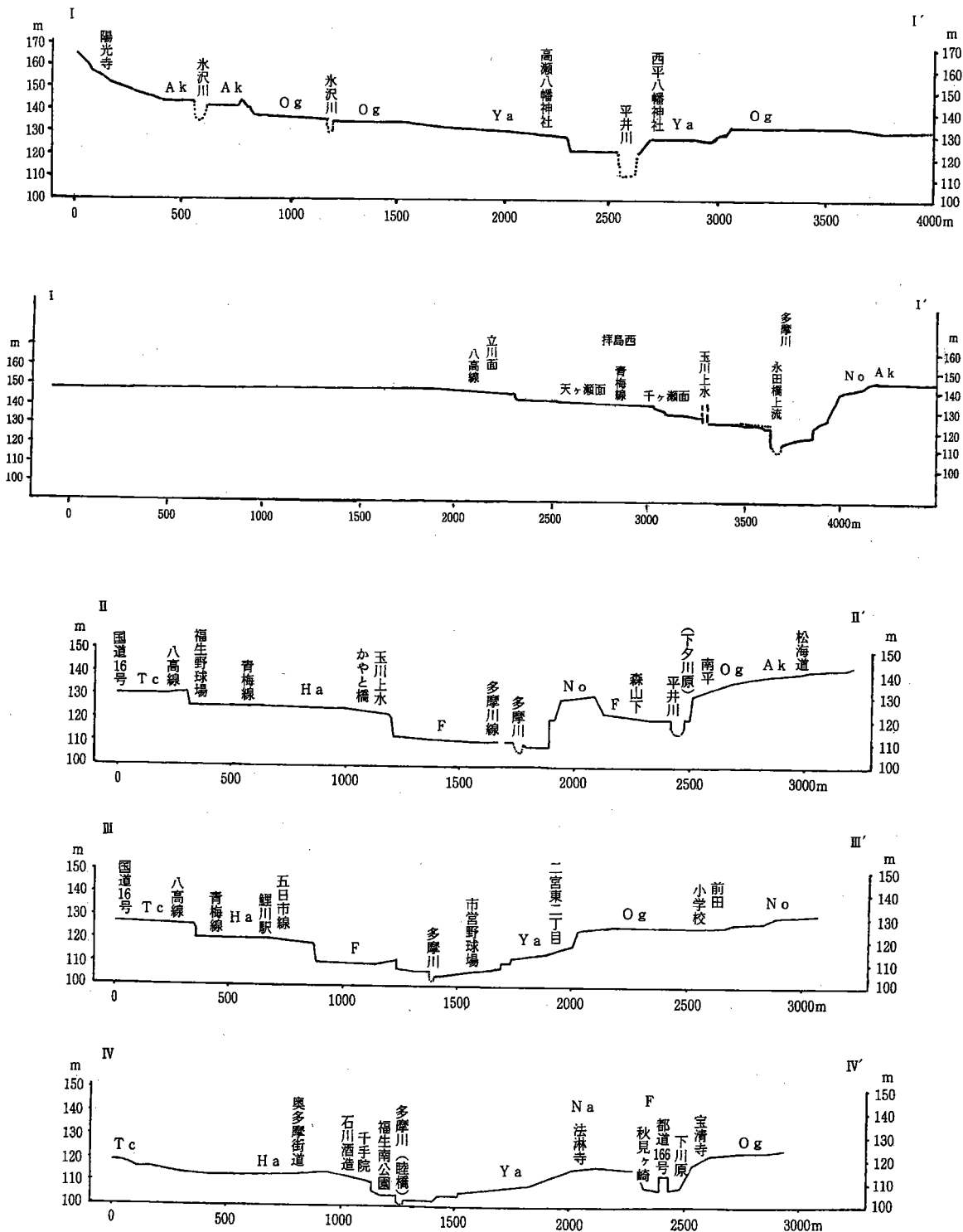


図5-4 段丘面横段形(多摩川)  
 (秋留台地段丘面略号は、図7凡例と同じ)

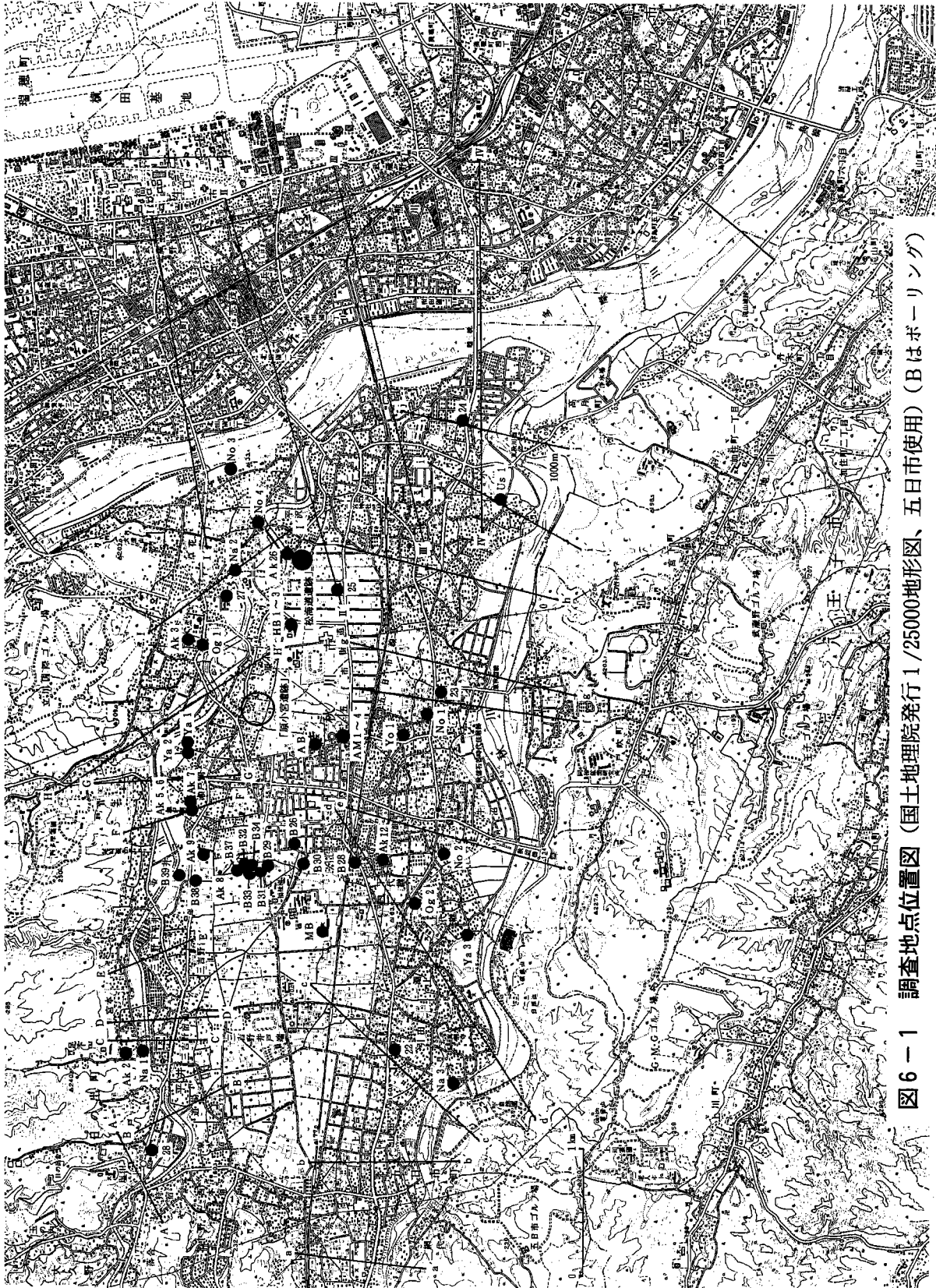


図 6-1 調査地点位置図 (国土地理院発行 1/25000地形図、五日市使用) (Bはボーリング)



図6-2 調査地点位置図

(国土地理院発行1/25000地形図、  
五日市使用)

## (1) 各段丘面

### 1) 秋留原面

秋留台地の主体を占め、秋川左岸では、伊那丘陵南麓の伊那から東端の東秋留二宮神社まで分布している。秋留台地西端の伊那で海拔高度約186m、二宮神社付近で同138mを示し、現河床との比高差は、伊那付近で約40m、三吉野場末の都立秋川高校付近で約38m、二宮神社付近で26~8mと下流に向い比高差は低下する。段丘面上は1m前後の緩やかな起伏で、その等高線は南北に振幅する。武蔵引田駅、北東阿伎野の阿伎野病院付近から南東に嵯峨窪~蛙沢にかけてと、平沢松海道には深さ1~3mの浅い凹地(谷)がみられる。図7に秋留原面の等高線図を示す。

五日市盆地にも、秋留台地の段丘に対比されるとされる数段の段丘が分布している。最上位の段丘である留原面は、年代値に上下で逆転があるなどの問題はあるが、放射性炭素絶対年代(菊地, 1982)から、秋留原面に対比されると考えられる。

平井川の西平井橋より上流では、小面積で分布する。平井川右岸の日の出ヶ丘病院では、

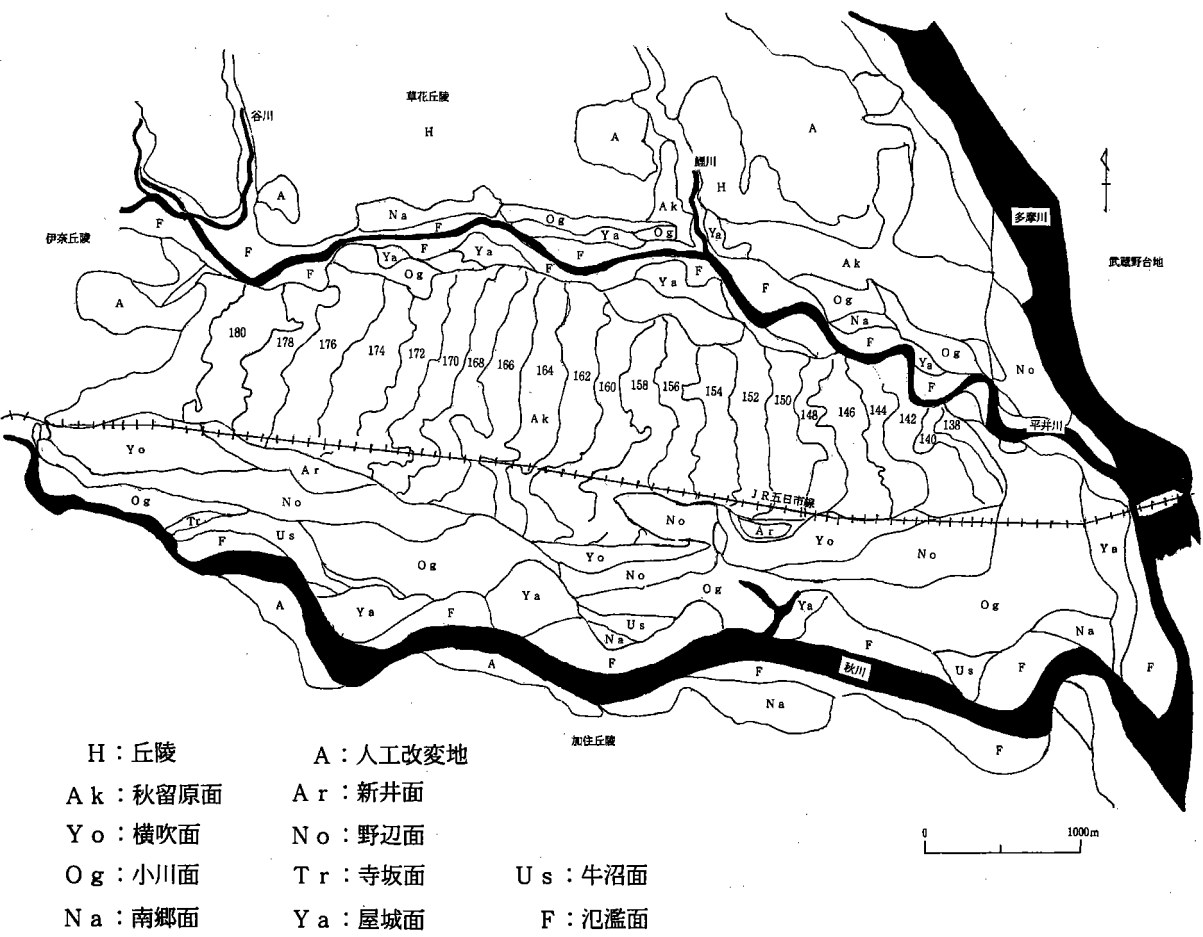


図7 秋留原面の等高線図 (数字は海拔高度)

海拔高度192~190mに分布し、現河床との比高差は14~12mである。平井川右岸の日の出町狩宿では海拔高度186~185mに分布し、現河床との比高差は18~15mである。平井で海拔高度177m、現河床との比高差15mを示し、東端の二宮上の原で海拔高度136m、現河床との比高差は21.4mとなり、下流に向い分布高度は低下し、現河床との比高差は増加する。

草花丘陵南麓の平井川左岸では、東光院、尾崎観音~四軒在家、小宮久保~北小宮、草花などに分布する。東光院付近では小熊沢右岸に分布し、面積は狭小で海拔高度は176~172mである。尾崎観音~四軒在家では海拔高度160~156mで、現河床との比高差は12mである。さらに、鯉川右岸で156~165m、現河床との比高差は14~15mである。小宮久保~多西小学校では海拔高度158~150mで、現河床との比高差は18~19mである。氷沢川右岸北小宮では海拔高度148mで、氷沢川左岸で同149~147mである。草花では海拔高度

147～142mで、現河床との比高差は23～21mである。

現河床との比高差は、秋川左岸では最大、伊那付近で約40mを示すのに対し、平井川右岸では最大、二宮上の原で21.4mであり、平井川の比高差は秋川のその約半分である。秋川では、比高差は上流に向い増加する。平井川では、平井橋より上流は、河床面に基盤岩が露出する事から、比高差は15m以下と小さく、平井橋下流では下流に向い比高差は増加する。以上の事は、秋留原面形成以後の下刻が、平井川より秋川で顕著である事と、秋川ではその侵食が上流から下流に向かって進行しているのに対し、平井川では多摩川との合流点から上流に向かって、その侵食が進行している事を示唆する。

秋留原面は五日市砂礫層を不整合に覆う段丘礫層（立川礫層）と、これを覆う立川ローム層から主に構成されるが、地域によっては、立川ローム層はさらに、氾濫性堆積物によって覆われることが、本調査で明らかとなった。立川ローム層と氾濫性堆積物については後述する。

## 2) 新井面

平井川沿いには分布せず、秋川左岸に分布する。五日市線武蔵増戸北西の森ノ下から南東に上ノ台までと、雨間萩野に狭い範囲で分布する。秋留原面より4m低く、山田新井の森ノ下から南東に上ノ台までは、海拔高度172から167m、萩野で同148m、現河床との比高差はそれぞれ、29～32mと、30～32mである。本調査では新井面の地質を明らかにできなかったが、角田（1981b）は段丘礫層とこれを覆う層厚20～40cmのローム層と層厚30～50cmの黒褐色腐植層（黒ボク土層と推定される）からなるとしている。JR五日市線南側の萩野・秋留野では段丘礫層を覆い、層厚約30cmのソフトローム層、ローム粒を含む粘土、黒ボク土が覆っている（関谷, 1999）。

## 3) 横吹面

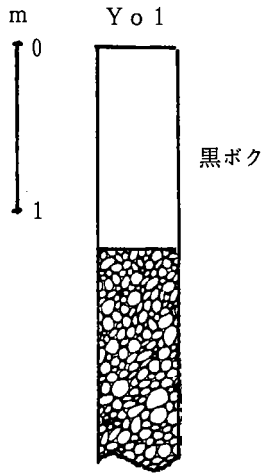
秋川左岸では、野辺横吹で海拔高度142～134m、油平で同159～154m、伊那新宿で同178～168mに分布し、現河床面との比高差はそれぞれ、28～24m、35～31m、33～29mである。平井川左岸右岸には分布しない。

雨間丸山東のYo-1では、段丘礫層を層厚1.2mの黒ボク土層が覆っている。ここでは段丘礫層の厚さは不明であるが、1.3mを越えており、角田（1981b）はその東方東秋留小学校の段丘礫層の層厚を1.5m前後と見積もっている。以下、各段丘面の地質を図8に示す。

8-1 a

横吹面 Yo

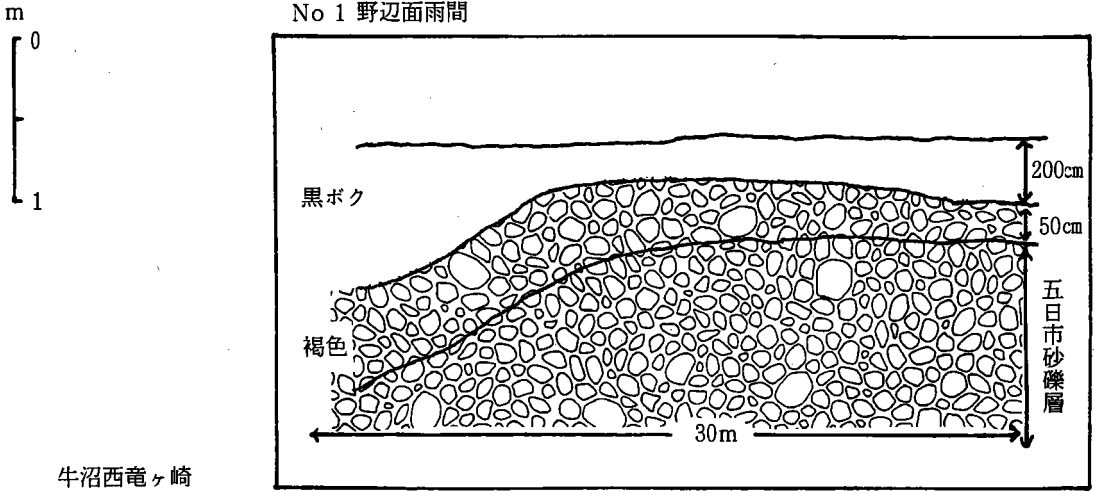
雨間丸山東



8-1 b

野辺面 No

No 1 野辺面雨間



牛沼西竜ヶ崎

No 2

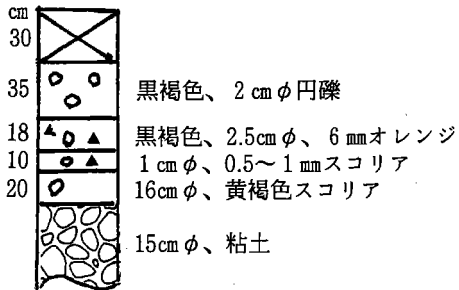


図 8-1 (凡例は図14と同じ、以下同様)

#### 4) 野辺面

秋川左岸では東秋留駅付近で海拔高度151～142m、油平で同142～140m、武蔵引田駅から武蔵増戸で同170～156m、増戸中学校付近で175～174mに分布し、現河床との比高差はそれぞれ、20～22m、22～24m、26～29m、28～30mである。上位の横吹面や下位の小川面との比高差は1～3mである。

平井川左岸では草花森山草花台会館付近にのみ分布し、海拔高度138～135mで、現河床との比高差は18～15mである。

平井川右岸では瀬戸岡付近に分布し、神明森～庚申塚で海拔高度156～149m、現河床との比高差14～16mである。多摩川左岸では、草花丘陵東側の折立下平から森山下の多摩橋までの海拔高度143～126mに分布し、現河床との比高差は29～18mである。

東秋留駅付近の牛沼・西竜ヶ崎No-2では段丘礫層は細円礫混じりの黒ボク土層に覆われ、その東方の雨間No-1でも黒ボク土層に覆われている。角田(1981b)は、秋留台地での段丘礫層の層厚を約4mとしている。

多摩川右岸の草花・花の岡No-3では、マトリックスを固結した黄褐色粘土とする五日市砂礫層を不整合に覆い、層厚約6m、マトリックス粗砂、最大径40cmの段丘礫層が堆積している。不整合面からは冬季でも湧水がみられる。段丘礫層は最大径6cmの亜円礫まじり黒ボク土層に覆われている。

平井川左岸、草花・平高橋下流のNo-4では、マトリックスを固結した黄褐色粘土とする五日市砂礫層を不整合に覆い、層厚約2m、マトリックス粗砂、最大径20cmの段丘礫層が堆積し、黒ボク土層に覆われている。

#### 5) 小川面

立川ローム層に被覆されない段丘としては秋留台地で最も良く発達している。秋留台地東南端の二宮～小川～牛沼、及び代継から伊那にかけて広く分布する。伊那で海拔高度170～166m、引田～淵上で同159～148m、牛沼で同141～134m、雨間で同133m、小川で129～127m、現河床との比高差はそれぞれ、約25m、20～22m、21～24m、20～22m、14～16m、15～19mである。秋川の下流から上流に向けて比高差は増す傾向を示している。

平井川右岸の日の出町平井小付近では、角田(1981b)によって、小川面とされた地形面は、平井郵便局の位置する海拔高度167～166mを示す高位面、平井小学校の位置する海拔高度166～164mを示す低位面とに、約1mの段丘崖によって二分される。高位面が小川面、低位面は寺坂面に対比されると思われる。ここでの現河床との比高差は13～8mである。

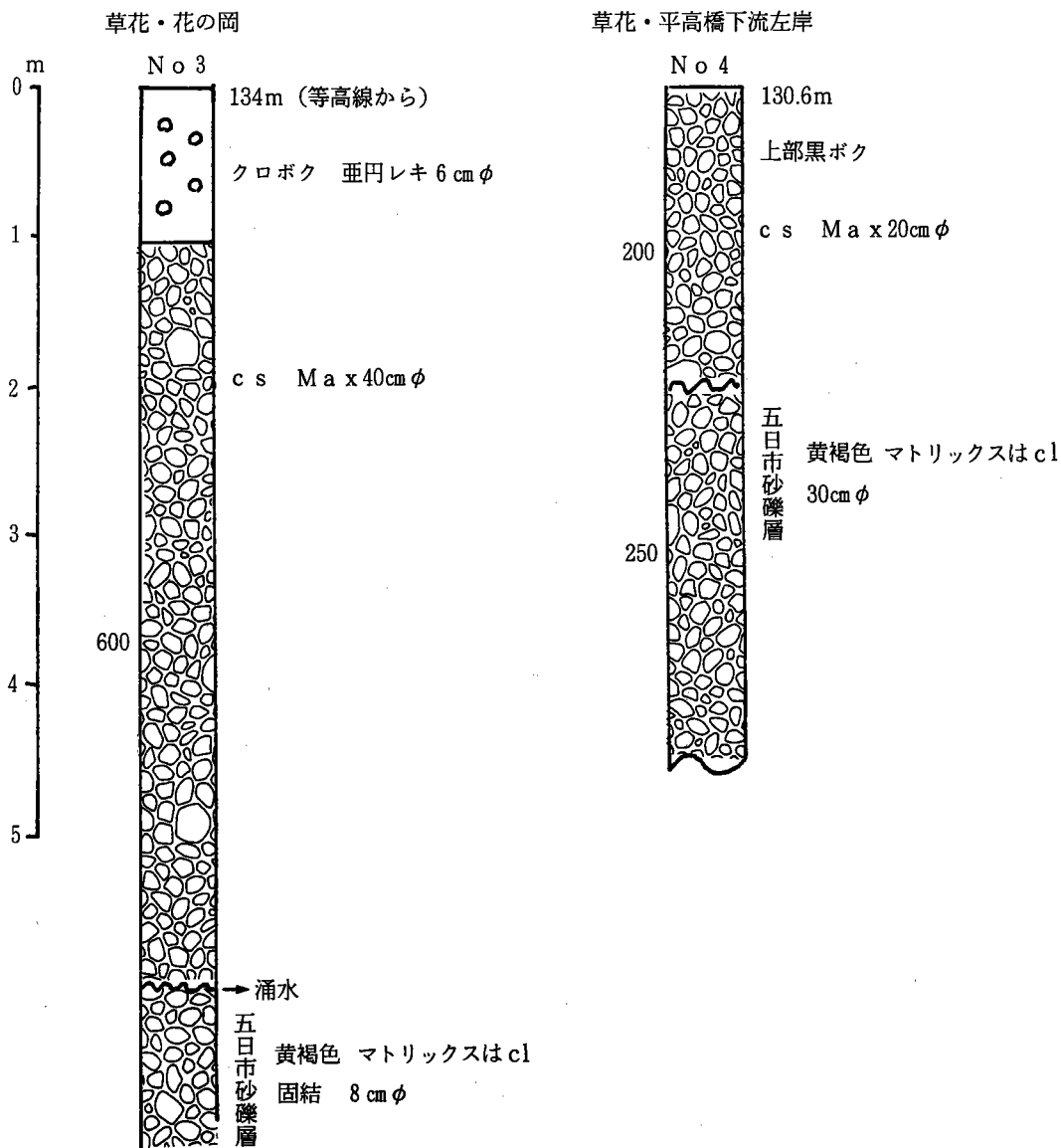


図 8 - 2

平井川左岸では四軒在家で海拔高度約150m、小宮久保で147m、北小宮で146~139mに小面積に分布し、現河床との比高差はそれぞれ、約10m、約10m、15~10mである。

白滝神社Og-2では湧水が見られ、段丘礫層の層厚は10m近い。礫層中には最大60cm径の巨礫が含まれる。草花の南小宮Og-1では段丘礫層の最上部1mに炭片(植物根)が含まれる。角田(1981b)は段丘礫層の層厚を4~5mとし、礫層最上部に腐植物が混じる事が



多いとしている。平沢南平の平井川段丘崖のOg-3では、マトリックスを黄褐色粘土とし、閃緑岩などの風化礫を含み、最大径30cmの亜円礫からなる五日市砂礫層を不整合に覆って、層厚約4.2mで、マトリックス粗粒砂、分級の悪い最大径30cmの亜円礫からなる立川礫層が堆積している。不正合面からは冬季でも湧水がみられる。立川礫層上部は黒ボク土に充填された60cm層厚の礫層（最大径6cm）と最大径6cmの礫混じり黒ボク土層に覆われ、立川ローム層の堆積はみられない。

#### 6) 寺坂面

秋川左岸の山田芝木においてのみ小規模に分布する（角田, 1981）とされるが、上述のように、平井川右岸平井小学校付近にも分布する。山田芝木では海拔高度164m、現河床との比高差23~25m、小川面との比高差約1.5m、下位の牛沼面との比高差約1mである。平井小学校付近では現河床との比高差12~7mである。本段丘面については、調査において露頭に恵まれなかった。角田（1981b）によれば、段丘礫層の層厚3m前後である。

#### 7) 牛沼面

秋川左岸では牛沼・上久保など狭い範囲に分布する。上久保では海拔高度117~110m、牛沼では同137~133m、山田下分では同161~155m、現河床との比高差はそれぞれ、10~14m, 16~18m, 18~20mである。

平井川右岸では東平広済寺付近に狭小に海拔高度129~127mで分布し、現河床との比高差は10~13mである。平井川左岸には分布しない。

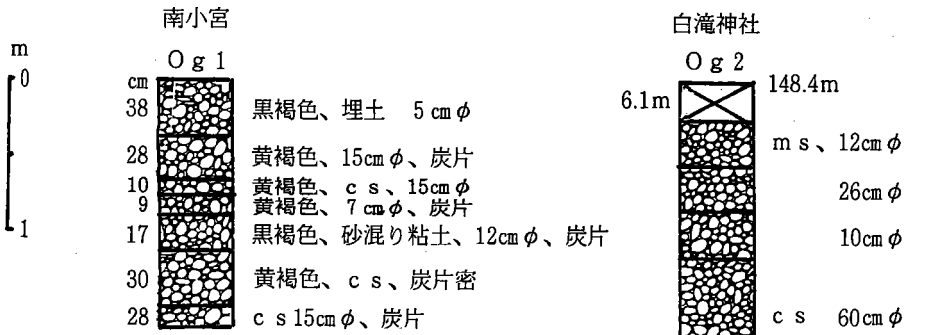
上久保・熊野神社Us-1では最大径21cmの礫から段丘礫層が構成され、層厚は1mと薄い。角田（1981b）は層厚を3~4mとしている。

#### 8) 南郷面

分布する面積は秋川左岸で狭小、秋川右岸に発達する。秋川左岸では、小川寺中で海拔高度117~112m、牛沼で同132~134m、引田寺平の志村館跡と呼称される付近で同146mに分布し、現河床との比高差はそれぞれ、7~8m、10~14m、12~14mである。秋川右岸では、小松平から東秋留橋下流の切欠の海拔高度136~120mに分布し、現河床との比高差は小松平で14m、切欠で10mである。平井川左岸の東光寺南から東光院南にかけて海拔高度168~162mで分布し、現河床との比高差は15~12mである。平井川右岸には分布しない。

8-3 a

小川面 Og



8-3 b

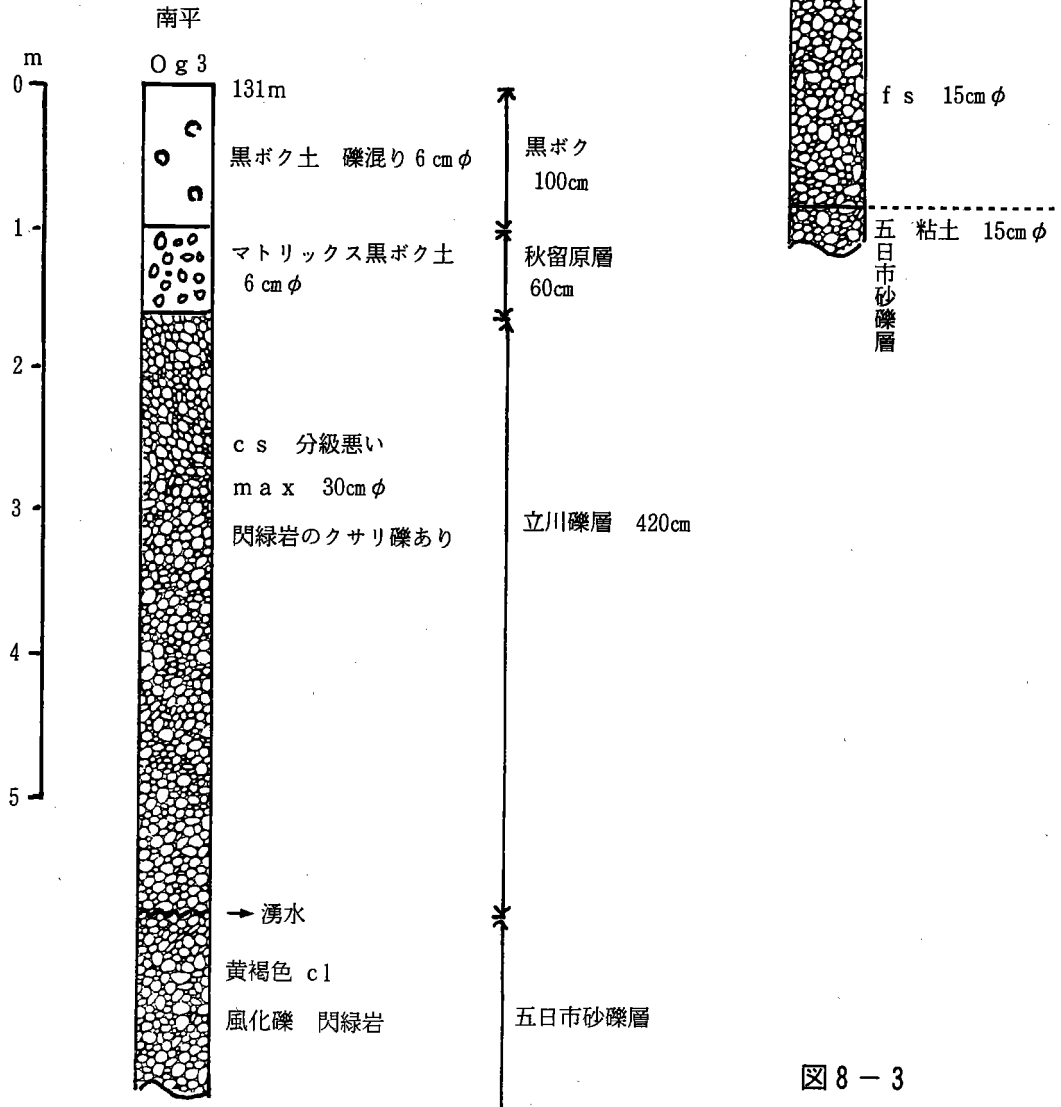


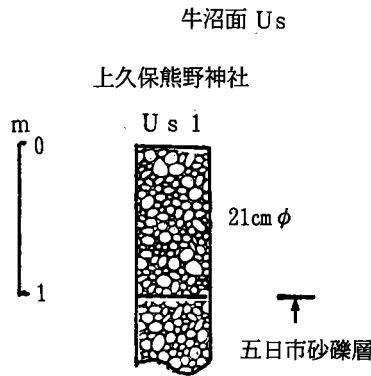
図 8-3

平井川左岸の中里橋Na-1では、層厚50cmの段丘礫層は2次堆積のローム質粘土に覆われ、南小宮草花小Na-2では最大径30cmの礫から構成される段丘礫層の層厚は1mである。引田宝泉寺Na-3でも最大径30cm、層厚は薄く30cmである。角田（1981b）は層厚を3～4mとしている。

9) 屋城面

秋川・平井川によって形成された河岸段丘のうち最下位の段丘面であり、氾濫面からの比高差は0.5m～2mである。秋川右岸では高月に分布し、海拔高度は110～106m、現河床

8-4 a



8-4 b

南郷西 Na

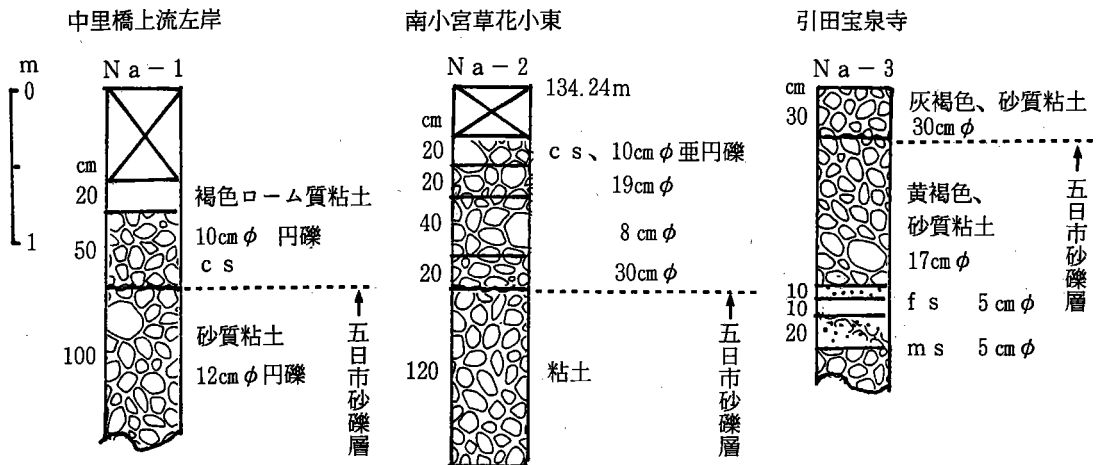
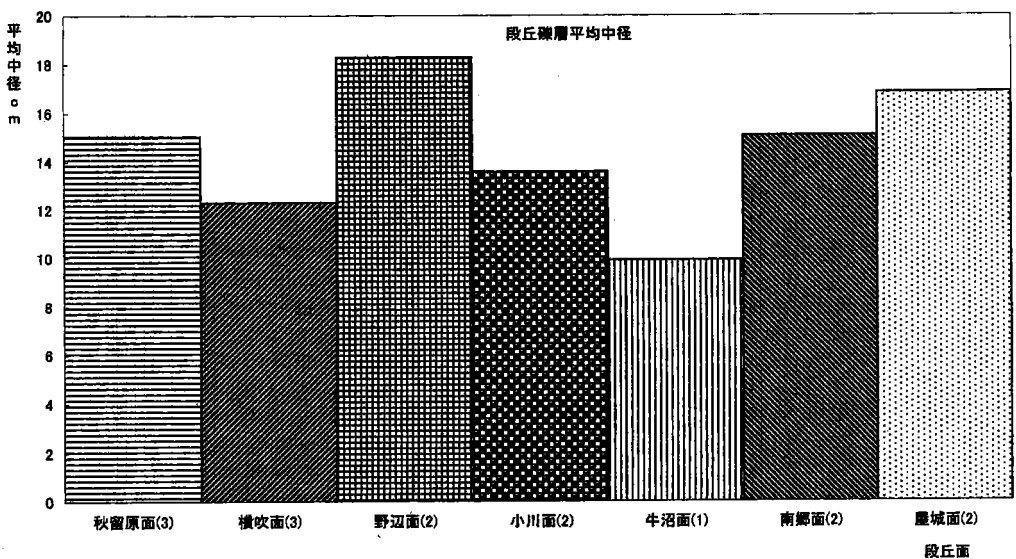


図 8-4

との比高差は3~6mである。秋川左岸では、東郷で海拔高度120~118m、東千代里で同136~130m、静の郷で同140~135mに分布し、現河床との比高差はそれぞれ、4~6m、5m、4~6mである。多摩川右岸の屋城では海拔高度116~110mに分布し、現河床との比高差は9~6mである。

平井川左岸では塩田、尾崎、南小宮、高瀬、森山下に小面積で分布する。塩田では谷戸川右岸で海拔高度178~174m、谷戸川左岸で同174m、尾崎では同158~146mに分布し、南小宮では同136~134m、高瀬で同約131m、森山下で同122~129mに分布し、現河床との比高差はそれぞれ、塩田谷戸川右岸11~7m、谷戸川左岸約11m、尾崎10~6m、高瀬約6m、森山下約2mである。塩田、尾崎での氾濫面との比高差は約5mと4~8mである。鯉川左岸にも海拔高度150~148m、現河床との比高差11mで分布する。

平井川右岸では、三吉野下平井で海拔高度164~154m、平井小東で同161m、平沢西平で同127~126m、瀬戸岡上賀多~新道通で同145~141mに分布し、現河床との比高差はそれぞれ、12~6m、約7m、約7m、5~4mである。多摩川左岸の秋留台地東端では、屋城から仲田にかけて海拔高度116~110mに分布し、現河床との比高差は7~10mである。平井右岸の「上賀多」、「新道通り」では36cm~20cm径の礫を最大とする段丘礫層が見られ、上世継では40~50cmの巨礫を含む段丘礫層が層厚3mで堆積している。角田(1981b)は層厚を3m前後としている。



グラフ1 各段丘礫層礫径(平均中径)  
(段丘面名上の数字は、測定地点数)

屋城面 Ya

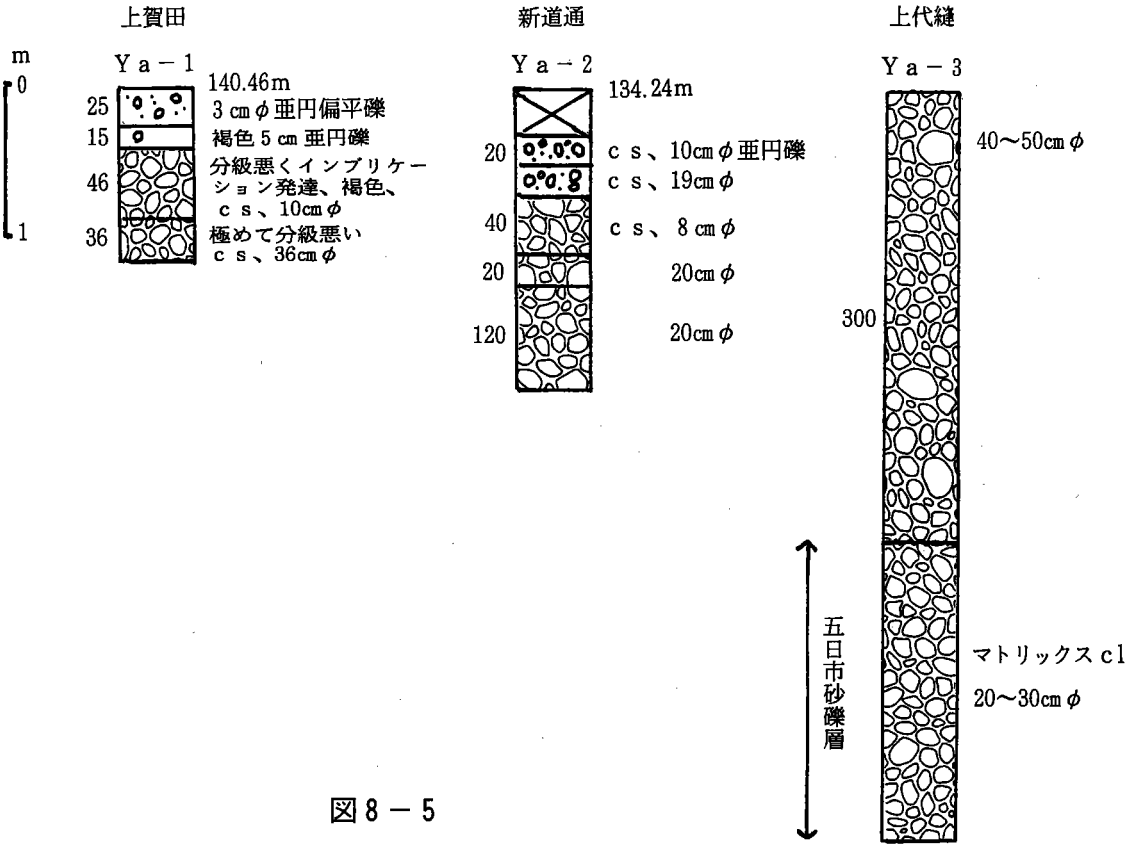


図 8 - 5

10) 段丘礫径 (グラフ 1)

各段丘礫層の大きさは、段丘礫を運搬堆積せしめたその時の河川の掃流力を反映していると考えられる。礫種ごとに長径、中径、短径を測定することが望ましいと思われるが、今回は、露頭も限られているので、露頭において中径の最も大きなものから最低5以上抽出し、中径を中心に測定した。測定地点数が少ないことや距離の補正がされていないのであくまでも参考資料に過ぎないが、露頭での観察と同様に、野辺面と屋城面を構成する段丘礫が、秋留原面を含め、他の段丘礫層に比し、大きい傾向がみられる。

11) 多摩川沿いの段丘との対比

多摩川沿いの段丘についての詳細な研究は、寿円 (1965) によって青梅市宮ノ平から河口の羽田までなされ、武蔵野面以下、立川段丘、青柳段丘、拝島段丘、天ヶ瀬段丘、千ヶ瀬段丘、河原段丘、田端段丘に区分された。その後、青梅市を中心にその上流、下流につ

いて、畔地（1971）、建設省国土地理院（1971, 1972）、鈴木（1972）、高木（1976）、久保田（1977）などによる段丘面区分がされ、角田（1981）はこれら研究を踏まえ、奥多摩町と青梅市境付近から、羽村町にかけての段丘面を上位より新町面（＝立川面）、青梅面（＝青柳面）、竹ノ屋面（＝拝島面）、天ヶ瀬面、畑中面、千ヶ瀬面、林泉寺面（＝田端面）、郷土博物館面に再区分した。久保田（1977）は青梅市域の遺跡の立地と段丘面形成期について考察した。これによれば、天ヶ瀬面は縄文時代早期の後半には離水し、千ヶ瀬面は縄文時代中期の前半、林泉寺面は縄文時代後期の前半には離水していたことになる。郷土博物館面は現河床との比高約3～6mで、青梅市根搦には古墳時代後期前半の遺跡が立地するが、1974年の台風16号による多摩川増水時に冠水している。

秋留台地の東側、多摩川右岸の福生市域には八高線の走る立川面、青梅線の走る拝島面、玉川上水の流れる天ヶ瀬面、さらに低位の千ヶ瀬面（角田, 1981では畑中面）が分布している（北村, 1992）。

立川面の標高は、福生市北部の武蔵台付近で約143m、南東部の拝島付近で約120m、現多摩川河床との比高差はそれぞれ約30m, 23mである。武蔵野台地西部地域の多摩川沿いの段丘地形や地下地質は、福田・羽鳥（1952）、寿円（1965）、鈴木（1972）などによる報告があるが、山崎（1978）はテフクロロジーに基づく地形面の詳細な調査を行い、青梅と狭山丘陵西端を結ぶ線を境に、北側をTc3面、南側をTc2面に細分した。Tc3面は青柳面であり、福生市域の立川面はTc2面からなる。

拝島面の標高は、福生市北部の加美平付近で約137m、南部の都立多摩工業付近で約111m、現多摩川河床との比高差はそれぞれ約27m、約12mである。福生警察署付近には拝島面より約5m低く、天ヶ瀬面より約3m高い幅約200mほどの段丘面が認められ、川崎面と呼ばれ、拝島段丘の垂段丘とされている（北村, 1992）。拝島面の縦断形は、上流で立川面に収斂する傾向を示している。

天ヶ瀬面は福生市立第四小学校・長沢・清岩院を結ぶ線と玉川上水とに限られた小面積に分布し、約1mほどの小段丘崖で二分され、上位面をA1面、下位面をA2面と呼ばれている（北村, 1992）。標高約128～122m、現多摩川河床との比高差は約12～15mである。千ヶ瀬面も永田橋から中福生陸橋北詰付近にかけて小面積に分布し、標高約121～117m、現多摩川河床との比高差は約7～9mである。

永田橋よりやや上流の横断形図 I - I' に示されるように草花丘陵の秋留原面、野辺面の分布高度は、多摩川左岸の各対比される段丘面である立川面、拝島面の高度より高い。これは草花丘陵の段丘面の傾斜が大きいことが一因と思われる。平井川に沿う草花の秋留

原面高度を、その傾斜に沿って東に延長すると、標高約130mとなり、多摩川左岸のTc2面の高度にはほぼ等しくなる。草花丘陵東端の野辺面を傾斜に沿って東に延長し、左岸拝島面を同様に西に延長すると、両者は現多摩川付近で合致する。このことから、小川面は天ヶ瀬面のA1面に対比されると推定される。小川面がA1面に対比されれば、寺坂面はA2面に対比される。しかし秋留台地の秋留原面の分布高度と傾斜は、多摩川左岸の立川面Tc2面とは異なり、秋留台地の秋留原面はTc2面に対比されない可能性が示唆される。

## (2) 段丘面縦断形

現平井川の勾配が秋川に比べ大きい。全体的に段丘面と河床面との比高差は秋川で大きい。横吹面や野辺面が、上流で収斂し、秋留原面と斜交する。また、平井川左岸の草花に分布する野辺面や秋留野台地東端での小川面、屋城面は、それぞれ平井川、秋川沿いの段丘面と連続性をみせず、多摩川に面することからもこれら段丘は多摩川によって形成されたことが推定される。

平井川では野辺面と秋留原面が斜交する地点は日ノ出町平井付近であり、秋川では野辺面が雨間丸山付近で上位の横吹面と斜交し、さらに横吹面は下代継中丸付近で秋留原面と斜交する。この段丘面が斜交する地点は、国土地理院（1991）で示される蛙沢から西北西に秋川駅の南を通り、五日市線を通って、阿伎留病院の南に延びる谷と一致する。さらに、秋川駅から東秋留駅南方の下代継、油平、雨間、野辺にかけて分布する横吹面、野辺面は上流の武蔵増戸駅から秋川駅にかけての伊奈、引田、上代継に分布する横吹面、野辺面とは連続性をみせない。

青梅市街地より下流部の段丘について、寿円（1965）は武蔵野段丘と立川段丘が斜交段丘である事を見出し、その原因を両段丘が斜交する付近を境に、上流側の傾動から下流側の傾動へと変化したことよるとした。松本ほか（1970）は立川段丘とした段丘面が旧河谷を埋積した厚い砂礫層で構成される事と、御岳付近まで追跡される旧河谷の谷底縦断形が現在の多摩川の縦断形とほぼ平行であることを報告した。高木（1990）はこの報告を受け、寿円（1965）の傾動運動は「偶然」に相殺されるとした。野上（1981）は寿円（1965）のデータを用い、河川平衡縦断面形の形状変化のシミュレーションを行い、武蔵野段丘と立川段丘の段丘面の交差が平衡土砂流量のある値のもとで可能な事と、立川段丘面の離水時期が上流部ほど新しくなる事を明らかにし、青梅市市街地よりやや下流部の武蔵野段丘面上を拝島段丘面形成時までの多摩川がオーバーフローしていたというシミュレーション結果を示した。

高木（1990）は青梅市街地より上流の段丘面について、二俣尾から沢井にかけて青柳段丘と拝島段丘が上流に向い収斂し、立川段丘と青柳段丘、青柳段丘と拝島段丘が斜交し、旧河谷の埋積以前に形成された武蔵野段丘面縦断形と、それ以後に形成された立川段丘面・青柳段丘・拝島段丘面の縦断形は互いに交差することを明らかにし、野上（1981）のオーバーフローシミュレーション結果を支持し、その原因を傾動に求めず、多摩川の流水運搬能力と流送土砂量との均衡状態の変化が斜交段丘の原因とし、氷河周辺地域に発達する気候段丘と同様な過程で形成されたとした。

以上から、秋留台地においても、青柳段丘・拝島段丘面形成期即ち、新井面・横吹面・野辺面形成期に、上位の立川面上にオーバーフローする可能性が示唆される。この時主要な働きをしたのは、先述の谷の方向性からみて、平井川系と推定される。

現平井川の自然地形から、平井川は日の出町落合から塩田にかけて氾濫しやすく、その下流平井付近で野辺面と秋留原面が斜交すること、平井より上流の秋留原面はローム層が欠如している事から、斜交地点の上流で発生した氾濫流は、ローム層を侵食しつつ流下し、塩田から南東に向かったと推定される。

(3) 埋積谷

秋留台地では露頭が少なく、五日市砂礫層とその上位の立川礫層との不整合関係をみることは困難であるが、圏央道建設現場での調査や圏央道建設用地質ボーリング、及びあきる野市新庁舎建設用地質ボーリングで新たな知見を得ることができた。図9, 10, 11に圏央道、あきる野市新庁舎、原小宮前・東中学校地質ボーリング柱状図を示す。

ボーリング調査資料においては、N値や礫種（砂岩を主とし、チャート、泥岩、閃緑岩を交える）、礫径では基盤の礫層と立川礫層を区分できないため、マトリックスを粘土と

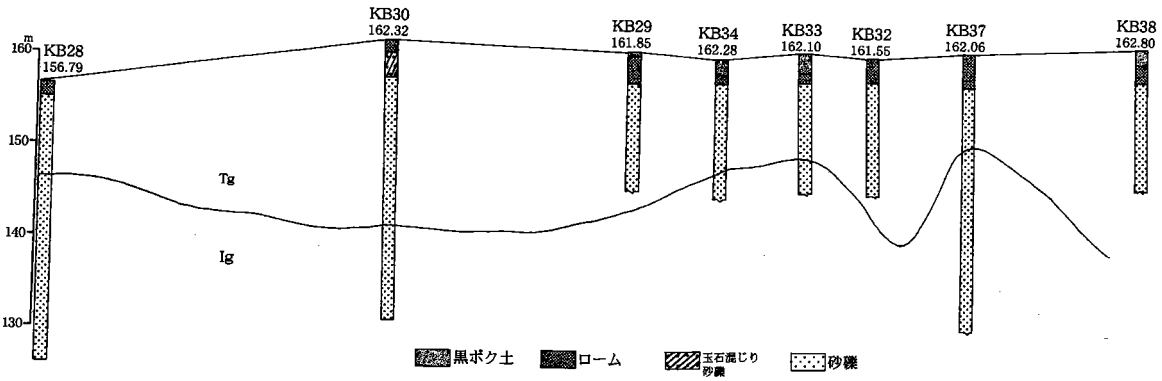


図9 圏央道ボーリング地質断面図



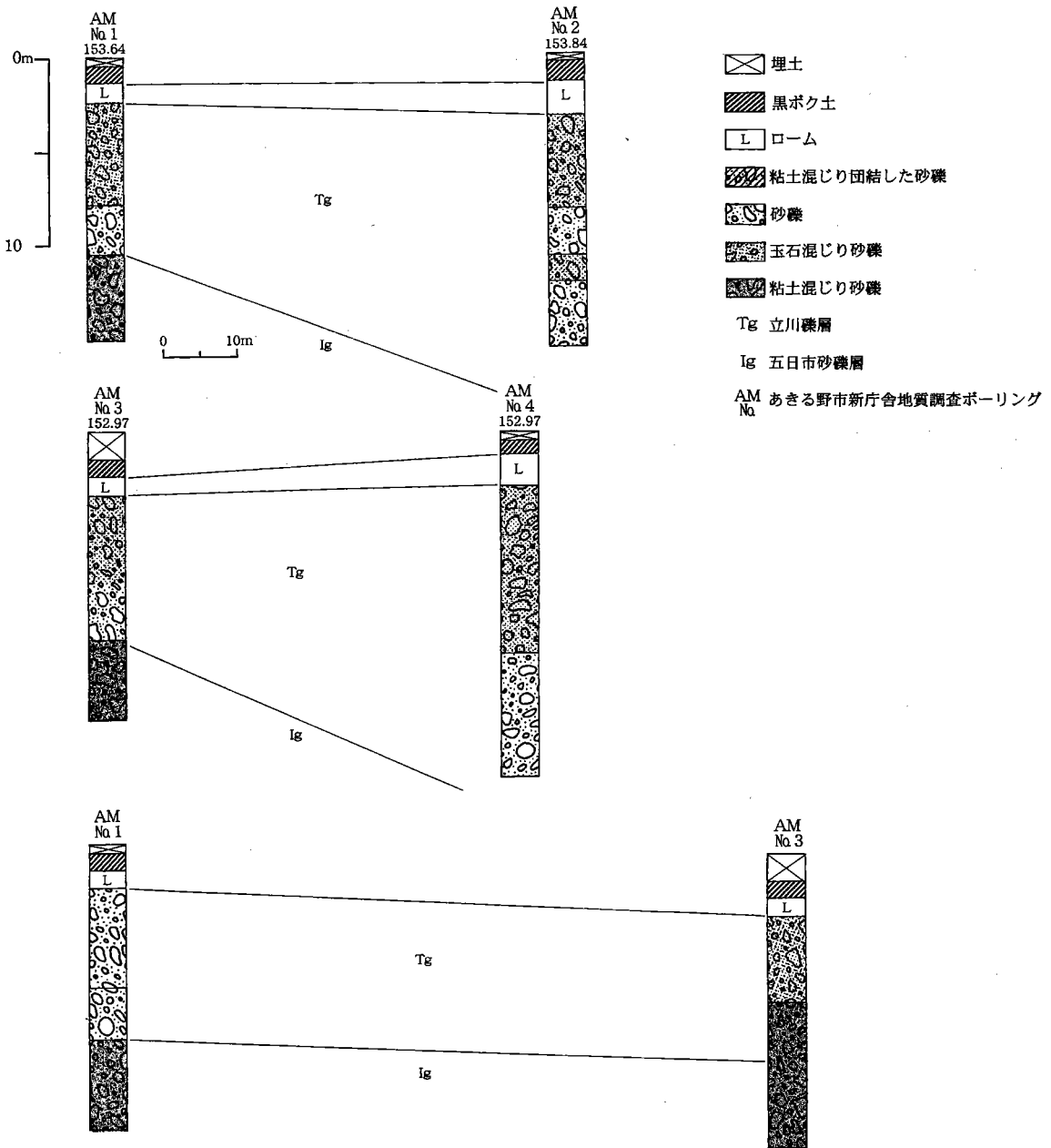


図10 あきる野市新庁舎ボーリング地質断面図

し、風化礫を多く含み、黄色褐色を呈する礫層を五日市砂礫層としたが、記載によっては、不明な所もあった。

三吉野欠上から秋川駅西方の下代継までの南北地質断面図(図9)では、五日市砂礫層を切る谷が、KB34とKB28の間、即ち三吉野下も原と五日市線の間であり、さらに三吉野下も

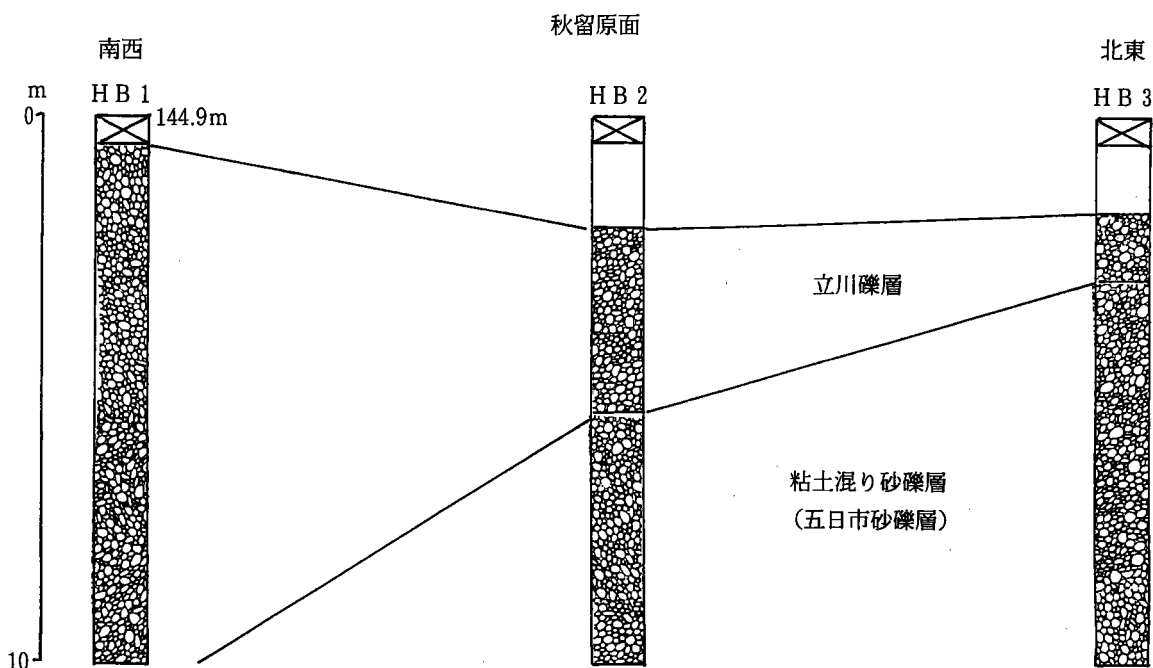


図11 東中学ボーリング地質拡大図（凡例は図14と同じ）

原と三吉野間にも二つの谷（KB33～KB37、KB37～KB38）が認められる。KB30での谷の深度は20m、KB32、KB38ではそれぞれ15m、15.4m以深に谷の基底があると思われる。KB30の西方約50mの都立秋川高校での立川礫層基底深度は約24.5mである（角田，1981）。あきる野市新庁舎では五日市砂礫層を切って、立川礫層が北傾斜で堆積している。三吉野場末から南中塚場26（国土地理院，1991）を通り、あきる野市新庁舎に至る北西－南東断面図（図12）でも谷の存在は明瞭であり、以上から谷の主軸は三吉野場末と早道場の中間を南西から北東に向かうと推定される。

東中学校（図11）では五日市砂礫層を切って、北から南に向かう谷が推定され、立川礫層が約10m以上と厚く堆積している南端部ではローム層が欠如している。

角田（1981b）は秋留台地の自由地下水調査を行い、地下水面等高線図から、増戸中学校付近から都立秋川高校付近（三吉野場末）を通り、平沢へ抜ける埋積谷の存在を推定している。角田（1981b）の地下水面等高線図に、各ボーリング地点の立川礫層基底深度を重ね、図13に示す。

地下水面等高線図から推定される立川礫層基底深度と、ボーリング地質図による立川礫層基底深度とは調和的である。角田（1981b）は秋留台地西端の増戸小学校付近の段丘地形と推定埋積谷図を示し、段丘礫層下に五日市町層群網代層があることから、埋積谷は

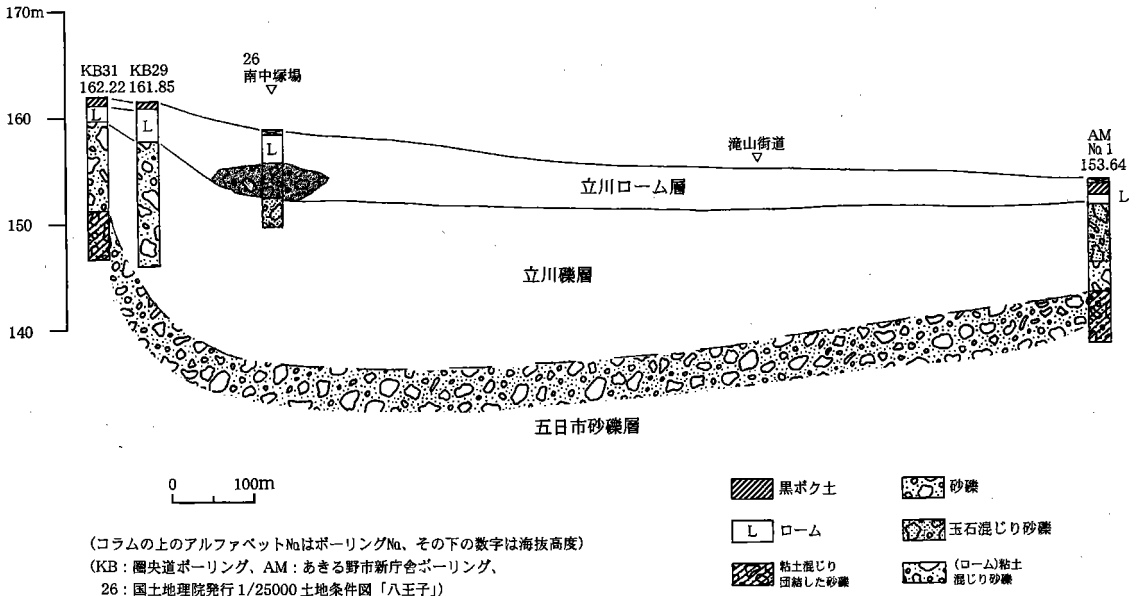


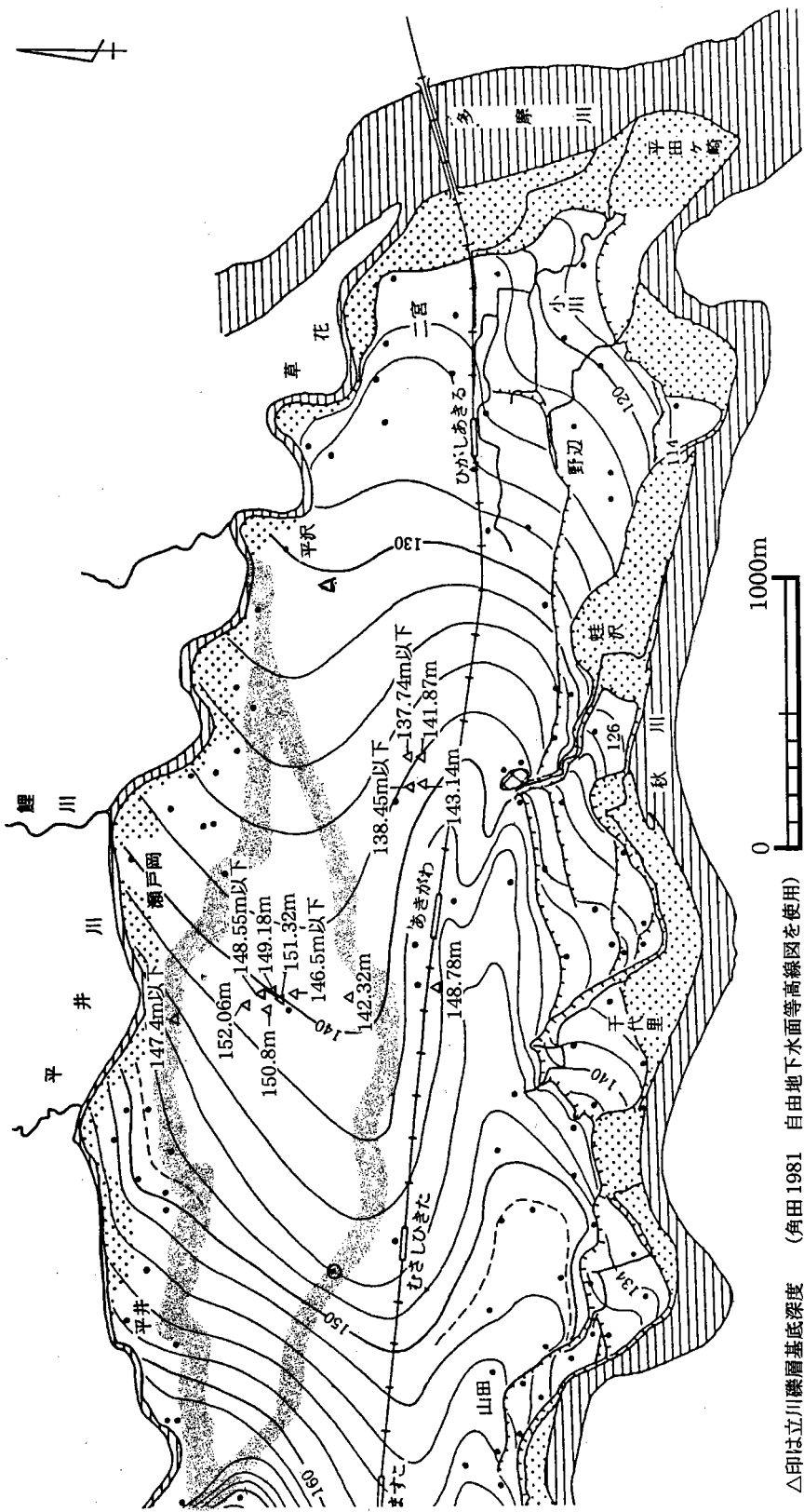
図12 圏央道～あきる野市新庁舎ボーリング地質断面図

秋留原面形成以前に形成され、立川礫層によって埋積されたとしている。

高木 (1990) は青梅市街地より上流の旧埋積谷の埋積堆積物は、寿円 (1964) が青梅市街地より下流で記載した青梅砂礫層に対比し、旧埋積堆積物上部層準から東京軽石層Hk-TPを検出している。ボーリング地質図では、埋積谷の埋積礫層をその記載から立川礫層と区別できなかったが、埋積礫層は立川礫層とは区分される可能性はある。秋留原面形成前には、秋川 (古秋川) は増戸中学校付近から都立秋川高校付近 (三吉野場末) を経て、東中学校の南を通り、平沢へ抜けていたと推定される。一方、三吉野下も原と三吉野間にも二つの埋積谷が推定され、平井川 (古平井川) は秋留原面形成前には現在の流路近くの南を流れ、秋川とは平沢付近で合流していた可能性も示唆される。

#### (4) 凹地分布

秋留原面上の等高線は、秋留原面の大半を占める五日市線のほぼ北側では、武蔵増戸駅から大塚古墳付近までは北北西に傾き、日の出町塩田付近を扇頂とする扇状地性の地形を伺わせる。さらに、等高線は南北に小刻みに振幅することから、段丘礫層堆積後も流水があったと推定される。米軍撮影 (1947年) の空中写真1/10,000を2倍に伸ばし、秋留原面の凹地分布を判読し、その結果を図3に示す。空中写真判読にあたっては、「窪地」地名も参考にした。「窪地」地名については、保坂 (1983) によった。



△印は立川礫層基底深度 (角田 1981 自由地下水水面等高線図を使用)  
 網で囲まれた地域は、竹迫ほか(1983)の「真土」分布域

図13 地下水等高線 (角田、1981b) をもとに作成)

蛙沢から西北西に伸びる谷の延長上の、「真土」「野土」地名のある阿伎野、引田の北に小規模な凹地がみられ、その延長西本宿、東本宿に凹地がある。これら連続する谷と凹地の北側、平沢松海道までの秋留原面上に凹地が点在するが、その方向は三吉野宿上付近から東南東に原小宮、平沢へ向かうものと、南東に三吉場末を通り、あきる野市役所、塚場付近から向きを北東に変えるものがある。

蛙沢から西北西に伸びる谷については、北蛙山の東の「長者久保（字北久保）」から順に、西に向かって、「嵯峨窪」、「桧久保」の地名がある。武蔵引田駅南西の凹地は、「井戸久保（井戸窪）」に相当すると思われる。市役所の東方、五日市街道沿い付近は、近世には「地ヶ久保」と呼称されていたというが、市役所の東方現塚場付近の凹地群がこれらの一部に相当すると思われる。地名に従えば、市役所の南西から、市役所の南を通り、東に連続し、塚場付近から、北東に向きを変える凹地が想定される。松海道の凹地は、北久保に相当すると思われる。原小宮石神の東京電力秋留発電所南は、「窪畑」であるが、これはここから東に延びる凹地の一部と思われる。「窪地」地名は、判読された凹地分布とよく対応する。

秋川駅西方圏央道予定地の代継・富士見台遺跡発掘現場で黒ボク土層に覆われる埋没谷がみられ（図14-3, Ak-12）、基底の礫層のインプリケーションは北西～西北西を示したことや、その連続性から、蛙沢から連続する谷、凹地は平井川系の埋没谷と推定される。この埋没谷は、横吹面、野辺面と連続することから、横吹面、野辺面形成期にかけての平井川系オーバーフロー流路と推定される。

## 4. 秋留原層

### (1) 秋留原面の地質

秋留原面の基盤は五日市砂礫層であり、雨間の丸山では黄褐色を呈し、砂岩を主とし、チャートや泥岩、閃緑岩などの風化の進んだマトリックスを粘土とする五日市砂礫層をみることができる。五日市砂礫層を不整合に覆い、段丘礫層＝立川礫層、立川ローム層が堆積する。角田（1981b）は、段丘礫層は主として、直径10～20cmの亜円礫からなり、マトリックスは小礫や粗砂であること、立川ローム層は地域による層厚変化0.5～2mと著しく、基底部では段丘礫の混入が見られること、秋留原面の北部の原小宮や平井ではローム層が全く分布せず、立川礫層上部にはローム層と同時異相の層厚50～60cmの礫混じり粘土が堆積し、粘土中の礫は直径5cm以下の角礫からなることを報告している。図14に秋留原面の地下地質を示す。

秋留原面 Ak

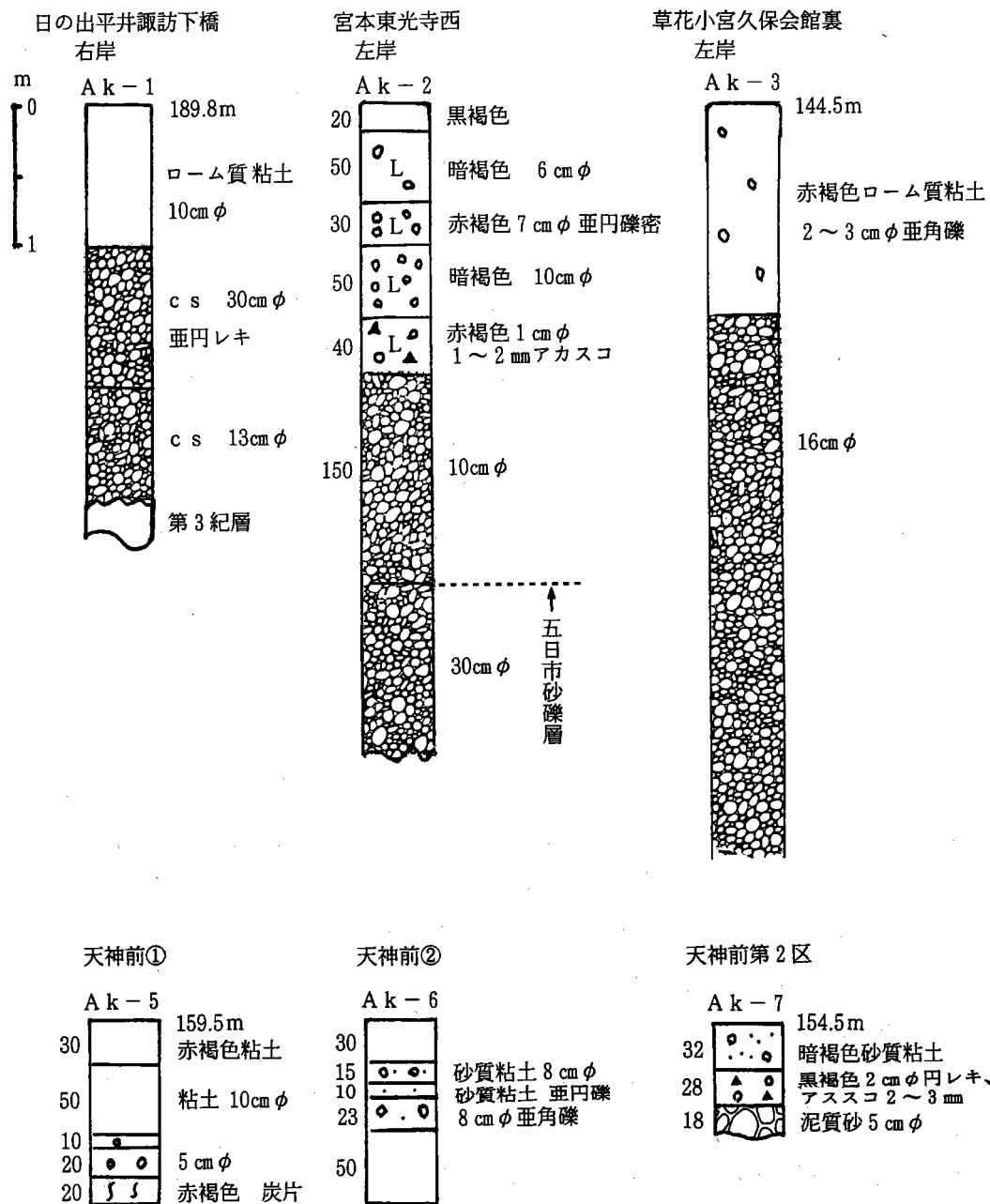


図14-1

日の出町の平井川右岸諏訪下橋付近のAk-1ではローム層が欠如し、最大直径10cmの礫の混じる層厚100mのローム質粘土層が層厚3.5mの段丘礫層を覆って堆積している。

平井川左岸の宮本東光寺西のAk-2では層厚1.5mの段丘礫層を覆って、層厚1.7mの礫混じりローム層、20cm層厚の黒褐色ローム層が堆積している。

同じく平井川左岸の草花小宮久保会館裏のAk-3では、ローム層が欠如し、層厚4m以上、最大礫径16cmの段丘礫層を、2~3cm径の亜角礫を含むローム質粘土層が覆っている。

平井川右岸の瀬戸岡天神前のAk-5、6では地表下120、130cmまで粘土層、礫混じり粘土層が堆積し、Ak-7では地表下60cmにマトリックスを泥質砂とする、最大礫径5cmの礫層が認められた。

三吉野下も原圏央道切割り露頭のAk-8では最大礫径13cmの礫からなる段丘礫層を覆って、層厚約1.4mの礫混じりローム層が堆積している。立川ローム層最上部には層厚14cmの青柳ローム層である。このローム層を切って、礫混じり砂質粘土層、礫混じり泥質砂層が堆積し、これらの上をクラック帯の発達する黒褐色粘土層、赤褐色粘土層、有機質黒褐色粘土層が層厚1.3mで覆っている。この立川ローム層はその層厚と岩相から立川ローム上半部層=Tc 2ローム層と思われる。

三吉野欠下のAk-9は「三吉野遺跡」(中西充, 1998)のほぼJラインに相当するが、ロームまで地表より掘削したところ、青柳ローム層を覆って、暗褐色粘土層、礫混じり中粒砂層、マトリックスを粗粒砂とする最大直径28cmの礫層の堆積が認められた。

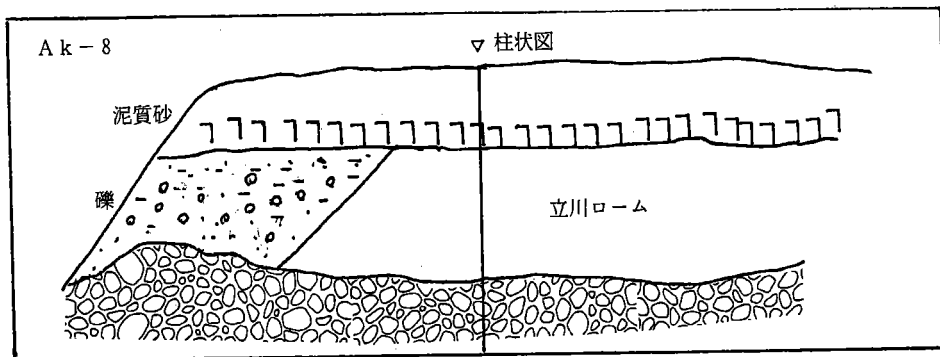
あきる野市役所新庁舎建設現場のAk-10, 11では、段丘礫層を覆って最下部に最大15cm径の礫を交えるローム層が堆積し、その上部にはローム層、礫混じりローム層、青柳ローム層が堆積し、ローム層の層厚は約1mである。ローム層の下部あたりが武蔵野台地のB、B2層準、礫を混じえる最下部のローム層は武蔵野台地のX層で、Tc 1ローム層が堆積していると思われる。ローム層は層厚15cmのスコリア混じり粘土層と層厚約30cmのローム質粘土層、黒ボク土層に覆われる。

秋川駅南の阿岐野Ak-12では、マトリックスを泥混じり粗粒砂とし、最大径30cmの亜円礫からなる礫層を、直接黒ボク土層が覆っている。黒ボク土層はここでは礫層の谷を埋積している。

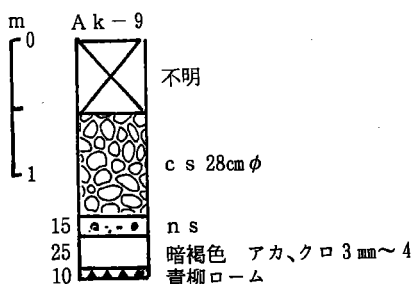
平沢松海道Ak-26では、マトリックスを黄褐色粘土とし、閃緑岩などの風化礫を含み、最大径15cmの亜円礫からなる五日市砂礫層を不整合に覆って、層厚約5mで、マトリックス粗粒砂、分級の悪い最大径30cmの亜円礫からなり、時に細粒砂層や砂礫層をレンズ状に介在させる立川礫層が堆積している。立川礫層上部は黒ボク土に充填された40cm層厚の礫層と黒ボク土層に覆われ、立川ローム層の堆積はみられない。

三吉野場末のKB30や南中塚場26(国土地理院, 1991)では、直径5cm以下の円礫を主と

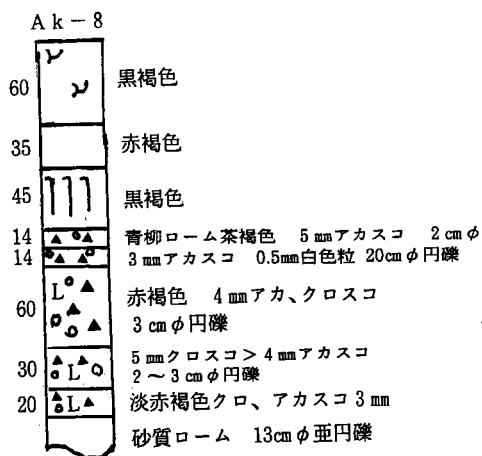
14-2 a



三吉野下Jライン



三吉野下



14-2 b

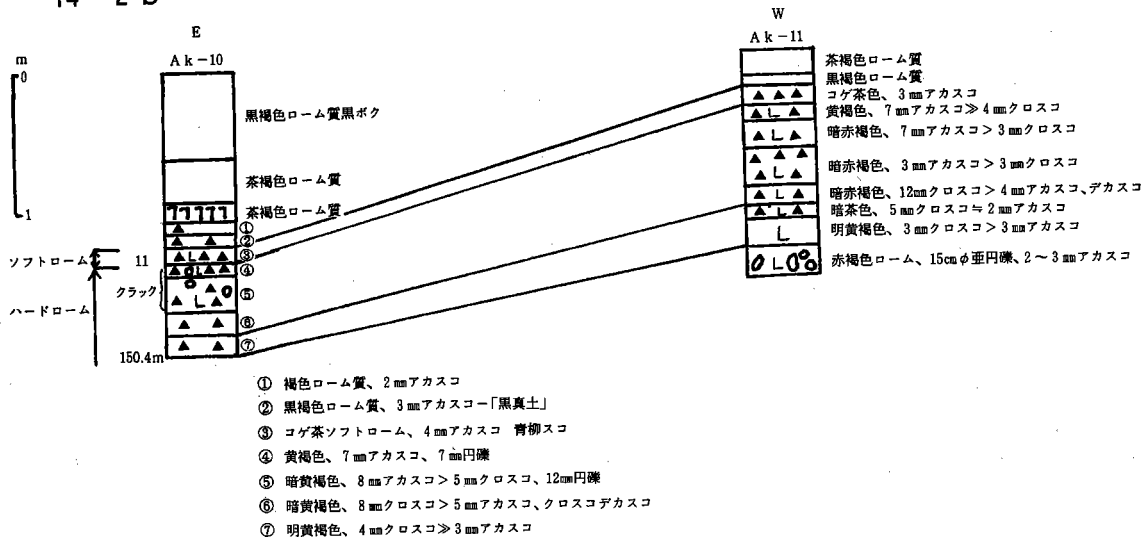


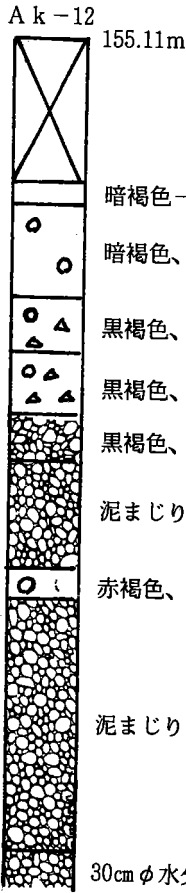
図14-2



14-3 a

秋川駅南阿岐町

m  
0  
1



14-3 b

← 南

松海道

北 →

m  
0  
1

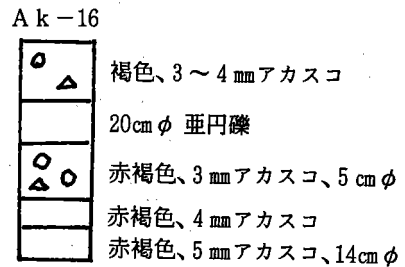
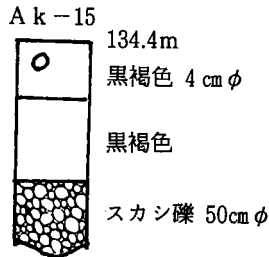
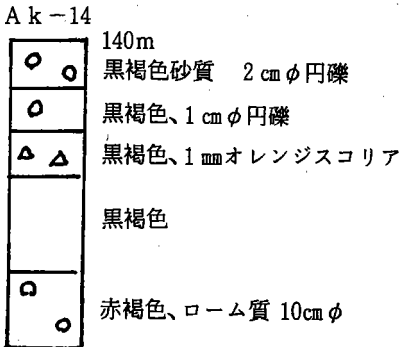


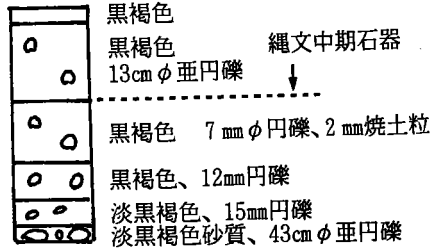
図14-3

14-4 a



A区西面

Ak-17



14-4 b

松海道

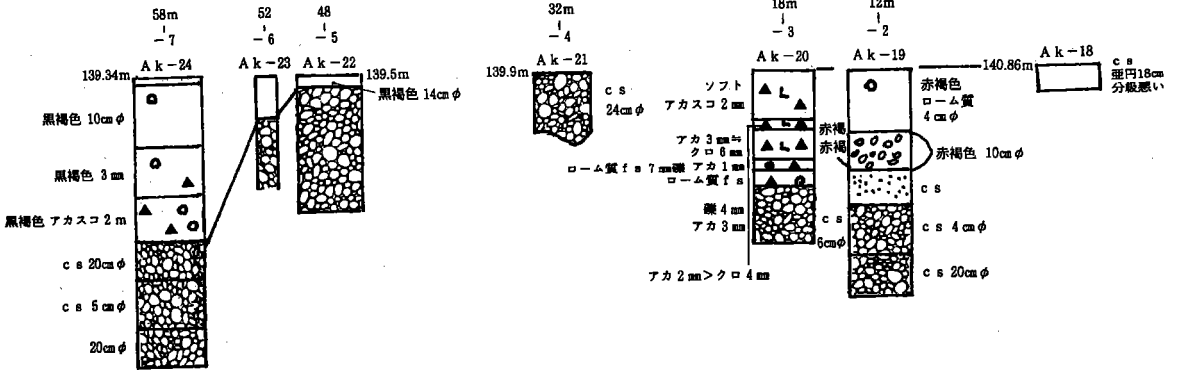
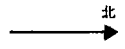


図14-4

し、角礫も混じる礫混じり粘土層が立川礫層の上位にレンズ状に堆積している。圏央道切割りの三吉野場末付近Ak-25では、立川ローム層を切る小さな谷を礫層が埋積しているのが認められた(図15)。立川ローム層中には明瞭な黒色帯が認められ、武蔵野台地のB. B1、B. B2に対応し、Tc 1ローム層が堆積していると思われる。都立日の出福祉園と都立秋川高校との間から南東に、圏央道西側に向かう凹地(図3)が見られることから、立川ローム層を切る埋没谷が存在すると思われる。この埋没谷を埋積する礫層は、角田(1981b)の原小宮や平井で報告された礫混じり粘土層や、Ak-1~Ak-27で認められたローム層を切っているいは覆って堆積する粗粒~細粒の堆積物と同様のものと考えられ、その岩相から氾濫性堆積物と推定される。既に、秋留台地では立川ローム層上部に「真土」と呼称される氾濫性堆積物とされる粘土層が堆積していることが知られている。

平沢・松海道

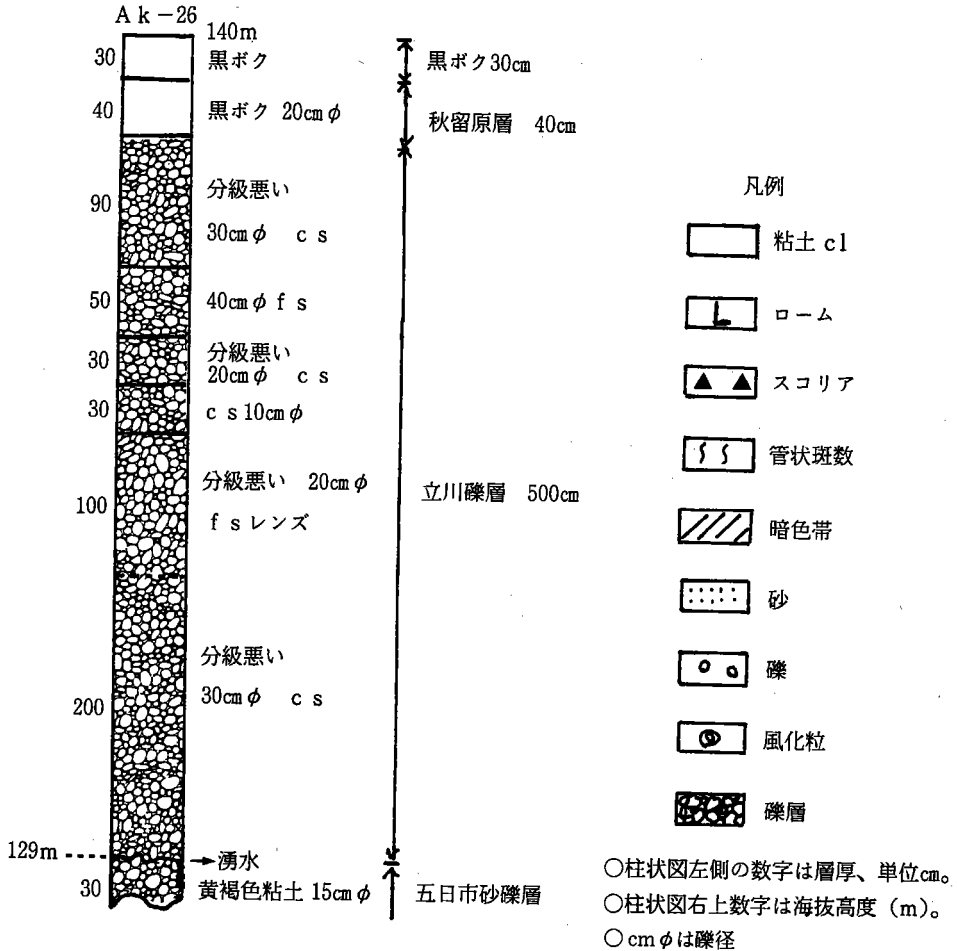


図14-5

## (2) 秋留原層

東京都農業試験所 (1964) は、平井川沿いに非火山性、重粘性の褐色土の分布を示し、竹迫ほか (1983) はこの褐色土を土壌学的見地から平井川の洪水性堆積物とし、遺跡の分布から洪水の年代を弥生時代から古墳時代の間とした。但し、この年代については問題がある。最下位の屋城面上の「中高瀬遺跡」の存在から、縄文時代後晩期には屋城面は離水していた可能性が高いことから、弥生時代以降の平井川は屋城面より低位を流れていたと推定される。屋城面と秋留原面との比高差は約12m、現河床面との比高差は約5mであり、弥生時代から古墳時代の間平井川が秋留原面上に溢れるには、12m以上の比高差を克服して例えば、下流部でダムアップされるような洪水が必要であるが、そのような洪水が起きたことを示す堆積物が、秋留原面より下位の段丘面にみられないということである。佐

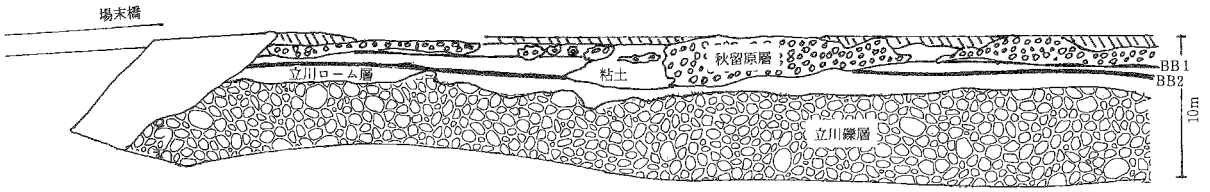


図15-1 三吉野場末橋 A k-25

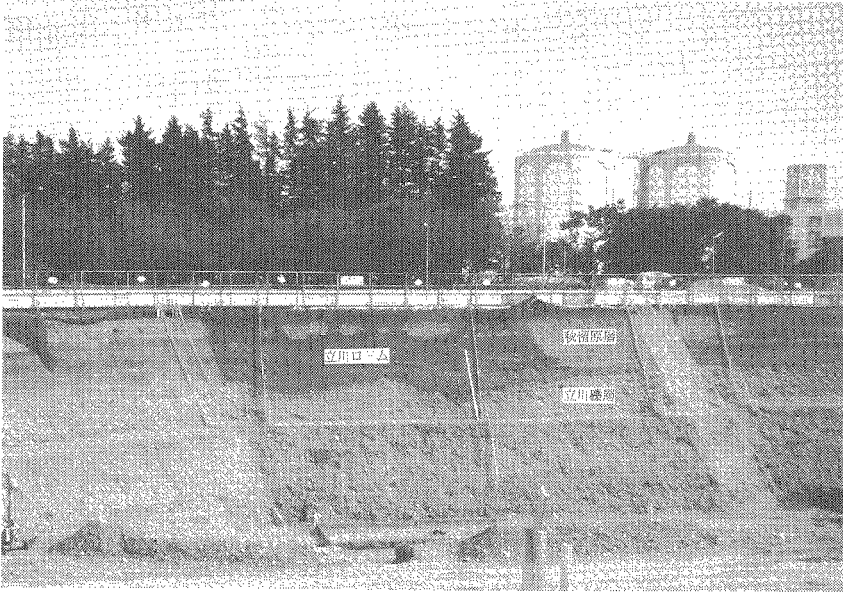


図15-2

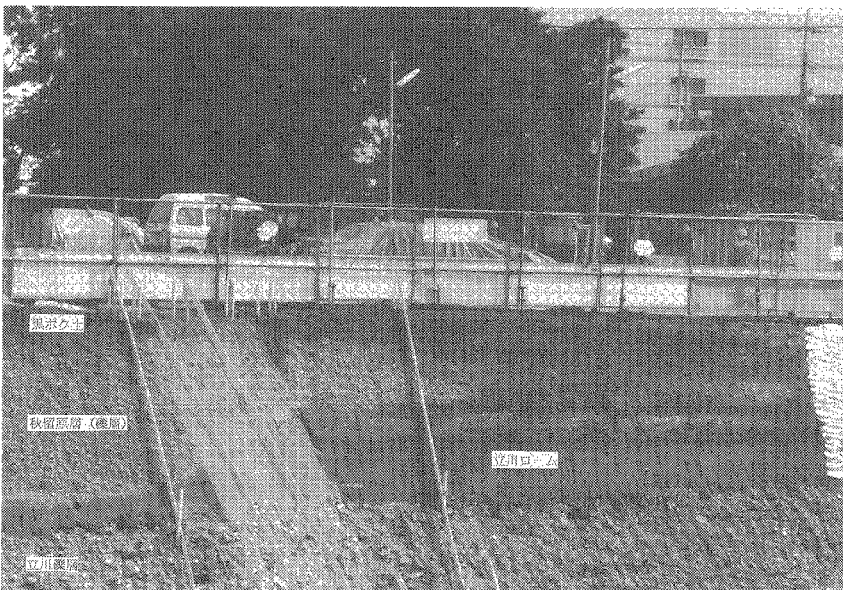


図15-3

瀬(1998)は植物珪酸体分析から、「真土」が完新世堆積物であることに疑念を呈している。

関谷(1987)は、この褐色土(東京都農業試験所,1964)に「真土」の名称を与えた。以後、秋留台地における遺跡報告では、東京都農業試験所(1964)の土壤分布図の褐色土を「真土」に名称変更した「真土分布図」がよく掲載され、「真土」も「黒真土」、「赤真土」、「黄真土」などその色調から細分されることとなった。

真土の名称は、今井(2001)にあるように、江戸時代から使用されているが、地域によって真土と称される土壤に相違があり、統一的な土壤名称とは思われない。秋留台地でも秋留原面上の阿伎野に野土、真土の地名があるとともに、小川面上の小川にも真土の地名がある。後述するように、立川ローム層を覆う氾濫性堆積物のうち粘土からなる細粒堆積物が、従来の真土にほぼ相当する。氾濫性堆積物の粒度組成は氾濫エネルギーの時間的、空間的变化に応じ変異することから、秋留原面を構成し、立川ローム層を覆う一連の氾濫性堆積物を秋留原層と仮称する。

秋留原層は堆積ユニットを持つことから数回の氾濫で堆積したと推定され、黒褐色の粘土層(いわゆる黒真土層)は、腐植を含むことから、その上位の秋留原層との間に短い堆積間隙を有すると思われる。

### (3) 各地域の秋留原層

#### a) 「天神前遺跡」(図16, 図14-1, Ak-7)

立川ローム層(ハードローム層)、青柳ローム層(ソフトローム層)を削って、秋留原層の砂礫層が堆積し、その上位は、細角礫を含む砂質粘土層、褐色礫混じり粘土層、黒褐色礫混じり粘土層、黒褐色粘土層から構成されている。下部の褐色礫混じり粘土層中にはスコリアが含まれる。褐色の礫混じり粘土層が黄真土、黒褐色粘土層がここでは黒真土と呼ばれている。

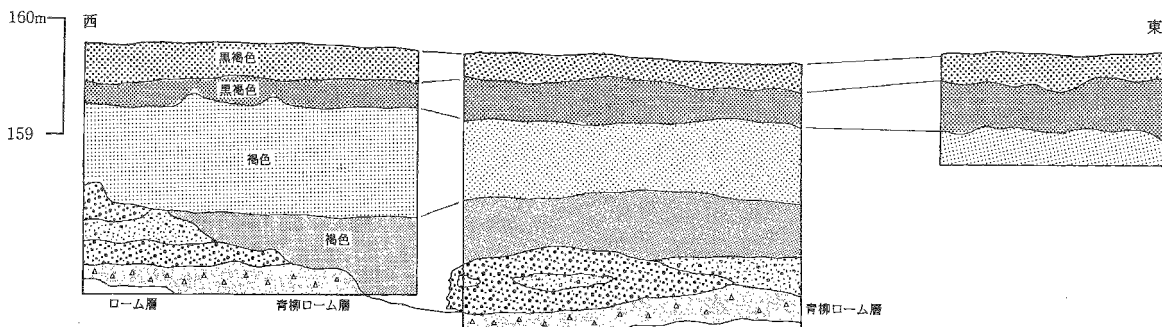


図16 天神前遺跡

## b) 原小宮石神遺跡

「原小宮石神遺跡」「松海道遺跡」での発掘調査中に、秋留原層について野外調査を行い、一部地点では立川ローム層の重鉱物分析を行った。

角田(1981b)は、都立秋留台高校前を南北に走る地形・地質断面図を示して、北端の段丘崖付近では、ローム層が分布せず、同時異相として段丘礫層上位に層厚50~60cmの礫混じり粘土層が覆っていることを示すと共に、段丘礫層の表面が起伏に富むことも示している。「原小宮遺跡」は都立秋留台高校の西北約600mの原小宮・代田前、海老内に位置し、「松海道遺跡」はその東約500mの平沢・松海道の農業会館西隣に位置する。

「原小宮石神遺跡」は土地区画整理事業に伴う遺跡発掘という性格上、複数の小面積の発掘からなるが、それら発掘現場における立川礫層までの深堀りから以下の事が明らかとなっている。本遺跡内の調査地点の名称は、遺跡発掘グリッド名を用いる。グリッドは20m×20mの方形で、北から南にA~R、西から東に1~48の番号が付されており、今回報告するのはA~L、1~12までのグリッド内である。なお、立川ローム層の層序を明らかにするために、粒径1/4mmから1/8mmの砂分について重鉱物組成と火山ガラスの産状を調査した。「原小宮石神遺跡」の調査地点位置図を図17に、各調査地点の地質を図18に示す。

E2：最大12cm径の亜円礫からなる立川礫層を層厚80cmの7cm~4cm径の角~亜円礫混じり立川ローム層がお覆っている。立川ローム層最下部にはレンズ状にS<sub>2</sub>Sが、最上部にはS<sub>1</sub>Sが挟在する。S<sub>1</sub>S直下のローム層中にATが点在する。立川ローム層を覆って、砂質粘土、赤色スコリア混じり粘土、ローム粒の点在する砂質粘土層からなる秋留原層が堆積し、その上部を黒ボク土層が覆う。秋留原層はS<sub>1</sub>Sより上部の立川ローム層を浸食して堆積したと推定される。

L5：最大20cm径の亜円礫からなる立川礫層を覆って、下位より約1m層厚のマトリックスを粘土とし、最大径8cmの礫層、管状斑紋の発達する粘土層、粘土層、白色風化粒を含む粘土層、暗褐色粘土層、管状斑紋の発達する砂質粘土層、白色風化礫を含む粘土層、オレンジ色スコリアを含む粘土層からなる秋留原層が堆積し、これを黒ボク土層が覆う。露頭東側では立川礫層を泥質細粒砂、礫層が覆うが、立川礫層直上の泥質細粒砂中には礫混じりローム層がレンズ状に認められ、最下部にS<sub>2</sub>Sが挟まる。秋留原層は立川ローム層のほぼ全層を浸食し、一部に削り残されたローム層が挟在している。

L7：立川礫層は、最大10cm径の分級の悪い亜円礫からなり、その上面は50cm高さの高低差で波打つように堆積している。立川礫層を覆って、層厚90cmの4cm~2cm径の円礫混じり立川ローム層が覆っている。立川ローム層最下部にはS<sub>2</sub>Sが認められるが、S<sub>1</sub>Sは

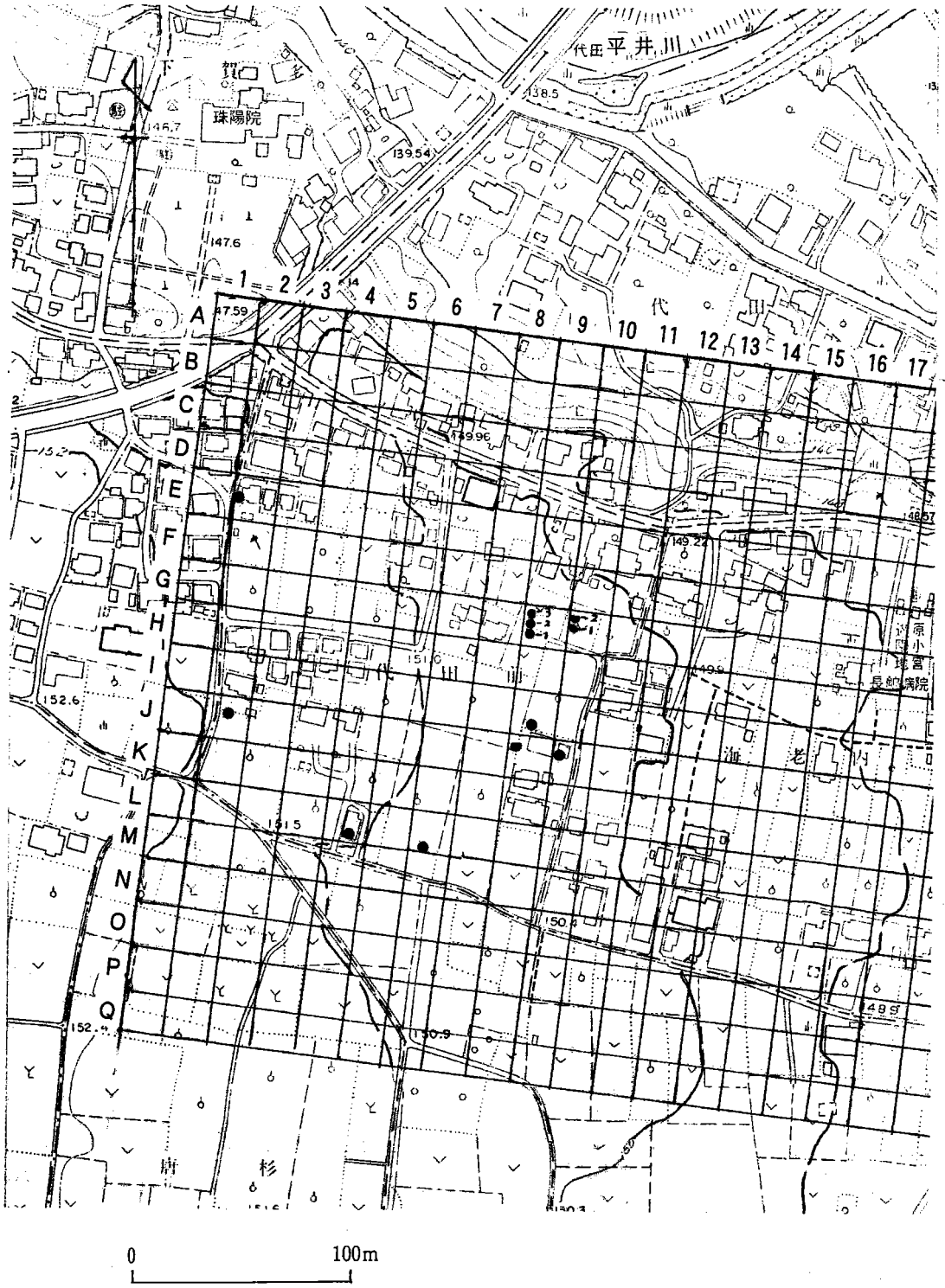
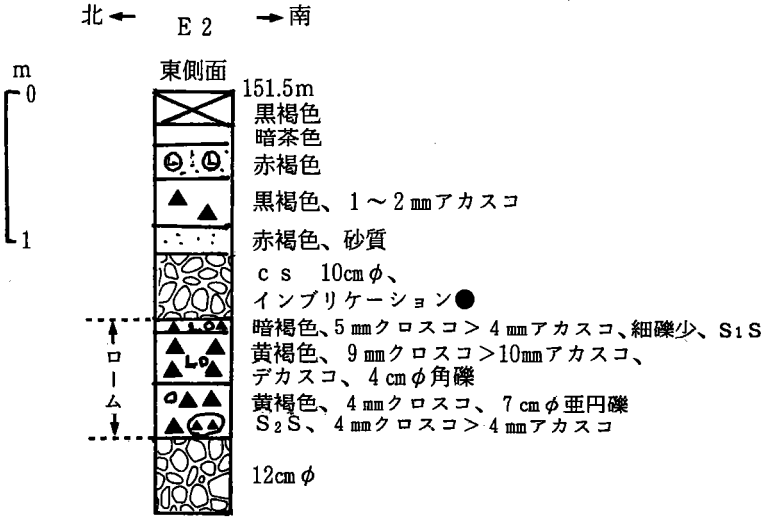


図17 「原小宮石神遺跡」調査地点位置図  
 (1/2500「瀬戸岡」使用)

18-1 a



18-1 b

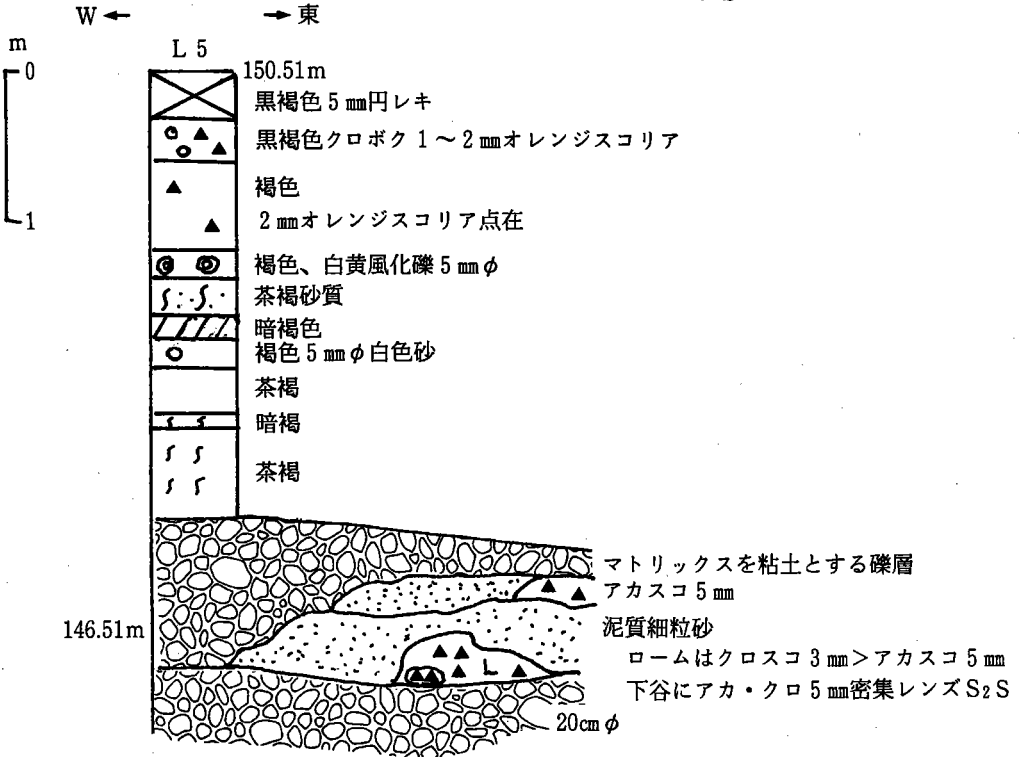


図18-1

(凡例は、図14と同じ、以下同様)



不明瞭である。立川ローム層上部の10mm径の赤色スコリア、5mm径の黒色スコリアからなる層準でATガラスが認められた。この上位が茶褐色のロームからなることから、武蔵野台地のB、B1に対比可能と思われる。立川ローム層を覆って、粘土層、砂質粘土層、細礫混じり粘土層からなる秋留原層が黒ボク土層に覆われて堆積している。秋留原層下部に3mm径の赤色スコリアが密集し、その最下部で軽石型ガラスが認められ、青柳スコリアとUGに対比される。E2と同様に秋留原層は立川ローム層最上部を浸食して堆積するが、その下部はUG、青柳スコリアと同時異相の関係にある。

J2：立川礫層は、下位から粗粒砂をマトリックスとし最大径18cmの垂円礫からなる礫層と、ローム質粘土をマトリックスとし最大径4cmの垂円礫からなる礫層から構成されている。立川礫層を覆って、層厚120cmの7cm～4cm径の垂円～円礫混じり立川ローム層が堆積している。立川ローム層最上部にはS<sub>1</sub>Sが、その直下にAT層準が認められたが、S<sub>2</sub>Sは肉眼観察では認められない。E2、L5、L7との対比から、S<sub>2</sub>Sは認められないが本ローム層下部はS<sub>2</sub>S層準に対比可能である。立川ローム層を覆い堆積する秋留原層は粘土、砂質粘土層からなり、下部に青柳スコリアがレンズ状に挟在し、その直下の粘土層中に認められる軽石型ガラスはUGに対比される。秋留原層は黒ボク土層に覆われ、古墳時代後期の鬼高期の住居址が黒ボク土層下砂質粘土層からなる秋留原層層準まで形成されている。東西方向にはほぼ全層が水平に堆積している。

G8：南北露頭面の南端部付近のG8-1では、最大径9cmの垂円礫からなる立川礫層を覆って、層厚約1.4mの立川ローム層が堆積し、最下部にS<sub>2</sub>Sがレンズ状に認められ、上部にS<sub>1</sub>Sが挟在し、その下にAT層準が確認される。立川ローム層は、マトリックスを粘土とする最大径6cm径の垂角礫からなる秋留原層礫層に浸食され、その上部の秋留原層は細礫混じり粘土層である。立川ローム層を覆う秋留原層基底の礫層は北端部に向かうにつれて（G8-3）、泥質細粒砂をパッチ状に挟む黄褐色砂質粘土層に側方変異する。秋留原層は上方に細粒化するとともに、側方にも細粒化する。

J8：砂層をレンズ状に挟み、最大径20cmの垂円礫からなる立川礫層を覆って、層厚約90cmの礫混じり砂質の立川ローム層が堆積し、最上部にS<sub>1</sub>Sが挟在し、その直下にAT層準が認められる立川ローム層を覆う秋留原層は、下位よりスコリア混じり、礫混じり粘土層、黒褐色軟質粘土層、粘土層からなる

I9：砂層をレンズ状に挟み、粗粒砂をマトリックスとし、最大径10cmの分級の悪い垂円礫からなる立川礫層を覆って、層厚約1.2mの礫混じり砂質の立川ローム層が堆積し、最上部は淡黒褐色を呈し、B、B1に対比され、その直下がAT層準である。S<sub>1</sub>S、S<sub>2</sub>Sは

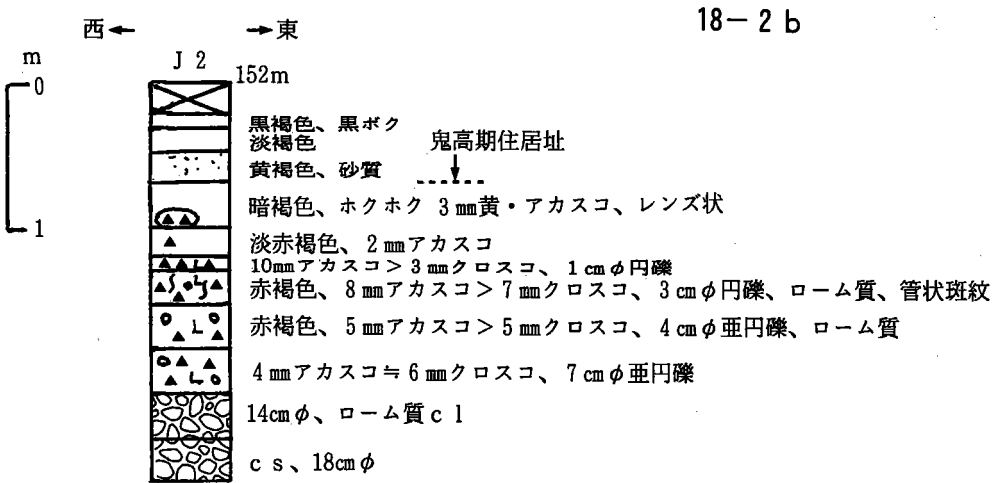
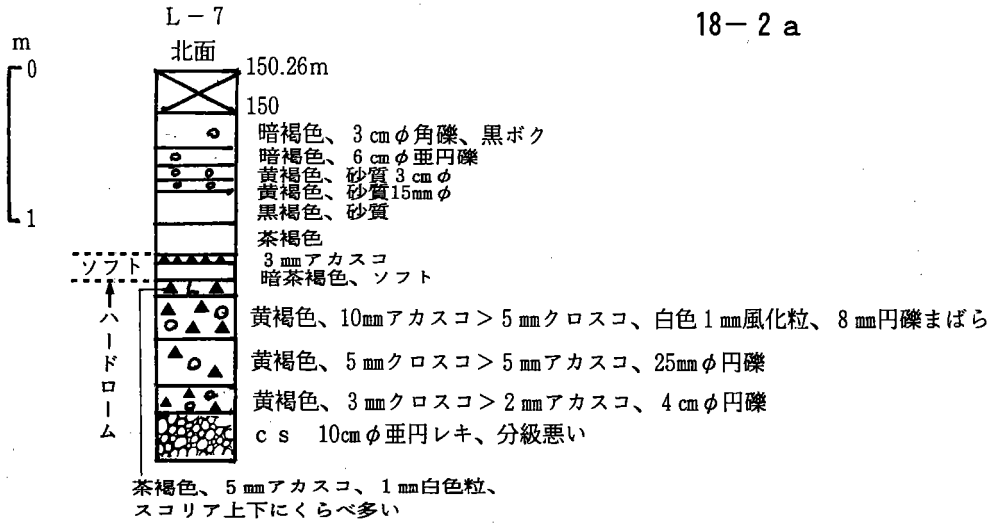
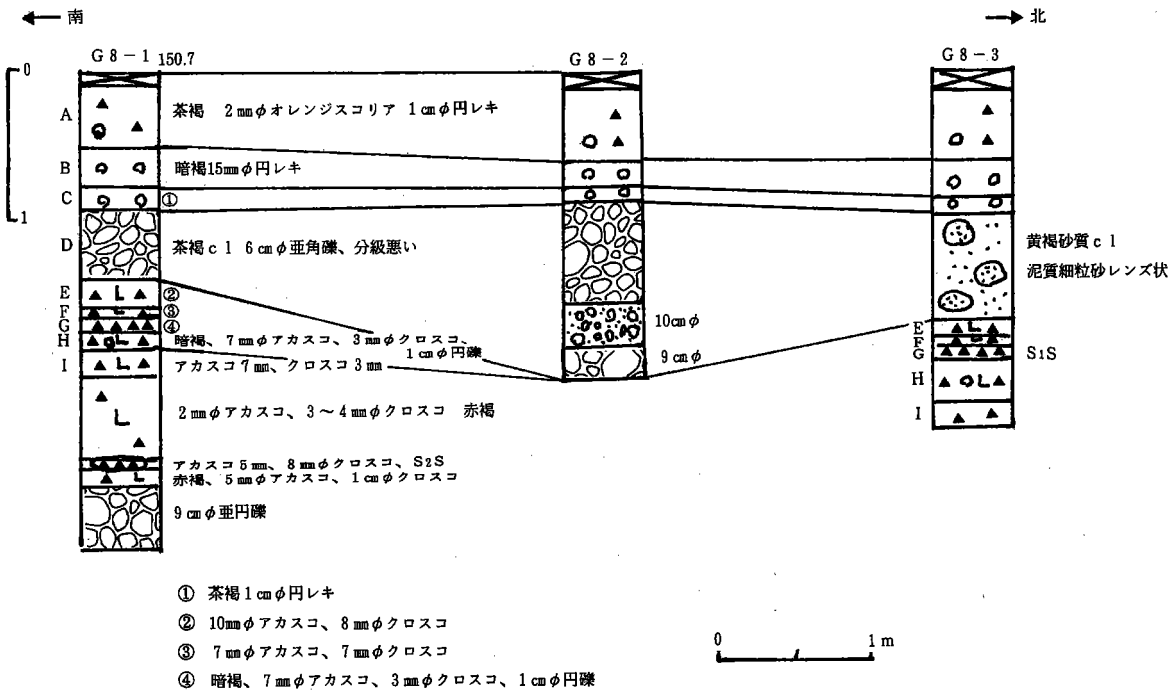


図18-2

認められない。立川ローム層を覆う秋留原層は下位より、2mm~3mm径の赤色スコリアを含む黄褐色ローム質粘土層、黒褐色軟質粘土層、白~黄白色風化粒、2mm~3mm径の円礫を含む暗黄褐色粘土層、白~黄白色風化粒を含む淡黒褐色粘土層からなり、黒ボク土層に覆われる。立川礫層から黒ボク土層まで、南北にほぼ水平に堆積している。J9:粗粒砂をマトリックスとし、最大径8cmの分級の悪い亜円礫からなる立川礫層を覆って、層厚約1.1mの礫混じり砂質の立川ローム層が堆積し、最上部は淡黒褐色を呈し、B.B1に対比され、その直下がAT層準である。S<sub>1</sub>S、S<sub>2</sub>Sは認められない。立川ローム

18-3 a



18-3 b

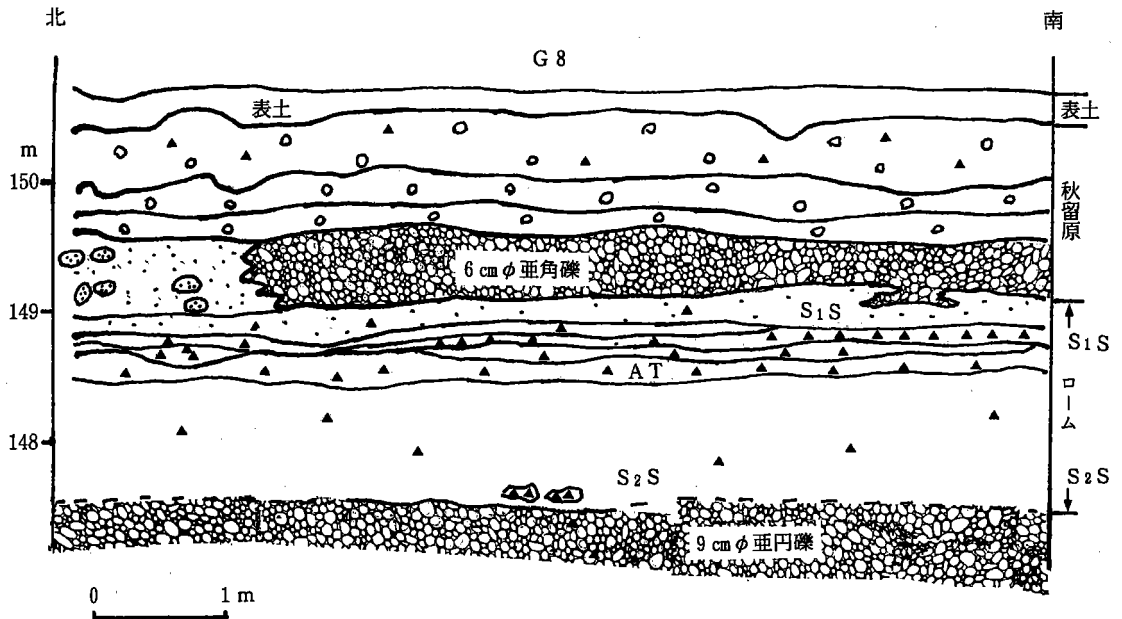


図18-3

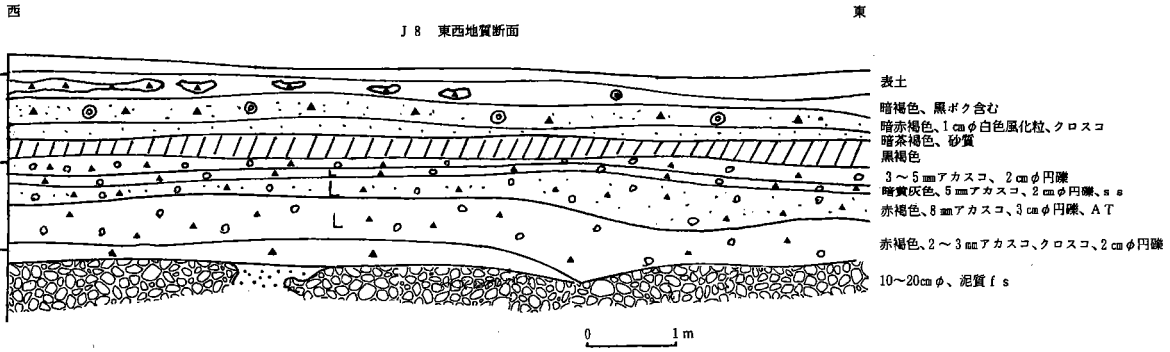


図18-4

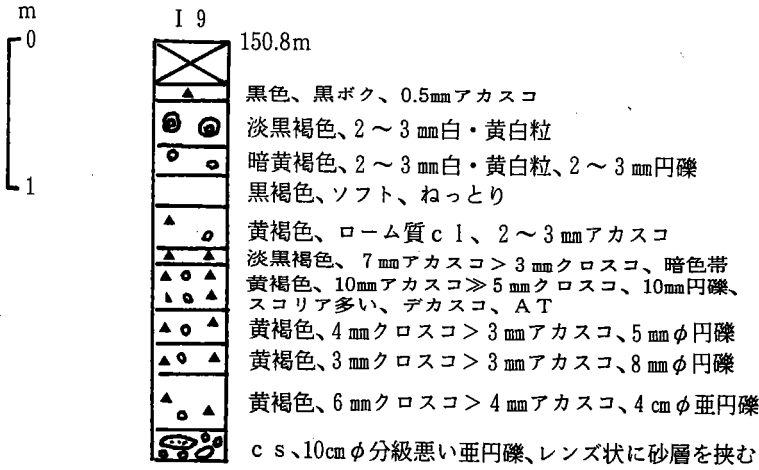
層を覆う秋留原層は下位より、2mm径の赤色スコリアを含む暗黄褐色ローム質粘土層、黒褐色軟質粘土層、2mm径の赤色スコリア、青~白色風化粒、8mm径の円礫を含む淡黒褐色粘土層、下部にクラックの発達する黒褐色粘土層からなる。

G10：グリッド東面の南北露頭断面において、立川礫層は最大径9cmの亜円礫からなり、南側に浅い（約80cm深）凹地を形成している。立川礫層を覆う立川ローム層は南側の凹地部分で最も厚く層厚約1.8mあり、上部にS<sub>1</sub>Sがレンズ状に挟在し、その上部は顕著な暗色帯をなしている。暗色帯は武蔵野台地のB. B1に対比される。立川ローム層を切る秋留原層の谷が露頭中央部に認められる。谷は泥質細粒砂をマトリックスとし、青柳スコリアがレンズ状に挟在する最大径3cmの亜円礫からなる礫層、細円礫混じり細粒砂、細粒砂をマトリックスとする細円礫からなる砂礫層によって充填される。露頭南端と北側では立川ローム層は、砂質粘土層に直接覆われ、砂質粘土層中には、谷埋めの礫層とほぼ同一層準に青柳スコリアがレンズ状に挟在する。上部の秋留原層は下位より管状斑紋の発達する粘土層、淡褐色粘土層からなり、黒ボク土層におおわれるが、ほぼ南北に水平に下位の秋留原層を覆っている。秋留原層下部の堆積は青柳スコリア降灰期に行われたと推定される。

J10：粗粒砂をマトリックスとし、最大径14cmの分級の悪い亜円礫からなる立川礫層を覆って、層厚約1mの礫混じり砂質の立川ローム層が堆積し、最上部は淡褐色を呈し、B. B1に対比され、その直下がAT層準である。S<sub>1</sub>S、S<sub>2</sub>Sは認められない。立川ローム層を覆う秋留原層は下位より、4mm径の赤色スコリアを含む暗黄褐色ローム質粘土層、3mm径の赤色スコリア黒褐色軟質粘土層、3mm径の白色風化粒、4mm径の円礫を含む淡黒褐色粘土層、下部にクラックの発達する黒褐色粘土層からなる。立川ローム層及び秋留原層の各層位はJ9と同様である（J9-J10東西地質断面）。

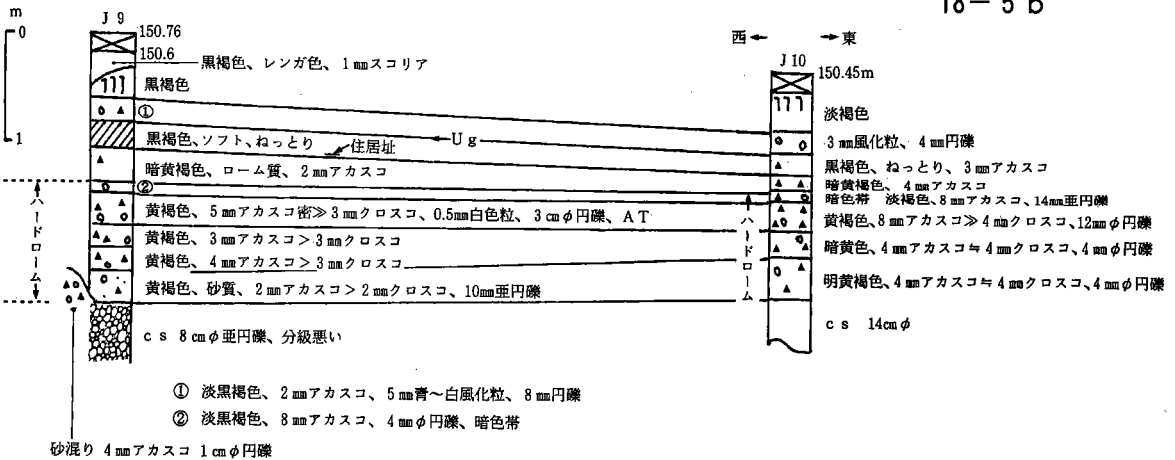
南 ← → 北

18-5 a



西 ← → 東

18-5 b



150.3m G10-1

18-5 c

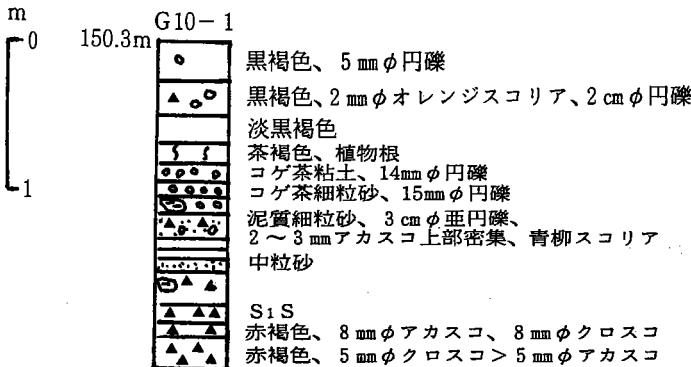
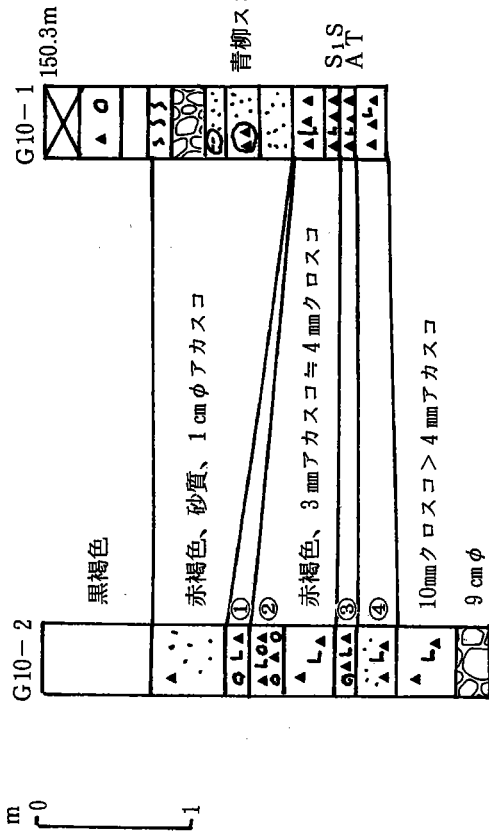


図18-5

北 ← 南  
東面北端

18-6 a



- ① 暗褐色 3 cm φ 円礫 8 mm アカスコ > 5 mm クロスコ
- ② 明赤褐色、10 mm アカスコ > 7 mm クロスコ、0.5 mm 白色粒
- ③ 10 mm クロスコ > 10 mm アカスコ、デカスコ、A T
- ④ 赤褐色、砂質、7 mm クロスコ >> 4 mm アカスコ

18-6 b

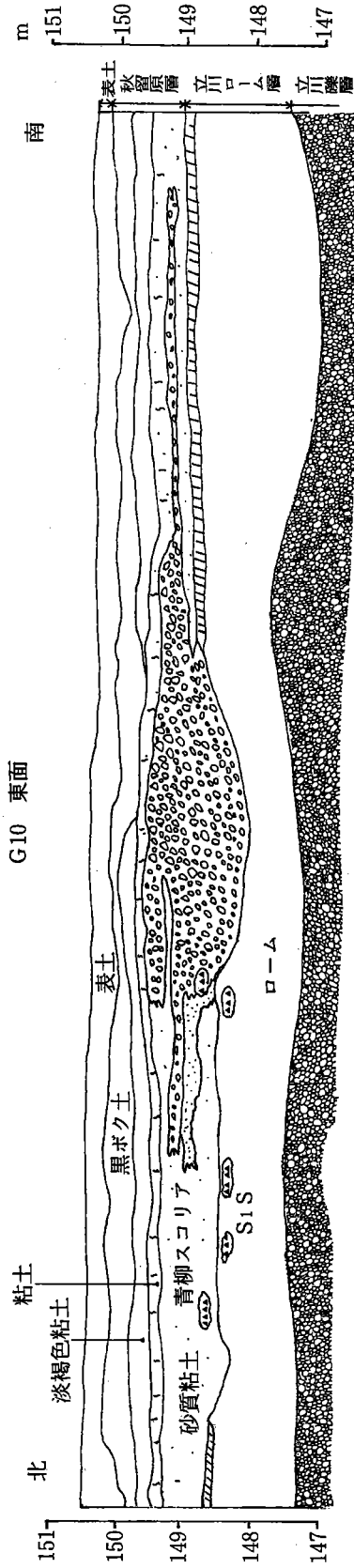


図18-6

南北地質断面：L7-J9-I9-G8-1では、J9付近に立川礫層の尾根状の高まりがある。立川礫層はS<sub>2</sub>S層準からS<sub>1</sub>S層準乃至はB. B1層準までの立川ローム層に覆われている。北側では立川ローム層は粗粒の礫層を基底とする秋留原層に覆われ、尾根部付近より南側では粘土を主体とする細粒の秋留原層に覆われている。南部の秋留原層下部にUG、青柳スコリアが挟在する。

東西地質断面：G10-G8-1-E2では東に向かって立川礫層が傾斜し、これをS<sub>2</sub>S層準からS<sub>1</sub>S層準までの立川ローム層、秋留原層が覆う。秋留原層下部にはUG及び青柳スコリアが認められる。現地表面の傾斜は立川礫層の傾斜とほぼ平行である。

J10-J9-J8-J2では、東に向かって立川礫層は傾斜するが、J9付近に浅い凹地地形が認められる。立川礫層の傾斜に沿って、B. B2層層準下位からS<sub>1</sub>S層準までの立川ローム層、細粒の秋留原層が堆積し、黒ボク土層に覆われている。

L7-L5-J2ではL5付近に立川礫層の谷を埋積して、礫層からなる粗粒の秋留原層が堆積している。L5では秋留原層によって、立川ローム層のほぼ全層は剝離されているが、一部立川礫層直上にS<sub>2</sub>Sを挟在するロームが残存することから、ここでの谷構造は秋留原層の浸食によって形成されたのではなく、立川ローム層降灰以前に形成されていたと推定される。谷の東西の縁辺部では、立川礫層は、B. B2層層準下位からS<sub>1</sub>S層準までの立川ローム層に覆われ、さらに下部の粘土層中に青柳スコリアを挟在する粘土を主体とする秋留原層、及び黒ボク土層に覆われている。

北東南西地質断面：G10-I9-J8-L5では中央部のI9からJ8にかけて立川礫層に尾根状の高まりがあり、北東に緩く、南西に大きく立川礫層上面は傾斜し、北東、南西に谷が形成されている。中央部付近から北東部にかけての立川ローム層は、B. B2層層準下位からS<sub>1</sub>S層準までのローム層であり、中央部では粘土を主体とする秋留原層が堆積し、北東部では秋留原層下部は立川ローム層を切る浅い谷を埋積している。

以上から、本調査域の立川ローム層及び秋留原層について以下のことが明らかとなった。

1) 秋留原層は立川ローム層を浸食しつつ堆積し、下位から礫層と礫混じり粘土、粘土層から構成され、黒ボク土層に覆われている。秋留原層の粒度は上方に細粒化するとともに側方に細粒化する。秋留原層下部にはUG、及び青柳スコリアが挟在することから、立川ローム層の最上部層準と同時異相を示す。立川ローム層中には、S<sub>2</sub>S、AT、S<sub>1</sub>Sの挟在が確認され、Tc1ローム層に相当する。従って、秋留原層はS<sub>1</sub>S降下以降、UG、青柳スコリア期に立川ローム層を一部浸食して堆積し、黒ボク土層堆積前にその堆積を終えたと推

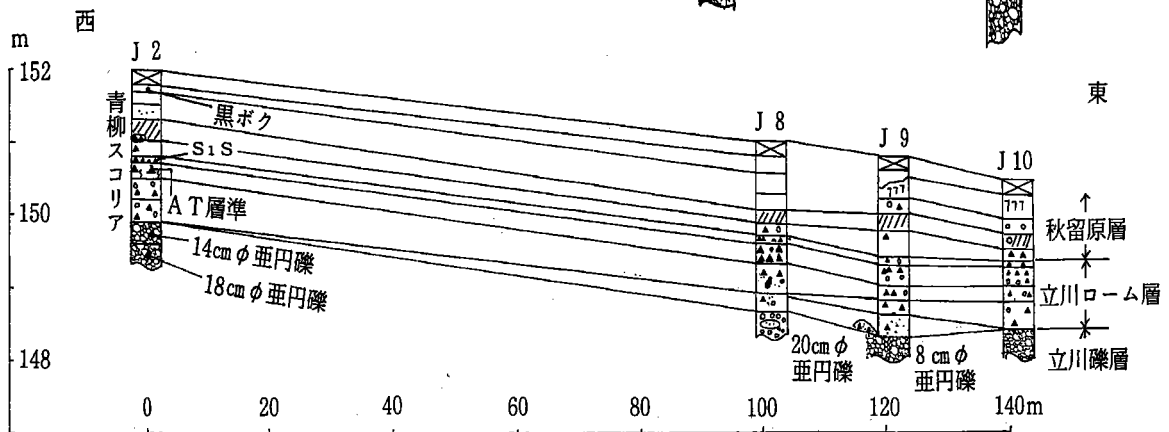
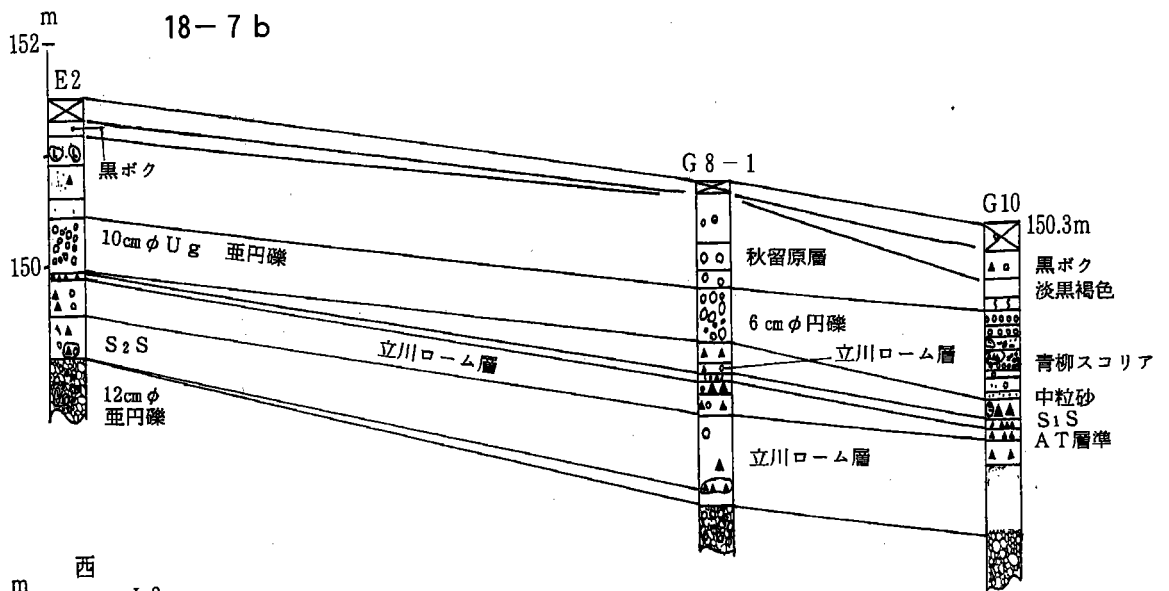
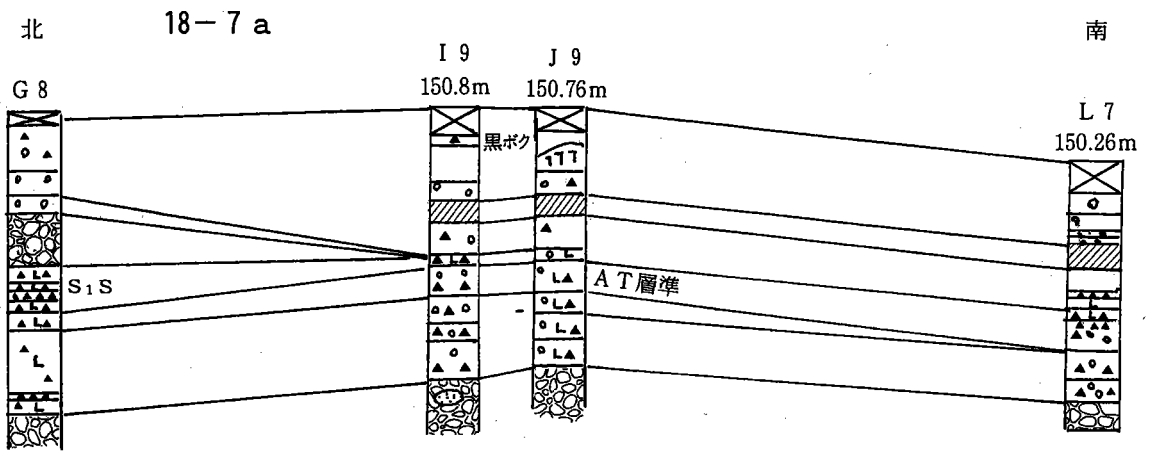


図18-7



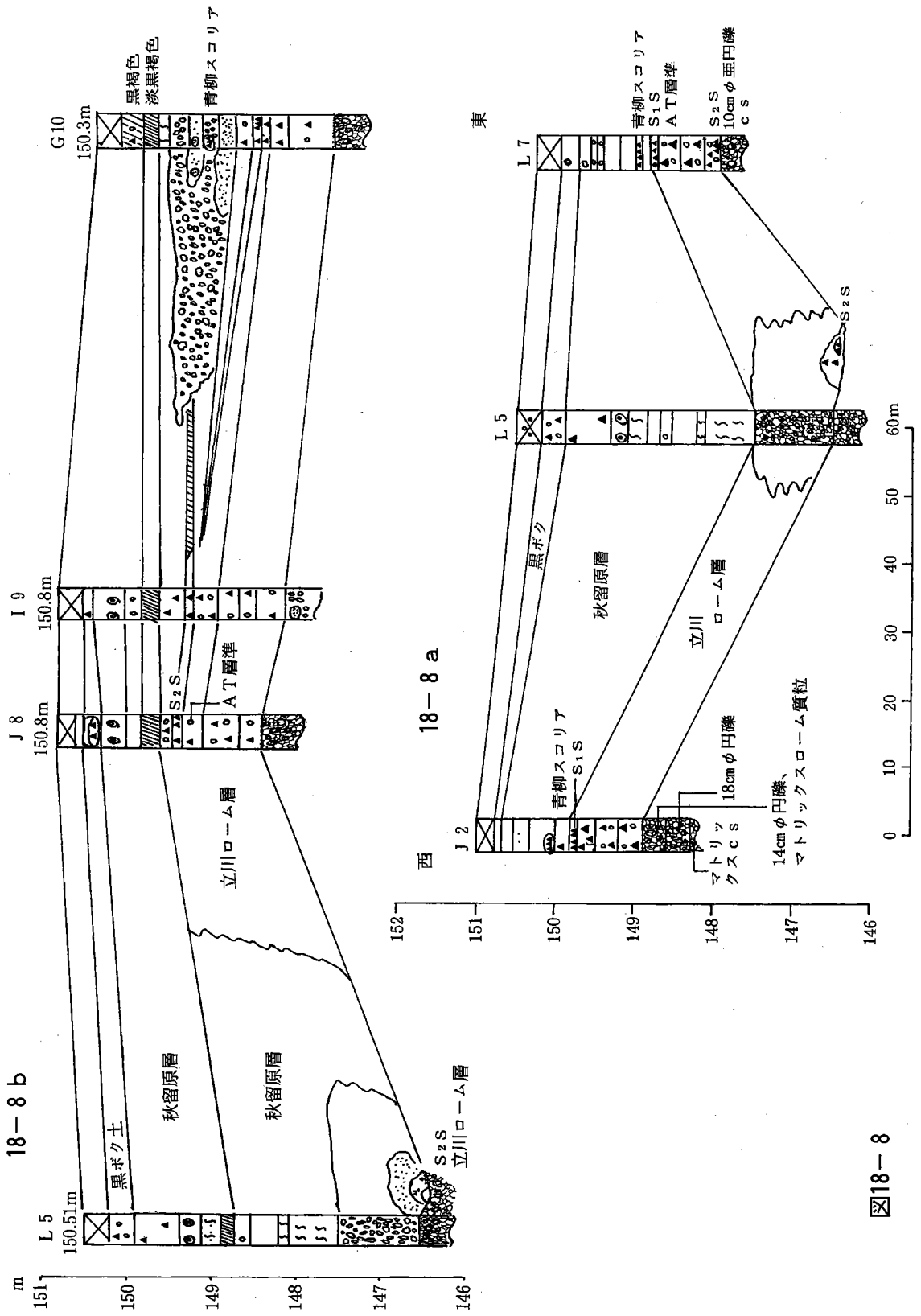


図 18-8

定される。今後、放射性炭素絶対年代測定等を行うことにより、その堆積時期はより明らかになると思われる。

2) 秋留原層基底礫層は埋没谷の充填堆積物であり、埋没谷はE2付近から東南東にG8, 10, 11へ延びる浅い谷と、L5から南東へ伸び、立川礫層に達する谷がある。これら埋没谷は立川ローム層降灰以前に形成されていたと推定される。秋留原層を堆積させた流水は、基盤の凹地上を流下したと推定される。空中写真からは、調査地域については判読できなかったが、調査地域の東方グリッドI24からK42に延びる凹地と、南方グリッドL4, M4付近から西に延びる凹地と認められ、上記埋没谷はこれら凹地に連続すると推定される。

3) 立川ローム層の層厚は最大で180cm、最も薄くて80cmであるが、下部にS<sub>2</sub>Sが挟在することから、Tc1ローム層に相当する。多摩川流域武蔵野台地のTc1ローム層に比較し、層厚が薄いのは上部が秋留原層により削剥されているためと、礫混じりであることから、間歇的な弱い流水の影響下にあったためと推定される。

#### c) 「松海道遺跡」

「松海道遺跡」は国土地理院(1991)にも示される凹地(図3;長さ500m,幅150m)に位置し、約60mの南北深掘りトレンチを観察する機会を得た(図19, 20, 図14-3, 14-4)。ここでは立川礫層の谷を直接、富士黒土層が厚く埋積している。深掘りトレンチ北端部ではマトリックスが粗粒砂で、最大直径18cmの亜円礫からなる砂礫層=立川礫層が上部に堆積し、南に向い傾斜して谷をつくっている。トレンチの北側ではこの立川礫層は北に傾斜し、ロームと黒ボク土層に覆われ、黒ボク土層に縄文時代中期の住居址が確認されている。従って、北端部と南に立川礫層の谷が2つ認められた。地表の凹地は、これらの谷に対応すると思われる。南の谷の央部では、マトリックスが粗粒砂で、最大直径6cmの亜円礫からなる立川礫層を覆って、細礫混じりのローム質細粒砂、赤スコリアを多く混じえるローム質細粒砂、層厚71cmの立川ローム層が堆積している。トレンチの南端部では立川礫層を、黒ボク土層(富士黒土層を含む)が層厚約120cmで厚く覆う。谷央部では黒ボク層の堆積が見られないのは人為による削剥の為と思われる。トレンチの北東部では立川礫層を覆い、黒ボクに覆われる層厚約80cmの礫混じり粘土層からなる秋留原層が見られることから、谷部は黒ボク土層で埋積され、尾根部の一部に秋留原層が堆積していると思われる。

上記の露頭調査を補うために、「真土」が記載されている遺跡の発掘報告書の土層図、セクション図を、粒度組成を中心に層区分し直し、秋留原層の堆積について検討する。

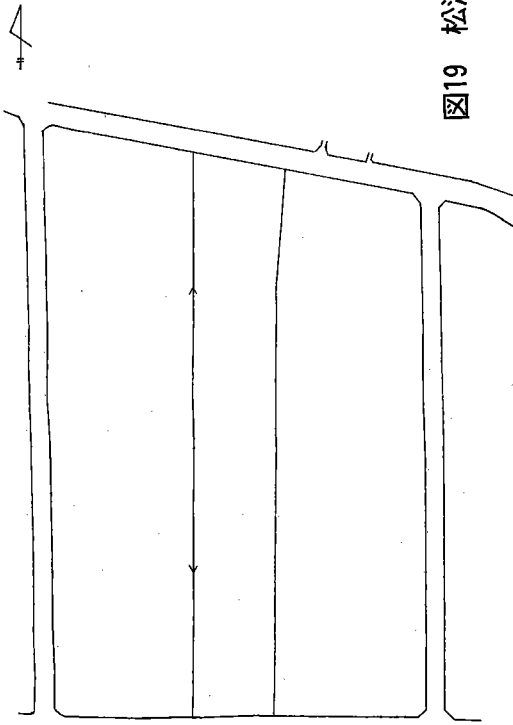
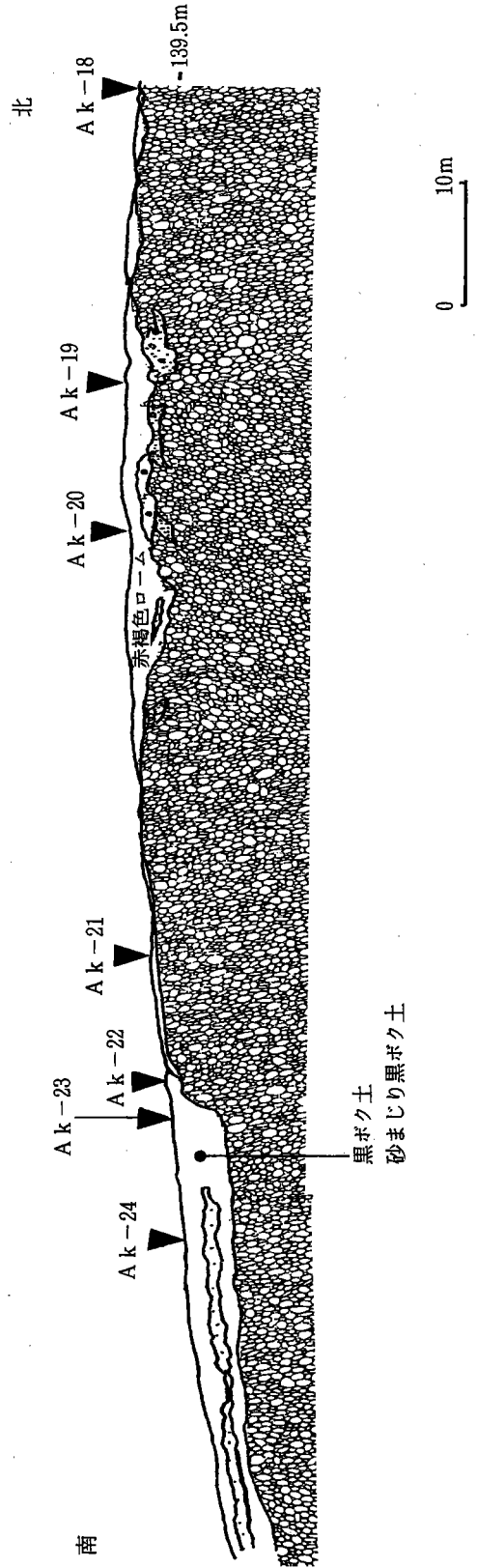


図19 松海道遺跡露頭位置図



d) 「石神遺跡」(図21; 関谷、1987)

T-2を谷央部として、北西から南東に向かう谷地形に位置している。この谷地形は先述の凹地分布(図3)に一致する。立川ローム層(ハードローム層)を削って、砂礫層、礫混じり粘土層、粘土層からなる秋留原層が堆積している。立川礫層の上面は起伏がみられ、その起伏は地表の谷地形に対応していることから、立川礫層の谷を埋積して秋留原層が堆積していると推定される。「天神前遺跡」と同様、秋留原層は上方細粒構造を示す典型的な氾濫性堆積物と推定される。

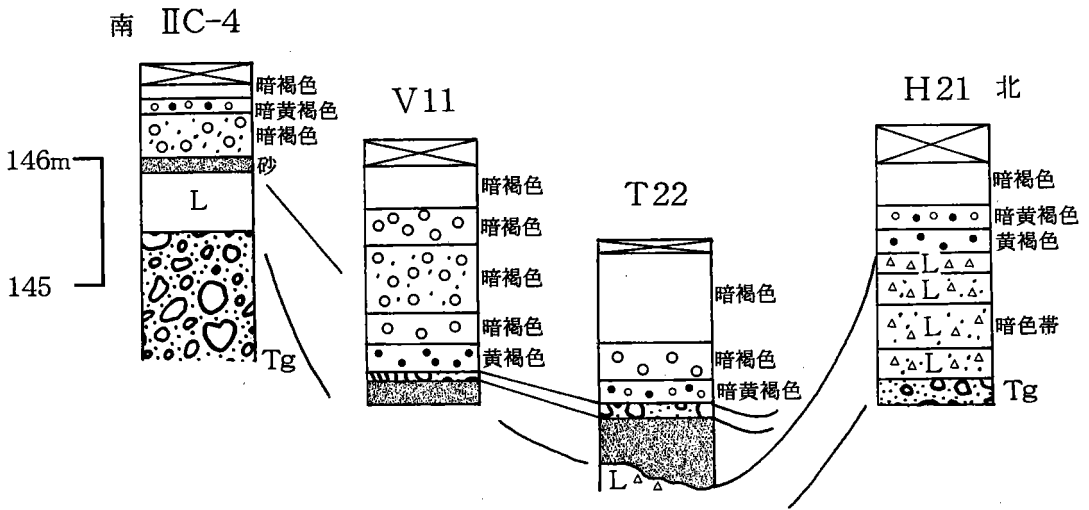


図21 石神遺跡断面図

e) 「三吉野遺跡」(図22; 中西充、1998)

Jラインではハードローム層、ソフトローム層を覆ってスコリア、シルト礫混じり粘土層、砂層が堆積し、その砂層を一部削って、砂礫層が堆積している。Kラインではソフトローム層、青柳スコリア層を覆いスコリア、シルト礫混じり粘土層、礫混じり粘土層が堆積し、これを削って砂層、礫混じり粘土層の堆積がみられる。秋留原層は上方粗粒化構造を示し、少なくとも2回の堆積ユニットが認められる。

様々な河川地形において、植生を伴うバー、自然堤防、高水敷などの河川の微高地には、洪水時に流路の内部よりも細粒な層理が形成されるが、その層理は逆級化構造をなすことが知られている(伊勢屋、1982; Iseya, 1989; 鈴木、1993a; 鈴木、1993b)。さらに鈴木(1994, 1995)は洪水氾濫による3次元形態の逆級化構造を明らかにした。本地点の砂礫層は地形的な軽微な高まりに位置することから砂礫堆を構成すると推定される。

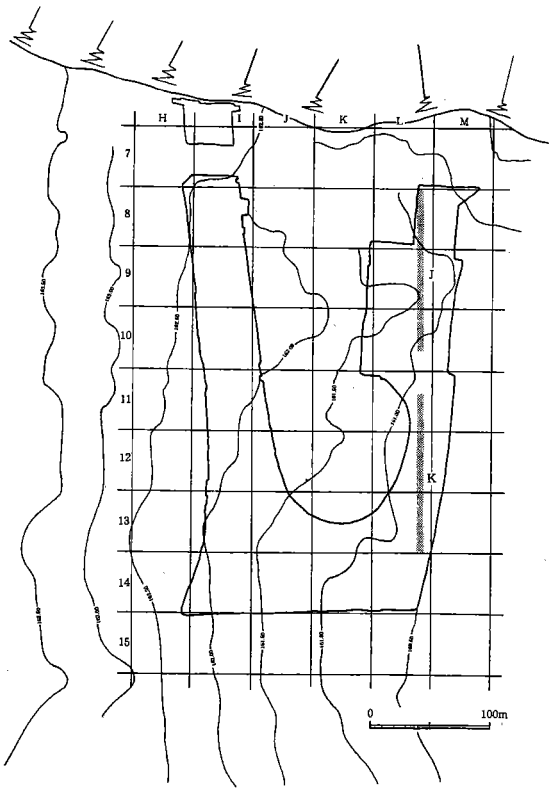


図22-1 三吉野調査地点位置図

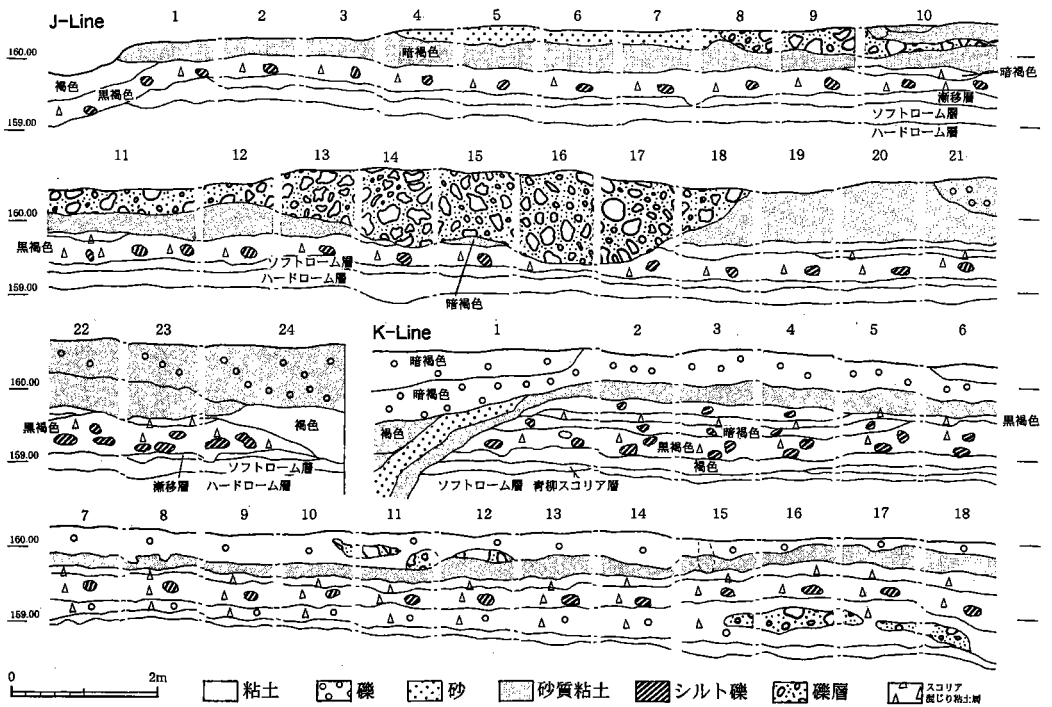


図22-2 三吉野遺跡Jライン (1/60)

f) 「三吉野欠上」(立神ほか, 1994)

基本層序柱状図によると北西部のA3グリッドでは礫層、礫混じり粘土層からなる秋留原層が堆積し、南東部のI7グリッドではソフトローム層を削って、ローム質粘土層(「再堆積ローム層」)、礫混じり粘土層からなる秋留原層が堆積している。A3グリッドの礫層が立川礫層か、立川ローム層を削る氾濫性の礫層かは報告書から判断できないが、角田(1981b)による原小宮や平井でのローム層の欠如と、ローム層と同時異相の層厚50~60cmの礫混じり粘土層の堆積という報告から、立川礫層の可能性が示唆され、「石神遺跡」同様に立川礫層上面は1m以上の起伏を持つと思われる。

平井川右岸沿いでは、立川ローム層を浸食し、上方細粒化あるいは上方粗粒化構造を有する氾濫性堆積物=秋留原層が層厚1m前後で堆積していることが認められる。その堆積の時期は「三吉野遺跡」で青柳スコリアが報告されているので、青柳スコリア降下後と推定される。段丘面形成で言えば、新井面離水以後となる。

g) 「上野原遺跡」(図23; 関谷, 1989)

本遺跡はほぼ東西に伸びた遺跡であり、竹迫ほか(1991)による土壌分析もなされている。西端では礫混じり立川ローム層(ハードローム層)を覆いスコリア混じり粘土層、砂質粘土層からなる秋留原層が堆積し、富士黒土層に覆われる。中央部西よりの秋留原層は、最大計2cmの細円礫からなる砂礫層で、ローム層を削って谷状に堆積し、東側は攪乱により不明であるが、西側ではスコリア混じり粘土層、砂質粘土層に側方変異する。この砂礫層は富士黒土層の最下部を浸食し、礫混じり黒色土に覆われているが、この黒色土は黒ボク土と思われる。凹地分布(図3)からは、ほぼ砂礫層の堆積する位置の北と南に小規模な凹地が存在することから、調査地点を通り南南東から北北東に伸びるローム層を切る埋

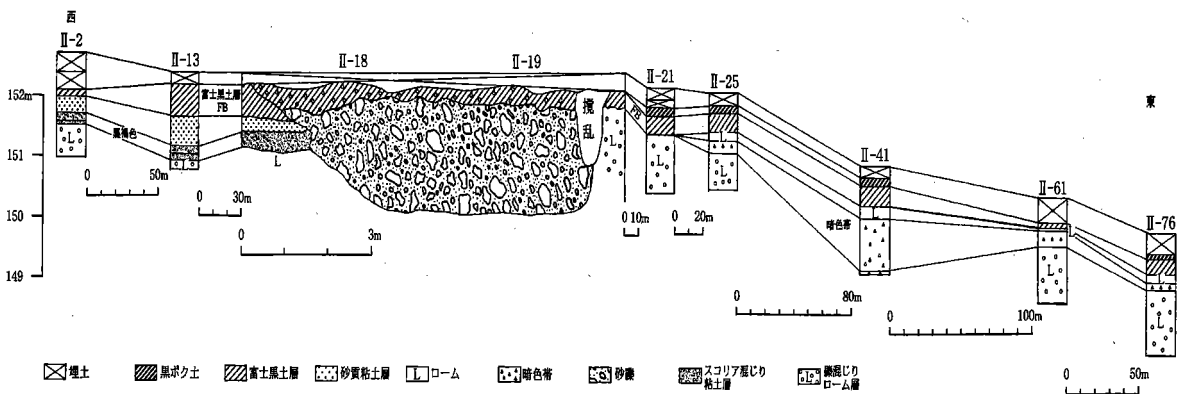


図23 上野原遺跡

没谷が示唆される。中央部より東側では、地形は緩く傾斜し、立川ローム層、富士黒土層、黒ボク土層が堆積し、秋留原層の堆積は見られない。秋留原層堆積時期の上限が明らかとなった。即ち、秋留原層の堆積は富士黒土層前か或いは富士黒土層堆積初期に終了したと推定される。また、東側には秋留原層の堆積が見られないことから、氾濫は調査地点の東側には及ばなかったと推定される。凹地分布方向や埋没谷の方向と調和的に、氾濫流は北方に向かうものであったと思われる。

#### h) 雨間遺跡 (関谷, 1999)

遺跡南部は約1.5mほどの段丘崖を介して新井面に続く。最大直径10cmの円礫からなる立川礫層を覆って、層厚約70cmのローム質粘土をマトリックスとし最大径10cmの円礫からなる礫層、砂質粘土層が堆積し、これを層厚約20~40cmの細円礫混じりハードローム層、層厚約20~45cmの細円礫混じりソフトローム層が覆い、さらに、ローム粒混じり粘土層、赤色スコリア混じり粘土層からなる秋留原層が覆い、黒ボク土層に覆われる。

#### i) 「代継・富士見台」(あきる野市代継・富士見台遺跡調査会, 2000)

蛙沢から北西に伸びる谷の南側に位置する。立川礫層を覆い、礫混じりローム層と層厚20~70cmの暗褐色の粘土層からなる秋留原層、黒色土(黒ボク土)が堆積している。「噴出礫」と仮称される直径数mほどの部分的な礫群の露頭が報告されているが、立川礫層の上面に起伏があることを示すと思われる。

#### j) 「三吉野遺跡群井戸端地区・阿伎野遺跡」(三吉野遺跡群井戸端地区遺跡調査団, 1999)

蛙沢から北西に伸びる谷とこれに連続する凹地群(図3)の北側縁辺部が本遺跡の南部になる。空中写真では判読できなかったが、浅い埋没谷が本遺跡東側で報告されている。報告された埋没谷は約40m離れてほぼ東西に並んで二つあり、それぞれ幅が23mと19m、深さが40cmと30cmである。調査報告ではいわゆる真土にこだわった記載がなされているため、本地点の秋留原層の堆積状況を読みとることは困難であるが、調査区の西側(V区)では立川ローム層を覆って、礫混じり粘土、黒褐色粘土層からなる秋留原層が堆積し、黒ボク土層に覆われている。調査区の東側(II区)では立川礫層、礫混じりローム層を覆い、粘土からなる秋留原層が堆積し、黒ボク土層に覆われている。重鉱物分析(パリノ・サーヴェイ株式会社, 1999)によれば、西側に堆積する立川ローム層の上部からUGが検出され、西側(V区)と東側(II区)の立川ローム層とは対比できないとされている。

k) 「水草木遺跡」(図24; 五日市町水草木遺跡調査会, 1993)

蛙沢より北西に伸びる谷と凹地の連続の最西端部、南側斜面に位置する。凹地(図3)は北西-南東長が約900m、南西-北東約500m~50mの大きさである。地形は南西から北西に緩やかに傾斜する。西側の凹地の縁に位置する第1地点では、立川ローム層を覆って、細礫混じりの粘土からなる秋留原層が堆積し、黒ボク土層に覆われている。谷部に至る地点2~6では立川ローム層を直接黒ボク土層が覆い、秋留原層の堆積はみられない。報告では細礫混じりの粘土層を、西側丘陵地からの崩落土としているが、遺跡は丘陵から約100m離れ、空中写真からも崖錐堆積物の分布はみられないことから、ここでは秋留原層とした。

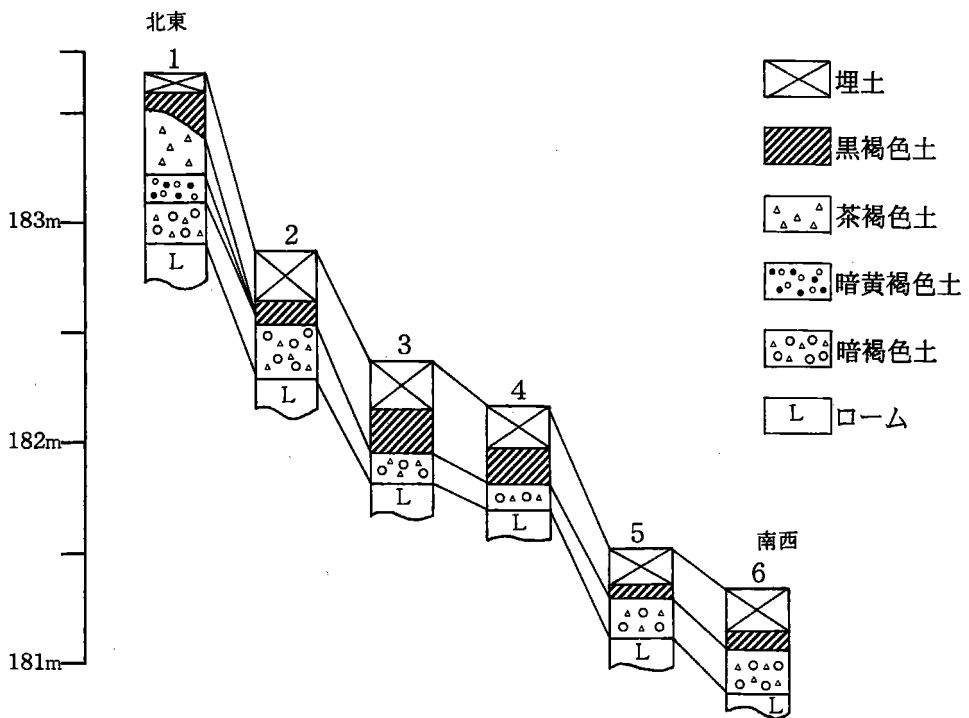


図24 水草木遺跡

1) 「橋場遺跡」(関谷, 1998)

平井川左岸草花丘陵南麓の水沢川左岸に位置し、立川礫層、砂質ローム層、ハードローム層、ソフトローム層を覆って、砂質粘土層、亜円礫混じり粘土層、黒褐色粘土層、暗褐色亜円礫混じり粘土層からなる秋留原層が堆積している。表層部に黒ボク土層の堆積は見られないが、遺構の保存状態から過去に削剥を受けた可能性が指摘されている。本遺跡で



は縄文時代中期後半ないしは後期とみられる住居址が確認されている。「橋場遺跡」の西方約100mの畑を検土杖で調べると、黒ボク土の堆積はなく、礫混じり粘土層が堆積している。本地点周辺には表層に秋留原層細粒堆積物が分布していると思われる。本地点の南東約400mの高瀬付近には北西から南東に幅約100m前後、長さ約600mの凹地が分布する。

以上から、秋留原層下部は立川ローム層の最上部に挟在するUG降灰期から青柳スコリア降灰期にかけて、ローム層を侵食した氾濫流によって堆積し、富士黒土層堆積前にその堆積を終了したと推定される。秋留原面と横吹面・野辺面との斜交関係や、埋没谷の存在、凹地分布から、横吹面・野辺面形成期に、上位の秋留原面上にオーバーフローした氾濫性堆積物が秋留原層と推定される。秋留原面上に認められる凹地(図3)は、原小宮地区や、「石神遺跡」、「松海海道遺跡」などで立川ローム層を切って堆積する秋留原層・礫層の分布位置と一致することから、氾濫流の埋没谷と推定される。さらに、原小宮地区ではこの埋没谷が基底の立川礫層上面の凹地と一致すること、氾濫流流路は少なくとも2つ存在することも明らかとなった。最大の埋没谷は東本宿から南東に向い蛙沢に至るものであり、方向性から平井川系の氾濫流と推定される。最大の埋没谷や松海道の大きな埋没谷では直接黒ボク土層(富士黒土層を含む)が立川礫層を覆って谷を埋積し、秋留原層の堆積は見られず、谷縁辺部に削り残された立川ローム層と秋留原層が堆積している。このことは、大きな谷は、放棄流路であり、強い水流で立川ローム層が流失したことを示唆する。氾濫流は、東本宿から南東に向い蛙沢に至る流路を主流路としつつ、その北側に網状に複数の小流路を持っていたと推定される。

## 5. 秋留原層の分布と堆積年代

### (1) 分布

東京都農業試験所(1964)、竹迫ほか(1983)の「真土」分布は、1/40,000空中写真での明色部分、非「真土」域＝「野土」は暗色部に対応する。空中写真地形判読で色調の明暗は、地表構成物質の種類だけでなく、土壤の水分条件とも密接な関係を持っている。一般に水分条件が多い場合には土地の表面が暗色に、少ない場合には明色になる。一方、角田(1981b)は秋留台地の地下水流動傾向を明らかにしている。これによれば、増戸中学校付近から都立秋川高校付近を通り、平沢へ抜ける埋積谷の南側(五日市線の南)を東西に走る地下水の尾根を境に、台地の水みちは、大きく北と南に2分され、尾根の北側では北西の平井川・伊奈丘陵から地下水は涵養され、埋積谷を通して東秋留方向に流れ、東秋

留付近で扇状に流出。尾根の南側では地下水の稜線から南あるいは南東方向へ流れている。図13に示すように、「真土」分布域とは、角田（1981b）で明らかとなった地下水位の分布構造に対応する。「野土」分布域の「上野原」で秋留原層細粒堆積物＝「真土」が堆積している事や、「真土」分布域で「真土」上部に黒ボク土層が堆積している事から、「真土」分布図（東京都農業試験所, 1964；竹迫ほか, 1983）は必ずしも「真土」分布域を示すのではなく、第一義的には地下水を反映した水分条件を示しているだけと思われる。

武蔵引田駅北の阿伎野では、「真土境」と呼称される南東～北西に向かう道を境に、その東側が南から順に「下真土」、「中真土」、「真土」と言う地名で、西側が北西から順に「上野土」、「中野土」、「野土」という地名である。（保坂芳春, 1983）。竹迫ほか（1991）は真土境を挟んで北側部と南側部で試坑を掘り、土壌分析から、「野土」が黒ボク土壌である事を確認している。「真土境」は東本宿から蛙沢に向かう埋没谷の南縁部にあたることから、流水の及ばなかった地域が、「野土」域にあたりと推定される。秋留原面上の埋没谷、凹地は、秋留原層を堆積せしめた氾濫流の旧流路であり、この旧流路を中心に秋留原層が分布していると考えられる事から、少なくとも、秋留原層の分布域は、東本宿から蛙沢に向かう埋没谷を軸に、主にその東側域と推定される。さらに、「上野原遺跡」やその周辺の埋没谷の分布から、氾濫流の蛇行が推定され、上野原から松海道を結ぶ線の西側域に秋留原層は主に分布すると推定される。但し、秋留原層の分布境界は、氾濫性堆積物という性格上、直線的に限られるものではなく、また分布域内においても氾濫流の影響を受けなかった地域－秋留原層の堆積を見ない地域も存在すると思われる。なお、上野原から北東に氾濫流が蛇行した理由は、現段階では解明できないが、地下に同方向の秋留原面形成前の埋積谷の存在が推定されることと無縁ではないと思われる。また、露頭調査が十分できなかったが、平井川左岸においても、少なくとも小宮久保から高瀬にかけて秋留原層の分布が認められる。

## (2) 堆積年代

秋留原層は立川ローム層最上部のUG層準或いはその上部の青柳スコリア層準を侵食して堆積することや、拝島面相当の横吹面、野辺面とその埋没谷が一致する事から、横吹面、野辺面形成期に、秋留原面上をオーバーフローした氾濫性堆積物と考えられる。14C年代では約12,000年前から10,000年前と推定される（竹迫ほか, 1984；坂上ほか, 1985）。竹迫ほか（1991, 1998）、坂上ほか（1998）は、秋留原層細粒堆積物いわゆる「真土」の初期風化が進んでいない事をもって、その堆積年代が新しいことの根拠の一つとしているが、こ

これは「真土」が地表上に現れたのが新しい事を示唆するに過ぎないと思われる。既に古くは吉村（1939, 1940）が武蔵野台地における窪地＝凹地と野水で明らかにしたように、「真土」は黒ボク土を侵食して堆積したのではなく、秋留原面上に残る秋留原層堆積時の埋没谷の名残である凹地部などに、多量の降雨時の表層水が集中、流路が形成され、この一時的な流水と、「真土」の粘性の高さ、透水性の悪さもあいまって、「真土」を覆う黒ボク土の一部が流失したと推定される。一時的な流水は黒ボク土を侵食するだけでなく、地域によっては薄い礫混じり粘土層や角細礫混じり黒ボク土層を堆積している。

岡崎（1967）は武蔵野台地西部域における立川面と青柳面の微起伏とローム層の層厚分布と堆積状態について研究を行い、立川面の上位面、北部下位面、南部下位面に区分した。立川面の上位面、南部下位面は山崎（1978）のTc2面、北部下位面は同Tc3面＝青柳面である。岡崎（1967）によれば、上位面は中州状の微高地と流路状の微低地が交錯し、網状河川の様相を呈し、立川面は立川ローム層上部層（関東ローム研究グループ、1965）に覆われ、ローム層は立川礫層表面の微細な凹凸を埋積するように堆積し、時に、ローム層の堆積がみられず、多量の砂礫を含む腐植層が立川礫層を直接覆うこともあるとしている。ローム層の欠如は、ローム層を侵食させた流水を示唆する。

加藤ほか（1974）は、武蔵野台地西部域において、立川面の土壌は狭山丘陵を境に、南部に比べ傾斜が急な北部では、ほとんどが円礫を含む再堆積性黒ボク土壌からなり、南部では円礫を含まない黒ボク土壌と円礫を含む黒ボク土壌とにほぼ二分され、青柳面、拝島面の黒ボク土壌はすべて再堆積性黒ボク土であり、約2/3は1m以内に礫層の出現するものであるとした。秋留台地における秋留原層を覆う角細礫混じり黒ボク土層は、武蔵野台地西部域における加藤ほか（1974）の再堆積性黒ボク土に対比可能と思われる。加藤ほか（1974）はこの再堆積性黒ボク土は、包含される縄文式土器や腐植の<sup>14</sup>C絶対年代から、縄文時代前期における縄文海進最盛期の高水時に、古多摩川が低位面との比高の小さい地域の立川面上にオーバーフローした際の表層濁流堆積物と推定した。加藤ほか（1974）の武蔵野台地西部域北部の立川面は、山崎（1978）のTc3面＝青柳面、南部はTc2面に相当し、北部と南部は地形面を異にする。松海道遺跡では縄文時代中期の住居址が認められることから、再堆積性黒ボク土は縄文時代早期～前期に堆積したと考えられるが、野辺面より下位の段丘と秋留原面との比高差や、加藤ほか（1974）も指摘するように再堆積性黒ボク土には明確な層理が見られないことなどから、オーバーフロー・表層濁流は支持できない。

岡崎（1967）の武蔵野台地西部域の網状河川を想定させる微地形やローム層の欠如する地点の存在、加藤ほか（1974）の再堆積性黒ボク土は、秋留野台地と同様に、立川ローム

層上部層の降灰後に、西部域において降雨時の強い流水の影響を受ける地点が存在したことや、黒ボク土堆積前の微地形に支配され、再堆積性黒ボク土が堆積した事を示唆する。

## 6. 秋川・平井川沿いの立川段丘の形成過程

原小宮地区では、E2、L5、G8などでS<sub>2</sub>Sが確認され、AT層準下に層厚70cm前後のローム層の堆積も確認されている事から、立川ローム層全層をのせている。同様にあきる野市新庁舎建設現場や場末でも立川ローム層全層Tc1の堆積がみられる。一方、その他の地域では、Tc2ローム層が堆積しているが、Tc1ローム層堆積域と、Tc2ローム層堆積域とは小崖などによって区分されない。

多摩川沿岸に分布する立川段丘は、立川ローム全層をのせるものは下流部（関東第四紀研究会、1969）のみであり、大部分はその上半部以上をのせている（関東ローム研究グループ、1965）ことから、町田ほか（1971）は段丘化は上・下流で時代を異にし、立川面が細分される可能性の強い事を示唆し、立川ローム全層をのせる最も古い立川面を、立川I面と呼んだ。立川I面は調布付近では、現氾濫原に近い部分ではB、B2の上部以上をのせる新しい地形面であるが、背後の段丘崖下には立川I面が残存し、これより下流左岸の狛江、二子多摩川、等々力にかけ沖積面とほぼ同高度に立川I面が分布し、丸子橋より下流で三角州に埋没する（町田ほか、1971）。最終氷期における低海面期に古多摩川は古東京川の一支流であることから、海面低下の影響は先ず古東京川に現れ、その後古多摩川に伝播し、その為、立川I面形成以後B、B1の堆積までの間、下刻の進展は遅く、その後ようやく青柳面の時代以降になって旺盛な下刻が進み、何段もの段丘が生じたと、町田ほか（1971）は考察した。

調布より上流の府中市周辺の立川面について、松田隆夫ほか（1988）はTc1面とBB II以上の立川ローム層をのせるTc2面に細分し、境界には比高1mのTc1崖線下に凹地が形成され、その成因は、立川礫層堆積頂面を下刻した古多摩川の流水であり、凹地はその流路変遷を示すことや、古多摩川の離水以後=Tc2面形成後、礫層から湧出する流水が凹地を流下、凹地では立川ローム層の全層の欠如、あるいはその一部が欠如し、その上位にはローム層や黒土層が厚く堆積し、凹地を埋積しているとし、その流水の消滅時期は、凹地によって異なると推定している。

町田ほか（1971）の海面低下の影響の上流への時間差を伴う伝播は、現氾濫原に近い部分では拝島付近までであり、秋留台地にはTc 1ローム層が分布することは、拝島付近より上流の立川面の形成が少なくとも海面低下のみに規定されない事を示唆する。

## 7. まとめ

- (1) 秋留台地には、増戸中学校付近から都立秋川高校付近（三吉野場末）を通り、平沢へ抜ける秋留原面形成期前の埋積谷が存在する。
- (2) 秋留原面形成期前に埋積谷を古秋川が流下し、谷を埋積した。
- (3) 立川面に対比される秋留原面と、拝島面に対比される横吹面・野辺面は斜交する。
- (4) 秋留原面上には、立川ローム層全層が認められる地点や立川ローム層が欠如する地点がある。すなわち秋留原面の離水は、早いところでAT降灰以前と推定されるが、その離水は秋留原面全域で一挙に進まず、離水したところは立川ローム層が覆った。
- (5) 横吹面・野辺面形成期（約12,000年前～10,000年前）に平井川系の水流が秋留原面上にオーバーフローし、立川ローム層上部を侵食しつつ、仮称秋留原層を堆積した。秋留原層は3次元的級化、逆級化構造を示す。秋留原層の細粒堆積物は秋留台地で「真土」と呼ばれてきた堆積物に相当する。
- (6) 秋留原面上に分布する浅い谷や凹地は、氾濫流旧流路の名残である。
- (7) 多摩川の拝島より上流部の段丘形成（高木, 1990）と対比して、横吹面・野辺面の斜交とオーバーフローは、流水運搬能力に対する物質供給量の変化・気候的要因（高木, 1990）による可能性があるが、平井川系オーバーフロー流路が秋留原面を北西から南東に横断し、秋川は既に下刻に入っていたと推定されることなどから、秋留台地南東端での傾動も考慮する必要がある。埋積谷の形成時期や傾動については、今後、調査資料を増やした上で検討していきたい。
- (8) 秋留原層の堆積によって、秋留原面形成期の地形的起伏はほぼ平坦化された。  
多摩川左岸に分布する立川面と異なり、秋留原台地の秋留原面の形成は段丘化することなく、立川Tc1面期からTc3面期にかけて行われた。
- (9) 秋留原層の堆積後、秋川、平井川の下刻が進み、縄文時代後期までに小川面～屋城面までの計5段の完新世段丘が形成された。
- (10) 秋留原面上の氾濫流旧流路の名残である浅い谷や凹地の存在と秋留原層細粒堆積物の「真土」の透水性の悪さから、多量の降雨時に表層の黒ボク土が流失する傾向が見られる。

## 謝 辞

(財)東京都生涯学習財団東京都埋蔵文化財センターの今井恵昭氏、松崎元樹氏、金地健司氏、あきる野市教育委員会の関谷学氏には遺跡での調査の便宜を始め、文献資料や貴重な助言を賜った。明治大学農学部土壌学研究室の竹迫紘助教授、東京農工大学農学部土壌研究室の坂上寛一教授には真土について御教授願った。法政大学非常勤講師高野繁昭氏には、地形面形成等について適切な助言を頂いた。川崎市中原区、川崎市麻生区、川崎市多摩区在住の安田真理子氏、落合愛子氏、秋葉知子氏にはテフラ分析処理、製図等でご協力を願った。以上の方々に、厚く感謝いたします。

## 引用文献

- あきる野市代継・富士見台遺跡調査会 (2000) 代継・富士見台遺跡—都市計画道路 (秋3・3・3号線) 整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 畦地稔生 (1971) 多摩川流域の地質. 昭和45年度駒沢大学文学部地理学科卒業論文, pp. 44
- 福田 理・羽鳥謙三 (1952) 武蔵野台地の地形と地質—東京都内の地質IV. 自然科学と博物館, 19, 171-191
- 保坂芳春 (1983) 秋川地名考 (市民のための郷土史読本). 秋川市教育委員会, pp. 411
- 今井恵昭 (2001) 秋留台地の地名と地誌. 天神前・瀬戸岡古墳群30号墳・上多賀・新道通り遺跡、南小宮遺跡発掘調査報告書, (財)東京都生涯学習財団東京都埋蔵文化財センター, 第95集, 383-392
- 伊勢屋ふじこ (1982) 茨城県, 桜川低地における逆グレーディングをした洪水堆積物の成因. 地理学評論, 55, 597-613
- Iseya, F (1989) Mechanism of inverse grading of suspended load deposits. In Taira, A. and Masuda, f., eds., Sedimentary facies in the active plate margin. TerraPub., Tokyo, 113-129
- 五日市町水草木遺跡調査会 (1993) 水草木遺跡 東京都西多摩郡五日市町 都市計画道路 秋3・5・2号線水草木遺跡発掘調査報告書
- 寿円晋吾 (1964) 武蔵野台地の各段丘礫のおおきさについて. 地理学評論, 37, 272-273
- 寿円晋吾 (1965) 多摩川流域における武蔵野台地の段丘地形の研究—段丘傾動量算定の一例—. 地理学評論, 38, 557-571、591-612
- 門村浩 (1961) 多摩川低地の地形. 地理科学, 1, 16-26

- 加藤好武・山田 裕 (1974) 関東地方の台地黒ボク土の生成と地形発達に関する研究 第1報 多摩川扇状地西部における地形面と黒ボク土の特徴. 第4紀研究, 13, 4, 177-186.
- 関東ローマ研究グループ (1965) 関東ローマ—その起源と性状—. 築地書館, 378pp.
- 建設省国土地理院 (1971・1972) 2.5万分の1土地条件図「八王子」「川越」
- 北村健治 (1992) 第一章 福生の地質と地形 第一節～第四節. 福生市史 下巻, 福生市, 857-880
- 小林達夫・小田静夫・羽鳥謙三・鈴木正男 (1971) 野川先土器時代の研究. 第4紀研究, 10, 4, 231-254
- 国土地理院 (1991) 1:25,000土地条件図 「八王子」
- 久保田正寿 (1977) 青梅市の埋蔵遺跡. 青梅市郷土博物館 164pp.
- 松田隆夫・大倉利明 (1988) 立川段丘と凹地地形について—府中市周辺の立川面の区分. 府中市郷土の森紀要, 第1号, 23-77
- 松本栄次・撰梅正人 (1970) 多摩川河谷における旧埋積谷. 地理学評論, 43, 403-404
- 三吉野遺跡群井戸端地区遺跡調査団 (1999) 三吉野遺跡群井戸端地区・阿伎野遺跡発掘調査報告書—都道第165号線拡幅工事に伴う埋蔵文化財調査
- 中西充 (1998) III 層序. 三吉野遺跡群-1-, 東京都埋蔵文化財センター調査報告 第60集, 11-18
- 野上道男 (1981) 河川縦断面形の発達過程に関する数学モデルと多摩川段丘形成のシミュレーション. 地理学評論, 54, 86-101
- パリノ・サーヴェイ株式会社 (1999) 自然科学分析. 三吉野遺跡群井戸端地区・阿伎野遺跡発掘調査報告書—都道第165号線拡幅工事に伴う埋蔵文化財調査, 187-195
- 坂上寛一・竹迫紘・黒部隆 (1985) 東京都八王子における富士黒土層の<sup>14</sup>C年代—日本の第四紀層の<sup>14</sup>C年代 (154) 地球科学, 39, 172-173
- 坂上寛一・大蔵利明・竹迫紘 (1998) 日の出町三吉野遺跡群における土壌構成からみた土壌生成環境. 三吉野遺跡群, (財)東京都埋蔵文化財センター調査報告, 第60集, 277-278
- 佐瀬隆 (1998) 日出町三吉野遺跡群A区土壌断面試料の植物珪酸体分析. 三吉野遺跡群, (財)東京都埋蔵文化財センター調査報告, 第60集, 281-282
- 関谷学 (1987) II 遺跡の位置と環境/III遺跡の層序. 石神遺跡, 石神遺跡調査会・東京都秋川市教育委員会, 1-11

- 関谷学 (1989) Ⅲ. 遺跡の層序/遺構・遺物. 上野原遺跡. 主要地方道杉並五日市線上野原遺跡調査会, 5-19
- 関谷 学 (1998) 第Ⅱ章 第2節 遺跡の層序. 東京都あきる野市 橋場遺跡-細谷ビル (仮称) 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, 細谷火工株式会社・橋場遺跡細谷ビル地区調査会, 9-12
- 関谷 学 (1999) Ⅲ A地区の調査・Ⅳ B地区の調査. 雨間地区遺跡群-あきる野市雨間土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書一, あきる野市雨間土地区画整理組合, 9-13, 16-19
- 角田清美 (1981a) Ⅳ 地形. 青梅市の自然Ⅰ, 青梅市郷土博物館, 156-210
- 角田清美 (1981b) 多摩川中流・秋留台地の下水処理と環境浄化に関する基礎的研究.  
(財)とうきゅう環境浄化財団(一般)研究助成, No.19, 63pp
- 角田清美 (1983) 秋川流域の陸水学的研究-特に秋留台地の地下水と秋川の流量について-.  
(財)とうきゅう環境浄化財団(一般)研究助成, No.29, 115pp
- 角田清美 (1992) 第1章 自然環境 第2節~第5節. 日の出町史 通史編上巻, 15-105
- 鈴木美和子 (1972) 経済企画庁. 土地分類基本調査「青梅」(地形各論). 8-9
- 鈴木一久 (1993a) 滋賀県野州川の現世網状河川堆積物に見られる逆級化層理. 月刊地球, 号外No.8, 152-157
- 鈴木一久 (1993b) 淀川水系各河川の逆級化堆積物:自然堤防帯から源流部まで. 堆積学研究会93年度秋季研究集会要旨集.
- 鈴木一久 (1994) 1993年9月9日野州川洪水氾濫堆積物の3次元形態と堆積構造:1回の洪水氾濫で形成された複数の逆級化構造ユニット. 地質雑, 100, 867-875
- 鈴木一久 (1995) 滋賀県野州川、現世河川堆積物の堆積史と洪水氾濫堆積物の堆積機構.  
地質雑, 101, 717-728
- 高木信行 (1976) 多摩川河谷域における堆積段丘と旧埋積谷. 日本地理学会予稿集, (10), 77-78
- 高木信行 (1990) 多摩川の段丘地形とその形成過程. 第4紀研究, 28 (5), 399-411
- 竹迫紘・加藤哲郎 (1983) 東京西部に分布する黒ボク土の土壤生成環境について. 火山灰と土壤-黒部隆教授退官記念論文集-, 火山灰と土壤編集委員会, 93-103
- 竹迫紘・上条朝宏・坂上寛一・岡崎正規・宇津川徹 (1984) 南関東における青柳ローム層をめぐると問題 (第1報告)-青柳ローム層について-. 第四紀学会講演要旨集, 14, 73-74



- 竹迫紘・関谷学（1991）秋留台地の「真土」と「野土」の性質と成因. 明治大学農学部研究報告, 第88号, 13-24
- 竹迫紘・笠原ゆき・坂上寛一（1998）日出町三吉野遺跡群における深堀土壌層位の理化学分析による層位学的解析. 三吉野遺跡群, (財)東京都埋蔵文化財センター調査報告, 第60集, 244-258
- 立神倫史・宇佐美徹（1994）3. 調査地点をめぐる地理的歴史環境. 三吉野欠上ー日の出町三吉野土地区画整理事業に伴う1992年度発掘調査報告書, 日の出町三吉野欠上遺跡調査団, 7-17
- 東京都農業試験所（1964）畑地土壌生産性分級図. 西多摩地域
- 内田和子（1979）多摩川流域の地理学的研究ー地形分類と渡河点との関連についてー.  
(財)とうきゅう環境浄化財団（一般）研究助成No. 4, 39pp.
- 山崎晴雄（1978）立川断層とその第四紀後期の運動. 第四紀研究, 16, 231-246
- 吉村信吉（1939）昭和13年に起こった武蔵野台地地下水の渇水及大增水と, 地理学評論, 第15号, 165-187
- 吉村信吉（1940）所澤町東方武蔵野台地の地下水, 特に宙水と浅い窪地の成因, 集落立地との関係, 地理学評論, 第3号, 145-169
- 米光秀雄（1992）第1章 自然環境 第1節. 日の出町史 通史編上巻, 1-14

## II 多摩川における縄文時代晩期から古墳時代の洪水氾濫

### — 完新世段丘の形成と洪水氾濫 —

増 淵 和 夫 (川崎市青少年科学館)

#### 1. 多摩川・浅川合流点低地—日野低地—における洪水氾濫

多摩川右岸に位置し、北を多摩川に、その南を支流の浅川に挟まれ、東西約5km、南北4kmの東西にやや細長い菱形をした台地が、日野台地である。海拔高度は、西端で約120m、東端付近で約95mである。台地は上総層群に属する小宮砂層と、その上位の日野砂礫層から構成され、関東ローム層に覆われる。3段の段丘地形(日野台面-多摩平面-豊田面)が認められ、日野台面は下末吉層に対比されていたが、町田(1984)は、段丘礫層を覆うローム層最下部にOn-Pm-1を検出し、武蔵野台地のM1面に対比している。

日野台地北西から南東に多摩川の氾濫低地、西から東に浅川の氾濫低地、北西に谷地川とその支流の氾濫低地が台地と接している。台地周辺の氾濫低地より1~3m高位に、栄町面と呼ばれる完新世小段丘が分布し、栄町面は拜島面に対比されている(角田, 1989)。栄町面を含めた沖積低地は、島津ほか(1994)によって、多摩川・浅川合流点低地とも呼称されている。島津ほか(1990)は低位段丘面、沖積面とこれらの地形面上に分布する旧河道、自然堤防を分類した。島津ほか(1994)は上記の地形分類を、L1, L2, L3の3面に修正分類した(図1)。L1面が角田(1989)の栄町面に対比される。日野宿はL1面上に位置

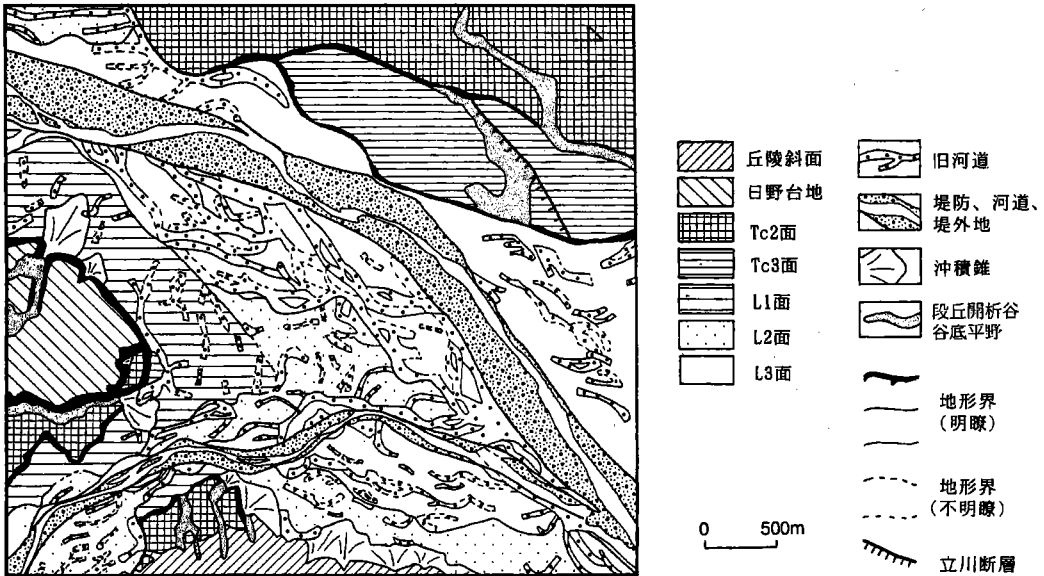


図1 多摩川・浅川合流点低地の地形分類図 <(島津ほか, 1994) による>

する。現河床とL1面との比高は、中央線多摩川鉄橋付近で5~6m、別府神社付近で3m程度である。L2面は多摩川左岸の中央線鉄橋上流側、浅川右岸および多摩川と浅川に挟まれた地域に分布する。現河床とL2面との比高は5m以下である。L3面は現多摩川および浅川沿いに分布し、現河床との比高は3m以下である。

島津ほか(1994)はL1面上の旧河道が南北方向に配列していることや、段丘崖の分布から、L1面形成期の多摩川は現在より南よりに、浅川は北よりに流れ、オリエント時計工場付近で合流していたと推定している。同様に、L2面形成期の合流点は現在とほぼ同じか、やや北寄りと推定し、L3面は現在でも形成が継続しており、多摩川、浅川の河道変遷が行われている場としている。形成年代については、L1面が拝島面に対比可能と考えられることや、各面上に分布する遺跡の年代から、L1面は14,000~6,000年前に、L2面は6,000年前以降の多摩川、浅川の河床が4,000年前~古墳時代中期のいずれかの時期に段丘化し、1,500年前にはその全域が離水したと推定されている(島津ほか,1994)。

L2面の地下地質は、上総層群連光寺層を不整合に覆って、段丘礫層が堆積、その上位に砂層、シルト層が堆積しているが、時に、基底の礫層の上位に10cm径以下の礫からなる礫層の堆積がみられ、礫層中には縄文土器が含まれ、基底礫層を埋積する細粒堆積物が侵食され、侵食跡を埋める粘土層中の材の放射性炭素絶対年代が2,000yrs. BP. 前後を示す事や、弥生時代の遺構、遺物が欠如する事などから、島津ほか(1994)は縄文時代晩期から古墳時代前期にL2面上あるいはL2面との境界に近いL1面上で比較的強い流水が生じたと推定している。

## 2. 落川・一の宮における洪水氾濫

多摩川左岸の立川市と右岸多摩市を結ぶ新関戸橋架橋建設工事に伴う遺跡調査が、落川・一の宮遺跡発掘調査である。この発掘調査過程において、縄文時代晩期以降から古墳時代の洪水氾濫堆積物を観察調査する機会を得た。詳細な報告が高野ほか(1999)によってなされている。

落川・一の宮遺跡は、多摩川右岸部の沖積平野に立地し、海拔高度は55m内外であり、大栗川が多摩丘陵から沖積平野へ流出する地点に位置している。

高野ほか(1999)による落川・一の宮遺跡及び周辺の地形分類を図2に示す。遺跡調査地点区画図を図3に示す。自然堤防としては、日野市の石田・万願寺、多摩市一の宮、府中市住吉町などに比較的規模の大きなものがみられる。陸地測量部発行の迅速図によると、自然堤防上には明治20年代から集落が立地している(図4)。

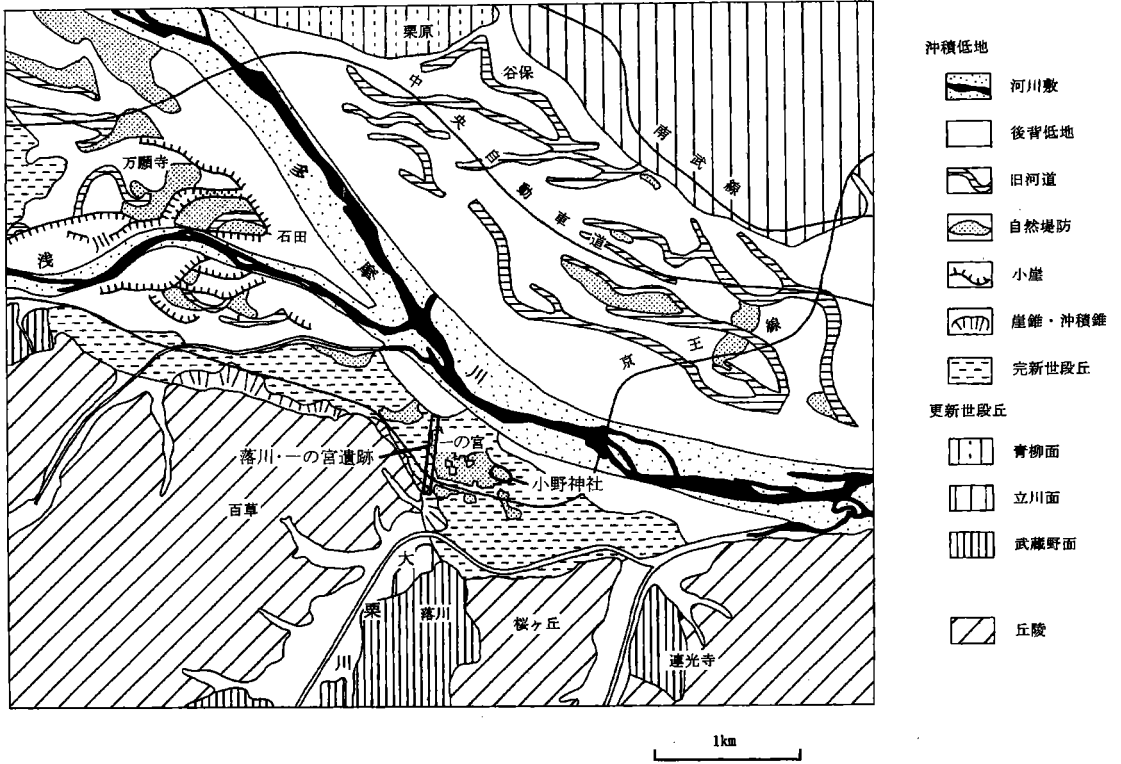


図2 落川一の宮遺跡周辺の地形分類  
 <(高野ほか, 1999) による>

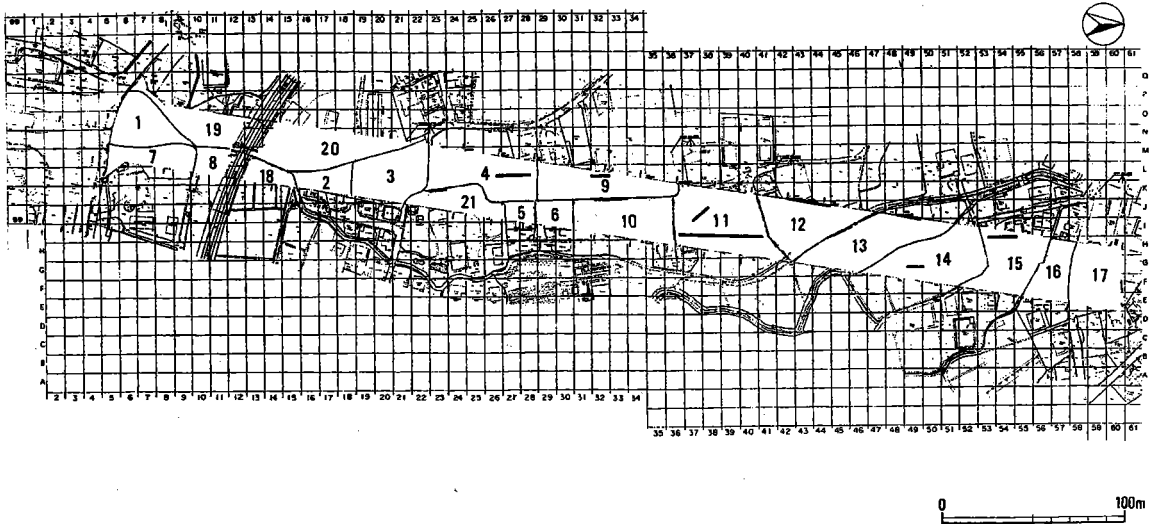


図3 遺跡調査地点区画図  
 <(高野ほか, 1999) による>

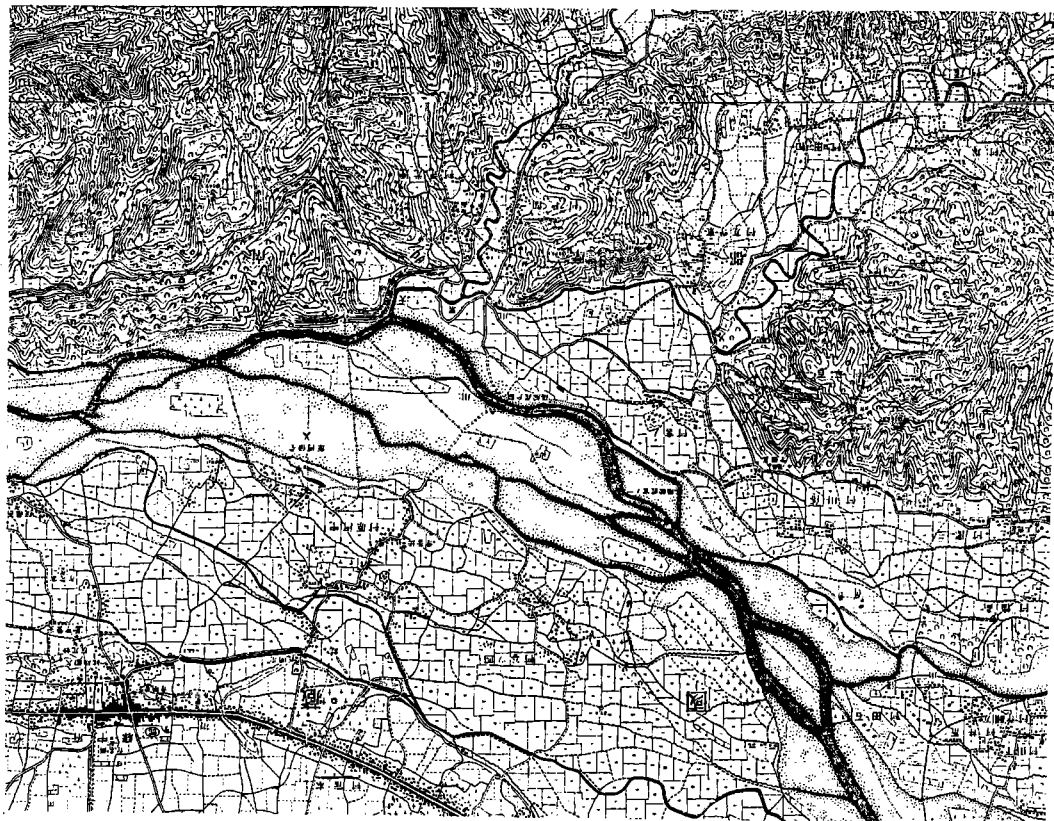


図4 明治20年代2万分の1迅速図  
 (「府中駅」明治27年発行,「小野路村」明治26年発行)

旧河道は完新世段丘面上を除き広い範囲に見られる。多摩川左岸部には網状流路のような旧河道が見られ、これは多摩川の流路跡であり、万願寺付近の旧河道は伸長方向から浅川の流路跡と見られる(高野ほか,1999)。日野市新井・万願寺付近の沖積低地には、比高50cm~1.5mの小崖が発達し、これらの小崖は浅川の流路の方向とほぼ平行することから、浅川の浸食により形成されたものと考えられる(高野ほか,1999)。日野付近から一の宮付近にかけて、氾濫原より高い完新世段丘群が分布している。

落川・一の宮遺跡付近の詳細な地形区分図を図5に示す。周辺の地質断面図を図6に示す。沖積面は小崖により高い方から落川1面、落川2面、落川3面、落川4面に区分される(高野ほか,1999)。落川1、2、3面は完新世段丘面、落川4面は現氾濫原である。落川・一の宮遺跡は落川1面、落川2面上に立地する。これら沖積面を構成する地層は、落川層と呼ばれ、基盤の上総層群を不整合に覆い、I~V層に区分されている(図7)。

I層は落川・一の宮遺跡南部に分布し、層厚2m以上の淘汰の悪い亜円ないし亜角礫か

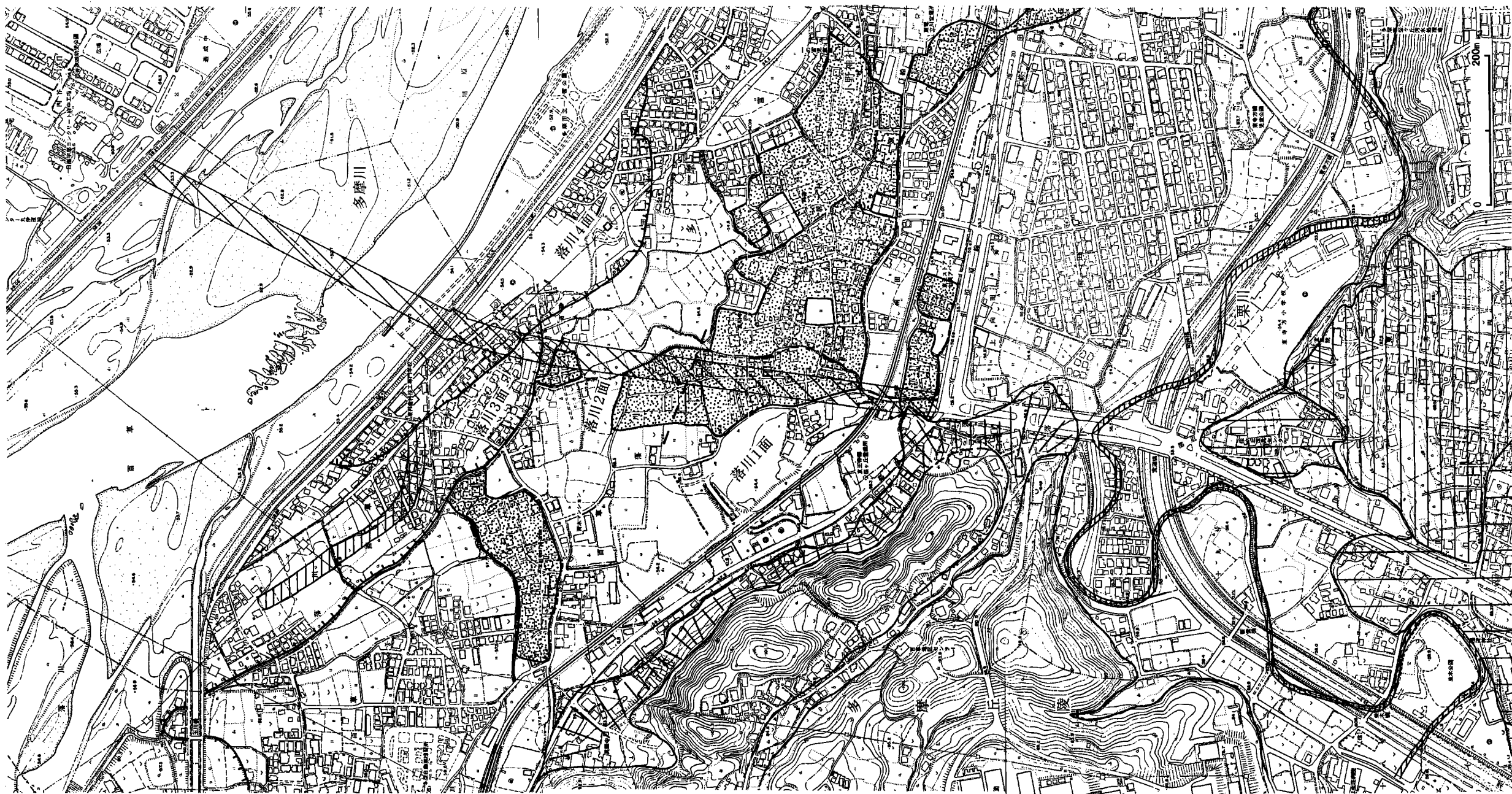


図5 落川一の宮遺跡周辺の地形区分図  
 < (高野ほか, 1999) による >

- 自然堤防
- 後背低地・谷底平野
- 旧河道
- 立川面
- 武蔵野面
- 崖線
- 小屋
- 道路計画路線

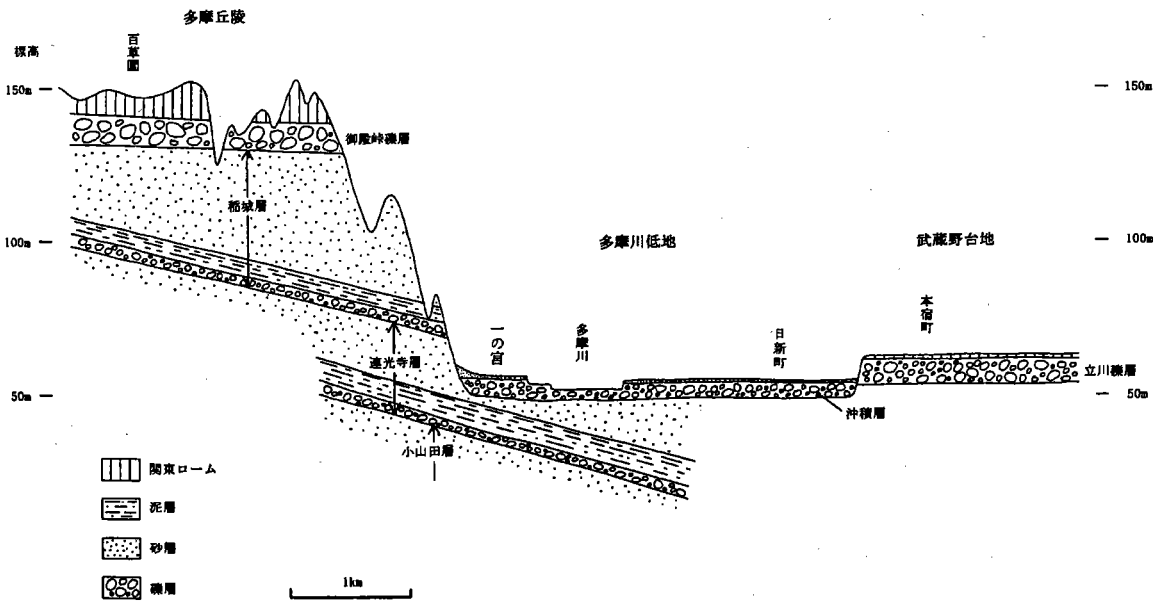


図6 落川一の宮遺跡周辺の地質断面図  
 <(高野ほか, 1999) による>

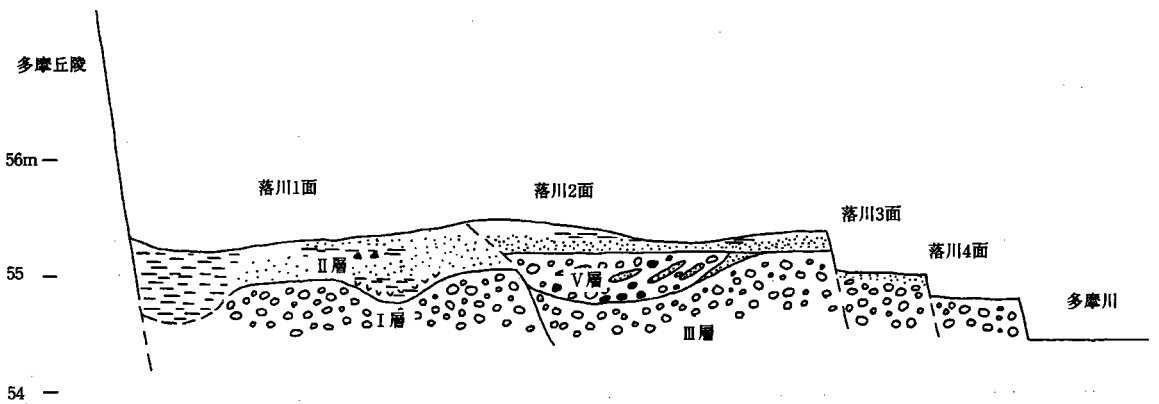


図7 落川層  
 <(高野ほか, 1999) による>

らなり、礫径は平均10~15cm、最大30cmに達する。礫種は秩父系の砂岩・チャートを主とし、閃緑岩・頁岩がまれに見られる。このような層相は現在の多摩川の河床礫と類似しており、I層はかつての河床堆積物と考えられ、I層中に挟在する泥炭層の<sup>14</sup>C年代が2,310±60yrs. BPと測定されていることから、I層は縄文時代後期頃の堆積物と考えられる(高野ほか, 1999)。

Ⅱ層は遺跡南部の地表付近に堆積し、主に砂層と泥層から構成されるが、礫の混じる部分や、火山灰質の部分があるなど層相の変化に富み、第10調査地点と第20調査地点には凹地を埋積するように泥層が堆積し、第20調査地点では、流水生や沼沢地生の珪藻化石が産出することから、この泥層は後背低地の堆積物と考えられ、第4調査地点から第9調査地点にかけての比較的広い範囲では、泥層を挟んだり礫を交える砂層からなり、この部分は地形的に微高地となっていることから、この砂層は自然堤防の堆積物と考えられる（高野ほか、1999）。

Ⅱ層からは縄文時代晩期の土器が産出し、第4調査地点では弥生時代の火山灰である新規富士火山灰S-23に対比されるスコリア層が挟まれることから、Ⅱ層は縄文時代晩期から弥生時代にかけての堆積物と推定される（高野ほか、1999）。

Ⅲ層は層厚3m以上の砂礫層からなり、第12調査地点以北に分布し、淘汰の悪い最大15cm程度、平均5cm程度の亜円ないし亜角礫からなり、礫種は秩父系の砂岩が最も多く次いでチャートが多く含まれ、閃緑岩・頁岩が少量含まれることから、Ⅲ層は河床堆積物と推定される（高野ほか、1999）。第14・15調査地点では本層から古墳時代前期および中期の土器が出土し、土器は磨耗しており、礫とともに河川によって運搬されたものであることから、Ⅲ層は古墳時代中期の堆積物と考えられる（高野ほか、1999）。

Ⅳ層はⅢ層上面の谷地形を埋めるように堆積し、第12調査地点付近から第15調査地点にかけて観察され、層厚は最大で3m程度での附加帯状に堆積する砂層・砂礫層からなる（高野ほか、1999）。砂層はおもに中粒ないし粗粒砂からなり、クロスラミナが発達する（高野ほか、1999）。砂礫層は最大礫径10cm、平均3cm程度であり、マトリックスは泥質である（高野ほか、1999）。本層中、特に礫層中にはシルトブロックが多く含まれ、粒径は10cm～20cmのものが卓越、最大50cmに達し、落川層の砂礫層にまれに含まれる上総層群の泥岩礫よりかなり軟質であることから、このシルトブロックは落川層Ⅱ層起源と考えられる（高野ほか、1999）。砂層に発達するクロスラミナおよび礫のインブリケーションから推定される古流向はほぼ北から南を示す（高野ほか、1999）。Ⅳ層からは古墳時代中期および後期の土器が出土し、Ⅲ層に含まれるものと同様河川によって運搬されたものであることから、Ⅳ層は古墳時代後期の堆積物と考えられている（高野ほか、1999）。

Ⅴ層はⅢ層およびⅣ層を覆ってほぼ水平に堆積し、層厚は3mであり、シルト層およびシルト質砂層からなり、砂層は粗粒砂からシルト質の細粒砂まで様々でありクロスラミナの発達することがあり、泥層は植物の破片や細礫を伴うことがあることから、Ⅴ層



は自然堤防および氾濫原の堆積物と考えられる（高野ほか, 1999）。なお本層の地表部付近は、耕作や土木工事などにより人為的に攪乱され本来の堆積構造が失われていることが多い（高野ほか, 1999）。V層から産出した炭片の年代が1,000±60yrs. BPと測定されていることや、V層上には平安時代以降の住居跡がみられることなどから、本層は平安時代前期ないし中期に堆積し、平安時代には多摩川の流路が北へ移動し、本遺跡付近に多摩川の洪水の影響が直接及ぶことは少なくなったものと推定されている（高野ほか, 1999）。

落川1面および落川2面は落川・一の宮遺跡付近では最も高い段丘面であり広く分布している。海拔高度は55m～57mであり、現河床との比高は約5mである。発達高度から、日野台地下のL1面（島津ほか, 1994）＝栄町面（角田, 1989）に対比され、自然堤防が点在し、その多くは多摩川の氾濫により形成されたものと考えられるが、落川刑札場遺跡が立地する自然堤防は、東から東北東に伸びることから浅川が形成したのものである可能性がある（高野ほか, 1999）。落川1面から縄文時代晩期の土器が出土することから、この時期にはほぼ段丘化していたものと考えられる。

落川2面を構成する堆積物からは磨耗した古墳時代の土器が産出し平安時代の住居跡が検出されている。従って、落川2面は古墳時代から奈良時代にかけて段丘化したものと推定される（高野ほか, 1999）。

落川3面は落川1面とは比高1m～2mの小崖で境され、日野台地下のL2面（島津ほか, 1994）に対比されると考えられる（高野ほか, 1999）。落川1面を削剥してできた浸食段丘的性格を持ち、落川3面上から江戸時代末期の遺物が産出していることから、この時期までに段丘化したものと考えられる。

落川4面は現氾濫原であり、落川3面とは1m程度の小崖で境され、日野台地下のL3面（島津ほか, 1994）に対比される（高野ほか, 1999）。明治40年代の地形図では堤外地であり、昭和20年代の地形図では堤内地となっていることから、この間に堤防が築かれたものとみられる（高野ほか, 1999）。

以上の点から、古墳時代後期頃比較的規模の大きな洪水が発生し、多摩川の側方浸食により落川1面が削剥された。それにより落川1面上にあった遺跡から土器が流されたものと推定されている（高野ほか, 1999）。

完新世の多摩川は、最終氷期に形成された段丘と多摩丘陵に規制を受け、扇状地を形成することはできないが、門村（1961）に指摘されたように、落川・一の宮遺跡を含め、福生一溝ノ口間低地は、扇状地性堆積物からなる砂礫堆と網状流路跡からなっている。

中山(1981)は、扇状地が特定の流路によって形成されたのではなく、洪水流路における堆積と、二つの堆積地の接合部を侵食するように流れる低水路との組み合わせを一単位とする高まりが、いくつか集まってでき、二つの高まりがかなり高いと、その接合部の低いところをぬって洪水流が流れ、扇状地を次第に埋積していくと推定した。

第11調査地点付近以南では、砂礫堆の形成が縄文時代晩期末葉以前になされ、砂礫堆間凹地の埋積進行が南部より開始され、古墳時代前期以降には、第11調査地点付近に埋積がおよび、古墳時代中期以降に洪水流の洗礼を受けた後再び埋積が進行し、奈良時代にはほぼ埋積が終了したと考えられ、落川1面は、網状河川帯に発達する砂礫堆の埋積によって形成された「扇状地」が多摩川の下刻によって、段丘化したと推定されている(高野ほか, 1999)。

第12調査地点付近以北では、古墳時代までは多摩川の流路となり、埋積進行期であり安定した環境下になかったと推定されることから、住居等の遺構は構築されなかったと思われる。奈良時代に入り、埋積の終了と段丘化により、初めて住居が構えられるようになったと推定される(高野ほか, 1999)。

即ち、現在の京王線より北側は、縄文時代晩期以降から古墳時代にかけて、洪水氾濫の直接的影響下にあり、埋積が進行するとともに、古墳時代中期～後期に強い洪水流によって一部浸食され、古代・奈良時代には段丘化によって、多摩川は北にシフトしたと推定される。

### 3. 調布染地における洪水氾濫

多摩川左岸の調布市染地付近には、東西約1,100m、南北約300mをはかり全体で「染地遺跡」と呼ばれる古代の遺跡が分布している。染地付近は地形的にみると、多摩川が立川段丘を大きく側方浸食したと推定される部分であり、古代においては多摩川の洪水氾濫は直接的には及んでいなかったと推定されるが、古代以前の遺跡は従来検出されていなかった。1999年に「染地遺跡」の北西部の立川段丘崖の南に位置する調布市染地で、遺跡発掘(染地遺跡第26地点)がなされた。染地遺跡第26地点は南北に形成された沼沢湿地に挟まる微高地にある(坂本, 1999)。微高地は現在の西北西から東南東に伸びる自然堤防に連続すると思われる。微高地=自然堤防上には、律令時代あるいはその直前ごろの4軒の住居址や鍛冶工房などが検出されている(坂本, 1999)。微高地=自然堤防は下位より砂礫層、灰色粘土層、黒褐色有機質粘土層、灰色粘土層から構成され、下位の黒褐色有機質粘土層からは、「染地遺跡」では初めて縄文時代晩期の遺跡が検出され

た（坂本, 1999）。

染地遺跡第26地点の北西約200mの立川面上には縄文時代晩期の国史跡「下布田遺跡」があり、その南の段丘崖下の黒褐色有機質砂質粘土層では、2001年春に縄文時代晩期の遺物包含層が検出されている。以上から、下布田から染地西方の沖積低地は、縄文時代晩期には多摩川の直接的影響を受けない湿地的環境下にあり、その後弥生時代から古墳時代にかけて、洪水流の影響を受け自然堤防の形成が進み、古代に至って、多摩川は南にシフトし、自然堤防と立川段丘との間には湿地が形成された可能性が示唆される。

#### 4. まとめ

阪口 豊（1984）は尾瀬ヶ原の泥炭層の花粉分析から、過去7600年間の古気温変化を推定し、240年～732年までの寒冷期を古墳寒冷期と呼んでいる。古墳寒冷期は古墳時代前期末の390年の一時的な中休みを境に、2期に区分され、270年と古墳時代後期初頭の510年に寒冷のピークがみられ、世界的にも過去7600年間でもっとも長く厳しい寒冷期であり、低温の規模において1296年以降の小氷期をしのぐとしている（阪口, 1984）。さらに、甲府盆地や新潟県浦佐などでの橋脚工事、遺跡発掘調査などから、弥生後期から古墳時代にかけて、住居を破壊したり泥炭地を埋積するような洪水が起こり、古墳時代は洪水の頻発する寒冷多雨気候であったと推定している（阪口, 1984）。

多摩川右岸の日野低地、落川・一の宮遺跡では、縄文時代晩期以降から古墳時代にかけて、河川による自然堤防間凹地の埋積が進行し、古墳時代前期や中後期に浸食を伴う強い洪水流の流下があったと推定され、調布染地では弥生時代から古墳時代にかけて自然堤防の形成が進行したと推定されるが、阪口（1984）の洪水の頻発する寒冷多雨気候という推定と気候環境は調和的である。

#### 謝 辞

本報告をまとめるにあたり、東京都教育庁生涯学習部文化課学芸員の芹沢廣衛氏、福田健氏、落川・一の宮遺跡調査会の園村維敏氏には、遺跡発掘現場での調査等で多大なご協力を頂いた。ここに厚く感謝いたします。

## 引用文献

- 町田瑞男（1984）日野台地の段丘面について. 埼玉県立自然史博物館研究報告, 2, 99-100
- 中山正民（1981）扇状地地形論考－扇状地形成論と黒部川扇状地－. 黒部川扇状地地域社会研究所紀要「黒部川扇状地」, 5, 22-34
- 阪口 豊（1984）日本の先史・歴史時代の気候－尾瀬ヶ原に過去7600年の気候変化の歴史を探る－. 自然, 5, 18-36
- 坂本一男（1999）水辺の古代の村, 現る！－染地遺跡第6地点の発掘調査から－. 調布の文化財, 26, 1-3
- 島津 弘・須貝俊彦・久保純子・岩船昌起・春山成子（1990）南広間地遺跡および周辺の自然環境. 日野市埋蔵文化財発掘調査報告11, 南広間地遺跡3, 214-228
- 島津 弘・久保純子・堀 琢磨（1994）南広間地遺跡を中心とした多摩川浅川合流低地の形成過程. 日野市埋蔵文化財発掘調査報告19, 南広間地遺跡4212-221
- 高野繁昭・増渕和夫（1999）遺跡の立地. 落川・一の宮遺跡 IV -自然科学-, 落川・一の宮遺跡 日野3・2・7号線調査会, 5-53

### Ⅲ 近世洪水史にみる多摩川の洪水特性と環境変動

増 渕 和 夫・藤 澤 正 一

#### 1. はじめに

河川が洪水氾濫を起こすのは自然現象であるが、水害はそのすべてが自然現象とはいえない。特に現代においては、内水型氾濫に顕著であるが、人為によることが明らかなものも存在する。洪水氾濫が発生してもそこに被害が生じなければ、水害は「発生」しない。近世以降の多摩川の洪水氾濫自然史を明らかにするのが、本報告の第一の目的であるが、地質学的には極めて短い期間であるがゆえに、地形や地質からこの目的を達成させるのは困難であり、文書記録に重点を置かざるをえない。その文書記録の多くは、水害の記録である。ここに既に本報告の目的と結果とに避けることの出来ない乖離が生じている。しかし、近年多摩川流域の市町村などからは、近世の様々な日記類の刊行が相次ぎ、これら日記類には必ずしも水害でない、洪水氾濫の記録が散見する。例えば、八王子市の「石川日記」や福生市の「多摩自慢石川酒造文書」などにみられる、ただ「出水」や「大水」などとあり被害の記載されていない記述は、水害でない洪水氾濫と考えられる。本報告ではこれら日記類の記述を積極的に活用した。そのため、従来の「多摩川誌」（多摩川誌編集委員会、1986）やとうきゅう環境浄化財団（1977）による洪水年表と比較し、発生件数は倍加した。但し、他の河川と比較を行う上では、比較を行った河川の洪水氾濫記録が水害のものであるので、多摩川についても同様に水害記録のみを使用した。なお、本報告では「水害」を用いず、その直接的意味を明らかにするために、「被害洪水」を使用した。

#### 2. 年代

年代については、下限は記録に制限され、上限は連続高堤防や河道の直線化に代表される近・現代的治水が施される前までの、近世以来の旧堤が設けられ、自然河川に近い多摩川が存在している段階前までとした。具体的には、1550年（天文19年）から1925年（大正14年）までの376年間が本報告の対象とした年代である。この時代には、渡船事故などの一部事例を除けば、人災は少なく、渡船事故からも洪水氾濫が起きたことは明らかである。また、「被害洪水」とは洪水氾濫のうち、規模の大きなものともいえる。

### 3. 対象地域

収集した文書記録に制限され、青梅から左岸大田区、右岸川崎市域の河口部までを対象とした。洪水氾濫を受ける地域は基本的には低地部である。低地を構成する地層は、沖積層で、河川下流域はほとんど更新世末期の七号地海進期、及び完新世の有楽町海進（縄文海進）期の海成層の二段重ね構造からなっている。門村（1961）は多摩川低地-沖積平野の地形地域区分を行い、上流部の福生～溝口間は網状流跡と砂礫堆の組み合わせパターンからなる扇状地性平野、中流部の溝口～鹿島田間は自然堤防と後背湿地の組み合わせパターンからなる自然堤防型平野、鹿島田より下流部は自然堤防・砂州と後背湿地の組み合わせパターンからなるデルタ平野としている。（以後、上流部、中流部、下流部は特別のことわりのない場合は、門村（1961）の低地地形区分により、上流山地部は内田（1979）による。）福生より上流は、上流山地部にあたり、その下流が下流デルタ平野部となる（内田，1979）。上流山地部は、青梅付近を境界に、山地とそれに付随する台地と深い谷の最上流部のパターンと、これより下流の丘陵と台地及び河原のパターンの二つに区分される（内田，1979）。多摩川は上流山地部より扇状地を欠いて、直接、下流デルタ平野部へと移行するという特徴をもっていることになる。内田（1979）は扇状地を欠く理由として、多摩川が山地・丘陵・台地にはさまれて、扇状地を形成するだけの平面的スペースを欠いていることを挙げている。対象地域最上流部の青梅市二俣尾は内田（1979）の上流山地部にあたり、さらにこれより下流の扇状地性平野、自然堤防型平野、デルタ平野（門村，1961）が対象地域として含まれる。一般的に山地とその下流の扇状地などの境界付近で大きく傾斜が遷緩する地点から下流で、洪水氾濫が発生することから、本報告ではほぼ洪水氾濫全域を対象としているといえる。図1に対象地域を示す。

### 4. 洪水発生件数と頻度

1550年（天文19年）の多摩川左岸（これ以降断らない限りは、左岸、右岸は多摩川の左岸、右岸である）狛江市鎮守六明神流失を最初とし、1925年（大正15年）8月23日福生市熊川の出水まで、409件の洪水氾濫が現時点で明らかとなった。（月日は以後ことわりのない限り、太陽暦で示す。これらを多摩川洪水氾濫年表（表1）としてまとめた。年表には年代など文書記録が明確と認められるものは、通し番号を付け、不明なものはナンバーリングをしなかった。同一地域で同年中に発生し、1週間以上隔てて発生したものは、別の洪水氾濫として、異なる番号を付したが、前後の記述や他地域の記述から一連の霖雨などによると思われたものは、1週間以上隔てていても同一としている。従って、今後新たな

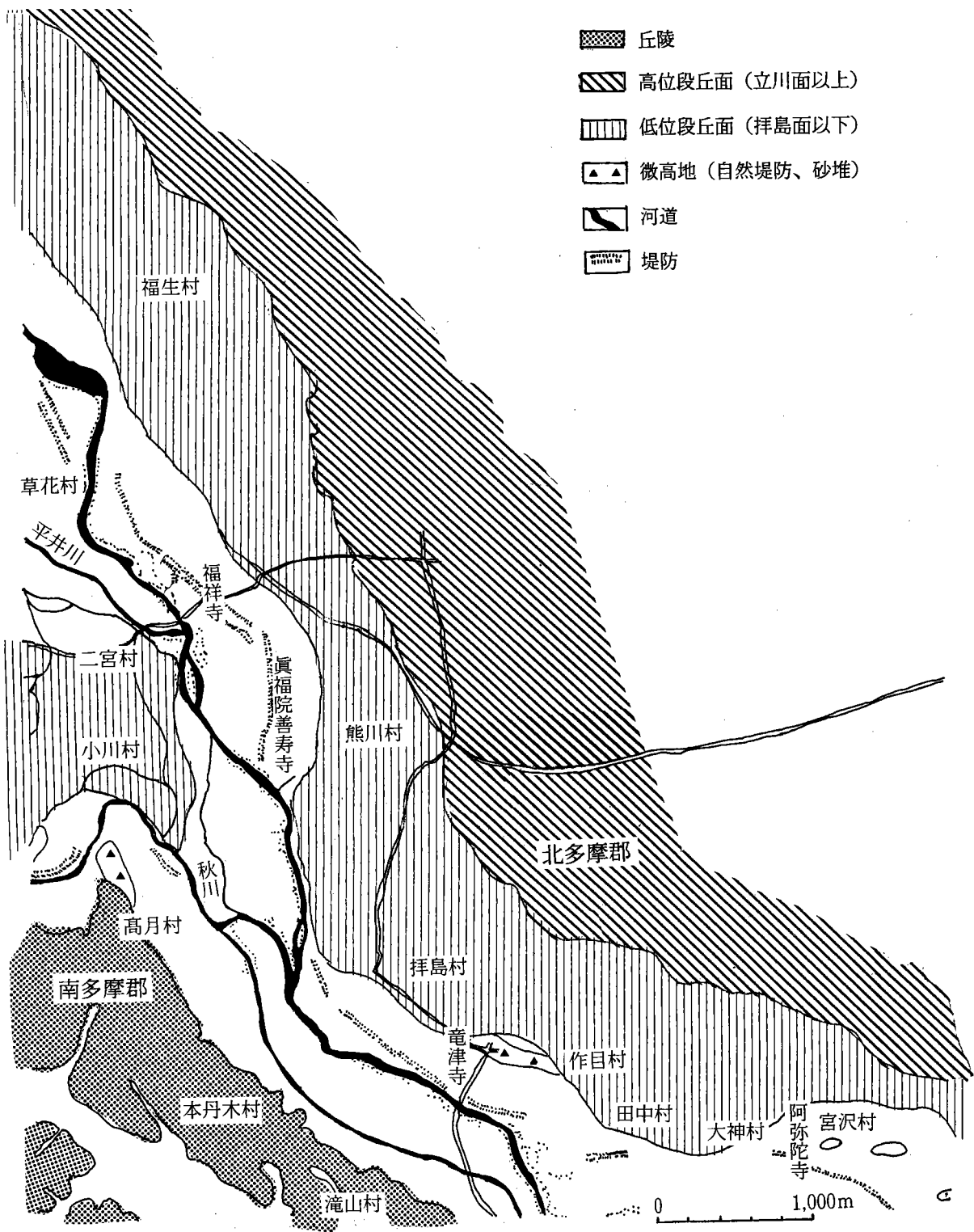


図1-1 調査対象区域 (明治13年陸軍迅速測図をもとに作成)

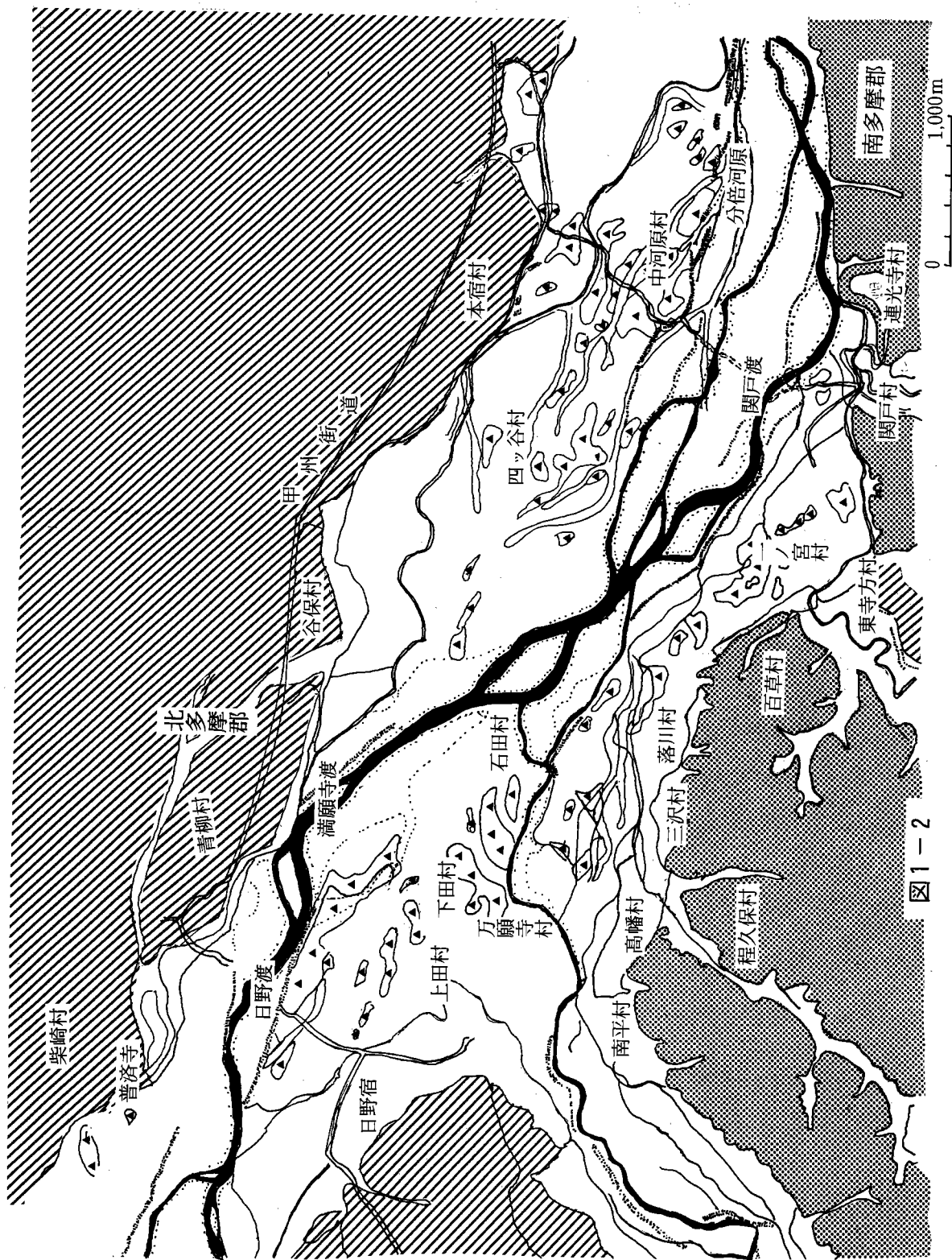


図1-2



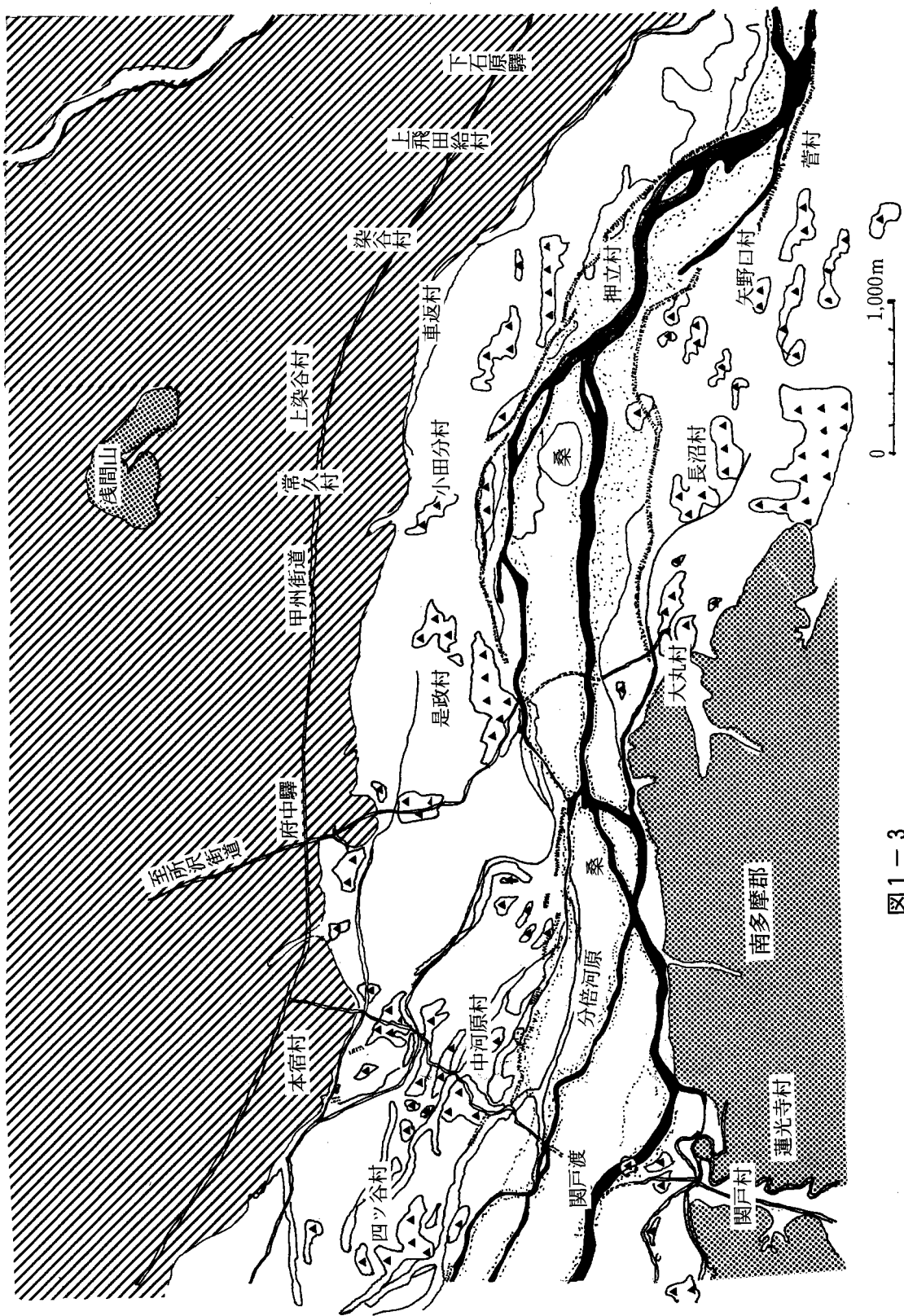


图 1-3

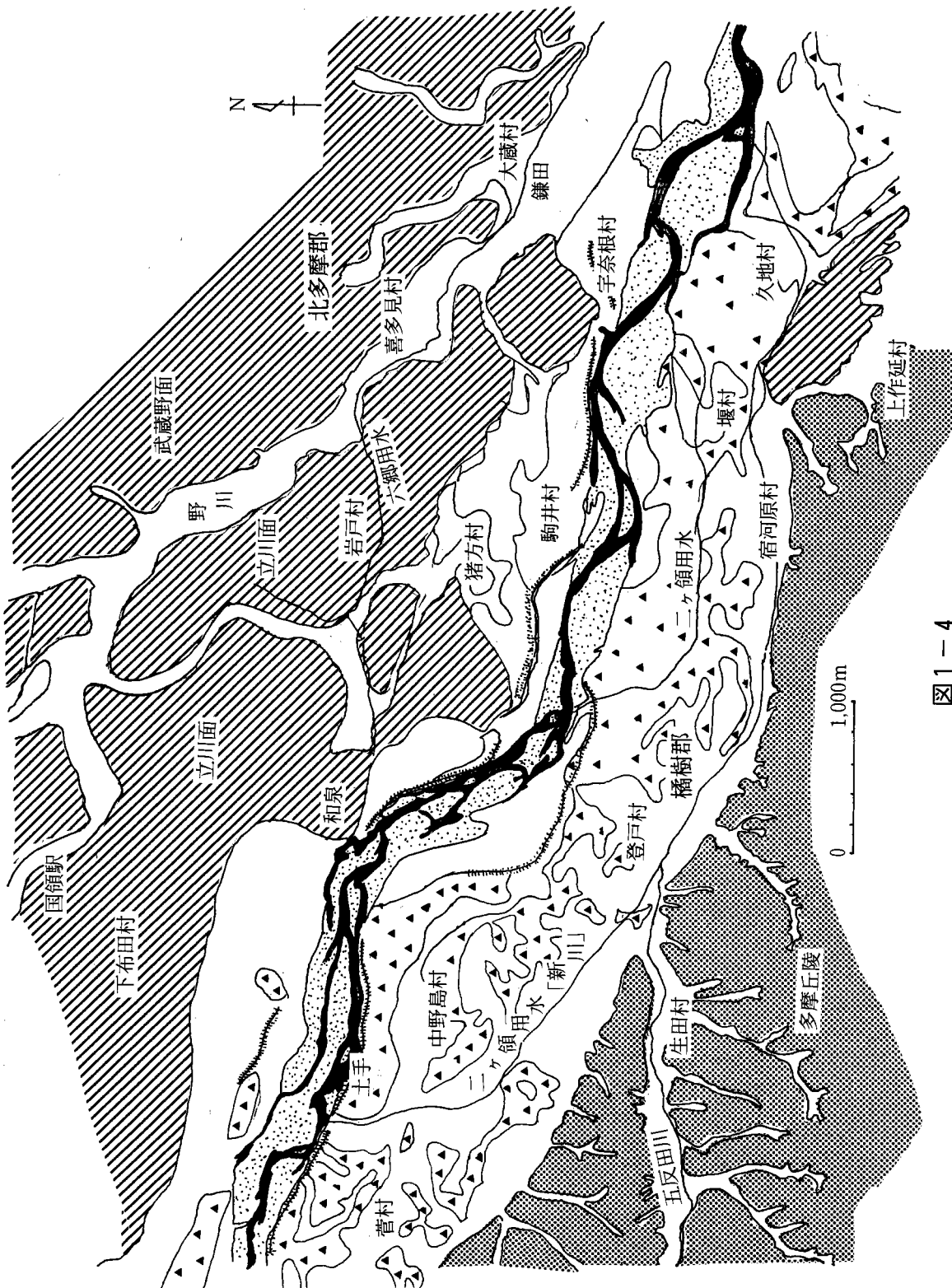
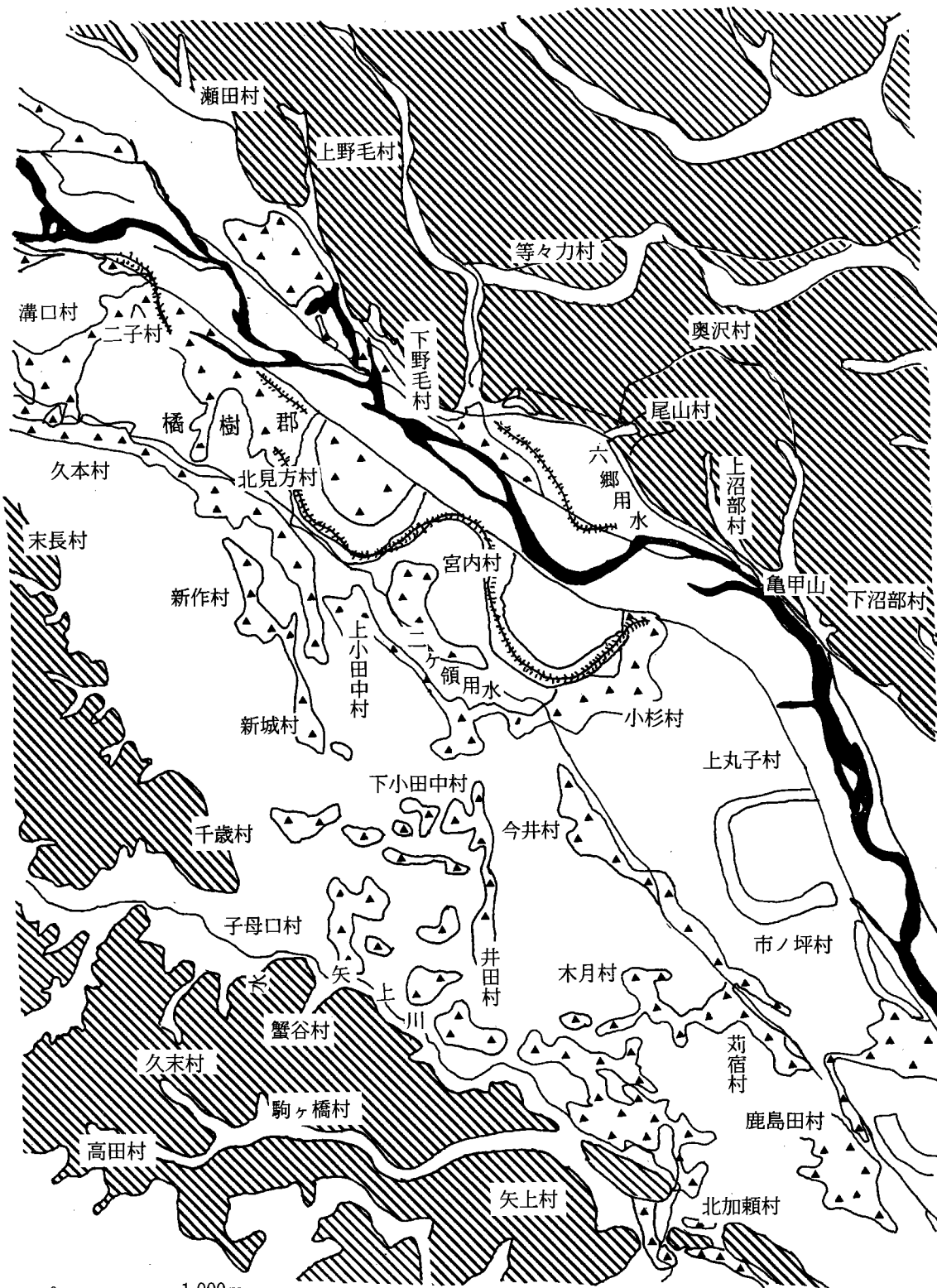


図1-4



0 1,000m

図 1 - 5

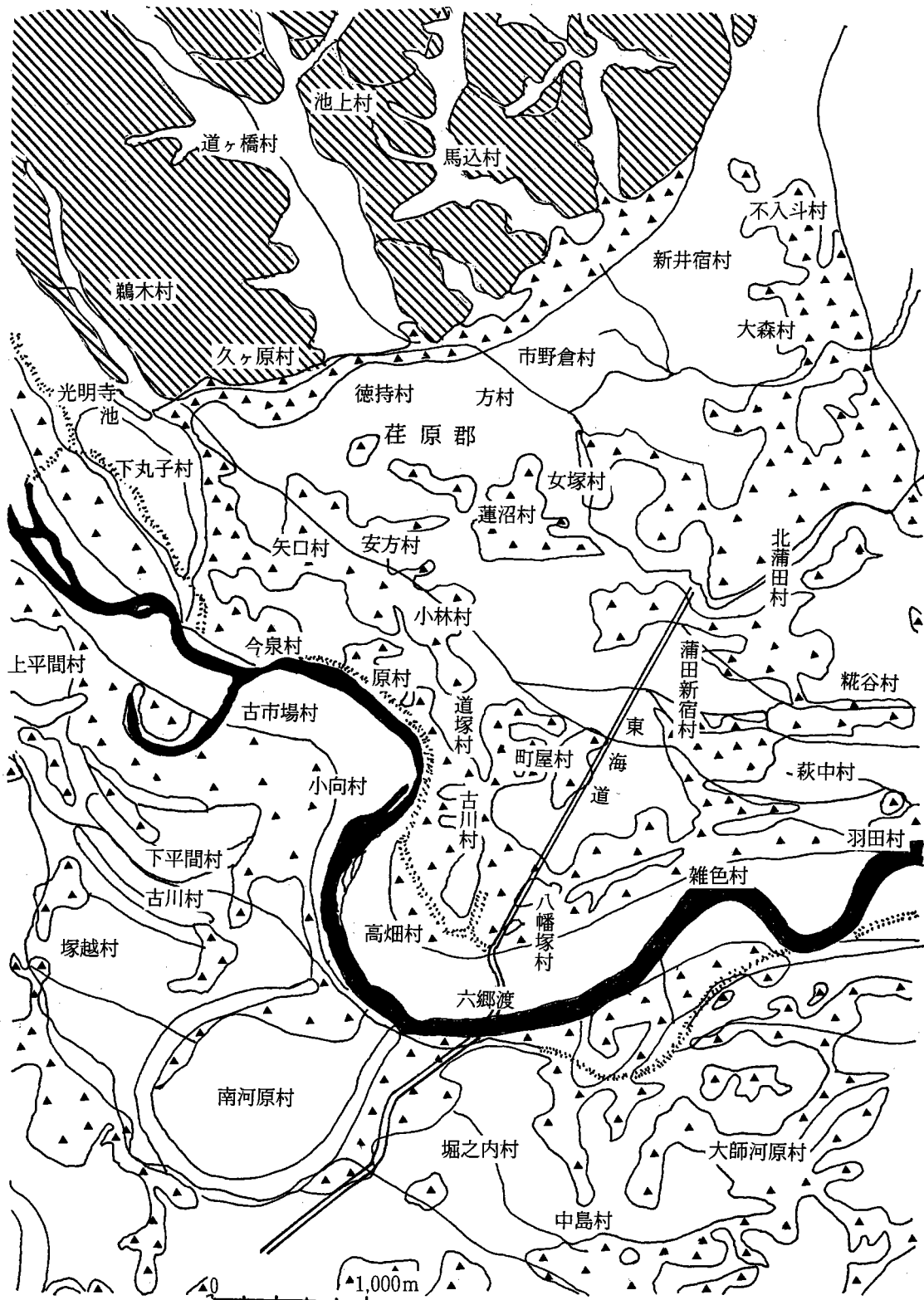


図1-6

文書の検出次第では、ナンバーリングは変更される余地がある。以下に検討考察する洪水氾濫は、主にこのナンバーリングされたデータについてである。年表中には、多摩川との比較のため、関東地方の利根川、荒川水系、及び東海型河川の大井川、富士川の「被害洪水」も合わせて掲載してある。地形地域は、「上山」は内田（1979）の上流山地部を、「上」、「中」、「下」は門村（1961）の網状帯、自然堤防帯、デルタ帯を示す。各洪水氾濫の洪水型は、明確な定義ではないが、建設省国土地理院（1963）の「河川洪水型」、「河川溢水型」、「内水氾濫型」で区分し、これら定義にあてはまらないが、被害のあるものは「川欠」、被害の記録のないものは「出水ほか」で分類した。今後の資料の充実により、洪水型は変更される場合もあると思われる。

1550年代から1920年代までの1年当たり洪水氾濫（全氾濫）数＝洪水氾濫頻度は、多摩川本流が1.09である。「被害洪水」頻度は0.62、「出水ほか」が0.47である。16世紀、17世紀については、洪水氾濫に関わる資料そのものが少なく、実際の洪水氾濫数は記録より多い可能性がある。18世紀以降（1700年から1925年までの226年間）のみを対象とすると、洪水頻度は「出水ほか」が0.77、「被害洪水」が0.93、全氾濫が1.70となり、1.5倍から2倍近くなる。多摩川本流の1.087という頻度は、まさに毎年のように洪水氾濫が起きていたことを示すが、「被害洪水」はその約半分である。

## 5. 洪水氾濫の経年変動傾向

### (1) 傾向

図2、3、4に、洪水年々変動を示し、図5、6、7に10年単位の洪水経年変動を示す。1728年、1822、1824、1828年、1835年、1836年、1968年、1870年、1906年、1907年に年6件以上の洪水氾濫（全氾濫）発生がみられる。「被害洪水」では、1721年、1722年、1728年、1739年、1772年、1791年、1822～1824年、1831年、1852年、1859年、1866年、1868年、1870年に3件以上の発生がみられ、1728年、1731年、1835年、1836年、1859年、1866年、1868年には4件、1822年には5件、1824年には6件発生している。洪水氾濫（全氾濫）は1596年、1731年、1791年、1822年、1859年、1868年、1906年、1915年に発生のピークがある。「被害洪水」は1596年、1728年、1731年、1722年、1791年、1834年、1835、36年、1859年発生のピークがある。

さらに、各年の洪水発生件数と、376年間の平均洪水件数との差（偏差）をとると（図8）、洪水氾濫変動傾向が明瞭となる。傾向的には、16～18世紀初頭にかけて、洪水氾濫件数は徐々に増加し、19世紀前半に極大を示した後、鋸歯状の変動を繰り返す。

1550～1925年までの10年単位の平均洪水氾濫と各年代の総洪水氾濫との偏差を図9に示す。

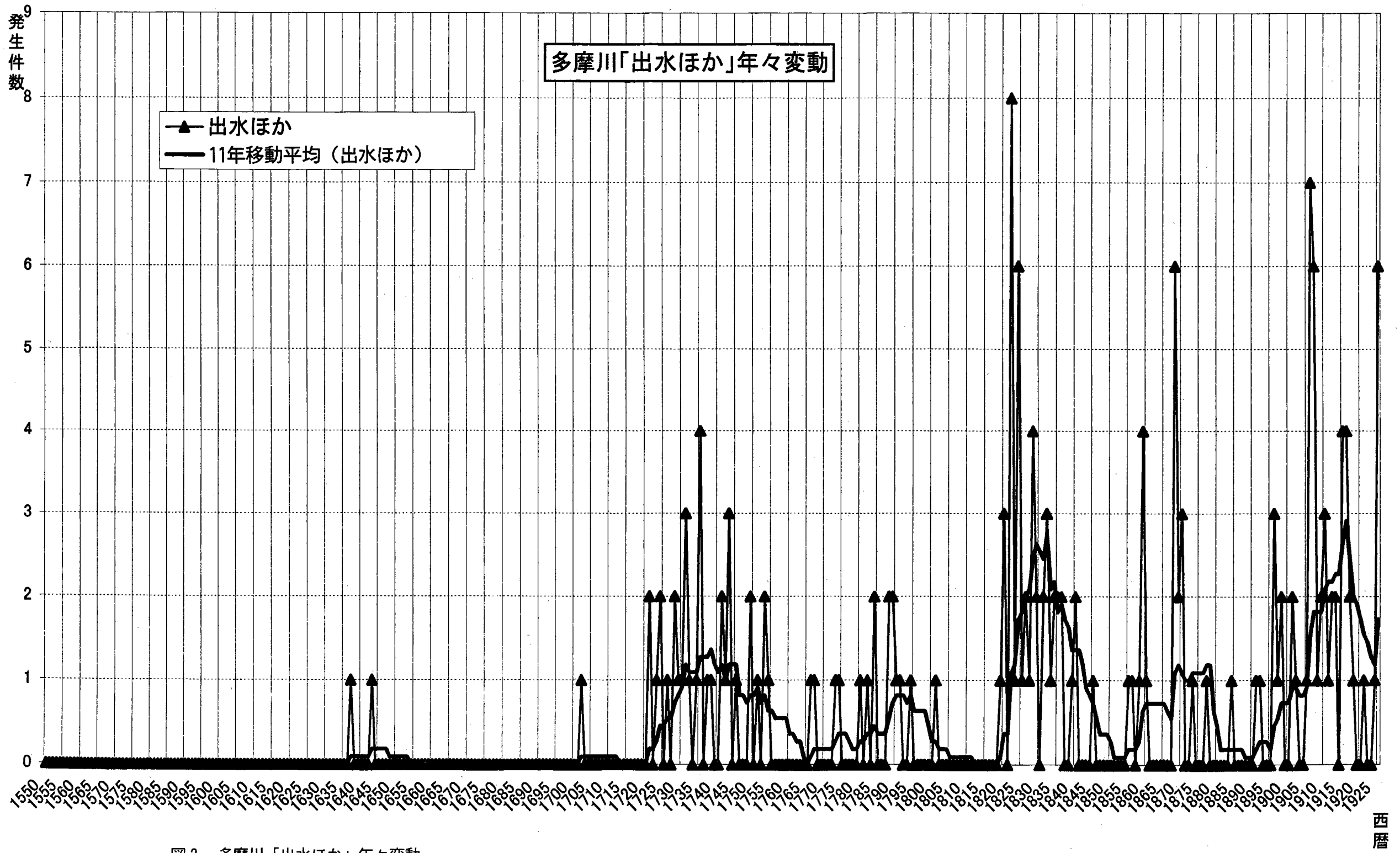


図2 多摩川「出水ほか」年々変動

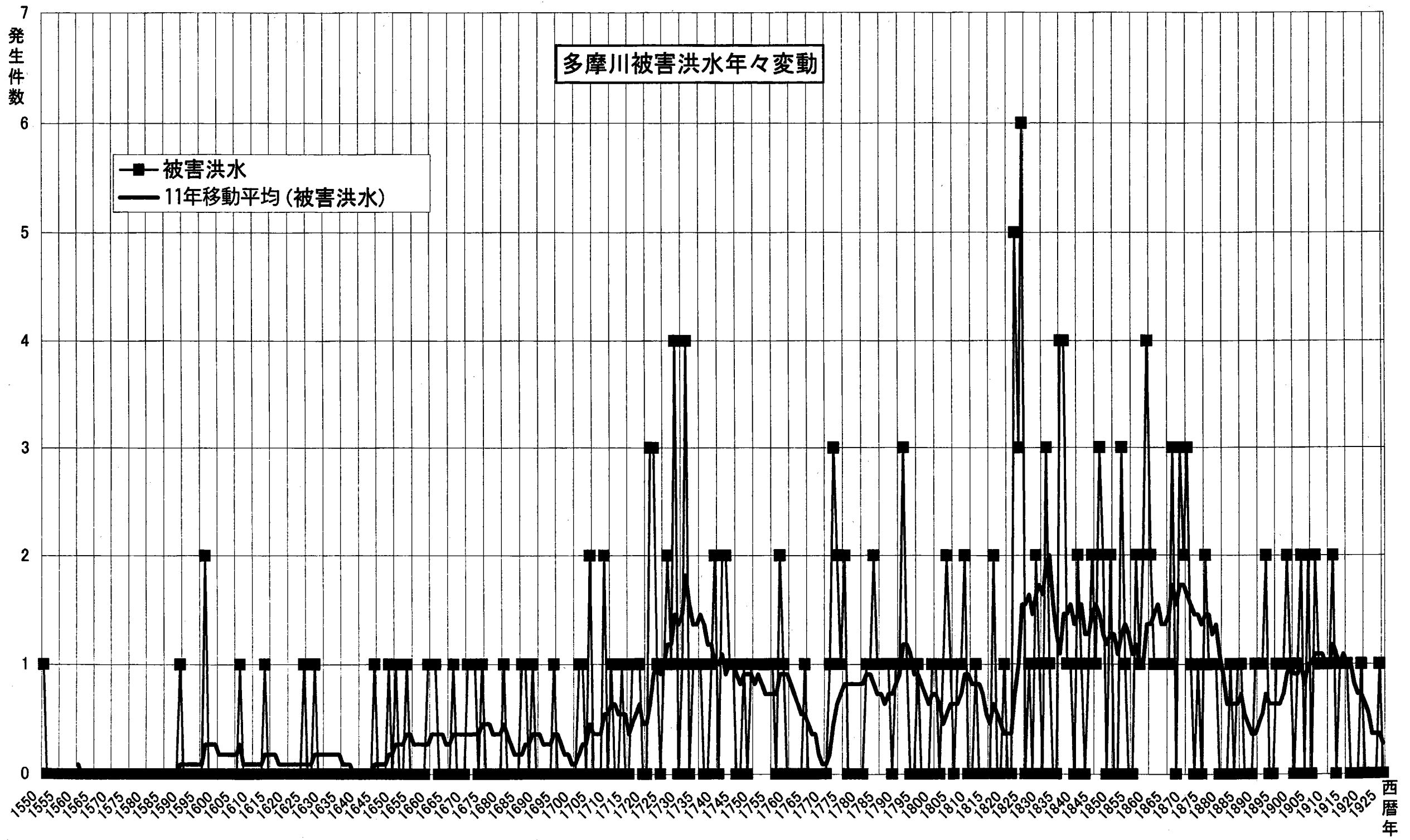


図3 多摩川「被害洪水」年々変動

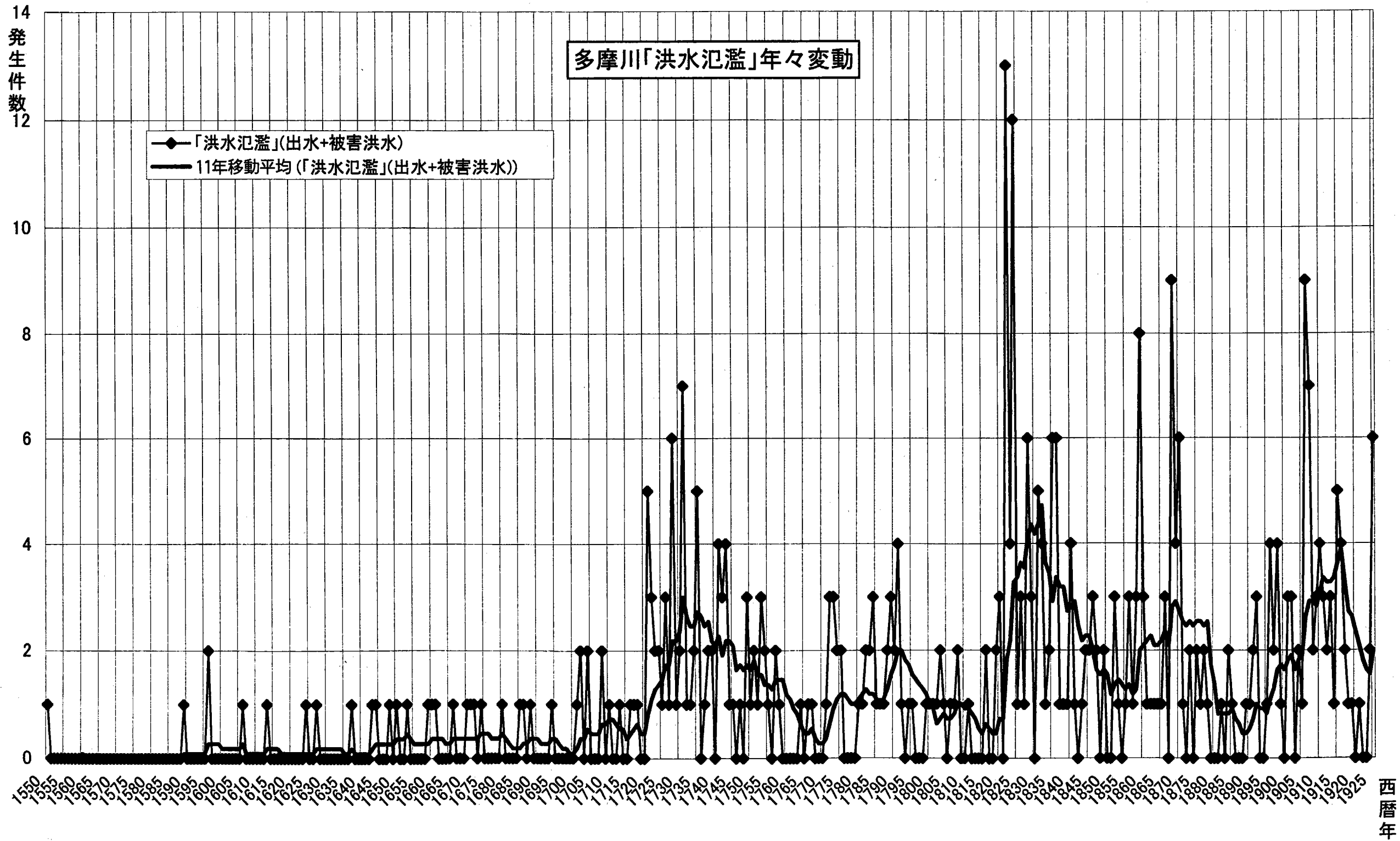


図4 多摩川「洪水氾濫」年々変動



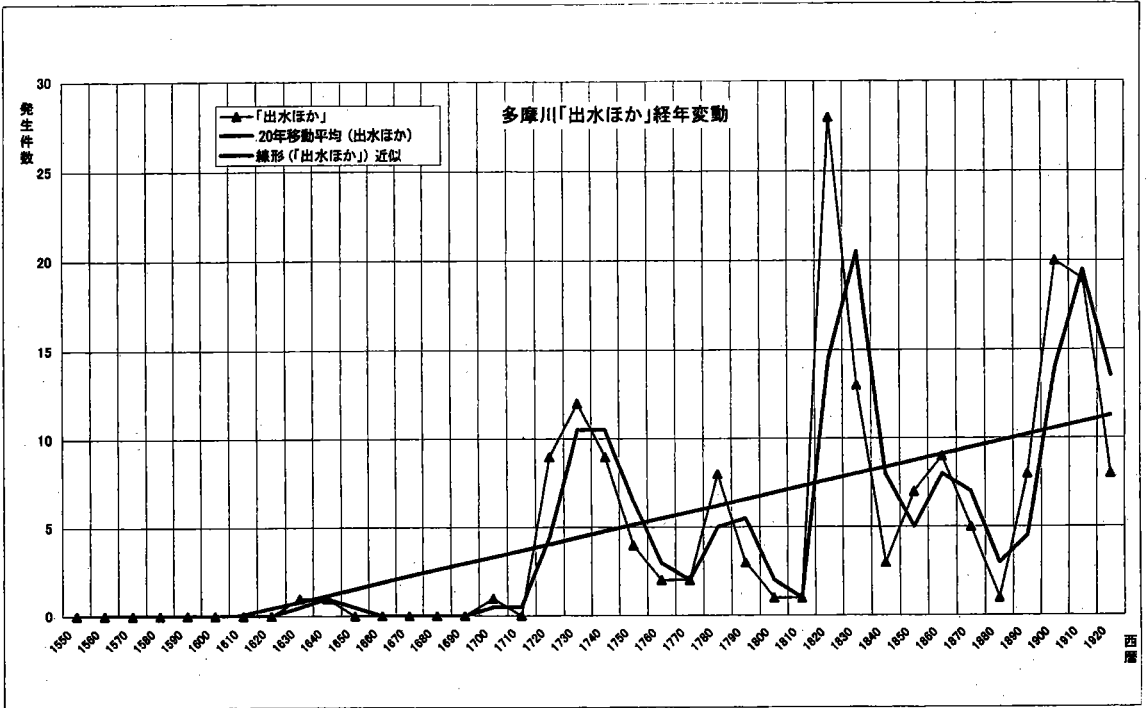


図5 多摩川出水経年変化

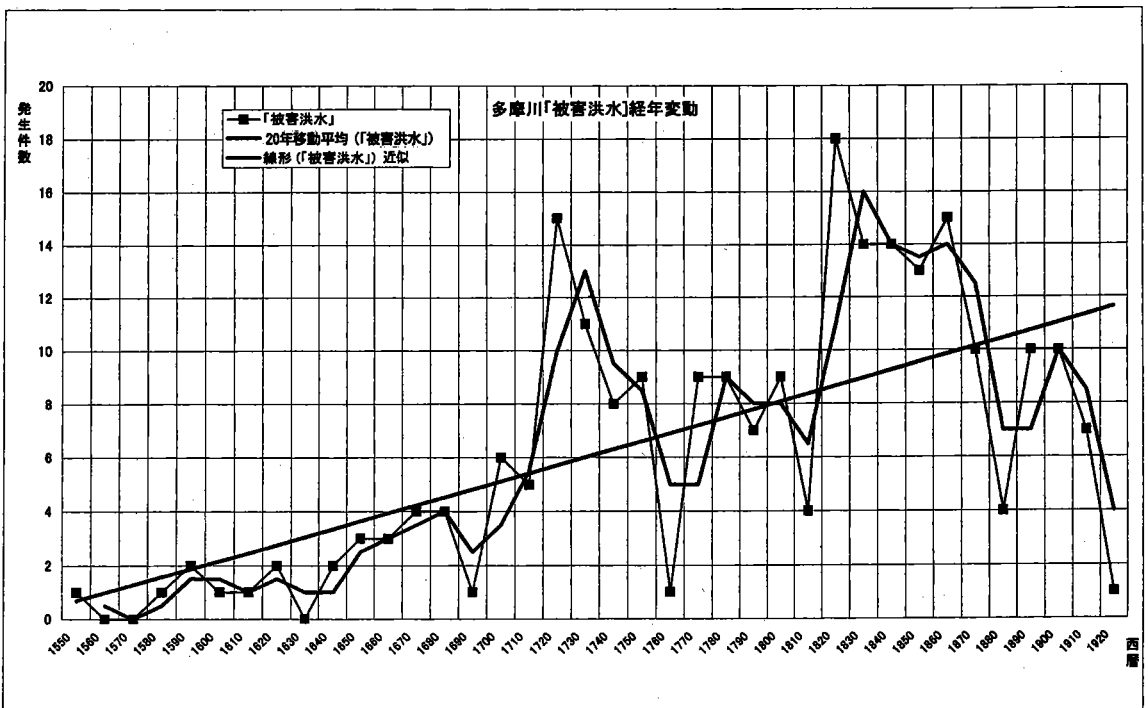


図6 多摩川被害洪水経年変化

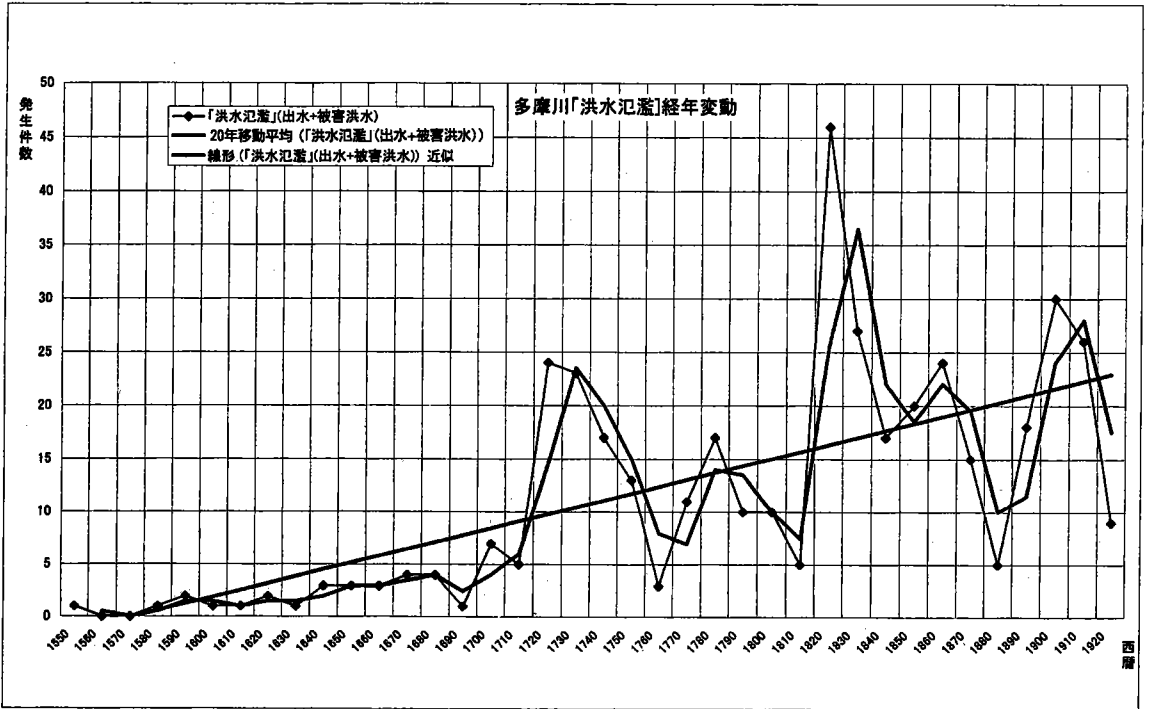


図7 多摩川「洪水氾濫」経年変動

洪水氾濫は16世紀から1710年代まで、平均以下の発生であるが徐々に増加傾向を示し、1720年代に急激に増加し、1760年代に平均数以下に減少した後、再び増加-減少し、1820年代に急増、以後減少-増加を繰り返しつつ、1920年代から減少する。ここで、平均以上の発生がある期間を洪水多発期と定義する。その逆を貧発期と定義する。

1700年代に弱いピークがあり、1720年代、1780年代、1820年代、1900年代をピークとする4つの洪水氾濫多発期（1720年代～1750年代、1780年代、1820年代～1870年代、1890年代～1910年代）がみとれる。

同様に、「被害洪水」についての偏差を図10に示す。1720年代～1750年代、1770年代～1800年代、1820年代～1870年代、1890年代～1910年代の4つの時期が「被害洪水」多発期となり、洪水氾濫の多発期と重なる。「被害洪水」も、17世紀までは発生件数は増減を2度繰り返しつつ少なく、18世紀からは大きな振幅で増減を繰り返しつつ増加し、19世紀後半から減少傾向になる。18世紀では1720年代が、19世紀では1820年代が極大期であり、増加傾向を示す18世紀において極小期の1760年代が目立つ。

図11に「出水ほか」「被害洪水」「洪水氾濫」の年代別変動を示すが、三者の変動傾向に差異はない。1820年代のように、「多摩自慢石川酒造文書」の詳細な記載により、「出水」件数が突出するなどの記録上の偏りと思われるものがあるが、「出水ほか」と同様に「被

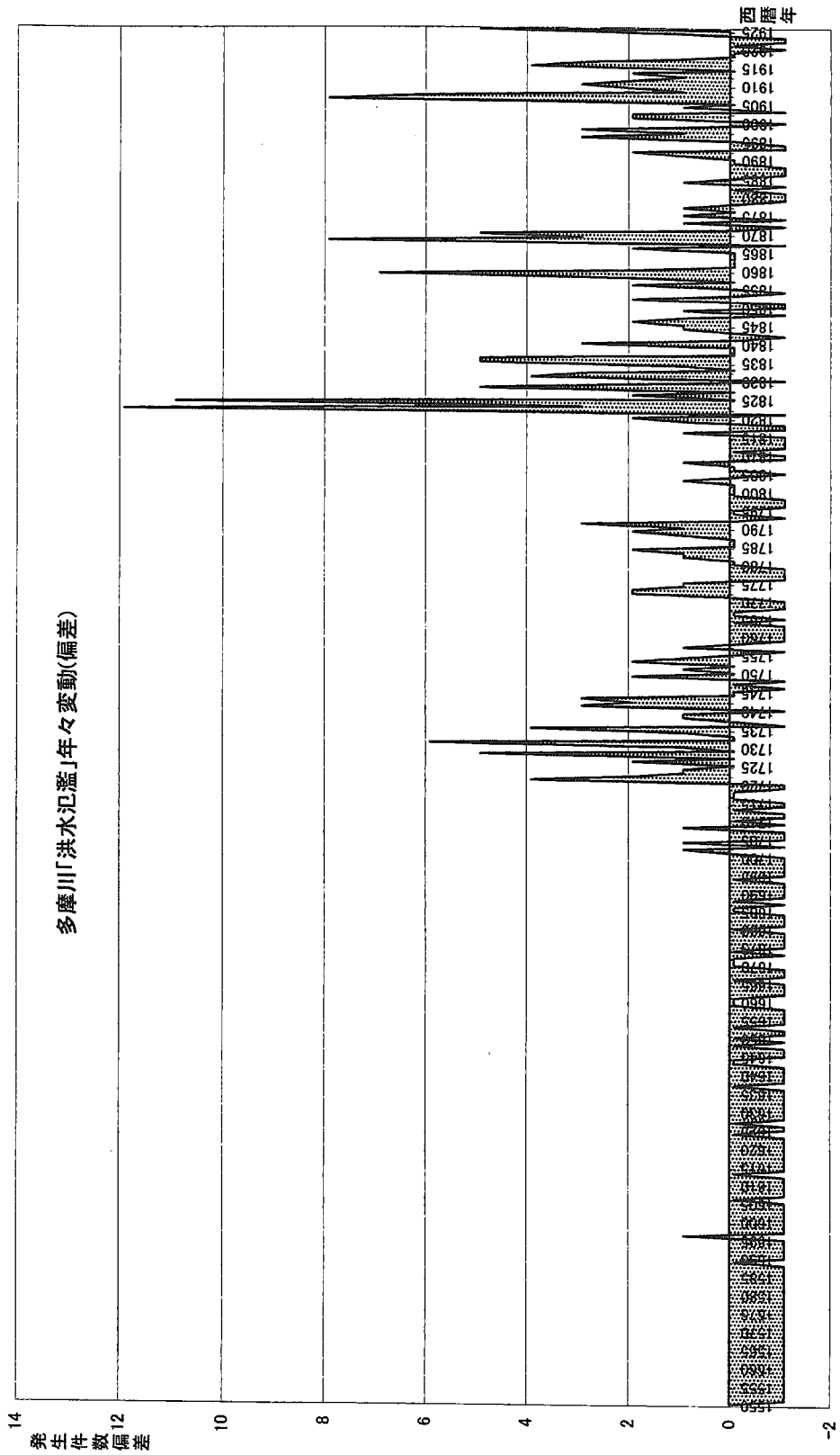


図8 多摩川「洪水氾濫」年々変動(偏差)

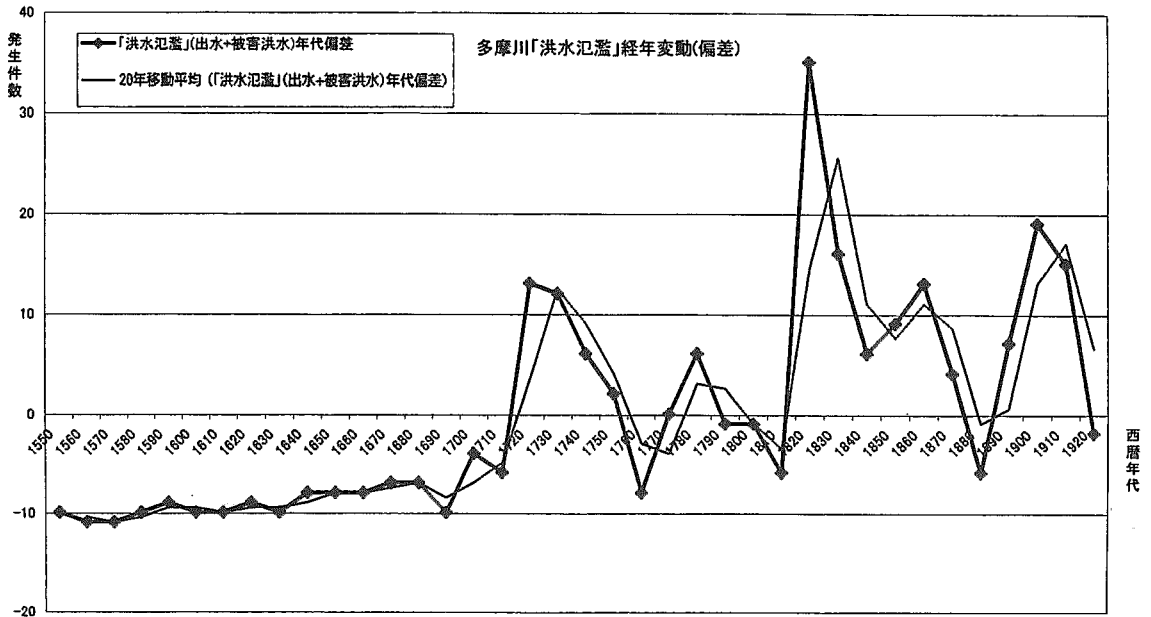


図9 多摩川「洪水氾濫」経年変動(偏差)

害洪水」発生件数も増加しており、多摩川総体の洪水氾濫年代傾向を見る上では問題ないと考えられる。

## (2) 洪水規模

洪水時にどのくらい増水したかは、洪水のマグニチュードを推し量る上で重要である。大田区の文献資料(大田区史平川家文書)などにはいくつか増水量のデータがあるが、全体としては表2に示すように多くはなく、近世以降の洪水規模を論じるには資料数が絶対的に不足している。例えば、1845年(弘化2年)8月29日~30日のものは、暴風雨により、下丸子村で水位は平水時より5.2m~5.4m増水、田畑冠水、河川溢水とあり、上流部の和泉村から猪方村の土手は約410m破堤で河川洪水となっている。

### a) 江戸時代

江戸時代における上流部の増水量としては、1859年(安政6年)7月25日、上流部左岸宮沢村(昭島市)阿弥陀堂境内1.3mの記録がある。記録にある阿弥陀堂が現在の拝島面上の昭島市宮沢阿弥陀寺とすれば、海拔高度は84.6mであるので、水位は85.9mに達した事になる。現在宮沢付近の多摩川砂礫堆の海拔高度は78.1mであり、砂利採取と連続堤によると思われる最近の河床低下を考慮すれば、少なくとも7m近い増水があったことになる。この時の洪水氾濫は、上流部山地7月24日を皮切りに、下流部まで全域で発生している。

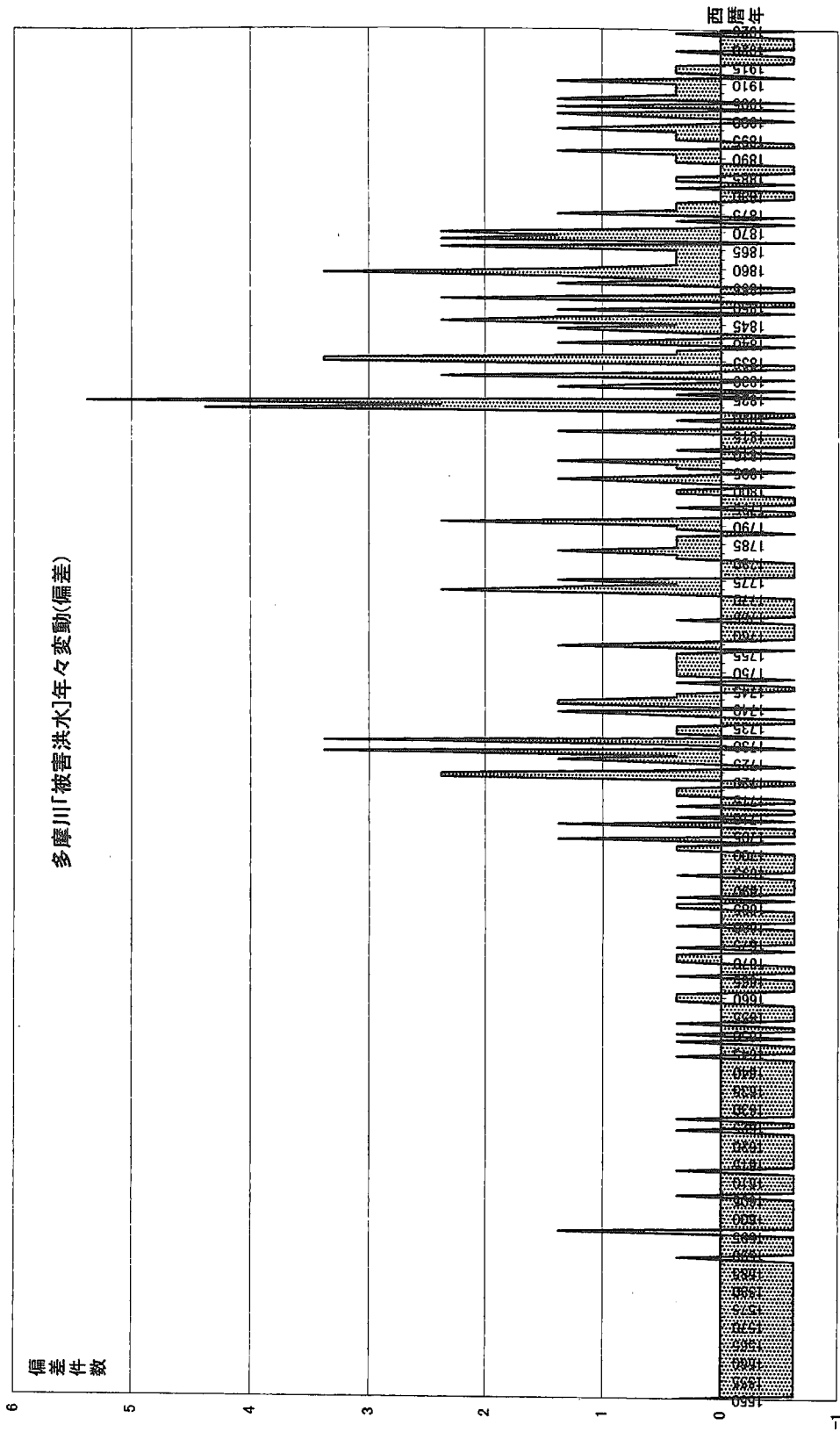


図10-1 多摩川「被害洪水」年々変動(偏差)

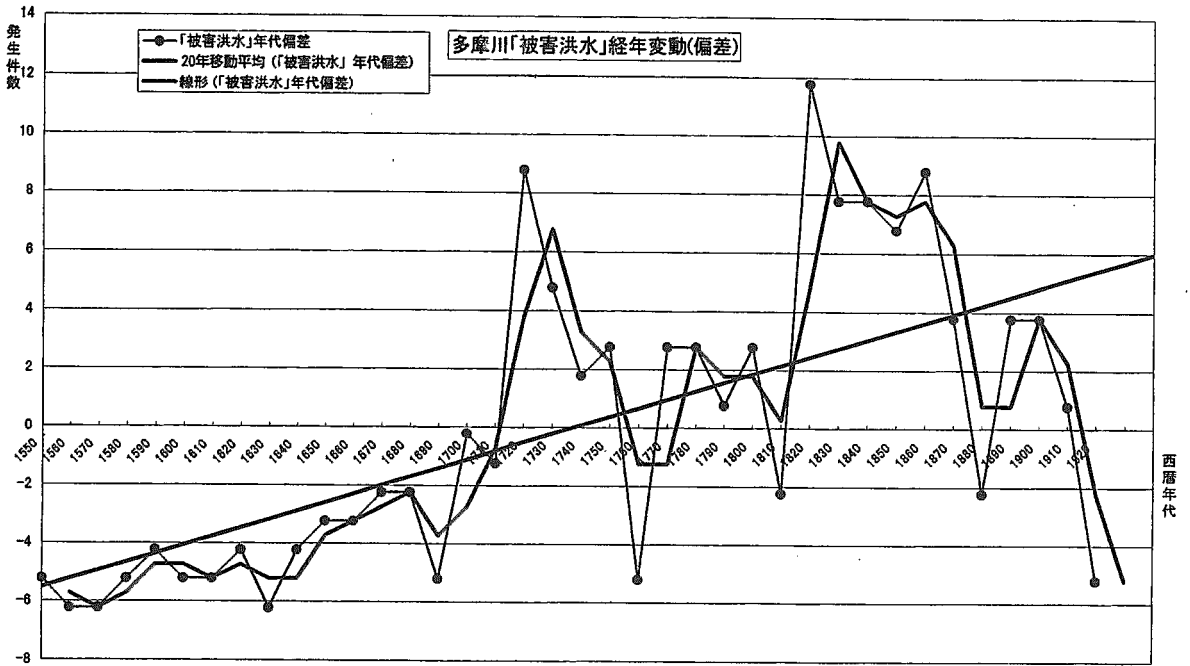


図10-2 年代別被害洪水偏差

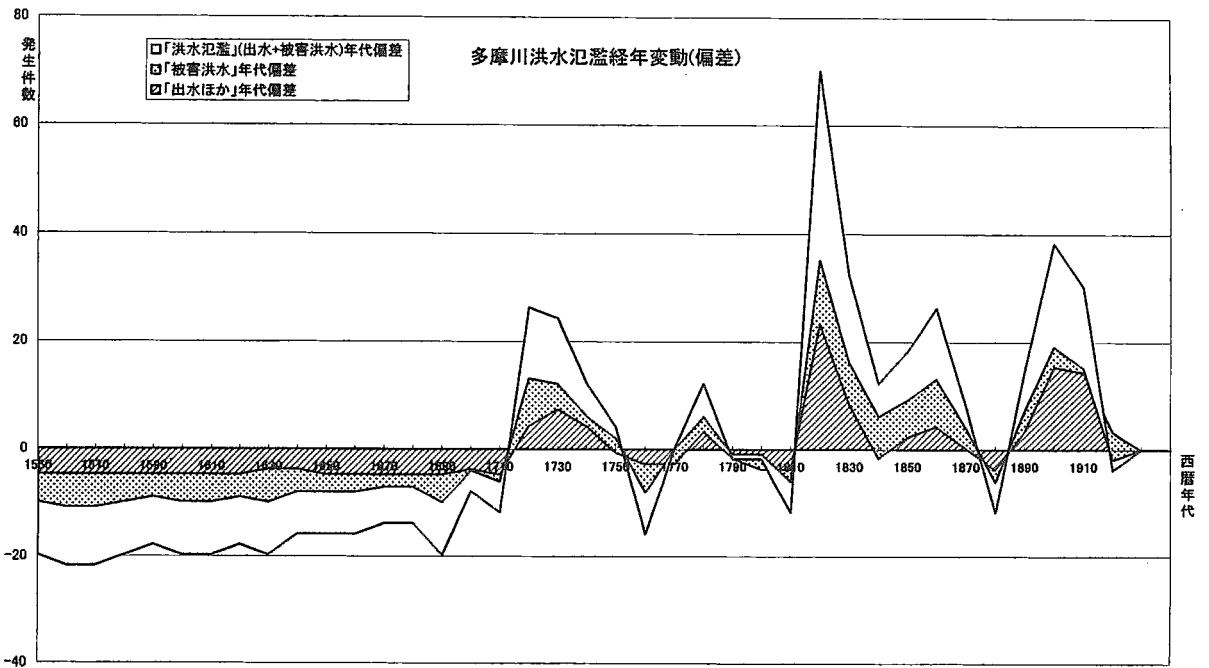


図11 多摩川洪水氾濫経年変動(偏差)

表2 多摩川洪水氾濫増水位

増水水位

水位	増水(平水より)	床上	床下	その他	地点	被災状況	No	水害原因	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	洪水型	現行政区	左岸/右岸
	約5.34m(歴 代通り10日 に143.9m~ 5.1.5.4m)				下丸子村	約10日灌水、田畑居屋敷まで多摩川一面、18日 に干涸	66	台風	1723	享保8	8.8-10	9	7~9	河川溢水	大田区	L
				高増の家屋浸水0.6 ~1.2m、田畑冠水 3.0~5.5m	下丸子村	水が引くのに7日~10日	66	台風	1723	享保8	8.8-10	9	7~9	河川溢水	大田区	L
		約1.5m-1.8m			下丸子村	安方村橋流失、利根川、荒川など関東各地の洪 水、近世最大の洪水	77	大雨	1728	享保13	7.9	8	14	河川溢水	大田	L
		約1.5m			下丸子、安方村、 右岸小土呂、砂子 倉村	安方村橋流失、利根川、荒川など関東各地の洪 水、近世最大の洪水	115	台風	1742	寛保2	8.1	8	30	河川溢水	大田、 川崎	L/R
		約0.6m			川崎宿小土呂、砂 子	洪水、百村川棚間き、村中一面浸水。百村川 堤、小瀬精舎・長谷寺前堤下掘切り、砂入る。 流失家屋4軒、流死1人、女馬1疋。	115	台風	1742	寛保2	8.1	8	30	河川溢水	川崎	R
		1.5m			川崎宿小土呂、砂 子		115, 116	台風	1742	寛保2	8	8~9		河川溢水	川崎	R
	2.4m				下丸子村	杭木だし、棚井等流失、流作場5区5畝28歩川欠	192	大雨	1773	安永2	5.2	6	21	河川溢水	大田区	L
	約2.4m				下丸子村	田畑に土砂流入。本堤外「本石畑」8町、「新石 畑」6反歩の作物全滅、石河原に。享保2年以來 40年ぶり	192	大雨	1773	安永2	5.2	6	21	出水ほか	大田区	L
		0.9m			道塚村	道塚村田畑一統冠水、小森村、安方村橋板流失	209	暴風雨	1781	天明元	7.12	8	31	河川溢水	世田谷	L
		0.9m			道塚村から下流 10ヶ村	同3区の大風雨で灌水、切所30町程出来、田畑共 一面に水押し、冠水	223, 224	暴風雨	1791	寛政3	8月中	8~9		河川溢水	大田	L
3.9m					下沼部吉と川向か い	大洪水	230		1795	寛政7		7	29	河川溢水	大森	L
	約3.6m				和泉村から小山村 まで川付露地の 村々	多摩川向その他多く冠水。本堤(軒付き多摩川向 かい)田畑40町歩、村付き谷田11町4反歩、向畑7 町8反歩の内田畑共40町歩、谷田11町4反歩)	264	暴風雨	1822	文政5	6.12	7	30		大田	L/R
	約4.5m~ 4.8				小森、安方村	増水	284	台風	1828	文政11	6.30	8	9	出水ほか	大田	L
	3.0m				下丸子村	田畑一部浸水	291	暴風雨	1831	天保2	5.10	6	19	河川溢水	大田	L
	3.0m				下丸子村	田畑冠水	313	暴風雨	1843	天保14	9.1	9	24	大田	大田	L
	5.2m-5.4m				下丸子村	田畑冠水	317	暴風雨	1845	弘化2	7.27- 28	8	29, 30	河川溢水	大田	L
				約2.4m増水か水位? 柴崎	柴崎		319	霖雨	1846	弘化3	6.29	8	19		立川	L
	3.2m				下丸子村	田畑冠水	328	暴風雨	1852	嘉永5	7.20-	9	1		大田	L
				約2.4m増水か水位? 柴崎	日向和田、万年橋	大朝原浸水。釜ヶ原で民家流失石河原。山中刃 道、橋崩れ、通行止め	343	台風	1859	安政6	7.24	8	22	河川溢水	青梅	

水位	増水(平水より)	床上	床下	その他	地点	被災状況	No	水害原因	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	洪水型	現行政区	左岸/右岸
		約0.9~0.3m			和泉村	雑穀運具流失。和泉村字堤外(台田中);畑2町ほじ水押砂入り	343	台風	1869	安政6	7.25	8	23	河川洪水	柏江	L
		約1.2m			猪方村字中川原	猪方村:田6町5反水押し。字中川原そのほか白根家9町床上4尺浸水。勝五郎店宅流失。雑穀運具多分に流失。字表料地の田十町5反3畝十歩水押し。	343	台風	1869	安政6	7.25	8	23	河川洪水	柏江	L
		約0.3m			分梅	建具など漂り。小道具流失。水田一円冠水土砂流入。上原屋敷地4町2反、押立4町2反6畝5歩	343	台風	1869	安政6	7.25	8	23	河川洪水	府中	L
		約0.75m			蓮光寺下分村	建具など漂り。小道具流失。水田一円冠水土砂流入。上原屋敷地4町2反、押立4町2反6畝5歩	343	台風	1869	安政6	7.25	8	23	河川洪水	府中	L
		約0.3~0.45, 0.48m			是政村	建具など漂り。小道具流失。水田一円冠水土砂流入。上原屋敷地4町2反、押立4町2反6畝5歩	343	台風	1869	安政6	7.25	8	23	河川洪水	府中	L
		約0.48~0.51m			押立村	建具など漂り。小道具流失。水田一円冠水土砂流入。上原屋敷地4町2反、押立4町2反6畝5歩	343	台風	1869	安政6	7.25	8	23	河川洪水	府中	L
	約7m				宮沢村	25日、宮沢村阿弥陀堂内1.3mの水位。河岸の栗の須村まで一面の水。福島村では広福寺門前に船、冠水家屋との連絡	343	台風	1869	安政6	7.25	8	23	河川浸水	昭島	L
			約15cm		下九子村		343	台風	1869	安政6	7.24-25	8	24, 23	河川洪水	大田	L
			約60cm		小津、安方村	田畑一円冠水、家財運具流失	343	台風	1869	安政6	7.24-25	8	24, 23	河川浸水	大田	L
	約1.5m				八幡村、羽田彌師町、鈴水新田	八幡村田畑35町冠水、彌師町、鈴水新田家屋10軒破損	389	大雨	1875	明治6	8.12	8	12	河川洪水	大田	L
約2.4m	約1.2m				熊川・中福至向堤天羽口まで馬越道	真本幸新開田地7分残らず川敷(流失)、石砂入り押し埋まる。	393	台風	1878	明治11	9.15	9	15	河川洪水	福生	L
約2.4m	約1.5m				熊川・森山芝地蔵ノ木向松原	真本幸新開田地7分残らず川敷(流失)、石砂入り押し埋まる。	393	台風	1878	明治11	9.15	9	15	河川洪水	福生	L
約2.4m	約0.6, 0.9m				熊川・希海道入	真本幸新開田地7分残らず川敷(流失)、石砂入り押し埋まる。	393	台風	1878	明治11	9.15	9	15	河川洪水	福生	L
約2.4m	約0.9, 1.2m				熊川・真福寺向芝地二ノ宮芝原	真本幸新開田地7分残らず川敷(流失)、石砂入り押し埋まる。	393	台風	1878	明治11	9.15-16	9	15, 16	河川洪水	大田	L
水量杭零点5.4m					八幡村、羽田村外	六郷筋流失。田畠浸水。床上浸水。六郷筋浸水2戸流失。羽田村流出40戸	396	台風	1884	明治17	9.15	9	15	河川洪水	福生	L
				稲の頭約0.06, 0.06mを顕すだけ、南庭場寄台車は水浸紙に達す。「河原」では角隠居見せ警水浸りし跡約1.2m余	熊川、福生、羽村、井島	新坂田地車く稲の頭2.3mを顕すだけの冠水。南庭場寄台車は水浸紙に達す。井島分九才用水水門破れ、本流水門に向き、龍井寺下を流下。それから駒田屋水車に達す。「河原」では角隠居見せ警水浸りし跡4尺余。										
	約2.7m				佐原郡鏡村地先	蛇籠流失	396	台風	1884	明治17	9.17	9	17	出水ほか	大田	L
	量水標5.25m				佐原郡古川村地先		396	台風	1884	明治17	9.17	9	17	河川浸水	大田	L
	約0.99m, 19日約0.6m				玉川上水水源	玉川上水水源 18日午前向所永神山杵齋流失	396	台風	1884	明治17	9.18	9	18	内水型氾濫	羽村	



水位	増水(平水より)	床上	床下	その他	地点	被災状況	No	水害原因	発牛年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	洪水型	現行政区	左岸右岸	
	約5.4m	約0.3~0.9m			六郷村元吉川・高畑・向屋・矢口内元矢口・道狭・小林・運田・安方・古市場・今泉・下丸子・原村	一面氾濫。人家540戸床上浸水。鉄道線路以西は該線路に連れられ舟に溜滞達したく、蒲田村裏手の線路を切断したため、激水早まる。六郷村堤防外人家35戸、羽田村62戸、元村15戸計100戸床上或は橋先浸水も人畜に異常なし。六郷村堤防外2戸建長屋1棟流失	402	台風	1890	明治23	8.22-24	8	22-24	河川溢水	大田区	L	
3.6m		約0.9m	約0.3m		矢口村辺	9戸床下1尺程浸水、人畜田畑に異状なし	403	大雨	1891	明治24	6.22	6	22	河川溢水	大田	L	
2.94m			約0.3m		矢口村字古市場	9戸床下1尺程浸水、人畜田畑に異状なし	403	大雨	1891	明治24	6.22	6	22	河川溢水	大田	L	
			約0.3m		六郷村	9戸床下1尺程浸水、人畜田畑に異状なし	403	大雨	1891	明治24	6.22	6	22	河川溢水	大田	L	
約3.66m	約2.85m				六郷川沿岸 六郷橋際	外取森損無事。六郷多摩川堤防内：一般浸水48戸、床上浸水に至るも人畜被害なし。耕地悉く皆浸水作物損害多	404	台風	1891	明治24	10.1	10	1				
	約4.5m				六郷村八幡原、蒲田村内御面、中村	八幡原：59戸、蒲田村内御面：百戸、中村：28戸床上浸水住立立ち退き、家屋流失、人畜死傷なし	407	台風	1895	明治27	8.11	8	11	河川洪水	大田	L	
					熊川	停車場長屋少々損、出水は本年度築堤一桁、水車の右所にて8寸、昨年9/8の出水より1尺程少ない、作物、家屋損害無し	410	台風	1896	明治29	9.8-9	9	8,9	河川洪水	大田	L	
	5.1m				熊川		413	台風	1898	明治31	8.26	8	26	河川溢水	福生	L	
	4.5m				六郷川		413	台風	1898	明治31	8.26	8	26	河川溢水	福生	L	
	約3.6m				熊川	通部屋瓦流れ、竊竊屋根取むかれ、内田和幸宅全潰れなれど家屋損害5軒、稲非常の損害、葉皆無、明治16年以來になき大水	414	台風	1898	明治31	9.7	9	7	河川溢水	福生	L	
	5.1m、				多摩川	羽田村大滝と変じ、浸水家屋多数、六守稲荷社殿水中に。川崎町田畑冠水、家屋浸水。六郷川係留中の夜50艇流失	415	台風	1899	明治32	10	10		河川洪水			
	4.5m				六郷川	羽田村大滝と変じ、浸水家屋多数、六守稲荷社殿水中に。川崎町田畑冠水、家屋浸水。六郷川係留中の夜50艇流失	415	台風	1899	明治32	10	10		河川洪水			
	増水多摩川 5.1m、六郷川4.5m				六郷川沿岸	砂利約百重流出、六郷川葉橋中京浜電鉄専用橋約35mにわたり流失	427	台風	1906	明治39	8.24	8	24	河川溢水	大田	L	
	約6.1m? (安政6年洪水)				熊川、拜島、下宮沢、大神	堤防下の方々堤、堤防折目の桑原より流失。同時に船頭小屋及橋脚置場等流失、それより益増水、宇板木上松原次所を突破して駒ヶ谷戸へ向かい押し寄せ、水車場は河川の中央となり、新坂下流失、熊川村30町歩の団地一時多摩川の水流となし、熊川村水車場の団地に突き当たり、一面海のごとし、夕刻一の水水車場潰倒。拜島は島田屋の下200間程堤流失、下宮沢、大神等も大水、立川鉄道橋破損、拜島八王子間電柱流失で電柱立川鉄道橋破損、拜島八王子間電柱流失で電柱不通、中央線各所トンネル崩壊前列車不通、出水甚だしい、49年前去年の大水に次ぐ、この時の出水は今回より3尺以上の大水で熊川下田地全部流失	434	台風	1907	明治40	8.24	8	24	河川洪水	福生	L	

水位	増水(平水 より)	床上	床下	その他	地点	被災状況	No	水害原因	発生年 (西暦)	年号	西暦月 日	西暦日	洪水型	現行政区	左岸/ 右岸
	約0.3m				熊川	出水3尺程増水せしも残った稲見えず、新設下は激流にて水車場は中央より切断し、西半分は転回したる僅水中に倒れあり、平均3尺以上水中にあり、村岸小川堤防も欠壊	434	台風	1907	明治40	8	25	河川洪水	福生	L
	4.5m				北多摩郡多摩村字世田	東京横浜間不通、世田：家屋流失1戸、日野立川間不通、小宮村字栗栗：家屋1戸、電柱1本、橋架1流失、浸水家屋10戸。浅川村世田間不通、家川：漬田1区、雑式村：家屋2戸、瀬田：家屋2戸小室1流失、田畑久く1丁浸水、多摩川沿岸被害市町村50町村、記産面積4.474町歩	434	台風	1907	明治40	8	25	河川洪水		
	約3.4m~6m				江戸川、荒川最高水位点	家屋田畑の浸水、及堤防道路橋梁等の破壊流失等、頗る多く、40年以前以来未曾有の大洪水、被害中最大のもは多摩川通や矢口村六蔵川の堤郷決壊、鉄道橋梁及東海道を切断して、大盛り町羽田村等の一面を浸す。、出水暴威、江戸川、荒川同じく近年未だ嘗て無き所の最高水位、荒川点ハ平水より18尺乃至20尺	435	暴風雨	1907	明治40	9	18	出水ほか	福生	L
約3.3m	約0.6m				熊川・法先沈床	出水堤壘岸張り石を越え、浸木にて直立3尺、橋場にて岸上。真福寺下一部分稲見えず及大堀へ曲り角二枚稲見えず。水車前道石腰5.6間崩壊。浸木にて法先沈床上水深凡11尺、南下尻にて8尺位	441	台風	1910	明治43	8	10	河川洪水	福生	L
約2.4m	約0.6m				熊川・南下尻	出水堤壘岸張り石を越え、浸木にて直立3尺、橋場にて岸上。真福寺下一部分稲見えず及大堀へ曲り角二枚稲見えず。水車前道石腰5.6間崩壊。浸木にて法先沈床上水深凡11尺、南下尻にて8尺位	441	台風	1910	明治43	8	10	河川洪水	福生	L
	約4.05m				六郷川	8尺7寸増水、紀伊国橋流失、藤原大和田邸2枚流失、多摩村、生村、田井村、稲盛村各60戸、小宮村須須白戸、元八王子方面65戸、浅川村20戸、小宮村60戸、八王子五子安50戸、由井村120戸浸水、	441	台風	1910	明治43	8	11	河川洪水	大田	L
	約2.61m					立川付近より上流：沿岸各所砂礫浸透甚速、田畑被災理定多発。福生：岸島付近で河道大幅転移、行政不明。南浅川橋上、水無瀬橋下各々、右岸堤決壊で浸水平野面での浸水深171.5m、堤0.571日。下流：平野下位面冠水。上位面左岸171.5m 浸水。	441	台風	1910	明治43	8	12	河川洪水		
	約0.6m				熊川	六郷橋落、流失	454	霖雨	1916	大正5	6	26	出水ほか	福生	L
5.1mの水置計水没					川崎付近	出水一面の水となる	465	台風	1924	大正13	9	17	河川洪水	川崎	L
					熊川、二ノ宮	橋上上げる、五日市鉄道二ノ宮初節摩子後まで不通、熊川の堤防内の農土崩壊内の土作の田へ土砂が所崩れ落ち、凡5七歩土厚平均2尺位、稲見へず	465	台風	1924	大正13	9	17	出水ほか	福生	L
					増水、堤張石3尺掛り		467	大雨	1925	大正14	8	15	出水ほか	福生	L
					堤張石約0.9m掛り		467	大雨	1925	大正14	8	17	出水ほか	福生	L

上流部山地の青梅・万年橋で約1.2mほど橋を越流し、浸水や民家流失があり、上流部分梅村床上浸水0.3m、連光寺下分村床上浸水約0.75m、是政村床上浸水約0.3～0.48m、押立村床上浸水約0.48～0.51m、和泉村で床下浸水約0.9～0.3m、猪方村床上浸水1.2m、中流部下丸子村床下浸水約0.15m、小林、安方村0.6mと下流になるにつれ増水量は減少傾向を示す。この記録以外は、増水量を直接示す記録がないが、1822年（文政5年）7月30日和泉村から小山村まで暴風雨により、約0.6～0.9mの床上浸水、1859年（安政6年）8月23日台風で和泉村約0.3～0.9m、猪方村字中川原で約1.2mの床上浸水がある。

江戸時代における中流部から下流部にかけての増水量は、下丸子村の、1845年8月29日～30日の増水量5.2m～5.4mが最大で、次いで1723年（享保8年）9月7～9日、下丸子村約5.34m、1828年（文政11年）8月9日、小林、安方村（大田区）で4.5～4.8m増水、1852年（嘉永5年）8月15日暴風雨で下丸子村（大田区）3.2m、1831年（天保2年）6月19日暴風雨で下丸子村（大田区）3.0mとなっている。

1723年9月7～9日は数十日に渡り湛水し、下丸子屋敷通りは9日に約3.9m～5.1、5.4m、17日に漸く干上がり、水が引くのに時間がかかっていることが分かる。1828年8月9日は小林、安方村の上流下丸子では破堤、小林、安方村は増水で被害の記録はない。下丸子では小林、安方村以上の増水があったと推定され、上流部熊川（福生市）では風害、拜島村で内水型氾濫、築地村（昭島市）では河川溢水であり、上流部下流和泉、猪方村（狛江市）では破堤を伴う河川洪水が記録されている。1852年8月15日は下丸子で田畑冠水の河川溢水であるが上流には記録がない。1831年6月19日も同様に下丸子より上流では記録がない。下丸子での増水3～3.2m前後では、洪水の影響はその上流には現れず、5m前後となると上流でも洪水が発生している可能性を示唆している。

#### b) 明治時代以降

明治時代以降では、中～下流部では、1890年（明治23年）六郷村付近の台風による約5.4mの増水が最大で、1884年（明治17年）荏原郡古川地先の台風による5.25m（量水標）増水、1924年（大正13年）9月17日台風による六郷右岸川崎付近で5.1m以上の増水、1896年、1906年（明治29, 39年）9月8, 9日、8月24日六郷川沿岸のいずれも台風による約4.5mの増水、1910年（明治43年）8月11日台風による六郷川約4.05mの増水がある。江戸時代も明治時代も下丸子からその下流にかけての増水量は最大値と比較すれば、変わりがない。

上流部では、1907年（明治40年）8月24日台風で熊川から大神にかけて、安政6年より約0.9m少ない増水とあるのが最大である。およそ約6.1m前後の増水と思われる。1898年（明治31年）8月26日熊川（福生市）で5.1m、1907年（明治40年）8月25日北多摩郡多摩村

字世田で台風により約4.5mの増水である。その他の記録は1m前後の増水である。1898年8月26日は熊川で小規模な破堤、右岸宿河原（川崎市）用水口で出水程度である。

江戸時代と同様に、下丸子で5m以下の増水では、上流部に「被害洪水」は発生していないのに対し、4.5m増水で下流部に「被害洪水」が顕著となっている点が江戸時代と異なる。上流部については、中～下流部にかけてよりさらに記録が少なく、江戸時代と明治時代を比較できない。一方、現代においては、既往最高水位は、田園調布下流で8m（1982年9月15日）、拝島で1.2m、日野橋で3.3mである。上流部では現代よりも増水量は大きく、下流部では現代より増水量小さい。これは、現代は高水敷連続堤や河道の直線下、丘陵、台地上の開発の進展などにより、下流部に洪水流が集中することによると思われる。

上記のような資料の掘り起こしと、資料の蓄積が進めば、洪水のマグニチュードも推定されると期待される。今後の課題である。しかしながら、連続堤防によって制御された現代と異なり、本報告の対象としている近世から近代においては、「被害洪水」は「出水ほか」とした洪水氾濫に比べ、洪水規模は数量化できないまでも、規模は大きいことは明らかである。

### (3) 被害

地域ごとの被害の程度は、村落の年貢割付状の検討により、ある程度明らかになると期待されるが、多摩川全域については勿論、村落レベルでも経年的にまとまった資料は少なく、断片的である。

今後、この方面の資料の掘り起こしが、多摩川洪水氾濫をトータルにとらえる上で重要と思われる。

断片的資料のいくつかをみると、左岸築地村（昭島市）（昭島市境域委員会社会教育部社会教育課, 1984）では、1682年～1822年間に、田畑の減免率は、17世紀末までに約20%から約40%まで増加し、18世紀前期には50%と増加、以後漸増して19世紀前期には60%を越え、被害は18世紀から19世紀にかけ増大していったと推定される。右岸小川村（あきる野市）（多摩川流域史研究会, 1989）では、1766年～1868年間に、川欠けの割合は全体に少ないが、1828年と1857, 1858年に多くなっている。左岸下石原村（調布市）（調布市, 1992）では、1713年～1786年間で、田畑の損率は大きく変動し、1734年には40%を越え、1781年と1783年は約25～27%、他の年は5%以下である。18世紀中に「被害洪水」の発生は大きく変動し、2つの被害の大きなピークを示す洪水氾濫があったと推定される。

表3 多摩川地域別洪水氾濫状況

		西暦							
低地地形区分	現行政区	地域名	発生合計	1550～1600	1600～1700	1700～1800	1800～1900		
上流部	狛江市	和泉	26	1	5	20			
		岩戸	4		2	2			
		狛江市	12		3	9			
		狛奈根	4		3	1			
		鎌田	8		3	5			
		瀬田	4		2	1	1		
		中流部	世田谷区	上野毛	9		3	6	
				下野毛	5		1	2	1
				等々力	1		1		
				上沼部	3	1	2		
下沼部	8				1	7			
下流部	川崎市幸区	瀬訪河原	2			2			
		世田谷全般	9		1	3	5		
		北見方	3		1	1	1		
		上小田中	2			1	1		
		小杉	20		16	3	1		
		上丸子	2	1			1		
		上平間	5		4		1		
		下平間	1		1				
		南加瀬	3		3				
		古市場村	6		4	2			
吉川村	3			2	1				
大田区	大田区	下丸子	85	10	47	28			
		葛	3		1	2			
		鶴ノ木	2		1	1			
		矢口	20		13	5	2		
		安方	13		4	9			
		原	1		1				
		小林	14		3	11			
		道塚村	16		5	11			
		蒲田村	3			1	2		
		六郷(橋)	20	5	2	8	5		
川崎市川崎区	川崎市川崎区	八幡塚	8		2	5	1		
		高畑村	2		2	1	1		
		羽田村	12		2	1	7		
		大田全般	5	3	1	1			
		川崎宿	8	7	1				
		砂子	1						
		小土呂	1		1				
		大師河原	1		1				
		川崎市域	3	2					
		計		930	9	53	371	425	

		西暦							
低地地形区分	現行政区	地域名	発生合計	1550～1600	1600～1700	1700～1800	1800～1900		
上流部	青梅市	二俣尾村	51	1	50				
		小宮木村	22		21				
		青梅村他	21		6	15			
		羽村	4		1	3			
		上流部	福生市	作目村	2	1	1		
				福生村	5	1	1	2	1
				龍川村	86		5	61	20
				下草花村	2		2		
				上世継村	18			2	18
		昭島市	昭島市	星竹	24	1	5	2	13
拝島村	8				2	2	3		
大神村	14				4	6	3		
高澤村	10					8	2		
養地村	5					5			
徳島村	2					2			
浅川全般	201			2	1	117	65		
日野村	2					2			
酒蔵寺	1								
石田村	2					2			
多摩市	多摩市	新井	1		1				
		落川	2		1	1			
		一の宮	1		1				
		幸方村	2		2				
		蓮光寺	1			1			
		栗崎村	7			7			
		青柳	3	1	1	1			
		谷保村	6		1	4			
		四谷	1			1			
		分梅	1		1				
府中市	府中市	中河原	2		1	1			
		分笹河原	1		1				
		是政	6		2	3	1		
		上染屋	4		3	1			
		下染屋	1		1				
		神立	16	1	2	7	4		
		大丸	3		2	1			
		長沼	3		2	1			
		下石原	2		2				
		国領村	1		4	1			
川崎市多摩区	川崎市多摩区	調布町	1			1			
		菅	4		4				
		中野島	3		3				
		登戸	3		3				
		長尾村	2		2				
		菅生	2		2				
		宿河原	1			1			
		計		201	9	117	65	2	

## 6. 地域別（河岸、地形地域）

### (1) 河岸

表3と図12に示すように、洪水氾濫、「被害洪水」とともに、左岸域での洪水氾濫が、右岸を圧倒している。福生より下流で、右岸が攻撃斜面に位置するのは、現拝島橋付近八王子市滝山と、日野市落川から多摩市一の宮まであり、他の多くは左岸が攻撃斜面となっている。日野市落川から多摩市一の宮までは、その上流で浅川が合流する事と、完新世段丘の発達から、攻撃斜面に位置しながら洪水流は左岸側にシフトすると予想され、洪水の記録の少なさと矛盾しない。現拝島橋付近八王子市滝山までについては、その上流で平井川、秋川が合流し、洪水流は福生・熊川～拝島町付近を襲い、その後、滝山付近に至ると推定される。新編武蔵風土記稿の作目村流失以外は、滝山付近の洪水氾濫記録は少なく、文献からはこれを立証できない。陸軍迅速図でも当地の畑、水田は対岸に比較し少なく、現在も耕地は見られないことは、当地域が人の利用には供されにくい場であり、このことが記録の少なさとなっていると思われる。人の利用を阻んだ要因としては、加住丘陵の急崖が低地に迫っていることもあるが、常習的氾濫域であったことも否定できない。

### (2) 地形地域

門村（1961）、内田（1979）による地形分類に従うと、低地上流部（網状河川帯）での洪水氾濫及び「被害洪水」発生が優占している（図13）。次いで、下流部、中流部、上流山地部の順である。このことは、山地から低地にかけて、傾斜が緩やかとなる扇状地性平野（門村, 1961）に移行することにより、洪水氾濫が発生することを示していると思われる。門村（1961）の区分により、左岸下丸子村は中流部に置いたが、洪水氾濫は下丸子村からその下流左岸にかけて連続して発生している。従って、下丸子村からを下流部とすれば、下流部での発生件数は増加し、中流部での発生は僅かとなる。上流山地部を除き、洪水型はいずれも「被害洪水」が多い。また、単一の洪水ごとに、地形地域の洪水発生パターンをみると（図14 上山；上流部山地、上；上流部、中；中流部、下；下流部）、上流から下流にかけて連続して洪水氾濫が発生する場合より、各地形地域単独で発生する場合の方が多くことがわかる。いくつかの地形地域が連動する場合は、記録に左右されるが、石川酒造文書による「出水ほか」の詳細な記録を有する上流部を中心にみると、上, 中, 下と連続して発生した洪水氾濫は、全て「被害洪水」であり、規模の大きさを示唆する。上流部のみでは、「被害洪水」と「出水ほか」はほぼ同じ件数である。

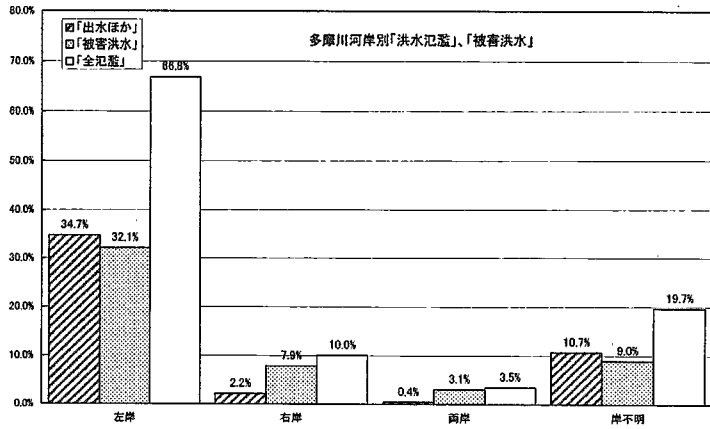


図12 多摩川河岸別洪水氾濫

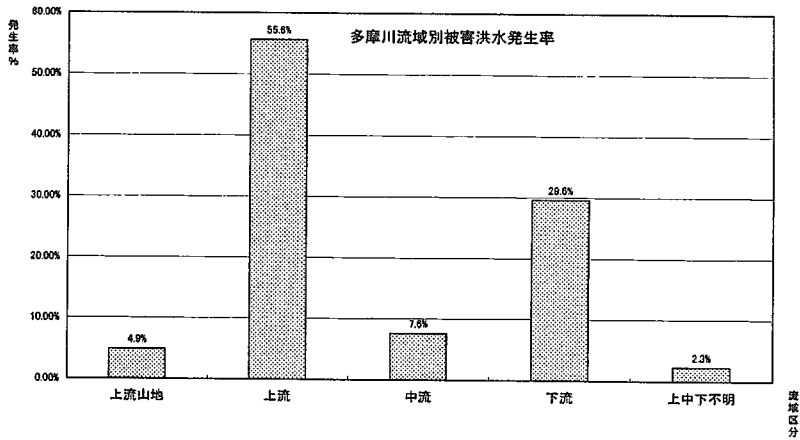


図13 多摩川流域別被害洪水発生率

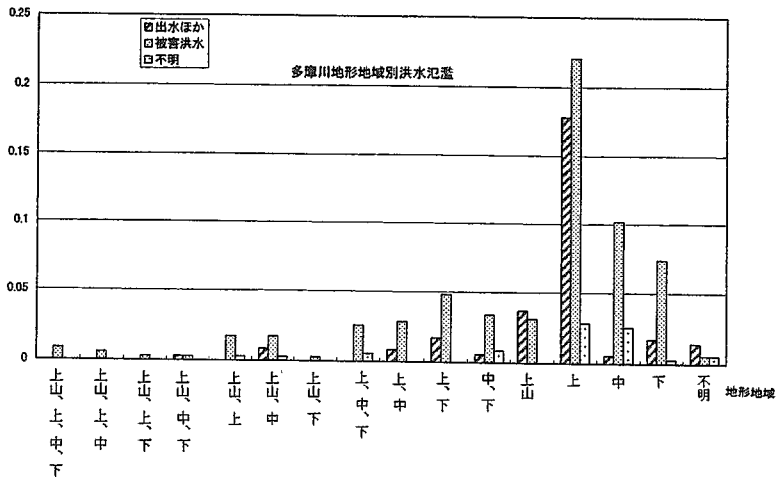


図14 多摩川地形地域別洪水氾濫

### (3) 上流部,中流部,下流部連動洪水のパターン

#### a) 上,中,下

上,中,下と連続して発生した洪水氾濫は11回記録されている。1802年(享和2年)7月30日、1822年(文政5年)7月29日、1823年(文政6年)7月19日、1824年(文政7年)8月19日及び9月3~6日と10月4,5日、1828年(文政11年)8月9日、1859年(安政6年)8月10日、1876年(明治9年)9月17日、1878年(明治11年)9月15日、1898年(明治31年)9月7日である。文政年間の1822年から1824年には毎年発生し、1824年には年3回発生、1828年の発生もあるので、1820年代は上,中,下と連続して発生した洪水氾濫で特徴づけられる。資料の地域別ムラのない1820年代の洪水氾濫をみると、1822年は大雨により支流の秋川、浅川で出水があり、上流部、中流部の左岸和泉村から小山(世田谷区)までの河川洪水と、破堤による下流部小林、安方村の河川洪水が起きており、大雨による増水が下流に及んでいったと推定される。1823年も大雨により上流部熊川での出水、中流部下丸子村での内水型氾濫、下流部道塚村での破堤による河川洪水である。

1824年8月19日は台風により、上流部熊川で出水、中流部下丸子で河川溢水、下流部道塚、八幡塚、高畑村で破堤による河川洪水となり、洪水エネルギーが下流部に集中していく事がわかる。1824年9月3~6日は霖雨によるが同様に下流部に洪水エネルギーが集中する。1824年10月4,5日は、水害原因は特定できないが、上流部では熊川からその下流拝島にかけて河川洪水、上流部和泉から二子のかけて被害があり、下丸子で内水型氾濫、下流部下沼部で河川溢水となっている。上流から下流へ河川洪水から溢水型へと移行している。

1828年は先述したように、下流部より上流部の方が洪水氾濫規模は大きく、洪水エネルギーが減衰する。

1859年は台風により、上流部左岸現国立市域で出水、右岸長尾、登戸村(川崎市)と左岸泉村で破堤による河川洪水、下丸子村で河川溢水、下流部下沼部村でも河川溢水となっており、上流部上流の熊川、拝島付近での記録がなく、それより下流で左岸、右岸に洪水氾濫が連続するのが特徴と思われる。

1876年は台風により、熊川で流路移動があり、下丸子で内水型氾濫、六郷、八幡塚村河川溢水で浸水があった。

1878年は台風により、上流部左岸の羽村で内水型氾濫、熊川で破堤、河川洪水、押立(府中市)で用水路に洪水流が流入、中流部右岸北見方、諏訪河原村(川崎市)で河川洪水、下流部で六郷橋流失や八幡、羽田村で家屋流失や床上浸水など多大な被害を出し、上流部、中流部の境の右岸に位置する北見方、諏訪河原村に洪水が及んだ事と、上流部、中



流部、下流部の全てで河川洪水が起きている。

1898年は台風により、熊川で破堤、河川洪水、右岸宿河原でニヶ領用水取り入れ口大破、左岸二子、右岸溝口などで浸水、矢口、古市場で破堤、河川洪水、満潮のため羽田村家屋浸水となっている。上流から下流まで全般的に洪水氾濫が及んでいる。

#### b) 上山、上, 中, 下

上流部山地から下流部までほぼ全域で連続して発生した洪水氾濫が4件記録されている。

#### 1742年（寛保2年）の洪水氾濫

1742年8月下旬からの洪水氾濫は、台風によるもので、利根川、荒川水系でも大規模な洪水氾濫を発生させている。8月30日上流部山地の青梅の滝本で山崩れを伴い、河川洪水が起こり、上流部田中、大神村（昭島市）は河川溢水、同右岸菅村（川崎市）河川溢水、中、下流部では破堤により左岸、右岸の下丸子、安方、小土呂、砂子村、下平間村が河川洪水となっている。上流部和泉、猪方、岩戸村での河川洪水や府中市域連光寺付近での流路移動もこの時のことと思われるが、記録上発生日付が不明である。上流部山地から下流までの全域が左岸、右岸ともほぼ1日で洪水氾濫を受けている。

#### 1859年（安政6年）の洪水氾濫

台風によるもので、利根川、荒川水系でも大規模な洪水氾濫を発生させている。8月22日に上流部山地の青梅で河川洪水、8月23日は上流部羽村で羽村堰が破壊され、宮沢村（昭島市）で河川溢水、右岸一の宮（多摩市）で河川洪水、国立市域で出水、分梅村ほか（府中市）で浸水を伴う河川洪水、和泉村ほかで破堤による河川洪水、中流部から下流部の下沼辺、下丸子、鶴の木、矢口村、八幡塚村で破堤、浸水を伴う河川洪水が発生し、1742年8月下旬と同様、1日から2日で全域にわたる洪水氾濫の発生がみられるが、右岸域での発生地域は1742年に比較すると少ない。洪水規模の項で述べたように、増水量は下流に向かい減少傾向である。

#### 1907年（明治40年）の洪水氾濫

台風によるもので、利根川、荒川水系でも大規模な洪水氾濫を発生させている。8月24日に上流部山地青梅で万年橋が落下、上流部熊川、拝島、右岸小宮で破堤、河川洪水、8月25日は熊川で河川洪水の他、上、中流部左岸、右岸の市町村50に洪水氾濫が及び、氾濫面積は4,474町歩とされる。8月26日に下流部矢口、六郷蒲田方面が浸水となり、破堤により28日まで右岸川崎街、大師河原、田島、御幸ほかの村は浸水して「鶴見以東、海となる」。「多摩川と鶴見川遂に合流」とあるので、後述の1910年と同様、旧河道づたいに洪水主流は鶴見川に合流したとも推定される。洪水エネルギーは拡散することなく、下流部

へ集中していったことがわかる。

#### 1910年（明治43年）の洪水氾濫

1910年8月中旬の台風によるもので、利根川、荒川水系でも大規模な洪水氾濫を発生させている。8月10, 11日上流部熊川、宮沢村破堤で河川洪水、11日下流部河川溢水、12日上流部から下流部まで河川洪水、溢水、8月14, 15日には川崎市域の中野島から小杉までの上流部、中流部右岸を含めほぼ全域で洪水氾濫が発生している。特に、洪水流が右岸中流部で、坂戸-中新城-下小田中に連続する自然堤防列を乗り越え、下小田中・耕地・辻を結ぶ旧河道沿いに矢上川に流入し、さらに洪水流の主流は川崎河岸駅-尻手駅を結ぶ旧河道づたいに平野を横切り、鶴見川に合流、下流部デルタ西半分に浸水被害をもたらした事が特徴的である。

以上から、下流部へ増水が及び、洪水エネルギーが下流部へ集中していく場合と、逆に洪水エネルギーが拡散し、下流部に向かって減衰する場合がみられる。上流部山地から下流部までの洪水氾濫は、台風によるもので利根川水系、荒川水系でも大きな被害が記録され、1日から2日で全域に被害が及んでいる。さらに、明治時代に入り、記録資料が多くなるためもあるが、上流部山地や上流部から下流部まで左岸、右岸を含めて、全般的に洪水氾濫が及び、特に下流部での被害が大きくなっている。

#### (4) 河岸と地形地域

洪水氾濫、「被害洪水」ではともに、左岸での発生が優占するが、「被害洪水」においては、右岸、両岸での発生も左岸のそれに対して、1/4及び1/10の割合で発生し、「出水ほか」の場合よりは多くなっている（図12）。右岸で「被害洪水」が発生した場合、中流部がやや多く44.4%、上流部30.6%、下流部25.0%の割合である。両岸の場合は上流部35.7%、下流部28.6%、中流部14.3%で上流部での発生がやや多くなっている。右岸で中流部での発生が多くなっているのは小塚（1962, 1965, 1966）の1688年から1856年までの洪水記録によることが大きく、このうち小杉村洪水が10回も記録されている。小塚（1962, 1965, 1966）は洪水とあるのみで、その具体的内容が希薄である。小塚（1962, 1965, 1966）以外には右岸中流部の洪水氾濫は、1688年、1694年、1699年の南加瀬村での内水型氾濫と、1878年北見方、諏訪河原村の河川洪水、1910年河川洪水があるのみで、特に小杉村の洪水記録は極めて少ない。岩屋（1986）は田中丘陵が1723, 1724年（享保8, 9年）に現在の川崎市中原区等々力緑地付近で、蛇行部に捷水路を開削し、蛇行部を閉鎖したとしている。確かに、等々

力緑地には蛇行する旧流路があり、陸軍迅速図ではその旧流路に添う形で堤防がある。同様の捷水路開削は1761年（宝暦11年）に川崎平右衛門によって、右岸上平間（現川崎市）の蛇行部でも実施されているという（岩屋, 1986）。田中丘隅によるという捷水路開削以後も洪水発生はあり、1803年以降小杉村での洪水氾濫記録がほとんど欠如するのは、築堤等人為によるのかは現時点では不明である。

但し、小杉周辺は地形的には、図1に示すように自然堤防が発達し、小杉陣屋はその自然堤防上に設定されている。さらに、右岸下末吉台地沿いに古多摩川谷底があり、自然堤防帯では、左岸よりに河道固定され、右岸側は長く、後背湿地として残され、厚い表層タイプの軟弱地盤が形成されているという地質・地形条件（松田, 1973）を考慮すると、小杉村低地は内水型氾濫場となりえても、洪水流の影響を直接は受けにくいと推定される。洪水流が流入するとすれば、自然堤防を乗り越えるような規模の大きなものと考えられる。

## (5) 地域

各地形地域では、記録による年代的片寄りがあり（表3）、一概に論じられないが、上流部では現福生市熊川を筆頭に、その下流の拝島にかけて洪水氾濫が多い傾向がみられ、狛江市和泉・猪方、現府中市押立がこれに次ぐ。中流部では、現大田区下丸子が最も多く、その他現世田谷区上野毛、下野毛も多い。下流部では、下丸子下流、六郷を筆頭に羽田村まで洪水氾濫が多く発生している。

## (6) 土地利用と地形、流向（図1）

### a) 低地の土地利用

明治13年、14年測量の陸軍迅速測図をもとに、多摩川低地の土地利用を概観する。多摩川低地の土地利用は、本報告「18.開発、治水と洪水氾濫」にあるように、総体的には17世紀後半以降、明治時代前半まで大きく変化していないので、土地利用のあり方は氾濫地域を考察する上で、重要な資料となると考えられる。但し、堤防については、今回築堤時期を明らかに出来ず、陸軍迅速測図記載の堤防、土手などが江戸時代どこまで遡れるかは不明である。ほぼ陸軍迅速測図の図幅ごと、左岸・右岸別に上流から河口まで以下、概観する。

a-1) 多摩村～田中村（左岸）；多摩村西方に約1000mの堤防があり、堤外は草地、堤内は一部に田、他の土地利用は不明である。拝島村北北西から南南西に作目村、田中村まで断続的に堤防、堤内は田である。

小川村（秋留台地）～北平村（右岸）；多摩川は秋留台地東端の完新世段丘崖下を流下し、土地利用はされていない。その後、秋川と合流し、加住丘陵下を流下し、一部僅かに田畑、草地あるものの土地利用はほとんどされていない。段丘ないしは丘陵を側方侵食しつつ多摩川が流下するため、土地利用が不可能と思われる。

a-2) 宮澤村～立川村（左岸）；約1200mと約1600mの堤防が雁行配列し、両堤防に挟まれる低地は桑畑、堤外草地、堤内田である。

日野駅北西～石田村；日野駅北に約2000mの堤防、日野駅北の自然堤防上に桑畑、コナラを主体とする2次林、石田村の立地する自然堤防北の低地は草地で北西に延び、その他は主に田。荒井村、下田村、上田村は自然堤防上に立地する。

a-3) 青柳村～四谷村（左岸）；青柳村南から南東に約1kmの堤防、低地は田である。

石田村～一ノ宮村（右岸）；石田村南の浅川右岸から南東に約400m堤防、さらに南東に700mの地点から再び関戸渡し前まで堤防、堤内主に田、自然堤防上に集落である。

a-4) 四ツ谷村～是政村（左岸）；島状に点在する自然堤防上に集落、これら自然堤防群の南に不連続堤が続き、堤内は田である。

関戸村～是政村（右岸）；多摩丘陵の裾を多摩川が流下し、低地の面積狭く、土地利用はほとんどされていおらず、一部に桑畑程度である。当然、築堤もみられない。分倍河原の中州一部に桑畑がみられる。

a-5) 是政村～染地村（左岸）；是政村～下石原村までは集落の立地する自然堤防の南に堤防、堤内は田である。小田分村と長沼村の比較的広い中州の一部に桑畑がみられる。染地村では多摩川沿岸に荒地、桑畑があり、その北は田である。

大丸村～菅村（右岸）；是政渡の南から下流に矢野口村北まではほぼ東西に堤防が伸び、さらに、矢野口村から中野島村までも堤防がある。小さな自然堤防が島状に点在し、集落が立地する。堤外は桑、畑、畑、松林、コナラを主体の2次林、堤内や自然堤防と多摩丘陵との間の低地は田である。

a-6) 和泉村～大蔵村（左岸）；和泉・猪方村集落の立地する逆三角形をした立川段丘、駒井南の自然堤防、岩戸村～喜多見村までの北西～南東に延びる立川段丘、宇奈根村集落立地する立川段丘などに囲まれた低地が水田地帯、その外側は畑、荒地である。六郷用水取水口から洪水流が流入すれば、この水田地帯は内水氾濫域となることが推察される。同様に、宇奈根村から大蔵村にかけても、自然堤防と台地との間が田で、その外側は畑、荒地である。さらに、詳細に見ると、猪方村西方、登戸村との渡し「登戸渡」西北玉泉寺南の段丘崖下湧水を起点にする細流が南東方向に流れ、「登戸渡」北より南北に緩く蛇行し

つつ猪方村東方から駒井村へ流れている。この細流に沿って、その北側に土手通りが見られる。「登戸渡」東方、細流南には自然堤防と思われる高まりがあり、荒地、畑地となっている。前述の自然堤防とその南の多摩川との比高差よりも、細流との比高差は少なく、「登戸渡」より東方の土手通りを直接洪水流が襲う可能性は高いと思われる。土手通りが決壊すれば、洪水流は前述の自然堤防と立川段丘との間の低地である水田地帯に流入することは必然である。実際、1783年（天明3年）の洪水では、猪方村堤地間約124間が破堤し、猪方村より下流村々（駒井、岩戸、喜多見、宇奈根、大蔵、鎌田、岡本村）が被害を受け、同様の洪水は1783年以外も記録されている。細流南方の自然堤防の土地利用が荒地、畑地であるのも、「登戸渡」東方よりの洪水流の冠水を受けるためと推定される。

a-7) 二子渡付近（左岸）；自然堤防があるが、低地は畑である。

二子村～下野毛村（右岸）；自然堤防上に集落が立地するが、下野毛村の比較的広い円形をした自然堤防上には集落だけでなく畑もみられる。自然堤防と下末吉台地との間が田、その外側は諏訪河原である。

a-8) 二子村～下沼部（左岸）；自然堤防と台地間が田である。

宮内村～上丸子村（右岸）；Sの字を横にした形に分布する旧流路沿いに自然堤防が分布する。北見方村集落の立地する自然堤防に接続する堤防が、自然堤防群を繋ぎつつ上丸子村集落の立地する自然堤防まで連続する。この自然堤防を利用した堤防は極めて効果的と思われる。堤外は畑、草地、堤内に田が広がっている。

a-9) 下沼部村～古川村（左岸）；久ヶ原村が荏原台地の東南端に位置し、下丸子村、矢口村、安方村、今泉村、原村、小林村、道塚村、蓮沼村、古川村などの集落は、当地デルタ低地の微高地上に位置する。徳持村は呑川河口を閉塞する砂洲上に位置する。下沼部村、鶴ノ木村では多摩川沿岸に畑、台地沿いに田である。鶴ノ木村台地に接続する堤防が、下丸子村を経て南東に今和泉村まで延び、今和泉村から東に屈曲して原村へ至る。堤外は畑、堤内は田である。

上丸子村～小向村（右岸）；上丸子村、中丸子村、上平間村、古市場村、小向村等集落は微高地上に位置し、これら微高地群の外は畑、内は田である。また、上丸子村～中丸子村の間は畑、同じく、上平間村～古市場村間は畑、荒地で、荒地部分は旧河道である。上平間村から南に円弧を描いて堤防が小向村へ延びている。

a-10) 八幡塚村～羽田村（左岸）；集落は微高地上に立地し、河口まで堤防が延び、堤外は畑、梨畑、堤内は主に田である。

中島村～大師河原村（右岸）；連続堤が河口まで延びている。集落は集落は微高地上に

立地し、中島村北東の堤外は畑と桃林、田の堤外は梨林、堤内は田である。桃林は江戸名所図会（1835年刊行）にも「州河原桃林」として、「河崎渡し口より大師河原までの間にして、田園ことごとく桃の樹を栽ゑたり。」とある。

以上から、荒地など土地利用のされていない地域は、常習的洪水氾濫域の可能性が強く、桑畑、畑などは時に氾濫を受けやすい地域と思われる。

## b) 地形と流向

上流山地部では、現在の万年橋から調布橋にかけて、流れは東南東から北→南→北東→南西と急変し、調布橋から東青梅（下奥多摩橋下流）にかけては東流し、以後小作上（多摩川橋上流）までは南東に向きを変え、玉川附まで南流、東（羽村大橋）まで東流、永田橋まで南南東に流れる。従って、東青梅（下奥多摩橋下流）付近の右岸、左岸小作上、小作上～玉川附までの右岸、及び左岸羽村用水堰は攻撃斜面に位置する上、調布橋上流、河辺、永田橋付近に遷緩点が、小作上付近に遷急点がある。万年橋から調布橋にかけては、流向急変する事から、洪水氾濫を受けやすいと思われ、実際、釜ヶ淵の現青梅市郷土館の位置する郷土館面は現河床より5～6mほど高いが、増水時には冠水する可能性があるとされている（青梅市、1995）。さらに、小作上付近、羽村用水堰は洪水氾濫の記録がある。右岸の攻撃斜面に位置する地域については記録少ないが、土地利用がされていなかったためと思われる。

上流部では、永田橋から多摩橋まで南流、多摩橋から南東に向きを変え、牛浜（五日市線鉄橋）まで流下する。この間平井川が右岸より流入する。平井川は多摩川に比べ河床勾配が急であるので、上流山地部の降水の影響を合流点付近は直接受けると推定される。牛浜、熊川が攻撃斜面に位置することから、洪水氾濫の場となることが予想され、洪水記録の多さと矛盾しない。牛浜から拝島までは南南東に流下し、右岸より秋川が流入する。作目村（拝島橋）までは南東に流れ、右岸滝山が攻撃斜面となる。滝山付近に遷緩点があり、作目村から南南東に大きく向きを変える。作目村は本来現在と異なり、右岸にあり、1592～1596年の文禄年間か、1596～1615年の慶長年間に流失したとされる。これは、地形上滝山が攻撃斜面となっていることと矛盾しない。

田中村まで南南東に流下後、東に大きく向きを変え、大神村まで東流、大神（八高線鉄橋）に遷緩点があり、大神から宮沢で北へ屈曲し、郷地村まで南東→東南東と急変する。宮沢から郷地までは攻撃斜面となり、作目村、大神と遷緩点が連続することは、この地域の洪水記録の多さと調和的である。郷地から柴崎（日野橋）まで東流、柴崎に遷急点、以後左岸に青柳面が発達し、日野万願寺渡し（中央高速）まで南東～東流する。日野万願寺

渡しから関戸渡し（関戸橋上流）までは南東に流下するが、浅川が右岸より合流し、合流点付近に遷緩点、浅川合流によるためか一の宮より砂礫堆の発達が目立ち、網状河川の様相となる。関戸渡し下流に遷緩点、さらに大栗川、乞田川が右岸より合流する。押立まで東流した後、南東に大きく向きを変え、押立は攻撃斜面側となる上に、遷緩点を有し、洪水氾濫の場となることが予想される。押立から和泉までは、南東→東→東南東と流下し、左岸には自然堤防が連続し、右岸にも自然堤防が島状に発達、中野島村に典型的であるが、これら自然堤防上に集落が立地する。左岸の連続する自然堤防は、染地の遺跡などから縄文晩期以降から古代の間にかけて形成されたと推定され、近世には現在とほぼ同様の地形であったと思われる。和泉から猪方、登戸まで大きく南東に向きを変え、南に張り出した立川段丘に流れは突き当たる様相となる。旧河道を利用した和泉の六郷用水取り入れ口に洪水流が向かうのは自然である。猪方から駒井まで東流、駒井で南東に短く屈曲後、宇奈根まで東流、諏訪河原までは南東に流れる。駒井が攻撃斜面となり、宇奈根に遷緩点がある。諏訪河原から下野毛まで南流し、上野毛、下野毛が攻撃斜面となる。和泉から下野毛まで多摩川沿岸世田谷領までの洪水記録は多いことと、上記の地形は矛盾しない。

中流部に入り、下野毛から宮内まで南東に流れ、宮内で南に彎曲して、亀甲山に至る。この間、等々力に遷緩点がある。亀甲山が南に張り出し、右岸には自然堤防が発達し、狭窄部が形成され、鹿島田まで南流する。亀甲山下流は攻撃斜面となり、中流部から下流部の下沼部、下丸子が洪水氾濫の場となると予想され、記録と調和的である。亀甲山対岸には小杉、上丸子、中丸子、今井村などの自然堤防上の集落が多く、これら地域は直接、洪水氾濫の影響を受けなかったと推定される。

下流部では、鹿島田からS字に大きく蛇行する。左岸原、小林村が攻撃斜面となり、その下流では南河原、川崎が攻撃斜面である。南河原、川崎は小林村に比較すると、洪水記録は少ない。全体的に右岸川崎市域の記録は少なく、記録の掘り起こしが必要であるが、小林村で発生した洪水氾濫は内水型氾濫となり、洪水流は左岸側に広がり、南河原、川崎には達しないことも推定される。六郷・八幡塚村に遷緩点があり、南から東に大きく蛇行、八幡塚村が洪水氾濫の場となる。以後、南北に2度蛇行し、東京湾に至る。途中、羽田村は攻撃斜面である。

以上のように地形的構造から予想される洪水氾濫域と、記録された洪水氾濫域とは、よく一致する。即ち、一般に、山地から扇状地に入り、河床勾配が緩くなる所や、流向が大きく変化する地点の攻撃斜面側などや、支流との合流点下流など洪水氾濫の場となりやす

いことや、蛇行部では、河床勾配が小さく、洪水時に水位が上昇し、氾濫の影響が広範囲となるなどの特徴を有する。多摩川では扇状地に相当するのが、上流部であり、河川が蛇行するのは、中流から下流部にかけてであり。具体的には、上流部では小作上～玉川附までの右岸、福生・牛浜～熊川、滝山、狛江・和泉～猪方、中流部から下流部大田・下丸子とその下流左岸、右岸域である。但し、いずれの地域も常習的洪水氾濫の場となっていないことも注目すべき事実である。

## (7) 治水と地形

本報告では、近世における多摩川の治水とそれが洪水氾濫を防ぐ上で果たした役割については、十分に調査研究されておらず、今後の課題となっている。岩屋（1986）は近世前期から近代にかけての開発と治水を概観する中で、狛江～亀甲山間に顕著に見られる多摩川の「不自然な左岸側への偏り」を指摘している。この偏りによって、右岸側には広い氾濫域が保証され、近世末期に近世初期、中期を倍加する水害が発生し、右岸側に比して左岸側での水害が卓越するのは、「ある意味で人為的」の可能性を否定できない事、近世初期に開発されたとみられる右岸久地（現川崎市）横堤が流れを左岸側に押しやっている事や、右岸堤に比較して左岸堤が人為的操作によって相対的に低くされていた可能性などを指摘している（岩屋, 1986）。狛江～亀甲山間の対岸の多摩丘陵～下末吉台地下には、古多摩川谷があり、松田（1973）が明らかにしたように、古多摩川谷埋積の進展に伴う右岸側から左岸側への流路移動と左岸側への流路固定、これに付随して右岸登戸・中野島から小杉にかけての自然堤防群の発達があり、むしろこれらの自然条件が「不自然な左岸側への偏り」の原因と考えることは、岩屋（1986）がいみじくも人為的操作について「決定的な根拠はない」と述べている現状では、十分根拠のあることと思われる。河道の固定化、自然堤防群の発達を背景に、自然堤防群を補強するものとしての連続堤、蛇行部のショートカットや、蛇行する旧流路沿いへの築堤などが、水防に一定の役割を果たし得たと推定される。

## 7. 洪水型

全体としては、「被害洪水」が約60%を占める。「被害洪水」では河川洪水、河川溢水、内水型氾濫、川欠の順となっている（図15）。

洪水型と地域地形の相関は、上流部、中流部、下流部いずれも河川洪水が優占するが、中流部では河川溢水が河川洪水とほぼ同程度発生している。中流部で河川溢水が発生して



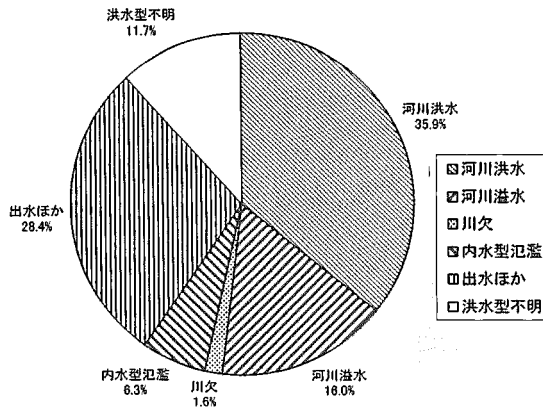


図15 多摩川洪水型

いるのは全て下丸子村周辺である。従って、左岸域の中流部最下流から下流部で河川溢水が多いことになる。下丸子村付近には、大きく蛇行する旧流路があり、その下流で多摩川はS字に蛇行している。蛇行部する河川では、河床勾配が小さく、洪水時に水位が上昇し、氾濫の影響が広範囲となる、即ち、河川溢水を発生しやすい。下流部はデルタ平野であり、自然堤防、砂州が形成されている。これら自然堤防、砂州間は後背湿地となっている。そのため、1723年（享保8年）9月7～9日の台風による河川溢水は、下丸子村湛水数10日とあるように、破堤・溢水により、多摩川流域では比較的長期にわたり湛水するとともに、集中豪雨などによって、内水型氾濫の場となりやすい。下丸子村付近で河川溢水が多いのはその地形的条件によると推定される。

## 8. 水害原因

### a) 水害原因の季節性

洪水氾濫では、大雨を水害原因とする場合が最も多いが、台風、暴風雨を合わせると、約32%（図16）と多くなる。台風による場合は8月、9月が多く、水害原因不明のものも8月～10月にかけて発生している場合が多い。台風と8～10月季の暴風雨、大雨を加算すると約36.5%となり、水害原因の季節性が明瞭である（図17）。「被害洪水」でも同様に、台風と8～10月季の暴風雨、大雨計が約43.3%となり優占する。「出水ほか」は7月、10月には「被害洪水」より多く発生している。梅雨期の降雨は「被害洪水」まで至らないことが多いことを示唆する。日本の流出のピークは融雪期と梅雨・台風期であり、関東・東海地方・西日本では夏から秋にピークが現れる（高橋ほか, 1980）。利根川研究会（1995）は、日本の洪水発生 of 主な気候的要因として、台風と梅雨前線をあげ、台風時には湿った空気

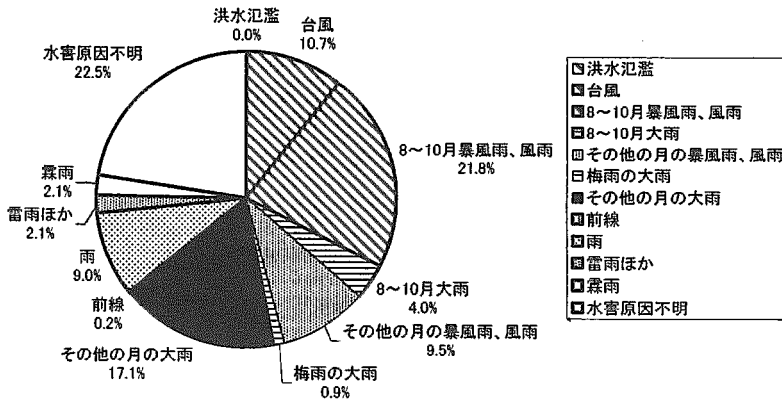


図16 多摩川「洪水氾濫」水害原因

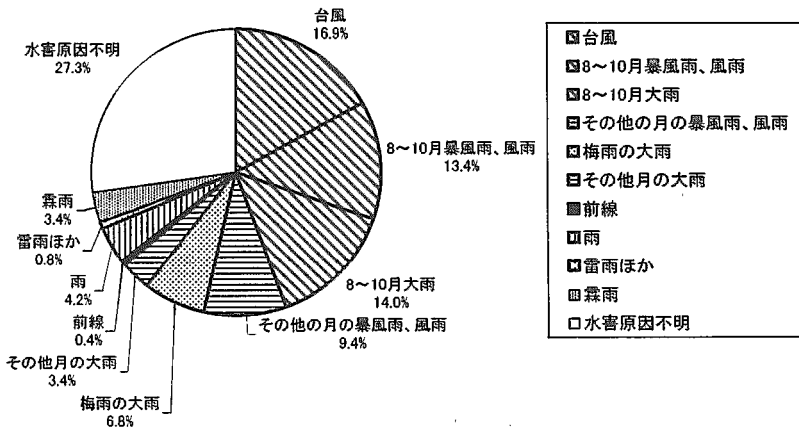


図17 多摩川被害洪水水害原因

が南東方向から流入、列島を南北に走る山脈により、山脈の東側で洪水発生し、梅雨前線の場合は雨風が南西から流入するため、西側で豪雨となるとしている。近世における多摩川においても同様の地形的、気候的要因が働いているといえる。

#### b) 10年ごとの「被害洪水」

10年ごとの年代別「被害洪水」の発生と水害原因との関連は（図18）、月不明を除けば、台風によるものが多く、さらに月ごとの発生をみると（図19）、「8月～10月」の台風、暴風雨、大雨などによる場合が、1750年代、1780年代を除いて、全て優占する。1750年代は6～7月の発生が多い。各年代の「被害洪水」発生件数が1550年代から19250年代までの「被害洪水」平均発生件数（10年ごと）を上回るのは、1720年代、1730年代、1740年代、1750年代、1770年代～1790年代、1800年代、1820年代～1870年代、1890年代～1910年代である。このうち、1770年代は9件のうち台風はなく、「6～7月」「4～5月」が2件ずつ、

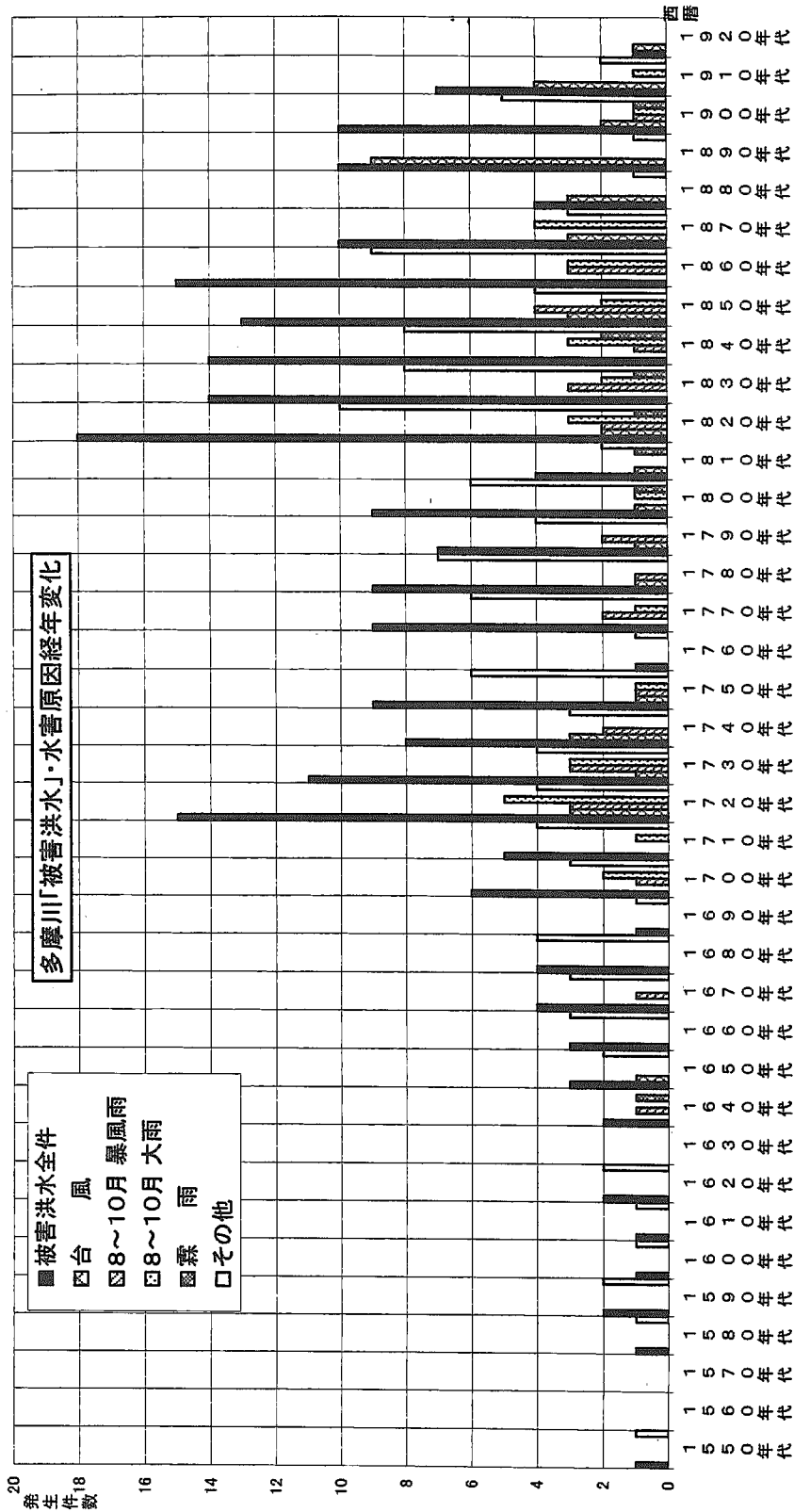


図18 多摩川被害洪水・水害原因経年変化

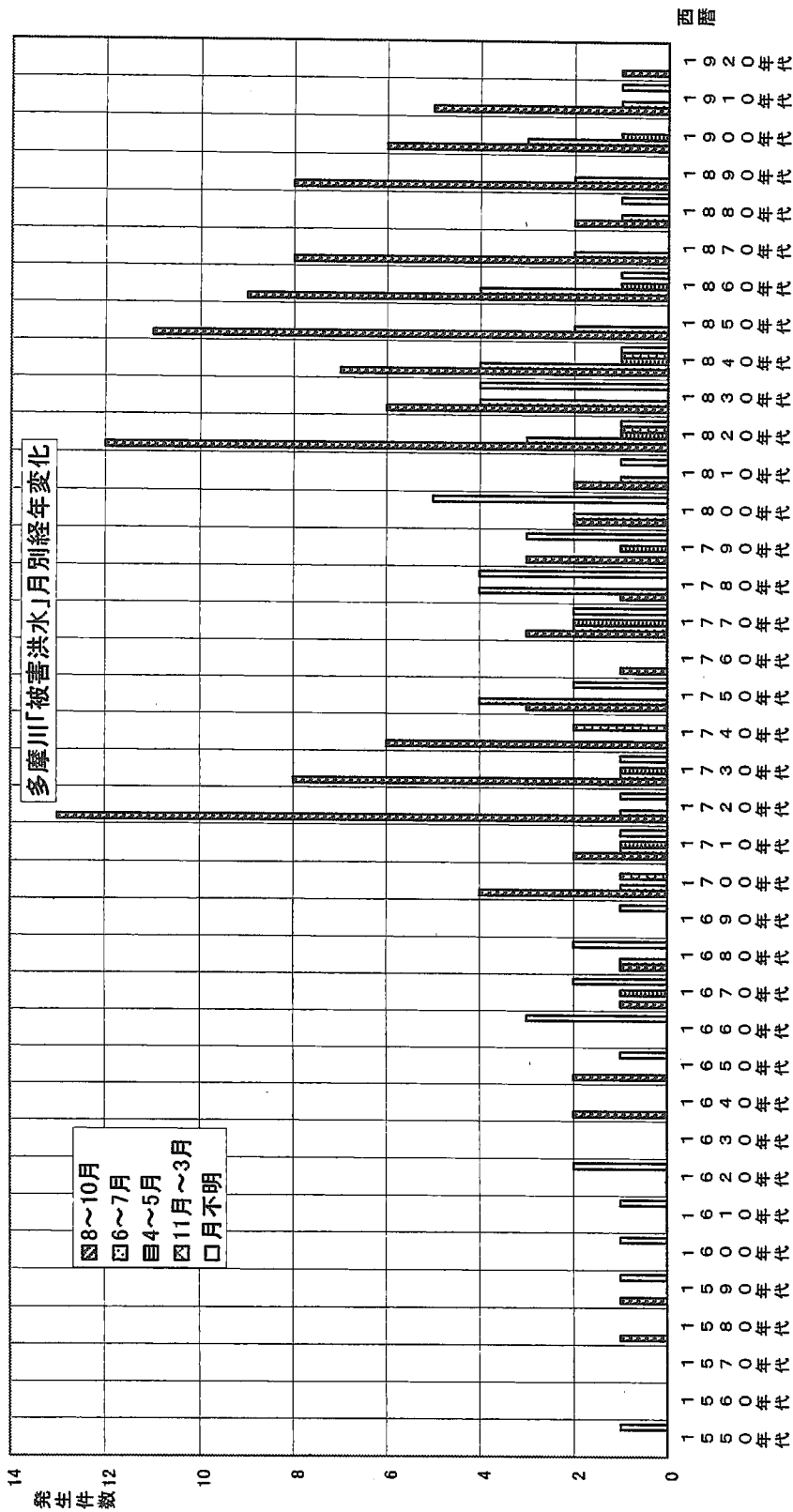


図19 多摩川被害洪水月別経年変化

1820年代は18件のうち「8～10月」以外の「6～7月」などが5件、1830年代は14件のうち、台風がなく「6～7月」が4件、1840年代は14件のうち、台風がなく「8～10月」以外の「6～7月」などが6件あり、これらの年代は6～7月などにも比較的多くの「被害洪水」が発生している。

年発生件数の多い年代をみると、例えば、1822年から1828年までのうち、1822年は5/16（雨）、6/12（大雨）、7/13～15（雨）で出水、7/13～22（霖雨）で河川洪水、7/29（暴風雨）河川洪水、9/10（大雨）出水、10/5,6（大雨）河川洪水、10/15（大雨）出水で、この年6～7月「京都、江戸及び諸国長雨」（日下部, 1973）とある。同様に、1823年には6/25と、7/19内水型氾濫、7/22～28に内水型氾濫や河川洪水、9月に河川洪水が起き、7月下旬が霖雨であったことがわかる。1824年は5月に河川洪水、1825年は秋に河川洪水であるが、1826年には6月に出水、10月に河川洪水、1827年は7月に出水、1828年は6月に内水型氾濫と出水が2度、7月に「出水ほか」、8月に河川溢水と河川洪水の2度、11月に「出水ほか」が発生している。年に複数洪水氾濫の発生した年は、6～7月の洪水氾濫も多い傾向がみえる。

### c) 台風

台風による「被害洪水」は、左岸23件、右岸1件、両岸15件と、両岸が全体に占める割合が、他の水害原因に比較し多い。10年単位で、10件以上発生している年代は、1830年代を除き、両岸で発生が含まれ、平均件数以上発生年代では両岸か右岸が含まれる。特に、1750年代、1820年代、1840年代、1850年代は両岸での発生が目立つ。

台風による場合、上流山地部から下流まで全域が4件、上流部から下流部までが7件と、上流部と下流部が11件とあり、「8～10月の暴風雨」などと比較しても、全域ないしは全域に近い形で「被害洪水」が発生し、上流部単独は8件あるが、中流部、下流部単独での発生は各1件と少ないのが特徴である。台風の場合は、多摩川氾濫域全域が一挙にその対象となり、洪水エネルギーの拡散や減衰が少ないためと推定され、洪水氾濫の規模の大きさを示唆している。日本の河川の特徴として、大河川でも上流山地に豪雨による洪水が約2日で河口まで達し、東北日本の降雪を除けば、降雨と出水の時期が一致することを、高橋（1999）はあげている。

これに対し、大雨による場合は、「8～10月」や「6～7月」でも下流部単独の発生が多い。降水の影響が次第に下流部に集中し洪水氾濫を起こすと推定される。台風と大雨では洪水氾濫の形態がまったく異なるといえる。

## 9. 崩壊

水害原因となるような降雨により斜面崩壊が発生し、大量の土砂が河道に供給され、洪水氾濫の原因ともなる場合がある。多摩川では、上流山地青梅で、1713年（正徳3年）、1728年（享保13年）、1734年（享保19年）、1742年（寛保2年）の4件、山崩れ＝斜面崩壊が記録されている。1713年は大雨で、沢での崩壊や山崩れによる倒木や、道の崩壊が起きている。1728年は台風で、9月2日山崩れ、1742年は台風により8月30日、支流滝本川で崩壊があり、民家が倒壊するとともに、土砂により水位が上昇したと推定される。浅川でも1628年（貞享3年）に山地崩壊堰止めで黒沼田、駒木野、佐戸、小高井洪水被害とあり、山地崩壊と土砂堆積でダムアップしたとみられる。青梅の記録は「谷合氏見聞録」、「市川家日記」を中心とし、他は木村（1981）によってまとめられたものによるが、木村（1981）によれば1698年（元禄11年）から1897年（明治30年）までは、信頼に値する資料とされる。木村（1981）は青梅の自然災害の特徴として、地形異変によるものより気象異変による災害が多く、台風（5月から10月）による災害が多いとしている。その理由を秩父層群から山地が構成されているなど、地質の安定に求めている。青梅では48件の洪水氾濫がみられ、そのうち崩壊を伴うものは4件約8%であることは、木村（1981）を支持しているといえる。

## 10. 土砂堆積

一般に、山地では、急勾配の斜面からそれに続く河川へと急激に勾配が減少するために、土石流など上流のから多量の土砂が供給されると、扇頂などで急激に堆積し、時に氾濫を起こす、土砂災害が発生する（水山，1998）。このような土砂災害を含めて、洪水流による堆積について検討する。洪水記録では、「平州砂場」や「砂押掘」、「石砂や砂入り」という記述があり、これらは堆積による被害を示している。

### 土砂堆積

	左岸 (件)	右岸 (件)	備 考
上流部	15	3	旧作目村(右岸) 2回、福生4回、狛江6回
中流部	5	0	下丸子2回、鎌田、等々力1回づつ
下流部	1	0	

表3に示すように、上流部、特に左岸の場合が多い。上流部では右岸旧作目村2回、福生4回、狛江6回となっている。中流部では下丸子2回、鎌田、等々力、小山1回づつであり、山地からの土石流堆積の記録はみられない。

## 11. 流木

洪水時には崩壊、土石流、河岸浸食、州の破壊などに伴い樹木が流木として流出する(水山, 1998)。小橋(1993)は溪流において、土砂の生産に対応して流木が発生する事を示している。流木は上流では土石流に含まれ氾濫の要因となり、下流では橋脚、橋桁に流木が集積、ダムアップすることから、流木止めが現在設置されている河川がある(水山, 1998)。近世においても荒川では1742年(寛保2年)の洪水時に現在の長瀨町で流木が集積、ダムを形成し、水位が約18m上昇したとされる。多摩川では1762年(宝暦12年)5月27日、支流秋川で桧原村御林の材が流失したことや、1907年(明治40年)8月24日、熊川で流木が水車小屋に衝突した事がある程度で、記録上流木による被害は読み取れない。これは、先述の土砂災害の少なさとも対応している。

## 12. 高潮

東京低地においては台風に伴う高潮型洪水が1680年(延宝8年)以来記録され、一つの洪水型を構成している(建設省国土地理院, 1963)が、多摩川においては多くなく、これは東京低地に比較して、多摩川の河床勾配が急であるためと思われる。

## 13. 流路移動

流路移動(河道変遷)を伴う洪水氾濫は、12回記録されている。菊地(1964)は大田区光明寺池から矢口新田神社にかけての旧河道の存在と、検地帳などから、1644年(寛永21年)から1702年(元禄15年)の間に、旧河道からほぼ現在の位置に多摩川が移動したと考察している。この移動を含めれば、13回となる。上流部では、府中が3回、狛江2回、拝島～福生間1回、熊川、調布1回づつである。上流部は網状河川帯であるので、瀬が変わるのは自然であるが、記録されているものは耕地などの帰属に関する場合である。従って、帰属に関わらないような瀬の移動は、これよりはるかに多いと思われる。江戸名所図会巻之三の登戸から宿河原(川崎市多摩区)を描いた「多磨川」では「玉川は砂場広豁にしてその流れ一帯にあらず。多く雨後などには渡り口移転して定まることなし」(ちくま学芸文庫版を使用)とあるのは網状河川帯の特徴を捉えているといえる。中流部では下丸子、下丸子上流の沼部で1回づつ、下流部では羽田村1回となっている。多摩川は上流部、下流部では台地と丘陵、或いは台地と台地に挟まれ、大きな移動が起こるのは、中流部下流から下流部にかけてであるので、大きな移動としては3回の移動となる。この他、浅川で1822年(文政5年)6月1日、梅岡新田において北から南に流路移動している。

## 14. 代表事例と自然条件

### (1) 代表事例

上流部から下流部まで、あるいは上流部山地から下流部までの連動洪水については、既に事例を検討しているので、それ以外の被害記録の多い1786年（天明6年）、1846年（弘化3年）について考察する。

#### 1786年（天明6年）の洪水氾濫

1786年8月5～11日までの台風によるものである。利根川、荒川水系で大きな被害を出しているが、多摩川ではその規模の割には記録が少なく、上流部狛江付近、下流部六郷が河川溢水程度である。記録通りだとすれば、関東平野西部には台風の直撃はなかったと推定される。

#### 1846年（弘化3年）の洪水氾濫

1846年8月初めから8月中旬までの引き続く大雨による洪水は、多摩川だけでなく、利根川、江戸川、中川、荒川、元荒川などでも発生している。この時の多摩川低地上流部の洪水については、柴崎村（現立川市柴崎）の鈴木平九郎による「公私日記」が詳しい。

「公私日記」による洪水氾濫は、日野宿を中心とする日野低地について詳しい。日野台地北西から南東に多摩川の氾濫低地、西から東に浅川の氾濫低地、北西に谷地川とその支流の氾濫低地が台地と接している。台地周辺の氾濫低地より1～3m高位に、栄町面と呼ばれる完新世小段丘が分布し、栄町面は拝島面に対比されている（角田, 1989）。栄町面を含めた沖積低地は、島津ほか（1994）によって、多摩川・浅川合流点低地とも呼称されている。島津ほか（1990）は低位段丘面、沖積面とこれらの地形面上に分布する旧河道、自然堤防を分類した。島津ほか（1994）は上記の地形分類を、L1, L2, L3の3面に修正分類した。L1面が角田（1989）の栄町面に対比される。日野宿はL1面上に位置する。現河床とL1面との比高は、中央線多摩川鉄橋付近で5～6m、別府神社付近で3m程度である。L2面は多摩川左岸の中央線鉄橋上流側、浅川右岸および多摩川と浅川に挟まれた地域に分布する。現河床とL2面との比高は5 m以下である。L3面は現多摩川および浅川沿いに分布する。1846年（弘化3年）の洪水氾濫は、これら完新世段丘の全面におよんだ。

8月2～9日にかけて上流部拝島用水堰の氾濫を皮切りに、8月11日には大雨で、現昭島市の大神村下が用水端3間程欠崩れるとともに、日野渡船が止まっている。以後雨は8月中旬まで降り続く。8月14日も出水で日野渡船は止まっている。8月17日には出水で下和田橋下の板橋を引きあげている。8月18日には福生、昭島、立川、日野、八王子の広い範囲に被害が出る。熊川村、拝島、秋川村、宮沢村、築地村、福島村、日野宿、万願寺村、柴崎村



などであり、熊川村千手院下は洪水流が流下し本瀬になる。拜島、秋川村の50間程下から竜津寺下迄一円が浸水している。荒所通り川敷。宮沢村前も本瀬となり、耕地浸水。新開場通り冠水である。8月19日には柴崎村付近の多摩川は8尺ほど満水となる。8月20日にはこれまでの満水で一番となり、宮沢村、大神村、築地村、柴崎村、日野宿で破堤し、田畑冠水、石田村居宅土蔵取崩。現日野市の万願寺通りは本瀬となった。しかし、水流は速く、柴崎、谷保村は被害なく、府中用水が乾上がっている。8月24日には止まっていた日野渡船を再開したため、56人乗り船が転覆という災難が発生した。小野晴彦家文書（昭島市史）によると、宮沢村の中根氏給地ではこの洪水により7反6畝25歩欠損が出ている。この間（8月11～19日）下流の左岸現狛江市和泉村では堤防に欠損が生じ、満水となり（狛江市史料集第4（1975）の「弘化3年6月玉川堤切所普請願（案）」）、猪方、駒井村の境より上流の堤防が100間ほど決壊し、和泉村で水田11町8反歩のうち1町2反歩が水腐、畑6町4反の内4町が損害を受けている。和泉村より下流の中流部、下流部では洪水の記録は現時点ではみあたらない。

天候は「公私日記」では、8月10日から8月19日までが連続して雨天、狛江市史料集第4の「弘化3年6月玉川堤切所普請願（案）」では、8月14日から8月19日が大雨となっている。

洪水流は、左岸の熊川村の千手院（善壽寺）付近を流下した後、右岸高月村を襲い、左岸拜島村から下流の柴崎村にかけての堤防を破堤し、堤外地の多くが浸水した。柴崎村まで来た洪水流は、ここで南へシフトして右岸の日野宿へと流下し、柴町面の東に広がる低地部北部へと向かい、日野渡し下流の万願寺渡の南に位置すると推定される「万願寺通り」付近流下、その東南石田村の居宅土蔵を取崩し、流速早く東南に本流沿いに流れたと思われる。その後の水流は早く、柴崎村、谷保では被害が出ていない。左岸高幡村から落川・一の宮にかけては洪水記録がない。上流部で発生した洪水氾濫は、そのエネルギーが拡散したためか、中、下流部に影響が現れていないのが1846年の特徴と言える。

1786年（天明6年）は中流部での洪水氾濫がなく、1846年（弘化3年）は中流部、下流部での洪水氾濫がない拡散型洪水氾濫といえる。

江戸時代の記録では日野付近の洪水氾濫の記録は少ない。これは、日野では完新世段丘の発達（高野ほか、1999）があり、これを乗り越える規模の洪水氾濫が少なかったこと、逆に言えば、1846年（弘化3年）の洪水氾濫は、日野付近でのものとしては規模の大きな洪水といえる。一方、1907年（明治40年）や1910年（明治43年）の洪水氾濫では、相次いで日野が洪水氾濫域となっている。1907年8月25日、東京横浜間不通、日野立川間不通と

あるように、鉄道橋脚の存在が水位上昇をもたらした可能性が推定される。

## (2) 明治期の「被害洪水」

洪水氾濫発生件数自体は、明治に入り明瞭な多発ピークを示さないが、明治後半になるにつれ、「被害洪水」の規模は大きくなる。全国的に、明治10年代後半より全国的に大洪水発生し、これは、明治以来の高水敷堤防により、江戸時代と豪雨の量同じでも洪水流量はるかに増加することによる（高橋裕, 1983）。多摩川においては、高水敷堤防が本格的に建設されるのは、1933年河口～二子間の河川改修工事竣工以降である。従って、堤防による洪水流量増加は考えられず、東海道線、甲武鉄道等の鉄道架橋や六郷橋などの架橋が増水をもたらすと推定される。

## 15. 支流

多摩川支流についての、洪水氾濫の記録は少なく、「石川日記」を中心とする浅川のものが唯一まとまった記録である。ここでは、1720年から1925年までの記録を扱った。

浅川は、八王子市陣馬山麓に源を発し、城山川、南浅川、川口川、山田川、湯殿川等の各支流を併せ、日野市高幡地内で多摩川に合流する流路延長約35.6km、流域面積約156 km<sup>2</sup>の多摩川水系第二位の支流である。浅川の第一の特徴は、多摩川水系としては唯一の扇状地河川であることである。中流部に八王子盆地を有し、北浅川、南浅川などによる複合扇状地が形成され、扇状地の一部は沖積段丘となって高く、河川乱流を許す扇状地面は狭小である（岩屋, 1986）。近世初期には八王子の新町一坊宿の浅川沿岸に石見土手が築かれ、1658～1661年の万治年間には浅川は北に付替えられたという（岩屋, 1986）。

1720年から1925年までの浅川における洪水氾濫は168件記録され、そのうち「被害洪水」は36件と少なく、「出水ほか」が「被害洪水」を上回っている。洪水氾濫頻度は0.828だが、「被害洪水」頻度はその約1/5の0.1773である。

「出水ほか」の年変動傾向は（図20）、1728年、1745年、1754年にピークを持ちつつ、1762年に極大値となるまで増加し、以後19世紀初頭まで小刻みに増減しつつ減少し、その後1822～1824年にやや増加後、減少傾向となり極めて低率の発生となるが、1867、1906年に弱いピークを持つ。

「被害洪水」（図21）は全体に低率だが、1751年、1791年、1822年、1911年に弱い発生ピークがみられる。

洪水氾濫全体（図22）では、「出水ほか」の年変動傾向に引きずれ、極大値を示す1762年

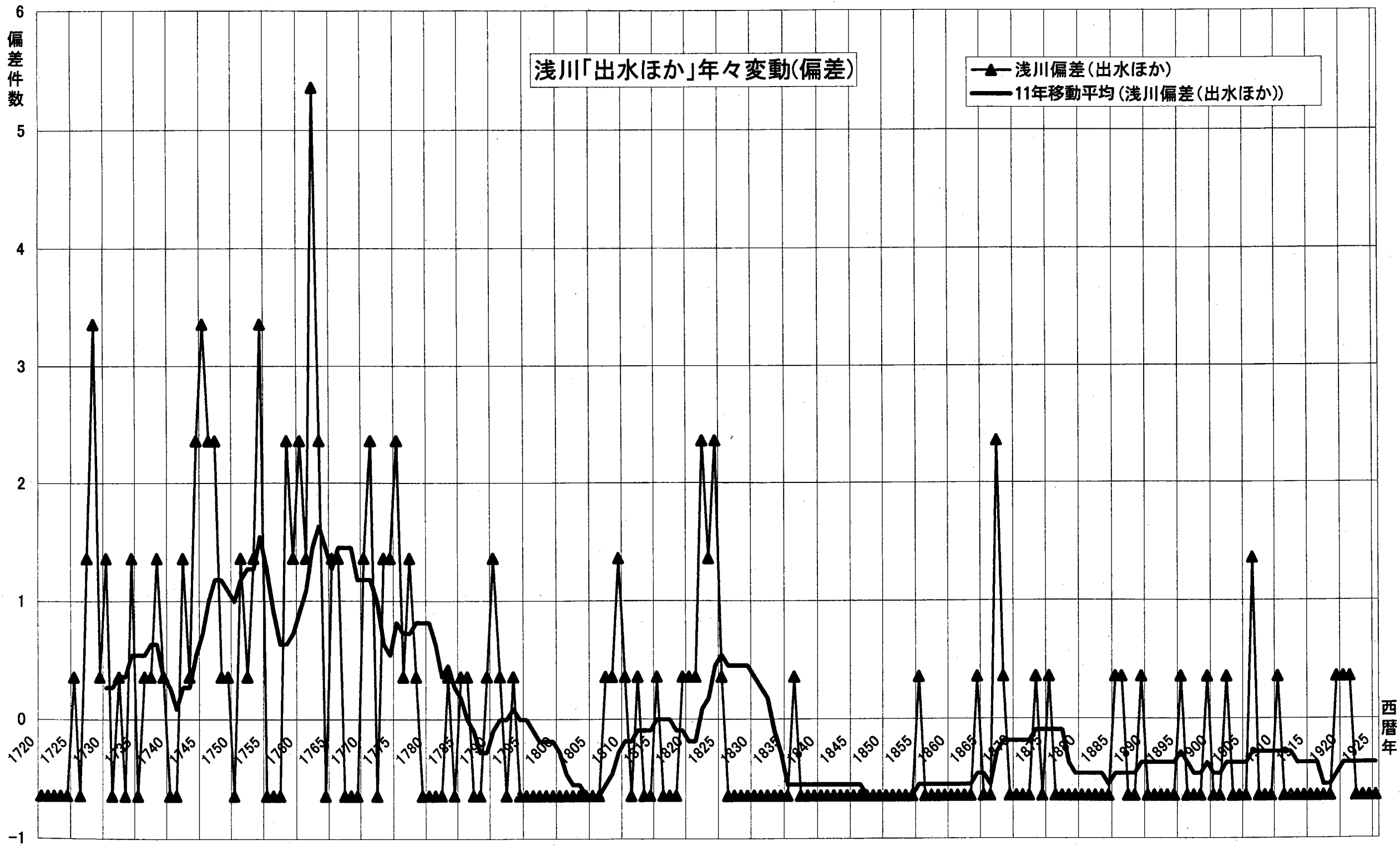


図20 浅川「出水ほか」年々変動 (偏差)

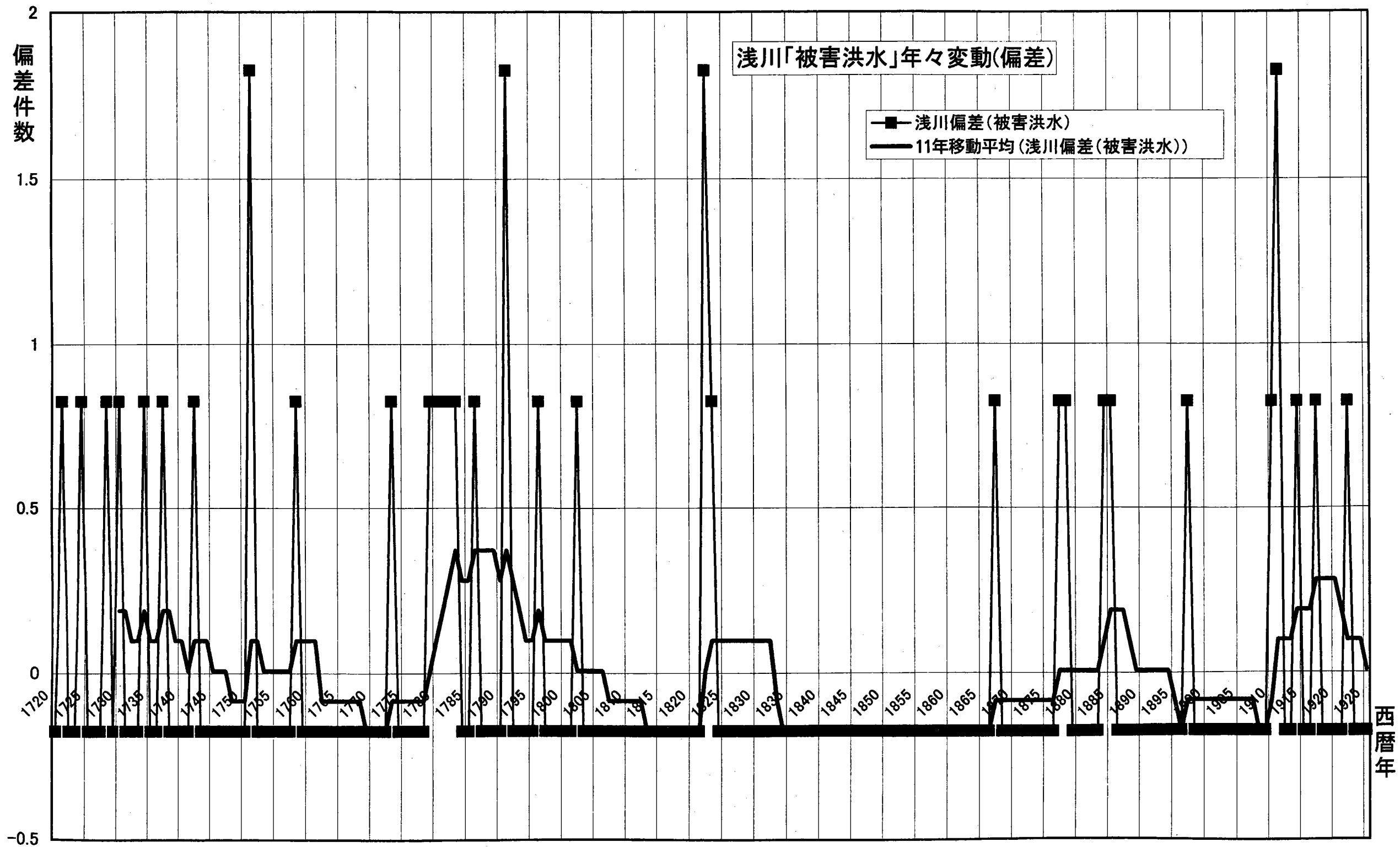


図21 浅川「被害洪水」年々変動(偏差)

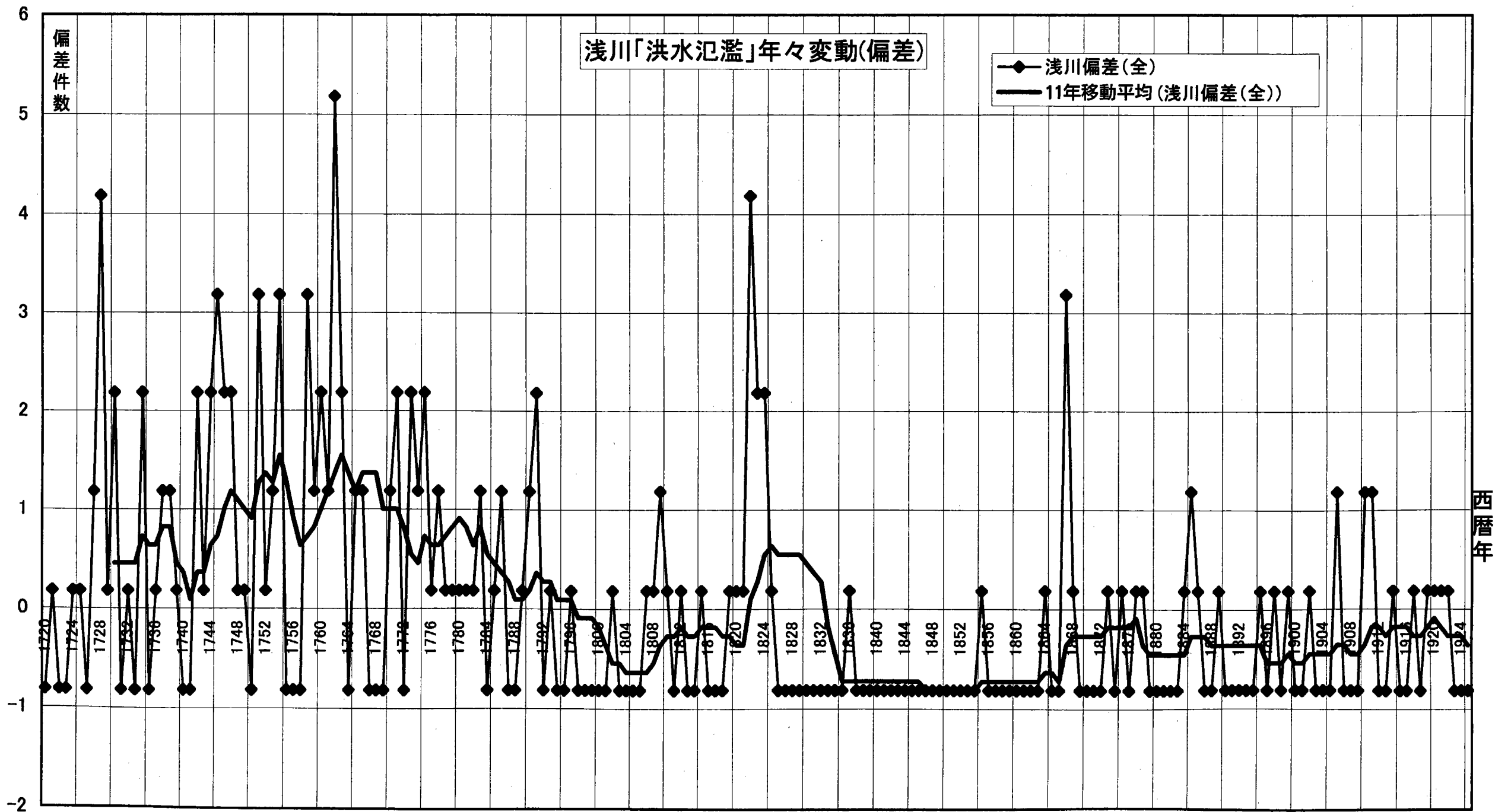


図22 浅川「全氾濫」年々変動(偏差)

まで増加傾向、以後19世紀初頭まで減少、その後1822年にピークを持って増加した後、低率の発生となるが、1867年のピークが目立つ。1867年は「出水ほか」「被害洪水」ともピークとなっている。

10年単位の経年変動を図23, 24, 25, 26に示す。「出水ほか」では、1720年代から1760年代にかけて増加し、1720年代から1770年代が多発期となり、以後急減して低率の貧発期が1810年代まで続き、1820年代に再び多発期となり、その後急減して、1850年代まで貧発期、1860年代に増加するが、平均発生件数を越えることなく、1880年代、1900年代に弱いピークを示しつつ低率の発生となる。「被害洪水」では、1720年代から1790年代までの間が、3つの多発期（1720年代～1730年代、1750年代、1780年代～1790年代）に細分され、1780年代が極大となるが件数は多くない。1810年代まで減少後、1820年代に再び多発期となり、以後1830年代～1860年代が貧発期、その後増加し、1900年代の貧発期を挟んで、1890年代、1910年代に極大となり、1920年代に減少に転じる。洪水氾濫全体では、1720年代～1780年代、1820年代に多発期があり、傾向的には18世紀前半から後半にかけて多発期があり、洪水氾濫が集中、以後急減した後、1820年代に増加多発し、その後、全体的には低率な発生であるが、1890年代、1910年代に弱いピークを示す。

水害原因は台風や8～10月の暴風雨等による場合が、約40%を占め、多摩川本流とほぼ同様である（図27）。多摩川を含めて、後述の荒川や大井川などは19世紀前半から後半にかけて、多発期が頻繁に現れるのに対し、浅川は1820年代、1890年代を除き顕著な多発をみせないが、多摩川本流の洪水氾濫多発期（1720年代～1750年代、1780年代、1820年代～1870年代、1890年代～1910年代）や、「被害洪水」多発期（1720年代～1750年代、1770年代～1800年代、1820年代～1870年代、1890年代～1910年代）には、浅川も多発するか、多発しなくても前後の時代に比べ、発生件数は増加しており、洪水氾濫多発・増加の時代的傾向には類似性が推定される。一方、浅川は18世紀後半以降全体的に減少傾向を示しており、この減少が浅川の特性的か、記録上の問題や築堤など外部要因によるかは不明である。

## 16. 他の河川との比較

多摩川と同様、東京湾に注ぐ荒川、多摩川に比べ扇状地からなる広い氾濫原を有する東海型河川の富士川、大井川の各3河川と多摩川の洪水氾濫を比較する。多摩川の流域面積1240km<sup>2</sup>（流域面積全国順位50位）、幹線流路延長138km、比流量1.97m<sup>3</sup>/秒・100km<sup>2</sup>であるのに対して、荒川の流域面積2940km<sup>2</sup>（流域面積全国順位19位）、幹線流路延長173km、比流量2.46m<sup>3</sup>/秒・100km<sup>2</sup>、富士川の流域面積3990km<sup>2</sup>（流域面積全国順位15位）、幹線

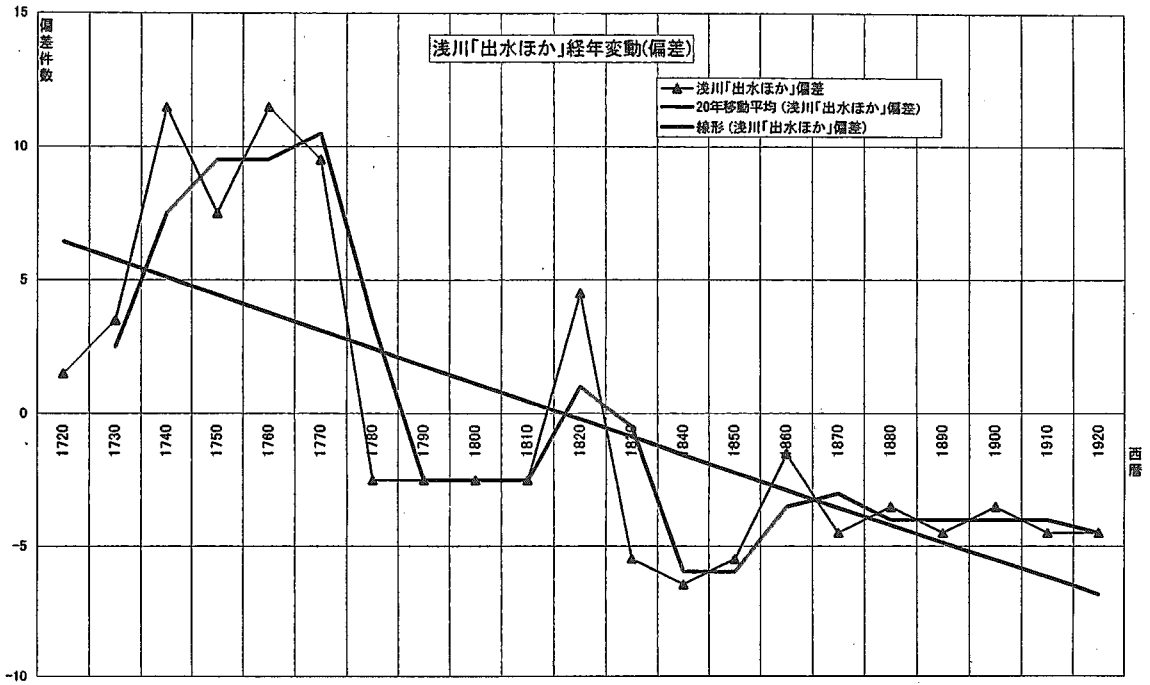


図23 浅川「出水ほか」経年変動（偏差）

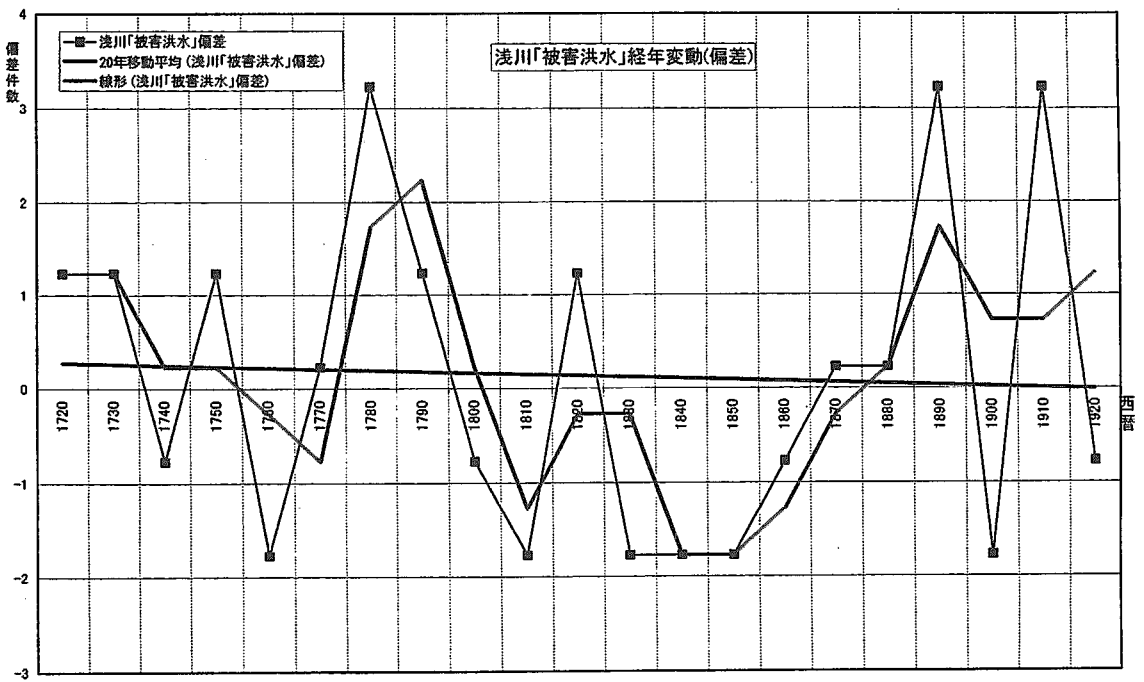


図24 浅川「被害洪水」経年変動（偏差）

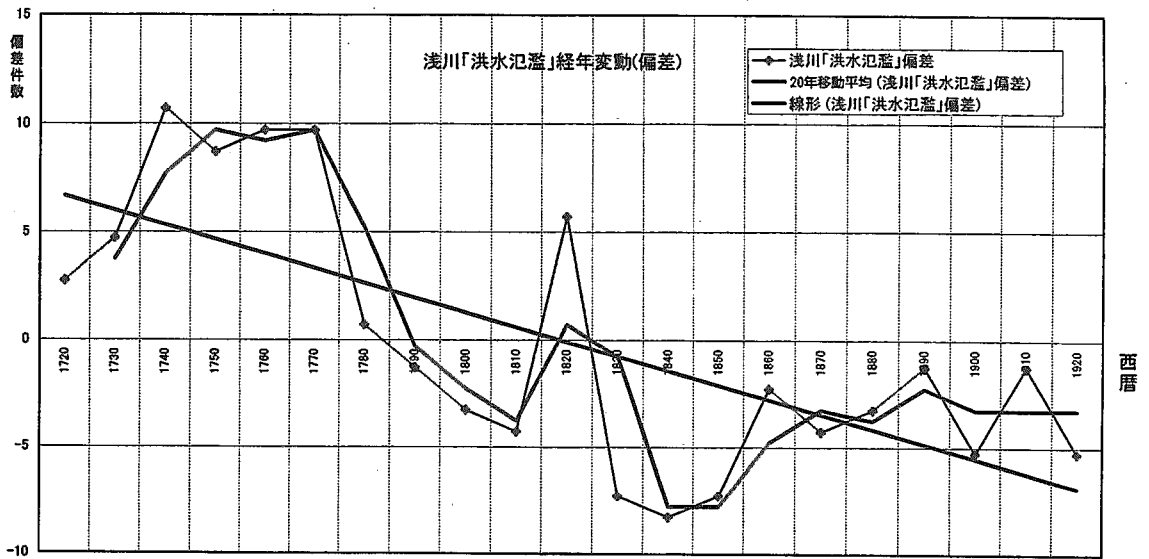


図25 浅川「全氾濫」経年変動(偏差)

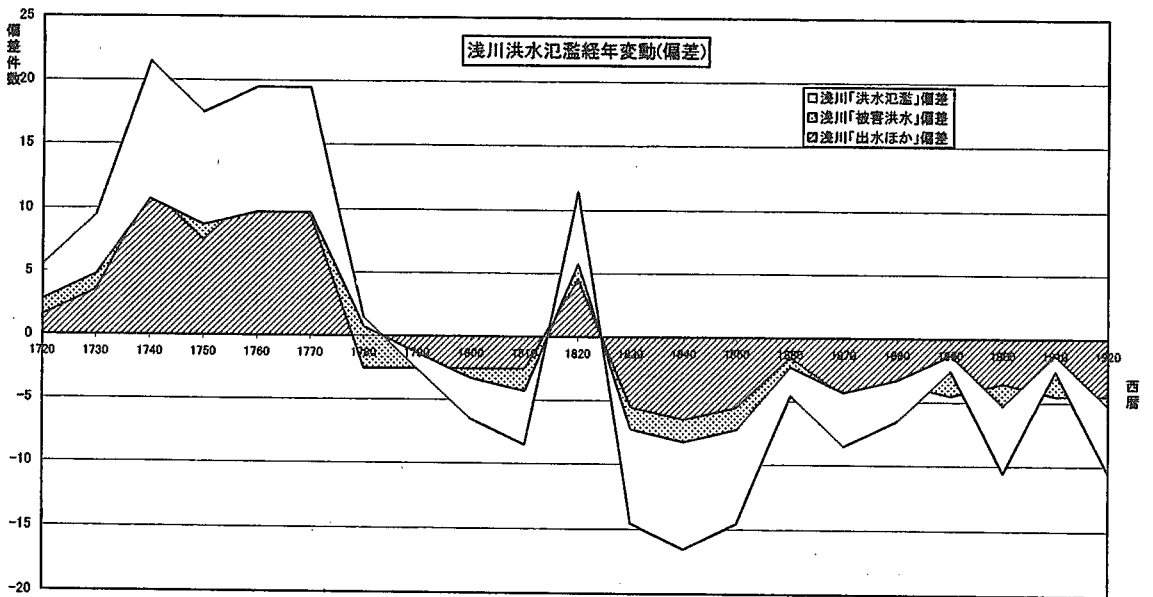


図26 浅川経年変動(偏差)

流路延長128km、比流量 $2.74\text{m}^3/\text{秒} \cdot 100\text{km}^2$ 、大井川の流域面積 $1280\text{km}^2$ （流域面積全国順位48位）、幹線流路延長168km、比流量 $6.37\text{m}^3/\text{秒} \cdot 100\text{km}^2$ である（平成13年度理科年表）。長さでは、富士川、荒川、大井川、多摩川の順であり、比流量では大井川、富士川、荒川、多摩川の順に大きい。河川下流部氾濫域の流域面積に対する比率は、扇状地を持たない多摩川が最も狭小である。



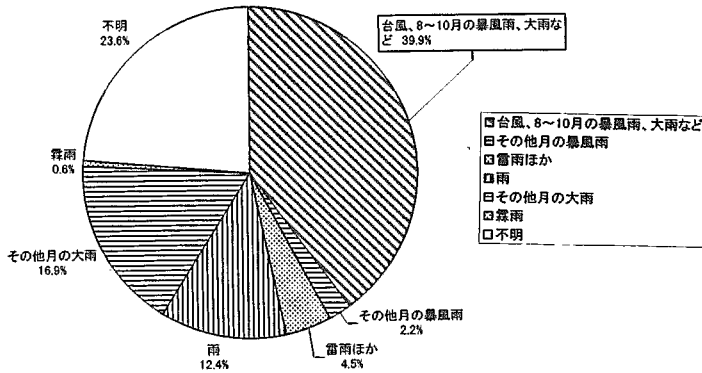


図27 浅川水害原因

### (1) 東海型河川

日本最高の山脈・赤石山脈に源流を持ち、太平洋岸や駿河湾に向け急勾配で流下する富士川、安部川、大井川、天竜川などは、急流河川として知られ、「東海型河川」の名称で一括される事がある。赤石山脈は年降水量が3,000<sup>ミリ</sup>前後ないしはそれ以上を示す多雨地であり、急峻な山地から急勾配で流下してくる河川は豪雨時には膨大な量の水と土砂を一挙に下流平野にもたらし、扇状地性の平野が形成されている。多摩川（山地部で1,600～2,000<sup>ミリ</sup>）に比較し、山地部の降水量が1,000<sup>ミリ</sup>以上多く、平野が扇状地性であることなど、多摩川と気候、地形を異にする東海型河川平野での洪水について検討する。

松本繁樹（2000）によって、大井川、富士川など「東海型河川」の近世における「被害洪水」が研究されている。松本繁樹（2000）による大井川、富士川洪水年表を表4に示す。松本繁樹（2000）による大井川、富士川の「被害洪水」の傾向、特徴は以下の通りである。

#### a) 大井川

大井川平野の開発は近世前期の1684～1688年（享保期）に一応の限界に到達するが、1600年以降、平野の開発に対応し洪水記録は急増する。江戸時代265年間に130余回の洪水が記録され、明治時代に入り急減、現在まで30回弱、1900年（明治33年）の大洪水以後、災害はない。江戸時代の265年間では、氾濫場所不明を含めると、160回余りの洪水氾濫が発生し、1.6年～1.7年に1度、洪水氾濫頻度0.63～0.59である。1550年代から1930年代までは236回発生し、1.7年に1度、洪水氾濫頻度0.61で多摩川の「被害洪水」のそれにほぼ等しい。1601～1620年の20年間に26回（頻度1.3）、1671～1680年の10年間に11回（頻度1.1）、1691～1750年の60年間に64回（頻度1.01）、1781～1810年の30年間に26回（頻度0.87）、1821年～1830年の10年間に10回（頻度1.0）、1851年～1870年の20年間に19回（頻度0.95）

表4 東海型河川(大井川、富士川)洪水年表

西暦年	元号	年月日	大井川洪水記録	月日	規模	富士川洪水記録
778	宝龜	7月14日	大井川洪水記録			
859~877	貞観年間	7月14日	駿河国大雨近畿決二郡堤防壊百姓○舎又口分田流出其數計多(『新日本紀』<大>) 貞観年間未精福用(金谷町)地先山岳崩壊、古流大井川(頸橋山川、木屋川筋)浸瀧となり、井を湧せず(『榛原郡誌』<大>)遠江回奏原郡百姓口分田367町6段38歩遭水○流損傷甚(『三代實錄』<大>)			
1462	寛正	3	近年通州(南澤寺領初倉庄)水ヶ郷(四郷二ヶ村)流失(『藤原朝日録』<大>)			
1487	永正	14	大井川大洪水、能満寺は古昔の区画消滅、諸室流失(『能満寺田繪伝記』<大>) 巻』<大>)→元龜元年(1570)武田信玄が再興			
1582	天正	10 8		8	大	(左)富士川蒲原の東を流れて俄に水無く河原となりて吉原に此川付きたり(『駿国雜誌』(蒲))
1604	慶長	9 秋	島田向谷の大堰を決し、飯家・田島・民家系々潰亡、下流更に押し通り數十箇の村里流亡せり(『肥後河誌』<大>)大井川田流して上下背島、蒲戸新屋、久兵衛市石衛門講新田・前島などの辺りを押し流して一帯は川原の地と化せり(『青島町誌』<大>)			
1608	慶長	13	大井川田原津水にて被書たし(『志木郡誌』<大>)			
1609	慶長	14				(工)代官伊奈備前守忠次、岩本村地帯に備前堤を築く(寛) (右)巳の刻大雨あり、富士川洪水残り、蒲原穴木松等浸水(『駿国雜誌』(蒲))蒲原田地約二十町歩流失(蒲)大洪水、天ヶ淵と水神岳との間し奔流直撃し、此の間を突撃し奔流遂に此の决瀆の間を直撃して瀆に迷ぐに至る(川)(左)加島一帯被書(蒲)
1612	慶長	17 13				
1616	元和	2 夏	大井川洪水、西制通り高畑で女壊し川原村まで川成(『川尻村文書』<大>『榛原郡誌』<大>)			
1616	元和	2				
1618	元和	4	西島村大井川堤壊壊及及び、耕地は勿論家作兼流失せり、漸く高366石1斗3升6合相残り、人家も所々へ転退仕候(『北郷文書』<大>『相川村誌』<大>)	8		(左)大嵐浪の襲来により、富士川の流路が現在の形に近い形に変わる。その結果、島田村、荒田島、田島、中河原の村落を生ず(『吉原町島田村組合沿革誌』(消)) (工)この年百部孫太夫重高、富士川岩本山地帯に一番出し、二番出しの突堤を築く(『田子浦村誌』(消)) (左)富士川洪水、岩本清水堤決壊、籠下村へ漂流押し入る(『加島村誌』<大>)
1621	元和	7				
1624	寛永	1	大井川大洪水、宗高村増田と左希門至高柳村の内に退転、与左衛門新田を拓く(『高洲村政誌』<大>)			
1627	寛永	4				
1630	寛永	7 8月	大井川弁天山崎より切込、井口村押通、川原に至まで田畑川となる(『益田文書』<大>『掛川志稿』<大>)寛制通り藤助村より下流押し通る(『志木郡誌』<大>)			
1631	寛永	8				(左)富士川洪水、籠下村水神堤防破壊し、加島郷へ漂流押し入る(『富士川寛書』加島村誌)(消)
1633	寛永	10	大井川洪水により君島村を流亡し權島(入幡島)高島を崩壊し、重下浦に入る(『吉富永村誌』<大>)			
1633	寛永	10 8月	色尾より駿洲、川原の間に二道流れ古の膨脹の境を流れたる一帯は浅せて方治のころに芝場となる(『掛川志稿』<大>)			
1638	寛永	15	大井川井矢口(谷口)村より押切り通州山治川に落ち上吉田能満寺に当り、下吉田を経て海に入り、分流は川崎湖に注ぐ。東は細島村より中根村、北村を経て村田湖に入る(『池谷文書』<大>『相川村誌』<大>『静浜村誌』<大>『吉永村誌』<大>)			
1639	寛永	16	大井川洪水のため御園堤壊らす破壊に及び(中略)櫃か96石4斗6合相残り(中略)漸く家敷12・3軒相残り申候(『北郷文書』<大>『相川村誌』<大>)			
1640	寛永	17				(工)百部孫太夫重政、加島の内松岡村の開発、富士川の治水工事に着手(『組合沿革誌』(佐法村誌)(獨)(消))
~41年~21年	寛永		この間毎年點川(相川)村川成り(『相川村誌』<大>)			
1644	正保	1				(工)富士川水神東の方築堤完成(岩本村文書)(寛)
1644~1648	正保年中		大井川洪水、志光寺河原の玉林禪寺(上吉田村志光寺)流失(『榛原郡誌』<大>『吉田町史編纂資料』<大>『相川村誌』<大>)このころ寛永の築堤により堤防外となった菅根新田に村が(『相川村誌』<大>『吉永村誌』<大>)			
1653	承応	2 夏	大井川洪水、井口村地帯破壊され、全村大川成亡となり、村人対岸の道徳島村へ移る(『井口村文書』<大>)			
1660	万治	3				(右)松岡一番出しより当村(岩淵村)尾ヶ淵へ本瀬押しかけ岩淵村田畑十三石余損失、中の郷村百八十五石余流失(岩淵村文書)(川年表)(左)大暴風雨来襲、富士川大洪水、堤防決壊、加島村一帯に大害を被る(『田子浦村誌』(消)) 洪水、富士川渡船増、茶屋の小屋諸道具流失!岩本村誌(川年表)
1666	寛文	6 7.29				(工)百部重年、雁埴の築堤の業工を再開し、7年後(延宝2年)に完成(山崎文書)(寛)
1667	寛文	7				
1668	寛文	8 8月	島田向谷地帯破壊され、田畑40余石地帯地(『島田町志稿』<大>)			
		8月	大風雨大井川洪水、堤防(峠中堤)不完全のため川尻村被害甚し(家地)には不着(『川尻村文書』<大>『榛原郡誌』<大>)			
		7.29				

西暦年	元号	年月日	内は 本誌	大井川洪水記録	規模	富士川洪水記録
1670	寛文	10		大井川洪水、漲溢して川原新田(現島田市福高河原地先)の堤防決壊され、田畑300石流亡(『四ヶ町村郷土史資料』/〈大〉)		富士川洪水記録 (左)本川筋洪水、岩本村の内、聖島清水土余東の堤防破壊し加島郷へ漂流押し入る「加島村誌」/〈由〉
1671	寛文	11		飯淵新田御堀堤岸が切崩れ、同村用水が溢れ、同用水堰り落も菅川成り、飯淵新田村堤外地帯腐爛地帯に及び、馬草場川成り大井川河原となる(『吉永村誌』/〈大〉)		富士川洪水 (左)富士川洪水 聖島上破壊(消)
1672	寛文	12		西島村御堀堤大破され、被害家産60余戸に及び(『吉永村誌』/〈大〉)		(左)岩本村聖島上の堤破壊し、加島郷へ漂流押し入る「富士川洪水」(消)
1673	寛文	13		駿河国大水、下吉田より切込、川尻村、飯淵村の間に渡る	8	
1661~1673	寛文中	(9月19日)		(『池谷文書』/『静浜村誌』/『吉永村誌』/〈大〉)		
1674	延宝	2	7月29日	大井川洪水、堤内まで川成り、堤外の新田場は壊れず川成り	8、6	(左)洪水、岩本へ切り込み、水押し入る、聖島上破壊「山崎文書」(消)
1674	延宝	2	8月11~18日	(『田中文書』/〈大〉)		(工)雁堤完成(遺)
1674	延宝	2				
1675	延宝	3		西側通り高島、大日面村より大井川切込み、田畑、屋敷共に流失入りとなる(『川尻村誌』/『大日村誌』/『縁原郡誌』/〈大〉)東側通り高島、川成り(『田中文書』/〈大〉)上河原、八幡島より相川村、大日村、川尻村と飯淵村との間を川通り、其後幾々東の村々へ入川(『池谷文書』/〈大〉)		
1680	延宝	8	8		8	(左)富士川岩本へ切り込み、水押し入る(川年表)
1684	元禄	7				(左)富士川洪水 岩本(松)堤防決壊「田子浦村誌」(消)
1689	元禄	12	8、15		8、15	(右)石船出し舟流失、岩淵村畑地十二石余流失、中之郷田畑三百石損亡「岩淵村、中之郷村文書」(消/川年表)左)暴風雨激浪ありて、田畑の損害甚だし「組合誌」(消)
1704	宝永	1	7		7	(左)川瀬引通岩淵村突堤一番出しより八番出し迄水破り、百俵屋崩落七十六石余損亡「岩淵村、中之郷村文書」(消)左)岩本村字清水堤防破壊、岩本松岡へ浸水「富士川洪水」(消)
1708	宝永	5				(頃)前年の宝永4年10月4日 宝永の大地震あり、ついで11月23日 富士山の宝永山噴火岩淵村、水害、地震により全村所害、東海通付替「常盛文書」(川年表)
1710	7					(左)富士川洪水 松岡堤防決壊(消)
1711~1716	正徳年中			西島村川成りにつき正徳2~5年年貢免除される(『北郷文書』/『相川村誌』/〈大〉)飯淵新田川成りにつき正徳年中~寛保まで年貢免除される(『半田文書』/〈大〉)高島村の地蔵院大井川入水により流失、与五郎新田へ引き取らる(『縁原郡誌』/〈大〉)		
1716	享保	1		大井川入水、上島八幡宮(宇古堂、現つし平)村地へも入水(上新田区有文書「社寺六々年抄書上欄写」/〈大〉)大風、洪水、田畑欠けられ、立毛皆無(川村文書)/〈大〉)西島村成り(『北郷文書』/『相川村誌』/〈大〉)		
1717	享保	2	8月	高島 相川村3番田により堤切込(『川村文書』/〈大〉)西島村川成り皆亡所となり、備か二石6斗6升8合の御取廻(年貢)相納む(『北郷文書』/『相川村誌』/〈大〉)中島、飯淵南村の堤場大半壊れ、家屋流失、溺死人数多、北郷志本郡と駿府方面へ移転した者多く飯淵村僅かに24戸となる(『吉永村誌』/『志本郡誌』/〈大〉)		
1720	享保	5		大井川洪水、上島村(含現蓬左衛門地先)破壊、取壊皆無となる(『大洲村誌』/『志本郡誌』/〈大〉)上島村八幡宮、大風、洪水(『大』)岩米村、同利石衛門村、高瀬新田村無取(伊高文書)に「吉永村誌」/〈大〉)弁折天前(高島村地先)700間余りの瀬半普請完成間もなく、過半敷押し流され、相川村教度の六川に所となる(『川村文書』/『杉本文書』/『大石文書』/『相川村誌』/『吉永村誌』/『志本郡誌』/〈大〉)	9	(工)中之郷村、石船出、一番、三番、五番出し普請「中之郷村文書」(川年表)
1721	享保	6	7月	五和村地内の堤防大破(『島田市史 上巻』)横岡村、島村、牛尾村が水につかる(『金谷町史 地誌編』)		
1721	享保	6	7月3日	大井川重へ(西か)寄り、大柳新田、上河原新田、青柳村八幡島新田、大日村、川尻村一面押し通り、田畑川成り(『三輪文書』/『縁原郡誌』/『島田市史』/〈大〉)		
1722	享保	7	6月23日~24	大井川出水、普請未成就の上、相川村地先より川下吉永村まで川筋押し掛け、本川流らず、村々の中を通り、住民おおいに困り(『川村文書』/『川村文書』/『杉本文書』/『大石文書』/『相川村誌』/『吉永村誌』/『志本郡誌』/〈大〉)		
1726	享保	11		東側通り大井川成り(『河守文書』/〈大〉)		
1728	享保	13	7月9日	大瀧水、上島 相川村地先堤岸切られ込み、吉永村まで川成り、百俵文部兵衛家地流れ、家内とその他に二宮、佐々木、相川河、本田17、8石余、船運船50石余、高瀬川成り(『川村文書』/『西島村の取巻』)高島村の取巻(『北歩文書』/『杉本文書』/『相川村誌』/『吉永村誌』/『志本郡誌』/〈大〉)		
1728	享保	13	9月2日	川尻村田畑余程川成り(『縁原郡誌』/〈大〉)		

西暦年	元号	年月日	大井川洪水記録	月日	規模	富士川洪水記録
1728	享保	13 9月3日	大井川洪水 島村に被害(「金谷町史 地誌編」)			
1729	享保	14 12月	上泉村地蔵もよび相川村千間堰通り切込み悉く入川ひとしあ亡所も及び吉永村まで川成り(「川村文書」/「杉本文書」)			
1730	享保	15 6月	上泉・相川村地先堤壊滅 吉永村・飯沼村まで入水(「川村文書」/「杉本文書」/「相川村誌」/「吉永村誌」/「志本郡誌」/「大」)			
1731	享保	16 5月16日	上泉・相川村より入水 下江留・吉永・利右衛門のみか村にて家屋多数流失 うち吉永村にて流失 遺家21軒 40日余松瀬し多なす(「本五文書」/「大」)			
1731	享保	6月8日	河原にわたたり上泉・相川村より大井川押し入り 吉永村まで川成り 吉永村の13軒など人家流失(「大石文書」/「杉本文書」/「相川村誌」/「吉永村誌」/「大」) 西島村は亡所前となり 街門裏庭の飯沼新田村地先堤防3番出により下破堤(「半田文書」/「大」) 享保7年秋原瀧左衛門築堤の飯沼新田村地先堤防(「川村文書」/「大」)			
1732	享保	17 6月6日	五和村地内堤防壊滅 牛尾村・島村子し被害(「金谷町史 地誌編」)			
1732	享保	17 6月6日	瀧水 上泉村取川(破堤)より230間余切込み 吉永村まで 水押し通り 民困す 相川村堰がに「一升」台地となる(「川村文書」/「杉本文書」/「相川村誌」/「吉永村誌」/「志本郡誌」/「大」)			
1733	享保	18 6月19日	相川村地先40番欄牛から70番欄牛まで悉く流失する(「川村文書」/「大」)			
1734	享保	19 7月23日 ~30日	大井川中流水となり 本瀬宗高村五石衛門水門の東を通っていたのが宗高村中川原を通るよぶになる(「川村文書」/「大」)……河道の変動			
1734	享保	19 8月6日	飯大井川瀧水 大出しなど大破損 堤防危くなる。谷川(飯山川)は殊の地の大水で東溝道へ水押し入り東海邊大破損(「川村文書」/「大」)			
1735	享保	20	大出水 成因書後の堤大破補修(「吉田町の文化財」/「大」)			
1736	元文	1 8.17	暴風雨 大井川はじめ小河川まで破壊される(「志本郡誌」/「大」)	8.17	(右)石船出し流失、岩割村田地十五石余欠所(川年表)	
1737	元文	2 16月				(右)石船出し流失、岩割村田地十一石余川次「常盤文書」(川年表)
1737	元文	2				
1738	元文	3 5月9日	大井川洪水 大日村より切れ込む(「大」)			
1738	元文	3 5月11日	川原村切れ込む(「大」)			
1738	元文	3 8月1日	金谷谷3番出下から4番出まで延長80間の堤防が決壊(「島田市史 上巻」)			
1738	元文	3 8月18日	香野での洪水で「こから入水 八軒屋 三軒屋など家屋17戸を流失 20戸を半壊 付近の田畑は流弊地とす(「島田市史 上巻」)			
1738	元文	3 9月18日	村中本瀬押し通り大日堤は壊らす 大日村家屋全て流失 高島村残らず 亡所となり 村民上言田へ移り住む 川原村は田畑約400石の地を失うも人家は無事 川原村の香左衛門様堤500間のうち250間 滑動様堤270間のうち110間破堤(「旧代文書」/「三輪文書」/「久保田文書」/「掛川志稿」/「藤原郡誌」/「大」)			
1740	元文	5	川原村又々川成(「三輪文書」/「藤原郡誌」/「大」)			
1741	寛保	1 7月21日	金谷河原八軒屋へ朝込川成す(「島田市史 上巻」/「金谷町史 地誌編」)			
1742	寛保	2	上泉村堤切込み(「志本郡誌」/「大」)			
1742	寛保	2	川原村田畑赤程大川成(「久保田文書」/「大」)			
1743	寛保	3 夏	川原村田畑赤程大川成(「三輪文書」/「久保田文書」/「久保家文書」/「久保町史 地誌編」/「大」)			
1744	延享	1 7月	橋岡村・牛尾村・押座村などが水につかる(「金谷町史 地誌編」)			
1744	延享	1 10月	吉永村・向利右衛門分・高新田村田中川・泉川筋川成り 流路より見て上泉・相川村地先堤は壊滅と見られる(「大五輪二所蔵絵図」/「大」)			
1745	延享	2 夏	橋岡村牛尾村の遺旧堤防が破られ川となる(「金谷町史 地誌編」)			
1747	延享	4	この節度々出水 元文34年同様小山家地元内秋刈にて流失 当村(川原村)本田へも切れ込み 家地少々欠込む(「藤原郡誌」/「大」)			
1747	延享	4 4~5月	霖雨続き 五和地内も被害を蒙る(「島田市史 上巻」)			
1747	延享	4 8月19日	大風雨にて上泉村堤切込み 起廻の田地 吉田とも川成り 石砂入り水押し(「志本郡誌」/「大」) この入水により相川村1690石6斗4升6合の村高のうち650石2斗4升6合川成り(「川村文書」/「大」)			
1756	宝暦	6 5月	赤松山方大崩壊 反動で河原(右岸)牛尾村・島村で大きな被害(「金谷町史 地誌編」) 森岡大風雨降り続き 赤松山(山頂)大崩壊 島田宿内の用水路干上がる(「藤原郡誌」/「大」)			
1757	宝暦	7 4月27日	長尾降り続き 大井川5尺程の大出水 飯沼村 飯沼新田			
1757	宝暦	7 5月7日	村地先堤切込み 村中本瀬押し通り川成り 流失 遺家多く 家財夫喪まで 悉く流失。飯沼新田村の町人46人夫喪(「半田文書」/「大」)	5.1	(右)中之郷村六百石高欠所となる(中之郷村文書)(川年表)	

西暦年	元号	年月日	大井川洪水記録	規模	富士川洪水記録
1757	宝暦	7月5日	大井川東側通り堤防島田宿より飯洲新田村にかけ各所で破堤(「半田文書」/「大」)谷口村地先へ流出し流失(「益田文書」/「大」)至厩之庄御普請所(谷口村地先)大破となる(「柴田文書」/「大」)		
1767	明和	7月11~12日	金谷河原八軒屋に東は大川成り(「島田市史 上巻」)		
1768	明和	3月13日	大風雨 大柳新田地先龍橋破損流失。3番出し下小出しより5番まで本川当り堤長さ100間余切り込む(「益田文書」/「大」)		
1768	明和	5月	大柳新田地先大井川付寄り本川筋となる(「島田市史」/「大」)		
1775	安永	4月9日	上京村前堤堤飯洲新田村まで水押し通る(「半田文書」/「大」)		
1777	安永	6月	大井川大洪水 川原村八幡神社、神明宮、津島神社、若宮諏訪社流失(「吉永町史編纂資料 第1集」/「大」)		
1778	安永	7月5日	五和村牛屋村近力決壊して切れ込み、島村流まで被害(「島田市史 上巻」)大井川洪水 分口村地先破堤 稲作全壊(「谷口村文書」/「大井川洪水史」/「大」)		
1778	安永	7月8日	上京 相川 廣満新田村堤防破堤 飯洲新田村28軒中2軒流失 その弁もすべて床上浸水(「半田文書」/「大」)		
1783	天明	3月7日	上京村前堤堤 下流へ水押通る(「半田文書」/「大」)		
1786	天明	6月7日	9尺余の増水 飯洲新田村1番出しより3番出し元まで140間余4番出しより下飯洲村境まで100間余破堤、百姓住家流失のため稲宅、借地小屋掛け。田畑飯洲新田村40石余、4町9段歩余、吉永村131石余、10町1反歩余、利石衛門分40石余、3町4反歩余計201石余、17町8反歩余の田畑川成り(「半田文書」/「大」)	7.29	(右)富士川洪水、蒲原宿・大井形堤二十六間、外堤六間、長堤堤六十六間、同下馬瀬洲堤十六間、大間た決壊、作りは全て水で枯死(蒲)
1787	天明	7月	大井川大洪水 島田地先堤防大部分破壊されるも田畑の被害は免れる(「島田町志稿」/「大」)	8	(右)蒲原宿・大井形堤決壊(蒲)
1790	寛政	2月20日	大洪水にて細島村500間堤および源助新田堤壊らす破堤上京村通半破堤 飯洲新田村3番出し下小出しより6番出し下小出しまで130間破堤、大量の土砂押入り7~8尺高に盛り飯洲村飯洲新田村畑土所となる(「半田文書」/「大」)	8.19	(左)夜 富士川に選松田村、森島村間二百間切り込み、忽ち洪水となり、富士川流死人移し、牛馬家畜流れ来る(「中里村名本文書」/「川年表」)
1792	寛政	4月7日	両度にわたる大雨の増水となり細島村500間堤、源助新田村堤壊らす破堤、上京村(須藤枝市善左衛門地先)通半破堤、本瀬村内一向押し通り、各戸床上浸水4尺5寸以上に達し、流失被害など10数戸、田畑川原と化し、下流の8分村被害を受ける(「半田文書」/「島田市史編纂委員会所蔵文書」/「大洲村誌」/「島田市史」/「志太郡誌」/「大」)上新田村内堤(願貞堤)少々切込(「河守文書」/「大」)	7.13	(右)蒲原宿、石岸大堤防(天明七年、二千数百間にて築工した大堤防)決壊、外堤流失、蒲原田は富士川川原と化す(蒲)
1792	寛政	7月13日	夏梅雨続きのため相賀村赤松山原ひ大崩壊、大井川河原へ土砂を押し出し大井川を没す。このため大井川流路変わり対岸生原村破堤川成、島田宿は用水を失し水飢饉となる(「大」)		
1792	寛政	7月13日	相川村御田堤壊られ、出水8度に及ぶ。川下吉永村西通り(泉川筋)まで水押通る(「大石文書」/「大」)		
1794	寛政	6月5日	1801、1802年の2回にわたる大洪水のため、再び赤松山の山崩れが繰り返した。高谷の堤防が決壊し、付近一帯の田畑を流亡し、上流神座村では家屋まで流失する被害が生じた(「島田市史」/「大」)		
1801	享和	1月7日	夏梅雨続きのため相賀村赤松山原ひ大崩壊、大井川河原へ土砂を押し出し大井川を没す。このため大井川流路変わり対岸生原村破堤川成、島田宿は用水を失し水飢饉となる(「大」)		
1802	享和	2月6日	上京村1番出し下小出し(須藤枝市善左衛門地先)より下流破堤付近の田畑すべて川成り、床上3~4寸から5~5尺浸水142戸、32戸流失(「山下文書」/「相川村誌」/「大洲村誌」/「志太郡誌」/「大」)		
1804	文化	1月28日	上京村1番出し下小出し(須藤枝市善左衛門地先)より下流破堤付近の田畑すべて川成り、床上3~4寸から5~5尺浸水142戸、32戸流失(「山下文書」/「相川村誌」/「大洲村誌」/「志太郡誌」/「大」)	8.1	(右)富士川池巻、蒲原宿、外堤防長堤、新河原は残らず流失(蒲)
1804	文化	1月28日	上京村1番出し下小出し(須藤枝市善左衛門地先)より下流破堤付近の田畑すべて川成り、床上3~4寸から5~5尺浸水142戸、32戸流失(「山下文書」/「相川村誌」/「大洲村誌」/「志太郡誌」/「大」)		
1806	文化	3月	下島宮太夫(須島市溝井)前破堤、開聖地流失(「島田町志稿」/「大」)		
1807	文化	4月	相川村前破堤入水、西島村取道僅かに3尺3寸4合(「北郷文書」/「相川村誌」/「志太郡誌」/「大」)		(左)富士川洪水、松岡四番出し元切、五貫島に水入る(「岩本村文書」/「川年表」)
1808	文化	5月	谷口村御普請所下に初倉村御普請所および700間流失(「益田文書」/「大」)		
1808	文化	6月	牛屋村(島村)金谷河原町など破堤、被害大(「金谷町史 地誌編」)		
1809	文化	8月	上京村(須藤枝市善左衛門)地先破堤(「志太郡誌」/「大」)この破堤により1113石586の付高		
1809	文化	22.23日	上京村の内654石409川成りとなる(「山下文書」/「大」)		

西暦年	元号	年月日	大井川洪水記録	月日	規模	富士川洪水記録
1813	文化	10月6日	中島村7番付近95間、飯淵村14番下58間洪水のため破堤田畑、民家流失、溺死人多数(「吉永村誌」/「輪瑛村誌」/〈大〉)大井川暴溢し、島田宿以南各河々堤防破壊し、藪枝宿以南普水面となる(「志本郡誌」/〈大〉)	7.13		(右)富士川出水、蒲原宿、外堤百間及及び付近の田地は皆流失(商)夏中之郷宗清寺から永泉寺前まで東遊道付替(中之郷村文書)(川年表)
1814	文化	11月6日	大雨のため谷口村堤押切らる(「益田文書」/〈大〉)	8.4		(右)富士川氾濫、蒲原宿、外堤百間決壊、新田流失(蒲)
1814	文化	11月8日	大轟風雨。谷口内瀬村破堤田畑と化す(「谷口村文書」/「大洲村誌」/〈大〉)初倉村御書諸所押切り、外堤内瀬共壊らす流失、井溝へも石砂勢しく流れ込む(「益田文書」/〈大〉)	8.7-8		(右)富士川洪水、蒲原宿、御書諸所崩落避るところの堤防および堤防外の留め出しも全て流失(蒲)
1816	文化	13.8.4	大井川切込み、上泉村川成り、吉永村まて水押通る(「山下文書」/「大石文書」/〈大〉)このため5年西島村取圍16石9斗4合(「相川村誌」/〈大〉)	6.21		(右)富士川氾濫、蒲原宿、大升形堤決壊
1821	文政	4	牛屋村地先の堤防が決壊(「金谷町史 地誌編」)	8.18		同上(蒲)
1823	文政	6月23日		5.23		(右)富士川洪水、蒲原宿、馬場堤決壊、本田多数流失(蒲)
1827	文政	10月梅雨時	牛屋の堤防破壊(「島田市史 上巻一」)			
1827	文政	6月	大井川洪水、島田宿地先向各稲島から下流堤防破壊し田畑石砂入り(「島田町誌編」/〈大〉)			
1827	文政	9月	上泉村・相川村敷力所より大井川入水(「杉村文書」/「相川村誌」/〈大〉)この入水により上新田付へも水押通る(上新田区有線図)/〈大〉)			
1828	文政	11月6日	金谷河原の堤防決壊。牛屋、島、金谷大被害(「島田市史 上巻」)……赤松山の崩壊のためといわれている	6.3	大	(右)蒲原宿、外堤六番留出し決壊 田地多数流失 水死あり(蒲)大雨にて、暫時の間富士川一時に洪水仕り、御書諸所堤切私(蒲原宿名主長兵衛)出張小屋真上切込み居宅流出仕り、岸並に召使二人都合三人流失仕る(蒲原宿旧記録)(消)常水より二丈増水、岩淵村畑高八十六石、屋敷高五石、計九十一石余、反別十二町三反八畝余、川又「岩淵村文書」(川年表)(左)松岡村罹病の内、字備前堤堤長五十間余潰決、漂流數十ヶ町村に記述し、人家の流失五間決壊し、今の加島村、田子浦に浸水し、人家田圃の被害少なからざりし(富士川覽書)岩本村治筆誌/加島村
1828	文政	11月6日	東海、北国、西国、大風雨、夜九ツ時(夜12時ごろ)大井川洪水。島田宿内横井御園堤から以東、道伏島、御崎新田、細島村・源助村・上泉村に至る御園堤は内堤防もどともごとく破壊。中島村7番近95間、飯淵村14番下58間をそれぞれ破壊。上小形、下小形を除き水下行々茶畑一円に押通り家屋を流失。人家の溺死数を知らず。上泉村蓮生寺、相川村大松寺、下江留八幡宮も流失。田畑皆荒地となり、無取の村々多数し(「上新田区有文書、向線図」/「杉本文書」/「半田文書」/「大石文書」/「相川村誌」/「吉永村誌」/「志本郡誌」/「島田市史 上巻」/〈大〉)この洪水により遺悦島、佃島、御新田の3ヶ村は地蔵の3分の1を失っている(「島田市史 上巻」)上泉村より入水、西島村米13町7石8斗、合巻む(「相川付誌」/〈大〉)下江留村大水、取箇なし御免(「相川村誌」/〈大〉)古寺稲なる大溝水にて谷口村下より下村々まで過半堤押切り、内瀬下村々に至るまで(「島田市史」)流れ登、潰れ家敷知れず溺死人多分にこれあり(「金谷川文書」/〈大〉)			
1828	文政	11月8日	大井川大水、大被害(「上新田区有文書、向線図」/〈大〉)			
1829	文政	12月6日	日下村より西澤に切れ込み、川尻村一帯を浸し、人家寺院(成因寺)流失、田畑川成(「久保田文書」/「成因寺文書」/「幾原親誌」/〈大〉)			
1834	天保	5月	横岡村牛屋村、島村など一帯が川ととなる(「金谷町史 地誌編」)			
1836	天保	7月4-5日	連綿して出水し、牛屋村、島村が以東の堤防決壊、再び川となる。田畑が一部流出した(「金谷町史 地誌編」/「島田市史」)			
1837	天保	8月8日	飯淵番下7間破堤流失53戸、浸水23戸、田畑多く荒蕪し、善太島開墾地も全滅。打ち碇(大)に人民地と加瀬川に迫るもの多し、或いは近隣の乞食に出づるものあり、或いは尊厳木皮を裏いて生を採つも、裏に心身の衰弱を来す者あるに至り悲慘の極みなり(「萩野文書」/「半田文書」/「吉永村誌」/「志本郡誌」/〈大〉)			
1837	天保	8月27日	前日の暴雨により島田宿河原町地先破堤川成3戸流失(「島田町誌編」/〈大〉)豪雨のため出水し、五知村、牛屋、島村近の堤防が決壊(「島田市史 上巻」)飯淵新田村4番出し下武の小山より6番出しまで外溝入水流失1戸浸水30戸(「半田文書」/「大石平右衛門文書」/「吉永村誌」/「志本郡誌」/〈大〉)			
1843	天保	14				この年、蒲原宿、中之郷村堤往還付替(新坂道開通)(川年表)
1845	弘化	2		8.28		(右)常水より一丈五尺増水、中之郷村地先浸淫まで流失(中之郷村漁民)(川年表)
1846	弘化	3		7月王		(右)常水より一丈八尺増水「中之郷村江岡(川)年表」
1850	嘉永	3		8月9		(左)大雨による洪水、岩本村御田地え切り込み、松本村御田地は申すし及はず、百姓家5壊らす(水神入り)松本文書(川)

西暦年	元号	年	月日(内は大隅暦)	大井川洪水記録	規模	月日	富士川洪水記録
1854	嘉永	7				6.19	(左)富士川 大井川大暴れ、松岡 萩島等八ヶ村が押し流された。富士川土糸が水神下で三五間ほど崩れた(「伝盛村伊藤文書」(消))
1854	安政	1				11.4	(左)安政夏地氾濫富士川の右岸側三丈ほど隆起、本流左岸側に移動
1855	安政	2			大	6 4	(左)卯年六月二日 三日大風雨にて、富士川四日、松岡村田地氾濫宇赤神下御普請所四畝出より、同夜五少時(八時)頃延長式百始間余切込み、其他富士川通り田地氾濫数ヶ所切出込み、松岡村、萩島村、宮下村、藤下村、五真島村、水戸島村、中丸村、川成島村、宮島村、富士川新田の藩は百姓共取小屋(昨夏年地震後仮小屋に柱)流失、田地氾濫砂神込み欠崩れ、八九尺程も落懸れ、村々富士川本瀬
1855	安政	2			大	7.18-7.19	(左)相成り、平一面に水溜え、難波至極、加之同年七月十八日、十九日大雨して又豊松岡村所縁より数ヶ所切込み前頭上堤防切込み田地崩壊し相埒り屋敷、葎りず戸砂神込み、昔亡所の釜に葎り行きて「加島村誌」(消)松岡村宇赤神下堤防三百余間破壊し、同村番瀬以下早川村田屋五ヶ石の田圃及民家を流し、富士川新田の知事も全財産流失の為、人民は残らず他に退散するに至れり。雨来致ヶ月間本川の清流は被害地を通過し、其の災害状況実には驚かす程に及りし(「若松村治書録 富士川氾濫」(書、消))
1855	安政	2				7.25	(左)富士川出水、本流氾濫を破壊し、宮島、五真島の間に落ち耕地人家を流す。富士川新田村流し石川原となり、全く餘村となり「田子浦村誌」(消)
1855	安政	3				5.13	(左)富士川の川蓋で水神下の堤防三百間が穴壊、松岡村、梅瀬萩島、宮下、五真島、水戸島、川成島、中丸、萩島の民家田圃が押し流されそれより数ヶ月間富士川の清流が被災地を流れ、住民が流亡する(「富士川誌」(消))
1857	安政	4	5月	牛島村など付近が川となる(「金谷町史 地誌編」)大出水。飯洲村前3番下小出しより4番出しまで受け崩れる(「半田文書」(大))	大	7.23	(左)大風雨あり 富士川洪水、宇式番出下より宮下村噴送、堤延長百六十八間破壊し、同月二日引水にて宇水神下四番出下より六番出下迄延長百餘間、及宮下村田地氾濫宇赤神土糸延長百餘間外数ヶ所合延長四百六間破壊し、百姓共去る卯年(安政二年)流失家作備建て、並びに田畑屋敷埋り、最も惨状を極めたり(「加島村誌」(消))
1857	安政	4		牛島村など付近が川となる。金谷町でも川口から切れ込み田畑50町歩を失し、中町で家5軒流失(「島田市史 上巻」)		8 2	(上)この年水神下に藤瀬堤、亀甲出、万保堤竣工「富士川氾濫」(消)
1858	安政	5					
1859	安政	6	夏	牛尾村、島村から金谷河原町まで破壊(「金谷町史 地誌編」)			
1860	万延	1	5月16日	飯洲村3番出しより飯洲新田村2番出しまで堤防約17間破壊 田畑亡所 飯洲村流失2戸 浸水38戸(「吉永村誌」(大))			
1860	万延	1	秋	出水、島田より川原新田地先堤防数町流失、田畑石砂入り御請新田および河岸の谷口「番田」より、一番出しまで7番出しより11番出しまで大御新田御堤神切り川下村々大川成り(「久保田文書」/「島田町書」/「志本郡誌」(大))堤切所所により源助村上泉村、相川村、飯洲村、高野田村本瀬一同地通り起源地地通り田畑荒所となり、潰れ家多分、約にて通行す。急去重借(「長合川文書」(大))川原字万年屋敷の於て堤防柱入水のたぬれ流失(「藤原郡誌」(大))			
1862	文久	2		大井川大洪水 相川村地先破壊、本瀬水下高新田村まで一円に神通り田畑荒地になり、潰れ家多分、約にて通行す(「長合川文書」(大))			
1862	文久	2	夏	初倉村地先大破大川成(「研倉村誌」(大))			
1863	文久	3		源助村地先500間御堤切入(「長合川文書」(大))			
1863	文久	3	夏	島田河原町地先大破川成 4戸流失(「島田町誌」(大))			
1864	元治元年	1		源助村地先昨年にて続き再び切入(「長合川文書」(大))			
1865	慶応	1	閏5月1日	大出水にて上泉村、相川村、飯洲村御普請所大破壊、溝(切込み)を防ぐ(「長合川文書」(大))			
1865	慶応	1	5月	牛尾村、島村が破壊され、砂礫が埋入、荒廢地となる(「金谷町史 地誌編」)			
1868	明治	1	5月	1日より降り出した雨(夕)に及び大井川洪水、源助村、上泉村(現藤原市善左衛門地先)破壊、川そのの田畑河原となる(「大洲村誌」/「堤防台帳」/「志本郡誌」(大))		7.23	(左)富士川断流洪水、亀甲出破壊す。「加島村誌」(宮下村、五真島村組合堤防数町間壊裂「田子浦村誌」(消))
1869	明治	2				8 4	(左)富士川の万保堤百數十間、及加島村宮下より田子浦五真島に至る間に被雷破る多く、萩島、森下、宮島等皆其甚きを蒙り 耕地百餘町歩、人家數十戸を流失す(「加島村誌」(消))
1870	明治	3					(左)富士川大出水、亀出破壊せり「田子浦村誌」(消)
1872	明治	5		初倉、吉田村で本流が東より西に直角に流れ、堤防に当たるころで大洪水に決壊し、田畑は一瞬にして砂礫の河原と化す(「堤防台帳」(大))			
1872	明治	7	(6月10日)	豪雨のため、相川村西島村延長60間堤防破られ、西島村の田畑3分の2が流失、住居多数流失、細作皆無となる(「相川村誌」/「志本郡誌」(大))			
1874	明治	7					

西暦年	元号	年	月日(内は内) 大欄	大井川洪水記録	日	規模	富士川洪水記録
1876	明治	9		向台から下島までの間堤防被害を受ける(堤防台帳)。(大)ハ幡島新田地先再度の洪水にて又々破堤し被害田地少なからず(静岡県葦原治政史)。(大)	9.17	大	(左)富士川洪水の高、一番出の殆ど全部を流失し、之と同時に宮下、五貫島地先堤防式百五拾間破堤し、民家田圃の流亡なからざらざら(富士川寛書)(消)東西の河川近時洪水浸水の出、堤防破堤し、及低地田圃は一面に暴漲し、随って數十の人家浸没す、殆ど莫々たる湖水の如(第二小区日誌)(消)
1882	明治	15			10. 2		(左)富士川出水、宮下村五貫島村相合堤防数百間破堤し、民家並田圃を流亡す。故に今尚数百町歩の荒地あり。前頭洪水の勢は出の流失、堤防の小破堤は數ヶ所にして秋麥すへからず(岩松村治政誌、加島村誌)(消、消)
1884	明治	17			9.15		(左)富士川の橋梁破堤、一番出し、二番出し、及び五貫島堤防が決壊流失し、交通途絶絶絶修繕したる状態「吉原島田村誌資料集」(消)工)富士川 内務省管轄の4河川の1つに指定され、護岸・水利等の工事に着手
1885	明治	18			6		(左)富士川洪水、宮下地先堤防六十間破堤し、民家及田圃流失す(富士川寛書)(消、消)
1885	明治	18			7.1		(右)富士川洪水となり、岩淵村字「三番出し」より八番出しまでの堤防二百間崩壊せし為、近傍の耕地五反歩流失、富士川往復船中十五艘、岩淵村治岸に停泊し居りしが水の為、陸へ打上げられ、破堤せしもの少なからず(静岡大務新聞)(消)
1888	明治	21			9.11		(左)富士川、宮下業下げ堤破堤「田子浦村誌」大暴風雨あり、富士川巻出し破堤す(加島村誌)(消)
1896	明治	29	(9月10日)	島町横井地先の堤防から切丸込み、町内原平、下島から上合村高島、御請新田などの耕地3日間横井に浸し、住宅數戸と田畑の一部流失(堤防台帳)。(大)相に1町丁相川地先(一番より11番まで堤防失慮)(大)	11.11		(左)暴風雨、富士川鉄橋下河身改修堤防橋脚の石堤百間及宮下地先四番、五番出し、悉皆岸壁長さ六拾間流失(加島村誌)(消)
1898	明治	31			9.1		(左)松岡地先取崩道橋下改修堤防五拾間、宮下より五貫島に至る旧横堤防長貳百間を流失し、為に宮下、五貫島の民家及田圃を流失す(富士川寛書)(消)
1900	明治	33	(8月21日)	午前の時改修工事中の相川村上島8番より11番までの堤防180間全、破堤、流失、12戸全壊16戸、半壊9戸、湯水害屋823戸、湯水害地化24町3段、相川村相川八幡宮も流失、被害は相川村はじめ静浜村、吉永村に及び、赤痢大流行(山下文書)。「大畑文書」。「相川村役所請救助願書書類」。「吉永村高等小学校沿革誌」。「堤防台帳」。「相川村誌」。「静浜村誌」。「吉永村誌」。「志本朝誌」。(大)以下略			
1904	明治	37			7.10		(左)富士川筋においては葉下、宮下地内に在りては、延敷百九拾間の破堤あり(加島村誌)(消)
1904	明治	37		※(大井川町誌 中巻)『金谷町誌 島田市史 上巻』より引用。ただし、大井川町誌よりの引用は(大)で略す。			
1906	明治	39			7.17		(左)富士川洪水の高、宮下地先旧作堤防及改修堤防約三百間流失す(富士川寛書)二十六日、富士川岸ひ出水、宮下堤防破堤す(加島村誌)(消)
1907	明治	40			6.14		(左)富士川も増水、改修堤三百八十八間流失し、五貫島は多くの耕地を失し、且つ益々水路民家に近づくに至る(田子浦村誌)(消)
明治					8.25		(左)富士川筋太洪水、岩松、加島、田子浦各村地元において、堤防破堤少なからず(加島村誌)二十六日、富士川大洪水の高、岩本、松岡地先改修堤約二百間、宮下、五貫島地先改修堤三百八十間、並びに松岡地先鉄橋下改修堤約一百二十間流失。此の改修堤流失の爲め、破堤台に陥没を生じ、一時汽車不通となる。家屋流失一(岩松村誌、富士川寛書)(消)
1908	明治	41			8. 7		(左)富士川洪水にて前年度切れ所三百六十間の外再び流出する等六十間、合せて四百間余間大破堤となり(岩松村沿革誌)(消)
1910	明治	43			8. 7-	大	(左)八月初旬より連日の降雨にて諸川漸次増水し、同月1日に至りては豪雨に莫北風を交えて其の勢凌ぎましく、為に、近年稀なる出水をみたり。殊に富士川鉄橋付近においては、僅に一丈七八尺の増水を示し、旧堤及改修堤共危殆刻々に迫りしか、午後二時頃に至り岩松村松岡地内改修堤は、其の中央部より決壊を初め、地方民の防御も何等の功無き至り時間にして忽ち六百余間を流失し又鉄橋下における聖牛八十個は、午後三時頃に至りて全部破堤せられ、奔騰したる濁流は加島島島村森島堤防に衝突し、…防壁に穿ちたるも、遂に其の効なく、午後十一時に至り、約二百間を決壊し濁水は加島村森島及宮下に犯され、更に田子浦村五貫島及宮島を堰し、入道川口の堤防を破りて河川入り、尚同川の支流は五貫島において舊堤防に衝突しつゝありしが、翌十一日に至り旧堤防二百五十間を破りし、益々其の被害を多かりしめたり(富士郡役所編)加島村宮下富士川堤防二百五十間破堤し、深さ一丈九尺の濁流は二ヶ村を本流の如く流し去りたるか、…早くも至りに強り、百間破堤し、深さは殆ど屋上に乘ったまま流れたる悲慘事を呈したる。…遂に同村宮下五十五戸、森島にて六十戸、又は御塚五貫島二百戸、川成島三十戸、宮島三十九戸、合計三百八十四戸は過半流失し、又は倒壊したれば、船を出して救援中なるが、船不足のため昨日午後五時返取、漸く百五十人を収容(家屋)静岡(消)加島村の被害状況、明治43年8月10日水害取調書、加島村人蓋、個人家屋 半壊2 破堤 住宅60 納屋 70 流失 住宅10 納屋12 浸水 住宅26 納屋200間堤防 決壊2ヶ所 200間 破堤 9ヶ所 74間道路 流失及埋没18ヶ所 2186間 破堤 30ヶ所200間橋梁 流失 30ヶ所 破堤 30ヶ所土地 埋没及流失 925反 濁水 321反



西暦年	元号	年	月日( ) 内は 大隅歴	大井川洪水記録	規模	富士川洪水記録
1911	明治	44			大	(左)富士川出水、本流備前突堤を破壊し、耕地を流し、雁堤防に回り刃々急を告ぐ。依て、沿線の各村水防に依り、郡長及知事等に報告す。九日、十日決堤、激流は甚々雁堤防し近づき、至に重傷の基礎を穿ち、本堤防の決壊を極む。各村消防組、青年団等悉く出動、十一、十三日雁堤防の前線向上す。…十五日に至り漸く激水約三分の一を洩して消裂を免れたり加島村誌「富士川増水の川増水のため、一番出た以下の河身改修修理かほとんど全部破壊されしにまつた。これは明治二十六年に完成したものであった「富士郡誌」明治四十三年八月及同誌十三年八月、富士川洪水にて明治四十二年本県建設工事を以て二月、約式百間を築堤工事し着手せられ四月末日竣工せる工事に属する二百間及上下部を通し、七百間は流亡し、延長香千間と総りし堤堤も余す所僅かに巨間のみ「居松村治事誌」(消)
1914	大正	3			大	(左)富士川出水、岩松村内宇上町堤防決壊、濁流奔入、岩本区「において浸水戸數百余戸に及び、其流峯加島村を襲い、同村神木、平垣及び市街地、本市場全て濁水に浸され、東海道は本流となり、激水襲撃水浸二、三里に達し、學校、役場付近は一時富士川勢を理かべて空通せたり加島村誌「富士川洪水となり、水神量水標最高水位十四尺を示し、岩本堤防は、近代修繕を加えられず低地にあるを以て、忽然岩本河原町にて溢溢決壊し、濁流岩本に奔入其の被害者死 1人、流失 2戸、床上浸水 230戸、床下浸水 161戸、堤防決壊 17間、遺跡破壊 24間、罹災流失 3ヶ所、田畑埋没 7反歩「岩松村治事誌」(工)富士川の暴落的な改修工事始まる

注2:規模の欄の「大」は、大規模な洪水災害を示す。  
注3:洪水記録の欄の文頭の略記号のうち、(左)は現在の富士川の右岸側の平野を、同じく(右)は左岸側の平野を指し、また(工)は主な治水工事を、(噴)・(震)はそれぞれ富士山の火噴火と大規模地震とを指す。  
注4:洪水記録の欄の末尾の略記号は、それぞれ以下の文献から引用したものである。  
(編):富士市史  
(川):富士川町史  
(消):蒲原町史  
(川年表):近世富士川洪水及び関連専門年表(富士川町教育委員会)

※小さな洪水については一部略

と洪水多発時期がみられ、これらの期間の間には10年間で2~3回しか洪水のなかった期間もある。洪水氾濫域は地域的偏りがあり、それは地形的要因と築堤によると推定されている。洪水型としては、扇状地における「旧流路型」と「刎水型」に大きく区分されている。「刎水型」は山裾や対岸の堤防に突き当たった水が刎ねて引き起こされるもので、築かれた堤防の対岸のやや下流が集中的に被害を受けるものである。デルタ性低地においては扇状地的な洪水とともに、浸水型洪水となっている。浸水型洪水においては水位の上昇が遅い事が特徴である。扇状地における「旧流路型」と「刎水型」、デルタ性低地における浸水型洪水が、「東海型河川」下流平野の洪水の特徴とされる（松本繁樹, 2000）。

図28に1550年代から1920年代までの大井川における10年単位の経年変動を示す。1550年代から1920年代までは236回発生し、1.7年に1度、洪水氾濫頻度0.61で多摩川の「被害洪水」のそれにほぼ等しい。10年ごとの年代別洪水発生傾向は、1610年代、1730年代に大きなピークを持ちつつ増加し、1740年代から1840年代まで増減を小刻みに繰り返しつつ、10年間で最大10件から最低3件の幅で洪水が発生し、1870年代から減少に転じている。

#### b) 富士川

富士川は1582年（天正10年）から1914年（大正3年）まで約330年間で60回余り（頻度約0.18）と、大井川に比較が少ない。これは扇頂付近左岸に、1674年（延宝2年）巨大な逆L字型の堤防・「雁（音）堤」が完成したことが大きい。この「雁（音）堤」により、富士川本流は右岸側に移動・固定され、「雁（音）堤」完成以前には左岸域で主に洪水・氾濫が発生していたものが、右岸側での発生と変化する。1854年（安政元年）に安政東海地震が起り、富士川河床が富士川断層により、西側（右岸）隆起、東側（左岸）沈降となり、流路は断層の東へ移動する。洪水氾濫の場は右岸より左岸へと変わる（松本繁樹, 2000）。

図29に1550年代から1920年代までの富士川における10年単位の経年変動を示す。1550年以降では1610年代から1920年代までで、5.3年に1度、頻度0.19である。10年ごとの年代別洪水発生傾向は、1670年代に小さなピークがあるほかは、1770年代までは総じて発生件数少なく、1780年代から増加し、1900年代から減少に転じる。

#### c) 洪水型比較

松本（2000）は「東海型河川」下流平野の洪水の特徴として、洪水による災害を受けやすいのは、扇状地部分及びデルタ性低地であるとしている。これは多摩川においては上流部、下流部に相当し、多摩川においても同様に洪水氾濫及び、「被害洪水」が多い。洪水型としては、上流部では河川洪水が最も多いが、大井川や富士川など東海河川と異なり、

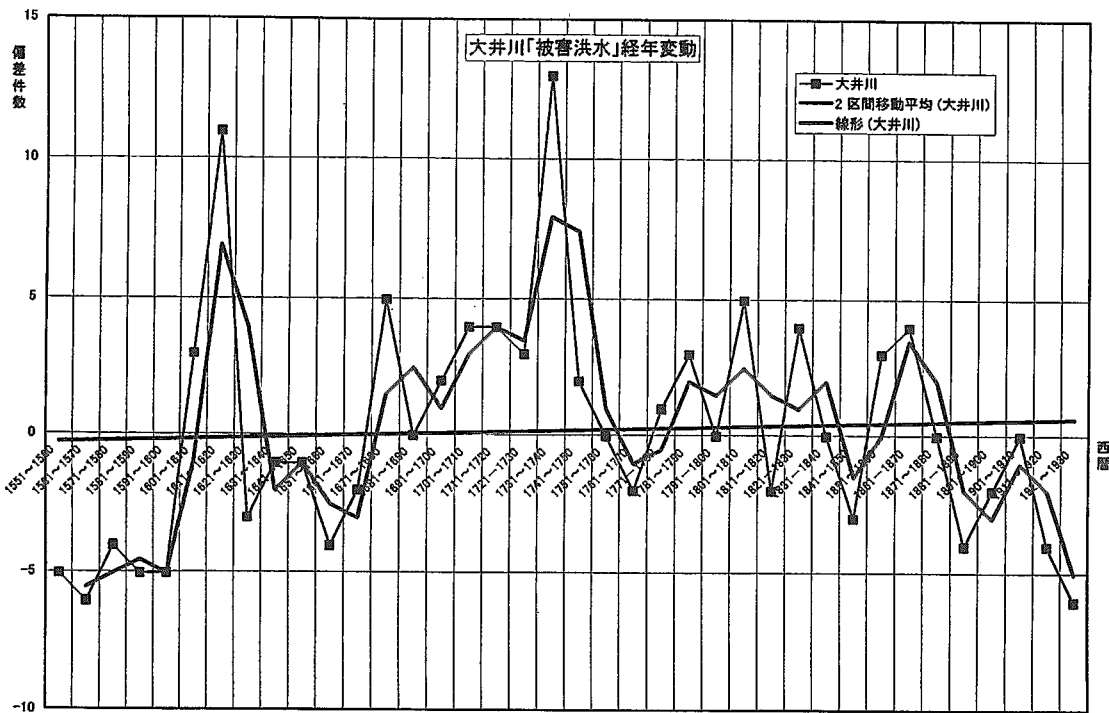


図28 大井川水害経年変動 (10年単位、偏差)

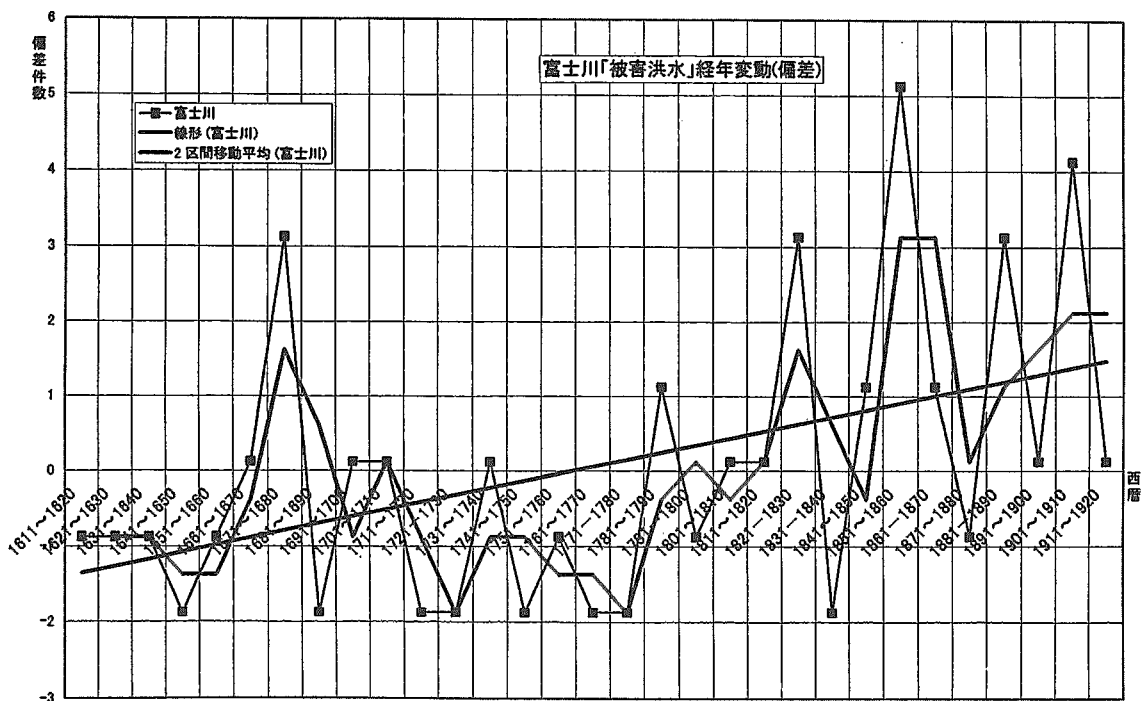


図29 富士川水害経年変動 (10年単位、偏差)

「旧流路型」や「刃水型」洪水は少なく、遷緩点下流の攻撃斜面側で破堤する洪水氾濫が多い。河川溢水型には浸水型と呼べるもある。例えば中流部下流の下丸子村などである。1723年（享保8年）9月7～9の河川溢水で、「1丈7、8尺、数10日湛水、田畑居居屋敷まで多摩川一面、屋敷通り10日（9月9日）には1丈3尺～1丈7、8尺、18日（9月17日）に干潟」とあるが、水位上昇は早く、水位低下は遅い傾向が読み取れる

東海型河川では内水型氾濫はみられない。但し、駿河湾東部の狩野川場合は、谷底平地部分では、東海河川型であるが、それより下流では多摩川と類似の洪水型を示している（松本；2000、大矢；1960、栗林；1960）このような多摩川と東海型河川との洪水型の違いは、扇状地を持たない平野と扇状地からなる平野という基本的な地形の相違に起因するとともに、築堤に示される洪水への人為干渉の違いも反映していると推定される。

## (2) 荒川

荒川は関東山地に源を發し、北東に流れ、秩父盆地を経て、寄居から関東平野を南東に流れて東京湾に注ぐ全長約150kmの河川である。三峰口から上流が山地、三峰口から皆野が盆地部、皆野から寄居が峡谷部であり、寄居から下流で寄居を扇頂とする大きな扇状地を形成している。籠瀬（1981）は寄居付近を扇頂とする扇状地を旧扇状地（低位段丘・寄居面）、川本村明戸付近を扇頂として沖積層からなる一段低い扇状地を荒川新扇状地として区分している。荒川新扇状地の広がりを中心部に熊谷市街が横たわる。

荒川はかつて、利根川の支流であり、その流路は最終氷期から縄文時代にかけて、汎地球的な気候変動や海面変動、地盤運動に影響され、大きく変遷してきている（菊地, 1981；籠瀬, 1981）。

荒川の洪水氾濫については、「荒川 人文Ⅱ－荒川総合調査報告書 3－」（埼玉県, 1988）及び「新編埼玉県史 別編3 自然」（埼玉県, 1986）によっており、これら報告の原典資料の検討や独自の資料収集を行っていない。そのため、洪水氾濫の記録は、「被害洪水」即ち水害記録となっている。

「被害洪水」は1579年から1925年までの347年間で、140件記録されている。「被害洪水」発生頻度は0.4（件/年）となる。

水害原因は図30に示すように、台風及び8～10月の暴風雨が約45%をしめ、次いで大雨が約19%である。洪水型は河川洪水が約43%で優占するが、東京湾河口部での高潮を伴う場合が4.5%ある（図31）。1742年（寛保2年）の洪水にみられるように、荒川の洪水では多摩に比べ、死者や流失家屋数が極めて多い。

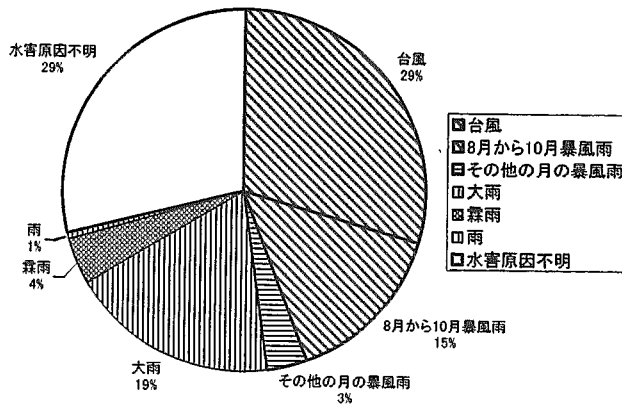


図30 荒川水系水害原因

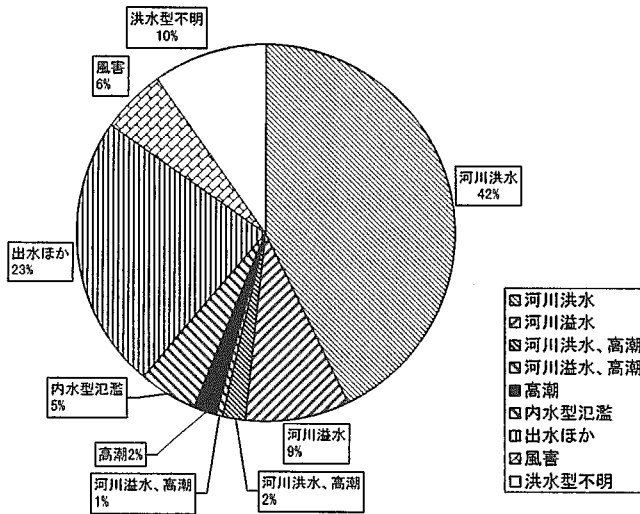


図31 荒川水系洪水型

図31 荒川水系洪水型

年代別での傾向(図32)は、16世紀から18世紀初頭の1710年代までは、洪水発生件数は少なく、1720年代から大きな振幅で増減を繰り返しつつ増加し、19世紀後半の1880年代から減少傾向を示す。1720年代、1780年代、1820年代～1840年代、1860年代～1870年代は10年間で10件以上の「被害洪水」が発生し、荒川における洪水多発期といえる。

1710年代までは発生件数は全体に少ないが、1610年代、1620年代に弱いピークがあり、それ以降やや減少傾向を1710年代まで示す。

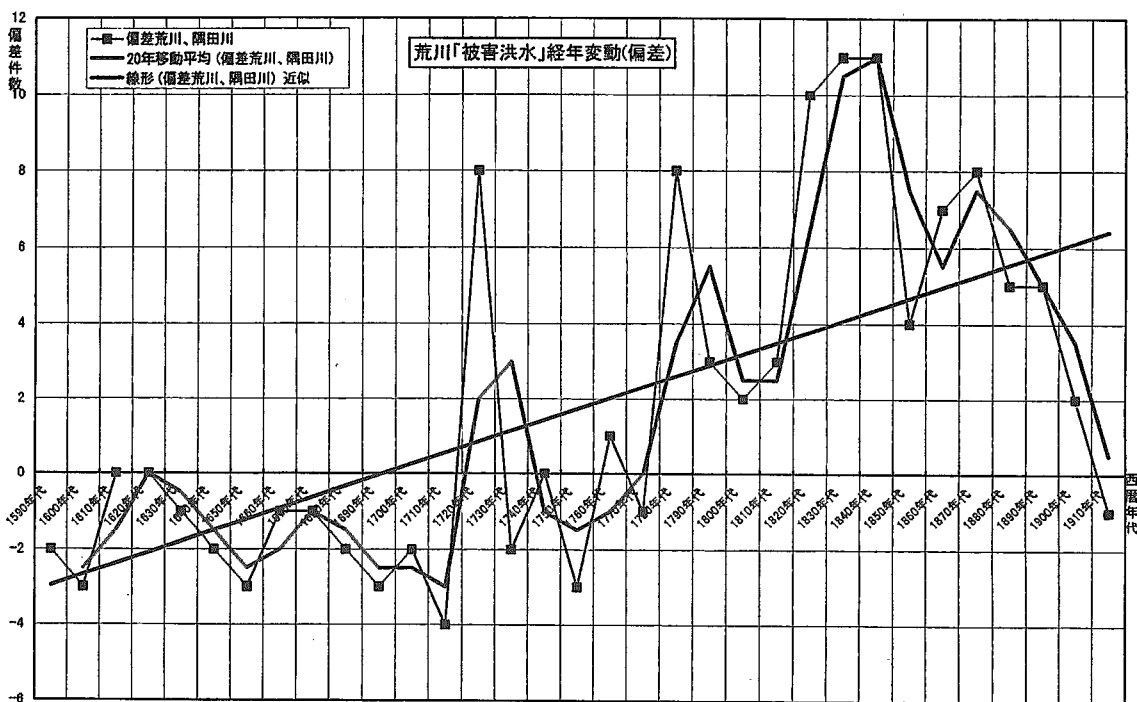


図32 荒川「被害洪水」経年変動(偏差)

近世以前及び近世初頭における荒川の洪水氾濫記録は、断片的で不明であるが、関東郡代伊那備前守忠次による利根川、荒川の河道整備、治水利水事業が近世前期に実施されている。1596年～1614年（慶長年間）には入間川水系の和田吉野川の相上堤、足立郡遊馬村（現大宮市）から葛西領までの囲堤などがあり、さらに1629年（寛永6年）には、荒川河道を入間川水系和田吉野川、市野川に付替えるとともに、吉見領大囲堤、横手堤、大工町堤、山の根堤などの築堤や強化、改修が行われている（埼玉県, 1988）。1680年（延宝8年）には入間川の付替、1723年（享保8年）には市野川の付替が行われており、荒川新扇状地下流では、多摩川に比較し、付替に代表されるように大掛かりな治水事業がなされている。これら一連の治水利水事業によって、1630年代以降1710年代までの発生件数の減少がみられたと推定される。

18世紀以降の水害の増大を、埼玉県（1986）は治水利水事業によって広範な新田開発がなされるとともに、治水対策の怠慢が招いたとしている。同様に、埼玉県（1988）も、18世紀にはいって洪水そのものの増加はなく、大水害増加の原因として、治水工事の矛盾の顕在化、新田開発と人口の増加を挙げている。

### (3) 発生件数変動比較

荒川、東海型河川での記録は、水害が中心となっているので、多摩川の「被害洪水」とこれら河川の洪水を比較する。

#### a) 経年変動

大井川における経年発生傾向は、16世紀中葉から18世紀前半にかけ、1611～1620年、1731～1740年に大きなピークを持ちつつ増加し、以後急減した後、18世紀後半から19世紀後半にかけて増減を小刻みに繰り返しつつ4度の多発期が現れ、19世紀後半から減少に転じている。

富士川における経年発生傾向は、17世紀後半に約10年ほどの多発期を迎えた後、18世紀後半まで増減を繰り返しつつ貧発期となり、18世紀末期から顕著な増加傾向をみせ、鋸葉状に変動しつつ4度の多発期が現れ、20世紀初頭から減少に転じる。

荒川、多摩川も年代別の発生傾向（図33）をみると、ほぼ類似の傾向を示している。即ち16世紀中葉から17世紀ないしは18世紀初頭までは小さな振幅での増減を繰り返しつつも発生件数は全期間に対しては低く、以後18世紀に入り増加し、鋸葉状に変動しつつ多発し、19世紀後半から減少傾向に転じる。

以上より、大井川、富士川、荒川と多摩川の「被害洪水」の経年変化は極めて類似性が高い。

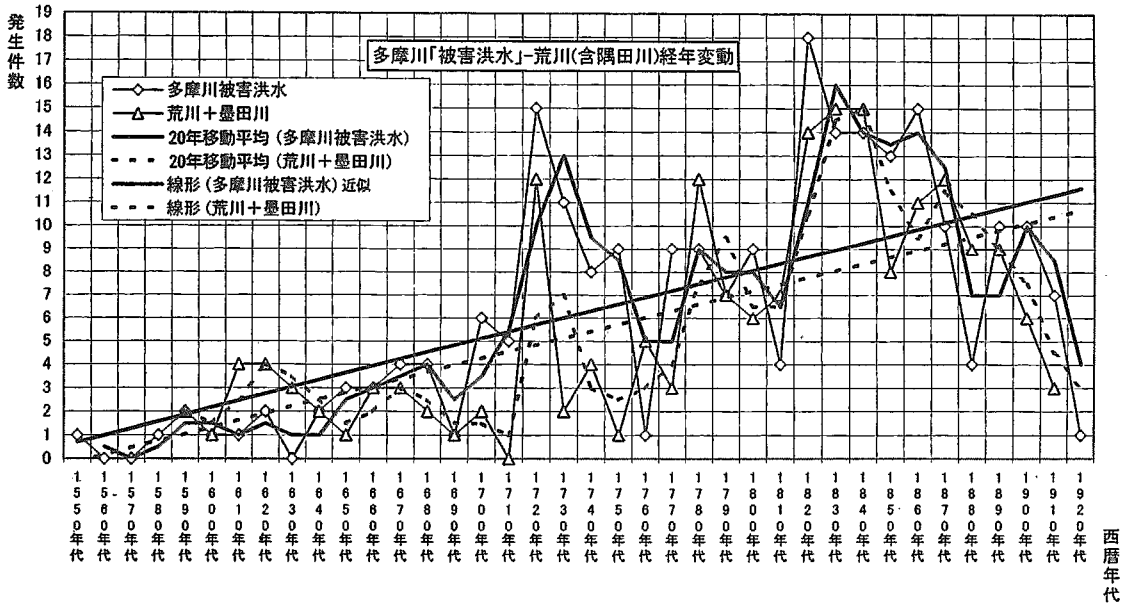


図33 多摩川「被害洪水」-荒川(含隅田川)経年変動

## b) 多発期

大井川では1600年代、1630年代、1860年代、1700年代、1720年代、1770年代、1790年代、1810年代、1850年代、1890年代に「被害洪水」多発のピークがみられ、富士川は、巨大な「雁（音）堤」の存在によるためか、「被害洪水」の変動はあまり顕著でないが、1670年代、1770年代、1820年代、1850年代、1890年代にピークがみられる。大井川、富士川は1670年代、1780年代、1820年代が多発期のピークが同調する。さらに、1670年代、1730年代、1780年代、1820年代、1850年代～1860年代は同時多発期である（図34）。

多摩川と大井川は、1670年代、1770年代、1810年代、1840、1850年代、1880年代にともに「被害洪水」発生がピークとなる。

多摩川と荒川は1620年代、1670年代、1720年代、1780年代が同調してピークである。同時多発期としては、1720年代、1780年代、1820年代～1870年代、1890年代～1900年代の4期となる。

以上から、多摩川、荒川、大井川、富士川の4河川には、1720年代～1730年代、1780年代、1820年代、1860年代の4つの同時多発期が存在する（図35）。

1670年代は多摩川と荒川は多発期ではないが、前後の年代に比べ発生件数は多く、大井川、富士川は多発期である。

1550年代から1920年代までの多摩川の被害「被害洪水」発生頻度は、0.62、大井川が0.61、荒川0.4、富士川は治水の影響を受けたためか0.19である。源流山地、気候、地形及び人為干渉程度を異にする多摩川及び支流の浅川と、大井川、富士川といった東海型河川、及び荒川との「被害洪水」発生頻度や経年変化傾向の類似性、洪水多発期の同調傾向がみられことは、人為干渉を越えたより広域的な自然変動の影響が示唆される。

## 17. 開発、治水と洪水氾濫

### a) 開発

18世紀以降の荒川の水害増大原因として、埼玉県（1986, 1988）は治水利水事業によって広範な新田開発がなされたことや、治水工事の矛盾の顕在化、人口の増加を挙げている。同様に、岩屋（1986）も近世中期、末期の新田開発が、水害の増大に関連するかのような報告を行っている。

多摩川沿岸域での新田開発を既存の資料から検討する。

上流部左岸拜島領の近世（元禄期、享保期、天保期、明治期）における村高の変遷を神立（1988）は報告しているが、これによれば、土地開発に伴う耕地の拡大により生産高が



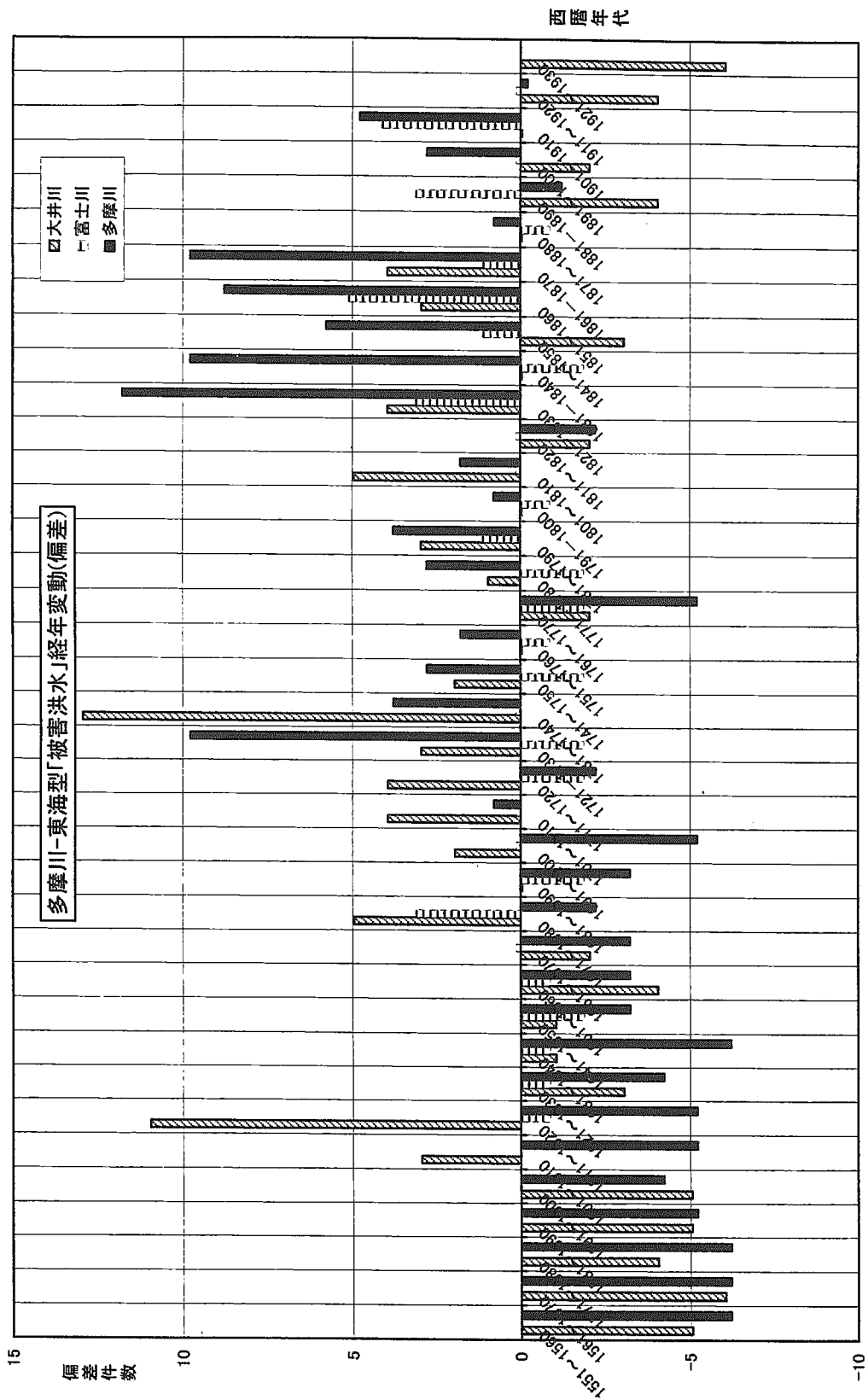


図34 多摩川-東海型「被害洪水」経年変動(偏差)

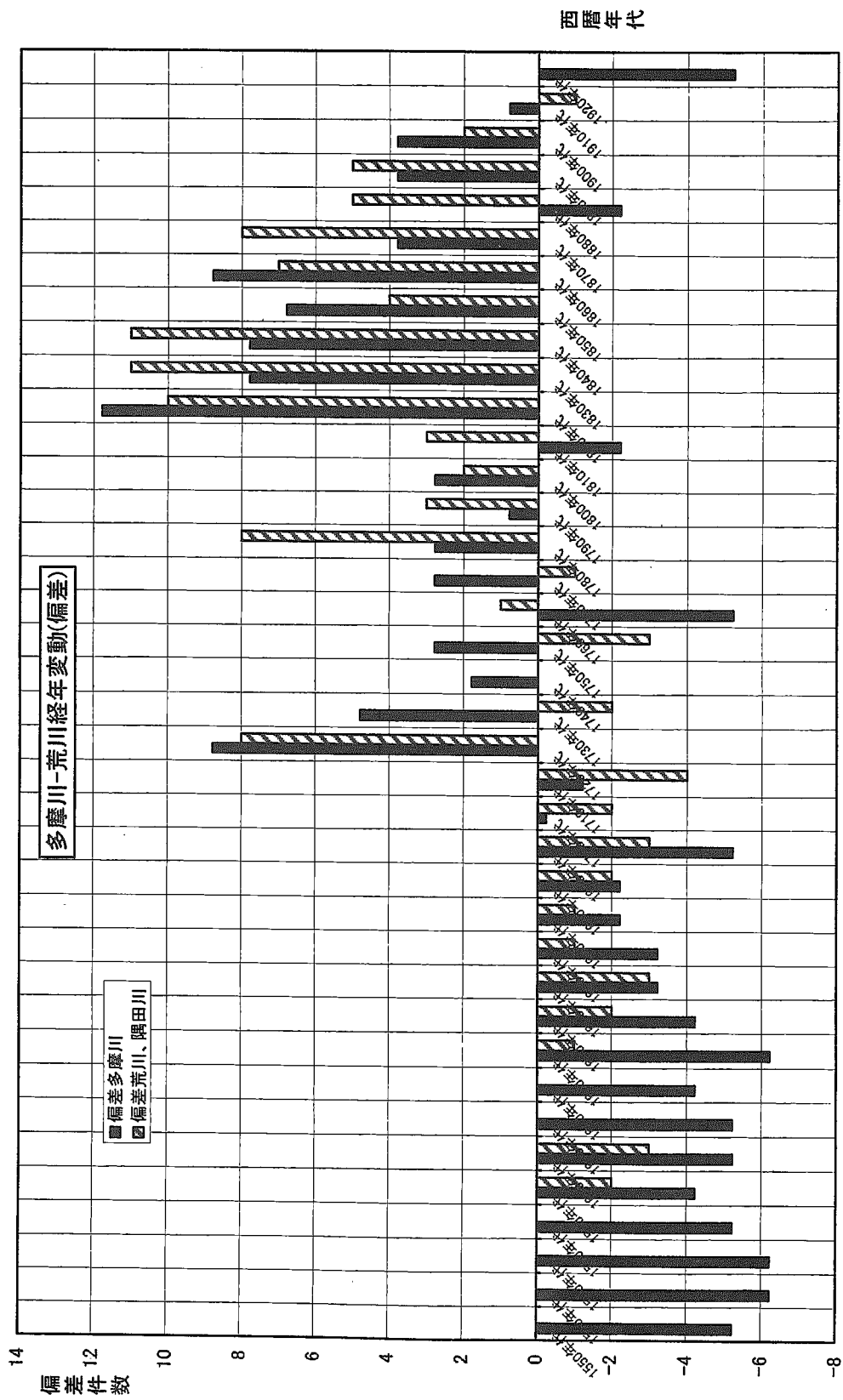


図35 多摩川-荒川経年変動(偏差)

増大した上河原村が、約2.5倍の村高増加を示す以外は、他の村は30%前後の増加を示すほどで大きな変化をせず、停滞的あるいは微増という傾向であり、特に、右岸の作目村、楢原村、海坪村、谷野村、大沢村でこの傾向が顕著である。

上流～中流部左岸世田谷区域では、元禄年間が開発のピークとなっており、畑作地新田の増大により、村高は正保期に比較し、元禄期では3.3倍の増加となり、田高と畑高の比も、正保期が6：4であったのが、元禄期以降2：8と逆転しており、田の開発は少ない（世田谷区, 1962）。

中流部最下流左岸下丸子村では、六郷用水開削直後の1614年（慶長19年）と1644年（寛永21年）では、総反別では4町6反歩余増加し、田方の地目変更、畑方から田方への転換などの水田開発が中心になされている（佐々, 1922）。村高の変化では、正保年間の「武蔵田園簿」と元禄15年の「武蔵国郷帳」との比較では、正保期の村高を100とした場合、指数200以上の大幅増加が認められるのは、羽田、新井宿、古市場、桐ヶ谷、石川で、他は全く変化がないか、減少している。これら増加した村は畑方の増加が著しく、17世紀後期の開発主体は田方から畑方へと変化していることが指摘されている（佐々, 1922）。これらの開発は18世紀以降内陸部では頭打ちの状態となるが、海岸部の羽田村などでは低地の開発がその後も盛んに行われている。

「多摩川誌/別巻 統計・資料」（多摩川誌編集委員会, 1986）の「資料4 多摩川流域における村名と石高の推移」によれば、17世紀前半、1688年～1703年の元禄期、1818年～1829年の文政期、1830年～1843年の天保期、1868年の明治元年の石高を比較しても、17世紀前半から元禄期（1688-1703）にかけては、顕著な石高の増加がみられるが、18世紀以降は多摩川沿岸域では増加がみられないか、微増程度である。

従って、多摩川最下流から海岸部を除けば、被害洪水多発期が現れる18世紀以降顕著な開発の増加はなく、少なくとも被害洪水多発期が頻発する19世紀については、開発が被害洪水増加の原因とは推定できない。

## b) 治水

本報告では、5.7) 治水と地形の項にあるように、近世の治水について十分な調査が及んでいないが、左岸大田区域については、佐々（1992）の研究がある。佐々（1992）によれば、左岸中流部から下流部には山付堤（下沼部村～中原街道間と嶺村～下丸子村間）、横堤（下丸子村）、外堤（下丸子村～古市場村間）、大囲堤（鶴木村～矢口村間と矢口村～今泉村間）などの堤防群が近世後期には築造され、そのうち、古市場村～羽田獵師町間の

全長約7kmの外堤は1596年～16009年の慶長年間、下沼部村～中原街道間の亀甲山の台地に接続する山付堤は1783年（天明4年）に築造され、河口部では1696年（元禄9年）に右岸側から左岸側への瀬替普請が行われたとしている。さらに、佐々（1992）は年次不明としつつ、1717年（享保2年）以前に代官小泉氏が右岸小杉村、左岸等々力村間で玉川の掘りかえを行った事を紹介しているが、岩屋（1986）の田中丘隅によるという1723, 1724年（享保8, 9年）の現川崎市中原区等々力緑地付近での捷水路開削との関連は不明である。1725年（享保10年）には、田中丘隅が、多摩川の右岸側への偏りを修正するために、中丸子村、嶺村、上平間村、下丸子村、矢口村の区間で左岸よりに新川を掘り、川筋を付替えたという（佐々, 1992）。図1には右上平間と古市場との間に南に大きく蛇行した旧流路が認められることから、1725年の新川開削は、蛇行部の捷水路開削と推定される。岩屋（1986）では上平間蛇行部における捷水路開削は1761年（宝暦11年）の川崎平右衛門によるとされている。岩屋（1986）と佐々（1992）では、上記のようにほぼ同一と推定される地点での新川、捷水路開削の年次及び実施者が異なっているが、原典資料等の調査を行っていないので指摘するに留める。佐々（1992）は1792年（寛政4年）の下丸子村「川除御普請仕来り書上帳」をもとに、18世紀初頭から約90年間に計19回の川除普請が行われ、1772年～1788年（安永期～天明期）に急増している事を報告している。この時期は多摩川「被害洪水」発生多発期の一つに相当している。

以上から、最下流部（海岸部）を除いては、1688年～1703年の元禄期に沖積低地の開発は頭打ちとなり、18世紀に関しては17世紀に比較しての被害洪水の増大は、開発も一因との可能性を否定できないが、19世紀に関してはその可能性は薄いと思われる。

## 18. 気候と洪水氾濫

上記のように、本報告で対象とした時代においては、多摩川の洪水氾濫は、地形単位、微地形、河床勾配などの地形的構造・自然条件に対応して発生していると推定される。明治に入って、架橋による上流部右岸や下流部での水位上昇、内水型氾濫域の拡大などがあるが、総体的には人為による影響は少なく、洪水頻度や傾向は自然条件によると認定できる。さらに、多摩川とは、自然条件や人為干渉の歴史的背景を異にする東海型河川や荒川と、「被害洪水」発生傾向が類似し、これら河川の洪水氾濫に広域的な自然変動の影響が示唆されることから、自然条件として、気候的要素について考察する。

## (1) 小氷期

日本ではほぼ江戸時代に相当する16世紀から19世紀は、地球的規模での寒冷期である小氷期にあたる。但し、世界各地の寒冷期には、ある程度の同時性がみとめられるものの、地域によるちがいも大きく、現状では「小氷期」の開始・終了期を明白に決める事は困難であるとされている（松本, 1992）。日本における小氷期の特有の気候としては、早くより山本（1974, 1976）などによって、冷夏・多雨-暖冬が取り上げられていた。山本（1976）によれば、「厳冬・多雪」期が「酷暑・寡雨」と手を携えて登場するのは、ジェット・ストリームが弱い時期であり、「暖冬・寡雪」期が「冷夏・多雨」期を同伴して出現するのは、ジェット・ストリームが強い時期=「非モンスーンの」である時期であるとし、小氷期はジェット・ストリームが強い時期に相当し、日本近海における低気圧の発生多しとした。さらに、山本（1976）は「非モンスーンの」である時期は、北太平洋高気圧の衰弱時であり、冷涼な夏を生ずるとした。

その後、山川（1992）は日下部（1968, 1973, 1977, 1978, 1981）の一連の研究や前島ほか（1982, 1990）の研究を整理して、小氷期の冷害はブロッキング高気圧が成因であり、北日本では増加しているが、全国規模では卓越しないことから、冷夏・多雨は小氷期を必ずしも象徴せず、寒冬・大雪、竜巻・雷雨・雹を小氷期特有の現象であるとした。山川（1992）は諸災害の発生推移から、小氷期には台風災害が頻発し、特に18~19世紀の関東および中国・四国・近畿地方では、総被害発生件数の過半数を占め、被災地は16世紀までの東日本中心に対し、17世紀以降は関東以西全般に広域化したこと、これは台風の発生位置と北太平洋高気圧・大陸高気圧の張り出し具合が影響、事実1830年代後半、1824年、1828年などは確かに高頻度であったとした。即ち、山川（1992）によれば小氷期の気候的特性は寒冬・大雪で、夏の大雨の降りやすい不安定な気候と言う事になる。

## (2) 小氷期と多摩川「被害洪水」

多摩川「被害洪水」発生多発期は、1720年代~1750年代のⅠ期、1770年代~1780年代のⅡ期、1820年代~1870年代のⅢ期、1890年代~1900年代のⅣ期である。TAGAMI et al. (1992) は、日記類をもとに、小氷期の各年代ごとの冬、夏の気候を推定している。以下、TAGAMI et al. (1992) の年代別気候推定を使用する。TAGAMI et al. (1992) のmild winterは暖冬、cold winterは寒冬、hot summerは酷暑、cool summerは冷夏と訳した。表5、6に近世の気象災害と、「石川日記」による旱魃記録を、TAGAMI et al. (1992) による気候と多摩川の洪水年代を表7に示す。

表5 近世の気象災害

年号	年	西暦年	月日	天候	地域	状況	文献
天文	4	1535		旱魃		大旱不植不茂刈、二月十二日雨下、以後者不降者也。	東京(興福寺略代記 他)
天文	4	1535		干ばつ	諸国	鎌倉は二月十七日から六月二十九日まで雨が降らず、そのため田植えができず収穫はなかった。	日下部No143 (日本、東京 他)
天正	12	1584	8.15	旱魃	江戸	当年七月十日より、百十日計大旱魃、但国により不同ありと云々、折節夕立したる事もありそれは穉の儀なり。	東京(宇野圭水記)
天正	12	1584	7~10	干ばつ	諸国	七月十日から111日ほど干天が続いた。もっとも国により不同があり、時には夕立もあった。和泉が特に甚だしく、関東地方についての具体的な記録はない。	日下部No148 (日本、東京)
慶長	9	1604		旱魃	江戸	六月十四日 天晴陰、雲而不降、今日湿雨の御祈諸社へ被仰。	東京(時慶卿記 他)
慶長	9	1604	6,7	干ばつ	諸国	夏の干ばつに加え、秋に風水害があり、凶作となった。	日下部No159 (日本、埼玉)
慶長	10	1605	7.29	旱魃	諸国	五月二十四日より雨不降 天旱魃 下民迷惑至極也(中略) 諸国旱魃甚也。	東京(慶長見聞記)
慶長	10	1605	夏	干ばつ	諸国	五月二十三日から雨が降らず、六月十四日に雨乞いをおこなった 関東地方についての具体的な記録はない。	日下部No164 (日本、東京)
慶長	11	1606	3	干ばつ	関東	麦畑は皆枯れた。	日下部No166 (早霖)
慶長	12	1607	夏	干ばつ	関東	閏四月下旬から雨が降らず、麦がみのらなかつたが、五月下旬から酷暑となり、病気になる者が多かった。六月十三日に雨が降ったが、干天はさらに続いた。	日下部No168 (早霖)
慶長	12	1607	11	酷寒	諸国	具体的な記録はない。	日下部No169 (栃木)
慶長	14	1609	4	干ばつ	関東	関西から関東まで四月以来干ばつであったが、五月二日小雨が降り、貴賤皆よろこんだが、雨はまだ不足であった。秋の暴風もあり、凶年となった。	日下部No172 (埼玉、早霖)
慶長	17	1612	5~7	干ばつ	関東	五月から六月七、八日ごろまで、六月二十六日から七月十一日まで、関東各地は雨が降らなかつた。	日下部No176 (埼玉、早霖)
元和	1	1615		冷害	奥羽	この年奥羽冷害のため大凶作となり、弘前領では翌年にかけて餓死者おびただし(元和の飢饉)	菊池勇夫「近世の飢饉」
元和	1	1615			奥羽	この年奥羽冷害のため大凶作となり、弘前領では翌年にかけて餓死者おびただし(元和の飢饉)	菊池勇夫「近世の飢饉」
元和	5	1619	1.9.	暖冬		天温如極暑、万民著帷子猶拭汗。	東京(元寛日記)
元和	5	1619	5~8	干ばつ	関東	ひどい干ばつで稲穂は立ち枯れとなり、五穀はみのらず、多くの人馬が死んだ。	日下部No184 (日本、東京 他)
元和	5	1619	10.7	旱魃	諸国	自五月三日至七月大旱魃不降一滴 禾穂乍立枯不登五穀由 自諸国注進。	東京(元寛日記 他)
元和	8	1622	7.9	冷夏	江戸	当年六月中霖雨 冷気如初春 依之諸人相煩事無限。	東京(東京市史稿)
寛永	1	1624			陸奥	この年陸奥飢饉。9月、会津領で餅・酒・豆腐などの製造禁止される	菊池勇夫「近世の飢饉」
寛永	3	1626	4~8	干ばつ	諸国	江戸の井戸は大半が枯渇し、魚は死に、草木は枯れた。	日下部No187 (日本、東京)
寛永	3	1626	4~10	旱魃		夏四月より秋八月迄天下大旱魃にて江州大半渇し或は鱗魚水に渇して死し又草木悉く枯○て糸によられしなり。	東京(玉露叢 他)
寛永	3	1626			諸国	この年旱魃により諸国飢饉。京都で有徳の町人、飢人を施行するけ町人施行の初見か	菊池勇夫「近世の飢饉」
寛永	13	1636	6~7	旱魃	江戸	五月六月の間更に雨降らず。	東京(武江年表 他)
寛永	16	1639			西日本	この年西日本一帯で牛疫病が流行し、翌年ピークとなる	菊池勇夫「近世の飢饉」
寛永	18	1641				この年旱魃・洪水・冷害などで全国的に大凶作となり、翌年にかけて天下大飢饉。西日本一帯旱魃、但し豊後臼杵藩8月大洪水、北陸を含む東北日本、加賀藩長雨・冷風、会津藩6月大雨・雹等霖雨・冷害型	菊池勇夫「近世の飢饉」
寛永	18	1641		旱魃	西日本		菊池勇夫「近世の飢饉」
寛永	18	1641	8		豊後臼杵藩	大洪水	菊池勇夫「近世の飢饉」
		1641		長雨・冷風	北陸を含む東北日本、加賀藩		菊池勇夫「近世の飢饉」

年号	年	西暦年	月日	天候	地域	状 況	文献
		1641	6	大雨・雹等霖雨・冷害型	会津藩		菊池勇夫「近世の飢饉」
寛永	19	1642				この年も全国的に大雨・洪水で大凶作となり、翌年まで飢饉状態が続く(寛永の飢饉)。熊本藩6未大水、佐賀藩水損、土佐藩8月風雨・虫付、美作国水損、山城国旱魃、諏訪(高島)藩水害、加賀藩8月末以降雨続き、関東7月下旬より長雨・大雨・虫付・霜降り、会津藩8月末大霜、加えて西日本日照り・虫害、東日本霜害・虫害2月、幕府、人身売買を禁止し、奉公人の年季を10年に限る(幕府の人身売買禁止の初令は1616年)。4~5月、幕府、参勤大名に帰還を許し、国元での撫民を指示。五月以降、幕府、具体的な飢饉対策を打ち出していく。5月、幕府の御蔵衆、私的により米価高騰を招いたとして摘発される。閏9月、幕府、最初の全国的な酒造禁令を出す。幕府、大名に対して作柄・免棚の報告を命じる	菊池勇夫「近世の飢饉」
寛永	20	1643				2月、藤府、江戸日本橋に集る飢人(こもかぶり)の出身地を調査し大名に引き渡す。馬喰町に非人小屋を設ける。三月、田畑の、水代売買禁止など包括的な小農維持政策を公布	菊池勇夫「近世の飢饉」
正保	4	1647	4.25	低温降雪	関東	東国一帯北風が吹き、真冬のような寒さで、雪が降った。	日下部No.200 (日本、東京)
慶安	2	1649	5~6	冷夏	関東	気候不順で冷夏、東国筋は米穀がみのらなかつた。	日下部No.204 (日本、東京)
慶安	2	1649	6~8	冷夏	東国	五六月気候不順にて、寒冷行われ、東国筋米穀不熟。	東京(三賀園齋)
慶安	3	1650	6~7	冷夏	江戸	六月今夏雖土用甚冷 可著綿衣 七月三日四日 北風大雨 雖土用甚冷。	東京(山鹿素行先生日記)
		1651	7.21	冷夏	江戸	寒冷。	東京(山鹿素行先生日記)
慶安	3	1651	11	大雪	武蔵	江戸では91cmも積もったが、近年にないことである。奥羽・筑前も大雪。(十一月廿日)	日下部No.209 (日本、東京)
承応	元	1652	7~9	旱魃	江戸	六月七月炎旱 後日無雨 六月廿七日 七月六日 十四日小雨 今年酷暑甚 至秋人多罹無言之疾。	東京(山鹿素行先生日記)
寛文	3	1663	4~7	干ばつ	江戸、九州	江戸は五月二十三日に雨が降っただけでひどい干ばつであった。九州も干ばつ。	日下部No.226 (日本、東京)
寛文	3	1663	5~9	旱魃	江戸	七月今年甚旱五月廿三四日爾後不雨	東京(山鹿素行先生日記他)
寛文	5	1665	2~3	旱魃	江戸	今月無雨 但廿九日細雨	東京(山鹿素行先生日記)
寛文	6	1666		風水害	諸国	この年風水害により諸国凶荒となる。11月、酒造の半減を命じる	菊池勇夫「近世の飢饉」
寛文	8	1668	5~6	干ばつ	諸国	干ばつで凶作となり、米価は11%騰貴した。	日下部No.230 (日本、東京)
寛文	8	1668		旱魃	江戸	凡今年乾旱無雨	東京(山鹿素行先生日記他)
寛文	8	1668		旱魃	諸国	この夏諸国旱魃となり、翌年にかけ飢荒する	菊池勇夫「近世の飢饉」
寛文	9	1669				1月、幕府、京都で窮民に対し100日間の粥施行を行なう。6月、金沢領などで風水害による損毛多し	菊池勇夫「近世の飢饉」
寛文	11	1671	冬	暖冬	諸国	51年来ない暖冬で、麦は年内に穂をだし筈がで、菜の花が咲いた	日下部No.234 (日本、東京)
寛文	11	1671	12.27	暖冬		今日己後甚暖氣五十年來之無、東西皆然奥州冬水 水仙開發 信州不氷、北国無雷 七十年來人不和之。	東京(山鹿素行先生日記)
延宝	2	1674	4~7	冷夏・長雨	諸国	近畿地方から陸中にかけて、寒冷に加え雨がたびたび降り、洪水になったというが、関東地方についての具体的な記録はない。	日下部No.236 (日本、東京)
延宝	2	1674	5~8	冷夏	岩手	天寒四月より六七月に至り寒冷	東京(岩手県災害年表)
延宝	2	1674	夏秋	風水害	諸国	この夏秋風水害により諸国大凶荒となり、翌年春、天下飢饉。餓死者が多く出る(延宝の飢饉)	菊池勇夫「近世の飢饉」
延宝	3	1675				2月、幕府、大和・摂津・河内の飢人を救済する。幕府、諸氏困窮を理由に当年に限り奉公人の長年季・譜代を認める。幕府、江戸の柳原に非人小屋を設け、飢人に粥を施す。3~5月、幕府、京都で飢人に粥・銭を施行する	菊池勇夫「近世の飢饉」
延宝	4	1676		干ばつ	関東	東国干ばつで米価騰貴したというが、気象についての記録はない	日下部No.238 (埼玉、早稲)

年号	年	西暦年	月日	天候	地域	状 況	文献
延宝	7	1679		寒冷		今年甚寒 五十三年此寒無之云々	東京(山鹿素行先生日記)
延宝	8	1680	10~2	旱魃		秋より冬に至りて大旱 明年正月十八日夜に初て大風雨なり。	東京(続日本王代一覽他)
延宝	8	1680				この秋風水害により諸国大凶作、西国では翌年春飢え死にする者多し	菊池勇夫「近世の飢饉」
延宝	8	1680~81	9~12	干ばつ	関東	九年一月十八日の夜初めて大雨が降ったが、秋作は凶作で、飢民は多く路傍に倒れた。東海道・近畿・奥州も干ばつ。	日下部No.2 4 8 (日本、東京)
天和	1	1681				この年も気候不順で凶作となり米価高騰、翌年春夏にかけ西国こ飢死者が多く、また京都および近い国で疫病が流行し人命を奪う(天和の飢饉)	菊池勇夫「近世の飢饉」
天和	2	1682	6~8	冷夏		冷寒	東京(山鹿素行先生日記)
天和	3	1683	1	暖冬		今年冬甚暖気雪不降 北国奥州西の年十四五年己前冬如此(下略)	東京(山鹿素行先生日記)
天和	2	1682~83	12	暖冬	関東	暖冬で雪が降らなかった。北国・奥州も暖冬。	日下部No.2 5 1 (日本、東京)
貞享	1	1684	7	干ばつ	諸国	江戸では51余日雨が降らず、東西北国皆干ばつであった。	日下部No.2 5 6 (日本、東京)
貞享	1	1684	8~9	旱魃		天和四年七月二十二日東西北国皆旱之由、凡五十余日不雨当地者去月皆陰雲細雨、無大雨。	東京(山鹿素行先生日記)
元禄	6	1693	7.3	旱魃		俳師其角三冊社に雨乞の句を吟ず	東京(武江年表)
元禄	8	1695		冷害	諸国	春寒く、夏は長雨、秋大雨、寒さ早く、諸国稔らず、安房では大飢饉であった。	日下部No.2 6 1 (千葉、早霧)
元禄	8	1695		冷害	奥羽・北陸地方	冷害により奥羽・北陸地方大凶作、とくに弘前領・盛岡領などでは翌年にかけて餓死者数万人に及ぶ(元禄の飢饉)。10月、幕府、捨子・捨犬の禁止を命じる生類憐みの全国法令を出し、また中野に犬小屋を設ける。弘前藩、幕府より米三万俵の拝借を認められるが、実際には金子で拝借。11月、盛岡番、凶荒を理由に参勤を免じられる。11~12月、幕令を受け飢饉下の北奥の諸藩でも犬の養育を領民に触れる	菊池勇夫「近世の飢饉」
元禄	9	1696	6	冷夏	関東	東国筋は六月が寒冷であった。	日下部No.2 6 2 (日本、東京)
元禄	9	1696	6~7	冷夏	東国	東国筋寒冷行われ(下略)	東京(三貨図彙)
元禄	13	1699		風水害	奥羽	この秋風水害により奥羽など大凶作となる	菊池勇夫「近世の飢饉」
元禄	14	1701	5、6	冷夏	関東	江戸近国は五月から寒冷で、土用に入っても綿入れ小袖を着るほどであり、風雨も加わって、冬には飢饉となる。奥州も飢饉。	日下部No.2 6 6 (日本、東京)
元禄	14	1701	7.19.	冷夏	江戸	土用入十九日より雨ふり、世上寒、綿入れ小袖を着、廿日 廿一日 廿二日同右(中略)江戸近辺は生も無甲斐見え候に此土用之不順なるをおもえば大飢饉たるべしや。	東京(御当代記他)
元禄	15	1702		飢饉	諸国	二月諸国飢饉とあるが、具体的な記録はない。下総では五月に施米や救助対策の土木工事を行っている。	日下部No.2 6 9 (千葉)
元禄	15	1702		冷害	奥羽	この年冷害により奥羽など大凶作、盛岡領などで餓死者多数出る	菊池勇夫「近世の飢饉」
宝永	四	1707	11.23	降灰		十一月二十三日10時ごろ富士山が爆発した。この爆発で宝永山ができ、降灰は川崎で5cm、船橋でも10~13cm積もった。	日下部No.2 8 1 (神奈川、千葉他)
宝永	5	1708	12.1	旱魃		宝永六年去年十月廿日の後雨降らず正月十一日夜に至て雨降る	東京(武江年表)
享保	5	1720	7	日照り	八王子	43日間日照り	石川日記
享保	10	1725	7	日照り	八王子	諸作結れる	石川日記
享保	11	1726	7	日照り	八王子	40日間日照り	石川日記
享保	12	1727	7	日照り	八王子	諸作いたみ	石川日記
享保	14	1729	4.25	冷夏	関東	此年三月廿五日己巳穀雨の節にて廿八日壬申寒気はげしく、此夜霜つよく降て、秩父のあたりは桑の葉皆枯たりとかや。	東京(武江年表補正略)
享保	17	1732		干ばつ	諸国	諸国大干ばつで飢饉となつたが、関東地方についての具体的な記録はない。	日下部No.3 0 9 (栃木)



年号	年	西暦年	月日	天候	地域	状況	文献
享保	17	1732		蝗害	近畿以西	この年蝗害すなわちウシカノ異常増殖により近畿以西の稲作大被害を受ける。このため北九州や四国など翌年にかけて飢饉状態となり、大名・旗本からの幕府への報告では1万2000人余の餓死者が出る（享保の観鐘）。八月、幕府、蝗害被害地の救済のため大阪囲米五万石の西国への払い下げを決める。九月、幕府、西国払いのため江戸買い上げ米三万石の大阪回送を決める。十二月、幕府、近畿内および西国の城詰米を蝗害地に向けてことを決める。十二月、幕府、畿内以西の幕領に飢人救済の高札を建てるよう指示	菊池勇夫「近世の飢饉」
享保	19	1734				1月、米価高騰により江戸の米問屋高間伝兵衛生打ちこわされる。この夏西日本を中心に風邪・疫病流行。二山月、幕府、抱え医師望月三英・丹羽正伯方の簡便な疫病対策法を町奉行に命じて版行し、幕領に配る	菊池勇夫「近世の飢饉」
享保	19	1734				五月、幕府、合力・施行者の名前を掲載した『仁風一覽』を大坂で刊行	菊池勇夫「近世の飢饉」
延享	3	1746	6	日照り	八王子	諸作いたみ	石川日記
延享	4	1747	5.9	冷夏	江戸	大霜つもる。	東京（武江年表）
寛延2年	2	1749		冷害、 獣害	北奥羽	この年冷害および獣害により、北奥を中心に大凶作となる。八戸領では俗に猪飢饉と呼ばれ、翌年にかけて餓死者が多数出る（寛延の飢饉）	菊池勇夫「近世の飢饉」
宝暦	2	1752	6	日照り	八王子	村中井戸水切れ	石川日記
宝暦	5	1755		冷害	東北	この年冷害により東北地方を中心に大凶作。翌年にかけて盛岡領で約五万人の餓死者を出すなど、天明の飢饉に次ぐ惨状となった（宝暦の飢饉）。九月、米沢藩の下級武士、米価高騰により城下の富商を打ちこわす。十二月、一関藩に仕える医師建部清庵、救済書「民間備忘録」を脱稿。八戸藩5月上旬より大雨降り続き、5/20～5/23洪水で川欠・山崩れ、6月上旬～8月中旬冷たい「東北風」、雨ばかり、8/16、17大霜、稲出穂なく青立、水損・川欠・青立で表高2万石のうち損毛高1万8573石（「八戸藩日記」）。盛岡藩表高10万石のうち損毛7万7170石、新田高14万8000石のうち損毛高12万2530石、このうち不熟被害18万6628石、その他水押しによる当毛荒・永代荒（「盛岡藩雑書」）。秋田藩5/24大洪水で田畑押し流される（「置きみやげ添日記」「近世秋田の農書」）。米沢藩大雨洪水3万7780石余、不熟7万5820石余損毛届け（「米沢市史」近世編2）	菊池勇夫「近世の飢饉」
宝暦	6	1756	夏	干ばつ	関東	西国・九州・東国は八月ごろまで干ばつで雨を祈った。農作物は7～9分作であった。	日下部No.3 2 3（埼玉、早稲）
宝暦	8	1758	7	日照り	八王子	照り過ぎ迷惑	石川日記
宝暦	9	1759	4	日照り	八王子	田仕付けできず	石川日記
宝暦	10	1760	4～8	干ばつ	武蔵	江戸は四月から八月まで干天続き、農作物の被害がひどかった。山城・陸前も干ばつ。	日下部No.3 2 6（日本、東京）
宝暦	10	1760	5～10	旱魃		当五月旱照に而植付等茂及延引又々旱照相続立毛にむせ入、かれ穂多く殊外悪作に而難波仕候。	東京（稻荷神社文書他）
宝暦	10	1760	5	日照り	八王子	飲み水切れる	石川日記
宝暦	11	1761	7	日照り	八王子	照り過ぎ迷惑	石川日記
宝暦	12	1762	5,6	干ばつ	諸国	農作物に被害があった。関東地方についての具体的記録はない。	日下部No.3 2 8（日本、東京）
宝暦	12	1762	5～8	旱魃		夏旱魃百八十二町七反歩無根付、八百九十一町一反歩日焼。	東京（望春隨筆他）
明和	2	1765	6	日照り	八王子	照り過ぎ芋痛み	石川日記
明和	7	1770	5～8	干ばつ	関東	五月上旬から八月下旬まで、およそ101日以上雨が降らず、池川井水はことごとく枯れ、田畑の諸作は大被害で飢饉となった。九州・四国・近畿・奥羽地方も干ばつ。	日下部No.3 3 4（日本、東京）
明和	7	1770	5～10	旱魃		五月上旬より八月下旬迄百有余日諸国旱魃、京、大阪、江戸及諸国、池川井水悉枯す。	東京（泰平年表他）
明和	7	1770	6	日照り	八王子	水切れ井戸掘り	石川日記
明和	7	1771	12	暖冬	諸国	春のような温かさで、江戸近郷でも筍がはえた。	日下部No.3 3 5（日本）
明和	8	1771	4～6	干ばつ	関東	香取では四月二十三日から3か月ほど雨が降らず、上野の各地では水田の植付反別は2～3分程度であった。水田に畑作物を作ったが、その後の雨続きで被害を生ずるなど、房総常武6か国ともに飢饉となった。近畿・九州など全国的に干ばつ。	日下部No.3 3 6（日本、東京、他）
明和	8	1771	5～8	旱魃		世間大旱魃也（中略）凡七十日余旱魃。	東京（有吉記録他）
明和	8	1771	5	日照り	八王子	4 4 日旱魃	石川日記

年号	年	西暦年	月日	天候	地域	状 況	文献
安永	1	1772	6	冷夏	関東	土用に入っても雨が多く、寒気甚だしく十月のようであった。八月に至り江戸では紅梅・梨・桜・李などの不時開花がみられた。	日下部No.3 3 7 (日本、東京)
安永	1	1772	7.21	冷夏	江戸	二十一日 昨今暴冷 人着小袖。	東京(続史愚抄)
安永	3	1775	12	酷寒	武蔵・下総・常陸	寒に入って寒気甚だしく、江戸城のお掘を初め、浅草川・利根川などごとごとく結氷し、船の通航が滞ったので、人夫をだして氷を砕かせた。利根川は銚子の河口まで結氷し、小船に乗った5名が凍死した。	日下部No.3 4 1 (日本、東京、千葉)
安永	3	1775	1~	酷寒		三年冬例より寒気強し、所々の入江の氷厚く船路絶えてけり、両国川も氷とじて往來の船も絶えしことの侍りき、駿河国は暖国にて忽て氷という物を六七十年も見し人なかりし、然るに、此冬は、御城の外堀に氷とじしと申すなり。	東京(後見草他)
安永	5	1776	8	日照り	八王子	照り過ぎ芋痛み	石川日記
安永	8	1779	4	異常低温	武蔵	江戸は一、二日は厳冬のような寒さであった。京・大阪も同様で北国辺および伊勢では雪が降った。	日下部No.3 4 4 (日本、東京)
安永	8	1779	5~6	冷夏	近畿、江戸	朔日二日京、大阪、江戸大寒なること厳冬のごとし。	東京(続日本王代一覽他)
安永	8	1779		洪水	関東・仙台	関東・仙台領洪水で江戸の諸相場が高くなる	菊池勇夫「近世の飢饉」
天明	元	1781	1.4	酷寒	武蔵	この日寒気甚だしく、河川が氷結して船の航行ができなくなったので、人夫を多数使って氷を砕かせた。陸前も殺寒。	日下部No.3 4 8 (日本)
天明	3	1783		冷夏・長雨	関東	春は寒気強く、五月になっても余寒去らず、大暑になっても綿入れを着るほどであり、夏から秋にかけても霧雨で、気温が低く、かたびらを着るひは少なかった。	日下部No.3 5 4 (日本、東京、他)
天明	3	1783	7	噴火	浅間山	四月九日(5、9)に噴火降灰し、天明大噴火の先駆となったが、一(略)一五月二十六、二十七日(6、26、27)大噴火一(略)一七月初三日(7、31)、八日(8、6)大爆発一。この大爆発は天明の気候異常をも起し、全国的な飢饉の原因となった。	日下部No.3 5 5 (千葉、群馬、他)
天明	3	1783	5~9	冷夏	関東	春寒風強く、五月まで余寒去らず、五月の入梅から八、九月まで長雨が降り、晴天は5日と続かなかった。これに六月十七日の暴風雨も加わり、関東一帯・陸奥・隠岐などは作物みのらず飢饉となり、餓死するもの26万人といわれた。	日下部No.3 5 6 (日本、栃木、他)
天明	3	1783		冷夏	近畿、江戸	三四月の頃、京都及五畿内寒冷仲冬の如し、時雨降る 晴曇不定なり。	東京(続日本王代一覽他)
天明	3	1783				七月、浅間山大噴火。弘前領の青森などで回米反村の米騒動起こる。この年冷害により東北地方を中心に昔無同様の大凶作となる。九月、仙台領で阿倍清騒動起こる。翌年にかけて東北地方で30万人以上の餓死・疫死者を出し近世最悪の飢饉となる(天明の飢饉)	菊池勇夫「近世の飢饉」
天明	4	1784				1月、幕府、米価高騰のため江戸への自由な米の持込み・販売を認める。春から夏にかけて疫病流行。五月、幕府、1733年の疫病処方箋を諸国に触れる。	菊池勇夫「近世の飢饉」
天明	5	1785	夏	干ばつ	関東	武蔵は夏から秋まで干ばつ、上総・常陸も大干ばつで禾穀がみのらなかった。近畿・九州も干ばつ。	日下部No.3 5 9 (日本、東京、他)
天明	5	1785	7~8	旱魃		夏より秋迄旱凶作。	東京(武江年表他)
天明	6	1786	5~6	冷夏	関東	四月半ばから五月にかけて長雨で気温低く、六月も寒く、土用になっても寒冷が続いた。上野ではこの間大霜害に見舞われた。	日下部No.3 6 0 (日本、東京、他)
天明	6	1786	5~7	冷夏	江戸	春も過又卯月の半此より同五月に至り、ニヶ月雨しきりに降り続き時ならぬ冷気行われ、夏の衣着る人なし。	東京(後見草他)
天明	6	1786	7.12	大雨	関東	七月、関東筋大洪水となる。4月半ば以降雨降り続き、7/12からの大雨で各所洪水。7/18「昔より聞きも及ばぬ」大水災(杉田玄白「後見草」)、利根川はじめ大小河川氾濫し家が押し流され、岡が変じて淵に、川瀬が海に。八月、西国が暴風雨に襲われ凶作となる。このため、翌年にかけて米価高騰する	菊池勇夫「近世の飢饉」
寛政	元	1789		干ばつ	下総安房武蔵	凶作となる。安房は8年干ばつが続いた。	日下部No.3 6 4 (千葉、埼玉)
天明	9	1789	7	日照り	八王子	暑さに芋痛み	石川日記
寛政	2	1790	7	日照り	八王子	井戸水切れ難儀	石川日記
寛政	3	1791		干ばつ	武蔵上野	武蔵は蕨、上野は薄根村で干ばつの記録がある。	日下部No.3 6 6 (群馬、埼玉)
寛政	3	1791	7	日照り	八王子	39日間日照り	石川日記

年号	年	西暦年	月日	天候	地域	状 況	文 献
寛政	4	1792		干ばつ	上総武蔵	上総の御宿では検分のうえ年貢米が減じられた。武蔵の蕨でも損害があった。	日下部No.370 (千葉、埼玉)
寛政	5	1793	5~9	長雨・冷夏	関東	江戸は五月下旬から九月上旬まで長雨が続き、近国も同様で荒川・渡良瀬川・那珂川などが増水・破壊した。土用というのに北風が吹き、寒冷なこと秋のようで、凶作となった。	日下部No.371 (日本、東京、他)
寛政	6	1794	5~7	干ばつ	武蔵上野	蕨では五月二十八日(6.25)に雨が降って以来、七月十二日(8.7)まで降らず、76年目の干ばつといわれた。佐渡・羽前・因幡・摂津も干ばつ。	日下部No.372 (日本、東京、他)
寛政	6	1794	6.25	旱魃		寛政九年正月武蔵国足立郡淵江領町塚村の名主(中略)六月の旱にも力を尽して(下略)	東京(続徳川実記他)
寛政	6	1794	7	日照り	八王子	38日間日照り	石川日記
寛政	11	1799	5.7	冷夏	江戸	四月三日より不時の冷氣にて、雨降り続き居候所、追々以之寒気に相成候所(下略)	東京(寛政紀聞)
寛政	11	1799		干ばつ	武蔵上野	武蔵の蕨、上野の富士見村に干ばつの記録がある。	日下部No.375 (群馬、埼玉)
享和	2	1802	6	日照り	八王子	27日間日照り	石川日記
文化	2	1805	5~7	干ばつ	武蔵下総	江戸では六、七月は雨が一滴も降らず、香取でも五月から七月まで干天が続いた。奥羽地方も干ばつ。	日下部No.378 (日本、東京、他)
文化	2	1805	5~8	旱魃	江戸	この年六七月雨一滴も降らず。	東京(続徳川実記他)
文化	2	1805	7	日照り	八王子	37日間日照り	石川日記
文化	3	1806	7	日照り	八王子		石川日記
文化	6	1809	2~3	旱魃	江戸	正月雨降らず日々烈風にして火事度々あり。	東京(武江年表他)
文化	6~7	1809~10	冬	大雪・酷寒	関東	江戸および近国では11月13日、12月13、14日、22日は大雪で、いずれも30cm以上積もり、一月に入ってもたびたび積もった。往来がとだえ、死傷者もあったが、野菜が欠乏したので、諸人は大いに困窮した。気温も低く、何十年にもない寒さが41日余も続いた。	日下部No.389 (日本、東京、埼玉)
文化	8	1811	1~2	旱魃	江戸	旧冬より雨降らず。	東京(武江年表)
文化	9	1812	6	日照り	八王子		石川日記
文化	10	1813	1.22	旱魃	江戸	十二月二日此節五十余日雨なく日々小火あり。	東京(武江年表)
文化	10	1813		干ばつ	武蔵上野	農作物は青立ちで収穫皆無の所もあり、飢饉となった。	日下部No.394 (群馬、埼玉)
文化	11	1814	4~7	干ばつ	関東	江戸および諸国は四月上旬から七月中旬まで干ばつであった。四国・山陰地方も干ばつ。	日下部No.395 (日本、東京、他)
文化	11	1814	5~9	旱魃	江戸及諸国	当四月上旬より七月中旬に至る江戸及諸国大旱魃。	東京(泰平年表他)
文化	14	1817	5~7	干ばつ	関東	五月下旬から七月上旬まで江戸および諸国は大干ばつ、讃岐も干ばつ	日下部No.400 (日本、東京、他)
文化	14	1817	6~9	旱魃		正月より七月に至り江戸及諸国大旱。	東京(武江年表他)
文化	14	1817	6~※	異常低温	関東	十二日17時ごろから十六日まで、毎日曇天で東北風が吹き、江戸および近国は仲春のような寒さであった。 (※)六月十二~十六日(1817.7.25~30)	日下部No.401 (日本、東京、他)
文化	14	1817	7.25	冷夏	江戸	寒冷。	東京(東京市史稿)
文化	14	1817	6	日照り	八王子		石川日記
文政		1818	6~※	異常低温	関東	江戸および近国は、土用の入りである十八日から二十七日まで、毎日東風が吹いて、朝夕は仲春のような寒さであった。 (※)六月十八~二十七日(1818.7.20~30)	日下部No.403 (日本、栃木、他)
文政	2	1819	2.6	旱魃	江戸	夜大雨 此後雨無し 凡四十余日旱。	東京(曲亭遺稿)
文政	2	1819		暖冬	江戸	己卯冬雪なし。	東京(曲亭遺稿)
文政	2	1819	7	日照り	八王子	晴天30日続く	石川日記
文政	4	1821	春、夏	干ばつ	関東	春から雨が稀であったが、五、六月から土用に至って干ばつとなる。江戸では正月から七月までに、雨は2.2回降っただけで、市中は日用の香水もなくなった。関東地方は干ばつのため、田畑の作物は収穫皆無で、米価は騰貴した。奥羽地方も干ばつ。	日下部No.409 (日本、東京、他)

年号	年	西暦年	月日	天候	地域	状 況	文 献
文政	4	1821	6～7			春より雨天稀にして五六月より土用に至り旱天にて奥州田植付後雨なく、別して関八州都て旱損多く、江戸大湯水にて市中用香水も無之程。	東京（三貨図彙遺考他）
文政	4	1821	6	日照り	八王子	7 1日旱雨天3日	石川日記
文政	6	1823	春、夏	干ばつ	武蔵・下野	江戸は梅雨のころは晴天続きで炎気堪えがたく、武蔵・下野各地は干ばつで田植がおくれた。	日下部No.4 1 3 （日本、群馬、他）
文政	7	1824		旱魃	江戸	春、此節雨更に降らず。	東京（武江年表他）
文政	7	1824	春、夏	干ばつ	武蔵下総	春から夏にかけて干ばつ。	日下部No.4 1 6 （日本、東京、他）
天保	5	1824				1月、江戸領で稗三合一揆起る。1～2月、秋田領で家口米仕法をめくり、北浦一揆起る。12月、秋田藩、四月以降疫病で5万2000人余死亡の旨幕府に報告する	菊池勇夫「近世の飢饉」
文政	9	1826	5～6	干ばつ	関東	関東は五、六月の梅雨期間中大干ばつで、炎暑甚だしかった。	日下部No.4 2 5 （日本、東京、他）
文政	9	1826	6～8	旱魃		東国大旱炎暑、五六月入梅中大旱。	東京（泰平年表他）
天保	7	1826		冷害	盛岡領・仙台	この年冷害により大凶作となり、盛岡領・仙台領などで翌年にかけて多く飢死する。亀岡・八戸領で盗人に臥（かます）をかぶせて川に沈める村の制裁さかんとなる。11月、幕府、弾左衛門屋敷内に介抱小屋を設ける	菊池勇夫「近世の飢饉」
文政	10	1827	4～6	冷夏	下野下総	下野では四月から気候不順となり、五、六月は曇天が続き、土用中もあわせを着た。八月になると早くも寒くなり、凶作となった。下総も3年続いて（文政十、十一年）雨多く、夏寒く、穀物は不作であった。因幡も同様な天候であった。	日下部No.4 2 7 （日本、千葉、他）
天保	4	1833	夏	冷夏	関東	下野では五月から六月、土用になってもあわせを着るほどの寒さ、上野も前年からの気候不順で未曾有の凶作、武蔵も初夏は気候不順で長雨が止まず、盛夏に入っても雨が多く寒冷で凶作となり、米価暴騰し、農民蜂起して暴動化し、翌年まで続いた。越後・佐渡・奥羽地方も冷夏。	日下部No.4 3 6 （日本、栃木、他）
天保	4	1833				この年冷害・洪水により大凶作となる。常に巳年のケカチといい、翌年にかけて、東北地方では出羽側に餓死者を多く出す。以後、天保10年にかけて凶作が続いて食料需給が不安定となり、全国的に米騒動・一揆が相次ぐ（天保の飢饉）。12月、幕府、江戸流入の飢民対策として弾左衛門園内に介抱小屋を設置。津軽地方4/26以降1ヶ月「日てり」、5/22、26雨、6/3、4大雨洪水（「永宝日記」）。秋田藩雄勝郡5月下旬「大変の陰雨」で洪水、その後も度々「冷雨洪水」、6月中旬「水霜」、仙北郡4/20～5/22まで33日間「大日早り」、5/27の降雨より「寒雨」（年吉凶帳）『中仙町郷土資料』。出羽村山地方6/25からの「大風雨」で6/26、27「前代未聞」の大洪水、最上川筋人家数百軒と田畑押し流される（「天保四突巳大飢饉記」『尾花沢代官関係資料』）7月晦日大雨、8/1最上川「大洪水」（天保年中巳荒子孫伝）	菊池勇夫「近世の飢饉」
天保	4	1833	4/26以降1ヶ月	日照り	津軽地方		菊池勇夫「近世の飢饉」
天保	4	1833	6/3、4大雨洪水	大雨洪水	津軽地方	5/22、26雨、	菊池勇夫「近世の飢饉」
天保	4	1833	5月下旬	陰雨	秋田藩雄勝郡	「大変の陰雨」で洪水、その後も度々「冷雨洪水」、6月中旬「水霜」、	菊池勇夫「近世の飢饉」
天保	4	1833	4/20～5/22	大日早り	秋田藩仙北郡	4/20～5/22まで33日間「大日早り」、5/27の降雨より「寒雨」	菊池勇夫「近世の飢饉」
天保	4	1833	6.25、26、27	大風雨	出羽村山地方	「前代未聞」の大洪水、最上川筋人家数百軒と田畑押し流される（天保年中巳荒子孫伝）。	菊池勇夫「近世の飢饉」
天保	4	1833	7.31	大雨	最上川	8/1最上川「大洪水」	菊池勇夫「近世の飢饉」
天保	5	1834	夏、秋	干ばつ	武蔵安房	江戸は夏から秋にかけて干ばつ、八月六日に大干6 1日に及んでようやく雨が降った。田畑は干損し、安房でも五穀がみのらなかった。	日下部No.4 4 0 （日本、東京、他）
天保	5	1834		旱魃	江戸	夏より秋へかけて旱。	東京（武江年表他）
天保	5	1834	12.8	旱魃	江戸	未刻俄かに大雨雷鳴、是より春二月下旬迄雨降らず百日余の大旱、江戸中所々井水枯渇す。	東京（東京市史稿他）

年号	年	西暦年	月日	天候	地域	状況	文献
天保	5	1834	7	日照り	八王子	4 7 日間日照り	石川日記
天保	6	1835	5~7	冷夏	下野上野	下野は冷氣、羽前も冷夏、上野も凶作で大飢饉となった。	日下部No.4 4 4 (栃木、群馬)
天保	7	1836	春・夏	長雨・冷夏	関東	江戸では三月十九日から雨が降りだし、二十九日までの間に晴れたのは4日だけ、四月一日から八月十五日までの間に、晴れた日は11日にならず、九月も半ばは雨天であった。気温も低く、土用中もあわせを着る有様で、九月には早くも寒気が襲来した。このため早稲はとれたが、	日下部No.4 4 7 (日本、東京、他)
天保	7	1836	7~8	冷夏	関東	丙申の五月より八月迄冷氣にて雨天多く、盛夏と雖も北風の寒きこと膚をきるがごとし、常に衣を重ねたり、年大に飢え実にて天明去年よりも甚しき所あり。関東八州、奥州、飢民夥し、下野国、宇都宮、大田原、黒羽、烏山等所至飢人道路に横はり、往來の人面を掩ふて過るに至る。	東京(常陸帯)
天保	8	1837				1月、盛岡領北上川流域の農民、他台領に逃散する。2月、大阪で大塩平八郎の乱起こる。4月、幕府、江戸四宿に御救小屋を設ける	菊池勇夫「近世の飢饉」
天保	9	1838		冷害	東北	この年冷害により大凶作となり、翌年にかけて東北北部で餓死者を多く出す。天保の飢饉を契機に東北からの松前への移住増加する	菊池勇夫「近世の飢饉」
天保	10	1839	6	日照り	八王子	4 5 日旱雨天 1 日	石川日記
天保	13	1842		旱魃	江戸	夏より秋へかけて旱天、泉水の水涸て池中の魚死したる所多し。	東京(武江年表)
弘化	2	1845	6	日照り	八王子	春より日照り	石川日記
弘化	4	1847		暖冬	江戸	七年以来雪降ること稀なり。	東京(武江年表)
嘉永	3	1850	2.18	暖冬	江戸	昨夜中より雪降り出し、十年振りに積る。	東京(武江年表)
嘉永	4	1851	12~1	旱魃	江戸	当冬更に雨なし、春へかけて度々火災あり。	東京(武江年表)
嘉永	5	1852	6	日照り	八王子	4 9 日間日照り	石川日記
嘉永	6	1853	1.9	暖冬	江戸	冬季より春へかけて暖気にして氷なし。	東京(武江年表)
嘉永	6	1853	夏	干ばつ	関東・九州・中国・四国・近畿・奥羽地方	江戸は五月二十一日から六月十一日まで、六月十三日から七月十日まで炎天続き、利根川も大減水で、用水に不足した。九州・中国・四国・近畿・奥羽地方も干ばつ。	日下部No.4 7 2 (日本、東京、他)
嘉永	6	1853		旱魃	江戸	五月下旬より七月中旬に至り炎旱、数旬を踰えたり、五月廿一日より六月十一日迄、同十三日より七月十日迄なり。	東京(武江年表他)
嘉永	6	1853	6	日照り	八王子	3 0 日間日照り	石川日記
安政	元	1854	10~12	旱魃	江戸	此冬更に雨なし。	東京(武江年表)
安政	2	1855	3~4	寒冷	江戸	二月余寒強く去年より雪更に降らず。	東京(武江年表)
安政	3	1856	6~7	冷夏	武蔵	江戸および陸奥は雨が多く、人々は綿入れを着るような寒さであった。	日下部No.4 8 0 (日本、東京)
安政	3	1856	7~8	冷夏	江戸	七月自六月江戸及陸奥多雨、人服袷衣。	東京(今日抄)
安政	5	1858		旱魃	江戸	九月十月雨少なし。	東京(武江年表)
安政	6	1859	5~6	冷夏	江戸	寒気	東京(武江年表)
万延	2	1861	6	日照り	八王子	3 5 日晴天	石川日記
文久	3	1863	2~3	暖冬	江戸	暖冬	東京(武江年表)
文久	3	1863	12.11	旱魃	江戸	本日以来更に雨降らず火災度々あり、十二月十七日たまたま雨ふる、夫より正月に至る迄雨更になし年内より梅花咲く。	東京(武江年表)
文久	3	1863	7	日照り	八王子	2 8 日晴天	石川日記
元治	元	1864		残暑	江戸	残暑	東京(武江年表)
慶応	元	1865		暖冬	江戸	暖冬	東京(武江年表)
慶応	2	1866	1~2	暖冬	江戸	冬雪更に降らず、雨少し。	東京(武江年表)

年号	年	西暦年	月日	天候	地域	状 況	文献
慶応	2	1866				この年冷害および風水害により凶作となる。10月、幕府、外国米の輸入・販売を許可する	菊池勇夫「近世の飢饉」
慶応	3	1867	6~7	干ばつ	武蔵、筑後	江戸は干天が続き井戸水が枯れた。筑後も干ばつ。	日下部No.493 (日本、東京、他)
慶応	3	1867	7~8	旱魃	江戸	六七月旱天井水涸る。	東京(武江年表他)
慶応	3	1867	7	日照り	八王子		石川日記
明治	元	1868	夏、秋	長雨・冷夏	武蔵・下総・相模	閏四月十八日(6.18)から曇雨天が続き、二十五日から雨となり、麦の取り入れができず、五月には利根川などが出水し、沿岸の田畑を浸した。五、六月は連日低温であった。七月十八日(9.5)大雨があり、七、八月は再び長雨で出水した。近畿・中部地方も長雨。	日下部No.495 (日本、東京、他)
明治	2	1869				この年凶作となり、年貢減免を求める農民一揆多発する	菊池勇夫「近世の飢饉」
明治	3	1870	2.1	旱魃	江戸	去年十一月より雨更に降らず寒気烈し。	東京(武江年表)
明治	4	1871	6	日照り	八王子		石川日記
明治	6	1873	夏	干ばつ	千葉・栃木	3月から8月まで雨少なく、干ばつとなった。福岡・佐賀・兵庫も干ばつ。	日下部No.503 (日本、千葉、他)
明治	6	1873	8	日照り	八王子	長房の井戸汲む	石川日記
明治	9	1876	8	干ばつ	関東	アジア東部一帯の大干ばつで、高崎では90°Fの暑さが31日続き、大豆・小豆・桑までが黄ばみ、岩山では大木さえ枯れるものがた。	日下部No.510 (日本、栃木、他)
明治	9	1876	8	日照り	八王子	45日間日照り	石川日記
明治	10	1877	7	干ばつ	神奈川・栃木	川崎では田畑はもちろん、井戸水までが枯れた。栃木県下では干ばつのため、農民が飢饉の災難に会った。	日下部No.511 (日本、栃木)
明治	10	1877	8	日照り	八王子	井戸水涸れる	石川日記
明治	13~14	1880~81	冬	酷寒	東京	隅田川などは結氷が4cm以上になり、氷上で子どもがたわまれるほどであった。和歌山も酷寒。	日下部No.518 (日本)
明治	19	1886	6	干ばつ	千葉群馬	千葉県下は6月から降雨なく、香取郡では地割れが2760haに及んだ。群馬県利根郡でも6~8月は干ばつで、被害面積は124haであった。	日下部No.527 (日本、千葉、他)

菊池勇夫「近世の飢饉」吉川弘文館、1997、260pp。(文末の関係年表に本文中の洪水関係記載を追加)

日下部正雄(1973) 20世紀末までの関東地方の気象災害。気象庁「研究時報」、25巻、10~12号

東京 管区気象台(1958) 東京都の気候。気象協会

中央気象台・海洋気象台(1940) 日本気象資料。原書房

「石川日記」にみる雨乞いと習俗(石川日記 13・鈴木利信)

東京( )は東京市史稿より

表6 「石川日記」旱魃記録

年号	西暦年	月日	日記天候	異常気象状況	雨乞いの場所	備考	冊
享保	5	1720	七月十七日	曇天	曇はらばら雨		改訂1
享保	5	1720	七月廿五日	曇天	是迄四十三日大ひでり		改訂1
享保	10	1725	七月四日	晴天	少し雷雨	此日より三日遊び	改訂1
享保	10	1725	七月五日	晴天	此間大ひでりにて何事もかれ果。大根も蒔不申候		改訂1
享保	10	1725	七月十五日	晴天	是迄大ひでり		改訂1
享保	10	1725	七月十七日	小雨天	是迄四十四日てり能雨ふり	此日より三日遊び 雨乞	改訂1
享保	11	1726	七月二日	薄晴天		雨乞 此日より三	改訂1
享保	11	1726	七月四日	晴天	是迄四十日てり申候		改訂1
享保	12	1727	六月廿八日	晴天	大でり又々作痛申候		改訂2
享保	12	1727	七月二日	晴天		雨乞 三日遊び初	改訂2
延享	3	1746	六月十八日	晴天	旱にて諸作いたみめいわく		4
延享	3	1746	六月廿三日	雨天		雨乞ため三日遊び	4
宝暦	2	1752	六月二日	晴天	旱にてめいわく		5
宝暦	2	1752	六月八日	晴天		雨乞 三日遊び初	5
宝暦	2	1752	六月十一日	大晴天	村中井戸不焼無水		5
宝暦	2	1752	六月十二日	大晴天	村中高尾へ雨乞ニ登ル	高尾山	5
宝暦	2	1752	六月十三日	晴天		高尾山	5
宝暦	2	1752	六月十五日	大晴天	村中井戸切		5
宝暦	8	1759	七月十九日	晴天	照り過めいわく		5
宝暦	8	1759	七月廿三日	晴天	三ヶ村相談高尾山にて雨乞謹摩	高尾山	5
宝暦	9	1759	四月十六日	晴天	照り過田仕付村難成めいわく		5
宝暦	9	1759	四月十八日	晴天	村田並長房村共ニ高尾山にて雨乞祈 謹摩有	高尾山	5
宝暦	10	1760	四月廿七日	晴天	久々照り過時物成兼めいわく		5
宝暦	10	1760	五月朔日	薄晴天	高尾山ニ雨乞として村田中謹摩有	高尾山	5
宝暦	10	1760	五月九日	晴天	此間香水切めいわく		5
宝暦	11	1761	七月十七日	晴天	村田中高尾山へ雨乞願ニ登ル	高尾山	5
宝暦	11	1761	七月廿二日	晴天	照り過めいわく		5
宝暦	11	1761	八月四日	大晴天	照り過めいわく		5
明和	2	1765	六月十六日	大晴天	照り過作いたみ 別て幸いたみ申候		5
明和	2	1765	六月十七日	薄晴天	此雨乞ニ高尾山へ惣村中謹摩有	高尾山	5
明和	7	1770	六月七日	晴天	此間五六日之内宵の間 東北の方出来星出也 旱魃の先表か		6
明和	7	1770	六月九日	晴天	照り過無水故 村田中高尾へ雨乞 両日共なり	高尾山	6
明和	7	1770	六月十二日	晴天	是夜月東方星有後ニ月ヲこえて西ニ出申候		6
明和	7	1770	六月十三日	晴天	旱にて水切村中向井戸汲申候		6
明和	7	1770	六月十五日	晴天	井戸さらひ		6
明和	7	1770	六月廿一日	晴天	村中井戸水切 長房甘里にて汲申候		6
明和	7	1770	閏六月五日	晴天	旱故井水切ニ付村中寄合井戸稻荷前へ掘ル		6
明和	7	1770	閏六月七日	晴天	又々旱にて井戸水切		6
明和	7	1770	閏六月十四日	大晴天	此日より村中にて惣左衛門屋敷へ井戸掘申候井戸夜中も掘申候		6
明和	7	1770	閏六月十九日	晴天	村田村中一同ニ高尾ニ雨乞登ル 是迄四十九日旱魃	高尾山	6
明和	7	1770	閏六月廿二日	晴天	渴水故甘里にも新井戸掘当村より汲ニ參 川原宿裏にも清水井戸汲ニ參候 扱々無終水ニめいわく		6
明和	7	1770	閏六月廿五日	晴天	新井戸さらひ		6
明和	7	1770	閏六月廿六日	大晴天	大旱魃渴水ニ付原宿ニても井戸ニツ掘出し		6
明和	7	1770	閏六月廿七日	大晴天	此日より晝夜高集寺山へ川原宿原村新地原宿 雨乞ニ出	高集寺山	6
明和	7	1770	閏六月廿八日	大晴天	是夜雨乞 初沢城山ニ登過り出 夜中皆々泊り	初沢城山	6
明和	7	1770	閏六月廿九日	大晴天	晩七時 雨乞仕廻籠帰候		6
明和	7	1770	七月朔日	晴天	晝より思立又々雨乞初沢山へ登り候所雲立雷少雨ふる	初沢山	6
明和	7	1770	七月九日	晴天	高尾山にて為雨乞七ヶ村相談にて八日市おはや殿高尾参り	高尾山	6
明和	7	1770	七月十九日	曇天	是迄七十八日旱魃 夜ニ入少小雨		6
明和	7	1770	(裏表紙)		※ 六月朔日より閏六月迄大旱魃水切作痛雨乞度々致雨乞之義六月九日村田中高尾山にて謹摩依之十一日ニ少雨ふり六月廿六日候又候雨乞原原宿新地散田催熊野森 山王十二社へ上り雨乞呼廻し向朔日閏六月朔日少雨ふり悦候所又々旱魃故同十九日ニ村田中高尾へ登謹摩候得共ふり不申候又々当村川原宿催し初沢弁天 あたご山ニ登廿七日より晝夜雨乞呼申候尤高集寺方丈も水行有廿九日迄呼候所雨ふり不申七月朔日又々呼候へ朔日之夜中雨ふり寄寸程志めり悦申候此年十月節ニ入候も竹の子生立申候田ごきニ蚊多し		
明和	8	1771	五月十二日	晴天	大照めいわく		6
明和	8	1771	五月十五日	晴天	照り過葉生兼めいわく		6
明和	8	1771	五月廿三日	大晴天	此日より三日遊 雨乞として	三日遊び	6
明和	8	1771	五月廿五日	大晴天	旱にてめいわく		6
明和	8	1771	五月廿八日	晴天	館村雨乞		6
明和	8	1771	五月廿九日	大晴天	上長房にてあしげ湖にて高尾院他御出雨乞御座候	小下沢あしげ湖	6
明和	8	1771	六月三日	薄晴天	扱々旱にて葉蒔兼植物ふ致水切しめいわく		6
明和	8	1771	六月四日	大晴天	是迄四十四日旱魃 葉生兼申候		6
明和	8	1771	六月八日	薄晴天	是迄四十七日旱魃 なり		6
安永	5	1776	七月廿三日	大晴天	照り過ぎ芋痛み		6
安永	5	1776	八月二日	薄晴天	庵雨乞念仏有	原宿の庵	6
安永	5	1776	(裏表紙)		※ 十一月より明和酉年六月迄百日之内旱魃にて水切めいわく		
天明	5	1785	(裏表紙)		※ 此年夏中大ひでりにて大豆大遭 又悪病流行致村方大難儀		
天明	9	1789	七月十日	晴天	暑シ 幸いたみ		7
天明	9	1789	七月十九日	晴天	雨乞遊也		7
天明	9	1789	七月廿日	晴天	雨乞ニ高尾山にて謹摩有リ	高尾山	7
寛政	2	1790	六月廿三日	晴天	諸作早 いたみ		7

年号	年	西暦年	月日	日記天候	異常気象状況	雨乞いの場所	備考	冊
寛政	2	1790	六月廿六日	大晴天	井水さける			7
寛政	2	1790	六月廿七日	晴天	此間大照 故作物大痛			7
寛政	2	1790	七月朔日	晴天	此日高尾山にて三郎雨乞ニ頼申候	高尾山2度	護摩 雨乞	7
寛政	2	1790	七月十二日	晴天	高尾山にて又候 雨乞はじまり			7
寛政	2	1790	七月廿日	晴天	此日ばるな山へ神水拝借ニ善助殿ト上長房下長房村館はさま一同にて		上州標名山水借り	7
寛政	2	1790	(裏表紙)		※ 此年五月より日照り六月中七月迄照り続依之高尾山にて再度雨乞夫より七月廿日ニ善助殿上長房下長房館村狭間相催上州標名山水拝借ニ為雨乞ト四人連にて参り廿六日ニ帰ル			
寛政	3	1791	七月十八日	晴天	高尾山にて護摩修行有り 三日遊 (39日間日照り)	高尾山	護摩 雨乞 遊び	7
寛政	6	1794	六月廿四日	曇天	此日迄高尾山に雨乞御祈也 (38日間日照り)	高尾山	護摩 雨乞 遊び	7
寛政	6	1794	(裏表紙)		※ 此年五月中旬より七月十二日迄雨降り不申候て粟生兼申候夏大豆其外六月小豆大違早稲大豆ハ別て違ニ御座候 諸々にて雨乞致候			
享和	2	1802	六月廿五日	曇天	高尾山雨乞有り 雨乞遊日 太々神楽有り (27日間日照り)	高尾山	太々神楽遊び	8
文化	2	1805	七月十九日	晴天	高尾山にて雨乞 遊日 (37日間日照り)	高尾山	三日遊び	8
文化	3	1806	七月二日	晴天	高尾山にて雨乞 三日遊始り	高尾山	三日遊び	8
文化	9	1812	六月廿四日	曇天	此日より雨乞 三日遊始り		雨乞三日遊び	9
文化	14	1817	六月廿一日	晴天	庵主頼 雨乞 雨乞遊日也	村の庵雨乞		9
			六月廿五日	晴天	雨乞ニ標名山江 清次郎殿立		上州標名山水借り	9
文化	14	1817	(裏表紙)		※ 此年五月中旬より六月中雨不降雨乞標名山江江代参六月廿五日立歸日帰リ			
文政	2	1819	七月五日	晴天	此日大久野へ雨乞ニ付 白岩へ水貰ニ参ル (晴天30日続く)		大久野白岩権現	9
文政	4	1821	六月十二日	晴天	雨乞 遊日			9
			六月廿九日	晴天	此日迄十二所ニ雨乞念仏有り (71日旱雨天3日)	散田十二社	雨乞念仏	9
文政	4	1821	(裏表紙)		※ 此年五月時分より段々旱魃ニ而六月七月暑り七月七日雨ふり、夫より同十九日廿日大雨水出ル			
文政	10	1827	(裏表紙)		※ 此年閏六月四日より天気相続晴諸作相痛候ニ付原宿分三組 寄合仕標名山江水借ニ代参相立候 原宿清次郎殿原之吉右衛門 衛門殿同廿九日出立いたし申候			
天保	5	1834	七月廿二日	晴天	龍山少林寺様雨乞御祈禱 此日成就皆万ごりを取申候 (47日間日照り)	龍山少林寺	祈禱 万ごり	10
天保	10	1839	六月十三日	晴天	標名山江立 向人 川原宿音次郎・原宿大次郎		上州標名山水借り	
天保	10	1839	六月廿一日	晴天	十二社宮ニ而雨乞三日三夜		3日3夜念仏	
天保	10	1839	七月三日	晴天	村中今龍山 雨乞ニ行	今龍山雨乞		10
天保	10	1839	七月四日	晴天	中郷村宝蔵寺ニ而雨乞念仏始り (45日早雨天1日)			10
弘化	2	1845	六月十六日	晴天	雨乞にて休 (暮より日照り)		雨乞にて休み	11
弘化	2	1845	(裏表紙)		※ 此年春中より濕無之摘田任付時水無之場所より不仕付			11
嘉永	5	1852	六月十六日	晴天	雨乞いに休 日			11
			六月廿三日	晴天	雨乞ニ付朝より念仏 淵上江迄参り候 (49日間日照り)	あしげ淵 村にて	祈禱 念仏	11
嘉永	6	1853	六月十日	晴天	井ざらい 雨乞ニ日待有		日待ち	11
嘉永	6	1853	六月十二日	晴天	名栗江行		名栗村亀泉寺	
嘉永	6	1853	六月廿一日	晴天	此日一之沢江雨乞ニ罷出候 南弁之助代参廿二日帰り申候 三日三夜念仏 (30日間日照り)		相州八幡山一の沢	11
万延	2	1861	六月廿三日	晴天	雨乞い初メ 三日三夜念仏			12
万延	2	1861	六月廿三日	晴天	念仏仕舞			12
万延	2	1861	七月朔日	晴天	大久野標久保江白岩権現御水かり江参り候		大久野白岩権現	12
万延	2	1861	七月二日	晴天	村中一同にて高尾山護摩たき江参り (35日晴天)	村にて、高尾山	祈禱 念仏	12
文久	3	1863	七月朔日	晴天	休日 雨乞いいたし			12
文久	3	1863	七月二日	晴天	雨乞 (28日晴天)		雨乞	12
慶応	3	1867	七月廿日	天気	観音様跡勘定致其上若衆中ニ而雨乞ニ標ニ而おとりをおどる	村にて	若者連標踊り	12
慶応	3	1867	七月廿三日	大晴天	原村中庵ニ而 一同相談致其雨乞ニ熊野社ニ而大念仏三日三			12
慶応	3	1867	七月廿六日	大晴天	此日夕方三日三夜念仏仕舞ニ成	熊野神社	三日三夜念仏	12
明治	4	1871	六月廿四日	大晴天	相州一ノ沢御水借ニ行代参原宿五か村相頼帰る迄の内森にて念仏申候		相州一ノ沢	13
明治	4	1871	六月廿五日	大晴天	参代之者帰る 念仏仕舞			13
明治	6	1873	八月五日	大晴天	雨乞ニ付向井戸浅い 長房井戸汲		雨乞	13
明治	9	1876	八月九日	大晴天	此日雨乞向井戸さらい夕方曇り渡り今降ばかりニ成てふふり不申當もなり申候			13
明治	9	1876	八月十二日	大晴天	此日雨乞高尾山へ護摩焚ニ行村一同にて			13
明治	9	1876	八月十七日	大晴天	此日村一同熊野森にて相談ノ上雨乞相催候処武州名栗と申処へ御水借ニ代参五人参り高橋栄蔵大貫五郎小倉得次郎内の奥五郎伴右之者十七日立立にて出立致候	熊野神社	名栗村亀泉寺	13



年号	年	西暦年	月日	日記天候	異常気象状況	雨乞いの場所	備考	冊
明治	9	1876	八月十八日	大晴天	雨乞ニ付御水借之者村一向ニテ淵上迄向ヒニ出ル候之上森ニテ御神酒有之候但此夜若者集リ候テ夕立之真似致候村中軒別ニ歩行致シ雨の降如クニ竜水ニテ水をつぎ見物之者も漏れ申候		夕立のまね	13
明治	9	1876	八月十九日	晴天	此夜ハ觀せ音祭り並ニ雨乞入費勘定致候 (45日間日照り)			13
明治	10	1877	七月十七日	大晴天	此日井戸水汲メなくなり下隣の井水異			13
明治	10	1877	七月十九日	大晴天	此日熊野森ニテ相談之上雨乞いたし大賣源之助殿深沢岡太郎殿福田彦次郎殿三人總代ニテ相州一之沢江御水借ニ參ル候之者ニテ長房之向井戸さらいたす	熊野神社		13
明治	10	1877	七月廿日	大晴天	此日雨乞代參向ヒニ村一同相州久保沢原宿迄行 此夜夕飯上リニ			13
明治	10	1877			掃村ニ相成大念仏ニテ熊野森まで行直夫より鐘太鼓ニテ大念仏		念仏 鐘太鼓	13
明治	10	1877			相初り翌日昼頃までニ念仏終リニ相成其上諸勘定いたし申候			13
明治	10	1877	七月廿二日	大晴天	下隣井戸さらひ江手伝			13
明治	10	1877	七月廿三日	大晴天	夕方向井戸坂ノ井戸 水八分目位ニ成			13
明治	10	1877	七月廿五日	薄晴天	初沢高乗寺に雨乞大般若有之候			13
明治	10	1877	七月廿六日	曇後雨天	此晝十二時頃より大雨降立 夜ニ入テ大風吹			13
明治	10	1877	七月廿七日	曇天	おしめり祝い申して休日 御日待有之候			13

表7 小氷期気候と多摩川洪水

西暦	夏(括弧は江戸)	冬(括弧は江戸)	備考1	備考2	気候型	降水量偏差(江戸)	多摩川被害洪水発生	平均発生件数との偏差
1550年代								1-
1560年代								0
1570年代								0
1580年代								1-
1590年代								2-
1600年代								1-
1610年代								1-
1620年代								2-
1630年代								0
1640年代								2-
1650年代								3-
1660年代	cold							3-
1670年代	cold	mild			冷夏・暖冬			4-
1680年代	(hot)	cold			(酷暑・寒冬)			4-
1690年代	hot	cold			酷暑・寒冬	-		1-
1700年代	hot	mild			酷暑・暖冬	-(前半)		6-
		(前半 mild、後半 cold)				+(前半)		
1710年代	hot							5-
1720年代	hot	mild			酷暑・暖冬	-		15+
1730年代	cold	cold	南日本、多雨		冷夏・寒冬	+		11+
1740年代	cold	mild			冷夏・暖冬	+		8+
1750年代	cold	cold			冷夏・寒冬			9+
1760年代	hot	(mild)	一時的寒冬、			-		1-
		(後半 cold)	1773年隅田川、両国川結氷など。南日本は酷暑			-(終わりから+へ)		9+
1770年代	hot	mild		急速な気候変化、異常冷夏・暖冬、天明の飢饉(1783年)	冷夏・暖冬	+		
	cold							
1780年代								9+
1790年代	hot	mild			酷暑・暖冬	+(前半)		7+
	hot	mild			酷暑・暖冬	-		
1800年代					1800年代終わりから1820年代、酷暑・寒冬。1808.9年江戸積			9+
		cold			1811年江戸積雪60cm、1812年両国川結氷	酷暑・寒冬	+(前半)	
1810年代	hot							4-
1820年代	hot							18+
			冷夏・寒冬しばしば。1833,36			+(後半)		
1830年代	cold		天保の飢饉			+(前半)、		14+
1840年代	cold	cold				-(後半)		14+
					1850年代終わりから酷暑・暖冬	-		
1850年代	hot							13+
1860年代	cold	mild			冷夏・暖冬	-		15+
1870年代		cold			冷夏・寒冬へ			10+
1880年代		cold						4-
1890年代								10+
1900年代	cold	mild			冷夏・暖冬			10+
1910年代		mild						7+
1920年代	hot	cold			酷暑・寒冬			1-
1930年代	hot	cold			酷暑・寒冬			
1940年代	hot							
1950年代	hot	mild			酷暑・暖冬			
1960年代	hot	mild			酷暑・暖冬			
1970年代	hot	mild			酷暑・暖冬			
1980年代	hot	mild			酷暑・暖冬			

(TAGAMI Yoshio, Kazuo Fukaishi(1992)を、整理し表にまとめた)

I期；1720年代が酷暑・暖冬、1730年代と1750年代が冷夏・寒冬、1740年代が冷夏・暖冬である（TAGAMI et al., 1992）。TAGAMI et al. (1992) の夏の寒暖は、日記に記された降雨記録を元としているので、多雨が冷夏、寡雨が酷暑となる。1730年代から1750年代は多雨が「被害洪水」多発に影響したと推定される。1750年代は6～7月の洪水発生が最も多く、梅雨前線の活動が活発であったと推定される。

1720年代はI期において発生件数は極大を示している。表5、6に近世の気象災害と、「石川日記」による旱魃記録を示す。1720年には八王子は8/28まで45日間の日照りであり、「被害洪水」記録はない。1725年は8/24まで44日間、1726年は8/1まで40日間日照り、1727年は8/18日に雨乞いが行われている。その他の1721～24、1728、29年については顕著な酷暑は記録されていない。これらの年には洪水の発生が記録され、1729年を除けば2～3件以上発生し、1728年は6件と多く「享保中最大の洪水」（東京市史稿変災編2）も10月4日に発生している。これらから、1720年代全体を通じて、酷暑・寡雨ではなかったと思われる。FUKAISHI et al. (1992) によれば、諏訪湖の御神渡記録から、1722～1725年は暖冬、後半の1726年からは1737年まで寒冬と推定し、1720年代前半と後半では冬の気温が大きく変化したと思われる。夏については、不明であるが、1725、26、27年は日照り終了後の8月中旬以降に洪水が発生している。このことは、酷暑の年も秋口以降は通常並みの降雨があったことを示唆する。

II期；1770年代が酷暑で後半が寒冬、1780年代が冷夏・寒冬である（TAGAMI et al., 1992）。1780年代は天明の飢饉（1783年）に代表されるように、特に東北日本を中心に厳しい飢饉の時代であり、1783年の気温は低かったと見積もられている（Mikami, 1992）。即ち、1780年代に急速な気候変化が現れ、夏は極端に涼しく、冬は暖冬となり、南日本では湿潤で寒冷的な気候が優勢となった（Mikami, 1992）。I期、III、IV期に比べると総じて発生件数は少なく、冷夏・多雨の1780年代も他の年代に比べ、発生件数は多くはない。

1770年代は、1770年、1771年、1776年、1777年が日照り、干ばつでこのうち「被害洪水」記録は1771年7月の1件のみである。1771年から1772年にかけての冬は暖冬で、1772年は関東が冷夏であったというが、1772年に1770年代中では最も多く3件の「被害洪水」発生がみられる。1773年には隅田川、両国川が結氷しており、1760年代から1800年代は総じて暖冬でありながら、一時的な厳冬記録がみられる（TAGAMI et al., 1992）。1770年代後半から、降水量は増大するが（TAGAMI et al., 1992）、その影響は洪水からは読みとれず、1776年以降は発生記録がない。

1780年代は、I期の1750年代と同様に6~7月の降雨、即ち梅雨を水害原因とする割合が高い。村田ほか(1988)は、歴史時代の梅雨の降水量変動を復元し、19世紀以前は以降に比べ梅雨の降水量が多く、1740年から1760年と1780年から1790年にかけて特に降水量が多かったとしているが、1750年代、1780年代は水害原因からも梅雨前線の活動が活発であったことが推定される。

Ⅲ期；発生件数が、全期間で最大を示す1820年代が酷暑、1830年代が冷夏、1840年代が冷夏・寒冬、1850年代が酷暑、1870年代が寒冬である(TAGAMI et al., 1992)。Mikami(1992)では中央日本の1820年代後半はやや冷夏である。1830年代から1850年代にかけて寒冬・冷夏がしばしば現れ、その代表例が天保の飢饉である(TAGAMI et al., 1992)。1850年代の終わりから、再び酷暑・暖冬傾向となり、北日本は湿潤、引き続いて1870年代から寒冬・冷夏である(TAGAMI et al., 1992)。

1820年代は八王子で日照りなどが記録された1821年と、1826年は、関東で梅雨期間が大干ばつであった。1826年には発生記録がない。「被害洪水」は前半の1822、23、24年に集中して発生している。1822年は日照りなど記録なく、7月15日から10月5日まで5件発生している。1823年は江戸で梅雨の頃晴天が多かったが、6月20日から9月23日まで3件、1824年は江戸春干ばつであるが、5月から10月まで6件発生している。従って、これらの年は春から初夏までは降雨少なかったが、その後は降雨が回復したものと思われる。東村(1990)によれば、1824年と1828年は台風期の暴風雨が高頻度であるというが、1824年は台風によるもの1件、9月の暴風雨によるもの1件である。1828年は8月の暴風による洪水が1件記録されている。

1850年代は、春から秋にかけて干ばつ、日照りの記録された年は1852、1853、1858年であるが、一方、春が寒冷であったのが1855年、冷夏が1856年と1859年とある。不安定な気候であったと思われる。1852年は八王子で8月4日まで49日間日照りで、8月15日から計3件の発生、1853年は7月26日まで30日間の日照りで、8月16日に1件の「被害洪水」が発生している。1856年は江戸で7月初旬から9月下旬まで多雨・冷夏であるが、発生は8月1日の大雨と9月23日の台風による発生の2件である。1858年は江戸では10月、11月降雨少なかったが、発生はその前の8月下旬である。1859年は江戸で6月から7月まで冷夏とあり、6月下旬以降9月上旬までに4件発生し、多雨であったと思われる。

1870年代は、1871、1873、1876、1877年に八王子で日照りの記録があり、その全ての年で洪水発生が記録されている。1871年は八王子で7月中旬から8月中旬にかけて日照りで、8月下旬と9月中旬に洪水があり、1873年は八王子で8月5日雨乞いの記録があり、

9月下旬に暴風雨で洪水、1876年は8月19日まで45日間の日照り、関東8月干ばつで、9月17日台風で洪水、1877年は7月19日～25日雨乞いとあり、7月26日降雨、神奈川7月干ばつで川崎「井戸まで枯れる」、7月26日降雨は大雨で洪水となっている。いずれも日照り、干ばつ後に件数は少ないが洪水となっている。

IV期；1900年代が冷夏・暖冬であるが、時に厳しい寒冬が挟まる（TAGAMI et al., 1992）。年ごとでは突出して「被害洪水」の発生件数の多い年はないが、1903, 1905年を除き、ほぼ毎年発生している。「出水ほか」を加えれば、1903年を除き毎年の発生し、出水は1906, 1907年が突出して発生している。TAGAMI et al. (1992) は南日本はポーラフロントが不活発で多雨であったとしている。

### (3) 貧発期の気候

多摩川「被害洪水」多発期に挟まれて1760年代、1790年代～1810年代、1880年代は貧発期である。特に、1760年代は発生件数が1764年の1件と極めて少なく、極小期となっている。1760年代、1810年代は大井川、富士川も貧発期、1880年代は大井川も貧発期であるが、多発期のように3河川ないしは4河川が同調して貧発することはない。

1760年代は酷暑、1790年代、1800年代が酷暑・暖冬、1810年代は酷暑、寒冬、1880年代は寒冬である（TAGAMI et al., 1992）。

1760年代は、1760年が5月中旬から9月上旬まで江戸は干天、1761年は8月八王子日照り、1762年は6月下旬から9月中旬まで干ばつ、1765年は7月八王子日照りとあるが、多発期に比較して日照りの年が特に多いわけではなく、飢饉などの発生もない。

1790年代は、1791年を除くと「被害洪水」の発生が多くはなく、記録のない年も半数を占める。1790、1791、1794年に八王子で日照りとなっている。このうち、1794年は洪水発生記録がない。1790年は6月中旬から9月初旬まで八王子で日照り、9月16日に1件、1791年は8月18日まで39日間日照りで、9月3日の台風による洪水以降計3件の発生記録がある。1793年は関東、長雨・冷夏で荒川などでは増水、破堤とあるが、多摩川は「被害洪水」記録がなく、浅川の出水があるだけで、その発生日も4月4日である。同様に1799年は江戸で長雨・冷夏とあるが、発生1件で洪水からはその影響が読みとれない。富永ほか（1992）は「江戸傍近図」注記を引いて、寛政年中（1789－1801年）に多摩川の水量が少なく、渡しは常時板橋であったとしているが、このことは当時、降水量が少なかったことの反映と思われる。1791年に示されるように、多摩川の洪水発生を支配するのは8～10月の特に秋の降雨と思われる。

1800年代は1802、1805、1806年に八王子で日照りとなっている。このうち、江戸でも6月下旬から7月下旬降雨なしという1805年は、発生記録がない。1802年は7月24日まで27日間日照りで、7月30日に台風で「被害洪水」発生が1件、1806年は8月15日雨乞いがあり、発生月日不明で1件である。日照りの記録されていない年に、1~2件と全体に多くはないが、「被害洪水」の発生がみられる。大田区史護国寺・薬王寺文書によれば、1808年は9月上旬から霖雨とあり、「被害洪水」は7、9月に発生している。1800年代の終わりから1820年代にかけて、寒冬・酷暑傾向が特に南日本で強くなる。1808年、1809年、1811年は江戸で積雪量60cmの大雪、1812年両国川結水となった (TAGAMI et al., 1992)。

1810年代は、1812年が八王子8月1日より雨乞い、1813年の4~7月、1814年の5~9月、1817年の5~7月は江戸や関東干ばつ、1819年は八王子8月25日まで30日間晴天とある。1813年は武蔵上野飢饉発生とある。1818年は7月下旬に異常低温が記録されている。「被害洪水」発生は1811年1件、1816年2件、1819年1件で、1810年代前半は中央日本やや冷夏 (TAGAMI et al., 1992) とは相関しないが、洪水発生年には1819年の八王子晴天30日間を除いて干ばつ記録はない。

1880年代の「被害洪水」発生件数は、1810年代と同じ4件である。群馬県利根郡は6~8月干ばつとあるが、多摩川流域には記録がない。

#### (4) 4河川「被害洪水」多発期の気候

多摩川、荒川、大井川、富士川の4河川が同調した多発期は、1720年代~1730年代、1780年代、1820年代、1860年代であり、1730年代、1780年代、1860年代が冷夏、1720年代、1820年代が酷暑である。

#### (5) 水害原因からみた多発期の気候

図19に示すように、多発期のⅠ期では、1750年代を除き、いずれの年代も8~10月の台風や暴風雨などが水害原因として突出して優占する。Ⅱ期は1780年代から1800年代が月不明の全体に占める割合が多く、細かな議論はできないが、1770年代で、4~5月が2件、1780年代で6~7月4件などあり、8~10月の台風や暴風雨が水害原因として突出はしていない。Ⅲ期は、極大期の1820年代や1850年代、1870年代に、8~10月の台風や暴風雨などが水害原因として突出して優占、その他の年代でも8~10月の台風や暴風雨などが優占する。Ⅰ期と同様、8~10月の台風や暴風雨が高頻度で発生したと推定される。Ⅳ期もⅠ期、Ⅲ期と同様の傾向である。

山川（1992）は前島ほか（1990）をもとに、日本の災害の地域性と成因依存性を概観し、小氷期には台風災害が頻発し、特に18～19世紀の関東および中国・四国・近畿地方では、総被害発生件数の過半数を占め、その被災地は16世紀までの東日本中心に対し、17世紀以降は関東以西全般に広域化したこと、これは台風の発生位置と北太平洋高気圧・大陸高気圧の張り出し具合が影響し、東村（1992）でも1830年代後半、1824年、1828年などは確かに高頻度であることが確かめられるとしている。一方、大雨および台風期以外の暴風雨は、中部地方を中心に卓越し、北日本と西日本では小氷期直前の数百年間に比べ減少傾向にあり、オホーツク海高気圧の縁辺部にあたる中部地方で大雨降水確立が高まるとしている（山川, 1992）。山川（1992）の指摘どおり、多摩川でもⅠ期、Ⅲ期、Ⅳ期の多発期は台風ほか8～10月の暴風雨などが水害原因として優占するが、Ⅱ期は8～10月以外の降雨も大きな割合を占めている。

夏の暑さ、涼しさ＝酷暑・冷夏に関わらず、Ⅰ期、Ⅲ期、Ⅳ期では台風ほか8～10月の暴風雨などが水害原因として優占している。このことは、酷暑の年代は、8月までの日照り、早魃が主であり、その後8～10月にかけては、平均年代以上に台風、暴風雨の活動が活発であった事を示唆する。

## （6）小氷期と洪水多発

以上から、「被害洪水」多発期における気候的特性が明らかとなった。

- 1) 多発期の冷夏は、暖冬を伴う場合もあるが、むしろ寒冬を伴う場合の方が多い。
- 2) 冷夏に多発期となる場合は、8つの年代でみられ、酷暑に多発期となる場合は6つの年代でみられた。
- 3) 多発期の水害原因は、1770年代から1800年代を除けば8～10月の台風、暴風雨などによる場合が突出している。
- 4) 山本（1976）など一般に、小氷期中の冷夏は長雨を伴うといわれるが、「被害洪水」水害原因では、多発期に代表されるように、長雨は主な原因ではない。山川（1992）は、冷夏・長雨の出現頻度は、16世紀には極小を示し、17～18世紀には北日本を中心に増大しているが、全国規模では冷夏・長雨は卓越していないとしているが、水害原因にみられる上記の傾向はこれに調和的である。
- 5) 酷暑の日照り、干ばつなどは初夏から夏までが多い。8月以降に台風、暴風雨などが発生すれば、洪水も発生する。これは、多摩川の「被害洪水」が全体に8月から10月の台風等の降雨に支配されていることをあらためて示すものである。

- 6) 小氷期中の酷暑とされた年代には、8月から10月の台風等が「被害洪水」多発にみられるように、平均以上に発生したと推定される場合と、1760年代の「被害洪水」極小期のように発生しなかった場合があると推定される。
- 7) TAGAMI et al. (1992) に示される降雨量変動と、「被害洪水」発生件数の増減は必ずしも相関しない。これは、人為干渉も十分考慮されねばならないが、降雨量変動に直接現れない8月から10月の台風、暴風雨などの発生有無に関係していると推定される。
- 8) 日本の河川はその規模が小さいために、洪水規模は短時間の豪雨によって支配的な影響を受けるという特徴（高橋ほか, 1980）が、小氷期中の多発期にも端的に現れているといえる。

## 19. まとめ

1550年から1925年までの多摩川における洪水氾濫の資料を整理し、その特性と気候との関係を考察した。

- (1) 多摩川の洪水氾濫は、地形単位、微地形、河床勾配などの地形的構造や自然条件に対応して発生していると推定される。
- (2) 1550年代から1920年代までの1年あたり洪水氾濫数＝洪水氾濫頻度は、多摩川本流が1.09、支流の浅川が0.83である。「被害洪水」頻度は多摩川本流が0.62、浅川が0.18である。
- (3) 1720年代～1750年代、1770年代～1800年代、1820年代～1870年代、1890年代～1910年代の4つの「被害洪水」多発期が存在する。17世紀までは発生件数は増減を2度繰り返しつつ少なく、18世紀からは大きな振幅で増減を繰り返しつつ増加し、19世紀後半から減少傾向になる。
- (4) 水害原因は台風と8～10月の台風、暴風雨などが優占する。
- (5) 多摩川、荒川、大井川、富士川の4河川は、1720年代～1730年代、1780年代、1820年代、1860年代に同調して多発期を迎える。1730年代、1780年代、1860年代が冷夏、1720年代、1820年代が酷暑である。
- (6) 多発期の冷夏は、暖冬を伴う場合もあるが、むしろ寒冬を伴う場合の方が多い。
- (7) 多発期の水害原因は、1770年代から1800年代を除けば台風や8～10月の暴風雨等による場合が突出している。
- (8) 山本（1976）など一般に、小氷期中の冷夏は長雨を伴うといわれるが、「被害洪水」水害原因では、多発期に代表されるように、長雨は主な原因ではない。



- (9) 酷暑の日照り、干ばつなどは初夏から夏までが多い。8月以降に台風、暴風雨などが発生すれば、洪水も発生する。これは、多摩川の「被害洪水」が全体に台風や8月から10月の暴風雨等に支配されていることをあらためて示すものである。
- (10) 小氷期中の酷暑とされた年代には、8月から10月の暴風雨等が「被害洪水」多発にみられるように、平均年以上に発生したと推定される場合と、1760年代の「被害洪水」極小期のように発生しなかった場合があると推定される。
- (11) TAGAMI et al. (1992) に示される降雨量変動と、「被害洪水」発生件数の増減は必ずしも相関しない。これは、人為干渉も十分考慮されねばならないが、降雨量変動に直接現れない8月から10月の台風、暴風雨などの発生有無に関係していると推定される。
- (12) 近世以降の洪水氾濫の経年変化は、台風や8月から10月の暴風雨等の経年変化を反映していると推定されるが、1750年代、1780年代は梅雨季の降水量が多かったと推定される。
- (13) 多発期には、1750年代、1780年代を除いて、台風や8月から10月の暴風雨等の活動が活発であったと示唆される。
- (14) 日本の河川はその規模が小さいために、洪水規模は短時間の豪雨によって支配的な影響を受けるという特徴（高橋ほか, 1980）が、小氷期中の多発期にも端的に現れているといえる。

## 謝 辞

本報告をまとめるにあたっては多くの方々のお世話になったが、中でも川崎市市民ミュージアム学芸員望月一樹氏、川崎市日本民家園の三輪修三氏には不慣れな歴史記録について、ご教示頂いた。東京都教育庁生涯学習部文化課学芸員芹澤廣衛氏、落川・一の宮遺跡調査会園村維敏氏には、文献収集でお世話になった。早稲田大学助教授久保純子氏には荒川、利根川などの東京湾低地における洪水についてご教示頂いた。東京大学大学院博士課程のマイケル・グロスマン氏には荒川の洪水について貴重な情報を提供していただいた。自然史研究会の上西登志子氏からは、研究を進める上で常に適切なお助言を頂いた。日野市在住の郷土史研究家谷 春雄氏には、適切なお助言を頂いた。以上の方々に厚く感謝する。

## 引用文献

- 昭島市教育委員会社会教育部社会教育課（1984）昭島市古文書調査報告書2築地村・並木家所蔵史料集. 昭島市教育委員会, 122pp.
- 青梅市史編さん委員会（1995）青梅市史 上巻. 東京都青梅市.
- 岩屋 隆夫（1986）第2章多摩川治水の前史・第3章多摩川低地の開発と水防の成立. 多摩川誌, 財団法人河川環境管理財団, 21-240, 241-283
- 籠瀬 良明（1981）谷地田・台端・自然堤防. URBAN KUBOTA, 19, 10-17
- 神立 孝一（1988）拝島領の年貢高について. 新立川市史研究第四集, 立川市教育委員会, 14-128
- 菊池 勇夫（1997）近世の飢饉. 吉川弘文館, 260pp.
- 菊地 山哉（1964）多摩川の洪水史. 水利科学, 39, 水利科学研究所.
- 菊地 隆男（1981）先史時代の利根川水系とその変遷. URBAN KUBOTA, 19, 2-5
- 木村東一郎（1981）Ⅶ 青梅の自然災害. 青梅の自然 I, 青梅市郷土博物館編, 323-346
- 建設省国土地理院（1963）水害予防対策土地条件調査報告書. 109pp.
- 小塚 光治（1962）川崎史話 上巻. 多摩史談会.
- 小塚 光治（1965）川崎史話 中巻. 多摩史談会.
- 小塚 光治（1966）川崎史話 下巻. 多摩史談会.
- 栗林 沢一（1960）狩野川流域における集落の立地と災害の形態. 地理学評論, 33, (3), 166-173
- 日下部正雄（1959）日本災異誌. 研究時報11, 425-465
- 日下部正雄（1962）北海道災異誌. 研究時報14, 307-336
- 日下部正雄（1968）19世紀末までの四国の気象災害. 研究時報20, 502-526
- 日下部正雄（1973）19世紀末までの関東地方の気象災害（その1）,（その2）. 気象庁研究時報, 25, (10), 385-403, 429-447,
- 日下部正雄（1975）19世紀末までの中部地方および三重県の気象災害. 研究時報27, 81-96, 119-135
- 日下部正雄（1978）19世紀末までの中国地方の気象災害. 研究時報30, 23-56
- 日下部正雄（1975）19世紀末までの奥羽地方の気象災害. 研究時報33, 89-133
- 前島郁雄・田上義夫（1982）中世・近世における気候変動と災害. 地理, 27, 33-43
- 前島郁雄・田上義夫（1990）19世紀初頭の日本の気候－1816年を中心に. 科研費研究精化報告書「江戸時代の日記の天気記録による気圧配置型の復元」, 82-96

- 松田 馨余 (1973) 多摩川低地の沖積層と埋没地形. 地理学評論, 46-5, 339-356
- 松本 繁樹 (2000) 第Ⅱ編東海型河川の洪水とその特徴. 山地・河川の自然と文化－赤石  
山地の焼畑文化と東海型河川の洪水, 大明堂, 81-143
- 水山 高久 (1998) 水源から河口に至る河川土砂収支の実体把握調査と土砂制御のあり方.  
地球環境学 水循環と流域環境, 111-128
- 村田昌彦・吉野正敏 (1988) 日本における梅雨季の降水量変動の復元. 地理学評論, 61-8,  
643-656
- 大矢 雅彦 (1960) 狩野川中・下流域水害地形分類図. 地理学評論, 33, (3), 156-162
- 埼玉県 (1986) 「新編埼玉県史 別編3 自然」, 埼玉県, 560pp
- 埼玉県 (1988) 「荒川 人文Ⅱ－荒川総合調査報告書3－」, 埼玉県, 766pp
- 佐々 悦久 (1992) 第四章 治水と水利・水運 第一節 玉川と治水. 大田区史 中巻, 東  
京都大田区, 523-571
- 世田谷区 (1962) 新修 世田谷区史 上巻. 1438pp.
- 島津 弘・須貝俊彦・久保純子・岩船昌起・春山成子 (1990) 南広町遺跡および周辺の自  
然環境. 日野市埋蔵文化財発掘調査報告11, 南広町遺跡3, 214-228
- 島津 弘・久保純子・堀 琢磨 (1994) 南広町遺跡を中心とした多摩川浅川合流低地の形  
成過程. 日野市埋蔵文化財発掘調査報告19, 南広町遺跡4212-221
- 高橋裕 (1983) 利根川物語, 筑摩書房, 238pp
- 高橋裕 (1999) 河川工学. 東京大学出版会, 311pp.
- 高橋裕・阪口豊 (1980) 日本の川. 日本の自然, 岩波書店, 219-230
- 多摩川誌編集委員会 (1986) 多摩川誌. 財団法人河川環境管理財団
- 多摩川誌編集委員会 (1986) 多摩川誌/別巻 統計・資料. 財団法人河川環境管理財団,  
2199pp.
- 多摩川流域史研究会 (1989) 森田家文書No. 3843. 「多摩川秋川合流地域の歴史的研究」,  
財団法人とうきゅう環境浄化財団.
- 高野繁昭・増渕和夫 (1999) 遺跡の立地. 落川・一の宮遺跡Ⅳ－自然科学－, 落川・一  
の宮遺跡 (日野3・2・7号線調査会, 5-53
- 富永春芳・清長長明 (1992) 狛江市文化財調査報告書第1集, 狛江の古い道, 狛江市教育  
委員会, 62pp.
- 利根川研究会編 (1995) 利根川の洪水 語り継ぐ流域の歴史. 山海堂, 217pp.
- とうきゅう環境浄化財団 (1977) 「多摩川'77」資料編. とうきゅう環境浄化財団

束村 康文 (1990) 19世紀前半にみられた東アジアにおける夏季の寒帯前線帯の南偏. 地理評, 63, 577-592

調布市 (1992) 調布市史 中巻

山川 修治 (1992) 小氷期の自然災害. 地理、vol. 37, 2, 37-48

山本 武夫 (1974) 日本の気候変動と沖積世の寒冷気候. 第四紀研究, 12, , 4, 145-159

山本 武夫 (1976) 気候の語る日本の歴史. そしえて, 241pp.

表1 多摩川洪水氾濫年表

No	天候	水害原因	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(関東)	他の発生水体(東北)	水系	直接原因	洪水型	発生地	現行政区	左岸/右岸	破壊・浸透・崖崩	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
1			1550	天文19				多摩川			多摩川		河川洪水	上	狛江市	L		和泉村	鎌守六明神流失		狛江市史	
1			1550	天文19				多摩川			多摩川		河川洪水	上	狛江市	L		北谷村大塚山	伊豆美神社由緒	伊豆美神社名鑑(下)p.433		
2			1573~92	天正初め				小仏川・栢田川			浅川	出水	河川洪水		八王子市				散田新地川瀬、千手城跡を経て、城下町の住民八王子町へ移住させ後、洪水島への氾濫より市中へ落下、町囲いの長堤築堤	武蔵名勝図会p282多摩郡之部巻七由井鎮栢山庄之上、石見堤		
3			1589	天正17	9	10,10~11,7		多摩川			多摩川	流路移動	河川洪水	中	大田、川崎	L/R		上丸子、沼部	境界争い、大洪水?	流路移動	羽田(多摩川)	
4	大雨		1590	天正18				多摩川			多摩川	溢水	河川洪水				江戸	千栗池湧溢多少の損害		東京市史稿要 災編、p25		
4	連日の大雨		1590	天正18	8,4	9	3	陣田川			荒川	出水	出水ほか						出水		東京市史稿要 災編、p26	
5			1596	文禄				多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上	八王子	R	作目村		多摩川石巻、平村西崎き崎村、水勢の方面へ押し寄せ、民衆田畑流れて、前年の山崩れで河原、平洲砂場となる	武蔵名勝図会、巻5、立川郷津島嶺日野領P186		
6			1596	慶長元年				多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上	府中	L			四ツ谷村流失移転		林(1977)	
6			1596	慶長元年				多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上	府中	L	押立村	大洪水?	押立村被災される	府中市史上 p54		
6	連日の降雨	台風	1596	慶長元年	6,19,2,7	14,18		荒川、入間川、石巻川、大田川			多摩川	大水	河川洪水				葛西、浅草		溺死300~400人(浅草)民衆多数流失		東京市史稿要 災編P.15	
6	台風	台風	1596	慶長元年	6,19,2,7	14,18					多摩川	洪水	河川洪水						信・甲・関東洪水。百年以来の大水	当代記(埼玉)		
6	大雨	大雨	1596	慶長元年	6,19	7					多摩川	洪水	河川洪水				関東甲信馬被雪甚大	大水		目下部No153		
6	大雨	大雨	1596	慶長元年	6,23	7	18				多摩川	洪水	河川洪水				関東	大水		目下部No153		
7			1596	慶長元年	8	9,22~10,21		多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上	福生	L	作目村(祥島、福生村)上手		村流失し河原	武蔵名所図会作目村の条、文禄慶長年間の洪水を慶長元年の豊田川洪水と結び付けている	武蔵名勝図会、p186多摩郡之部巻五立川郷津島嶺日野領	

No.	天候	水害原因	発生年(西暦)	生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	西暦日	発生水体	他の発生水体(関東)	他の発生水体(東海)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地域	現行政区	左岸/右岸	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候	
8			1598		慶長3					浅川			多摩川	河川洪水	河川洪水		八王子	右岸	黒沢	八雲神社田圃によれば、神体流失し、新御殿屋ヶ淵にて発見される	大洪水	東京市史稿(下)		
9			1606		慶長11					多摩川			多摩川	流路移動	河川洪水	上	府中	L	分倍河原	大洪水?	流路移動	菊池(1964)		
9	大風	大風	1606		慶長11	5.25	6	30						出水	出水ほか					多少の出水。東京湾口及湾内重で船多く覆没	風水災變内、東海道諸国にわたる	東京市史稿変災編p.18		
9	暴風雨	暴風雨	1606		慶長11	5.25	6	30									関東			20年このかたの大洪水。麻の被害大きく、稲実らず。		日下部N○167		
10			1613		慶長18					多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	下	大田	L	六郷	橋の橋流失	大洪水	大田区史		
10	大風雨	台風	1613		慶長18	8.28	10	12		荒川			荒川		河川洪水		府中	L	四ヶ谷村	橋の橋流失	大洪水	龍淵寺年代記(埼玉)	1612年5-7月関東早魃	
11			1624		寛永元					多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上				和流失	洪水	府中市歴史年表		
12			1627		寛永4					多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	下	大田	L	羽田	羽田村神光院境内川欠	洪水	龍淵寺年代記(埼玉)	1626年4-10江戸、諸国早魃	
12			1627		寛永4	8	9.10	10.8			大井川								東海道より関東筋	洪水、地震(武江年表(埼玉))	洪水	龍淵寺年代記(埼玉)		
13	大雨	大雨	1627		寛永4	9.15	10	23											東海道筋から関東筋	洪水	洪水	龍淵寺年代記(埼玉)		
14			1629		寛永6	5.19	7	9											小曾木村李厚茂	洪水	出水	吉野家文書(9)		
15	連日の大雨	連日の大雨	1632		寛永9	7.26	9	10											各所	洪水	洪水	徳川実紀(埼玉)		
15			1632		寛永9					多摩川			多摩川							洪水	九月の委に巡察の記事	徳川実紀(大田区)		
16			1637		寛永14					多摩川			多摩川	満水	出水ほか	上	昭島	L	大神村		満水、川除大普請	五川満水(1636年6-7)勢佛堂(昭島市史附編)	1636年6-7江戸早魃	
16	大風雨	暴風雨	1637		寛永14	8.7	9	25													満水、川除大普請	五川満水(1636年6-7)勢佛堂(昭島市史附編)		
16	暴風雨	暴風雨	1637		寛永14	8.7	9	25													満水、川除大普請	五川満水(1636年6-7)勢佛堂(昭島市史附編)		
16			1637		寛永14	8.9	9	27													荒川、利根川増水	東京市史稿変災編p.49		
17			1643		寛永20					多摩川			多摩川	増水	出水ほか						浸水	東京市史稿変災編p.49		
18	連日の霖雨	霖雨	1644		正保元	8.4	9	4		隅田川、江戸川			多摩川	洪水	河川洪水	下	大田	L	六郷辺、千住	洪水	7/6の霖	徳川実紀(大田区)		
18	連日の霖雨	霖雨	1644		正保元	8.4	9	4		隅田川、江戸川	多摩川		荒川、江戸川								洪水	8/4の霖	徳川実紀(大田区)	
18	連日の霖雨	霖雨	1644		正保元					多摩川			多摩川								六郷等橋分	東京市史稿変災編(出雲橋、第2p.57)		
18	連日の霖雨	霖雨	1644		正保元					多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	下	川崎	R	川崎宿	洪水	古江氏年表(小幡下)			

No.	天候	水害原因	発生年(西暦)	生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(東)	他の発生水体(東)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地域	現行政区	左岸/右岸	堤堤/溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
19	大暴風雨	暴風雨	1644	1644	正保元	8.24-29	9	24-29	多摩川			多摩川	大水	内水型 氾濫、 風害	下	大田	L		六郷領	作物は壊らす木家 等までおきたお し、大水溜りへ押 開く(浸下六郷 用水堀へ逃げ込 む)	大水。8/24から 前、25日夜風吹 き、26日昼7時分 から大風雨、28、29 日の朝まで吹き通 し	大田区史(資料 編)「地誌類抄 No.10, p. 274 」「新堀用水堀 定之事」	
19	大風雨	暴風雨	1644	1644	正保元	秋			多摩川			多摩川	大水	内水型 氾濫	下	大田	L		六郷用水 取入れ口	大水	大水	大田区史(資料 編)「地誌類抄 No.10, p. 274 」「新堀 用水堀定之事」	
20	大風雨	暴風雨	1645	1645	正保2	9.6-9	10	25-28	多摩川			多摩川	大水	内水型 氾濫、 風害	下	大田	L		六郷用水	作物は壊らす木家 等までおきたお し、大水溜りへ押 開く(浸下六郷 用水堀へ逃げ込 む)	大水。9/6雨降り始 め、7日夜風吹 き、8日の朝まで大風 雨、9日昼7時まで 吹き通す	大田区史(資料 編)「地誌類抄 No.10, p. 274 」「新堀用水堀 定之事」	
20		暴風雨	1645	1645	正保2	秋			多摩川			多摩川	大水	内水型 氾濫	下	大田	L		六郷用水 取入れ口	大水	大水	大田区史(資料 編)「地誌類抄 No.10, p. 274 」「新堀用水堀 定之事」	
21	大風雨	暴風雨	1648	1648	慶安元	7.13	8	31	多摩川	大井川		多摩川	洪水	河川洪 水	上	府中	L		洪水	洪水	御立神社、当初は 玉川縁にあつた 水、社地全て流失 し、現在地へ 7/13の夜	府中市史下 6521	
21	風雨	暴風雨	1648	1648	慶安元	7.13	8	31	多摩川			多摩川	洪水	河川洪 水	下	川崎		川崎	六郷橋橋脚3本破 損			徳川実紀(大田 区)	1647年4.25 関東低温降 雪
21		暴風雨	1648	1648	慶安元				多摩川			多摩川	洪水	河川洪 水	下	川崎		川崎宿	六郷橋橋脚3本破 損			東京市史高要 災編p.62	
22			1650	1650	慶安3	9	9.26~ 10.24		多摩川			多摩川	堤堤	河川洪 水	中	世田谷	L	下野毛 村西南 破堤	下野毛村 ほか	出水	大水出	木江氏年表(小 塚下)	1649.50年間 寒冷夏
22			1650	1650	慶安3	9	9.26~ 10.24		多摩川			多摩川	流路移 動	河川洪 水	下	大田	L	羽田村天 当耕地	川欠	羽田川筋変わる	羽田史p110		
22			1650	1650	慶安3	9	9.26~ 10.24		多摩川			多摩川	堤堤	河川洪 水	中、下	世田谷 大田、川 崎		下野毛 川崎、羽 田	羽田村正福殿境内 築堤、一部流失、六郷用 水溝水路寸断	豊年、下野毛川筋 掘り変える	新編武蔵風土 記勝巻40、 建部郡之2、六 郷領、p246、三 田(多摩川誌)		
22	大風		1650	1650	慶安3	9.2	9	27	多摩川			多摩川	洪水	内水型 氾濫	下	川崎	R	川崎宿	洪水	洪水	木江氏年表(小 塚下)		
22			1650	1650	慶安3	9.2	9	27	多摩川			多摩川	洪水	内水型 氾濫	下	川崎	R	川崎宿	洪水	洪水	東京市史高要 災編p.66		
23			1653	1653	承応2				多摩川			多摩川	堤堤	河川洪 水	中	大田区	L	下丸子村	川崎、下田計1畝21 歩			1651年江戸 区史(川家文 書4, No. 2p. 1	1651年江戸 区史(川家文 書4, No. 2p. 1 年江戸暴風

No	天候	発生 水害原因	発生 年(西 暦)	年号	旧暦月 日	西暦月	西暦日	発生水体 (東)	他の発生 水体(関 東)	他の発生 水体(東 海)	水系	直接 原因	洪水型	発生地 形成域	現行政区	左岸/ 右岸	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
23			1653	承応2	8	9.22~ 10.21		多摩川		大井川 (夏)	多摩川	洪水	河川洪 水	上	府中	L		洪水	上菜屋の八幡神社 田菜、寛永の頃旧 字北町榎森村に あったが流失して 現在地へ	府中市史下 p520	
23	暴風雨	暴風雨	1653	承応2	8.6	9					多摩川	洪水					諸国	洪水	日下部No.213		
24		台風	1659	万治2	7.2	8		隅田川	隅田川		多摩川	洪水	河川洪 水	上	多摩市	R	旧青柳村 (右岸)	行流失、移転		青柳伝説、 果急(1977)	
24		台風	1659	万治2	7.2	8		隅田川	多摩川		荒川							両国原橋流失、浅 草米蔵浸水	漫水深米2 横通		
24	大雨	台風	1659	万治2	7.2	8												両国原橋流失、浅 草米蔵浸水	出水、洪水	東京市史高梁 災編p.76	
24	大雨	台風	1659	万治2	7.2	8									江戸			江戸大雨洪水、浅 草米蔵浸水		日本災異志(比 留間,1982)	
24	大雨	台風	1659	万治2	7.2	8		利根川			利根川						羽生	大水流失	榎本弥五衛門 覚書(坊玉)		
24	大雨	台風	1659	万治2	7.2	8											江戸	洪水、各所の橋流 失、船で行人渡す 所々被害	日下部No.219		
24	大雨	台風	1659	万治2	7.2	8											館林	竜巻で民家140軒倒 壊	日下部No.219		
24	大雨	台風	1659	万治2	7.2	8											下総	洪水	日下部No.219		
25	風雨	風雨	1660	万治3	7.20~ 7.31	8.25~9.4													出水	東京市史高梁 災編p.80	
25	暴風雨	暴風雨	1660	万治3	7.29	8	31											右垣崩壊	日下部No.222		
26	大風雨	台風	1660	万治3	8.20	9	21											日光山中			
26	風雨	台風	1660	万治3	8.20	9	24											関東、興 州	洪水	徳川実紀(崎 玉)	
27	大風雨	暴風雨	1660	万治3	9.20	10	24											御城その他大破損		東京市史高梁 災編p.82	
25			1660	万治3				多摩川			多摩川	川穴	川穴	中	大田	L	下丸子村	川穴、下畑3町7反3 畝11歩	区史平川家文 書4, No.5, p.4		
25			1660	万治3				多摩川			多摩川	洪水	河川洪 水	上	府中	L	押立村	劣断	通鑑(1975)		
25	大暴風 雨		1660	万治3				富士川			富士川	洪水	河川洪 水					大洪水			
28			1661	寛文元				多摩川			多摩川	洪水	河川溢 水	中	大田	L	下丸子村	水くさり下畑2反8 畝17歩	区史平川家文 書4, No.5, p.4		
29	大風雨	暴風雨	1666	寛文6	5.2	6	4	隅田川			荒川							両国橋流失	東京市史高梁 災編p.91	1665年2~3 月江戸早魃	
30	風雨	風雨	1666	寛文6	9.14	10	12											西丸下石垣その他 崩壊	東京市史高梁 災編p.92		
30			1666	寛文6				多摩川			多摩川	洪水	河川溢 水	中	大田	L	下丸子村	田方「榎原孫」17 石3斗2合、畑方 「水押」37石1斗4 合	区史平川家文 書4, No.8, p.5		



No	天候	発生原因	発生年(西暦)	発生年号	旧暦日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(関東)	他の発生水体(東海)	水系	直接原因	洪水型	発生地	行政区	左岸/右岸	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候	
31		豪雨	1668	寛文8	8	9.7~10.5		多摩川		大井川(8月)	多摩川		中		大田	L	下丸子村	田方「稗草録」2石2斗、畑方「申川次」2石6升7合6勺		区史平川家文書4, No.9, p.6	5~6月瀬雨、江戸早稲	
32			1669	寛文9				多摩川			多摩川		中		大田	L	下丸子村	「西ノ川次」田畑計4石7斗4升1合3勺	破壊瀧沢村入札売却書4, No.10, p.6	区史平川家文書4, No.10, p.6		
33		風雨	1670	寛文10				多摩川		大井川、富士川	多摩川	河川洪水						破壊瀧沢村入札売却書4, No.10, p.6	徳川実紀(長島, 1996)	東京市史稿変災編p.95		
33		風雨	1670	寛文10	6.3	7	19	多摩川		富士川	多摩川	洪水						下総、関宿、相模洪水のよじ開き		東京市史稿変災編p.95		
34			1671	寛文11	8.27	9	29	多摩川			多摩川		中		大田	L	下丸子村	田方「古川分」37石5斗6合、「無色水神」19石1斗2升、「水神」24石4斗6升3合7勺、「無色分夫食」1石9斗5升		区史平川家文書4, No.12, p.7	諸国50年来ない暖冬	
34	大風雨	暴風雨	1671	寛文11	8.27	9	29	浅草川、隅田川	多摩川		荒川	増水		下	大田	L	本所、下谷	八幡坂橋杭500間流失	8/29の豪、関東大風雨	東京市史稿変災編2p.97		
34	大風雨	暴風雨	1671	寛文11	8.27	9	29	多摩川	浅草川、隅田川		多摩川	増水			大田	L			東京市史稿変災編2p.97			
34	暴風雨	暴風雨	1671	寛文11	8.27	9	29												日下部No.233			
34	暴風雨	暴風雨	1671	寛文11	8.27	9	29													日下部No.233		
34	暴風雨	暴風雨	1671	寛文11	8.27	9	29													東京市史稿変災編2p.97		
34	甚だ風雨	暴風雨	1671	寛文11	8.28	9	30	浅草川			荒川									古江氏年表(小塚下)		
34		暴風雨	1671	寛文11				多摩川		大井川、富士川	多摩川	洪水	内水型氾濫	下	川崎	R	川崎宿	洪水				
35	大風雨	暴風雨	1672	寛文12	5.5	5	31	多摩川			多摩川	増水	下	大田				六郷坂橋流失	5/5の豪	東京市史稿変災編2p.103		
35		暴風雨	1672	寛文12				多摩川		大井川、富士川	多摩川	洪水	内水型氾濫	下	川崎	R	川崎宿	洪水		古江氏年表(小塚下)		
36			1674	延宝2				多摩川			多摩川	溢水		大田	L	下流左岸現大田区	農作物全滅		大田区史、大森区史	大田区史、大森区史	諸国冷夏、長雨	
	大風雨	暴風雨	1674	延宝2	6.13, 14	7	16, 17											淀大和川洪水		東京市史稿変災編p.105		
			1674	延宝2	8.16	9	15	常州利根川		大井川(8.11~18)	利根川									徳川実紀(橋玉)		
	暴風雨	暴風雨	1674	延宝2	8.16-18	9	15-17	利根川			利根川									日下部No.237		
	暴風雨	暴風雨	1674	延宝2	8.16-18	9	15-17													高湖		
	霖雨	霖雨	1674	延宝2	4.-7.	5.-8														常陸		
			1680	延宝8				多摩川		富士川(8月)	多摩川	洪水	河川洪水	上	昭島	L	拜島、田中、大神村	田耕地區敷流失		『玉川清水流』1679年豪冷年数寛書(石川日記書太郎家文書(昭島市史))	1679年豪冷	

No.	天候	発生年(西暦)	発生年(西暦)	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(河川)	他の発生水体(湖沼)	水系	直接原因	洪水型	発生地地形	現行政区	左岸/右岸	沿岸/遊流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
	暴風雨	1680	延宝8	7.22	9	7									水戸領内				巨勢、田圃、堤防、橋梁、樹木に被害		日下部No.244	関東9~12月早晩	
	暴風雨	1680	延宝8	7.22	9	7									佐渡、備前、播磨				浪水		日下部No.244		
	暴風雨	1680	延宝8												上野				浪水		日下部No.244		
	暴風雨	1680	延宝8	7.25	9	10							高潮		江戸				3,400戸被害		日下部No.245		
	暴風雨	1680	延宝8	7.25	9	10									宇都宮				浪水		日下部No.245		
	暴風雨	1680	延宝8	7.25	9	10									越中						日下部No.245		
		1680.8	延宝8						多摩川					内水型氾濫	上	昭島	L		拝島から大神村	拝島用水に洪水流入		昭島市史	
	大風雨	1680	延宝8	閏8.6	9	28							高潮	高潮					深川、本所、浜野、島、森、洲、八丁堀	海水漲り上りて家々崩し、人溺る。西面橋崩し。		武江年表(比留間,1982)	
	大風雨	1680	延宝8	閏8.6	9	28									海蔵本所、深川、川、浜野、島、森、洲、八丁堀、芝等			(家屋を吹倒する者3420余戸、)浪水			東京市史稿(変火編p.107)		
	大風雨	1680	延宝8	閏8.6	9	28									川越				人家5百軒倒壊	江戸1丈の高潮。寛永の33回同様	増本弥五衛門(筑玉)		
	大風大水	1680	延宝8	8.6	8	29			荒川											この年5月~9月雨多し、8・9月大水10度	増本弥五衛門(筑玉)		
	暴風雨	1681-1682	延宝8.9	8~11					多摩川					河川洪水	上	昭島	L		拝島村・水引入口神保、島村・田中村・大神村	拝島村下夕組合用水引入口神保、島村・田中村・大神村田耕地面積を押し流		玉川洪水荒年(筑玉)	6~8月冷夏
	暴風雨	1681	延宝8	8.14	9	6														江戸、伊勢、讃岐、北国	日下部No.249		
		1681	延宝8												上野					水害		日下部No.249	
		1681	延宝9																	破損齋村入札流却		1682年12月暖冬	
38	暴風雨	1684	貞享元						多摩川					内水型氾濫	下	川崎	R		川崎宿	洪水		古江氏年表(小澤下)	1683年暖冬
39		1685	貞享2						多摩川					河川洪水	上	昭島	L		拝島作目村	全村壊滅		昭島市史	諸国夏旱
39		1685	貞享2						多摩川					河川洪水	上	昭島	L		拝島作目村	流失		正統(昭島市史)	江戸で50余日雨亦降らず

No.	天候	水害原因	発生年(西暦)	生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	物の発生水体(個人)	他の発生水体(東海)	水系	直接原因	洪水型	発生地形状	現行政区	左岸/右岸	河堤・堤防・流路	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
40			1686		貞享3	6.1	7	20											豊沼田、駒木野、佐戸、小高井	黒田5人、流死1人、流死、駒木野、佐戸、小高井、42軒流失、人35人、馬7疋流死	上豊方村赤瀬笹原で山地崩壊→北浅川堰止め→決壊	豊方村史年表(八王子市史附編)	
40			1686		貞享3	6.1	7	20											豊沼田、駒木野、佐戸、小高井	逆流31軒半壊12軒、死者35人、馬7疋流死		橋本政三家文書(八王子市史附編)	
40			1686		貞享3				浅川			多摩川	山地崩壊堰止め	河川洪水	中	大田			豊沼田、駒木野、佐戸、小高井	上豊方中郷、赤瀬・笹原で山地崩壊→北浅川堰止め→決壊	秋間(1978)		
40	雨		1686		貞享3	6.4.12	7	23.31	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	下	大田	L			六郷橋流失		武江年表(大田区)	
40			1686		貞享3	6	7	20~												六郷橋橋台沈没、敷板破損	出水	豊川実記(長島, 1996)	
40			1686		貞享3				多摩川			多摩川			中	大田	L		下丸子村	「水神当道引」28石8斗5升2合		区史平川家文書4, No.116, p.9	
41			1686		貞享3	7	8	19~	秋川			多摩川				秋留野			田畑大破損	大洪水	大延願寺過去帳願寺過去帳(八王子市史附編)		
40	大雨		1686		貞享3	6.4.12	7	23.31				多摩川				川崎			江戸	洪水	武江年表(埼玉)		
40			1684-1688		貞享年間				多摩川			多摩川	破堤	河川洪水	上	川崎			宿河原うなぎ土手	破堤	小塚(1968)多摩川誌		
42			1688		貞享5	7.21	8	16	多摩川			多摩川		内水型氾濫	中	川崎	R		川崎南加瀬村	10町	内務省		
43			1688		元禄元	7.21	8	16	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	下	大田	L		川崎南加瀬村	以養、再架橋詰め、渡船場に切り替	新編武蔵風土紀略、巻72、川崎領、p.339		
43			1688		元禄元				多摩川			多摩川	洪水	内水型氾濫	下	川崎	R		川崎宿	洪水	吉江氏年表(小塚下)		
43			1688		元禄元				多摩川			多摩川	洪水	内水型氾濫	中	川崎	R		南加瀬村	損毛211疋	深瀬(小塚下)		
43			1688		元禄元				荒川			荒川							御正躰壊される	満水	平山家文書(埼玉)		
43			1688		元禄元				多摩川			多摩川		河川洪水	中	大田区	L		川欠、水隔引		区史平川家文書No.17, p.10		
43			1688		元禄元				荒川			荒川							御正躰壊される	満水	平山家文書(埼玉)		
44			1691		元禄4				秋川			多摩川		河川洪水	上	昭島	L		滝、高築村田地流失	『年表口上巻』多岐、巻72、立川市史資料集(昭島市史)			
45			1694		元禄7				多摩川		富士川	多摩川		内水型氾濫	中	川崎	R		川崎南加瀬村	22町	小塚(1968)	1693年夏旱	
45			1694		元禄7				多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	中	大田区	L		下丸子村	水隔、移真引、田方計30石5斗6升	区史平川家文書4, No.17, p.10		
45			1694		元禄7	8.8	9	26	陣田川			荒川							新大橋破壊	出水	豊原市史年表(豊原)		

No	天候	水害発生年(西暦)	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(関東)	他の発生水体(東海)	水系	直接原因	洪水型	発生地形成域	現行政区	左岸/堤岸 右岸/堤岸	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
45	大雨	1694	元禄7	8.8	9	26	浅草川				荒川							増水、新大橋破壊		日下部No.260	
45	大雨	1694	元禄7	8.8	9	26	酒匂川				相模川							洪水		日下部No.260	
45	大雨	1694	元禄7	8.8	9	26											一の宮	水害、年貢減免		日下部No.260	1698年、冷害、春寒く、夏は長雨、秋は大雨、素早くと、諸國移らす、安房では大加雨。1696年陶楽冷害
46	大風雨	1699	元禄12	8.15	9	8		富士川(8.15)			大風	大風	風雪	上山	青梅		二俣尾村 家屋吹倒	百年來の大風	谷合氏見聞録 p.2		
46	大風雨	1699	元禄12	8	8~9	25~22											世田谷嶺	御穀米	公私私世田谷年代記(乾)p.83		
46	暴風雨	1699	元禄12	8.15	9	8											江戸		日下部No.265		
46	暴風雨	1699	元禄12	8.15	9	8											宇都宮		日下部No.265		
46		1699	元禄12														前橋	潰家、死者	日下部No.265		
46	台風	1699	元禄12				多摩川				多摩川		内水型氾濫	川崎	川崎	R	川崎南加瀬村	損毛384後	深瀬(小塚下)		
46	台風	1699	元禄12				多摩川				多摩川	風	風雪	上	府中	L	押立村	取高前年58石余りが9石	府中市史上 p.778		
47		1701	元禄14				多摩川				多摩川	破堤	河川洪水	上	昭島	L	拝島堤	決壊	昭島市史		
47	暴風雨	1701	元禄14				多摩川				多摩川	破堤	河川洪水	上	昭島	L	拝島村 川條堤 押切	耕地玉川本瀬二相成	五川湯水荒年致寛書(昭島市史附録)		
47	暴風雨	1701	元禄14				多摩川				多摩川	洪水	河川洪水	上	府中	L	向島新田	田圃流失、租額なし	府中市史上 p.777		
47	暴風雨	1701	元禄14				多摩川				多摩川	洪水	河川洪水	上	府中	L	押立村	田地流失	府中市史上 p.779		
47	暴風雨	1701	元禄14	7	8~9	4~2	多摩川				多摩川	洪水	河川洪水	上山	青梅		青梅	田畑、道路、橋穴落	青梅の自然! p.346		
47	暴風雨	1701	元禄14	7.21	8	24	荒川				荒川						津田新田堤	意願寺門前大河の如し	熊谷市史、竜湖寺門前寺年代記(埼玉)		
47	暴風雨	1701	元禄14	7.21	8	24					高潮	高潮					下総北部		日下部No.267		
47	暴風雨	1701	元禄14	7.21	8	24	荒川				荒川	河川洪水	河川洪水				碓堤		日下部No.267		
47	暴風雨	1701	元禄14	7.21	8	24													東京市史編纂 災編p.118		
47	暴風雨	1701	元禄14	7.21	8	24					多摩川	洪水	河川洪水	上山	青梅		洪水、橋子落ちる		谷合氏見聞録 p.5		
48	大風雨	1702	元禄15	10.2	11	20	多摩川				多摩川	洪水	河川洪水	上	府中	L	押立村		遠藤(1975)		
48	暴風雨	1702	元禄15				多摩川				多摩川	出水	出水ほか	上	府中	L	押立村		東京市史編纂 災編p.119		
48	大風	1702	元禄15	10.3	11	21															

No.	天候	水害原因	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(東)	他の発生水体(東海)	水系	直接原因	洪水型	発生地地形地帯	現行行政区	左岸/破壊・遺流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候	
49	大雨	大雨	1704	宝永元 6.22-7.23	7	23-24	多摩川	多摩川		多摩川	洪水	河川洪水	上山	青梅	青梅		二保尾村	洪水	諸川満水	谷合氏見聞録 p.7 青梅の自然1 p.346		
49	大雨	大雨	1704	宝永元 6.15	7	2~31	多摩川	多摩川		多摩川	溢水	河川溢水	上山	青梅	青梅		江戸近辺	洪水		日下部No.274		
49	大雨	大雨	1704	宝永元 7.1.2	8	1,2	大川	大川		富士川(7月)	荒川						江戸近辺	洪水		日下部No.274		
49.50	霖雨	霖雨	1704	宝永元 6.15-7.3	7~8	16~3	利根川	利根川			利根川							増水		日下部No.274		
49.50	霖雨	霖雨	1704	宝永元 6.15-7.3	7~8	16~3											本庄辺	水たたえる		日下部No.274		
49.50	霖雨	霖雨	1704	宝永元 6.15-7.3	7~8	16~3											土河から上流行巻・浅草			日下部No.274		
49			1704	宝永元 6.15	7	16											深川、山名、下名、浅草、千住	浸水、利根川堰崩壊、堤決壊、大水都を襲う		東京市史編纂 災編p.121		
49.50	雨降り続く	霖雨	1704	宝永元 6.23-7.1	7~8	24~1	六郷川	大井川、利根川、要倍川			多摩川							大水		鳥高市史編纂 災編p.125		
50	大雨	大雨	1704	宝永元 7.7	8	7	多摩川	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上山	青梅		二保尾村	氾濫		谷合氏見聞録 p.7		
			1704	宝永元			多摩川	多摩川			多摩川			中	大田区	L	下丸子村	「当夜見引」、「当田川次引」、「当水掘付荒」計8町29歩		豊 4, No.21, p.12		
			1704	宝永元			多摩川	多摩川			多摩川			上	府中	L	柳立村	水損38石		通藤(1975)		
51			1704	宝永元 7.3	8	3	利根川	利根川			利根川	破壊	河川洪水				本庄大水、家屋倒壊、水件繰入、分水區			谷合氏見聞録 p.7		
	霖雨	霖雨	1704	宝永元			利根川	利根川			利根川	溢水	河川溢水				江戸	洪水、府内にも影響	7月3日の豪	徳川実紀(大田区)		
51	大雨	大雨	1704	宝永元 8.4	9	2											江戸及近	洪水		徳川実紀(埼玉)		
52	大雨	大雨	1704	宝永元 8.28	9	26	荒川	荒川			荒川						江戸及近	大水		日下部No.275		
			1704	宝永元			多摩川	多摩川			多摩川	満水	出水ほか	上	埼玉市	L	米300石	米300石	満水	電通寺門当寺年代記(埼玉) 公私世田谷年代記, p.85		
			1704	宝永元			利根川	利根川			利根川									この年、西暦諸用水村々満水(柳田家文書)、八溝村切所(通藤家文書)、中島用水(前川第一門押蓮(西乃村日記))	柳田家文書、通藤家文書、西方村日記(埼玉)	
53	嵐雨	嵐雨	1708	宝永5 6.21-22	8	7	多摩川	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上山	青梅		二保尾村	大水		谷合氏見聞録 p.10		

No.	天候	水害原因	発生年(西暦)	生年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(東)	他の発生水体(西)	発生水体(東)	発生水体(西)	発生地形	現行政区	左岸/右岸	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
54	大雨	大雨	1708	宝永5	7.2	8	17	多摩川			多摩川	河川洪水	上山	青梅		二俣尾村	洪水		谷合氏見聞録 p.10 区史平川家文 巻5、 No.3, p.1497	
54			1708	宝永5	7.3	8	18										洪水	洪水(破)。妻、下丸子、中丸子、欄村の3ヶ所の出洲出入りU(妻丸子并地)の出洲を橋手に繋ぎに繋る		
54			1710	宝永7				多摩川	富士川		多摩川	河川溢水	上	府中	L	押立村	水損30石		遠藤(1975)	
55	大雨	大雨	1713	正徳3	7.2	8	22	多摩川			多摩川	河川洪水	上山	青梅		二俣尾村	洪水	青梅澤井屋久保うはらの薄崩壊	谷合氏見聞録 p.16	
55	大雨	大雨	1713	正徳3				多摩川			多摩川	川欠	上	調布	L	下石原村			調布市史巻	
56	大雨	大雨	1716	享保元	5.2	6	21	多摩川			多摩川	溢水	上山	青梅	L	二俣尾村		洪水。諸人説。此水ニテ田仕附	谷合氏見聞録 p.18	
56	大雨	大雨	1716	享保元				多摩川			多摩川	川欠	上	調布	L	下石原村		調布市史巻		
57	大雨	大雨	1717	享保2	3.27	5	8	多摩川			多摩川	溢水	上山	青梅		二俣尾村	洪水		谷合氏見聞録 p.19	
58	雨	雨	1718	享保3	9.12	10	5	多摩川			多摩川	洪水	上山	青梅		二俣尾村	大洪水		谷合氏見聞録 p.20	
58	雨	雨	1718	享保3	9.12	10	5					河川洪水		埼玉県秩山山口		砂川新田、山口朝入、間部の平地の村々	田畑冠水、家浸水、家屋流失多数。人馬多死	谷合氏見聞録 p.20		
58	暴風雨	暴風雨	1718	享保3	9.12	10	5					河川洪水		東海道の伊勢、熊野				日下部No.289		
58	暴風雨	大雨	1718	享保3	9.12	10	5							箱根		箱根	山崩れ、交通遮断	日下部No.289		
59	大雨	暴風雨	1721	享保6	7.1	7	24	多摩川	大井川(7月7.3)		多摩川	河川洪水		八王子			方々にて稀落ちる	石川日記		
59	暴風雨	暴風雨	1721	享保6	7.1	7	24										洪水	日下部No.291		
59			1721	享保6	7.1	7	24	利根川			利根川	河川洪水				破堤	洪水	日下部No.291		
59			1721	享保6	7.1	7	24										洪水	日下部No.291		
59	風雨	暴風雨	1721	享保6	7.1	7	24	隅田川			隅田川	内水型氾濫					洪水	日下部No.291		
59	暴風雨	暴風雨	1721	享保6	7.10.1, 8.20	8	2, 10.1, 2	多摩川			多摩川	河川洪水	中	大田区	L	下丸子村	出水	下丸子村北古川耕地、南古川耕地水害	区史平川家文 巻4	
59	暴風雨	暴風雨	1721	享保6	7	7~8	24~22	多摩川			多摩川	洪水	上	羽村	L	羽村	羽村運破れ上水止まる	七月申4回洪水	羽村町史	

No.	天候	水害発生原因	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(関係)	他の発生水体(関係)	水系	直接原因	洪水型	発生地地形	現行行政区	左岸/右岸	破堤・溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
59	大雨	暴風雨	1721	享保6	7.1	7	24	多摩川		多摩川	洪水	河川洪水	上山	青梅				二俣尾村	洪水。羽村の堰水破、鉋焼れ水一切江戸へ不通。	25年以前卯年の満水と同じ	谷合氏見聞録 p.24	
59	大雨	暴風雨	1721	享保6	7.1	7	24	陣田川、古利根川	多摩川、利根川	利根川	洪水	河川洪水						本所、下谷、深川、千住	溺死者多し		東急(1977)	
59	風雨強	暴風雨	1721	享保6	7.1	7	24	利根川	陣田川、古利根川、多摩川、利根川	利根川								浸襲		月堂見聞集(場玉)		
			1721	享保6				多摩川		多摩川	洪水	河川洪水	上	狛江市	L			多摩川通り村々水堀につぎ米百80俵御用捨米	出水		狛江市史	
60	大風雨	暴風雨	1721	享保6	7.10	8	2	多摩川		多摩川	洪水	河川洪水	上山	青梅				二俣尾村	洪水、家々にて風勢あり		谷合氏見聞録 p.24	
61	大風雨	暴風雨	1721	享保6	7.17	8	11	多摩川		多摩川	洪水	出水ほか	上山	青梅				二俣尾村	満水、前と同じ。諸作悪吹散		谷合氏見聞録 p.24	
61	大雨	暴風雨	1721	享保6	7.19	8	13	多摩川		多摩川	洪水	出水ほか	上山	青梅				二俣尾村	満水		谷合氏見聞録 p.24	
61	暴風雨	暴風雨	1721	享保6	7.17	8	9											國葬各地	洪水		日下部No.292	
61	暴風雨	暴風雨	1721	享保6	7.17	8	9	利根川		利根川								鷗宿	平水より5.5m高く20~30年来にない大洪水		日下部No.292	
61	暴風雨	暴風雨	1721	享保6	7.17	8	9											中国、四国、近畿、中部			日下部No.292	
62	嵐	暴風雨	1721	享保6	閏7.1	8	23	多摩川	浅川、陣田川、古利根川、利根川	多摩川	洪水	河川洪水	中、下	大田	L			鶴村、鷺木村、矢口村、下丸子村	床上浸水		区史平川家文書4	
			1721	享保6				多摩川		多摩川	洪水	河川洪水	中	大田	L			下丸子村、川向	水損、水腐		区史平川家文書4, No.4, p.228	
			1721	享保6				多摩川		多摩川	洪水	河川洪水	下	大田区	L			下丸子村	数百疋藤右衛門の履敷欠落		区史平川家文書5, No.2, p.1	
			1721	享保6				多摩川		多摩川	洪水	河川洪水	上					多摩川通り村々水堀につぎ御用捨米	満水		公私相田各年代記, p.90	
	大風雨	暴風雨	1721	享保6				荒川		荒川	満水	内水型氾濫		大田	L			音見理大破	満水		大河原家文書(場玉)	
63	大雨	大雨	1722	享保7	6.23	8	4	多摩川	大井川(6.23~4)	多摩川	洪水	河川洪水	上山	青梅				二俣尾村	洪水風吹立		谷合氏見聞録 p.26	
63		大雨	1722	享保7	6.24	8	5	多摩川		多摩川	洪水	河川洪水	中	大田	L			下丸子村	出水、水腐	出水	区史平川家文書3, No.2, p.1030	
64			1722	享保7	8.15	9	25	多摩川	大井川(8.15~24)	多摩川	洪水	河川洪水	中	大田	L			下丸子村	出水、水腐	出水	区史平川家文書3, No.2, p.1030	
64			1722	享保7	8.15	9	25	多摩川		多摩川			上	稲城、川崎	R			大丸、長沼、穴野口、押立、菅、中野、島、菅生、五反田、意戸			稲城市史	

地	天候	水害原因	発生年(西暦)	発生年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(東)	他の発生水体(東)	水系	直接原因	洪水型	発生地	現行政区	左岸/右岸	堤防・遊流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
65			1722	享保7	8.23	10	3	多摩川			多摩川	溢水	河川洪水	中	大田	L		下丸子村	出水、水腐	出水	区史平川家文書3, No.2, p.1030 稲城市史	
65			1722	享保7	8.25	10	3	多摩川			多摩川			上	稲城、川崎			大丸、長沼、矢野立、中野島、五反田、壺戸				
65	暴風雨	暴風雨	1722	享保7	8	9~10	11~9	多摩川			多摩川	溢水	河川洪水	上山	青梅		壺崎堤		満水		青梅の自然1 p.348 日下部No.293	
	暴風雨	暴風雨	1722	享保7	8.14	9	24								関東一帯			上野蓮根村	タバコに被害		日下部No.293	
	暴風雨	暴風雨	1722	享保7	8.14	9	24								近畿・東海			近畿・東海			日下部No.293	
			1722	享保7	秋	秋		荒川			荒川								大水		滝洲寺門当寺 年代記(埼玉) 東京市史稿 巻編p.148	
			1722	享保7	秋	秋														関東筋洪水		
66	大雨	台風	1723	享保8	8.8-10	9	7~9	多摩川	利根川、鬼怒川、渡良瀬川、那珂川		多摩川	溢水	河川洪水	中	大田区	L		下丸子村	上中下々田水腐皆無	満水	区史平川家文書4, No.11, p.433	
66	大風雨	台風	1723	享保8	8.8-10	9	7~9	多摩川	利根川、鬼怒川、渡良瀬川、那珂川		多摩川	溢水	河川洪水	中	大田区	L		下丸子村	1丈7.8尺、数10日満水、田畑居屋敷まで多摩川一面、風勢通り10日には1丈3尺、1丈7.8尺、18日に干涸	満水	区史平川家文書3, No.6, p.1033	
66	大風雨	台風	1723	享保8	8.8	9	7	多摩川	利根川、鬼怒川、渡良瀬川、那珂川		多摩川	溢水、水、風	河川洪水	中	大田区	L		下丸子村	藁藁吹らす吹き返し、満水で大豆木輪作共に押し押まる、稲作は水害、水腐	満水	区史平川家文書5, No.4, p.2	
66	台風	台風	1723	享保8				多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	中	大田区	L		下丸子村	百姓若石衛門長右衛門の屋敷水害、田畑大分川欠	満水	区史平川家文書5, No.2, p.1	
66	台風	台風	1723	享保8	8.10	9	9	多摩川	利根川、鬼怒川、渡良瀬川、那珂川		多摩川	洪水	河川洪水	中	大田区	L		下丸子村	田畑屋敷川欠、土松出し並びに稲穂口段水で押さら	満水	区史平川家文書5, No.3, p.1	
66	大風雨	台風	1723	享保8	8.8-10	9	7~9	多摩川	利根川、鬼怒川、渡良瀬川、那珂川		多摩川	川欠	川欠	中	大田区	L		下丸子村	大分川欠		区史平川家文書5, No.5, p.2	



No	天候	水害発生原因	発生年(西暦)	発生月	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(東)	他の発生水体(東)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地域	現行政区	左岸/右岸	流域・溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
66	台風	台風	1723	享保8	8.8-10	9	7~9	多摩川	利根川、鬼怒川、渡良瀬川、那珂川	利根川、鬼怒川、渡良瀬川、那珂川	多摩川	溢水	河川溢水	中	大田区	L		下丸子村	高場の家屋浸水0.6~1.2m、田畑冠水3.0~5.5m、水が写すのくに7日~10日	2回満水	区史平川家文書5	
66	台風	台風	1723	享保8	8.10	9	9					溢水	河川溢水				関東全域	宇都宮浸水、関宿浸水5万人、万石積毛、溺死4、9分5厘	25年以前元禄12卯8月15日の水程。或いは20年以前宝永元年申7/3より7日迄の大雨にて多摩川満水に丸岩8分と同じ	谷合氏見聞録p.28		
66	大雨	台風	1723	享保8	8.10	9	9	多摩川	利根川、鬼怒川、渡良瀬川、那珂川	利根川、鬼怒川、渡良瀬川、那珂川	多摩川	洪水、溢水	河川洪水	上山	青梅		二俣尾村	洪水、満水。丸岩9分5厘			青梅の自然1 p.348 熊谷市史(埼玉)	
66	台風	台風	1723	享保8	8.8-10	9	7~9	利根川	多摩川	多摩川	利根川	出水ほか	出水ほか				利根川通り 善々島600間	満水				
66	台風	台風	1723	享保8	8.10	9	9	多摩川			多摩川	溢水	内水型 氾濫				本所、深川、浅草、染井、豊島、板橋、王子	床上浸水30・60cm		日下部No.295		
66	大雨	台風	1723	享保8	8.8,9,10	9	7,8,9					7						深川、浅草、染井、豊島、板橋、王子	床上浸水12尺所により軒の口まで	江戸近辺大雨洪水、炊息、淀、下野川の辺洪水、下野津都宮、上総國領	東高市史稿要 災編p.148	
66	台風	台風	1723	享保8	8.10	9	9	多摩川	渡良瀬川、那珂川	多摩川	利根川							下野	五十里沼決潰		日下部No.295	
66	台風	台風	1723	享保8	8.10	9	9	多摩川	多摩川	多摩川	鬼怒川						宇都宮	大洪水		日下部No.295		
66	台風	台風	1723	享保8	8.10	9	9	多摩川	多摩川	多摩川	利根川						関宿	400・500人溺死		日下部No.295		
66	台風	台風	1723	享保8	8.10	9	9	多摩川	渡良瀬川、那珂川	多摩川	渡良瀬川、那珂川							山縣、颯羽、北海	遭も嵐風雨		日下部No.295	
67			1724	享保9	4.17-18	5	9,10	多摩川			多摩川	溢水	出水ほか	上山	青梅				満水		谷合氏見聞録p.29	
68	大雨	大雨	1724	享保9	6.25-28	8	13,14											江戸近辺	(雨の内に馬の毛の如き物長さ2.3寸赤白相混じりふる)	洪水	東京市史稿要 災編p.150	
69	雨	雨	1724	享保9	9.6	10	22	多摩川	浅川	多摩川	多摩川	満水	出水ほか	上山	青梅	L	二俣尾村	満水		谷合氏見聞録p.30		
69	雨	雨	1724	享保9	9.7	10	23	浅川	多摩川	多摩川	多摩川	大水	出水ほか				八王子	大水出		石川日記		
70	大雨	大雨	1725	享保10	9.4	10	9	多摩川	浅川	多摩川	多摩川	洪水	河川洪水	上山	青梅	L	二俣尾村	出水。村々断切押流す		谷合氏見聞録p.32		
70	大雨	大雨	1725	享保10	9.4	10	9	浅川	多摩川	多摩川	多摩川	大水	出水ほか				八王子	大水出		石川日記		
70	大雨	大雨	1725	享保10	9.6	10	11	浅川	多摩川	多摩川	多摩川	大水	出水ほか				八王子	大水出		石川日記		

No	天候	発生 水害年(西 暦)	発生 年号	旧暦月 日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生 水体(関 東)	他の発生 水体(東 海)	水系	直接 原因	洪水型	発生地 形地域	現行政区	左隣/隣 右岸 港流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
70	暴風雨	1725	享保10	9.4	10	9										因幡、讃 岐、陸前 江戸			日下部No.297	
70	暴風雨	1725	享保10	9.6	10	11										江戸			日下部No.297	
71	大雨 (夜)	1726	享保11	7.16	8	13	多摩川			多摩川	溢水	河川溢 水	中	大田区	L	下丸子村	田畑残ちす水押 し、早稲、晚稲泥 水かぶる、畑一面 冠水	出水	区史平川家文 書4, No.6, p.196	
72	大雨	1726	享保11	7.28	8	25	多摩川		大井川	多摩川	出水	出水ほ か	下	大田	L		川除雷音禱木流失	出水	大田区史(大田 区)	
72	大雨	1726	享保11	7.28	8	25	多摩川			多摩川	洪水	河川洪 水	中	大田	L	下丸子村	大洪水	出水	区史平川家文 書5, No.7, p.3	
72	大雨	1726	享保11	秋	秋	秋	多摩川			多摩川	洪水	河川洪 水	中	川崎	R	小杉村	大洪水	出水	小杉村(小塚 下)	
73	大雨	1726	享保11	秋	秋	秋	多摩川			多摩川	洪水	河川洪 水	上	青梅	L	二俣尾村	大洪水	出水	谷合氏見聞録 p.34	
74	雨天	1727	享保12	7.8	8	24	多摩川			多摩川	出水	河川溢 水	中	大田	L	下丸子村	田畑水損	出水	区史平川家文 書2, No.8, p.695	
75	台風	1727	享保12	7.19- 21	9	4~6	多摩川	荒川		多摩川	溢水	河川溢 水	中、下	大田	L	八幡塚、 原、古市 場、狭口、 下丸子、下 鶴木、下 沼部村	田畑水損	満水	石川日記	
75	台風	1727	享保12	7.8-9	8~9	17~14	多摩川			多摩川	溢水	河川溢 水	中	大田	L	下丸子村	水押	出水	区史平川家文 書3, No.15, p.1047	
75	台風	1727	享保12	7.22	9	7	多摩川			荒川							残ちす水損	満水	東京市史編纂 災2p.152	
75	台風	1727	享保12	7.19- 21	9	4~6	多摩川			多摩川	溢水	河川溢 水	中	大田	L	下丸子村	残ちす水損	満水	区史平川家文 書4, No.13, p.437No .7, p.197	
75	台風	1727	享保12	7.20	9	17~14	多摩川			多摩川	洪水	河川洪 水	中	大田	L	下丸子村	川除雷音禱木損	出水	区史平川家文 書1, o.14, p.143	
75	大雨	1727	享保12	7.19- 26	9	4~11	荒川	多摩川		荒川	破堤	河川洪 水				大田堤 破堤	19.20日大雨。久下 戸村床上2尺5寸程 浸水	洪水	大水記(橋玉)	
75	大雨乱 天	1727	享保12	7.20	9	5	多摩川	多摩川		多摩川	大水	出水ほ か		八王子			大水出		石川日記	
75	雨	1727	享保12	7.20	9	5	多摩川	浅川		多摩川	洪水、 溢水	河川洪 水	上	青梅		二俣尾村	洪水、満水	洪水、満水	谷合氏見聞録 p.35	
75	大雨	1727	享保12	7.20	9	5	多摩川			多摩川	洪水	河川洪 水				浅草、山 谷、千住 東海通、 奥羽	江戸開府以来の大 水	日下部 No.298		
75	大雨	1727	享保12	7.20	9	5	多摩川			多摩川	洪水	河川洪 水				屋根まで届く大水	水	日下部 No.298		
76	小雨天	1728	享保13	6.7	7	13	多摩川			多摩川	出水	出水ほ か		八王子			水出		石川日記	

No	天候	水害原因	発生年(西暦)	発生年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(東)	発生水体(東海)	水系	直接原因	洪水型	発生地	現行政区	左岸/右岸	破壊、溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候	
77	大雨	大雨	1728	享保13	7.8	8	13	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上山	青梅			二俣尾村	満水		谷合氏見聞録 p.37		
77	大雨	大雨	1728	享保13	7.9	8	14	多摩川			多摩川	溢水	河川溢水	中	大田	L		下丸子村	田畑は及びぼ、5、6尺(約1.5m-1.8m)床上浸水	満水	区史平川家文書2、No.17、p.795		
77		大雨	1728	享保13				多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	中	大田	L		下丸子村	出水		区史平川家文書3、No.16、p.10、47、10月付け付		
77	暴風雨	暴風雨	1728	享保13	7.8	8	13											浅草、下谷、本所、深川、小日向、小石川	大被害。稲は悉く破壊		東京市史稿委炎2p.153		
77	暴風雨	暴風雨	1728	享保13	7.8	8	13	利根川、渡良瀬川			利根川										日下部 No.299		
78			1728	享保13	7.15	8	20	浅川	多摩川		多摩川	出水	出水ほか		八王子				水出		石川日記		
79			1728	享保13	8.4	9	7	浅川	多摩川		多摩川				八王子				大水出		石川日記		
80	暴風雨	暴風雨	1728	享保13	8.12	9	15	浅川	利根川、渡良瀬川		多摩川	大水	出水ほか		八王子				大水出		石川日記		
80	大風雨	暴風雨	1728	享保13	8.12	9	15	多摩川	利根川、渡良瀬川		多摩川	満水	出水ほか、風害	上山	青梅		二俣尾村	諸作樹木悉く折。多葉粉皆損。	満水		谷合氏見聞録 p.37		
80	暴風雨	暴風雨	1728	享保13	8.13	9	16	浅川	利根川、渡良瀬川		多摩川	大水	出水ほか		八王子			大水出		石川日記			
80		暴風雨	1728	享保13	8.13	9	16	多摩川	利根川、渡良瀬川		多摩川	溢水	河川溢水	中	大田	L		稲作水原、稲作置作も残らず水腐	満水		区史平川家文書2、p.795		
80		暴風雨	1728	享保13	8	9~10	4~2	多摩川			多摩川							武家、山、川、橋、道被害	満水		青梅の自然1 p.348		
80	大風雨	暴風雨	1728	享保13	8			入間川			荒川							田畑冠水、床上浸水			大水記(埼玉)		
80	暴風雨	暴風雨	1728	享保13	8.13	9	16				利根川								洪水		日下部No.300		
80	暴風雨	暴風雨	1728	享保13	8.13	9	16	利根川、渡良瀬川			利根川									京新も暴風雨		日下部No.300	
81		台風	1728	享保13	9.2	10	4	多摩川	浅川、江戸川、神田川、古利根川		多摩川	浸水	河川洪水	中	大田	L		下丸子村、床上浸水、土流失、稲流失	大満水		区史平川家文書2、No.17、p.795		
81	大風雨	台風	1728	享保13	9.2	10	4				多摩川	溢水	内水型氾濫				江戸下町	3m以上の床上浸水	享保中最大の洪水		東京市史稿委炎2p.154		

No.	天候	水害原因(国)	発生年(西暦)	発生年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(国)	他の発生水体(県)	水系	直接原因	洪水型	発生地形状	現行政区	右岸/左岸	被災地域	被災状況	摘要	文献	氣候
81	大風雨	台風	1728	享保13	9.2	10	4	浅川	多摩川、江戸川、隅田川、神田川、利根川	多摩川	多摩川	溢水	河川溢水		八王子		原宿まで上水		江戸大荒人死人	石川日記	
81	大風雨	台風	1728	享保13	9.2	10	4	多摩川	江戸川、隅田川、神田川、利根川	多摩川	多摩川								東急(1977)		
81	大雨	台風	1728	享保13	9.2	10	4	多摩川	江戸川、隅田川、神田川、利根川	多摩川	多摩川	山崩れ、洪水	河川洪水	上山	青梅		川前、屋敷、久畑、損なう。道橋欠損、水押野し。	洪水、北風	江戸大水入、大洪水	谷合氏見聞録 p.37	
81	大風雨	台風	1728	享保13	9.2	10	4	江戸川、隅田川、神田川、利根川	多摩川	多摩川	荒川							高田橋、新大橋、腰谷)8~12尺(小石川)	東急(1977)		
81	台風	台風	1728	享保13	9.1-2	10	3,4											田畑水損	大水	鎌水部等共有文書(八王子布史 附編)	
81	大風雨	台風	1728	享保13	8.29-9.5	9,10	29,3	隅田川			荒川							軒端まで浸水	29日夜より9月2,3日大風雨、江戸大水	武江年表(崎玉)	
81	台風	台風	1728	享保13	8.29-9.3	10	5	見沼用水										満水、水大難		浦和市長(崎玉)	
81	暴風雨	台風	1728	享保13	9.2	10	2											軒まで浸水。死者100名越える	日下部No.301		
81	暴風雨	台風	1728	享保13	9.2	10	2	利根川、那珂川										100年来の洪水	日下部No.301		
			1728	享保13	7.8,9	7~11		多摩川			多摩川	河川溢水	河川溢水	中、下	大田区		北香場、下丸子、下丸子村	度々の満水で田畑作毛は及ばず、白粉、投函手、海外、浸水のため、馬飼料を奪って拜禮を願う	度々の満水	区史、平川家文書2, No.18, 19, 20, p.795, 796	
	風雨	風雨	1728	享保13				多摩川			多摩川	大水	出水ほか	下	大田区		蓮窪村	西三國雨大水で年貢米納期延期	大水	大田区史、国史、藤王寺文書、No.5, p.279	
			1728	享保13				多摩川			多摩川	河川溢水	河川溢水	中	大田区		下丸子村	水腐泥かぶり		区史、平川家文書3, No.117, p.104, 8.9月付け	
			1728	享保13				荒川			荒川							駒西領村々大水	駒田家文書(崎玉)		

No.	天候	水害原因	発生(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(東)	他の発生水体(東海)	水系	直接原因	洪水型	発災地形地域	現行政区	左岸/右岸	被災地域	被災状況	摘要	文献	候
82			1729	享保14	7.2	7	27	浅川			多摩川	大水	出水ほか		八王子				大水出	石川日記	天明3年3月廿五日己巳親師の筋にて廿八日壬申寒氣はけしく、此く夜霜つよく降て、森父のあたりは森の葉皆枯れたりとかや
83		大雨	1729	享保14	7.25	8	19	浅川	多摩川		多摩川	大水	出水ほか		八王子				大水出	石川日記	
83		大雨	1729	享保14	7.29	8	23	浅川	多摩川		多摩川	大水	出水ほか		八王子				大水出	石川日記	
83	大雨	大雨	1729	享保14	7.22-27	8	16-21	多摩川			多摩川	満水	出水ほか						満水	谷合氏見聞録 p.39	
84			1730	享保15	6.23	8	6	浅川		大井川(6月)	多摩川	大水	出水ほか		八王子				大水出	石川日記	
85		台風	1730	享保15	8.29	10	10	浅川	多摩川、隅田川		多摩川				八王子				川原丁橋落ち雨	石川日記	
85		台風	1730	享保15	8.29	10	10	隅田川	多摩川、浅川		荒川	風	風雪						深川、本所、築地	東急(1977)	
85	大風雨	台風	1730	享保15	8.29	10	10												深川、本所、築地	東京市史稿変災編p.205(武江年表)	
85	大風雨	台風	1730	享保15	8.30	10	11												深川、本所、築地	東京市史稿変災編p.201	
85	大風	台風	1730	享保15	8.29-30	10	10,11	多摩川	浅川、隅田川		多摩川	溢水	河川溢水		大田区	L			床上溢水	谷合氏見聞録 巻4	
85	大雨	台風	1730	享保15	8.30	10	11	多摩川	浅川、隅田川		多摩川	洪水、満水	河川洪水		青梅	L			流石3町8畝29歩、流石5町8畝29歩	谷合氏見聞録 p.40	
85	暴風雨	台風	1730	享保15	8.29,30	10	10,11				馬入川、酒匂川								床上溢水、深川十三間堂吹き飛ばされる。4日まで引かず	日下部No.301	
86	大雨	大雨	1730	享保15	9.19	10	30	多摩川			多摩川	満水	出水ほか		青梅				満水	谷合氏見聞録 p.40	
	大夕立	大雨	1731	享保16	6.1,2	7	4,5	酒匂川			相模川	満水							洪水	東京市史稿変災編p.206	
87	大雨	大雨	1731	享保16	6.29	8	1	多摩川			多摩川	満水	出水ほか		青梅				満水	谷合氏見聞録 p.41	
87	長雨	霖雨	1731	享保16	6	7~8	4~2			大井川(6月)									洪水	日下部No.304	
88	大雨	大雨	1731	享保16	8.12	9	12	多摩川		大井川(8月)	多摩川	満水	出水ほか		大田	L			満水	区史平川家文 巻5	
88	大雨	大雨	1731	享保16	8.11	9	11	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水		青梅				8/3・8/11雨	谷合氏見聞録 p.41	
88,89	大風雨	暴風雨	1731	享保16	8.12,27	9	12,29	多摩川			多摩川	風水	河川洪水		大田	L			風損水損	区史平川家文 巻3, No.18, p.1048	
89		暴風雨	1731	享保16	8.27	9	29	多摩川			多摩川	満水	出水ほか		大田	L			満水	区史平川家文 巻5	
89	大雨、風	暴風雨	1731	享保16	8.27	9	29	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水		青梅				洪水、満水、諸作吹散或は押流、道橋如山大崩	谷合氏見聞録 p.41	

No	天候	発生 水害原因	発生 年(西 暦)	年号	旧暦月 日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生 水体(東 東)	他の発生 水体(東 東)	水系	直接 原因	洪水型	発生地 形地域	現行政区	右岸/ 左岸	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
89	風雨	風雨	1731	享保16	8.27	9	29	大川			荒川			上	福生	L	福生村、 熊川村		出水 年貢減免	東京市史稿変 災編p.206 田村半十郎家 文書(福生市 史)	
89	暴風雨	暴風雨	1731	享保16	秋	秋	多摩川	多摩川			多摩川	川欠	河川洪 水	下	大田	L	上平 間村	上平間村から新川 通り見取木分川 欠、川筋下丸子村 から切草へ入	区史平川家文 書5, No.16, p.6		
90			1732	享保17	6.16	8	16	浅川			多摩川	出水	水ほ か	上	八王子	L	二俣尾村	嵩キシメリにて諸 作毛吉	石川日記	潤国大干ば つて飢饉	
90			1732	享保17	6	7~8	多摩川	多摩川	大井川 (6.6~8)		多摩川	満水	水ほ か	上山	青梅	L		畷29歩		谷合氏見聞録 p.43	
91			1733	享保18			多摩川	多摩川	大井川 (5.19)		多摩川	溢水	下	大田	L				大森区史(大田 区)		
91			1733	享保18			多摩川	多摩川			多摩川	洪水	中	大田	L	下丸子村	遷入新田畑の内川 欠押短石砂入り		区史平川家文 書5, No.4, p.1529		
91			1733	享保18			多摩川	多摩川			多摩川	洪水	中	川崎	R	小杉村	大洪水		小杉村(小塚 下)		
91	大雨大 風	暴風雨	1733	享保18	8.19	9	26											土風吹きて御鷹敷 破損多	東京市史稿変 災編p.208		
92			1734	享保19	5.23	6	15	浅川	大井川 (7.19)		多摩川	大水	水ほ か		八王子			大水出	石川日記		
93			1734	享保19	6.16	8	6	浅川	大井川 (8.6)		多摩川	大水	水ほ か		八王子			大水出	石川日記		
93	大雨	大雨	1734	享保19	6.16	8	6											浅草川満水、高岡 橋渡る程の高水。 二合半ほど切れ田 畑屋敷勢しく流れ 高岡橋流失	谷合氏見聞録 p.46		
93			1734	享保19	6.17	8	7												日下部No.310		
93	大雨	大雨	1734	享保19	6.17	8	7											高岡坂橋57間程流 失	東京市史稿変 災編p.209		
94	大雨	大雨	1734	享保19	8.7	9	4	浅川	多摩川		多摩川	川欠	河川洪 水		八王子		川欠け、喜右衛門 邸欠け大塚吉		石川日記		
94	大雨	大雨	1734	享保19	8.7	9	4	多摩川	浅川		多摩川		上		昭島	L	高岡橋損傷		東急(1977)		
94	大雨	大雨	1734	享保19	8.8-15	9	5~7	多摩川	浅川		多摩川	溢水	上		昭島	L	田畑川欠	満水	玉川満水荒年 数寄書(昭島市 史附編)		
94	大雨	大雨	1734	享保19	8.7	9	4	多摩川	浅川		多摩川	洪水	河川洪 水	上山			田、畑、道、橋決 壊、作物被害、山 崩れ多し	洪水満水	谷合氏見聞録 p.46		
94	大雨	大雨	1734	享保19	8.15	9	12	多摩川	浅川		多摩川	洪水	河川洪 水	上山			洪水満水	谷合氏見聞録 p.46			
94	大雨	大雨	1734	享保19			多摩川	多摩川			多摩川	洪水	上		調布	L	田畑芝地砂入り、 芝地川欠引		潤布市史中巻 p.46		
94	大雨	大雨	1734	享保19			多摩川	多摩川			多摩川	洪水	上		調布	L	下石原村	満水	公私世田谷年 代記(乾)p.93		
94	大雨	大雨	1734	享保19	8	8~9	多摩川	多摩川			多摩川	満水	上		世田谷区	L	宇奈根村	出水	東京市史稿変 災編p.209		
95			1735	享保20	3.1.2	3	24,25	多摩川	多摩川		多摩川	出水	水ほ か		青梅	L	二俣尾村	出水	谷合氏見聞録 p.47		
96			1735	享保20	6	7~8	多摩川	多摩川			多摩川	出水	上		青梅	L	二俣尾村	満水	三田(多摩川 誌)		

No.	天候	水害原因	発生年(西暦)	発生年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(東)	他の発生水体(西)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地域	現行政区	左岸/堤岸	右岸/堤岸	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
96			1735	享保20	6	7~8		多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	狛江	L			窓戸より多摩川根縁え綺切曾請願	出水	狛江市史	
97	大雨	大雨	1735	享保20	3.22~23	4	14,15	多摩川			多摩川	満水	出水ほか	上山	青梅	L		二俣尾村	満水		谷合氏見聞録 p.47	
96	大雨	大雨	1735	享保20	6.19~21	8	7	多摩川			多摩川	満水	出水ほか	上山	青梅	L		二俣尾村	満水		谷合氏見聞録 p.47	
96	大雨	大雨	1735	享保20	6.21,28	9,11,12	9,11,12	多摩川			多摩川	溢水	河川溢水	中	大田	L		下丸子村	水損、水腐	出水	区史平川家文書4, No.8, p.241, No.9, p.244	
96	大雨	大雨	1735	享保20	夏	夏		多摩川			多摩川	溢水	河川溢水	上	昭島	L		大神村	田毛畝六歩	満水	玉川満水荒年数数書(昭島市史附編)	
98	大雨	大雨	1736	享保21	8.12	9	16	浅川			多摩川	大水	出水ほか		八王子			大水出	満水		谷合氏見聞録 p.50	
98	大雨	大雨	1736	享保21	8.12	9	16	多摩川			多摩川	風	風害	上山	青梅			梨落下	満水		谷合氏見聞録 p.50	
98	暴風雨	暴風雨	1736	享保21	8.17	9	21	利根川			利根川							川越、駒西、土浦	大水	近畿地方も暴風雨	日下部No.311	
98	烈風暴	暴風雨	1736	享保21	8.17	9	21												風災		東京市史編変災編p.212	
99	大雨	大雨	1737	元文2	4.9	5	8	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	中	川崎	R		白鹿神社流失	満水	慶長15年創建、元文元年再建	神奈川県神社誌	
99	大雨	大雨	1737	元文2	4.9	5	8	多摩川	浅川	多摩川	多摩川	満水	出水ほか	上山	青梅			橋共音落	満水		谷合氏見聞録 p.51	
99	大雨	大雨	1737	元文2	4.25	5	24	浅川			多摩川	大水	河川洪水		八王子			馬場下、早稲田辺の民家崩落			石川日記	
100	大雨	大雨	1737	元文2	閏11.26	1	16	浅川			多摩川	出水	出水ほか		八王子			沙水出			石川日記	
101	大あき	大雨	1738	元文3	7.22	9	5	浅川			多摩川	出水	出水ほか		八王子			水出			石川日記	
101	雨	大雨	1738	元文3	7.26~30	9	9~13	多摩川			多摩川	大水	出水ほか	上山	青梅	L		二俣尾村	大水		谷合氏見聞録 p.53	
101	疾風暴	雨	1738	元文3	7.23	9	6											金地院内損所有り	風災		東京市史編変災編p.214	
102	雨	雨	1738	元文3	8.1	9	14	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上山	青梅			大船(昔の渡船場)	遭船7人流死		谷合氏見聞録 p.53	
103			1738	元文3	8.13	9	26	浅川			多摩川	大水	出水ほか		八王子			大水出			石川日記	
104			1739	元文4	4.19	5	26	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上、中	狛江、世田谷	L		和泉村、下野毛村	六郷舟水取入口洗掃押し切れ、下野毛村御所崩潰網、杭不流失	出水	大田区史年表 p.298	
105	大雨	大雨	1739	元文4	6.18	7	23	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上	狛江	L		和泉村	六郷舟水取入口洗掃押し切れ		大田区史年表 p.298	
106	大雨	大雨	1739	元文4	7.14	8	18	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上	昭島	L		大神村	満水		玉川満水荒年数数書(昭島市史附編)	
106	大雨	大雨	1739	元文4	7.14	8	18	多摩川			多摩川		出水ほか			L		満水		谷合氏見聞録 p.54		
107	大雨	大雨	1739	元文4	8.21	9	23	浅川			多摩川	大水	出水ほか		八王子			大水出			石川日記	

№	天候	水害原因	発生年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(東)	他の発生水体(東)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地域	現行政区	左岸・右岸	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
108	大雨	暴風雨	元文4	9.1	10	3	多摩川			多摩川	風	風雪	上山	青梅	L	二俣尾村	梨子畑雪	満水	谷合氏見聞録 p.54	
109	大雨	暴風雨	元文5	7.12	8	4	多摩川	大井川(月日不明)		多摩川	風	風雪	上山	青梅	L	二俣尾村	樹木・櫛雪・林・その他被害	満水	谷合氏見聞録 p.56	
109	大雨	暴風雨	元文5	閏7.22	9	12	多摩川	大井川(7.21)		多摩川	風	風雪	上山	青梅	L	二俣尾村	水出	満水	谷合氏見聞録 p.57	
110	大雨	大雨	寛保元	7.23	8	2	多摩川			多摩川			中	大田区	L	下丸子村	6分とおりの狼毛	満水	区史平川家文書4, No.10, p.244, No.11, p.251	
110	大雨	大雨	寛保元	7.23	8	2	多摩川			多摩川	満水	出水ほ	上山	青梅	L		満水	満水	谷合氏見聞録 p.59	
111			寛保元	9.4	10	13	多摩川			多摩川	壊堤	河川洪水	上山	青梅	L		村々瀧切神流点感流失	満水	谷合氏見聞録 p.59	
112			寛保元	11.19	12	26	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水					27年前正徳5年12月20日以来の冬の洪水	満水	谷合氏見聞録 p.59	
113			寛保元	12.22-24	12	29~31	多摩川			多摩川	満水	出水ほ					満水	満水	谷合氏見聞録 p.59	
114	雨天	雨	寛保2	6.14	7	13	浅川	大井川(月日不明)		多摩川				八王子					石川日記	
114	雨	雨	寛保2	6.14, 8.27	7	13, 17, 28	多摩川	大井川(7.21)		多摩川	満水	出水ほ	上山	青梅	L	二俣尾村	満水		谷合氏見聞録 p.60	
115	大雨	台風	寛保2	8.1	8	30	浅川	多摩川、利根川、隣田川		多摩川				八王子			小仏村家3軒潰れ4人死		石川日記	
115	大雨	台風	寛保2	8.1	8	30	多摩川	利根川、隣田川		多摩川				大田、川崎	L/R	下丸子、安方村、右岸小土呂、砂子	約1.5m床上過水、安方村橋流失	利根川、荒川など、利根各地の洪水、近世龍穴の洪水	区史平川家文書5、東海寺文書No.12, p.60	
115	大雨	台風	寛保2	8.1	8	30	多摩川	利根川、隣田川		多摩川	溢水	河川溢水	上	昭島	L	田中、大神村	昭和用水堰埋まり、岩内泥濘、水田に石砂	満水	玉川落水菅生史(昭島市史附編)	
115	大雨	台風	寛保2	8.1	8	30	多摩川	利根川、隣田川		多摩川		河川洪水	上	川崎	R	香村	満水。百村川押開き、村中一面溢水、床下2尺、床4尺。百村川堤・小浦下押切り、砂入る。流失家屋4軒、農家4軒、流死1人、女馬1疋。	川崎市史資料編2近世No.122 佐俣家御用留		
115	大雨	台風	寛保2	8.1	8	30	多摩川	利根川、隣田川		多摩川	壊堤	河川洪水		川崎	R	下平間村	田畑小石砂等押掛。種物・夫直流し一切なくなる。	川崎市史資料編2近世No.219 旧成川家文書		



No.	天候	水害原因	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生日	発生水体	他の発生水体(東)	他の発生水体(東海)	水系	直接原因	洪水型	発生地花地域	現行政区	左岸/右岸	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
115	大風雨	台風	1742	寛保2	8.1	8	30	滝本川				多摩川	溢水	河川洪水	上山	青梅	L	御蔵村滝本	北島家被重、多摩川辺全戸閉塞、御蔵村山崩れ、民家倒壊、屋敷潰れ、11人死、入浴死	洪水、丸岩の上を越す	谷合氏見聞録 p.80	
115	大風雨	台風	1742	寛保2	8.1	8	30	利根川、横田川	多摩川			利根川、荒川	破堤、洪水、高潮	河川洪水、高潮				寺島小堤、念野千堤、住持堤、北河原村利根川破堤	溺死4,000人(下谷、浅草、本所)2,000人(葛西)河国様、新大橋、水代橋破損	浸水深3~7尺(本所)1丈5尺(幸島)5~7尺(鶴戸)1丈3尺(上平井)浸水10日余	寛急(1977)、久保(1992)、東京市史総覧 災編2p.216	
116	大雨	台風	1742	寛保2	8.8	9	6	浅川				多摩川	大水	出水ほか		八王子			大水		石川日記	
115		台風	1742	寛保2	8	8~9	30~28	多摩川				多摩川	洪水	河川洪水	下	大田区	L	大郷村々々	原飼料の播作物等まで流失	大満水	区史平川家文 巻2, No.31, p.809	
115		台風	1742	寛保2	8	8~9	30~28	多摩川				多摩川	破堤	河川洪水	中	大田	L	下丸子高台3尺、馬路2間		満水	区史平川家文 巻5, No.21, p.8	
115		台風	1742	寛保2	8	8~9	30~28	多摩川				多摩川	破堤	河川洪水	下	川崎	R	川崎堤	水押しで家屋荒れ、諸通舟など押流される。六郷用水取入口破滅	出水	川崎市史(多摩川誌)	
115	暴風雨	台風	1742	寛保2	8	8~9	30~28	多摩川	利根川			多摩川	洪水	河川洪水	上	柏江	L	和泉村、猪方村、岩戸村			川崎市史	
115		台風	1742	寛保2	8	8~9	30~28	多摩川	荒川、利根川			多摩川	破堤	河川洪水				各所で堤防決壊、川通、川邊、20里の閑修急改修百數十ヶ所			三田(多摩川誌)	
115		台風	1742	寛保2	8	8~9	30~28	多摩川				多摩川	流路移動	河川洪水	上	府中	L	流路移動で蓮光村下河原が北岸となす			府中市歴史年表	
115	大風雨	台風	1742	寛保2	秋							荒川	破堤	河川洪水				御方横毛			鎌倉部共有文書(八王子市史 附編)	
115	大雨大風	台風	1742	寛保2	7.27-8.2	8	26~31	荒川	多摩川、利根川			荒川	破堤	河川洪水				大水	土蔵4.5尺押破られる	大水水、土蔵4.5尺押破られる	香海寺門当寺年代記(埼玉)	

No	天候	水害原因	発生年(西暦)	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(関係)	他の発生水体(関係)	水系	直接原因	洪水型	発生地	現行政区	左岸/右岸	堤・防壁・遊歩	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
115	台風	台風	1742	1742	寛保2	7.27-8.2	8	26~31	利根川	多摩川、荒川	多摩川、荒川	利根川	破壊	河川洪水						中森村新神坂、阿良川堤上水	2日	松村家日記(晴玉)	
115	台風	台風	1742	1742	寛保2	7.27-8.2	8	26~31	荒川	多摩川、利根川	多摩川、利根川	荒川	破壊	河川洪水					川越領	流失79、潰家274軒、死者24人	大水記(大田区)		
115	台風	台風	1742	1742	寛保2	7.27-8.2	8	26~31	荒川	多摩川、利根川	多摩川、利根川	荒川							大滝村	罹切所96ヶ所	松本家日記(晴玉)		
115	台風	台風	1742	1742	寛保2	7.27-8.2	8	26~31	荒川	多摩川、利根川	多摩川、利根川	荒川								3日濁水、瓦管根境より是越水	世田谷区史上		
115	台風	台風	1742	1742	寛保2				多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上、中	世田谷	L		下野毛、瀬田宇奈根、大蔵、磯田村	御飯米	8月の洪水について		
116																							
115	台風	台風	1742	1742	寛保2				多摩川			多摩川	破壊	河川洪水	中、下	大田	L		下丸子、矢口村	長さ48間高5尺の橋本多摩川築切の橋、手摺破損、長さ247間高さ4尺の堤小々破損、重水柱埋板長さ2間半流失	大水	区史平川家文書5、No.3、p.69	
115	台風	台風	1742	1742	寛保2				多摩川			多摩川			上	柏江市	L			米137畝川辺9万村御飯村、宇奈根村米86、大蔵村米66、磯田村米78畝	満水	公私世田谷年代記、p.97	
115	台風	台風	1742	1742	寛保2				多摩川			多摩川	満水	河川洪水						満水	駒栗大水、江戸両国橋落ちる		
115	台風	台風	1742	1742	寛保2				多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	下	大田	L			洪水			
116	大雨	大雨	1743	1743	寛保3	3.23	4	17	多摩川			多摩川	増水	出水ほか	上山	青梅				水増			
118	大雨	大雨	1743	1743	寛保3	7.6-7	8	25、26	多摩川			多摩川	満水	出水ほか	上山	青梅				満水			
119	大雨	大雨	1743	1743	寛保3	7.29	9	17															
119	大雨	大雨	1743	1743	寛保3	8.1	9	18	浅川	多摩川	多摩川	多摩川	大水	出水ほか									
119	大雨	大雨	1743	1743	寛保3	8.1	9	18	多摩川	浅川	浅川	多摩川	洪水	河川洪水	下	大田	L		下丸子、矢口、菰村	田畑水神	出水	区史平川家文書4、No.12、p.199	
119	大雨	大雨	1743	1743	寛保3				多摩川			多摩川	出水	出水ほか	下	大田	L						
119	大雨	大雨	1743	1743	寛保3				多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	中	川崎	R		小杉村	大洪水	出水	区史平川家文書4、No.12、p.199	
119	大雨	大雨	1743	1743	寛保3				多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上	青梅			二俣尾村	満水	出水	石川日記	
120	大雨	大雨	1744	1744	寛保4	1.14-15	2	8、9	多摩川			多摩川	洪水	出水ほか	上山	青梅				水出			
121	大雨	大雨	1744	1744	寛保4	4.19	5	30	浅川			多摩川	出水	出水ほか		八王子				大水出			
122	大雨	大雨	1744	1744	寛保4	8.10	9	27	浅川			多摩川	大水	出水ほか		八王子				大水出			
123	大雨	大雨	1744	1744	寛保4	9.21	11	16	浅川			多摩川	大水	出水ほか		八王子				大水出			

No.	天候	発生年(西暦)	発生年(西暦)	号	日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(河川)	他の発生水体(湖沼)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地域	現行政区	左岸/堤防・遊流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候	
124	大雨	1745	1745	延享2	4.28	5	29	浅川			多摩川	出水	出水ほか		八王子			水出		石川日記		
125		1745	1745	延享2	5.12	6	11	浅川			多摩川	大水	出水ほか		八王子			大水		石川日記		
126	雷あま雨大風(雷)	1745	1745	延享2	9.13	10	8	浅川			多摩川	出水	出水ほか		八王子			水出		石川日記		
127	暴風雨	1745	1745	延享2	9.18	10	13	浅川	多摩川	多摩川	多摩川	大水	出水ほか		八王子			大水		石川日記		
126	大風雨	1745	1745	延享2	9.13.1	10	8,13	多摩川	浅川		多摩川	大水	出水ほか	下	大田	L		光福院の堀風破れる		東寺寺文書, No.16, p.71		
127	大風	1745	1745	延享2	9.14	10	10					水出						塙屋を損ず	風災	東京市安積委災綱p.317		
128	大雨	1746	1746	延享3	4.11	5	30	浅川			多摩川	出水	出水ほか		八王子			大水		石川日記		
129		1746	1746	延享3	7.8	8	24	浅川			多摩川	出水	出水ほか		八王子			水出		石川日記		
130		1746	1746	延享3	8.24	10	8	浅川			多摩川	出水	出水ほか		八王子			水出		石川日記		
130	風雨	1746	1746	延享3	8.24	10	8								八王子			家つふれ、御屏入り		石川日記	江戸冷夏	
131	大風雨	1747	1747	延享4	8.19	9	23	浅川	多摩川	多摩川	多摩川	壊堤	河川洪水	中	大田区	L	下丸子		荒れ地2反置2歩	満水	東京市安積委災綱p.319	
131	大風雨	1747	1747	延享4	8.19	9	23	多摩川	浅川		多摩川		河川洪水	中	大田区	L	下丸子		水除運押切、田畑		東京市安積委災綱p.319	
131	大風雨	1747	1747	延享4	8.19	9	23	多摩川	浅川		多摩川		河川洪水	中	大田区	L	下丸子		大風で作物に被害		東京市安積委災綱p.319	
131	暴風雨	1747	1747	延享4	8.19	9	23										藤父地方		讀破、津津、北陸地方も暴風雨		東京市安積委災綱p.320	
131	大風雨(夜)	1747	1747	延享4	8.19	9	23	多摩川			多摩川	壊堤	河川洪水	中	大田	L	下丸子		荒れる		東京市安積委災綱p.319	
132	大雨	1747	1747	延享4	8.27	10	1	浅川			多摩川	大水	出水ほか		八王子			大水		石川日記		
133	晴天	1748	1748	寛延元	9.25	10	17	浅川			多摩川	出水	出水ほか		八王子			水出		石川日記		
133	風雨(夜)	1748	1748	寛延元	9.24	10	16													東京市安積委災綱p.320		
133		1748	1748	寛延元				多摩川			多摩川			中	大田区	L	下丸子		「当水損引」田畑計3反1歩		東京市安積委災綱p.320	
134	大雨	1749	1749	寛延2	5.23	7	7	浅川			多摩川	出水	出水ほか		八王子			水出		石川日記		
135	大雨	1749	1749	寛延2	8.13	9	24	多摩川	江戸川、神田川		多摩川	満水	出水ほか	下	大田	L			満水		大田区安積委災綱No.12, p.282	
135	大風雨	1749	1749	寛延2	8.13	9	24	多摩川	江戸川、神田川		多摩川	洪水	河川洪水		大田	L			洪水		三田(多摩川誌)	

No	天候	水害原因	発生年(西暦)	生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(東)	他の発生水体(東)	水系	直接原因	洪水型	発生地域	現行政区	左岸・右岸	堤防・遊歩部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候	
135	大風雨	台風	1749	寛延2	8.13	9	24	江戸川、神田川	多摩川		河川洪水	磯堤		関口堤	牛込、小石川、浅谷、神田					稲石の濁水、家原、橋渡流失、羽野、橋渡多難、後継の出水地と目される本所、翠川は殆ど濁水を見ず	大風雨。夏季以降、8月1日及、雨多く、秋深く、なしく、この日、東北風激烈、大雨に加わる	東京市史稿要 災編p.321		
135		台風	1749	寛延2	8.14	9	23				多摩川									江戸川多く出水、人多死	大延暦寺過去帳(八王子市史附編)			
135		台風	1749	寛延2	8			多摩川				多摩川								大洪水、江戸橋流失	青箱市の自然p350			
135		台風	1749	寛延2	8			利根川				利根川								千住、利根、根川堤				
135		台風	1749	寛延2	6			多摩川				多摩川								狹狭引町6反1畝125歩、1町7反8畝10歩				
135		台風	1749	寛延2?	6			多摩川				多摩川								出水、堤上水越え				
135	大風雨	台風	1749	寛延2				多摩川				多摩川								満水				
136			1750	寛延3?				多摩川				多摩川								出水				
137	大雨	大雨	1751	寛延4(宝暦元年)	3.11	4	6	浅川				多摩川								満水				
137	大雨	大雨	1751	寛延4(宝暦元年)	3	4		多摩川				多摩川								満水				
138	大雨	大雨	1751	寛延4(宝暦元年)	閏6.18	8	9	多摩川	浅川			多摩川								水出				
138	大あき雨	大雨	1751	宝暦元	閏6.18	8	9	多摩川	多摩川			多摩川								水出				
138	大雨	大雨	1751	宝暦元	閏6.19	8	10	浅川	多摩川			多摩川								水出				
138	大雨	大雨	1751	寛延4(宝暦元年)	閏6.20	8	11	浅川	多摩川			多摩川								満水				
139	大雷	雷雨ほか	1751	寛延4(宝暦元年)	7.3	8	22	浅川	多摩川			多摩川								満水				
140	大雨	大雨	1751	寛延4(宝暦元年)	8.2	9	22	浅川	多摩川			多摩川								満水				

No.	天候	水害発生年(西暦)	発生年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(河渠)	他の発生水体(湖池)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地蔵	現行政区	左岸/右岸	左岸/右岸/溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
141		1751	宝暦元?	6, 8			多摩川			多摩川	出水	出水ほ か	中、下	大田	L	多摩川 通水除 堤垸	矢口、下 丸子村	出水	出水	区史平川家文 書5, No.26, p.9	
142		1752	宝暦2	5	6~7		多摩川			多摩川	川欠	下		大田	L		八幡塚村	洪水	洪水	区史平川家文 書(大田年)	
145	大乱雨 天	暴風雨	1752	宝暦2	6, 24	3	浅川			多摩川	洪水	上	世田ヶ谷	大田	L		瀬田村	出水	出水	区史平川家文 書(大田年)	
146		1753	宝暦3	8, 4	9	1	多摩川			多摩川	洪水	中	大田区	大田	L		下丸子村	出水	出水	区史平川家文 書(大田年)	
147	雨	1753	宝暦3	8, 16	9	13	多摩川			多摩川	洪水	上	大田区	大田	L		下丸子村	出水	出水	区史平川家文 書(大田年)	
147	雨	1753	宝暦3	8, 18	9	15	浅川			多摩川	洪水	中	大田区	大田	L		下丸子村	出水	出水	区史平川家文 書(大田年)	
148		1753	宝暦3	9, 24	10	20	多摩川			多摩川	洪水	中	大田区	大田	L		下丸子村	出水	出水	区史平川家文 書(大田年)	
149	大雨	1754	宝暦4	3, 6	4	27	浅川			多摩川	洪水	中	大田区	大田	L		下丸子村	出水	出水	区史平川家文 書(大田年)	
150	大雨	1754	宝暦4	6, 10	7	29	浅川			多摩川	洪水	中	大田区	大田	L		下丸子村	出水	出水	区史平川家文 書(大田年)	
151	大雨	1754	宝暦4	7, 9	8	26	浅川			多摩川	洪水	中	大田区	大田	L		下丸子村	出水	出水	区史平川家文 書(大田年)	
152	大風雨	暴風雨	1754	宝暦4	7, 23	9	浅川			多摩川	洪水	中	大田区	大田	L		下丸子村	出水	出水	区史平川家文 書(大田年)	
152	大風雨	暴風雨	1754	宝暦4	7, 22	9	多摩川			多摩川	洪水	中	大田区	大田	L		下丸子村	出水	出水	区史平川家文 書(大田年)	
152		暴風雨	1754	宝暦4	秋		多摩川			多摩川	洪水	中	大田区	大田	L		下丸子村	出水	出水	区史平川家文 書(大田年)	
152		暴風雨	1754	宝暦4	秋		多摩川			多摩川	洪水	中	大田区	大田	L		下丸子村	出水	出水	区史平川家文 書(大田年)	
153	大雨	1755	宝暦5	5	6~7		多摩川			多摩川	洪水	中	大田区	大田	L		下丸子村	出水	出水	区史平川家文 書(大田年)	
153	大雨	1755	宝暦5	5, 13	6	22	多摩川			多摩川	洪水	中	大田区	大田	L		下丸子村	出水	出水	区史平川家文 書(大田年)	
154	台風	1757	宝暦7				多摩川	大井川 (4.27~ 5.7)、富士 川(5.10)		多摩川	洪水	中	大田区	大田	L		下丸子村	出水	出水	区史平川家文 書(大田年)	
154	大雨	1757	宝暦7	5, 1~7	6	17~23	多摩川	緑瀬川、 利根川、 元荒川、 荒川		多摩川	洪水	中	大田区	大田	L		下丸子村	出水	出水	区史平川家文 書(大田年)	

No	天候	災害原因	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(東)	他の発生水体(東)	水系	直接原因	洪水型	発生地	現行政区	左岸・右岸	破壊・溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候	
154	大雨	台風	1757	宝曆7	5	6~7		多摩川			多摩川	溢水	河川溢水	中	大田	L		下丸子村	出水で田畑洪水入り、大豆不碎粟糠等まで透水で水腫れ来る	出水、打ち続く大雨	区史平川家文書2, No. 15, p. 698		
154	大雨	台風	1757	宝曆7	5.6	6	22	綾瀬川	多摩川、綾瀬川、元荒川、元荒川		荒川	破堤						蒲生本郷	瓦葺掛樋切水流れ来る	4月よりの長雨、1日~6日大雨	西方村日記(埼玉)		
154	台風	台風	1757	宝曆7	5.6	6	22	利根川	多摩川、利根川、元荒川、元荒川		利根川	破堤	河川洪水				八捕の堤破堤	幸手領大水	乗漕船1丈9尺の水丈	松村家日記(埼玉)			
154	台風	台風	1757	宝曆7	5.6	6	22	元荒川	多摩川、綾瀬川、荒川		荒川	破堤	河川洪水				備前堤押開く				加藤家文書(埼玉)		
154	台風	台風	1757	宝曆7	5.6	6	22	荒川	多摩川、利根川、元荒川、元荒川		荒川								この年荒川通りの比企郡中曾根・上砂・ノツ木・古名・地頭方村で破堤5ヶ所	荒川上流改修60年史(埼玉)			
155	大雨	大雨	1757	宝曆7	5.15	7	1	多摩川			多摩川	用水決壊	内水型	中	大田	L		沼部村	六郷用水通り決壊	出水	区史平川家文書(大田年)		
155	大雨	大雨	1757	宝曆7	5.15	7	1	多摩川	多摩川、利根川、元荒川		多摩川	溢水	河川溢水	中	世田谷	L		上野毛村	新田冠水	翌8年も水引かず	世田谷区史上巻p. 909		
			1757	宝曆7				多摩川			多摩川	満水	出水ほか	中	世田谷	L			満水	陶楽大水	公私世田谷年記代記, p. 101		
154	長雨	霖雨	1757	宝曆7	4.18-5.6	6	5~22											本所、千住	浸水		日下部No. 324		
154	長雨	霖雨	1757	宝曆7	4.18-5.6	6	5~22	利根川			利根川							古河、閩	浸水		日下部No. 324		
156			1758	宝曆8				多摩川			多摩川	流路移動	河川洪水	下	川崎市、大田区	L/R		上平間村、矢口村	上平間村下石ヶ所、矢口村下石河原1ヶ所河筋当り、少々水し、この2ヶ所本河となり、川筋至極真直くなる	流路移動	区史平川家文書5, No. 27, p. 10		
157	大雨	大雨	1758	宝曆8	6.3	7	7	浅川			多摩川	大水	出水ほか		八王子				大水		石川日記		
158	大雨	大雨	1758	宝曆8	6.14	7	18	浅川			多摩川	出水	出水ほか		八王子				水出		石川日記		
159	大雨	大雨	1758	宝曆8	7.24	8	27	浅川			多摩川	大洪水	河川洪水		八王子				大洪水		石川日記		
160	大雨	大雨	1758	宝曆8	8.12	9	13	浅川			多摩川	大水	出水ほか		八王子				大水		石川日記		
161	大雨	大雨	1759	宝曆9	6.6	6	30	浅川			多摩川	出水	出水ほか		八王子				水出		石川日記		
161	大雨	大雨	1759	宝曆9	6.7	7	1	浅川			多摩川	大水	出水ほか		八王子				大水		石川日記		
162	あき前、南大風	台風	1759	宝曆9	7.9	8	1	浅川			多摩川	出水	出水ほか		八王子				水出		石川日記		
163			1760	宝曆10	5.16	6	28	浅川			多摩川	大水	出水ほか		八王子				大水		石川日記	江戸4~8月早感	
164			1760	宝曆10	5.22	7	4	浅川			多摩川	大水	出水ほか		八王子				大水		石川日記		

No.	天候	水害年(西暦)	発生年(西暦)	発生年月	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(東海)	水系	直接原因	洪水型	発生地・形地域	現行行政区	左岸/右岸	流域・遊部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
165		1760	宝暦10	9.1	10	9	浅川			多摩川	出水	出水ほか		八王子				水出		石川日記	
166		1761	宝暦11	6.24	7	25	浅川			多摩川	出水	出水ほか		八王子				水出		石川日記	
167		1761	宝暦11	6.29	7	30	浅川			多摩川	出水	出水ほか		八王子				水出		石川日記	
168	大雨	1761	宝暦11	9.7	10	4	浅川			多摩川	出水	出水ほか		八王子				水出		石川日記	
169	大雨	1762	宝暦12	閏4.3	5	26	浅川	多摩川、秋川		多摩川	出水	出水ほか		八王子				水出		石川日記	諸国5.6月暴
169	大雨	1762	宝暦12	閏4.4	5	27	秋川	浅川		多摩川	出水	出水ほか		八王子				多摩川、秋川出水 で松原村御林御村 木流木		世田谷区史料 叢書 1, No. 12, p. 260	
170	大雨	1762	宝暦12	5.29	7	20	浅川			多摩川	大水	出水ほか		八王子				大水出		石川日記	
171	大あざぎ 雷雨	1762	宝暦12	6.22	8	11	浅川			多摩川	大水	出水ほか		八王子				大水出		石川日記	
172	風雨、 南風	1762	宝暦12	8.9	9	26	浅川			多摩川	大水	出水ほか		八王子				大水出		石川日記	
173	雷雨ほか	1762	宝暦12	9.21	11	6	多摩川	浅川		多摩川	洪水	河川洪水	上	福生、秋 留野、八 王子	L/R			河原芝地軒35町歩 余流木	大洪水	「川原芝地川 次石入書上控 帳」(福生市 史)	
173	大雨ほか	1762	宝暦12	9.21	11	6	浅川	多摩川		多摩川	出水	出水ほか		八王子				水出		石川日記	
174	大雨	1763	宝暦13	2.1	3	15	浅川			多摩川	出水	出水ほか		八王子				水出		石川日記	
175	雷雨ほか	1763	宝暦13	7.2	8	10	浅川			多摩川	出水	出水ほか		八王子				水出		石川日記	
176	風雨、 南風	1763	宝暦13	9.3	10	9	浅川			多摩川	大水	出水ほか		八王子				大水出		石川日記	
176	暴風雨	1763	宝暦13	9.3-4	10	9, 10												大阪通いの船難 破、溺死1000名 も暴風雨	日下部No. 329		
177		1764	宝暦14	秋	秋		多摩川			多摩川	流路移動	河川洪水	上	府中	L			川原御曹目 備見麻(宇)(附 中市史上p741)	出水		
178	大雨	1765	明和2	4.16	6	4	浅川	多摩川		多摩川	大水	出水ほか		八王子				取入口より洗まで 大御用水埋没	洪水	区史平川家文 書(大田幸)	
178	大雨	1765	明和2	4.17	6	5	多摩川	浅川		多摩川	洪水	河川洪水	上	相江	L			山崎、信濃、尾張 も暴風雨	日下部No. 329		
178	暴風雨	1765	明和2	4.16	6	4						出水ほか		八王子				水出		石川日記	
179	大あざぎ 雷雨	1765	明和2	6.26	8	12	浅川			多摩川	出水	出水ほか		八王子							
179	雷雨(午時)	1765	明和2	6.26	8	12				多摩川	出水	出水ほか		八王子							
180	暴風雨	1765	明和2	8.2	9	12	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	下	大田	L			出水			
180	大風雨	1765	明和2	8.3	9	13	隅田川			荒川	高潮	高潮		深川				床上浸水			
		1766	明和3				多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	中	川崎	R			床上浸水			
		1766	明和3				多摩川			多摩川	洪水	河川洪水		小杉村				大洪水			

№	天候	水害原因	発生年(西暦)	発生年月	西暦月	西暦日	旧暦月日	年号	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(東)	他の発生水体(西)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地	現行行政区	左岸/右岸	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候	
181	大雨	大雨	1766	明和3	7	6.27	明和3	7	2	2	浅川	彌田川、利根川、入間川		多摩川		河川洪水		八王子			川除け破る		石川日記		
181	雨	雨	1766	明和3	7	6.29	明和3	7	4	4	隅田川	浅川、利根川、入間川	荒川								新大瀧、永代橋損傷	出水。6.25-27雨、27日最大、28日晴れ、29日雨	東京市史編委 災編p.380		
181			1766	明和3	7	6.27	明和3	7	2	2	利根川	隅田川、浅川、入間川	利根川								浸水		松村家日記(埼玉)		
181			1766	明和3	7	6.27	明和3	7	2	2	柳瀬川	浅川、隅田川、利根川、入間川	荒川								大水		吉田家文書(埼玉)		
182	大雨	大雨	1766	明和3	10	8.28	明和3	10	1	1	浅川		多摩川		出水	出水ほか		八王子				水出		石川日記	
	大雨	大雨	1766	明和3			明和3				多摩川	彌田川	多摩川		溢水	河川溢水	上、中	狛江、世田谷			被災		世田谷区史上巻p.910		
			1766	明和3			明和3				多摩川	彌田川	多摩川				上、中	狛江、世田谷			被災		三田(多摩川誌)		
182			1766	明和3			明和3				多摩川	彌田川	多摩川			出水ほか	上	狛江			出水		羽田(多摩川誌)		
182			1766	明和3			明和3				多摩川	彌田川	多摩川		出水	河川溢水		狛江			水押出		狛江市史		
	大雨	大雨	1766	明和3	8	7.20	明和3	8	25	25	江戸川		江戸川		出水						被害		公私世田谷年代記、p.104		
	雨	雨	1766	明和3	9	7.28	明和3	9	2	2			江戸川		出水								東京市史編委 災編p.387		
	長雨	霖雨	1766	明和3		6.-8.	明和3						洪水										東京市史編委 災編p.391		
	長雨	霖雨	1766	明和3		6.-8.	明和3						洪水										日下部No.332		
	暴風雨	暴風雨	1766	明和3			明和3																日下部No.332		
183			1767	明和4			夏秋				多摩川	大井川(7.12.12)	多摩川		出水	出水ほか	上	狛江			出水		狛江市史		
184			1767	明和4			夏秋				多摩川		多摩川		出水	出水ほか		八王子			水出		石川日記	関東5~8月 早稲、九州・四国・近畿・奥羽地方も。	
185	大雨	大雨	1770	明和8	3	3.3	明和8	3	29	29	浅川		多摩川		出水	出水ほか		八王子					石川日記	関東4~6月 早稲、諸国	
186	大雨	大雨	1770	明和7	10.9	10.9	明和7	10.9	25	25	浅川		多摩川		出水	出水ほか		八王子					石川日記	関東4~6月 早稲、諸国 12月暖冬	
187	大あき雨	大雨	1771	明和8	6.26	6.26	明和8	6.26	6	6	浅川		多摩川		出水	出水ほか		八王子					石川日記		
188	大雨	大雨	1771	明和8	7.6	7.6	明和8	7.6	16	16	浅川		多摩川		出水	出水ほか		八王子					石川日記		
189	大あき雨、已に北風	大雨	1771	明和8	7.22	7.22	明和8	7.22	9	9	浅川		多摩川		大水	出水ほか		八王子					石川日記		
188		大雨	1771	明和8	7	8~9	明和8	7	8~9	8~9	多摩川		多摩川		洪水	河川洪水	上	福生					福生市史		



No.	天候	水害原因	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(関東)	他の発生水体(東海)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地域	現行政区	左岸/右岸	破壊・溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
188		大雨	1771	明和8	7	8~9		多摩川			多摩川	洪水	河川洪水						五日市街道河原道可助、分流		秋川市史p.740	
189		暴風雨	1772	明和9(安永元年)	8.2	8	30	多摩川	権現堂川、柳瀬川		多摩川	壊堤	河川洪水	上	福生	L	下草花村堤流失	熊川村、下草花村	記録的天洪水。明和8年の分派一筋に於ける。この洪水以後、本流下草花村下を流れる。上流の林道物のため。		福生市史、安政4年「玉川御曹請御見聞書」石川日記(元八家文書(福生市史))	関東冷夏、8月江戸紅梅・萩・萩・李などの不晴
190	暴風雨	暴風雨	1772	明和9(安永元年)	8	8~9	多摩川	多摩川			多摩川	洪水、風	河川溢水、風雪	上	柏江	L	和泉村松下分堤		出水、百姓3軒風漬れ		柏江市史	
190	大風雨	暴風雨	1772	明和9(安永元年)	8.2	8	30	権現堂川	多摩川		利根川	壊堤	河川洪水						関東大風雨		旧埼玉県史(埼玉)	
190		暴風雨	1772	明和9(安永元年)	8.2	8	30	柳瀬川	多摩川		荒川							所沢地方	人家の壊れ多数、大風で大木倒れる		吉田家文書(埼玉)	
190	大風雨	暴風雨	1772	明和9(安永元年)	8.2	8	30	多摩川			荒川							大崎が永代橋に衝突、橋を壊く	出水		東京市史(葛西)編p.400	
191		暴風雨	1772	明和9(安永元年)	8.17	9	14	利根川			利根川								伊奈氏配下の関東の民衆4千軒吹漬れる		武江年表(埼玉)	
191	暴風雨	暴風雨	1772	明和9(安永元年)	8.17	9	14												出水。吹き飛ばされた民衆多数		日下部No.339	
192	風雨	暴風雨	1772	明和9(安永元年)	9.17	9	14												被害少なからず		東京市史(葛西)編p.400	
191	大風	風雨	1772	安永元	8	8~9	多摩川				多摩川	洪水	河川洪水	中	世田谷		世田谷領	百姓家(百軒茶漬)			公私私世田谷年表記(乾)p.104	
191'		大風	1772	安永元			多摩川				多摩川	洪水	河川洪水	下	大田	L					羽田、大森区史(大田区)	
191'			1772	安永元			多摩川				多摩川	洪水	河川洪水	中	川崎	R	小杉村		大洪水		小杉町(小塚)	
192	大雨	大雨	1773	安永2	5.2	6	21	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	中	大田区	L	下丸子村		平水より2.4m増水、杭木だし、欄干等流失、流作場5反5畝28歩川欠		区史(平川家文書4)	
192	大雨	大雨	1773	安永2	5.2	6	21	多摩川	浅川		多摩川	出水	出水ほか	中	大田区	L	下丸子村		8尺余り常水より増		区史(平川家文書5, No. 6, p. 71)	
192	大雨	大雨	1773	安永2	5.2	6	21	多摩川	多摩川		多摩川	洪水	河川洪水		八王子				洪水出		石川日記	
192	大雨	大雨	1773	安永2	5.2	6	21	多摩川			多摩川	出水	出水ほか		八王子						東京市史(葛西)編p.411	
193	雨	雨	1773	安永2	5.23	7	12	浅川			多摩川	出水	出水ほか		八王子				出水		石川日記	
194	雷雨、雷雨(夜か)	雷雨(夜か)	1773	安永2	6.19	8	7	浅川			多摩川	大水	出水ほか		八王子				大水出		石川日記	
192~194			1773	安永2	5.6中	6~8	多摩川				多摩川	洪水	河川洪水	中	大田区	L	下丸子村		流作場へ強く水川欠		区史(平川家文書3, No. 36, p. 1061)	

No.	天候	水害原因	発生 年(西 暦)	年号	旧暦日	西暦月	西暦日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生 水体(國 東)	他の発生 水体(東 海)	水系	直接 原因	洪水型	発生地 形地域	行政区	左岸/ 右岸	河堤/ 湛流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候	
194		雷雨ほか	1773	安永2	夏	夏				多摩川			多摩川	出水	河川洪水	中	大田区	L		下丸子村	上平間村新川下から多摩川は筋になり、畑へ水強く当り、川穴	夏中亘々出水	区史平川家文書 5, No.33, p.13		
195			1774	安永3	4.9	5	19			多摩川			多摩川	出水	河川洪水	中	大田区	L		下丸子村	流作場川穴	出水	区史平川家文書 4, 石川日記		
196	晴天		1774	安永3	7	8~9				多摩川			多摩川	出水	出水ほか						大水出				
197	大雨	大雨	1774	安永3	8.25	9	30			浅川			多摩川	大水	出水ほか		八王子				大水出				
197	大雨	大雨	1774	安永3	8.29	10	4			浅川			多摩川	出水	出水ほか		八王子				大水出				
198		雨	1774	安永3	9	10~11				多摩川			多摩川	川穴	川穴	上	日野	R		落川村	川穴	餅米等免除	安永3年12月川穴につぎ餅米に免状除書付(日新市史料係近世3支配)	石川日記	
198		雨	1774	安永3	9中	10~11				多摩川			多摩川	川穴	川穴	中	大田区	L		下丸子村	流作場6反1畝11歩		区史平川家文書 4, 石川日記		
198	雨	雨	1774	安永3	9.1	10	10			浅川	市野川		多摩川	大水	出水ほか		八王子				大水出				
198	大雨	暴風雨	1774	安永3	9.1	10	10			市野川	浅川		荒川								26-27日風雨で出水	水巻幸謙(場五)	石川日記		
199	大雨	大雨	1775	安永4	4.21	5	20			浅川			多摩川	大水	出水ほか		八王子				大水出				
199			1775	安永4						多摩川			多摩川			下	大田	L	大森		御領場所伝橋流失	度々の大雨で後分漏れ	大森区史(大田区) 区史平川家文書 1, No.20, p.921,		
199	大雨	大雨	1775	安永4	5	5~6				多摩川			多摩川	橋流失	内水型	中	大田区	L		下丸子村	御領場所伝橋流失		区史平川家文書 5, No.19, p.58, No.20, p.58		
199		大雨	1775	安永4	5	5~6				多摩川			多摩川		河川洪水	中	大田区	L	下丸子川(宇北古川堤防長327間)	下丸子川	大水出		区史平川家文書 5, No.20, p.58		

No.	天候	水害原因	発生 年(西 暦)	年号	日 月	西暦月	西暦日	西暦日	発生水体	他の発生 水体(河 川)	他の発生 水体(湖 池)	水系	直接 原因	洪水型	発生地 形地域	現行政区	左岸/ 右岸	破壊・ 溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候	
200	大風雨	暴風雨	1775	安永4	7.23-25	8	18~20	多摩川	浅川	大井川 (6.4)	多摩川	多摩川	堤	河川洪水	中	大田区	L	下丸子 川(陸奥 字北古 川堤防 長327 間)	下丸子村	運水狂破壊損	出水	区史平川家文 書5, No.19, p.58, No.20, p.58		
200	大雨	暴風雨	1775	安永4	7.24	8	19	浅川	多摩川		多摩川	大水	出水ほか	八王子	八王子				大水出		石川日記			
201	風雨	風雨	1775	安永4	10.22	11	14	浅川	多摩川		多摩川	出水	出水ほか	八王子	八王子				出水		石川日記			
			1775	安永4				多摩川	多摩川		多摩川			中	川崎	R		小杉村	大水		小杉村(小塚 下)			
200	大雨	暴風雨	1776	安永5	7.21	9	3	浅川	多摩川		多摩川	出水	出水ほか	八王子	八王子				出水		石川日記			
201		風雨	1776	安永5	8.-9.	9~11		多摩川	多摩川		多摩川	洪水	洪水	中	大田区	L		下丸子村	流作場川次	洪水		区史平川家文 書3, No.39, p.1063		
202	大雷雨	雷雨ほか	1777	安永6	4.22	5	28	浅川	多摩川		多摩川	大水	出水ほか	八王子	八王子				大水出		石川日記			
203	大雷雨	雷雨ほか	1777	安永6	9.6	10	6	浅川	多摩川		多摩川	出水	出水ほか	八王子	八王子				出水		石川日記			
203	大雨	大雨	1777	安永6	9.9	10	9	浅川	多摩川		多摩川	大水	出水ほか	八王子	八王子				大水出		石川日記			
203		大雨	1777	安永6				多摩川	多摩川		多摩川	出水	出水ほか	大田	大田	L		大森		出水		大森区史(大田 区)		
203		大雨	1777	安永6				多摩川	多摩川	大井川		多摩川		中	川崎	R		小杉村	大水		小杉村(小塚 下)			
204	大雨	大雨	1778	安永7	6.4	6	28	浅川	多摩川		多摩川	出水	出水ほか	八王子	八王子				出水		石川日記			
204		大雨	1778	安永7				多摩川	多摩川	(5.8月)		多摩川		下	大田	L		羽田, 大森	洪水		羽田, 大森区史 (大田区)			
204		大雨	1778	安永7				多摩川	多摩川		多摩川			中	川崎	R		小杉村	大水		小杉村(小塚 下)			
205			1779	安永8	7.13	8	24	浅川	多摩川		多摩川	洪水	河川洪水		八王子				晴天で洪水		石川日記	武蔵4月異常 低温、京・ 大阪も同 様。近畿、 江戸冷夏		
205			1779	安永8	7.13	8	24	多摩川	多摩川		多摩川	破壊	内水型 氾濫	上	柏江	L	六郷用 水礎岩 戸村で 大破					三田(多摩川 誌)		
206	大風雨	暴風雨	1779	安永8	8.25	10	5	多摩川	神田川		多摩川	出水	内水型 氾濫	中, 下	大田	L		下丸子、 矢口村	戸前まで橋上 抜き、高村橋合 長6間)崩落	出水	区史平川家文 書5, No.21, p.58			
206	大風雨	暴風雨	1779	安永8	8.25	10	5	神田川	多摩川		多摩川				小日向	L		小日向	出水5尺に達し、和 泉橋、柳橋小破	満水で洪水は免れ る	東京市安永 災編p.417			
207	大雨	大雨	1780	安永9	6.26	7	27	多摩川	利根川、 荒川、 戸田川		多摩川	洪水	出水ほか	上, 中	世田谷	L					世田谷区史上 巻p914			
207	大雨	大雨	1780	安永9	6.26	7	27	利根川、 荒川、 戸田川	多摩川		利根 川、荒 川							人形流 矢、新大 橋、新大 橋落ちる			世田谷区史上 巻p914			

No	天候	発生 年(西 暦)	年号	旧暦月 日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生 水体(東 海)	水系	直接 原因	洪水型	発生地 形地域	現行政区	左岸 右岸	破壊・ 溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
207		1780	安永9	6.25	7	27	和根川、 荒川、 戸田川	多摩川	和根 川、荒 川								人家流失	洪水	東南市史稿纂 災編p.428(武 江年表) 日下説No.347	
207	大雨	1780	安永9	6.26	7	27										武蔵、上 総、上 野、下野	諸河川氾濫、民家 多数流失	幕府、関東郡代に 救助を命ず		
207	大雨	1780	安永9	6.28	7	29	隅田川		荒川							本所	湊水、両国橋、新 大橋、永代橋崩壊	混雑。6.21,27,28 大雨	東南市史稿纂 災編p.418 三田(多摩川 誌)	
208		1780	安永9	9.15	10	12	浅川		多摩川	洪水	河川洪 水		八王子					6日間雨なし、地震 あり	石川日記	
		1780	安永9				多摩川		多摩川	破堤	河川洪 水	上	狹江	和泉 村、猪 方、宇 奈木村 堤崩害			流水	関東大水	公私世田谷年 代記,p.109	
		1780	安永9				多摩川		多摩川	出水	河川洪 水	中	大田区			下丸子村	大出水		区史平川家文 書5, No.38,p.15	
209	大雨	1781	天明元	7.12	8	31	浅川	多摩川、隅 田川	多摩川	河川水	河川水		八王子				三角松野、龍川除大 方掃流し、初沢川 窪口の橋立、竹藪御 旗し、下川原御林 大松、五十六本交流 し、その他桑野川 川次多く(同年にも 寛文なき大水荒巻 御訴え)	何年にも悪なき 大水荒巻御訴	石川日記	陸奥、武蔵 P.4河川米 袋、船の航行 不可、陸前 も被害。
209	大風雨	1781	天明元	7.12	8	31	多摩川	浅川、隅田 川	多摩川	破堤	河川洪 水	中	世田谷	等々力 沖100間 神切			田畑に土砂流入。 本堤外「新石畑」8 町、「新石畑」6町 朱の作物全滅、石 河原に。	提上4.5尺に墮 水。氾濫。享保2年 以来40年ぶり	世田谷区史 上 巻p.915	
209	暴風雨	1781	天明元	7.12	8	31	多摩川	浅川、隅田 川	多摩川	浸水	河川溢 水	上	狹江	猪方村					世田谷区史 上 巻p.915	
209	暴風雨	1781	天明元	7.12	8	31	多摩川	浅川、隅田 川	多摩川	洪水	河川洪 水	上	世田谷						世田谷区史 上 巻p.915	
209	大風雨	1781	天明元	7	8~9		多摩川		荒川				世田谷						世田谷の河川 と雨水、p.21	
209	暴風雨	1781	天明元	7.12	8	31	隅田川、 浅川	多摩川、 浅川				中	大田区				田畑水浸	大満水	東急(1977)	
209	暴風雨	1781	天明元	7.12	8	31	多摩川	隅田川、 浅川	多摩川	溢水	河川水		大田区			下丸子村	田畑水浸	大満水	区史平川家文 書3, No.41,p.1065	
209	大風雨	1781	天明元	7.12、 17	8,9	31,5	多摩川	隅田川、 浅川	多摩川	破堤、 浸水	河川洪 水	中	大田区	下丸子 川除堤		下丸子村	田畑冠水、当水損 引(23石1斗5合)	世田谷藩では享保2 年以来的大水	区史平川家文 書 4, No.4,p.409	
209	大風雨	1781	天明元	7.13	9	1	多摩川	隅田川、 浅川	多摩川	破堤	河川洪 水	中	大田区	下丸子 川除堤		下丸子村	川筋敷敷くなり、 本畑へ水速く当り 川次、田畑悉く変 地	満水	区史平川家文 書 5, No.38,p.15	

No	天候	水害発生(西暦)	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(河川)	他の発生水体(湖沼)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地域	現行政区	左岸/右岸	破壊・溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候		
209	暴風雨	1781	天明元	7.13	9	1	多摩川	隣田川、浅川		多摩川	破壊	河川洪水	中	大田区	大田区	L	宇南古川水幹 堤延長1700間、 新堤	下丸子村	堤崩壊、新堤切 所延長13間、宇北 古川から南古川ま での瀬水延長930 間崩壊する	出水		区史平川家文 書5, No.9, p.73		
209	大雨	暴風雨	1781	天明元	7	8~9	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	中	世田谷	世田谷	L		世田谷:8町6区の 御石河原に等しく なる。	大出水で田圃冠水	大出水		三田(多摩川 誌)		
209	暴風雨	1781	天明元	7	8~9	多摩川	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	中	大田区	大田区	L		大出水で田圃冠水	大出水		区史平川家文 書2, No.17, p.699			
209	大雨	暴風雨	1781	天明元	7	8~9	多摩川	多摩川		多摩川	洪水	河川洪水	上	狛江	狛江	L		石河原に等しい状 態	冠蓋			狛江市史		
209		暴風雨	1781	天明元			多摩川	多摩川		多摩川	洪水	河川洪水	中	川崎	川崎	R		小杉村		大洪水		小杉村(小塚 下)		
209		暴風雨	1781	天明元			多摩川	多摩川		多摩川	洪水	河川洪水	上	昭島	昭島	L				大洪水		昭島市史附編		
209	長雨	1781	天明元	7.11-12	8	30,31	隣田川			荒川									出水。新大橋、永 平住大橋取壊、新 大橋、永大橋の一 部流失、大川橋壊 破	大水		日下部No.349		
209	晴れ	1781	天明元	7.14	9	2	隅田川			荒川									出水	大水		東京市史稿室 災録p.430		
209	霽雨	1781	天明元	7.6-11	8	25,30	那珂川			那珂川									出水			日下部No.349		
209	長雨	1781	天明元	夏	夏		渡島瀬川、荒川、入間川			渡島瀬川、荒川	破壊	河川洪水										日下部No.349		
209		暴風雨	1781	天明元			多摩川			多摩川			上	狛江	狛江	L		狛方村	百姓屋舎へ欠付 て、金4両			公私世田谷年 代記,p.110		
209		暴風雨	1781	天明元			多摩川			多摩川	満水							川辺5万石米80俵御 料米	満水			公私世田谷年 代記,p.110		
209		暴風雨	1781	天明元			多摩川			多摩川	満水							多摩川通 り11ヶ村	満水			公私世田谷年 代記,p.110		
209		暴風雨	1781	天明元			多摩川			多摩川			中	大田	大田	L		下丸子村	水損	前年と今年水損		区史平川家文 書1, No.22, p.921		
-		1782	天明2	7.14,15	8	22														関東大地震				
210	大風雨	暴風雨	1782	天明2	9.6	10	浅川	多摩川、隣田川		多摩川			出水ほ か		八王子	八王子			川除流れ、日野川 留	大水出			石川日記	
210	大雨	暴風雨	1782	天明2	9.7	10	多摩川	隣田川		多摩川					八王子	八王子			大川の水溢れる				石川日記	
210	暴風雨	暴風雨	1782	天明2	9.9	10	大川			豊田川	洪水	河川洪水	中	川崎	川崎	R		小杉村	大洪水			徳川実紀(場 玉)		
210		暴風雨	1782	天明2			多摩川			多摩川	出水	河川洪水	下	大田	大田	L			出水				小杉村(小塚 下)	
210	大雨	暴風雨	1782	天明2	9.5-7	10	多摩川			多摩川	出水	河川洪水							大水。新大橋、永 代橋通行止め				大森区史(多摩 川誌)	
210	大雨	1782	天明2	9.5-7	10	11,13	隣田川			荒川									新大橋、永代橋損 所	大水			東京市史稿室 災録p.437	
210		1782	天明2	9.5-7	10	11,13	隅田川			荒川														

No.	天候	水害原因	発生年(西暦)	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(河川)	他の発生水体(湖沼)	水系	直接原因	洪水型	発生地	現行政区	右岸/左岸	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
211	雨	雨	1783	天明3	6.17	7	16	浅川	浅川、秋川、利根川、荒川、江戸川	多摩川	多摩川	河川洪水	破堤	河川洪水	上	八王子	右岸		破堤、上稲荷森下左衛門馬場木次辺川下上水大騒ぎ		石川日記	冷夏・長雨、隅張大嵐にも絡み付れを渡るほど、夏から秋にかけて、気温低く
211	雨	雨	1783	天明3	6.17	7	16	多摩川	浅川、利根川、荒川、江戸川	多摩川	多摩川	破堤	河川洪水	上	狹江	右岸	猪方村				東急(1977)	冷夏近畿、江戸
211	雨	雨	1783	天明3	6.17-28	7	16~27	秋川			多摩川	洪水		河川洪水				大洪水、大荒			大徳願寺過去帳、幅原寺過去帳(八王子市史附録)	
211	大雨	大雨	1783	天明3	6.18	7	17	陣田川、江戸川	多摩川、浅川	荒川、江戸川	荒川							千住、浅草、小日向、小石川	浸水、大川橋、柳橋破損	6.16より大雨	東京市史稿彙、災編p.441	
211	大雨	大雨	1783	天明3	6.17	7	16	陣田川	多摩川、浅川	荒川	荒川								16日より千住・浅草暴だし	武江年表(崎玉)		
211			1783	天明3	6.17	7	16	江戸川・古川	多摩川、浅川										田畑冠水	大出水	土生津家文書(崎玉)	
211			1783	天明3	6.17	7	16	利根川、荒川	多摩川、浅川	和根川、荒川	和根川、荒川	洪水		河川洪水					破堤、大洪水		松村家日記(崎玉)	
211	暴風雨	暴風雨	1783	天明3	6.17	7	16											関東地方			日下部No.357	
212			1783	天明3	7.19	7	18	多摩川	大井川(7.1)		多摩川	破堤		河川洪水	中、下	大田	右岸	安方村、小林村、下丸子村	安方村、小林村水浸し、下丸子村水損引33石斗5升2合		大田区史東海寺文書、No.52, p.197、区史平川家文書4	
212	雨	雨	1783	天明3	7.18	7	17				多摩川	出水		出水ほか		八王子			出水		東京市史稿彙、災編p.447	
213	大雨	大雨	1783	天明3	8.11	9	7	浅川			多摩川	出水		出水							石川日記	
	雨	雨	1783	天明3	8.8	9	4														東京市史稿彙、災編p.447	
212			1783	天明3	夏	夏		多摩川			多摩川	海水		河川洪水	下	大田	右岸	道塚村	大出水畑作壊らす水害	昨年より引き続き出水	大田区史稿彙、災編p.447、寺・薬王寺文書、No.34, p.290、No.35, p.291	
			1783	天明3				多摩川			多摩川				中	川崎	右岸	小杉村			小杉村(小塚下)	

No	天候	水害原因	発生日(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(県)	他の発生水体(東海)	水系	直達原因	洪水型	発生地形状	現行政区	右岸 左岸	河川/湖沼・堤防部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
	大雨		1783	天明3				多摩川			多摩川	破堤	河川洪水	上	狛江	L	猪方村より下流、猪方村、井、若戸、菅多見、宇奈根、大蔵、御本村)	猪方村より下流、猪方村、井、若戸、菅多見、宇奈根、大蔵、御本村)	漏水		公私世田谷年代記, p.111	
			1783	天明3				多摩川			多摩川	溢水	河川洪水	上	府中	L	上染屋村	水田28.1%水田付荒廃無引	水田28.1%水田付荒廃無引		遠藤(1979)	
214	雨	雨	1784	天明4	8.6		20	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L	熊川		しら番之著共天宮たり(前日雨で、御用しら張切り)	玉川殿御用日記(多摩自慢石川酒造文書巻1, p.180)		
214	雨	雨	1784	天明4	8.7		21	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L	熊川		昨日の出水でしら押切り	玉川殿御用日記(多摩自慢石川酒造文書巻1, p.181)		
214	雨	雨	1784	天明4				多摩川			多摩川	出水	出水ほか	下	大田	L	大森		出水、家屋損壊	大森区史(多摩川誌)		
214	雨	雨	1784	天明4				多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	中	川崎	R	小杉村		大洪水	小杉村(小塚下)		
214	雨	雨	1784	天明4				多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上	府中	L	是政		八幡神社騒流失し、現地に騒流鎮祭	東京都神社名鑑(下, p.287)		
215	大雨	大雨	1785	天明5	10.4		6	浅川			多摩川	出水	出水ほか		八王子				出水	石川日記	早越、武蔵野から秋、上総・常陸も大干ばつ	
215	大雨	大雨	1785	天明5				多摩川			多摩川	出水	出水ほか	下	大田	L	大森		出水	大森区史(多摩川誌)		
215	大雨	大雨	1785	天明5				多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	中	川崎	R	小杉村		大洪水	小杉村(小塚下)		
216	大雨	台風	1786	天明6	7.13		6	浅川	多摩川、利根川、古利根川、中川、鶴見川、荒井川、荒田川		多摩川	大水	出水ほか		八王子				大水出	石川日記	今夏開来4月半ば~5月にかけ長雨で気温低	
216	台風	台風	1786	天明6	7.14		7	隅田川	多摩川、利根川、古利根川、中川、鶴見川、神田川、荒川		荒川			江戸					江戸大水入米代藩新大橋高川水戸様御長區市々呑込水入	石川日記		

No	天候	発生原因	発生年(西暦)	発生年(西暦)	発生日	西暦月	西暦日	旧暦月日	年号	日暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(東)	他の発生水体(東)	水系	直接原因	洪水型	発生地形状	現行政区	左岸/右岸	河堤・溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
216	台風	1786	天明6	7	7~8	25~23	25~23	天明6	7	7~8	25~23	25~23	隅田川	大井川(7.29)	荒川	荒川	溢水	河川洪水	上	始江	日本堤越水	浅草、蔵前	往采川の橋、船で通行、水盛まで	大氷。江戸屋敷蔵前住采川のごとく通行、水盛よりまで、日本橋端水盛越え、土盛並べ防ぐ	公私世田谷年表代記,p.113		
216	台風	1786	天明6	7	7~8	25~23	25~23	天明6	7	7~8	25~23	多摩川			多摩川	河川洪水									公私世田谷年表代記,p.113		
216	霖雨	1786	天明6	7	7~8	25~23	25~23	天明6	7	7~8	25~23	多摩川			多摩川	河川洪水								出氷。5月から降り続く	区史平川家文書4, No.19, p.267		
216	霖雨	1786	天明6	7	7~8	25~23	25~23	天明6	7	7~8	25~23						河川洪水						江戸屋敷保2年洪水を上下回る(10倍)被害7月17日の案	徳川実紀(大田区)			
216	台風	1786	天明6	7	7~8	25~23	25~23	天明6	7	7~8	25~23	利根川	古利根川、鶴見川、神田川、荒川、曙田川	利根川	利根川	破堤	河川洪水						粟橋、羽生、若手、草加柳雲多し幸手、庄内、松伏、新方浸水、三郷付近浸水	新大橋、永代橋流失、見橋流失、三谷山、山王(平井水堀川)16尺(本所)磯田川落水位1丈6尺(18日深夜(函国)浅草観音、吉原水浸す	東急(1977)		
216	霖雨	1786	天明6	7.12-18	8	5~11	5~11	天明6	7.12-18	8	5~11	利根川、鶴見川、神田川、荒川	多摩川、浅川	利根川、鶴見川、神田川、荒川	利根川	破堤	河川洪水						江戸市中到ル所浸水ノ言ラセル大橋を始め江戸川及び下流神田川の諸橋、深川等各地の諸川の架橋流失。本所、深川の如き低地水盛むら乃至4尺余	6月初旬以降雨に加以、大雨により特に中州、阿国橋東岸等の堤立地なりて隅田川を狭め、河水の流水を妨げたるを以て18日の大水をみたり	東京市史稿変災編p.448		
216	大雨	1786	天明6	7.12-18	8	5~11	5~11	天明6	7.12-18	8	5~11	古利根川、中川	多摩川、浅川	多摩川、浅川	利根川	破堤	河川洪水							高水で押流さる	西方村日記(塙五)		



No.	天候	水害原因	発生年(西暦)	発生年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(東)	他の発生水体(西)	発生水体(東)	発生水体(西)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地域	現行政区	左岸/右岸	破壊・破壊・崩壊・溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
216		台風	1786	天明6	7.12-17	8	5~10	荒川	多摩川、浅川	多摩川、浅川	荒川	荒川									俵示堂村床上3尺浸水。中山道80余間押流す		俵示堂村文書(埼玉)	
216		台風	1786	天明6	7.12-17	8	5~10	新河岸川	多摩川、浅川	多摩川、浅川	荒川	荒川	破堤	河川洪水					下南畑村堤切所	南畑3村	水損		英島家文書(埼玉)	
216		台風	1786	天明6	7.12-17	8	5~10	隅田川	多摩川、浅川	多摩川、浅川	荒川	荒川							江戸	洪水、小塚原5尺の水		武江年表(埼玉)		
			1786	天明6																	関東筋古今未嘗有の大洪水		三貨図彙(逸藤, 1979)	
216	大雨	台風	1786	天明6	7.12-17	8	5~10													関東地方	緒河川氾濫。苜波山崩れ、印旗沼埋め立て流失、人家、農作物被害大。死者多数		日下部No.361	
			1786	天明6				多摩川			多摩川	多摩川	出水ほか	出水	上	下	大田	L		六郷	六郷堤止め	出水	森家文書(大田)	
			1786	天明6				多摩川			多摩川	多摩川			中	中	大田区	L		下丸子村	24石9斗1升8合水損引		区史平川家文書 4.No.50, p.40	
217	大雨	大雨	1786	天明6	7.28	8	21	浅川			多摩川	多摩川	溢水	河川洪水	下		大田	L		小林、安方村	霖雨打撃、耕地一面水腫	高度の崖で早稲吹きこぼし	東海寺文書.No.6, p.3	
217			1786	天明6				多摩川			多摩川	多摩川	溢水	河川洪水	上	上	府中	L		上染屋村	水腫で破免		通藤(1979)	
			1786	天明6				多摩川			多摩川	多摩川	洪水、高湖	洪水、高湖	上	上	府中	L		押立村	出水川穴		逸藤(1975)	
217	大雨	大雨	1787	天明6	7	7~8	25~23	多摩川			多摩川	多摩川	破堤	河川洪水	上		柏江	L		猪方村大堤決壊		世田谷区史上册 p.921		
			1787	天明6				多摩川			多摩川	多摩川	出水	出水ほか	下		大田	L		小形村	大洪水	出水	大森区史(多摩川誌)	
			1787	天明6				多摩川			多摩川	多摩川	洪水	河川洪水	中		川崎	R		小形村	大破	満水	小形村(小塚下)	
			1787	天明6				多摩川			多摩川	多摩川	満水	出水ほか	上		柏江	L			天保7年10月多摩川通穴所公徳御曹請組入方願(写)(柏江方史料集第四)	満水	天保7年10月多摩川通穴所公徳御曹請組入方願(写)(柏江方史料集第四)	
			1786	天明6				多摩川			多摩川	多摩川	破堤	河川洪水						猪方村大堤		満水	公私世田谷年代記.p.113	
	大雨		1787	天明7																	人家様まで、所により平地で水深1丈1尺	満水	江戸川区史(世田谷区史上册 p.921)	
	大雨		1787	天明7																	關八州近在近國の洪水兼軟弱に尽くしがたし	満水	武江年表(世田谷区史上册 p.921)	
218	風雨	風雨	1788	天明8	9.7	10	6	多摩川			多摩川	多摩川	満水	出水ほか	下		大田	L			満水		森家文書(大田)	

No	天候	水害原因	発生年(西暦)	発生年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(河川)	他の発生水体(湖)	水系	直接原因	洪水型	発生地	現行政区	左岸・右岸	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
218		風雨	1788	天明8			多摩川				多摩川	満水	出水ほか	下	大田	L		満水		羽田(多摩川)誌	
219		暴風雨	1789	寛政元			多摩川				多摩川	出水	出水ほか	下	大田	L		出水		大森区史(多摩川)誌	
219		暴風雨	1789	寛政元			多摩川				多摩川	洪水	河川洪水	中	川崎	R	小杉村	大洪水		小杉村(小塚下)	
219	大雨	暴風雨	1789	寛政元	4.3	4	浅川	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	下	八王子			出水		石川日記	
219		暴風雨	1789	寛政元	4.4	4	多摩川	浅川			多摩川	出水	出水ほか	下	大田	L		六郷運船川止め	出水	森家文書(大田年)	
219	大風雨	暴風雨	1789	寛政元			隅田川	多摩川			荒川	洪水	河川洪水						我屋損壊、深川辺大水	武江年表(埼玉)	
220	大雨	大雨	1790	寛政2	4.9	5	浅川				多摩川	出水	出水ほか	下	八王子			出水		石川日記	
221	風雨	風雨	1790	寛政2	8.8	9	多摩川	隅田川			多摩川	出水	出水ほか	下	大田	L		出水		森家文書(大田年)	
222	大雨大風	暴風雨	1790	寛政2	8.19	9	浅川	多摩川、隅田川			多摩川	大水	出水ほか	上	八王子			大水出		石川日記	
222		暴風雨	1790	寛政2	8.19-20	9	多摩川	浅川、隅田川	大井川(8.20)		多摩川	堤	河川洪水	上	川崎	R	矢ノ口、菅村境	決壊。中野島、菅村人家流失、釜下流床上4尺	多摩川が大きくなり、菅村人家流失、釜下流床上4尺	佐保田家記録(小塚下)	
222		暴風雨	1790	寛政2	8.19-20	9	多摩川、浅川	多摩川、浅川			荒川	洪水、高湖	河川洪水					5.6軒押し流される	落水深床上1尺(深川)	東急(1977)	
222	大風雨	暴風雨	1790	寛政2	8.20	9	隅田川	多摩川、浅川			荒川	洪水	河川洪水	中	川崎	R	深川辺	出水、家屋損壊		武江年表(埼玉)	
222		暴風雨	1790	寛政2			多摩川				多摩川	洪水					小杉村	天洪水		小杉村(小塚下)	
222	大雨	暴風雨	1790	寛政2	8.20	9											江戸	高潮もあり、入藩の死に多し	陸前も暴風雨	石川日記	
	風雨		1791	寛政3	8.2	8												出水		石川日記	
223	大雨	台風	1791	寛政3	8.6	9	浅川	多摩川、利根川、隅田川、綾瀬川、神流川			多摩川		河川洪水		八王子			決壊/大光寺除地住吉の社流れ、川原宿轟壊		石川日記	
223	大風雨	台風	1791	寛政3	8.6	9	多摩川	浅川、隅田川、綾瀬川、神流川、荒川			多摩川	洪水、高湖	河川洪水、高湖	下	大田		道塚村	道塚村約90cm床上浸水、小柳一船冠水、小杉村、安方村橋流失	満水	大田区安藤国守・美王寺文書 No.44, p.294, No.45, 46, p.295	
223	大風雨	台風	1791	寛政3	8.6	9	多摩川	浅川、隅田川、綾瀬川、神流川、利根川、荒川			多摩川	満水	河川洪水	下	大田	L		満水、19日9時まで浸水、2ヶ所致傷流失		東海寺文書 No.60, p.232	

No	天候	発生原因	発生原因(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(東)	他の発生水体(東海)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地域	現行政区	左岸/右岸	破壊・溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
223	大雨	台風	1791	寛政3	8.7.9	8	4,6	多摩川	利根川、隅田川、綾瀬川、神流川		多摩川	破堤、洪水、高潮	河川洪水、高潮	上	柏江、世田谷	右岸	碓氷村堤8ヶ所、240間、大蔵村堤7ヶ所、200間、宇奈根村堤6間、下野毛村堤30間	碓氷、砂利、行船、袋、船、堀、築地	田方砂入り		公私世田谷年代記p.121	
223	大風雨	台風	1791	寛政3	8.6	9	3	隅田川	多摩川、利根川、綾瀬川、神流川		荒川	高潮	高潮					新大橋、大川橋破損、海辺橋、全箇橋、入船橋流失、辺海の地湧水進入	高潮。小田原-江戸湾潮あり	東京市史要覧編p.327		
223	大風雨	台風	1791	寛政3	8.5-6	9	2,3	綾瀬川	多摩川		荒川	破堤	河川洪水				久下堤押切	綾瀬川流域9日一面水押開き		産社祭礼嵐(晴玉)		
223	大風雨	台風	1791	寛政3	8.5-6	9	2,3	神流川	多摩川		利根川							満水、破堤		清水家文書(晴玉)		
223	大風雨	台風	1791	寛政3	8.5-6	9	2,3	利根川	多摩川		利根川							利根川下村倉堤、川原区蔵破堤	7日	羽生市史(晴玉)		
223	大風雨	台風	1791	寛政3	8.5-6	9	2,3	荒川	多摩川		荒川	高潮	高潮					死者15人	大出水	志不郷土史(晴玉)		
223	大風雨	台風	1791	寛政3	8.5-6	9	2,3	多摩川	多摩川		多摩川	高潮	高潮					宗岡村		寛江年表(晴玉)		
223	暴風雨	台風	1791	寛政3	8.5-6	9	2,3											各河川氾濫。房総、相模高潮、箱根山崩れ、鉢巻水	信濃も暴風雨	日下部No.367		
224	大風雨	暴風雨	1791	寛政3	8.20.24	9	17,21	多摩川	浅川		多摩川	川留	出水ほか	下	大田			大郷渡船場川留		大田区史蓮田寺、聖王寺文書、東海寺文書		
224	大雨	暴風雨	1791	寛政3	8.24	9	21	浅川	多摩川		多摩川	大水	出水ほか		八王子			大水出		石川日記		
224	暴風雨	暴風雨	1791	寛政3	8.20	8	30											高3度の大雨雨で満水、切所300間程出水、田畑共一面に水押し、冠水、道家村から下は10ヶ村奈、床上3尺	回國、近畿、中部、北陸、奥羽も暴風雨	日下部No.368		
223	大風雨	暴風雨	1791	寛政3	8月中	8-9		多摩川			多摩川	破堤	河川洪水	下	大田			道塚村		大田区史蓮田寺、聖王寺文書、No.48,49,p.295		
224	大雨	暴風雨	1791	寛政3	9.3	9	30	多摩川	浅川、荒川、隅田川、江戸川、元荒川		多摩川	溢水	河川洪水	下	大田			道塚村、八幡村		大田区史蓮田寺、聖王寺文書、		
225	大風雨	暴風雨	1791	寛政3	9.4	10	1											山中で水		東海寺文書No.61,p.232		

年	天候	水害原因	発生年(西暦)	号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(関水)	他の発生水体(東海)	水系	直接原因	洪水型	発生地(花地等)	現行政区	左岸/右岸	破壊・溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候	
225		暴風雨	1791	寛政3	9.4	10	1	浅川	多摩川、荒川、隅田川、江戸川、元荒川		多摩川	洪水、高潮	河川洪水		八王子				川島宿清右衛門小聚流		石川日記		
225	大風雨	暴風雨	1791	寛政3	9.4	10	1	多摩川	浅川、多摩川、隅田川、江戸川、元荒川		多摩川	溢水	河川洪水	下			道嫁村	洪水で田畑一掃、水、水腐	満水	大田区史蹟回廊No.47, p.295			
225	大風雨	暴風雨	1791	寛政3	9.4	10	1	隅田川、江戸川	多摩川、浅川、元荒川		荒川、江戸川							高潮上がり、中州崎被雪甚大、吉祥寺門前の民家は生民と共に流亡、吉祥寺門前の町家流失、堀浜壊滅	浸水深床3尺(猿江4尺(越中島、須崎本場))	東京市史蹟回廊No.527			
225	暴風雨	暴風雨	1791	寛政3	9.4-6	10	1-3	元荒川	多摩川、浅川、荒川、隅田川、江戸川		荒川	礎堤	河川洪水						6日	原玉南日記(堀玉)			
225	暴風雨	暴風雨	1791	寛政3	9.4-6	10	1-3	荒川	多摩川、浅川、荒川、隅田川、江戸川		荒川						平野堤損が破環		水深5尺	吹上町史(堀玉)			
225	暴風雨	暴風雨	1791	寛政3	9.4-6	10	1-3	見沼用水			多摩川							前砂村中山道		大出水			
225	暴風雨	暴風雨	1791	寛政3	9.4	10	1	多摩川			多摩川	満水	川次	上	昭島			大神村	川次	見沼代用水沿堤(堀玉)			
225	暴風雨	暴風雨	1791	寛政3	9.4	10	1	多摩川			多摩川	溢水	河川洪水					関東一円	作物冠水	五川満水(荒川、武蔵野、昭島、史附編)			
225	大風津波		1791	寛政3	8						多摩川								出水	日下部No.369			
226			1792	寛政4	閏2.16	4	7	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水						所々御座所(入所)の諸色及流生、七、袋戸村から南、横瀬新田まで、北津田、八幡塚村まで通過	武蔵・相模両国に大風津波	東海寺文書No.61, p.232		
227	雨	雨	1792	寛政4				浅川		大井川(7.13,8月)	多摩川	出水	出水ほか		八王子				出水	石川日記			
228	暴		1793	寛政5	2.24	4	4	浅川			多摩川	出水	出水ほか		八王子				出水	石川日記	長雨・冷夏 関東、5-9月		
229			1794	寛政6	7.19	8	14	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	下	大田				大出水	大森区史(大田年)	大森区史(多摩川誌)		
230			1795	寛政7				多摩川		大井川(5月)	多摩川	洪水	河川洪水	下	大森				大洪水	大森区史(多摩川誌)	大森区史(多摩川誌)		

No	天候	水害原因	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(関東)	他の発生水体(東海)	水系	直接原因	洪水型	発生地形態	現行政区	右岸・左岸	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
231	雨	雨	1796	寛政8	6.16	7	20	浅川			多摩川	洪水	河川洪水		八王子				大洪水	石川日記	
232			1799	寛政11				多摩川			多摩川	溢水	河川洪水	中	大田	下丸子村		5/14 村付で水損地幅僅け	区史平川家文書4, No.27, p.443	冷夏、江戸、早稲武蔵(藤9、上野(富士見))	
233			1800	寛政12				多摩川			多摩川	溢水	河川洪水	中	大田	下丸子村	川穴掘地承引	川穴	区史平川家文書4, No.28, p.444		
234			1801	享和元				多摩川	大井川(7.22)		多摩川	満水	出水ほか					満水	三田(多摩川誌)		
			1801	享和元														満水、氷降る、裏作損	公私世田谷年代記, p.137		
235	大雨	台風	1802	享和2	6.28	7	27	浅川			多摩川							大水	石川日記		
235	風雨	台風	1802	享和2	6.29	7	28	浅川			多摩川							大水、川除破れる	石川日記		
235		台風	1802	享和2	7.2	7	30	多摩川	利根川、荒川、江中川、隠瀬川、利根川、荒川		多摩川	破堤	河川洪水	下	大田	知行所高村		出水	大田区史東海寺文書 No.70, p.260		
235		台風	1802	享和2	7	7~8	29~27	多摩川	利根川、荒川、江中川、隠瀬川、利根川、荒川		多摩川	破堤、溢水	河川洪水	上	狛江	狛方村大堤破堤		満水	三田(多摩川誌)		
235		台風	1802	享和2	7.1	7	29	多摩川	利根川、荒川、江中川、隠瀬川、利根川、荒川		多摩川	破堤	河川洪水	上	狛江	狛方村大堤破堤		満水	公私世田谷年代記, p.138		
235		台風	1802	享和2	6.25-7.1	7	24~29	利根川、隠田川	多摩川、荒川、江中川、隠瀬川、利根川、荒川		利根川、荒川	破堤、洪水	河川洪水			小村井、講地、巢田、幸島、本所、小梅	大川橋、新大橋、永代橋落つ	湯水深床上3尺(本所小梅)	東急(1977)		
235		台風	1802	享和2	6.25-7.1	7	24~29	利根川			利根川					梅硝堂堤150間、菅戸、立石堤		出水	東京市史編委災編p.553		
235	大雨	台風	1802	享和2	6.28, 2.9	7	27, 28	隠田川			荒川					本所、南郷師	足盆、大川橋、新大橋、永代橋落つ	出水	東京市史編委災編p.553		
235	大雨	台風	1802	享和2	6.28, 2.9	7	27, 28	利根川			利根川					梅硝堂堤	大水隠田川に入る	6.25~7.1雨	東京市史編委災編p.553		
235	曇雨	台風	1802	享和2	6.25-7.1	7	24~29	綾瀬川	多摩川、荒川、江中川、隠瀬川、利根川、荒川		荒川	破堤	河川洪水						大宮市史(坊玉)		

No	天候	水害原因	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(濁集)	他の発生水体(濁集)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地域	現行政区	左岸/右岸	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候	
235	暴雨	台風	1802	享和2	6.28-7.1	7	27~29	利根川	多摩川、荒川、中川、江戸川、利根川、荒川、荒川	多摩川、荒川、中川、江戸川、利根川、荒川	利根川	破堤	河川洪水							幸手図書館所蔵文書(埼玉)		
235	暴雨	台風	1802	享和2	6.28-7.1	7	27~29	荒川	多摩川、中川、江戸川、利根川、荒川	多摩川、中川、江戸川、利根川、荒川	荒川	破堤	河川洪水					1日		行田市史(埼玉)		
235	暴雨	台風	1802	享和2	6.28-7.1	7	27~29	中川、江戸川	多摩川、荒川、中川、江戸川、利根川、荒川	多摩川、荒川、中川、江戸川、利根川、荒川	荒川	破堤	河川洪水					水損甚し		志多見村史(埼玉)		
235	暴雨	台風	1802	享和2	6.28-7.1	7	27~29	元荒川	多摩川、荒川、中川、江戸川、利根川、荒川	多摩川、荒川、中川、江戸川、利根川、荒川	荒川	破堤	河川洪水							加藤家文書(埼玉)		
235	暴雨	台風	1802	享和2	7.1	7	29	成木川			多摩川	洪水	河川洪水	上山	青梅			田畑流失		川口家文書(青梅) 小杉村(小塚下)		
235	大雨	台風	1802	享和2	6.28-29	7	27.28	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	中	川崎	R		大洪水		川口家文書(青梅) 小杉村(小塚下)		
235	台風	台風	1802	享和2				多摩川		大井川(6.8月)	多摩川			上	世田谷	L		各河川氾濫、堤防決壊、大洪水凶作、水害につき拝借(9月)		旧多摩郡鎌田村名主橋本家文書自録(災害No.8、致謝No.4)		
236			1803	享和3				多摩川			多摩川	破堤	河川洪水	下				決壊		内務省(大田区)		
236			1803	享和3				多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	中	川崎	R		大洪水		小杉村(小塚下)		
236	大雨		1803	享和3	6.28	8	15													東京市史編纂 災編p.577		
236			1803	享和3	6	7~8	19~18	荒川			荒川	破堤	河川洪水							荒川上流改修60年史(埼玉)		
237			1803	享和3	秋	秋		多摩川			多摩川	破堤	河川洪水	上	川崎	R		菅さほしめ稲毛領21ヶ村官金千両		佐保田家記録(小塚下)		
237	大雨		1803	享和3	8.15	9	30													東京市史編纂 災編p.577		
238			1804	文化元	秋	秋		荒川			荒川										野中家文書(埼玉)	
238			1804	文化元				多摩川		大井川(8.29~晴日)	多摩川	溢水	河川溢水	上	世田谷	L		宇奈根村入口押埋		宇奈根村史 50歳迄無和10年賦 で拝借		

No	天候	発生原因	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(関東)	他の発生水体(東海)	水系	遷移原因	洪水型	発生地	現行政区	左岸/右岸	破壊・崩壊/溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
	大風大雨		1804	文化元	6.1	7														雷鳴、大雨降る重 軸の如し。申中刻 に及て快晴	東京市史稿巻 東京編p.578	
239			1806	文化3				多摩川	神流川・ 鳥川	大井川 (夏)	多摩川	破壊	河川洪水	上	狛江	上	猪方村 大堤破壊		田畑が赤れる		狛江市史	1805年5~8 月豊饑、武 蔵下総、江 戸
239	大雨		1806	文化3	6.12.1 3	7	18.19															
240	雨		1807	文化4	3.22	4	29	浅川			多摩川	出水	出水ほか		八王子				出水	江戸及近郊	東京市史稿巻 災編p.578	
240	曇		1807	文化4	3.24	5	1	浅川			多摩川	出水	出水ほか		八王子				出水	石川日記		
241	大雨		1807	文化4	6.1~5	8	4~8	多摩川	神流川・ 鳥川		多摩川	流路移動	河川洪水	下	大田	上			川筋変化	清水、川州の所屬畑 について下丸子村 と対岸の上平間村 で争い	区史平川家文 書4	
241	大雨		1807	文化4	6.1~2	8	4,5													益を傾ぐるが如し	武江年表(崎 玉)	
241	大雨		1807	文化4	6.2	8	5	神流川・ 鳥川	多摩川		利根川	破壊	河川洪水				堤防損 壊			出水	旧埼玉県史(埼 玉)	
242			1808	文化5	6.16~ 18	7	9~11	多摩川	江戸・近 国		多摩川	破壊	河川洪水	中	大田	上			稲村地内堤通り三 百間川次、川筋左 岸により、鶴木村 光明寺に迫る	総務川家記、 大田区史中巻 p.652		
242	大雨		1808	文化5	6.16~ 18	7	9~11				多摩川								洪水。米穀値貴 崩壊し降る	東京市史稿巻 災編p.580(武 江年表)		
			1808	文化5				多摩川		大井川	多摩川								洪水	羽田(		
			1808	文化5				多摩川			多摩川			上	府中	上			押立村破壊、上梁 屋村普立頭高	遠藤(1979)		
242	長雨		1808	文化5	6.16~ 18	7	9~11				多摩川								洪水	日下部No.382		
	暴風雨		1808	文化5	閏6.29	8	20													6月初旬から長雨	日下部No.383	
			1808	文化5	6(?)、 29.30	7(?)	22.23	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	中、下	大田区、 川崎市	L/R			因幡、備前、備 中、伊勢も暴風雨	東京市史稿巻 災編p.580(武 江年表)		
	大雨		1808	文化5	閏6.18 ~20	8	9												洪水より式奈満 水、論所御分見坑 流失	区史平川家文 書5.No.9, p.1501		
			1808	文化5	閏6.18 ~20	8					荒川								再洪水溢れる	東京市史稿巻 災編p.580(武 江年表)		
			1808	文化5	閏6.29	8	20	大川											神田川増水3.4尺	東京市史稿巻 災編p.580(武 江年表)		
243	霖雨		1808	文化5	7?			多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	下	大田区	L			7月中旬から打続 雨で排水溝水で田 畑一畦少々水押	大田区伊藤園 寺、栗王寺文 書No.51.p.296		
	大風		1808	文化5	7.25	9	15												洪水田畠損す。通 船漂流し、人多死 亡す	東京市史稿巻 災編p.581(武 江年表)		
	暴風雨		1808	文化5	7.25	9	15													日下部No.384		

№	天候	水害原因	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(河川)	水系	直接原因	洪水型	発生地 形地域	現行政区	左岸/右岸 堤防・遊歩道	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
	大雨		1808	文化5	8.7	9	26									関東各地	洪水	洪水	日下部No.385	
	大雨		1808	文化5	8.7.8	9	26.27									江戸及東北の諸国	洪水	洪水	東京市史稿要 災編p.582	
244	雨	雨	1809	文化6	8.10	9	19	浅川		多摩川	大水	出水ほか		八王子			大水出る	小風吹く	石川日記	江戸、2~3 月暴風、多 大雪、稲妻陶 集
	暴風雨		1809	文化6	8.10	9	19									江戸及近 江国	大風		日下部No.387	
245	雨	雨	1809	文化6	8.23	10	2	浅川	大井川 (8.22.23)	多摩川	大水	出水ほか		八王子			大水出る		石川日記	
245	雨	雨	1809	文化6	8.24	10	3	浅川	隅田川	多摩川	洪水	河川洪水		八王子			大水、下長房村 伊弉御川に流れ死 す		石川日記	
245	大風雨	暴風雨	1809	文化6	8.23、 24	10	2、3	隅田川、 浅川	多摩川、 浅川	荒川						江戸	家屋破損移しく 神社、仏閣、樹木 多く倒壊	増水	東京市史稿要 災編p.583	
246	大雨	大雨	1810	文化7	9.8	10	6	浅川		多摩川	出水	出水ほか		八王子			水出る		日下部No.388	
246	大雨	大雨	1810	文化7				多摩川		多摩川			上	柏江	L			稲毛鎌河原村字 中之嶋へ稲毛・川 崎二ヶ所用水堰河 原取水口水門が崩 壊して伏見致す。 翌日、江戸を行つた ため、500余の荒洲 を流失になり、百 姓3軒屋敷敷欠、 本村(鎌河原)へ 逃、田圃も荒れ、 死者66名、死者 無、日暮ちず附 洲が出来松原に到 した。右、右に離 離により3年後立ち 流失、それにより 以後本村水害水行 今の形となる	荒川上流改修 60年史(荒川 年)	
	風雨	風雨	1810	文化7	7.16	8	15	荒川		荒川	堤堰	河川洪水				本所	浸水	出水	東京市史稿要 災編p.583	
246	霖雨	霖雨	1811	文化8				多摩川		多摩川	洪水	河川洪水	上	昭島	L	群馬縣地 村	全村流失		昭島市史	江戸1~2月 暴風
248	長雨	霖雨	1811	文化8				多摩川		多摩川	洪水	河川洪水	上	昭島	L	群馬縣地 村	全村流失	十二神社由緒	東京市史稿要 災編p.583	
	風雨	風雨	1811	文化8	8.8	9	25	荒川		荒川						荒川通比 企部丸下 等	五六橋橋管流失		荒川上流改修 60年史(荒川 年)	
	風雨	風雨	1811	文化8	8.25	10	12												東京市史稿要 災編p.590	



No.	天候	水害原因	発生年(西暦)	発生年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(河川)	他の発生水体(湖沼)	水系	直接原因	洪水型	発生地形成地	行政区	左岸/右岸	磯堤・遊歩道	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
249	薄晴天		1812	文化9	7.18	8	24	浅川			多摩川	出水	出水ほか		八王子				出水	出水	石川日記	
	大雨	大雨	1812	文化9	7.1	8	7	隅田川			荒川		出水ほか						出水	出水	東京市中編変 から50条日 幸懸、江 戸。1813年 幸懸江戸諸 国5~9月	
	大雨	大雨	1812	文化9	7.1	8	7	利根川、 渡良瀬川			利根川、 渡良瀬川	氾濫							氾濫		東京市中編変 災編p.591	
	風雨		1812	文化9	7.9	8	15					風雪					江戸	被害有り			東京市中編変 災編p.599	
250	雨	雨	1815	文化12	2.27	4	6	浅川			多摩川	出水	出水ほか		八王子			出水	出水	石川日記		
	雪		1815	文化12	2下旬	3~4												出水	1/1夜中より翌日江 戸大雪降る2尺余、 2月下旬に至て、大 雪小雷10度に及へ り。	東京市中編変 災編p.602		
			1816	文化13				多摩川		富士川 (8.4)	多摩川	破堤	河川洪水	上	昭島			決壊			昭島市史(多摩 川誌)	
251			1816	文化13	秋			多摩川			多摩川	破堤	河川洪水	上	川崎				被害はじぬ程毛領 2ヶヶ村官舎千両	佐保田表記録 (小塚下)		
252	大風雨	台風	1816	文化13	8.4	8	26	多摩川	江戸その 外		多摩川	満水	河川洪水	下	大田			畑残らず損毛、田 畑風で中稲刈等 殊の外被害甚れ	満水	大田区安藤園 寺・或王寺大 変大明記録」 解説		
252	大風雨	台風	1816	文化13	7~8	8~9		多摩川			多摩川										藤本市の自然 p350	
252	大風雨	台風	1816	文化13	8.4	8	26	多摩川			多摩川	破堤	河川洪水	上	福生			田に水、桑被害			多摩百邊五川 酒造史巻第1 明和安永大 変大明記録」 解説	
252	大風雨	台風	1816	文化13	8.3-4	8	25,26											出水		武江年表(4稿 玉)		
	暴風	台風	1816	文化13	閏8.4	9	25											立木吹倒し、人家 吹潰、損毛甚だし		世田谷区史料 3, No. 65, p. 59		
	大風雨	台風	1816	文化13	閏8.3,4	9	25,26											被害有り		東京市中編変 災編p.603		
	大風雨	暴風雨	1816	文化14														大風雨誘致助石代			公私私世田 谷年代記 (坤)p.164	
	風雨	風雨	1816	文化14	7.20	9	1											被害有り		東京市中編変 災編p.618		
253			1818	文政元				多摩川			多摩川	用水破 壊	内水型 氾濫	上	昭島				被害有り		昭島市史(多摩 川誌)	1817年早懸 関東5~9 月、6月異常 低温

No	天候	水害原因	発生年(西暦)	生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(渠)	他の発生水体(湖)	水系	直接原因	洪水型	発生地	現行政区	左岸/右岸	流域・溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
	暴風雨	暴風雨	1818	文政元	8.4	9		4											武蔵、上野	竹木、家蔵倒壊	豊前、奥羽も暴風雨 四国から奥羽まで暴風雨	日下部No.398 日下部No.399	
254	雨	暴風雨	1818	文政元	8.3-4	9		3.4											關東、近畿、東海	洪水		石川日記	
255	大雨	大雨	1819	文政2	閏4.9	6		1	浅川			多摩川	出水	出水ほか		八王子				大水出		玉川(鶴御用日記) 多摩川(多摩川) 川(酒造文書巻1, p294)	江戸2月から40余日旱魃、江戸暖冬
255	大雨	大雨	1819	文政2	5.12	7		3	多摩川			多摩川	出水	河川溢水	上	福生	L		熊川	出水		玉川(鶴御用日記) 多摩川(多摩川) 川(酒造文書巻1, p294)	
255	雨	大雨	1819	文政2	5.14	7		5	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L		熊川	出水		玉川(鶴御用日記) 多摩川(多摩川) 川(酒造文書巻1, p295)	
256	雨	雨	1820	文政2	1.12	2		6	浅川			多摩川	大水	出水ほか		八王子				大水出		石川日記	
255	雨	雨	1820	文政2	5.18	7		9	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L		熊川	出水		玉川(鶴御用日記) 多摩川(多摩川) 川(酒造文書巻1, p341)	
257	晴れ	雨	1820	文政2	7.9	8		29	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L		熊川	出水		玉川(鶴御用日記) 多摩川(多摩川) 川(酒造文書巻1, p352)	
258	晴れ、七ツ時雨	雨	1820	文政2	9.9	10		27	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L		熊川	御用點出水で、生菓破れ、動騷らす 逃がす	出水	玉川(鶴御用日記) 多摩川(多摩川) 川(酒造文書巻1, p363)	
259	雨	雨	1821	文政4	7.2	7		30	浅川	富士川(8.7.8)		多摩川	出水	出水ほか		八王子				出水		石川日記	旱魃、夏秋、江戸大水
260	くもり、時々霧雨	雨	1822	文政5	3.25	5		16	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L		熊川	昨日雨で出水	出水	多摩川(多摩川) 川(酒造文書巻2, p16)	
261	大雨	大雨	1822	文政5	3.16	5		6	多摩川			多摩川	風	風害				江戸及東国	樹木を吹き折る			東京市(葛城災網)6.24	
261	雨	大雨	1822	文政5	4.23	6		12	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L		熊川	出水		多摩川(多摩川) 川(酒造文書巻2, p21)	
262	くもり	大雨	1822	文政5	5.10	6		28.00	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L		熊川	出水		多摩川(多摩川) 川(酒造文書巻2, p25)	
263	雨、晴れ、大雨	大雨	1822	文政5	5.27	7		13	多摩川			多摩川	出水	河川溢水	上	福生	L		熊川	当年梅へ新田へは冠水とくに水流	出水	多摩川(多摩川) 川(酒造文書巻2, p30)	
263	上ヶ雨	大雨	1822	文政5	5.29	7		15	多摩川	浅川		多摩川			上	福生	L		築地	風雨だが、段々次入、寺を破る		多摩川(多摩川) 川(酒造文書巻2, p30)	
263	雨	大雨	1822	文政5	5.29	7		15	浅川	多摩川		多摩川	洪水	河川洪水		八王子				大水出		石川日記	

No	天候	発生原因	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(調査)	他の発生水体(調査)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地域	現行政区	左岸/右岸	堤岸/堤防・溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候	
263	大雨	大雨	1822	文政5	5.31	7	17	多摩川(秋川)			多摩川		上		秋留野			宇谷後、下夕川、底原の立掃新田	氾濫	同年10月に国役曹請願	牛米(1899)		
263			1822	文政5	5.30	7	16											大木、秋川8分也、玉川筋6万石水鎮	大水		大慈願寺過去帳(八王子市史附編)		
	長雨		1822	文政5	5月初旬～下旬	6~7	19~17											京坂、江戸及び諸国	洪水		目下部No.411		
263	霖雨	大雨	1822	文政5	5.27.2 8.29	7	13.14. 15	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上	福生	L		京都・江戸・東海・東諸国	洪水	5月霖雨		多摩自慢石川酒造文書巻「明和安永大變天明記録」	
263			1822	文政5	5月初旬	6~7	19~17	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上	柏江	L		多摩川通り5ヶ村水押し。	田畑鷹鷲捕殺され			柏江市史	
263			1822	文政5	5中より上りまで													塞地村御堂一宇屋敷を治じ、柴崎村治江田等五ヶ村、柴田河原の村落田舎荒れ荒亡、梅川の氷掃発し、梅田新田北岸の荒れ南に乾す			正統参新日記(八王子市史附編)		
263			1822	文政5	6.1	7	18	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上	立川	L							
263			1822	文政5	6.1-2	7	18.19																
263			1822	文政5	6.1	7	18	多摩川			多摩川	破堤	河川洪水	上	福生	L		山王下迄押込穴眼通一面、	拝島村・田中村田方音無	多摩川、秋川満水		多摩自慢石川酒造文書巻「明和安永大變天明記録」	
263	曇りとき晴れ	大雨	1822	文政5	6.2	7	19	多摩川			多摩川	破堤	河川洪水	上	福生	L		拝島村下から穴に入る	田へ水押入る。	28日から大水、昨夜はさらに増水		多摩自慢石川酒造文書巻2.p31	
263	昨夜から雨、くもり又は晴れ	大雨	1822	文政5	6.5	7	22	多摩川			多摩川	破堤	河川洪水	上	福生	L		田荒れ、本田冠水、新田石砂入る。壱さ形もなし。	訴えの準備		多摩自慢石川酒造文書巻2.p32		
264	大雨	暴風雨	1822	文政5	6.12	7	29	多摩川			多摩川	出水	河川洪水	上	福生	L		分向田冠水	出水		多摩自慢石川酒造文書巻2.p34		
264	雨	暴風雨	1822	文政5	6.13	7	30	多摩川			多摩川	河川洪水	上	福生、秋留野小川				手前田へも水入る。稲荷田上から穴け入る、森山馬頭下からも水は入る。			多摩自慢石川酒造文書巻2.p34		

No	天候	水害原因	発生年月(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(東)	他の発生水体(西)	水系	直接原因	洪水型	発生地形	現行政区	左岸/右岸	堤防/遊水部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
264		暴風雨	1822	文政5	6.13	7	30	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上	福生	右岸	如喜山王下水口袋600間切所8ヶ所475間	群島村・群島村・田中村	田中村も狭らす、石川原の上所に相対。本橋半分の電柱等下流。	拜島初て古今希成大変	多摩百巻石川酒温文巻之巻「明和安永大變天明記録」	
264		暴風雨	1822	文政5	6.13	7	30	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上,中	狛江市、世田谷区	上	和泉村上り小山村遠10ヶ村	佐和子橋は申すに及ばぬ田畑井上土等相対せり得露り寄式流流、地生相家へ御田地位つ失ひ、其上川穴亡所等二相対場所多分之村々は居宅・物置宛床に浸水。瀬田村地盤之場所は六郷用水路へあかり用水と玉川一線に相対大水。近年綿なる大水必至。	滝水。途中から度々大雨、其時々出水田畑水押砂入等之場所悉出米一粒難獲	世田谷区史料 叢書 4, No. 11, p. 9		
	大雨	大雨	1822	文政5	6.12	7	29					内水型氾濫					本所、小日向等	出水	出水	東京市安永變災編p.625		
	風雨	風雨	1822	文政5				多摩川			多摩川	出水	中	中	世田谷区	上	上野毛村	初夏から去る6月中迄幾々の風雨、其時々出水、田畑荒地又は川穴亡所等之場所多分に出水	8/1村け見分再願	世田谷区史料 叢書 4, No. 13, p. 10		
			1822	文政5				多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上	世田谷区	上	瀬田村	川筋勢弱所出来ならむに田場一水押 米100石無利10年無葉与、固本 安永橋面村に砂入田取除貴米下結	洪水。6/13村け	世田谷区史料 叢書 4, No. 38, p. 142		
			1822	文政5		7~8		多摩川			多摩川		河川洪水	上	狛江、世田谷	上	下流左岸5ヶ所	平水より約3.6m増水、多摩川向その他多く吾水原(行村き多摩川向か)山田400歩、行内吉田11町4反歩、向畑7町8反歩の内田畑共400歩、各田11町4反歩)	満水	公私私世田谷年代記・p.171		
264		暴風雨	1822	文政5	6	7~8		多摩川			多摩川								大水	羽田(多)	世田谷区史料 叢書 3, No. 4	
264	大風雨	暴風雨	1822	文政5	6.12	7	29	多摩川	浅川、秋川、江戸川、目黒川		多摩川	洪水	中	中	大田	L/R	下沼鶴村と川向かい		大水出		石川日記	
264	雨	暴風雨	1822	文政5	6.12	7	29	浅川	多摩川、江戸川、目黒川		多摩川	出水	出水ほか		八王子				大水出		石川日記	

No	天候	水害発生原因	発生年(西暦)	生年(西暦)	年号	旧暦日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(東)	他の発生水体(東)	発生原因	水系	洪水型	発生形態	現行政区	右岸/堤岸	堤防/溢流部	被災地域	被災状況	概要	文献	気候
264	暴風雨	暴風雨	1822	文政5	6.12	7	29	秋川	多摩川	出水	出水	多摩川	出水	多摩川	上	八王子				大水、稲川十分。米損多分	182年成年の水に少々不足の由老人のはなし	本願寺過去帳(八王子市史附編)	
264	暴風雨	暴風雨(雷)	1822	文政5	6.12	7	29	川口川	浅川	出水ほか	出水ほか	浅川	出水ほか	浅川	上	川口			川口	洪水	昨日の災いに増加す	正統正統委部日記日記(八王子市史附編)	
264	大風雨	暴風雨	1822	文政5	6.12.1	7	29, 30	多摩川	多摩川	河川洪水	河川洪水	多摩川	河川洪水	多摩川	下	大田	堤防	堤防	小林村、安方村	12日堤防切り、13日朝6時時押来田畑冠水一統押流	大水	本田区史東海寺文書 No.88, p.309	
264	暴風雨	暴風雨	1822	文政5	6.13	7	30	多摩川	多摩川		江戸川、自黒川	多摩川		多摩川	上、中	狛江、世田谷			和泉村から小山村まで10ヶ村	近年稀の大風。春中から度々大風雨、その時々多摩川出水、田畑水神砂入	春中から度々大風雨、その時々多摩川出水、田畑水神砂入	世田谷区史資料4、No.11, p9	
264	大雨	大雨	1822	文政5	6.12	7	29	江戸川、自黒川	多摩川	河川溢水、小河川記	河川溢水、小河川記	多摩川	河川溢水、小河川記	多摩川					小日向、自黒川、本所	浸水1.5尺(自黒)	東急(1977)		
264	大雨	暴風雨	1822	文政5	6.12	7	29	秋川	多摩川		江戸川、自黒川	多摩川		多摩川	上	秋留野			字谷後、下夕川、原、久保前の立寄新田	冠蓋	同年10月に冠設普講願	牛米(1989)	
264	大雨	暴風雨	1822	文政5	6.12	7	29	多摩川	多摩川		江戸川、自黒川	多摩川		多摩川				稲毛	民衆演説	洋播	東京市史編纂災害 p.625		
264	霖雨	暴風雨	1822	文政5	6		戸田川	荒川						荒川						出水		寛文年表(晴玉)	
265	大雨、四ツ頃から天気がくもり、雨、それから天気が又大雨	大雨	1822	文政5	7.25	9	10	多摩川	多摩川	出水ほか	出水ほか	多摩川	出水ほか	多摩川	上	福生	堤防		熊川	大水	翌朝、大水	多摩市史編纂災害 p.44	
265	大雨	大雨	1822	文政5	7.25	9	10	浅川	多摩川	洪水	洪水	多摩川	洪水	多摩川		八王子				洪水		石川日記	
265	大雨	大雨	1822	文政5	7.26	9	11	多摩川	多摩川	大水	大水	多摩川	大水	多摩川	上	福生			熊川	大水	大水	多摩市史編纂災害 p.44	
266	大雨	大雨	1822	文政5	8.14	9	28	多摩川	多摩川	増水	増水	多摩川	増水	多摩川	上	福生			熊川	増水(昨夜降ったので)		多摩市史編纂災害 p.44	
266	大雨	大雨	1822	文政5	8.14	9	28	多摩川	多摩川	満水	満水	多摩川	満水	多摩川	中	大田			下沼鶴村	満水		大田区史北川家文書3, No.7	
267	大雨	大雨	1822	文政5	8.21.2	10	5, 6	多摩川	多摩川	洪水	洪水	多摩川	洪水	多摩川	上	福生			熊川	洪水	洪水。下坂下危く平五郎様迄水附	多摩市史編纂災害 p.44	
267	大雨、風少し	大雨	1822	文政5	8.22	10	6	多摩川	多摩川	出水	出水	多摩川	出水	多摩川	上	福生			熊川	出水	昨夜から大雨、今朝出水、くれ、れには大洪水、今夜中には水引く	多摩市史編纂災害 p.80	

No	天候	発生 年(西 暦)	発生 年(西 暦)	年号	旧暦月 日	西暦月	西暦日	西暦日	発生水体	他の発生 水体(東)	他の発生 水体(東 海)	水系	直接 原因	洪水型	発生地 形地域	現行政区	左岸/ 右岸 溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
267	雨	1822	1822	文政5	8.22	10	6	浅川	多摩川		多摩川	出水	出水ほか		八王子				大水出		石川日記	
267	暴風雨	1822	1822	文政5	8.22	10	6						高潮		江戸及近 国			大風。榊木吹き折 り、方々で洪水。 深川高潮で浸水。			日下部No.412	
267	風雨	1822	1822	文政5	8.22	10	6	隅田川			荒川		高潮					橋梁に損所。海湖 深川牙辺りを襲う	増水		東京市史編委 史録p.625	
268	雨	1822	1822	文政5	8.31	10	14	浅川	多摩川		多摩川	出水	出水ほか		八王子			出水	昨夜大雨		石川日記	
268	大雨	1822	1822	文政5	9.1	10	15	多摩川	浅川		多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L	熊川	両度浅川、多摩川 濁水、川通り田畑 水押し、川次、石 川になる。	大川5度出る		多摩白濁石川 海湖文書2巻、 p51	
		1822	1822	文政5	5月か ら8月 まで														用水樋口破壊、川 次	出水、年貢減免願	牛米(1989)	
	大雨	1822	1822	文政5				多摩川(秋 川)			多摩川	用水樋 口破壊		上	秋留野			小川村多 摩川、秋 川両用 水、多摩 川付古田 立降新 田、本田				
		1822	1822	文政5				多摩川			多摩川	大水	出水ほか	中	世田谷区L		鎌田村		大水		旧多摩郡鎌田 村名主橋本家 文書目録No.8	早蕨春、夏 武蔵・下野
269		1823	1823	文政6	5.12	6	20	多摩川	多摩川		多摩川	甲斐状 大破	内水型 氾濫	中	大田	L	下丸子 村	宇砂運送用悪水状 氾2間半大破	出水		大田区史平川 家文書 5.No.3, p.85	
269		1823	1823	文政6	5.17	6	25	多摩川	多摩川		多摩川	用悪状 大破	内水型 氾濫	中	大田	L	下丸子 村	宇砂運送用悪水状 氾2間半大破	出水		大田区史平川 家文書 5.No.3, p.85	
269		1823	1823	文政6	5.19	6	27	大川			荒川								大水、出水		熊本市史編委 史録p.631	
270	大雨	1823	1823	文政6	6.12	7	19	多摩川	多摩川		多摩川	用悪状 大破		中	大田	L	下丸子 村	宇砂運送用悪水状 氾2間半大破、宇北 古川用水損壊井長2 間流失	出水		大田区史平川 家文書 5.No.3, p.85	
270	雨	1823	1823	文政6	6.19	7	26	多摩川	多摩川		多摩川	河川洪 水	下	大田	L	通達村 堤防		田畑一面冠水床上 浸水	大水、15日から大雨		大田区伊豆国 志、築土等文 書No.55, p.297	
270	大雨	1823	1823	文政6	6.16	7	23	多摩川	多摩川		多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L	熊川	出水		多摩白濁石川 海湖文書2巻、 p109		
270	大風	1823	1823	文政6	6.17	7	24	多摩川	浅川		多摩川	大水	内水型 氾濫					堤防川除全部破れ る	大水		八王子中市相 模附(八王子市 史附編)	
270	大風	1823	1823	文政6	6.17	7	24	浅川	多摩川		多摩川	大水	内水型 氾濫		八王子			堤防川除全部破れ る	大水		八王子中市相 模附(八王子市 史附編)	
270		1823	1823	文政6	6.18	7	25	浅川	多摩川		多摩川	用水路 破壊	内水型 氾濫		八王子			用水路平山分銅127 間欠落ち	満水		八王子中市相 模附(八王子市 史附編)	

No	天候	発生原因	発生年(西暦)	生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(東)	他の発生水体(東海)	水系	直接原因	洪水型	発生地形状	現行政区	左岸/右岸	堤壁/遊流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
270	霖雨	暴風雨	1823	1823	文政6	6.15-21	7	22~28	多摩川	富士川(6.21)		多摩川	洪水	河川洪水						山々洪水、岸辺の田畑悉く荒亡	前年より屢々洪水あり、玉川、秋川、浅川其の田畑荒しするもの甚なり、津島村稲田変じて石瀬となり、日野本郷は大村といえども地又多く荒亡す。相沢城す。	正統後部日記(八王子市史附編)	
270	大雨	暴風雨	1823	1823	文政6	6.19	7	26	多摩川	荒川、利根川		多摩川	破堤	河川洪水	上	福生	L		熊川	出水、拝島下堤も一箇所押切の噴	出水、15日から今日迄上ヶ筒	多摩自治体石川活造文書2巻、p110	
270		暴風雨	1823	1823	文政6	6.19	7	26	多摩川	荒川、利根川		多摩川	破堤	河川洪水	上	福生	L		拝島村千面余之上御普請	千面余之御普請一時に押崩し、田方一面海のことく	多摩自治体石川活造文書2巻、p110		
270	大風雨	暴風雨	1823	1823	文政6	6.19	7	26	荒川	利根川		荒川	破堤	河川洪水				石原堤	洪水		多摩自治体石川活造文書2巻、p110		
270	大風雨	暴風雨	1823	1823	文政6	6.19	7	26	利根川	多摩川、元荒川		利根川	破堤	河川洪水				小野、本森、本郷堤	出水		北川辺の水害(埼玉)		
270	大風雨	暴風雨	1823	1823	文政6	6.19	7	26	荒川	多摩川、利根川、元荒川		荒川	破堤	河川洪水				越水、利根川堤			川島領島初沼神堤(埼玉)		
270	大風雨	暴風雨	1823	1823	文政6	6.19	7	26	元荒川	多摩川、利根川		荒川	破堤	河川洪水				越水、利根川堤		大水	加藤家文書(埼玉)		
270		暴風雨	1823	1823	文政6	6.21-22	7	28,29	多摩川	両国川		多摩川									同日木王代一覽後記(大田区)		
270	大雨	暴風雨	1823	1823	文政6	6.19	7	26	多摩川	利根川、荒川、元荒川		多摩川									洪水、家屋市浸水、田畑冠水	日下部No.414	
270	大雨	暴風雨	1823	1823	文政6	6.19	7	26	利根川、荒川、両国川	多摩川		利根川、荒川									洪水、家屋市浸水、田畑冠水	日下部No.414	
270	大風雨	暴風雨	1823	1823	文政6	6.21-22	7	28,29	多摩川	鶴田川		多摩川	破堤	河川洪水	上	油江	L			大磯(茨城)		船江水害史	
270	大雨	暴風雨	1823	1823	文政6	6.21-2	7	28,29	多摩川	両国川		多摩川	大水								大水	東京市史編委炎燹p.63	
271			1823	1823	文政6	7	8~9	6~4	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上	昭島	L		宮沢村	田方が川瀬となる	洪水	昭島市史附編	

No	天候	発生原因	発生年(西暦)	発生年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(関東)	他の発生水体(東海)	水系	直接原因	洪水型	発生地	行政区	左岸/右岸	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候	
271			1823	文政6	7	8~9	6~4	多摩川・秋川			多摩川	洪水	河川洪水	上	福生	L	築地村3、中神村、押島村之関	築地村3軒人家流失、中神村、押島村之間、武蔵府中道左江委村相立、5軒流失	大満水、大洪水	多摩川、大洪水	多摩川	
271	雷鳴大雨		1823	文政6	7.12.13	8	17.18													東京市史編要 災編p.631		
271	大風	大風	1823	文政6	8.17	9	21	多摩川			多摩川	風雪	中		世田谷区	L	上野毛村	居室ならびに物置・肥し家等之類吹壊れ		世田谷区史料 第4、No.51,p.179		
	大風雨	暴風雨	1823	文政6	8.17	9	21					高潮					品川、高橋、歎津辺			武江年表		
272	大風雨	暴風雨	1823	文政6	8.17	9	21	浅川	秋川、多摩川、利根川		多摩川				八王子		高尾山	高尾山琵琶懸溢注して溺死者13人有		石川日記		
272		暴風雨	1823	文政6	8.17	9	21	案内川			浅川				八王子		高尾山	高尾山琵琶懸溢注して溺死者13人有	正統義新日記(八王子市史附編)			
272	雨、大風	暴風雨	1823	文政6	8.17	9	21	案内川			浅川				八王子		高尾山	大水。高尾山びわの滝の滝大水ニ子龍リ壺ヨリ人流失12人溺死	藤本家日記(八王子市史附編)			
272	大風	暴風雨	1823	文政6	8.17	9	21	秋川	浅川、多摩川、利根川		多摩川	大水	出水ほか		秋留野			此地無難	大志願寺過去帳(八王子市史附編)			
272		暴風雨	1823	文政6	8.17	9	21	多摩川	浅川、多摩川、利根川		多摩川	洪水	上		福生	L	熊川	一面水海のこと。江戸地跌らず流	多摩川			
272	大風雨	暴風雨	1823	文政6	8.17	9	21	利根川	多摩川、浅川、秋川		利根川	破堤					中条村和根川堤切所、坂切堤も切所、備前堤崩び切所	大洪水	藤本家文書(場玉)			
272	大風雨	暴風雨	1823	文政6	8.17	9	21					高潮					品川、高橋	大真	武江年表(場玉)			
272	大雨	大雨	1809	文化6	8.17	9	21										江戸及近国	所々洪水、東海通川々往來止る	災編p.640			
272			1823	文政6	8.17	9	21				高潮						本所、深川、品川、高橋、歎津		東京市史編要 災編p.640			
272	大風雨	暴風雨	1823	文政6	8.18	9	22	多摩川	浅川、利根川		多摩川	溢水	下		大田	L	遺塚村	満水で田畑冠水		東急(1977)		
272	大風雨	暴風雨	1823	文政6	8.19	9	23	多摩川	浅川、利根川	大井川(8.23)	多摩川	破堤	下		大田	L	小林村、安方村	床上浸水	大田区史東海 文書 No.90,p.313			



No	天候	水害原因	発生日(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(関東)	他の発生水体(東北)	水系	直接原因	洪水型	発生地	現行政区	左岸/右岸	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
	大風雨	暴風雨	1823	文政6				多摩川			多摩川		上	上	柏江	上	多摩川通り5ヶ村	屋敷など吹き遣われ、洪水に付米百俵無利十年蔵押借		柏江市史	
272`			1823	文政6	12			多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	中	世田谷	上	鎌田村	11月、田畑水神		旧多摩郡鎌田村名主橋本家文書目録災害No.2	
273	大雨	大雨	1824	文政7	4.24	5	22	浅川			多摩川	出水	出水ほか	上	柏江、世田谷	上	井原8ヶ村	水神、田畑砂入り	明日は出水か	旧多摩郡鎌田村名主橋本家文書目録災害No.2	
274	大雨	大雨	1824	文政7	4	4~5	29~27	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上	柏江、世田谷	上	井原8ヶ村	水神、田畑砂入り		旧多摩郡鎌田村名主橋本家文書目録災害No.2	
274`	大雨	雷雨ほか	1824	文政7	6.10	7	6				多摩川		上	八王子				大水		八王子中市相埜附(八王子市史附編)	
274`	夕立	雷雨ほか	1824	文政7	6.23	7	19	浅川			多摩川	増水	出水ほか	上	八王子			上標、水増		多摩自傳石川通達文書2巻、p179	
274`	夕立	雷雨ほか	1824	文政7	6.24	7	20	多摩川			多摩川	増水	出水ほか	上	熊川					多摩自傳石川通達文書2巻、p182	
274`	雷雨	雷雨ほか	1824	文政7	6.28	7	24													京都市史鶴堂災編p.642	
275	大雨	大雨	1824	文政7	7.23	8	17													京都市史鶴堂災編p.642	
275	大風雨	台風	1824	文政7	7.25	8	19	多摩川	浅川、荒川、入間川、利根川		多摩川	破堤	河川洪水	下	大田	上	道塚八幡塚村、道塚村、八幡塚村、大田	満水、稲穂穂子特に八幡塚村地内字五郎、五郎、八幡塚村、大田	24日から大風雨で満水	大田区史通国全、葉王寺文書No.57、p.297	
275	大雨、夕立、夜	台風	1824	文政7	7.25	8	19	多摩川	浅川、荒川、入間川、利根川		多摩川	出水	出水ほか	上	福生	上	熊川	出水	出水、15日から今日迄上々雨長雨のため、流水少々	多摩自傳石川通達文書2巻、p187	
275	大風雨	台風	1824	文政7	7.27	8	21	多摩川			多摩川	満水	河川洪水	中	大田	上	下丸子村	田畑泥水短水	満水	大田区史平川家文書2、No.25、p.703	
275	大風雨	台風	1824	文政7	7.25	8	19	多摩川	浅川、荒川、入間川、利根川		多摩川	破堤	河川洪水	下	大田	上	天王木大塚	田畑冠水、家屋床上海水		大田区史北川家文書4	
275	大雨	台風	1824	文政7	7.25	8	19	浅川	多摩川、入間川、利根川		多摩川				八王子			洪水		石川日記	
275	台風	台風	1824	文政7	7.25	8	19	浅川			多摩川									八王子中市相埜附(八王子市史附編)	

No.	天候	水害原因	発生源年(西暦)	発生年月	西暦日	西暦月	西暦日	旧暦日	旧暦月	旧暦日	年号	発生年月(西暦)	発生年月	西暦日	西暦月	西暦日	発生水水体	他の発生水水体(鶴巻)	他の発生水水体(東海)	水系	直接原因	洪水型	発源地	現行政区	左岸・右岸	左岸・右岸・支流	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候						
275	大風雨	台風	1824	7.24-25	文政7	18,19	8	7.24-25	8	7.24-25	文政7	1824	7.24-25	文政7	18,19	8	荒川	多磨川、入間川、利根川	多磨川、入間川、利根川	荒川	破堤	河川洪水	上	福生	L	左岸・右岸	多磨川、入間川、利根川	大洪水			加藤家文書(稿玉)						
275	大風雨	台風	1824	7.24-25	文政7	18,19	8	7.24-25	8	7.24-25	文政7	1824	7.24-25	文政7	18,19	8	利根川	多磨川、入間川、利根川	多磨川、入間川、利根川	利根川	破堤	河川洪水	上	福生	L	左岸・右岸	多磨川、入間川、利根川				羽生市史(稿玉)						
275	大風雨	台風	1824	7.23,24,25	文政7	17,18,19	8	7.23,24,25	8	7.23-25	文政7	1824	7.23-25	文政7	17,18,19	8	多磨川	多磨川、入間川、利根川	多磨川、入間川、利根川	多磨川	満水	出水ほか	上	福生	L	左岸・右岸	多磨川、入間川、利根川	満水			多摩白邊石川酒造文書(巻一) 天明日記						
275	大風雨	台風	1824	7.24-25	文政7	18,19	8	7.24-25	8	7.24-25	文政7	1824	7.24-25	文政7	18,19	8	入間川	多磨川、入間川、利根川	多磨川、入間川、利根川	荒川	破堤	河川洪水	上	福生	L	左岸・右岸	多磨川、入間川、利根川				川島郷土史(稿玉)						
275	暴風雨	台風	1824	7.23-25	文政7	17,18,19	8	7.23-25	8	7.23-25	文政7	1824	7.23-25	文政7	17,18,19	8																江戸、諸洲	洪水		佐藤、奥羽も暴風雨	目下部No.418	
275	大風雨	台風	1824	夏中	文政7		夏中		夏中		文政7	1824	夏中	文政7		夏中	多磨川	多磨川	多磨川	多磨川	出水	出水ほか	下	大田	L	左岸・右岸	多磨川	出水で田畑不作				大田区史(議院) No.58, p.297					
275	大風	大風	1824		文政7						文政7	1824		文政7			多磨川	多磨川	多磨川	多磨川	風	風雪	中	大田	L	左岸・右岸	多磨川	居宅吹潰れ、救助米			公私世田谷年代記(坤), p.175						
276	暴風雨	暴風雨	1824	8.11-14	文政7	3~6	9	8.11-14	9	8.11-14	文政7	1824	8.11-14	文政7	3~6	9	多磨川	多磨川、入間川、利根川	多磨川、入間川、利根川	多磨川	溢水	河川溢水	中	大田	L	左岸・右岸	多磨川、入間川、利根川	満水			大田区史(北川家文書4)						
276	暴風雨	暴風雨	1824	8.11-14	文政7	3~6	9	8.11-14	9	8.11-14	文政7	1824	8.11-14	文政7	3~6	9	多磨川	多磨川、入間川、利根川	多磨川、入間川、利根川	多磨川	破堤	河川洪水	下	大田	L	左岸・右岸	多磨川、入間川、利根川	満水			大田区史(東海家文書No.91, p.314)						
276	暴風雨	暴風雨	1824	8.11-14	文政7	3~6	9	8.11-14	9	8.11-14	文政7	1824	8.11-14	文政7	3~6	9	多磨川	多磨川、入間川、利根川	多磨川、入間川、利根川	多磨川	破堤	河川洪水	中	大田	L	左岸・右岸	多磨川、入間川、利根川	満水			大田区史(平川家文書2)						
276	雨	暴風雨	1824	8.13	文政7	5	9	8.13	9	8.13	文政7	1824	8.13	文政7	5	9	多磨川	多磨川、入間川、利根川	多磨川、入間川、利根川	多磨川	出水	出水ほか	上	八王子	L	左岸・右岸	多磨川	大水出			石川日記						
276			1824	8.14	文政7	6	9	8.14	9	8.14	文政7	1824	8.14	文政7	6	9	多磨川	多磨川、入間川、利根川	多磨川、入間川、利根川	多磨川	破堤	河川洪水	下	大田	L	左岸・右岸	多磨川	14日昼8時水除堤、8:11-14時雨、満水、同7時半水除堤。7月も玉川堤林、安方村惣押開田畑耕作向又窪田之地場所優先残らず、9時夜歩余無し。			大田区史(東海家文書No.92, p.316)						
276			1824	8.15	文政7	7	9	8.15	9	8.15	文政7	1824	8.15	文政7	7	9	多磨川	多磨川、入間川、利根川	多磨川、入間川、利根川	多磨川	満水	河川溢水	中	大田	L	左岸・右岸	多磨川	大水			大田区史(平川家文書2, No.25, p.703)						
276	暴風雨	暴風雨	1824	8.13	文政7	5	9	8.13	9	8.13	文政7	1824	8.13	文政7	5	9	多磨川	多磨川、入間川、利根川	多磨川、入間川、利根川	多磨川														目下部No.419			
276	北風	暴風雨	1824	8.13,14	文政7	5,6	9	8.13,14	9	8.13,14	文政7	1824	8.13,14	文政7	5,6	9	多磨川	多磨川、入間川、利根川	多磨川、入間川、利根川	多磨川	洪水	河川洪水	上	福生	L	左岸・右岸	多磨川	大水				多摩白邊石川酒造文書(巻一) 天明日記					

No	天候	水害原因	発生年(西暦)	発生年月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(関東)	他の発生水体(東北)	水系	直接原因	洪水型	発生地 形地域	現行政区	左岸/右岸	砂堤・ 遊流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
276	大雨、 風	暴風雨	1824	8.15	9	7	多摩川	浅川、 荒川、 隅田川	多摩川、隅 田川	多摩川	出水	出水ほ か	上	福生	L		熊川	出水	夜風大	多摩自慢石川 酒造文書2 巻,p.92	
276	風雨	暴風雨	1824	8.15	9	7	隅田川	浅川、 荒川、 荒川	多摩川、多 摩川	荒川							本所、深 川	浸水	出水	東京市史編委 災況p.642	
276	南大風	大風	1824	8.15	9	7	多摩川	浅川、 荒川、 隅田川	多摩川	多摩川	洪水	河川洪 水	上	福生	L		熊川	風作物に少々あ たれ、粟その他はそ れほどでないが、 稗は殊の外当たる	洪水	多摩自慢石川 酒造文書2 巻,p.193	
276			1824	8.16	9	8	多摩川	浅川、 荒川	多摩川	多摩川	満水	出水ほ か	上	福生	L			8.10から雨降り満 水	多摩自慢石川 酒造文書2 「明和安永大 災天明記録」 巻,p.193		
276	大雨	大風雨	1824	8.13- 15	9	5~7	多摩川	浅川、 荒川	多摩川	荒川								関東洪水	武江年表(筋 玉)		
276	大雨	大風雨	1824	8.13- 15	9	5~7	荒川	浅川、 多摩川、 隅田川	多摩川	荒川	破堤	河川洪 水							吹上町史(筋 玉)		
276	大雨	大雨	1824	8.25	9	17													八王子中市相 場附(八王子市 史附編)		
277	大雨	大雨	1824	閏8.15 10	10	7	隅田川	浅川、 多摩川、 隅田川	隅田川	荒川									東京市史編委 災況p.646		
276		暴風雨	1824	8.15	秋	秋	多摩川	多摩川	多摩川	多摩川	破堤	内水型 氾濫	中	大田、川 崎	L/R	下丸子 村、檜都 村々	宇北古 川	宇北古川以藤長8箇 の上の堤押切り。 榎野大堰	出水。6/13,6/14 大雨、秋3度の出水	大田区史平川 家文書 5, No.4, p.88	
276			1824				多摩川	多摩川	多摩川	多摩川			上	狛江、世 田谷	L	多摩川通 り8ヶ村	水押、米100石無利 10年賦賞与		公私世田谷年 代記(増),p.175		
276			1824				多摩川	多摩川	多摩川	多摩川	破堤	河川洪 水	上	昭島	L	中流部 左岸・ 群島山 王下300 間		昭島市史には洪水 とあり、稲運の記 述はない	昭島市史(多摩 川誌)		
276			1824	8月中旬	9														正徳彝類日記 (八王子市史附 編)		
276			1824	8	8~9		隅田川			荒川						本所、深 川、品 川、鳥 越、小 塚原	浸水深3尺(本所)		東京(1977)		
277	大雨	大雨	1824	閏8.12, 11 3	10	4.5	多摩川	秋川	多摩川	多摩川		上	福生	L				大洪水	多摩自慢石川 酒造文書2 「明和安永大 災天明記録」		
277	大雨	大雨	1824	閏8.13- 14	10	4.5	秋川	多摩川	多摩川	多摩川				秋留野				大川	大津園等過去 帳(八王子市史 附編)		

No	天候	水害原因	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体(発生地)	他の発生水体(発生地)	他の発生水体(発生地)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地域	現行政区	左岸/右岸	浸襲・崖崩・土流	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
277		大雨	1824	文政7	閏8.14	10	5	多摩川	秋川		多摩川	洪水	河川洪水	上	福生	L		拜島	多摩川・秋川両瀬 神込次分一画、件 島下宿や藪き流失	大洪水	多摩白根石川 酒通文書2巻 「明和安永大 変天明記録」	
277	大風大雨	暴風雨	1824	文政7	9.25	11	15	多摩川、 秋川			多摩川	増水	出水ほか						水五年二秋川尺5 寸高々、玉川尺6高 シ	大泥鰌等過去 感(八王子市史 附録)	牛米(1989)	
275		台風	1824	文政7	7	7~8	26~23	秋川			多摩川		上	秋留野				小川村国 後曹請所、 多摩川、 秋川両用 水樋口	曹請所決壊、堰口 破損	川穴永引き願、年 費減免、堰曹請願		
276		暴風雨	1824	文政7	8	8	24~22	秋川			多摩川		上	秋留野				小川村	曹請所決壊、堰口 破損	川穴永引き願、年 費減免、堰曹請願	牛米(1989)	
277		大雨	1824	文政7	閏8	9	22~21	秋川			多摩川		上	秋留野				小川村	曹請所決壊、堰口 破損	川穴永引き願、年 費減免、堰曹請願	牛米(1989)	
277			1824	文政7				多摩川			多摩川	溢水	河川溢水	下	大田	L		下沼部村	秋たびたひの大雨 で溢水し、川穴荒 れ地等できる		大田区史北川 家文書3、No.8	
277		大雨	1824	文政7	秋	秋		多摩川			多摩川	用水路 切断	内水型 氾濫	中	大田	L		下丸子村	用水路、往來とも 大切所	出水、文政5年から 年々引続き出水	区史平川家文 書3、No.29、p.444	
			1824	文政7				多摩川			多摩川	満水	出水ほか	下	大田区	L		小林、安 方村		文政3年(1820)初夏 大早魃田畑一同旱 損、文政6年(1823) No.92、p.316 から今年まで度々 天気が不順で大洪水 で諸作当年合め4ヶ 年の間凶作	大田区史東海 寺文書 No.92、p.316	
			1824	文政7				多摩川			多摩川	用水取 入れ口 破損	内水型 氾濫	下	大田	L		小林、安 方村	4ヶ年相続き出水、 用水取入れ口破 損、並びに堤等も 殊の外崩れ損し	出水	大田区史東海 寺文書 No.92、p.316	
			1824	文政7				多摩川			多摩川	大水	出水ほか	中	世田谷	L		鎌田村		大水	旧多摩政鎌田 村名主権本家 文書百録No.10	
278			1823、2 4	文政6、7				多摩川			多摩川	破堤	河川洪 水	上	沼島	L		宮沢村	中蔵氏給知反別 18%水没	高年度々満水、田 方川瀬二相成	小野晴彦家文 書(沼島)	
278	大雨	大雨	1825	文政8	7.25	9	7	浅川			多摩川			八王子				八王子中市相 場附(八王子市 史附録)		八王子中市相 場附(八王子市 史附録)		
278			1825	文政8	7.30	9	12				多摩川							江戸及本 州	南風強			
			1825	文政8				多摩川			多摩川	流路移 動	河川洪 水	上	調布	L		国領村	流路移動により1 町1反川敷	流路移動	調布市史	
	大雨	大雨	1825	文政8	8.12- 14	9	24~25				多摩川								諸洪水、往來止め		目下部No.422	
279	雨	雨	1825	文政8	8.20	10	2	浅川	多摩川		多摩川	出水	出水ほか		八王子				出水		石川日記	
		雷雨	1825	文政8	8.20	10	2				多摩川								諸洪水、往來止め		目下部No.423	

No.	天候	水害原因	発生年(西暦)	発生年月日	西暦月	西暦日	西暦月	西暦日	発生水体(東)	他の発生水体(東)	物の発生水体(東)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地域	現行行政区	五岩/右岸	破壊・遺流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
279	天気	雨	1825	文政8	8.21	10	3	多摩川	浅川		多摩川	出水	出水ほか	上		福生	L		熊川	森山左兵衛、役木ノ出置出水被引入れた所、しられぬれ子供が一入木と共に押し流され、救われた	出水	多摩白邊石川酒造文書2巻,p.282	
280	大雨	大雨	1825	文政8				多摩川			多摩川	出水	出水ほか	下	大田区	L		小林村	近年度々出水		大田区史東海寺文書No. 92, p. 316		
280	大雨	大雨	1825	文政8				多摩川			多摩川	壊堤	河川洪水	上	狛江	L	猪方村堤67所		切断		猪江次雪史		
280	大雨	大雨	1826	文政9	5.21	6	26	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L		熊川	出水		多摩白邊石川酒造文書2巻,p.337	関東5、6月大旱魃、炎暑	
280	大雨	大雨	1826	文政9	5.22	6	27	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L		熊川	益々出水		多摩白邊石川酒造文書2巻,p.337		
281	霖雨	霖雨	1826	文政9	9	10	2~30	多摩川			多摩川	出水	河川洪水	上	秋留野			小川村	川際流失	出水	牛米(1989)		
281	霖雨		1826	文政9	9	10	2~30														東京市史編纂炎編p.655		
282	大風雨	暴風雨	1827	文政10	6.23	7	16	多摩川	富士川(5.23)		多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L		熊川	出水	出水・昨日も大雨	多摩白邊石川酒造文書2巻,p.337	冷夏4~6月下野下総、下野1827,28年雨多	
282	烈風強雨	暴風雨	1827	文政10	6.23	7	16	江戸川	大井川(6.9月)		江戸川	出水							真偽不明とある		東京市史編纂炎編p.656		
283	大雨	大雨	1828	文政11	5.9	6	20	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L		熊川	出水	出水・5.5,6,7雨、5.8大雨	多摩白邊石川酒造文書2巻,p.427		
283	大雨	大雨	1828	文政11	5.7~9	6	18~12											江都及茨州	洪水	洪水	東京市史編纂炎編p.660		
283	大雨	大雨	1828	文政11	5.9	6	12	多摩川			多摩川	用水樋壊損	内水型氾濫	上	昭島	L		中神	組合用水以燻破損		諸用日記控p.12		
284	大風雨	台風	1828	文政11	6.30	8	9	多摩川			多摩川(6月晦日)、富士川(6.30)	満水	河川洪水	下	大田	L		道塚村	田畑共冠水	満水(田上樋から打たれ流石籠、田舎)	多摩白邊石川酒造文書2巻,p.427		
284	風雨列	台風	1828	文政11	6.30	8	9	多摩川			多摩川	増水	出水ほか	下	大田	L		小林、安方村	増水	水位約4.5m~4.8増水	大田区史東海寺文書No. 95, p. 323		
284	雨夕方から大風雨	台風	1828	文政11	6.30	8	9	多摩川			多摩川		風雪	上	福生	L		熊川	昨毛残らず吹き倒す	満水	多摩白邊石川酒造文書2巻,p.421		
284	大雨	台風	1828	文政11	6.30	8	9	多摩川			多摩川	壊堤	河川洪水	下	大田	L	下丸子村2箇所計35間		満水		大田区史平川家文書4		
284	大風	台風	1828	文政11	6.30	8	9	浅川			多摩川	川欠	川欠		八王子					7.3歳まで大女かし之風さく、川とぞ切川欠	八王子市市組之風さく、川とぞ切川欠	大田区史(八王子市史附編)	
284	大雨大風(南風)	台風	1828	文政11	6.30	8	9	多摩川			多摩川		河川洪水	上	昭島	L		築地村	築地船留る。田地一戸に水伸赤等押入る。群島村下宮沢村前迄用水路大破。		諸用日記控p.20		

No	天候	水害原因	発生年(西暦)	生年(西暦)	号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生地	現行政区	左岸/右岸	破壊・溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
	暴風雨	暴風雨	1828		文政11	6.30	8	9					江戸			日下部No.430	
	大雨		1828		文政11	6.30	8	9					梶田谷御領分村々	満水		東京市史稿要 災編p.660	
284	台風	台風	1828		文政11	6中	7		上、中					田畑共水押		世田谷区史料 叢書 4.No.55.p.54	
284	台風	台風	1828		文政11	7.1	8	11	下	大田	上	小林、安方村		己ノ刻から一鉢に 押し開き底地の場 所稲作之分押割 し、黄田之分は格 別無く、低下邊 水、濁水で諸作生 立稲作大損	7.2水干上がる。3 月から暴雨打続き 諸作生立稲作に葉 虫多分出来	大田区史東海 寺文書 No.95.p.323	
284	大雨	台風	1828		文政11	7.2	8	10						河川溢水	河川水	荒川	1812年12.2 から50余日 巨浪、1813年 早稲江戸諸 回5~9月
284	大雨	台風	1828		文政11	6.30	8	9	上	狛江	上	和泉村堤、猪方村堤 数カ所		決壊		三田(多摩川 誌)	
284	大雨	台風	1828		文政11	6.30上 j	7	9~	上	狛江	上	和泉村字 洗石廻向 堤長ところの 堤。		川穴	満水	狛江市史	
284	暴風雨	台風	1828		文政11	7.1	8	11				上野		洪水	30・40年来の洪水	日下部No.430	
285	風雨	風雨	1828		文政11	7.10	8	20	上	昭島	上	中神		田畑川通り御曹講 み、晴日夜、口村 所分一面欠ける。 昨日曹講幸壽所、 二郎左衛門村田残 らず欠ける。	昭島前曹講所いた み、晴日夜、口村 欠所より水より、 村前一面におし、 六つ半頃水引く。	昭島日記控 p.20	
285	風雨	風雨	1828		文政11	7中	8		上	昭島	上			大満水。熊川村下 取入口から杉橋迄 平河原同様に押埋 まる。拜島村地内 字山王堤内多摩川 本瀬切込。		昭島日記控 p.38	
			1828		文政11	7	8~9	10~8				小野 堤、前 谷、本 郷堤	古河川辺 領	出水		北川辺の水害 (街玉)	
286	台風	暴風雨	1828		文政11	10.13	11	19	上	福生	上	熊川		前夜から大風雨		多摩白濁石川 源流文書2 巻、p543	
286	大雨	暴風雨	1828		文政11	10.13	11	19	上	昭島	上			満水、船留	近來此時分に満水 船留稀	昭島日記控 p.48	
286	大雨		1828		文政11	10.13	11	19						満水		東京市史稿要 災編p.663	

No	天候	発生原因	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	西暦日	発生水体	他の発生水体(国)	他の発生水体(県)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地域	現行行政区	左岸/右岸	破壊・溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
			1828	文政11					多摩川			多摩川			上、中				世田谷御領分村々			世田谷区史料 雑書4, No.55, p.54	
			1829	文政12					多摩川			多摩川	河川洪水		上	狛江	上	狛方村堤		狛江市史(記述見 つからない)		狛江市史(多摩川 註)	
			1829	文政12					多摩川			多摩川	河川洪水		下	大田	下丸子 村堤2箇所計90 間					大田区史(平川 家文書4, No.29, p.444)	
			1829	文政12					市野川			荒川	河川洪水					大田堤 破壊		出水		水害年譜(坊 玉)	
288	天気	雷雨 小	1829	文政12	7.6	8	5		多摩川	大井川 (6.20)		多摩川	出水	出水ほ か	上	福生	上	熊川		出水	前夜の夕立のため	多摩川(多摩川 酒造文書2 巻,p597)	
289	大風雨	暴風雨	1829	文政12	7.18	8	17		多摩川			多摩川	出水	出水ほ か	上	福生	上	熊川		出水		多摩川(多摩川 酒造文書2 巻,p599)	
289	暴風雨	暴風雨	1829	文政12	7.18	8	17											江戸近郊		洪水	標名山山崩れ、泥 流押出す。因幡 濃城、佐城、紀伊 も暴風雨	目下部No.433	
289	大南風 大降雷 鳴	暴風雨	1829	文政12	7.18	8	17											近郊		洪水		東京市史(稲妻 災編)p.664	
290	大雨	暴風雨	1829	文政12	8.21	8	20		多摩川	大井川(8 月)		多摩川	満水	河川溢 水	上	福生	上	熊川		大満水		多摩川(多摩川 酒造文書2 巻,p606)	
290	大風雨	暴風雨	1829	文政12	8.21	8	20		多摩川			多摩川	満水	河川溢 水	下	大田	下	道保村		満水		大田区史(蓮田 寺・薬王寺文 書No.65, p.299)	
290		暴風雨	1829	文政12	8.24	8	23		大川			荒川										東京市史(稲妻 災編)p.669	
291	大風雨	暴風雨	1831	天保2	5.10	6	19		多摩川			多摩川	破壊	河川洪 水	中	大田	中	下丸子村		田畑一部浸水		大田区史(平川 家文書4)	
292	大風雨	暴風雨	1831	天保2	7.16	8	23		多摩川			多摩川		河川溢 水	上	福生	上	熊川		満水、作物には当 たらず		多摩川(多摩川 酒造文書3 巻,p131)	
293		雨	1831	天保2	7.16	8	23		多摩川			多摩川	出水	出水ほ か	上	狛江	上	和泉、猪 方村		出水		狛江市史	
293	風雨	雨	1831	天保2	7.17	8	24		多摩川			多摩川	満水	出水ほ か	上	福生	上	熊川		満水		多摩川(多摩川 酒造文書3 巻,p131)	
293		雨	1831	天保2	夏				多摩川			多摩川		河川洪 水	中	大田	中	下丸子村		洪水、夏から雨天 打続く		大田区史(平川 家文書6, No.43, p.17)	
293	大雨	大雨	1831	天保2	7.16.1 7	8	23.24		隅田川			荒川								出水		東京市史(稲妻 災編)p.675	

No	天候	水害原因	発生(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(関東)	他の発生水体(東北)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地域	現行政区	左岸/右岸/名	津波・津波部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
294	大雨雷鳴		1832	天保3	7.16	8					多摩川	満水	出水ほか	上	昭島	L		中神村	大満水	大雨水	東京市史編纂 災編p.679 諸用日記控 p.107	
294	大雨		1832	天保3	7.22	8	多摩川				多摩川	出水	出水ほか	上	狛江	L			出水	狛江市史		
294	大雨		1832	天保3	7.24	8	多摩川				多摩川	船溜	出水ほか	上	昭島	L		中神村	大水、日野宿、拜島共船溜	諸用日記控 p.107		
295	大雨		1832	天保3	9.18	10	多摩川				多摩川	大水	河川溢水	上	昭島	L		中神村	大水	諸用日記控 p.114		
			1832	天保3			多摩川				多摩川	破堤	河川洪水	上	狛江	L	榑方村堤	決壊		三田(多摩川誌)		
296	大雨		1833	天保4	5.1	6	多摩川				多摩川	用水橋破損	内水型 河川溢 汎溢	上	狛江、世田谷	L		和泉村、大蔵村	六郷用水取水口水溜り切より下へ20間余・流腫上が切所	大田区史(大田文書(大田年))	冷夏開更 流腫切更 気候不順、長雨止まず、盛夏雨多寒冷凶作。越後・佐渡・奥羽地方も冷夏	
			1833	天保4			多摩川				多摩川	洪水	河川洪水	下	大田	L			洪水	羽田史(多摩川誌)		
297	風雨		1833	天保4	8.1	9	多摩川				多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L		熊川	出水	多摩自徳多摩自徳石川酒造文書3巻,p290		
297	大風雨		1833	天保4	8.1	9	多摩川				多摩川		下	大田	L		道塚村	田畑井吹き寄れるが格別被害なし		大田区史(通国志) 栗王寺文書No.65,p.299		
297	大風雨		1833	天保4	8.1	9												深川133間	風災	東京市史編纂 災編p.679		
297	暴風雨		1833	天保4	8.1	9												武蔵、下総、相模	中部、奥羽地方も	日下部No.437		
			1833	天保5、6年以前			多摩川				多摩川	洪水	河川洪水	中	川崎	R		高津区北見方	鶴巻15年創建、元天文元年再建以降、天保5、6年再建	神奈川県神社誌		
298	大雨		1834	天保5	4.8	5	多摩川				多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L		熊川	出水	多摩自徳多摩自徳石川酒造文書3巻,p338		
299	大雨		1834	天保5	5.14,15	6	多摩川				多摩川	垂水止	内水型 汎溢	中	大田	L		下丸子村	宇北古川懸水柱状 橋大破		大田区史(平川文書5, No.22,p.58)	
300	くもり雨		1834	天保5	8.2	9	多摩川				多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L		熊川	昨夜の雨で出水、待瀬に大魚少々	多摩自徳多摩自徳石川酒造文書3巻,p360		
	大雨		1834	天保5	8.6	9													東都	東京市史編纂 災編p.682		
301	大雨		1835	天保6	5.15	6	多摩川				多摩川	洪水	河川洪水	上	福生	L		熊川	出水・生浜里外所々の橋虹つ		多摩自徳石川酒造文書3巻,p401	
301	大雨		1835	天保6	5.6,14,15	6	多摩川				多摩川	破堤	河川洪水	下	大田	L	下丸子村2箇所計22間	流失		羽田郷土誌(大田区史では羽田誌稿)		



No	天候	発生原因	発生年(西暦)	発生年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(河川)	他の発生水体(湖)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地域	現行政区	左岸/右岸	破堤・溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候	
302			1835	天保6	6.27, 28	7	22.23	利根川			利根川						坂東太郎堤押し切り	和歌山、下総辺	田畑大いに漂没	東国大雨洪水	東京市史稿巻 火編p.683		
302	大雨	大雨	1835	天保6	6.30	7	25	多摩川	利根川		多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L		熊川	出水	出水	多摩白濁石川 高海文書3 巻,p408		
302	大風雨	暴風雨	1835	天保6	6.30	7	25	隅田川			荒川								出水	出水	東京市史稿巻 火編p.683		
302			1835	天保6	7.1	7	26												船船23艘漂流して 河国橋に掛り、橋 梁損破	出水	東京市史稿巻 火編p.683		
303		暴風雨	1835	天保6	閏7.	8~9	24~21	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	狛江	L		和泉、猪 方村	出水	出水	狛江市史		
303		暴風雨	1835	天保6	閏7.	8~9	24~21	多摩川			多摩川	破壊	河川洪水	上	狛江	L	和泉村 堤61間 他8間	和泉村			世田谷区史料 雑書第5、No.3		
303	暴風雨		1835	天保6	閏7.6	8	29													中部、中国、奥羽 地方も暴風雨	日下部No.446		
303	大風		1835	天保6	閏7.6	8	29													東国	東京市史稿巻 火編p.682		
303		暴風雨	1835	天保6	夏	夏		多摩川			多摩川	破壊	河川洪水	上	狛江	L		猪方村	現欠崩		世田谷区史料 雑書第5、 No.57, p.60		
304			1836	天保7				多摩川	大井川 (4.5月)		多摩川		河川洪水	下	大田	L		羽田	洪水		羽田史話(多摩 川誌)	長雨・冷夏 春、夏関東	
305			1836	天保7				多摩川			多摩川		河川洪水	下	大田	L	下丸子 村堤切 計3ヶ所 計42間				大田区史平川 家文書4		
304	霖雨		1836	天保7	4.			多摩川			多摩川		河川洪水	上	狛江	L			漏水		天保7年10月多 摩川通次所公 徳御書讀相入 願(狛江)狛江市 史料集第四)		
	長雨		1836	天保7	春、夏、夏	春、夏、夏		多摩川			多摩川									空夏。土用中も冷 多難。早稲は収 獲できたが、晩稻 は出来ず	日下部No.447		
305	曇り、夜雨	雨	1836	天保7	7.7	8	18	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L		熊川	出水	出水	多摩白濁石川 酒通文書3 巻,p464		
305		雨	1836	天保7	7.6	8	17	多摩川			多摩川	破壊	河川洪水	上	狛江	L		和泉村、 猪方村、 その他数ヶ所欠 破。	用水取入口水破 田畑流失、和泉村 33間流失、猪 方村100間流失等、 その他数ヶ所欠 破。	漏水、以後雨天、 度々大水	天保7年10月多 摩川通次所公 徳御書讀相入 願(狛江)狛江市 史料集第四)		
305		雨	1836	天保7	7.7	8	18	浅川			多摩川				八王子				欠ける		八王子中市相 場附(八王子 市史附編)		
	風雨		1836	天保7	7.9~ 11	8	20~22						出水ほか		多摩市					出水		東京市史稿巻 火編p.692	
306		台風	1836	天保7	7.16	8	27	大栗川			多摩川	出水	出水ほか		多摩市				出水		多摩市史資料 編二p.542		

No.	天候	発生 年(西 暦)	水害原 因	生 年(西 暦)	号	旧暦月 日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生 水体(東 東)	他の発生 水体(東 東)	水系	直接 原因	洪水型 水	発生地 形地	現行政区	左岸/ 右岸	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
306	大雨 (風あ り)	1836	台風	天保7	天保7	7.18	8	29	多摩川			多摩川	出水	出水ほ か	上	福生	上	熊川	出水	近來稀なる大水	多摩川自石川 通流文書3 巻 p.465	
306	大風雨	1836	台風	天保7	天保7	7.18	8	29	大栗川			多摩川	出水	出水ほ か	上	多摩	R	寺方村	出水	御曹語所手田彦 久田欠	多摩川史料 編二 p.462	
306		1836		天保7	天保7	7.18	8	29	18浅川			多摩川				八王 子				八王子中子相 埴附(八王子 市史附編)		
306	大風雨	1836	台風	天保7	天保7	7.18	8	29												大川通り出水	武江年表(橋 玉)	
306	大風雨	1836	台風	天保7	天保7	7.18	8	29													東京市史編 災編 p.692	
306	大風雨	1836	台風	天保7	天保7	7.18	8	29													浄国寺日蓮(行 玉)	
306	大風雨	1836	台風	天保7	天保7	7.18	8	29													三孝日蓮(橋 玉)	
306	大風雨	1836	台風	天保7	天保7	7.18	8	29													松屋筆記(橋 玉)	
306	大風雨	1836	台風	天保7	天保7	7.18	8	29	見沼用水												日下部No.448	
306	暴風雨	1836	台風	天保7	天保7	7.18	8	29														
306	暴風雨	1836	台風	天保7	天保7	7.18	8	29	利根川な ど各河川													
306	大風雨	1836	台風	天保7	天保7	7.31- 8.1	9	10~11	大栗川			多摩川	風	風雪		多摩		寺方村	田畑耕作吹荒れ	戒免録書	多摩市史資料 編二 p.542	
306	大風	1836	台風	天保7	天保7	8.1	9	11													武江年表(橋 玉)	
306	大風雨	1836	台風	天保7	天保7	8.1	9	11													東京市史編 災編 p.692	
306	大風	1836	台風	天保7	天保7	8.1	9	11														
306		1836		天保7	天保7	8.4	9	14	浅川			多摩川		河川溢 水		八王子					八王子中子相 埴附(八王子 市史附編)	
306		1836		天保7	天保7				荒川			荒川	破堤 水	河川洪 水							秋元家文書(橋 玉)	
306		1836		天保7	天保7				利根川			利根川	溢水	河川溢 水							豊石段文書 (橋玉)	
307	暴風雨	1836	暴風雨	天保7	天保7	8.12	9	22	浅川	多摩川		多摩川		河川溢 水		八王子		浅川通り	満水、穴口から田 へ水3尺		八王子中子相 埴附(八王子 市史附編)	
307	嵐	1836	暴風雨	天保7	天保7	8.13	9	23	多摩川	浅川		多摩川		風雪	下	大田区		小林、安 方村	稲作一同吹き荒ら し	大田区史草簿 寺文書 No.102 p.356		
307		1836		天保7	天保7	8.16	9	26	浅川			多摩川				八王子				大水、つつまわく 残らず欠	八王子中子相 埴附(八王子 市史附編)	
307	暴風雨	1836		天保7	天保7	8.13.1 6	9	23.26										武蔵		中部、北海道も	日下部 No.450.451	
307		1836		天保7	天保7	8.19~ 24	9	29~3													東京市史編 形編 p.692	
307	雨大風	1837		天保8	天保8	8.14	9	13		大井川 (8.14)		風	風雪					熊川	金蔵宅など店吹潰 れ、その他所々木 等吹倒し、近隣共 潰家多い、古寺の 大荒れ	風損	多摩川自石川 通流文書3 巻 p.629	

No	天候	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(関東)	他の発生水体(東海)	水系	直接原因	洪水型	発生地	現行政区	左岸/右岸	流域/法流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
307	大風雨	1837	天保8	8.14	9	13	多摩川			多摩川	河川洪水	上	狛江	狛江	L			多摩川8.9合出水、堤通り一円水押し		狛江市史	
307	暴風雨	1837	天保8	8.14	9	13							江戸				人家損害、樹木多折り、けが人出る	東海道も	日下部No.453		
307	大風雨	1837	天保8	8.14	9	13												被害少なからず		東海市史編纂	
307	暴風雨	1838	天保9	6.13	8	2	多摩川			多摩川	船留、用水路欠け	上	立川	立川	L		柴崎村	出水、日野渡船止まる、用水路大神村下切所		公私日記第2, p.68	
308	大雨	1838	天保9	6.13	8	2	多摩川			多摩川	洪水	上	福生	福生	L		糖川(向川原地所、二反高塚)	湧らず流失 「字向川原田成場落流生能取下げ所遺り(多摩自慢石川)遺文書3巻、p623)		多摩自慢石川遺文書3巻、p602	
308		1838	天保9	6.16	8	5	隅田川			荒川								阿国橋芥留杭損破	出水	東京市史編纂	
309		1839	天保10				多摩川			多摩川	堤	下	大田	大田	L					大田区史平川家文書4	
309		1839	天保10				多摩川			多摩川	出水	上	府中	府中	L					比留間家文書(府中市史上p142)	
309	霖雨	1839	天保10	8	9~10	8~6	小群川、越辺川			入間川	堤									荒川上流改修60年史(荒川年)	
309		1839	天保10				多摩川			多摩川	洪水	上	昭島	昭島	L					昭島市史附編	
310	大雨	1840	天保11	6	6~7	29~28	多摩川	荒川、利根川		多摩川	堤	下	大田	大田	L					大田区史平川家文書4	
310	大雨	1840	天保11	6	6~7	29~28	多摩川			多摩川	洪水	上	府中	府中	L		曼政村	川衣亡所、本瀬となる	嵐々出水	三ヶ村用水發急務申請願(府中の用水、p.385)	
310	大雨	1840	天保11	6.23	7	22	浅川	隅田川		多摩川	堤									八王子中市租場附(八王子市史附編)	
310	大雨	1840	天保11	6.23	7	22	秋川	荒川、利根川		多摩川	堤		秋留野市	秋留野市				水田に砂、稻全滅	洪水	秋川市史p.751	
310	大雨	1840	天保11	6.23	7	22	荒川	多摩川		荒川	堤									鈴木家文書(埼玉)	

No.	天候	発生 年(西 暦)	年号	旧暦月 日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生 水体(関 東)	他の発生 水体(東 海)	水系	直接 原因	洪水型	発地 形地	現行政区	右岸 左岸	堤防・ 遊水地	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候	
310		1840	天保11	6.24	7	23	利根川	多摩川		利根川	破壊	河川洪水					古河川辺 領	出水		北川辺の水害 (坊玉)		
310		1840	天保11	6.25	7	24	隅田川	浅川		荒川	破壊	出水ほ か		世田谷	L		下野毛村	増水 増水5尺。河国橋弁 留杭損破	下野毛村玉川通り 大水、被害なし。 No.54、p.420 6/24	東京市史編纂 災編p.715 世田谷区史料 郷書第5、 No.54、p.420 拍江市史		
310	大雨	1840	天保11	6.24			多摩川			多摩川	大水	出水ほ か	上									
311	大雨	1840	天保11	7	7~8	29~26	多摩川			多摩川	破壊	河川洪水	上	拍江	L	和泉村 三輪地 二輪地 四み廻 2ヶ所 押し切 れる						
311	大雨	1840	天保11	7.13	8	10	浅川			多摩川				八王子				大川につき水入		八王子中市相 模附(八王子 市史附編)		
311		1840	天保11	7.15	8	12	隅田川			荒川								再出水(7雨天続 き)	東京市史編纂 災編p.715			
311	暴風雨	1840	天保11	7.18	8	15	隅田川	渡良瀬川		荒川								増水	22日推量最高、150 cm越す。	東京市史編纂 災編p.715		
311	暴風雨	1840	天保11	7.18	8	15	渡良瀬川	隅田川		荒川	破壊								信越地方も	日下部No.454		
311		1840	天保11	7.19	8	16								八王子				大水、床下浸水	9月になっても水引 かず稲腐る	八王子中市相 模附(八王子 市史附編)		
311	大雨	1840	天保11	7.13- .18	8	10~15														大形願寺過去 帳(八王子市 史附編)		
311	大雨	1840	天保11	7.13.7 .19	8	10.14	秋川	荒川、利 根川		多摩川	破壊	河川洪水		秋留野市		上世橋 村川除 根160間 流失	上世橋村	洪水		秋川市史p.751		
311	大雨	1840	天保11	8.10	9	5																
312	風雨	1840	天保11	9.10	10	5	多摩川			多摩川	出水	出水ほ 上		立川	L	紫崎村	出水		大形願寺過去 帳(八王子市 史附編)			
312	風雨	1840	天保11	9.10	10	5	隅田川			荒川	出水	出水ほ か						佐敷、信越地方も	公私日記簿 4p.62 日下部No.455			
312	風雨	1840	天保11	9.10	10	5	隅田川			荒川								三度出水	東京市史編纂 災編p.715			
311	大雨	1840	天保11	夏	夏		多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上	拍江	L	和泉村		度々洪水、変地	至保11年10月 五州通御普請 所川除所行儀 (案)(拍江市史 料案第4)			
312	風雨	1841	天保12				多摩川			多摩川	破壊	河川洪水	上	拍江	L	宮沢村	中根氏給知川次請 地1反6畝2歩 川除普請所大破	大水		拍江市史		
312	風雨	1841	天保12				多摩川			多摩川	破壊	河川洪水	上	拍江	L					拍江市史		

No	天候	発生 水害既 年(西 暦)	発生 日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生 水体(関 東)	他の発生 水体(東 海)	水系	直接 原因	洪水型	発生地 形地域	現行政区	左岸/ 右岸	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候	
313	大風雨	1843	天保14 9.1	9	24	多摩川			多摩川	溢水	河川溢 水	中	大田	L	下丸子村	田畑冠水	満水、水位平水よ り3.0m増水	大田区史平川 家文書2	1842年夏、 秋早稲江戸	
313	大風雨	1843	天保14 9.2	9	25	大川			荒川							出水	伊勢、九州も	東京市史稿要 災編p.740		
313	暴風雨	1843	天保14 9.4	9	27												出水	日下部No.456		
313	暴風雨	1843	天保14 9.5	9	28	大川											出水	東京市史稿要 災編p.740		
313	大風	1843	天保14 9.4	9	27												出水	東京市史稿要 災編p.739		
314	大雨	1843	天保14 閏9.1- 2	10	23,24	多摩川	陣田川		多摩川	悪水吐 込樋大 破	内水型 冠水	中	大田	L	下丸子村	字北古川悪水吐込 樋大破	満水	大田区史平川 家文書5, No.28, p.61		
314	大雨	1843	天保14 閏9.1- 2	10	23,24	多摩川	陣田川		多摩川	破堤	河川洪 水	上	拍江	L	和泉村	長さ58間、横8軒 余欠崩れ	満水	天保14年10月 三鈴村寛助出 金による普請 願(稗)拍江市 史料集第4)		
314	暴風雨	1843	天保14 閏9.2	10	24	陣田川	多摩川		荒川						江戸	出水	下総古河洪水	日下部No.458		
314	大風雨	1843	天保14 閏9.2	10	24													東京市史稿要 災編p.742		
315	暴風雨	1844	天保 15(弘化 4.9 元)	5	25	多摩川			多摩川	破堤	河川洪 水	上	立川	L	築地村	田畑冠水	満水近年稀なり	公私日記第8 p.30		
315	暴風雨	1844	天保 15(弘化 4.8 元)	5	24													下総古河洪水	日下部No.459	
315	大風雨	1844	天保 15(弘化 4.8 元)	5	24												夜	東京市史稿要 災編p.749		
315	暴風雨	1844	弘化元 4.28	6	17~19	多摩川			多摩川		河川溢 水	中	大田	L	下丸子村	堤外畑溝変作露隔 れ	満水	大田区史平川 家文書2, No.88, p.887		
315	大雨	1844	弘化元 4.28	6	13	秋川			多摩川	破堤	河川洪 水		秋留野市				満水	秋川市史p.753		
316	大雨	1844	弘化元 8.7	9	18	多摩川	陣田川		多摩川	溢水	河川溢 水	中	大田	L	下丸子村	畑通り一円数日冠 水、葉きみ大豆そ の他排水腐れ	満水、7月下旬から 不順霖雨打続く	大田区史平川 家文書2, No.86, p.887		
316	霖雨	1844	弘化元 8.6-7	9	17,18	陣田川	多摩川		荒川	出水							出水	日下部No.460		
316	連日の 霖雨	1844	弘化元 8.7	9	18	陣田川	多摩川		荒川								出水	東京市史稿要 災編p.749		
317	大風雨	1845	弘化2 7.27- 28	8	29,30	多摩川	荒川・市 ノ川・都 煉川、利 根川		多摩川	溢水	河川溢 水	中	大田	L	下丸子村	田畑冠水	満水、水位平水よ り5.2m-5.4m増水	大田区史平川 家文書2		
317	大風雨	1845	弘化2			多摩川			多摩川	溢水	河川溢 水	中	大田	L	下丸子村	地窪の場所ほ冠水	2度の大雨雨で満 水。冷氣打続く	大田区史平川 家文書4, No.7, p.413		

No	天候	発生原因	発生西暦(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(東)	他の発生水体(東)	他の発生水体(東)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地域	現行政区	左岸/右岸	堤・港流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候	
317	大雨	暴風雨	1845	弘化2	7	8~9	3~1	多摩川				多摩川	出水	出水ほか	中	大田	L		下丸子村		出水	大田区史平川家文書5, No.30, p.63		
317	大雨	暴風雨	1845	弘化2	7.28	8	30	陣田川				荒川									増水	東京市史稿変災編p.760		
317			1845	弘化2	7.28	8	30	荒川、市ノ川、都利根川	多摩川、荒川、利根川			荒川、入間川	河川洪水					各中、正、西、南、堤				満水	鈴木家文書(埼玉)	
317			1845	弘化2	7.28	8	30	利根川	多摩川、市ノ川、都利根川			利根川	河川洪水					本郷堤等破壊	古河川辺	出水		北川辺の水害(埼玉)		
317	暴風雨		1845	弘化2	7.28	8	30												江戸各所	浸水	上総も増水	日下部No.461		
317	暴風雨	暴風雨	1845	弘化2	7.28	8	30	利根川、荒川、入間川	多摩川			利根川、荒川	河川洪水							田畑に被害		日下部No.461		
317	大雨	暴風雨	1845	弘化2	7.27-28	8	29,30	多摩川	利根川			多摩川	河川洪水	上		狛江	L	二百三十間穴		田畑潮流される		弘化2年8月玉川通急水留替講願(狛江市史料集第4)		
317	大雨	暴風雨	1845	弘化2	8.27,28	9	28,29	多摩川	富士川(8.28)			多摩川	洪水吐、以總大堤	中		大田	L		下丸子村	出水		大田区史平川家文書5, No.30, p.63		
318	大雨	暴風雨	1845	弘化2	8	9	2~	多摩川				多摩川		上		府中	L	各村	青立付荒れ、砲免		通藤(1979)			
			1845	弘化2				多摩川				多摩川		上		府中	L	柳立村	水損砲免		通藤(1975)			
	暴風雨		1845	弘化2	8.28	9	29	多摩川				多摩川		上		昭島	L	雲沢村	水損石高34.4%		杉高書上帳(昭島)			
	風雨		1845	弘化2	8.28	9	29	多摩川				多摩川												
319	大雨	霖雨	1846	弘化3	6.11-18	8	2~9	多摩川	江戸川、荒川			多摩川	河川洪水			昭島	L		武蔵	伊勢、北国辺も		日下部No.462		
319	大雨	霖雨	1846	弘化3	6.11-18	8	2~9	江戸川、荒川	多摩川			江戸川、荒川										東京市史稿変災編p.760		
319	連雨	霖雨	1846	弘化3	6.20	8	11	多摩川	江戸川、荒川、多摩川			多摩川	河川洪水			昭島	L	大神下	河川洪水	用水端3間程欠陥。日野堤船止まる		公私日記第9 p.60		
319	連雨	霖雨	1846	弘化3	6.24	8	14	多摩川				多摩川	河川洪水	上						速船止まる		公私日記第9 p.61		
319	大雨	霖雨	1846	弘化3	6.27	8	17	江戸川、中川	利根川			江戸川、中川	河川洪水	上					漆所			東京市史稿変災編p.770		
319	連雨	霖雨	1846	弘化3	6.27	8	17	多摩川				多摩川	出水			立川	L		下和橋下板橋出		公私日記第9 p.62			

No.	天候	水害原因	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(河渠)	他の発生水体(湧海)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地域	現行政区	左岸/右岸	堤防・遊流部	被災地域	被災状況	概要	文献	気候	
319			1846	弘化3	6.28	8	18	利根川	江戸川、中川	江戸川、中川	利根川			川俣村堤防潰			川俣村堤防潰				東京市史編変 災編p770		
319			1846	弘化3	6.28	8	18	中川	多摩川、荒川、利根川	多摩川、荒川、利根川	中川			高月村堤防			高月村堤防				公私日記第9 p.62		
319	上ヶ雨	霖雨	1846	弘化3	6.28	8	18	多摩川	江戸川、荒川、利根川、中川	江戸川、荒川、利根川、中川	江戸川	破堤、溢水	河川洪水	上	福生、立島、日野、八王子	L/R	川俣村、秋川村、下沼、新開場通り冠水	川俣村、秋川村、下沼、新開場通り冠水	「利根川千手院下」本瀬になる。川俣村、秋川村、下沼、新開場通り冠水。			東京市史編変 災編p770	
319		霖雨	1846	弘化3	6.29	8	19	荒川	多摩川、江戸川、中川、利根川	多摩川、江戸川、中川、利根川	中川			千住宿三丁目		千住河原、小塚原、小塚、付近より本所、深川	千住河原、小塚原、小塚、付近より本所、深川	浸水。潜水床上3尺			東京市史編変 災編p770		
319	雨	霖雨	1846	弘化3	6.29	8	19	多摩川	江戸川、荒川、利根川、中川	江戸川、荒川、利根川、中川	多摩川	満水	上	昭島、立川、日野	L/R	宮沢大村、神村、築地、日野、日野谷、日野谷、日野谷	宮沢大村、神村、築地、日野、日野谷、日野谷	水源で大雨か、夜急に満水			公私日記第9 p.63		
319		霖雨	1846	弘化3	6.30	8	20	多摩川	江戸川、荒川、利根川、中川	江戸川、荒川、利根川、中川	多摩川	破堤、溢水	上	昭島、立川、日野	L/R	宮沢大村、神村、築地、日野、日野谷、日野谷	宮沢大村、神村、築地、日野、日野谷、日野谷	これまでの満水で一審。水流速く、突如、各係村は無事、府中用水乾上			公私日記第9 p.63		
319	大雨	霖雨	1846	弘化3	6.21-29	8	11~19	多摩川	江戸川、荒川、利根川、中川、元荒川	江戸川、荒川、利根川、中川、元荒川	多摩川	破堤	上	狛江	L	川俣村、川俣村、川俣村	川俣村、川俣村、川俣村	満水		弘化3年6月五 川俣切所普請 願(案)(狛江市 史料集第四)			

No	天候	水害原因	発生年(西暦)	生(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(関東)	他の発生水体(東海)	水系	直接原因	洪水型	発生地地形地畷	現行政区	左岸/右岸	堤堤・遊流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
319	大雨	大雨	1846	弘化3	6.27-7.9	8	17~30	8	利根川	多摩川、元荒川、荒川、中川	富士川(7.7)	利根川	堤堤、洪水	河川洪水			堤堤、本川保	羽生、高橋、森、幸、柳、手、松伏		江戸3大洪水(丙午の大水)	葉急(1977)		
319	大雨	大雨	1846	弘化3	6.27-7.9	8	17~30	8	江戸川	多摩川、利根川、元荒川、中川		江戸川	堤堤、洪水	河川洪水		二台半領堤	松伏戸ヶ崎		利根川、江戸川洪水流は松伏領にて	葉急(1977)			
319	大雨	大雨	1846	弘化3	6.27-7.9	8	17~30	8	荒川	多摩川、利根川、元荒川、中川		中川	堤堤、洪水	河川洪水		千住3丁目堤	千住、小幡、本所、深川、龜戸	浸水深床13尺(龜戸)、龜有、柳島(床上4・5尺(淺草))	中川、荒川洪水流は小幡にて台流	葉急(1977)			
319	大雨	大雨	1846	弘化3	6.28	8	18	8	利根川	多摩川、元荒川、中川		利根川	堤堤	河川洪水		本川保堤	江戸千住辺		羽生領利根川水田9尺余り	武江年表(埼玉)			
319	大雨	大雨	1846	弘化3	6.28	8	18	8	利根川	多摩川、元荒川、中川		利根川					羽生領・駒西領		水入り	足立家文書(埼玉)			
319	大雨	大雨	1846	弘化3	6.28	8	18	8	元荒川	多摩川、利根川、元荒川、中川		荒川							大洪水	内藤家記録(埼玉)			
319	大雨	大雨	1846	弘化3	7.9	8	30	8	中川	多摩川、利根川、元荒川、中川		中川	堤堤、洪水	河川洪水		取右衛門新田堤	豊西本所、深川	浸水の豊増し、多数の罹災者大川橋、新大橋、永代橋破壊	東京市史稿(災編)p771				
319	大雨	大雨	1846	弘化3	6.11, 12.15, 18	8	2, 3, 6, 9	8												出水	日下部No.463		
319	大雨	大雨	1846	弘化3	6.27-28	8	17, 18	8												洪水	日下部No.463		
320			1846	弘化3	7.3	8	24	8	多摩川	秋川		多摩川	出水		上					日野渡船56人乗り	公私日記		
320			1846	弘化3	7.5	8	26	8	多摩川・秋川			多摩川	洪水	河川洪水		福生		拜島村、大神村	6.24から大雨降り続く。満水。野水多く、水稲拜島、田中、上河原、大神、中津野水稲江からす流失、田方一円に水濁り、龍川村にも、出ほんぐい多、出ほんぐいの処、池へ留めの水ひき上まで、拜島付近へ多く水流れたこと珍しい	多摩自慢石川通造文書2巻「明和安永大変天明記録」			



No	天候	水害原因	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(東側)	他の発生水体(西側)	発生原因	水系	直接原因	洪水型	発生地形地域	現行行政区	左岸 右岸	破壊・ overflowing	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
320			1846	弘化3	7.6	8	27													洪水	江戸在水入、日野渡舟船即、流入40余人、其外溺死、江戸在牛島水死の老若1万余人、荒地3万石	大徳勝寺過去帳(八王子市史附編)	
320			1846	弘化3	7	8~9	22~16	多摩川				多摩川			上	沼島	L		吾沢村	中根氏給地7反6畝25歩欠損	小野精彦家文書(沼島) 狛江市史		
319 320			1846	弘化3	夏秋	夏秋		多摩川				多摩川	破堤	河川洪水	上	狛江	L	猪方、駒井村、現より上の方百間余水灌	猪方、和泉、猪方村	井宿領分・石谷・松下知行の和泉村では田方反別十一町八反歩の内1町2反歩水灌、畑方反別6町4反歩の内4町損地。			
321	暴風雨		1846	弘化3	7.7	8	28						大水	出水ほか				関東	洪水	近畿、東海道も大間	日下部No.465	関東江戸	
321	大雨		1847	弘化3	11.23-24	1	9,10					多摩川		河川洪水	上	狛江	L			大水、玉川二日止む	大徳勝寺過去帳(八王子市史附編)		
321	大雨		1847	弘化3	11	1		多摩川				多摩川	破堤	河川洪水	上	狛江	L	猪方村、猪方、和泉、猪方堤泉村堤120間決壊			三田(多摩川誌)		
322	大風雨	暴風雨	1847	弘化4	6.17	7	28	多摩川				多摩川	洪水	河川洪水	上	狛江	L		和泉村	取入れ口が切下20間押し切れ、掘削埋まる	大田区史平川翁文書(大田区史)		
323	大雨		1849	嘉永2	7.21	9	7	多摩川				多摩川	洪水	河川洪水	上	世田谷、川崎	L/R	運訪河原村地内から欠祭り上野毛相瀬水程橋まで欠陥	上野毛河、運訪河原村	春以来雨多、6月下旬から7/21頃まで既々大雨、出水	世田谷区史料 藤巻第6、No.19, p.168		
	暴風雨	暴風雨	1849	嘉永2	7.28	9	14	利根川				利根川								関東各地に出崩れ	日下部No.467		
324	大雨		1849	嘉永2	8.3	9	19	多摩川				多摩川	破堤	河川洪水	上	世田谷	L	30間余欠祭り	上野毛村	出水	世田谷区史料 藤巻第6、No.19, p.169		
324	大雨		1849	嘉永2	7~8	9		多摩川				多摩川	洪水	河川洪水	上	川崎	R		下沼部村玉川向飛地	度々の大雨で満水	大田区史北川家文書3 No.29,30,31		
324	大雨		1849	嘉永2				多摩川				多摩川	破堤	河川洪水	上	狛江	L			高水	寛永4年3月堤切所臨時普請願(室)(狛江市史料集第4)		
			1849	嘉永2	5.10	6	29	荒川				荒川							熊谷辺	出水	熊谷市史(場玉)		
			1849	嘉永2	5.10	6	29	荒川				荒川	破堤	河川洪水							川島精出丸中郷破堤	川島郷王史(場玉)	

No.	天候	水害原因	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(東)	他の発生水体(東)	水系	直接原因	洪水型	発生地形状	現行政区	左岸/右岸	堤防/破堤/溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
	大雨	大雨	1849	嘉永2	7	8~9	17~16						河川洪水					常陸、下総	洪水	大雨度々降る。	武江年表(埼玉)	
			1849	嘉永2	7	8~9	17~16	荒川			荒川	破堤					熊谷宿破堤		出水		熊谷市史(埼玉)	
			1849	嘉永2	8.9	9	25	荒川			荒川								出水		内藤家記録(埼玉)	
			1849	嘉永2				見沼用水											出水	洪水のため見沼代用水取水入れ不能	見沼代用水沿革史(埼玉)	
325			1850	嘉永3	3.19	4	30	多摩川			多摩川	出水	上		日野	R			日野運船止まる。	公私日記第13p.27		
326	南風		1850	嘉永3	8.6	9	11	多摩川			多摩川	出水	上		立川	L		柴崎村	運船止まる。	公私日記第19p.70		
326			1850	嘉永3	8.8	9	13	多摩川			多摩川	出水	上		立川	L		柴崎村	運船止まる。	公私日記第13p.71		
326			1850	嘉永3				多摩川			多摩川	出水	上		狛江	L			出水		狛江市史	
328	大風雨	暴風雨	1852	嘉永5	7.20	9	1	多摩川	荒川		多摩川	洪水	中		大田	L			田畑冠水	洪水。水位平水より3.2m増水	大田区伊平川家文書4	1851年12~1月江戸早魃
328	大雨	暴風雨	1852	嘉永5	7.19	9	2	多摩川			多摩川	洪水	上		福生	L		牛浜	運船流失、碓から北に碓を附け	公私日記第15p.58		
328	大雨	暴風雨	1852	嘉永5	7.21	9	4	多摩川			多摩川		上					秋川口	用水本碓から切取	公私日記第15p.58		
328	大風雨	暴風雨	1852	嘉永5	7.22	9	5	多摩川			多摩川	破堤	上		日野	R			運船穴頭れ	5月以来の大降り	公私日記第15p.59	
328	大風雨	暴風雨	1852	嘉永5	7.22	9	5	多摩川			多摩川	破堤	上		立川	L		柴崎村	新堤から下の万一用水網、下流溝渚下下新開から大和田下和田下通起返場残らず水押	公私日記第15. p59		
328	大風雨	暴風雨	1852	嘉永5	7.21~22	9	4.5				荒川								洪水		小島家文書(埼玉)	
328	暴風雨		1852	嘉永5	7.21~22	9	4.5				荒川	破堤						千住辺	近畿、四国も	日下部No.469		
328	暴風雨		1852	嘉永5	7.21~22	9	4.5				荒川	破堤						関宿	洪水			
329	大風雨	暴風雨	1852	嘉永5	8.10	9	23	多摩川			多摩川	洪水	下		大田	L		小林、安方村	稲作一円吹倒れ水押し垂米願	大田区史東海寺文書 No.112p.387		
	風雨		1852	嘉永5	8.10	9	23				多摩川								樹木葉の被雪多く大船漂流して水代権を破る	東京市史編纂炎編p.926		
	風雨		1852	嘉永5	8.22	10	5												被害有り		東京市史編纂炎編p.926	
330			1852	嘉永5	9	10~11	13~11	多摩川			多摩川	破堤	上		狛江	L			和泉村堤欠損	両三度	嘉永5年9月川陰堤崩壊(家)狛江市史料集第(四)	
	風雨		1852	嘉永5	9.25	11	6														東京市史編纂炎編p.928	
			1852	嘉永5				多摩川			多摩川									洪水		羽田(1975)

No.	天候	水害発生原因	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(東)	他の発生水体(西)	発生地形状	現行政区	左岸/右岸	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
	大風雨	暴風雨	1853	嘉永6	7.11	8	15								川々出水		粟沢一代記(八雲草殿圖)王子布安附編	暖冬江戸
331	大風雨	暴風雨	1853	嘉永6	7.12	8	16	多摩川			下	太田	L	小林村	開口4間飛行2間破損	大田区史東海等文書 No.114p.394		
331		暴風雨	1853	嘉永6				多摩川							洪水	羽田(1975)		
331	大雨	大雨	1853	嘉永6	7.12-13	8	16,17	見沼用水						中間戸村等破損	見沼代用水3尺増水	国会図書館蔵書見沼井筒貯水池利用水(地中)用留(地玉)		
331	暴風雨	暴風雨	1853	嘉永6	7.12	8	16	利根川						関東	洪水	日下部No.474		
331	風雨	風雨	1853	嘉永6	7.12	8	16	多摩川							東南風、西南風、西北風烈	東京市史葛巻形編 p.933		
332	大雨	大雨	1855	安政2	6.4	7	13	荒川	富士川(6.4)			八王子			大水出る	石川日記	1854年10月~12月豪雨	
	大雨(6.4,19.27)		1855	安政2				荒川								小島家文書(埼玉) 安政3.4月江戸		
333			1855	安政2	7	8~9	13~10	庄内古川							関東大洪水	高野大政重正の古川郡誌御留請願(埼玉)		
333	暴風雨	暴風雨	1855	安政2	7.26-29	9	7	渡良瀬川	大井川(7.27)						紀伊、讃岐、尾張も暴風雨	日下部No.477		
333	大風雨	暴風雨	1855	安政2	夏	夏	多摩川	多摩川			中	大田	L	下丸子村	野鶴程権願(地震と併せて)	大田区史平川家文書, No.100, p.905.4		
334	大雨	大雨	1855	安政2	8下旬			多摩川							木材上流より78本流失拾う	秋川市史, 756		
	暴風雨		1855	安政2	8.25-26	10	5.6									日下部No.478		
335	大雨	大雨	1856	安政3	7.1	8	1	多摩川			上	福生	L	大神下切所	日野漲潮止まる	公私日記第19, p.51	冷夏、長雨江戸、陸奥	
336	雷雨	雷雨(ほか)	1856	安政3	8.2	8	31	多摩川			上	日野	L		日野漲潮止まる	公私日記第19, p.56		
337	大風	台風	1856	安政3	8.25	9	23	風宮						熊川	48軒の内2軒高層、水害なし	多摩自覚石川酒造文書4巻 p.65「風損御免申請書」		
337	大風雨	台風	1856	安政3	8.25	9	23	多摩川	元荒川、陣田川		上	立川	L	紫崎村	去年の6,7月の出水を越える増水	公私日記第19, p.61		
																世田谷区史料 藤巻第7, No.12, p.159, No.13, p.160		
337	大風雨	台風	1856	安政3	8.25	9	23							上野毛村	床下浸水、風害吹飛ばし、住居4軒御用、その他物損害、下肥屋の類損害。杉立木後100本吹き折れ、7尺廻りの杉1本根こそぎ吹き倒れる。			

No	天候	水害原因	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(東)	他の発生水体(東)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地域	現行政区	左岸/右岸	左岸/右岸/河堤・堤防	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
337	大風雨	台風	1856	安政3	8.25-9	9	23												大洪水	大風	大(朝野)過去主権(八王子市史附編)	
337	大風雨	台風	1856	安政3	8.25-9	9	23								江戸			出水			武江年表(埼玉)	
337	大風雨	台風	1856	安政3	8.25-9	9	23	元荒川			荒川							概合で60軒余、岩瀬10軒余、大沢町で死者3人	香取神宮寺杉60本全折損。上総、安房高潮。下総、相模、上野各地被害。京後、信濃、奥羽も暴風雨	内藤家記録(埼玉)		
337	暴風雨	台風	1856	安政3	8.25-9	9	23							江戸				橋本、神社、弘明橋、高潮被害			日下部No.481	
337	大風雨	台風	1856	安政3	8.25-26	9	23,24	多摩川	元荒川、隅田川	元荒川、隅田川	多摩川	破堤	河川洪水	上	柳江		下流左岸・猪方・和泉	下流左岸・猪方・和泉	切断	濁水	三田(多摩川誌)	
337	大風雨	台風	1856	安政3	8.25-26	9	23,24	多摩川	元荒川、隅田川	元荒川、隅田川	多摩川			中	大田		下沼部村	密院庚申堂倒壊、品川~大森にかけて御手陣屋等倒壊	関東地方洪水	大田区文化財第5集		
337	大風雨	台風	1856	安政3	8.25-26	9	23,24	多摩川	元荒川、隅田川	元荒川、隅田川	多摩川			上	立川				25日午後10時より大風雨降る。約4.50年前以来このような倒家損木なし	公私日記		
337	大風雨	台風	1856	安政3	8.25-26	9	23,24	多摩川	元荒川、隅田川	元荒川、隅田川	多摩川	風	風	上	国立、稲城	稲	四谷、下谷保、青柳、石田新田、長沼丸、長沼村	山方に新屋の被害多く、田畑被害大丸、長沼村多い。いずれも風災害	武州小野路組合村風災書上帳、風災取調書上帳(稲城市史)			
337	大風雨	台風	1856	安政3	8.25-26	9	23,24	多摩川	元荒川、隅田川	元荒川、隅田川	多摩川	風	風	上	柳江		和泉村松下級段次邸宅吹き潰れ、井伊領和泉村・猪方9軒、岩戸村9軒全壊、和泉村鎮守六所宮の社木、ヒノキ、松、杉など風折	柳江市史				
337	大風雨	台風	1856	安政3	8.25-26	9	23,24	隅田川	多摩川、元荒川	多摩川、元荒川	荒川	溢水、高潮	河川溢水、高潮				芝、高川、品深川、本所崎(床上滑水)砂村	永代橋、新大橋、大川橋破損、築地、本所寺倒壊上堀、海岸に打ち出し、木場の村木流出	東急(1977)			
337	大風雨	台風	1856	安政3	8.25-26	9	23							大川崎				水災	大風災。前年の震災より大、土地の高さを問わず	東京市史稿室災編p.944		
337	大風雨	台風	1856	安政3	8中	8~9								中	大田		下沼部村	風損		大田区北川家文書2、No24~28		

No.	天候	水害原因	発生年(西暦)	発生年月	日暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(河川・湖)	水系	直接原因	洪水型	発生地形状	現行政区	左岸/右岸	破壊・漂流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候	
337		台風	1856					多摩川		多摩川	洪水	河川洪水	中	川崎	R		小杉村	大洪水		小杉村(小塚下)		
338	大風雨	暴風雨	1857	6	5.27-28	6	18	多摩川	大井川(5月)	多摩川		水	中	大田	L		下丸子村	田畑8分冠水		大田区史平川家文書4		
	大雨		1857	5	5.1	5	23	江戸川		江戸川								損害有り	出水	東京市史編纂委員会編p.976		
	風雨		1857	7	閏5.28	7	19											家屋を損す	出水	東京市史編纂委員会編p.976		
	風雨		1858	9	7.22	9	10											所々に損所		東京市史編纂委員会編p.976	早稲9,10月江戸	
339	大雨	大雨	1858	8	7.17	8	25	多摩川		多摩川	破堤	河川洪水	下	大田	L	道塚村	道塚村	数カ所押し破れ田畑共押し入る	洪水	本田区史編纂委員会・栗王寺文書No.69.p.300		
339	大雨	大雨	1858	8	7.18	8	26	多摩川		多摩川	破堤	河川洪水	下	大田	L	道塚村	道塚村	一円(田畑)冠水	洪水	大田区史編纂委員会・栗王寺文書No.69.p.300, No.0.22.p.358		
339	大雨	大雨	1858	9~9	7	8~9	9~6	多摩川		多摩川	洪水	河川洪水	上	福生	L		下河原(熊川)	新閉田流失。流地及び19町16区5畝、その内16町3畝15歩	洪水	多摩川史編纂委員会・p431解説9月「流地小前」万延元年「流地区別書上巻」		
340	大風雨	暴風雨	1858	8	7.22	8	30	多摩川		多摩川	破堤	河川洪水	下	大田	L	古川村堤	古川村	耕地冠水	大出水	大田区史平川家文書4		
340	大風雨	暴風雨	1858	8	7.23	8	31	多摩川		多摩川	出水	出水ほか	上	袖江	L			4月より降り続き、「是迄8,90年無之大水、切所多川形模様変わる。		「安政5年9月玉川通川除御普請方所行概並に登工手切所箇所付概(控)」(狛江市史料集第4)		
340		暴風雨	1858	8	7中	8		多摩川		多摩川	洪水	河川洪水	上	柏江	L		和泉村					
340		暴風雨	1858	8	7.27	8	7	多摩川		多摩川	洪水	河川洪水	上	国立	L			田地多く流失	大水	佐藤康○家文書(日並諸君用書)(国立布史中巻)		
340		暴風雨	1858	8	7	8~9	9~6	多摩川		多摩川	破堤	河川洪水	上	昭島	L			決壊	昭島市史に記述見つかからない		昭島市史(多摩川誌)	
340	大雨	暴風雨	1858	8	7下旬	8		多摩川		多摩川	洪水	河川洪水	上	日野	R		石田村	大雨経、近年稀の洪水		安政5年8/23居屋敷川次につき明地に伝歌作権理簡書(日野市史料集近世3支配)		
340		暴風雨	1858	8	7.22	8	30	荒川		荒川	破堤	河川洪水									根岸家文書(埼玉)	

No.	天候	発生原因	発生年(西暦)	年号	旧暦日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(東)	他の発生水体(西)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地域	現行政区	左岸/右岸	浸流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
	大雨		1858	安政5	7.27	9	7													所々水溢れる	武江年表(琦玉)	
			1858	安政5	7	8~9	9~6	荒川			荒川	破堤	河川洪水				手嶋村大田堤切所	大里郡・横見郡	水災	瓦川筋流水	稻岸家文書(琦玉)	
341			1859	安政6	5.29	6	29	多摩川			多摩川	溢水	河川溢水	中	大田	L		下丸子村	満水		大田区史平川家文書4	冷夏5,6江戸
342		台風	1859	安政6	7.12	8	10	多摩川		大井川(重)	多摩川	溢水	河川溢水	中	大田	L		下丸子村	満水		大田区史平川家文書4	
342	大風雨	台風	1859	安政6	7.12	8	10	多摩川			多摩川	溢水	河川溢水	下	大田	L		下沼部村	満水		大田区史平川家文書4	
342		台風	1859	安政6	7.12	8	10	多摩川			多摩川	破堤	河川洪水	上	国立	L	川原水除け土手200間余り割れ	和泉村・登戸村	登戸は取分大水領		御密用日記(狛江市史料集十)	
342		台風	1859	安政6	7.12	8	10	多摩川			多摩川	大水	出水ほか	上	国立	L		大水		佐藤康〇家文書(日並録録用留)(国立市史中巻)		
342		台風	1859	安政6	7.13	8	11	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上	川崎	R		長尾村	大水、耕地へ所々水入		狩木家文書(川崎市史2)p.248	
342	大風雨	台風	1859	安政6	7.12,25	8	10,23	多摩川			多摩川	出水	出水ほか					高川宿~羽田村海岸、五川村、通り水川行まで	材木流れ着けば建札せよとの通達	出水、満水	世田谷区史料書第7. No.49, p.390	
342		台風	1859	安政6	7.12	8	10	多摩川			多摩川							福生、拝島村へ1本、25日に流れ出す			世田谷区史料書第7. No.50, p.391	
343	大雷雨		1859	安政6	7.21	8	19													大洪水、田畑大に荒れ、医王寺山大崩れ、密五新門裏大崩、此時八幡山にて杉木木伐、大橋新に相成	万暦相傳記(八王子市史附編)	
343	大風雨	台風	1859	安政6	7	7~8	30~27	多摩川			多摩川	満水	河川溢水	中	大田	L		当村字洲廻の立木へ材木流れ附く	満水		大田区史平川家文書2. No.60p.755.No.61.62.p.756	
343	台風		1859	安政6	7	7~8	30~27	多摩川			多摩川	破堤	河川洪水	上	柏江	L	和泉村堤全壊、川除流失	堤内田畑一円石・砂利押入	往古から申伝へも無き満水	玉川堤川除普請方御達達願(安) (狛江市史料集第4)		
343	風雨	台風	1859	安政6	7.24	8	22	多摩川	浅川、荒川、五荒川、綾瀬川、和泉川、瀬長瀬川		多摩川	洪水	河川洪水	上山	青梅			日向和田、万年橋4尺程水が越す。大柳原浸水。釜ヶ原で民家流失石河原。山中辺道、橋崩れ、通行止め		青梅の自然1 p351		

No	天候	水害原因	発生年(西暦)	発生年(西暦)	西暦月	西暦日	西暦月	西暦日	旧暦月	旧暦日	年号	発生年(西暦)	発生年(西暦)	水害原因	水系	他の発生水体(東)	他の発生水体(海)	発生地	地形地	行政区	左岸/右岸	堤防・遊水部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候	
343	大雨	台風	1859	1859	8	7.25	8	23			安政6	1859	1859	河川洪水	多摩川	浅川、荒川、綾瀬川、越部川、利根川、渡良瀬川	浅川、荒川、綾瀬川、越部川、利根川、渡良瀬川	上	河川洪水	上	国立	L	大瀧用水山より上り、横切所3箇所、5箇所、島下より、堤切所2箇所、その他、土手334箇所切れる。猪方村大瀧切所106間、岩戸村、和泉村、境切所9間、	和泉村、猪方村、岩戸村	和泉村：百姓家5軒、軒上3・1尺水入り、雑穀道に流失、5尺浸水、5町、字中山原の百姓家9軒、5尺浸水、難波屋宅流失、隣田連具多分に流失。字表耕地の水押し。和泉村字堤外(台上田中)：堤2町ほど水押し入り	和泉、猪方、岩戸、宇奈根、大瀧、猪田、下野毛村米畑間浸水	狛江市史	
343		台風	1859	1859	8	7.25	8	23			安政6	1859	1859	大水	多摩川	浅川、荒川、綾瀬川、越部川、利根川、渡良瀬川	浅川、荒川、綾瀬川、越部川、利根川、渡良瀬川	上	出水ほか	上	国立	L		大水		佐藤謙○家文書(日並縣誌用留)(国立市史中巻)		
343		台風	1859	1859	8	7.25	8	23			安政6	1859	1859	洪水	多摩川	浅川、荒川、綾瀬川、越部川、利根川、渡良瀬川	浅川、荒川、綾瀬川、越部川、利根川、渡良瀬川	上	河川洪水	上	併中	L	分梅、蓮光寺、鬼取、押立村	分梅床上1尺、蓮光寺分下床上村2尺5寸、鬼取村1尺・1尺5.6寸、押立村1尺6.7寸、鎌倉など壊れ、小道は流水、水田一田畝水、土砂流入。上流、損地4町2区、押立4町2区6畝5歩	比留間七重郎日記「諸用留」(淺藤、1979)			
343			1859	1859	8	7.25	8	23			安政6	1859	1859	洪水	多摩川	浅川、荒川、綾瀬川、越部川、利根川、渡良瀬川	浅川、荒川、綾瀬川、越部川、利根川、渡良瀬川	下	河川洪水	下		御獄村滝本	北島家土砂に埋まる	洪水	青梅の自然1 p327			
343	大雨雨(稀なる)	台風	1859	1859	8	7.25	8	23			安政6	1859	1859	堤、湛水	多摩川	浅川、荒川、綾瀬川、越部川、利根川、渡良瀬川	浅川、荒川、綾瀬川、越部川、利根川、渡良瀬川	上	河川洪水	上	大田	L	堤敷力所	堤上超越えで耕地一戸数日間泥水冠	7月中度々出水。多摩川跡をく濁水	大田区史平川家文書4、No.19、p.205		
343		台風	1859	1859	8	7.25	8	23			安政6	1859	1859	洪水	多摩川	浅川、荒川、綾瀬川、越部川、利根川、渡良瀬川	浅川、荒川、綾瀬川、越部川、利根川、渡良瀬川	上	河川洪水	上	川崎	R	長尾村	大水。26日入水死、27日下流訪河原村の畑に死体。	鈴木家文書(川崎市史2) p.248			

No.	天候	水害原因	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(東)	他の発生水体(東)	水系	直轄原因	洪水型	発生地形地帯	現行政区	左岸/右岸	破堤・溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
343	風雨	台風	1859	安政6	7.25	8	23										熊谷2区間	南葛西郡一戸	出水		東葛市安葛変災編p982	
343	風雨	台風	1859	安政6	7.25	8	23	多摩川	浅川、元荒川、綾瀬川、越部川、利根川、渡良瀬川	多摩川	多摩川	環破壊	河川洪水	上	福生	L			羽村環破壊		東葛市安葛変災編p982	
343	風雨	台風	1859	安政6	7.25	8	23	多摩川	浅川、元荒川、綾瀬川、越部川、利根川、渡良瀬川	多摩川	多摩川	環破壊	河川洪水	上	福生	L			羽村環破壊、上水 通止まる		東急(1977)	
343	大雨	台風	1859	安政6	7.25	8	23				多摩川	洪水	河川洪水	上	多摩市	R	一の宮村	一の宮村	水車その他諸道具、大麥流失		多摩市安資料編二p.453 東急(1977)	
343	風雨	台風	1859	安政6	7.25	8	23	荒川	多摩川、浅川、元荒川、綾瀬川、越部川、利根川、渡良瀬川	荒川	荒川	小雷 環破壊 環洪水	河川洪水				熊谷堤					
343	大風雨	台風	1859	安政6	7.25	8	23	荒川	多摩川、浅川、元荒川、綾瀬川、越部川、利根川、渡良瀬川	荒川	荒川							田畑山林人家損害		田中千弥日記(埼玉)		
343	大風雨	台風	1859	安政6	7.25	8	23	荒川	多摩川、浅川、元荒川、綾瀬川、越部川、利根川、渡良瀬川	荒川	荒川	破堤	河川洪水				熊谷酒物原堤切所		床上4~5尺浸水		相摩家文書(埼玉)	
343	大風雨	台風	1859	安政6	7.25	8	23	荒川	多摩川、浅川、元荒川、綾瀬川、越部川、利根川、渡良瀬川	荒川	荒川	破堤	河川洪水				手嶋村地内荒川堤切所		厩宅4~5尺浸水		関相家文書(埼玉)	
343	大風雨	台風	1859	安政6	7.25	8	23	元荒川、綾瀬川	多摩川、浅川、越部川、利根川、渡良瀬川	元荒川、綾瀬川	荒川	破堤	河川洪水				備前堤切れ		上瓦葺村掛樋を壊し、綾瀬川一戸に泥水押寄せ、田畑冠水		産社祭礼版(埼玉)	
343	大風雨	台風	1859	安政6	7.25	8	23	越辺川	多摩川、元荒川、綾瀬川、利根川、渡良瀬川	越辺川	入間川	破堤	河川洪水				入間郡赤庭村地先堤破堤		床上浸水		相摩家文書(埼玉)	



No.	天候	水害原因	発生 年月(西 暦)	年号	旧暦月 日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生 水体(関 東)	他の発生 水体(東 海)	水系	直接 原因	洪水型	発生地 形地域	現行政区	左岸/ 右岸	被災地域	被災状況	摘要	文献	気 候
343	大風雨	台風	1859	安政6	7.25	8	23	利根川	多摩川、 浅川、 荒川、 元荒川、 綾瀬川、 越前川、 渡良瀬川		利根川	破堤	河川洪 水		昭島					加須市史(埼 玉)	
343	台風	台風	1859	安政6	7.25	8	23	多摩川	浅川、 荒川、 元荒川、 綾瀬川、 越前川、 利根川、 渡良瀬川		多摩川		河川溢 水	上	昭島		宮沢村		28日、宮沢村阿弥 陀堂境内1.3mの水 位。対岸の栗の須 村まで一面の水。 権島村では仏福寺 門前に船、冠水家 屋との連絡	(五川大洪水 覚書)、『稲田 覚書』指田万 吉覚書文書より) (昭島市史)	
343	暴風雨	台風	1859	安政6	7.25	8	23	多摩川	浅川、 荒川、 元荒川、 綾瀬川、 越前川、 利根川、 渡良瀬川		多摩川	洪水、 高潮	河川洪 水、高 潮		昭島			洪水	高潮も。武蔵、上 野、下野、下総な ど被害著しい。上 野130~140年来の 洪水云。	日下部No.482	
343	暴風雨	台風	1859	安政6	7.25	8	荒川、利 根川、渡 良瀬川	多摩川、 浅川、 荒川、 元荒川、 綾瀬川、 越前川、 利根川、 渡良瀬川		荒川、利 根川、渡 良瀬川			河川洪 水		昭島			洪水	中部、奥羽も暴風 雨	日下部No.482	
343	台風	台風	1859	安政6	7.12.2 5.29	8	10.23、 27	多摩川			多摩川	洪水	河川洪 水	上	昭島		中神、福 島、宮沢 村	中神村12戸村25 戸、福島、宮沢村4 戸流失、破堤、台 地間に崩壊移転 れる		昭島市史	
343	大雨	台風	1859	安政6	7.24- 25	8	22.23	浅川	多摩川、 荒川、 元荒川、 綾瀬川、 越前川、 利根川、 渡良瀬川		多摩川	洪水	河川洪 水		八王子		上長房村		多摩郡域の雨 脚(八王子市史 附編)		
343	暴風雨	台風	1859	安政6	7.24- 25	8	22.23	多摩川	浅川、 荒川、 元荒川、 綾瀬川、 越前川、 利根川、 渡良瀬川		多摩川	洪水	河川洪 水	中	大田		下沼部村	床上湧水20軒、食 衣類諸農具流失	大洪水	大田区史北川 家文書2、 No.11・15	
343	暴風雨	台風	1859	安政6	7.24- 25	8	22.23	多摩川	浅川、 荒川、 元荒川、 綾瀬川、 越前川、 利根川、 渡良瀬川		多摩川	洪水	河川溢 水	中	大田		下沼部 村	碓波、田反別23町8 反6畝3歩の内空室 ノ下耕田他8字の場 所踏らず水中に 一層ながら5、6日 余り洪水、田反 別23町8反6畝3歩農 地12町2区5畝26歩 の方害無し	大田区史北川 家文書3、 No.35		

No.	天候	発生 水害原因 (歴)	発生 年(西 暦)	年号	旧暦月 日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生 水体(東 水)	他の発生 水体(東 海)	水系	直接 原因	洪水型	発生地 形地域	現行政区	左岸/ 右岸	堤堤/ 溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
343	暴風雨	台風	1859	安政6	7.24- 25	8	22.23	多摩川	浅川、 元荒川、 綾瀬川、 越部川、 利根川、 渡良瀬川	浅川、 元荒川、 綾瀬川、 越部川、 利根川、 渡良瀬川	多摩川	洪水	河川溢 水	中	大田	L	下沼部村	約15ca床上浸水	一屋敷～5、6日 冠水、12町5反水 押引	大田区安平川 家文書4 家文書4		
343	暴風雨	台風	1859	安政6	7.24- 25	8	22.23	多摩川	浅川、 元荒川、 綾瀬川、 越部川、 利根川、 渡良瀬川	浅川、 元荒川、 綾瀬川、 越部川、 利根川、 渡良瀬川	多摩川	堤堤	河川洪 水	中	大田	L	下丸子村 所袋4ヶ 所60間	約15ca床上浸水	稲作水稲手当金	大田区安平川 家文書4		
343	大風雨	台風	1859	安政6	7.24- 25	8	22.23	多摩川	浅川、 元荒川、 綾瀬川、 越部川、 利根川、 渡良瀬川	浅川、 元荒川、 綾瀬川、 越部川、 利根川、 渡良瀬川	多摩川	出水	河川溢 水	下	大田	L	小林、安 方村	田畑一円冠水、約 60ca床上浸水、家 財道具流失	出水、漏水	大田区安東海 寺文書 No.119, p.414		
343	暴風雨	台風	1859	安政6	7.24- 25	8	22.23	多摩川	浅川、 元荒川、 綾瀬川、 越部川、 利根川、 渡良瀬川	浅川、 元荒川、 綾瀬川、 越部川、 利根川、 渡良瀬川	多摩川			下	大田	L	八幡塚村	宝鐘院諸堂倒壊		大田区文化財 類8集		
	大風雨	台風	1859	安政6	7.24- 26	8	22～24	多摩川	浅川、 元荒川、 綾瀬川、 越部川、 利根川、 渡良瀬川									近來希なる大水	所々川原山崩落に て人等所々二子多 く潰れ、人馬とも 多く損じ、上野、 下野、武蔵、安房、 松、武蔵、安房、 相州固々大水の由	粟泫一代記(八 王子市史附編)		
			1859	安政6				多摩川			多摩川	洪水	河川洪 水	上	日野	R	新井村	光徳寺、地所欠 失	古菜橋の大水	元治元年4月光 徳寺等地遭受 につま一札 (日野市史料集 近世3支配)		
			1859	安政6				多摩川			多摩川	出水	河川溢 水	下	大田区	L	鎌、鶴 木、下丸 子村	田畑皆水腐れ	穢なる大出水	大田区安平川 家文書2, No.115, p.922		
344			1859	安政6	8.13	9	9	多摩川			多摩川	堤堤	河川洪 水	上	狛江	L	字半纏 下堤20 間穴所	8台ほど出水	行宮除日誌(田中 通利橋下台所江 水不入家は無 之)「丁宮村は焚流 其上水宛多分有 之、川上から氷死 入尊参り候者致人」	狛江市史		
344			1859	安政6	8	8～9	28～25	多摩川			多摩川	堤堤	河川洪 水	上	狛江	L	猪方村 堤20間 浸水			三田(多摩川 誌)		

No.	天候	発生原因	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(粟)	他の発生水体(糠)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地域	現行政区	左岸・右岸	破壊・湛流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
344			1859	安政6	8.12	9	8	多摩川			多摩川	大水	出水ほか	上	国立	L				大水	佐藤康〇家文書(日並録諸用留)(国立市史中巻)	
344			1859	安政6	8.11-13	9	7~9													大洪水	万葉相傳記(八王子市史附編)	
344	暴風雨		1859	安政6	8.13	9	9													大和、羽前も暴風雨	東京市史稿変災編p.982	
344	風雨		1859	安政6	8.12-13	9	8~9													大和、羽前も暴風雨	東京市史稿変災編p.982	
			1859	安政6				多摩川			多摩川	破壊	河川洪水	中	川崎	R		上小田中		旧来稀成出水、所々堤切れ、床上浸水、田圃一円冠水、諸田島夫盛流失	頼7家文書(川崎市史2)p.248	
			1858-1859	安政5,6				多摩川			多摩川	洪水	内水型氾濫	中、下	大田	L	矢口、下丸子、鶴木村	下丸子村地内字高古川浸水、下丸子、鶴木村地内字北古川氾濫水堀埋まる	稀なる大洪水	大田区史平川家文書5, No.32, p.63		
			1859	安政6				多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	中	世田谷	L	鎌田村	田圃砂入	満水	旧多摩郡鎌田村名主権本家文書自録其書No.4		
345	大風雨	暴風雨	1860	万延元	5.11	6	29	多摩川	大井川(5.16)		多摩川	洪水	河川洪水	上	国立	L	下谷保村	諸方溝多、用水路埋まる		佐藤康〇家文書(日並録諸用留)(国立市史中巻)		
345		暴風雨	1860	万延元	5	6~7	19~17	多摩川			多摩川	大水	出水ほか	上	羽村	L	羽村	大塚通小段渡木股糸綱切崩流失	大水	世田谷区史料鑑書第7, No.93, p.455		
345	暴風雨		1860	万延元	5.10-12	6	28~30												上野、屋敷、美濃、奥羽、東海道も	日下部No.484		
345	風雨		1860	万延元	5.11-13	6~7	29~1												出水	東京市史稿変災編p.984		
346	雨大風	暴風雨	1860	万延元	7.24	9	9	多摩川	多摩川		多摩川	大水			秋留野		星竹	大水	木堀げ	鎌三郎日記p.43		
346	大風雨	暴風雨	1860	万延元	7.25	9	10	多摩川	大井川(秋)		多摩川	大水		上	国立	L	下谷保村の川向	川瀬当方無難川向は難儀	大水	佐藤康〇家文書(日並録諸用留)(国立市史中巻)		
346	暴風雨		1860	万延元	7.24	9	9										江戸	家屋、樹木に被害。難破船多し。船橋、五井でも被害	甲斐も	日下部No.486		
346	風雨		1860	万延元	7.24	9	9											被害少なからず		東京市史稿変災編p.984		
346	大風雨		1860	万延元	7.24	9	9										上野毛村	御前札政倒し少々破損		世田谷区史料鑑書第7, No.114, p.464		
346			1860	万延元	7.24	9	9	江戸川			江戸川							床下1尺程	出水	東京市史稿変災編p.984		

No	天候	発生 年(西 暦)	発生 原因	水害原 年(西 暦)	発生 水害 水害 水害	他の発生 水害(東 暦)	他の発生 水害(東 暦)	発生水害 水害	西暦日	西暦月	西暦日	旧暦日	年号	日暦月	日暦日	西暦月	西暦日	発生地 形地域	現行政区	左岸 右岸	砂堤・ 堤防	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候	
347	大風雨	1860	暴風雨	1860	多摩川			多摩川		9	8	8	万延元	日野	上	多摩川		日野	R		浸川村		百姓難波で御救米願	万延元年9/28 大風雨につき 御救米願書(日 野市史料集近 世3立配編)			
347	大雨	1860		1860	多摩川			多摩川	6	10	8.22		万延元											東京市史編纂 災編p.986			
347	暴風雨	1860	暴風雨	1860	多摩川			多摩川					万延元	大田区	下	多摩川		大田区	L		藁、鳩之 水、下丸 子村	稲葎冠水、諸作実 のり肝要の時に 又大風雨で作物 く吹き倒れ、冠水 風節出水	3村は多摩川に面し 梅座場、4、5年前 から水難多、当年 は田植え前から大 風節出水	天田区史平川 家文書2, No.121p.927,			
348	雨	1861	雨	1861	秋川			秋川	1	2	12.20		万延元	秋留野		多摩川		秋留野			星竹	大水			備三郎日記 p.54		
349		1861		1861	多摩川			多摩川		8~9	7	7	文久元	抽江	上	多摩川		抽江	L			本洲突き当り 伸縮危機	流路移動		文久元年7月五 川堤危機の場 所因役番請願 (案)(抽江市 史料集巻4)		
350	雨	1861	雨	1861	秋川			秋川	7	11	10.5		文久元	秋留野		多摩川		秋留野			星竹	大水、材木、橋板流 失			備三郎日記 p.80		
350	風雨	1861		1861					7	11	10.5		文久元								星竹	家屋を損す			東京市史編纂 災編p.988		
351	雨	1862	雨	1862	秋川			秋川	30.5	5.6	5.2.8		文久2	秋留野		多摩川		秋留野			星竹	大水			備三郎日記 p.99		
351	暴風雨	1862		1862					30	5	5.2		文久2								武蔵	紀伊も			日下部No.487		
351	大雨風	1862		1862					30	5	5.2		文久2													東京市史編纂 災編p.989	
		1862		1862	多摩川			多摩川					文久2	抽江	上	多摩川		抽江	L							三田(多摩川 誌)	
352	大雨	1862	大雨	1862	多摩川			多摩川	25~23	8~9	8		文久2	抽江	上	多摩川		抽江	L			流路移動			文久2年9月五 川川除御願主 様御一手書請 方御(案)(抽 江市史料集第 4)		
353	大雨	1862		1862					5.8	9	8.12.1		文久2								小管木	中水				東京市史編纂 災編p.990	
353	大雨	1862		1862	黒沢川			黒沢川	16	10	8.23		文久2	青梅												市川家日記	
353	大雨	1862		1862					18	10	8.25		文久2													東京市史編纂 災編p.990	
354	雨天	1863	雨	1863	秋川			秋川	13	9	8.1		文久3	秋留野		多摩川		秋留野			星竹	出水	木揚げ			備三郎日記 p.149	暖冬2~3月 江戸 早魃
354	雨天晴 天	1863		1863	多摩川			多摩川	13~12	9~10	8		文久3	抽江	上	多摩川		抽江	L			決壊				三田(多摩川 誌)	
355	雨天	1863	雨	1863	秋川			秋川	16	11	10.6		文久3	秋留野		多摩川		秋留野			星竹	大水	木揚げ			備三郎日記 p.156	

No.	天候	発生 年(西 暦)	年号	旧暦月 日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生 水体(河 渠)	他の発生 水体(渠 溝)	水系	直接 原因	洪水型	発生地 形地域	現行政区	左岸/ 右岸	破壊・ 溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気 候
		1863	s				荒川			荒川	破堤	河川洪 水				荒川通 の久下 東竹院 地先破 堤				荒川上流改修 60年史(荒川 年)	
356	大風雨	1864	元治元	8.9	9	多摩川	浅川、 秋川、 元荒川、 黒沢川、 利根川、 渡瀬川			多摩川	破堤	河川洪 水	上	狛江	し	和泉村 堤約200 間切れ る				狛江市史	江戸残暑
356	大風雨	1864	元治元	8.9	9	黒沢川	浅川、 秋川、 多摩川、 元荒川、 利根川、 渡瀬川			入間川				青梅			小曾木村	大水、大風で諸作 物を荒らす。		市川家日記 p.102	
356	大風雨	1864	元治元	8.9	9	秋川	浅川、 多摩川、 黒沢川、 元荒川、 利根川、 渡瀬川			多摩川				秋留野			星竹	大水、風で諸作物を 荒らす。		磯三郎日記 p.190	
356	風雨	1864	元治元	8.9	9															東京市史編纂 災編p.993	
356	大風雨	1864	元治元	8.9	9	元荒川	多摩川、 浅川、 秋川、 黒沢川、 利根川、 渡瀬川			荒川										白竜山日記(倚 玉)	
356	暴風雨	1864	元治元	8.8	9															日下部No.488	
356	暴風雨	1864	元治元	8.8	9	利根川、 荒川、 渡瀬川	多摩川、 浅川、 秋川、 黒沢川			利根 川、荒 川、渡 瀬川										日下部No.488	
356	風雨	1864	元治元	8.9	9															東京市史編纂 災編p.993	
357	大雨	1864	元治元	8.25	9	多摩川	秋川、 江戸川			多摩川	破堤、 溢水	河川洪 水	上	狛江	し	下流左 岸、和 泉村160 間		一門に溢水		三田(多摩川 誌)	
357	大雨	1864	元治元	8.14- 31	9	黒沢川				江戸川				青梅			小曾木村			市川家日記 p.102	
357	大雨	1864	元治元	8.25	9	秋川	多摩川、 江戸川			多摩川				秋留野			星竹	水出る		磯三郎日記 p.191	
357	大雨	1864	元治元	8.25	9	江戸川	多摩川			江戸川							江戸川辺	家屋浸水		東京市史編纂 災編p.993	
358	大雨	1865	慶応元	5	5~6	多摩川	大井川(閘 5.1.5月)			多摩川	破堤	河川洪 水				倍方村 大堤1町 20間	倍方村 大堤、田畑に土 砂			三田(多摩川 誌)	暖冬江戸
358	大雨	1865	慶応元	5.18	6															日下部No.489	

No	天候	水害原因	発生年(西暦)	生年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(東)	他の発生水体(東海)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地域	現行政区	左岸/右岸	堤壁/遊歩道	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
358	大雨		1865	慶応元	5.17	6	14											本所、深川	床上湧水 出水		東京市史編纂 災編p.985	
	風雨		1865	慶応元	6.15.1 6	6	12.13												出水		東京市史編纂 災編p.995	暖冬江戸
359	暴風雨		1866	慶応2	2	3~4	17~14	多摩川			多摩川	出水	上	上	狛江	L		玉川通	出水		慶応2年2月玉川堤穴損につぎ国後普請願(控)(狛江市史料集第4)	
359	大風		1866	慶応2	2.21	4	6														東京市史編纂 災編p.997	
360	大雨		1866	慶応2	5.14	6	26	多摩川	秋川、黒沢川		多摩川	洪水	河川洪水	上	狛江	L		和泉村	氾濫	取入口本瀬ノ切35間切れ、堤割延べ9.5間埋まる	大田区安平川家文書(大田家)	
360	大雨		1866	慶応2	5.15	6	27	黒沢川	多摩川、秋川		入間川	大水	上山	上山	青梅			小曾木村	大水	此雨より次に暴し、秋文志中山、青梅入の白原山、大ぼさつ時雪降るとの噂	市川家日記 p.112	
360	大雨		1866	慶応2	5.15	6	27	秋川	多摩川、黒沢川		多摩川	大水			秋留野			星竹	大水	本漏げる	備三郎日記 p.258	
360	大雨		1866	慶応2	5.15	6	27														東京市史編纂 災編p.986	
361	大雨		1866	慶応2	6.3	7	14	黒沢川			入間川				青梅			小曾木村	中水		市川家日記 p.112	
362	大雨		1866	慶応2	7.1	8	10	秋川	多摩川	大水	多摩川	大水			秋留野			星竹	大水		備三郎日記 p.265	
362	大雨		1866	慶応2	7.2	8	11	多摩川	秋川		多摩川	河川洪水	上	上	狛江	L		和泉村	堤内久保地之場所田畑内冠水、石・砂利押入	6.7合出水	備三郎日記 p.265 備三郎日記 p.264	
362	大雨		1866	慶応2	7.2	8	11				多摩川				秋留野			星竹	大水	本漏げる	備三郎日記 p.264	
362	大雨		1866	慶応2	7.2	8	11				多摩川				秋留野			星竹	大水	7/1夜大雨	東京市史編纂 災編p.986	
363	大雨	暴風雨	1866	慶応2	8.6	9	14	黒沢川	秋川、多摩川、荒川		入間川	大水			青梅			小曾木村	大水		市川家日記 p.115	
363	大雨	暴風雨(南風)	1866	慶応2	8.7	9	15	黒沢川	秋川、多摩川、荒川		入間川	大水			青梅			小曾木村	大水	豪こと盛り、竹水吹きまらし、諸作物を大にあらし。	市川家日記 p.115	
363			1866	慶応2	8.7	9	15	秋川	黒沢川、多摩川、荒川		多摩川	大水			秋留野			星竹	大水		備三郎日記 p.268	
363	大雨	暴風雨	1866	慶応2	8.7-8	9	15.16	多摩川	秋川、黒沢川、荒川		多摩川	満水	河川洪水	中	大田	L		下丸子村	8分とおり冠水	満水	大田区安平川家文書4	

No.	天候	水害原因	発生年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(鴨)	他の発生水体(東海)	水系	直接原因	洪水型	系生地帯	現行政区	左岸/右岸	破壊・崩壊・崖流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
363	大風雨	暴風雨	1866	8.7	9	15	多摩川	秋川、黒沢川、荒川		多摩川	溢水		上	国立	L		下谷保村	田畑冠水	大水	佐藤康○家文書(日並録諸用留)、慶応2年10月差上申上御受書之事、本田定弘家文書(国立市史中巻)	
363	大風雨	暴風雨	1866	8.7-8	9	15,16	荒川	秋川、多摩川、黒沢川		荒川										田中千弥日記(埼玉)	
363	大風雨	暴風雨	1866	8	9-10	9-8	多摩川			多摩川	風	風雪		世田谷区L		世田谷領	早稲、中稲、晚稲吹散らし		世田谷区史料叢書第8巻、p.7, p.380		
363			1866	8	9-10	9-8	市野川、新鷺川、越辺川			荒川、入間川	破堤	河川洪水				市野川、通荒子、黒沢川、新鷺川、越辺川、毛塚村、磯堤				荒川水害志年	
363			1866	8	9-10	9-8	小群川				破堤	河川洪水				小群川、通の入間郡名細村2ヶ所磯堤				荒川上流改修60年史(荒川年)	
363	風雨	風雨	1866	8.6,7	9	14,15	大川			荒川								出水	東京市史高梁災編p.998		
363	暴風雨	暴風雨	1866	8.7	9	15	陣田川			荒川								出水	日下部No.492		
363	暴風雨	暴風雨	1866	8.7	9	15	中川			中川								上野も洪水。四国、近畿、中部、奥羽も暴風雨	日下部No.492		
			1866				利根川			利根川									中条堤冠水(7/28に古河川辺涌出水有り、北川辺の水害)	皇行政文書	
364	大雨	大雨	1867	5.15	6	17	多摩川	秋川		多摩川	取入口		上	狛江L		和泉村	取入口		大田区史平川家文書(大田年)	早観6-8月武蔵、筑後、江戸	
364	大雨	大雨	1867	5.15	6	17	秋川	多摩川		多摩川	出水			秋留野		星竹	木崩げ		備三郎日記p.297		
364	大風雨		1867	5.18	6	20													東京市史高梁災編p.1001		
365	大雨	大雨	1867	6.23	7	24	浅川			多摩川	出水	出水ほか					藪門江多水出る		備三郎日記p.306		
366	大雨	大雨	1867	7.18	8	17	浅川			多摩川	出水	出水ほか				蒲川へ大水出			石川日記		
367	曇天		1867	8.5	9	2	浅川			多摩川	出水	出水ほか				川口	川口大水出る		備三郎日記p.306		
366	晴れ、大風		1867	8.5	9	2					大水	出水ほか							東京市史高梁災編p.1001		

No	天候	発生 水害原因	発生 年(西 暦)	発生 年号	旧暦月 日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生 水体(調 東)	他の発生 水体(東 海)	水系	直接 原因	洪水型 発生地 形地域	現行政区	左岸/砂堤・ 右岸/湛流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候	
368	大雨	大雨	1867	慶応3	8.26- 27	9	23.24	秋川			多摩川	出水 か	出水ほ か	秋留野		星竹	水出、大水		備三郎日記 p.308 東京市史稿要 災編p.1001 東京市史稿要 災編p.1001		
368	大雨		1867	慶応3	8.27,2 9	9	24.26						出水ほ か								
368	大風		1867	慶応3	8.30	9	27														
369	雨	雨	1868	慶応3	12.14	1	8	秋川			多摩川	大水		秋留野		星竹	大水	木漏り	備三郎日記 p.318	長雨・冷夏 夏、秋武 下総・ 相模	
370	大雨	暴風雨	1868	慶応4 (明治 元年)	5.8	6	27	多摩川	秋川、 隅田川	大井川(5 月)	多摩川	大水	上	福生	L	熊川	大水、30人足差 出し、柳下水防	大水	多摩自慢多摩 自慢石川酒造 文書巻5、p.7		
370	大雨	暴風雨	1868	慶応4 (明治 元年)	5.8	6	27	多摩川	秋川、 隅田川		多摩川	洪水	上	柳江	L		壊滅		大田区史要川 家文書(大田 家)		
370	大雨	暴風雨	1868	慶応4 (明治 元年)	5.8	6	27	秋川	多摩川、 隅田川		多摩川	大水		秋留野		星竹	大水	木漏り	備三郎日記 p.337		
370	大雨	暴風雨	1868	慶応4 (明治 元年)	5.8	6	27	隅田川	秋川、 多摩川		荒川						神田明神、湯島台 崖崩れ		三田(多摩川 誌)		
370	暴風雨	暴風雨	1868	慶応4 (明治 元年)	5.8	6	27	隅田川	秋川、 多摩川		荒川						落水		日下部No.5.8		
370	暴風雨		1868	慶応4 (明治 元年)	5.8	6	27										小河川氾濫		日下部No.5.8		
371	大雨	大雨	1868	慶応4 (明治 元年)	5.13	7	2	多摩川			多摩川	大水	上	福生	L	熊川	大水、柳下工防方 之として河 中残らず 龍り出、牛 浜向森山 分入った 水防ため、 2間半 8相入置く、 最旱田 まで欠ける	大水	多摩自慢石川 酒造文書巻5、 p.8		
372	大雨	大雨	1868	慶応4 (明治 元年)	5.19	7	8	多摩川			多摩川	出水	上	福生	L	熊川	出水、大柳下へ 葎 牛3相	出水	多摩自慢石川 酒造文書巻5、 p.9		
372	雨	大雨	1868	慶応4	5.21	7	10	多摩川			多摩川	出水	上	福生	L	熊川	出水、大柳下へ本 瀬向かい、 葎から 村中給出で 防く	出水	多摩自慢石川 酒造文書巻5、 p.9		
373	大雨	大雨	1868	慶応4	6.22	8	10	多摩川			多摩川	出水	上	福生	L	熊川	大水	出水	多摩自慢石川 酒造文書巻5、 p.13		
373	大雨	大雨	1868	慶応4	6.23	8	11	多摩川			多摩川	出水	上				玉川、浅川大洪水 所々にて荒る		備三郎日記 p.342		
373	大雨	大雨	1868	慶応4	6.23	8	11	秋川			多摩川	大水	上	秋留野		星竹	大水		備三郎日記 p.342		
373			1868	慶応4	6.28	8	16	市ノ川、 入間川			荒川	破壊	河川洪 水				人家に浸水		川島郷土史(鈴 玉)		



No	天候	水害原因	発生(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(東)	他の発生水体(東海)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地域	行政区	左岸/右岸	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
372	大雨	大雨	1868	慶応4	5月中前後	6~7		多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上	柏江	L	和泉村	田畑一円冠水、樋子掛けの堰作石、砂引で埋まる。用水路損傷	5月中前後霪雨打撃甚しき洪水、堤180間余切所	慶応4年8月五 山川除国(後 津方願(案)) (柏江市史料集第 四)	
373	曇り		1868	慶応4	7.12	8	31				洪水	河川洪水	上	福生、梓島	L	梓島村、田中村、宮沢村、大神村	梓島田方悉く亡所、砂入り、田中村、宮沢村、大神村も同様	川原貞圃	多摩自慢石川酒造文書巻5、p.16		
373	曇り、雨少々	大雨	1868	慶応4	7.16	9	2	多摩川			多摩川	溢水	河川溢水	上	福生	L	熊川		多摩自慢石川酒造文書巻5、p.15		
373	天気	大雨	1868	慶応4	7.19	9	5	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上	福生	L	熊川、梓島、二の宮新田	熊川田方少々残存、樋は田方残存、田中村、宮沢村、大神村も同様	前日大雨、未年以來の大水	多摩自慢石川酒造文書巻5、p.15	
373	大雨	大雨	1868	慶応4	7.18	9	4	多摩川	陣田川、江戸川		多摩川	洪水	河川洪水	上				洪水		三田(多摩川誌)	
373	大雨	大雨	1868	慶応4	7.17-18	9	3,4	多摩川	陣田川、江戸川		多摩川	流路移動	河川洪水	上	柏江	L	和泉村	先般切所から藤三村、御三村、本田之中央玉川本流になる。	流路移動	慶応4年8月五山川除国(後津方願(案)) (柏江市史料集第四)	
373	大雨	大雨	1868	慶応4	7.19	9	5	多摩川	陣田川、江戸川		多摩川	洪水	河川洪水	上	柏江	L	和泉村	高約150石余水の中、石河原になる。田畑作物も流失	行至除日記 大木 栗に穂、小川たりとも通行難なる。前代未聞	慶応4年8月五山川除国(後津方願(案)) (柏江市史料集第四)	
373	大雨	大雨	1868	慶応4	7.18	9	4	浅川	多摩川		荒川	大水	出水ほか		八王子		小菅、行徳	鎌川江水水出る	石川日記		
373	大雨	大雨	1868	慶応4	7.18	9	4	陣田川、江戸川	多摩川		荒川	溢水	出水ほか				小菅、行徳		東急(1977)		
373	大雨	大雨	1868	慶応4	7.18	9	4	黒沢川	多摩川		入間川		出水ほか		青梅		小曾本村	大水	市川家日記		
373	大雨	大雨	1868	慶応4	7.18	9	4	秋川	多摩川		多摩川	大水	出水ほか		秋留野		星竹	去来年(安政6年)以來	慶三郎日記 p.344		
373	大雨	大雨	1868	慶応4	7.20	9	6	多摩川	富士川(7.23)		多摩川	洪水	河川洪水	上	日野、府中	L/R		180年来になき水、野水人死または家押し流すこと所々、府中本町通り3軒長1町程、深1丈余深る、所々水入る	清助日記		
374	大雨	大雨	1868	慶応4	9.28	11	12	秋川			多摩川	大水	出水ほか		秋留野		星竹	大水、かりほし流失	備三郎日記 p.352		
373	大雨	大雨	1868	慶応4	夏秋			荒川			荒川	破堤	河川洪水				堤切所	田畑水漏入家浸水	度々大水	吉見町市(埼玉)	
375	大雨	大雨	1868	慶応4	7	8~9	18~15	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上	沼島	L		洪水	沼島布衣附欄		
375	大雨	大雨	1868	慶応4	8.5	9	20	川口川			浅川		水				川口	大水	石川日記		
375	大雨	大雨	1868	慶応4	8.5	9	20	黒沢川	多摩川		入間川				青梅		小曾本村	大水	市川家日記 p.133		

No	天候	水害原因	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(関係)	水系	直接原因	洪水型	発生地地形	現行政区	左岸/右岸	被災地域	被災状況	摘要	文献	氣候
375	大雨 大雨(朝) 四ツ時から晴れ	大雨	1868	慶応4	8.6	9		多摩川	黒沢川	多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L	熊川	出水		多摩自慢石川 酒造文書5, p.20	
376	大雨	大雨	1868	慶応4	8.12	9		黒沢川	多摩川	入間川				青梅		小曾木村	水少々出る	富士山に雪白く見 へ、後犬に寒し	市川家日記 p.133	
377	大風雨	暴風雨	1869	明治2	7.13	8		多摩川	黒沢川	多摩川	破堤	河川洪水	上	調布	L	下石原、 上石原境	大川倉、沈砂、中 谷、菱牛、蛇籠流 失		下石原宿御普 講所大破御届 書	
377	大風雨	暴風雨	1869	明治2	7.13	8		黒沢川	多摩川	入間川	風	風雪		青梅		小曾木村	諸作物山林竹木を 多く荒らし、家を 多く吹潰し家根を 吹破り	市川家日記 p.139		
377			1869	明治2	7	8~9	18~15												青梅市の自然 p350	
377	暴風雨	暴風雨	1869	明治2	7.12	8	19									東京	近畿、東海邊、奥 羽も暴風雨	日下部No.497		
377	暴風雨	暴風雨	1869	明治2	7.12	8	19	渡島瀬川 利根川	多摩川	遠良瀬川、利 根川						増水	小河川氾濫と低湯 (57月長雨、低湯) のため農作物不 作、上野で五万石 騒動	日下部No.497		
377	大嵐	暴風雨	1869	明治2	7.13	8	20	多摩川	渡島瀬川、利根川	多摩川	大水	出水ほか	上	福生	L	熊川	大水	多摩自慢石川 酒造文書5 巻、p60		
378	大雨	大雨	1869	明治2	9.11	10	26	多摩川	多摩川	多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L	熊川	出水	多摩自慢石川 酒造文書5 巻、p66		
378			1869	明治2	秋			多摩川	多摩川	多摩川	破堤	河川洪水	上	福生	L	熊川	明治元年豪雨の翌 堤前圃水割れ流失	多摩自慢石川 酒造文書5巻、 「明治11年10 月6日堤防御普 講願」p388		
379	上ヶ雨	台風	1870	明治3	7.18	8	14	多摩川	多摩川	多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L	熊川	出水	多摩自慢石川 酒造文書5巻、 p165	1869年12~2 月早稲江戸	
379	大嵐	台風	1870	明治3	7.19	8	15	多摩川	多摩川	多摩川	破堤	河川洪水	上	福生・秋 留野	L	熊川、小 川、拜島	御普講所堤立履域 らず冠水、小川普 講所破損、拜島普 講所壊れず流失、 田壊れず冠水、 細方流方23分位 か、南下へ本流神 し寄せ、金蔵屋敷 下から9ヶ村水門ま で欠け	多摩自慢石川 酒造文書5巻、 p165		
379	くもり	台風	1870	明治3	7.20	8	16	多摩川	多摩川	多摩川	洪水	河川洪水	上	福生	L	熊川	羽村水門未口その 他十ヶ所流れ、当 村内にかかる	多摩自慢石川 酒造文書5巻、 p165		
379	くもり、曇 頃雨 少々	台風	1870	明治3	7.21	8	17	多摩川	多摩川	多摩川		内水型 氾濫	上	福生	L	熊川	羽村水門未口その 他十ヶ所流れ、当 村内にかかる	多摩自慢石川 酒造文書5巻、 p165		
379	暴風雨	台風	1870	明治3	7	7~8	28~26	多摩川	多摩川	多摩川	破堤	河川洪水	上	柏江	L	和泉村耕 地一日	決壊、冠水	川江市(多摩 川)誌		
379	大暴風 雨	台風	1870	明治3	7.12- 13	8	8.9	荒川	荒川	荒川			上	和泉村 足立郡小 各村	L	増水、出水	増水、出水 軒吹倒れる	新編埼玉県史 別編3		

No.	天候	発生 年(西 暦)	発生 年(西 暦)	年号	旧暦月 日	西暦月	西暦日	西暦日	発生水体	他の発生 水体(河 川)	他の発生 水体(湖 池)	水系	直接 原因	洪水型	発生地 形地域	現行政区	左岸/ 右岸	流域・ 溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候	
379	大風雨	1870	1870	明治3	7.19- 22	8	14~17	黒沢川			入間川	風害		風害		青梅			今井分水 々谷に水 多くたま る		市川家日記 p.146			
379	暴風雨	1870	1870	明治3	7.19	8	14												利根川寄諸河川破 堤、高潮もあり大 被害	近畿、中部も	日下部No.498			
380	雨	1870	1870	明治3	8.6	9	1	多摩川		富士川 (秋)		多摩川	大水	出水ほ か	上	福生	L		熊川	大水	大水	多摩白濁石川 酒造文書5巻、 170		
380	大雨	1870	1870	明治3	8.8	9	3	黒沢川	多摩川		入間川	洪水	河川溢 水	河川溢 水		青梅			小曾木村	大水、大橋破れる	満水	市川家日記 p.146		
380	強雨	1870	1870	明治3	8.8	9	3	多摩川	黒沢川		多摩川	洪水	河川溢 水	河川溢 水	上	福生	L		熊川	満水に行き荒所で さる	満水	多摩白濁石川 酒造文書5巻、 p83		
380	大雨	1870	1870	明治3	8	8~9	27~24	多摩川			多摩川	出水	出水ほ か	上		昭島	L			出水		昭島市史附編 p350		
380	大雨	1870	1870	明治3	8	8~9	27~24	多摩川			多摩川	洪水	河川溢 水							小布市の大橋決壊				
381		1870	1870	明治3	9	9~10	25~24	多摩川			多摩川	洪水	河川溢 水	中		大田	L		下丸子村	並抗へ本瀬差向う	洪水	大田区史平川 家文書5、 No.52、p.27		
382	大雨	1871	1871	明治4	5.28	7	15	黒沢川			入間川			上		青梅			小曾木村	大水	5.14より雨降り始 める	市川家日記 p.151		
383	大雨	1871	1871	明治4	7.9	8	24	多摩川			多摩川	破壊	河川溢 水	上		福生	L		熊川	堤前囲い少々損入	大水	多摩白濁石川 酒造文書5巻、 p238		
384		1871	1871	明治4	8	9~10	15~13	多摩川			多摩川			中		大田	L		下丸子村		洪水	大田区史平川 家文書5、 No.53、p.28		
	大風雨	1872	1872	明治5	7.22	8	25			大井川(月 日不明)										民家潰損		世田谷区史料 雑書、9、 No.123、p.227、		
385	大雨	暴風雨	1873	明治6	7.4	7	4	黒沢川			入間川					青梅			小曾木村	大水		市川家日記 p.162	千葉橋本3~ 7月早飽。 佐 福岡兵 眞・兵隊も	
385	暴風雨	暴風雨	1873	明治6	7.9	7	9	六郷川			多摩川	出水	河川溢 水							東京~横浜間鉄道 不通	出水	大田区		
386	雨	1873	1873	明治6	9.23	9	23	浅川	多摩川		多摩川	出水	出水ほ か			八王子				出水		石川日記		
386	暴風雨	暴風雨	1873	明治6	9.23	9	23	多摩川	浅川		多摩川	風、土 手崩落	出水ほ か、風 害							潰家、土手崩落			世田谷区史料 雑書、9、 No.244、p.413	
386	暴風雨	暴風雨	1873	明治6	9.24	9	24	六郷川	浅川		多摩川	出水								東京~横浜間鉄道 不通	出水	東京日日新聞 (大田年) p295		
386		暴風雨	1873	明治6	秋	秋		多摩川			多摩川	出水		上		府中	L		中河原、 下河原	用水遶流水	度々出水	府中市史下 p295		
387	大風雨 (北風)	暴風雨	1874	明治7	9.13	9	13	黒沢川			入間川	出水				青梅			小曾木村	大水	近年稀な大水	市川家日記 p.166		
388	暴風雨	暴風雨	1875	明治8	8.1	8	1	多摩川			多摩川	洪水		下		大田			六郷橋	破損		大田区		

No	天候	水害原因	発生年(西暦)	発生年(西暦)	年号	日暦月日	西暦月	西暦日	西暦日	発生水体	他の発生水体(東)	他の発生水体(関東)	他の発生水体(東海)	水系	直接原因	洪水型	発生地形態	現行政区	左岸/右岸	堤岸/砂浜/港流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
389	大雨	大雨	1875	明治8	8.9-10	8	9	10	8	隅田川、神田川	多摩川、渡良瀬川、荒川、綾瀬川	多摩川、渡良瀬川、荒川、綾瀬川	荒川、神田川	荒川、神田川									出水	東京市史稿変災編p.44	
389	大雨	大雨	1875	明治8	8.9-10	8	9	10	8	渡良瀬川、品川	多摩川、渡良瀬川、荒川、綾瀬川	多摩川、渡良瀬川、荒川、綾瀬川	渡良瀬川、品川	渡良瀬川、品川									洪水	日下部No.509	
389	大雨	大雨	1875	明治8	8.11	8			8	多摩川	渡良瀬川、品川、荒川、綾瀬川	多摩川、渡良瀬川、荒川、綾瀬川	多摩川	河川洪水	破堤、洪水	河川洪水	下	大田	L	鈴木新田凡七間	羽田講師、鈴木新田、八幡塚村	羽田村弁天橋過半流失、浸水。羽田講師地所凡百坪埋没流し、民家10軒破損	5尺余濁水	大田区、東京市史稿変災編p.51	
389	大雨	大雨	1875	明治8	8.12	8			8	多摩川	渡良瀬川、品川、荒川、綾瀬川	多摩川、渡良瀬川、荒川、綾瀬川	多摩川	河川洪水	破堤、溢水	河川洪水	下	大田	L	八幡塚村、羽田講師、鈴木新田	八幡村田畑35町疔水、講師町、鈴木新田家屋10軒破損		東京市史稿変災編p.52		
390	風雨	風雨	1875	明治8	9.17	9			9	浅川	多摩川、渡良瀬川、荒川、綾瀬川	多摩川、渡良瀬川、荒川、綾瀬川	富士川(9.17)	多摩川	出水	出水ほか		八王子				水がなり出る		石川日記	
391	台風	台風	1876	明治9	9.17	9			9	多摩川	市内溝渠、渡良瀬川、荒川、綾瀬川	市内溝渠、渡良瀬川、荒川、綾瀬川		多摩川		河川洪水	下	大田	L	六郷、八幡村	八幡村舟にて通行、六郷橋辺野漫		東京市史稿変災編p.56	早稲田、東部一帯、高崎90°Fの連日30日余連続	
391	台風	台風	1876	明治9	9.17	9			9	多摩川	市内溝渠、渡良瀬川、荒川、綾瀬川	市内溝渠、渡良瀬川、荒川、綾瀬川		多摩川	破堤、溢水	河川洪水				深川、本所、小石川、子住、八幡村	本湖で、出水堰を隠したり	最低気圧28.7mm(横浜)大湖と重なる	東京市史稿変災編p.56		
391	暴風雨	台風	1876	明治9	9.17-9.18	9			9	権現堂川、江戸川	多摩川、渡良瀬川、荒川、綾瀬川	多摩川、渡良瀬川、荒川、綾瀬川	利根川、江戸川	破堤	河川洪水	河川洪水				堤防決壊	人家に被害	洪水	堤史提要(埼玉)		
391	台風	台風	1876	明治9	9.17	9			9	多摩川	市内溝渠、渡良瀬川、荒川、綾瀬川	市内溝渠、渡良瀬川、荒川、綾瀬川	多摩川	出水	内水型氾濫	内水型氾濫	中	大田	L	下丸子村	龍水秋田破	出水	大田区史平川家文書5, No.59, p.30		
391	台風	台風	1876	明治9	秋	秋			秋	多摩川	市内溝渠、渡良瀬川、荒川、綾瀬川	市内溝渠、渡良瀬川、荒川、綾瀬川	多摩川	流路移動	河川洪水	河川洪水	上	福生	L	龍川	多摩川、本湖、本湖変遷	多摩川、本湖、本湖変遷	多摩川、本湖、本湖変遷	多摩川、本湖、本湖変遷	

No.	天候	発生 年(西 暦)	年号	旧暦月 日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生 水体(東 東)	他の発生 水体(東 海)	水系	直接 原因	洪水型	発生地 形地域	現行政区	左岸/ 右岸	被災地域	被災状況	摘要	文献	気、候
392	暴風雨	1877	明治10	7.26	7	26	大郷川	浅川		多摩川	洪水	河川洪水	下	大田	L		六郷藩様御間2間 押し流される		大田区	早稲夏神奈 川・栃木 川崎井戸水 まで枯れ た。
392	大雨	1877	明治10	7.26	7	26	多摩川	浅川	多摩川	多摩川	洪水	河川洪水	上	狹江	L	六郷用水 取入口	破損		世田谷区史料 雑書第10巻 143, p541	
392	大雨	1877	明治10	7.26	7	26	浅川	多摩川		多摩川	出水	出水ほ か	上山	八王子			甲水出る		石川日記	
392	暴風雨	1877	明治10	7	7	多摩川	多摩川			多摩川	出水	出水ほ か		青梅					青梅市の自然 p350	
393	台風	1878	明治11	9.11	9	11	浅川	柳瀬川		多摩川	出水	出水ほ か		八王子			霧の川出水		石川日記	
393	大雨	1878	明治11	9.10- 11	9	10,11	柳瀬川	浅川		荒川	破堤	河川洪水					氾濫		皇野家日記 (埼玉)	
393	大雨	1878	明治11	9.15	9	15	浅川	多摩川		多摩川	大水	出水ほ か		八王子			大水	石川日記		
393	雨	1878	明治11	9.15	9	15	多摩川	浅川、荻 川、綾瀬 川、黒 沢川、柳 瀬川		多摩川	破堤	河川洪水	上	福生	L			午後より途々出 水、11時頃洪水。午後 安水6年以茶。午後 6時大水。熊川、福 生のみ川沿いの田 冠水せむ。	多摩百億石川 酒造文書5巻、 「明治11年堤 防書録」p386	
393	暴雨	1878	明治11	9.15	9	15	多摩川	浅川、荻 川、綾瀬 川、黒 沢川、柳 瀬川		多摩川	破堤	河川洪水	上	福生	L			田尻別4町7尺4寸流 失及石砂入り潰地	多摩百億石川 酒造文書5巻、 「明治11年10 月6日堤防御普 請願」p389	
393	大雨	1878	明治11	9.15	9	15	多摩川	浅川、荻 川、綾瀬 川、黒 沢川、柳 瀬川		多摩川	洪水	河川洪水	中	川崎	R		佐内橋流失、田畑 冠水		川崎市(多摩 川誌)	
393	暴風雨	1878	明治11	9.15- 16	9	15,16					内水型 氾濫		上	羽村	L	羽村	五川上水羽村大堰 逸半損壊		東京市安藤盛 火編p.68	

No.	天候	水害原因	発生(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(関東)	他の発生水体(東北)	水系	直接原因	洪水型	発生地形状	現行政区	左岸/右岸	破堤/溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
393	暴風雨	台風	1878	明治11	9.15-16	9	15.16	浅川、綾瀬湖川、黒沢川、柳瀬川	浅川、荒川、綾瀬湖川、黒沢川、柳瀬川	多摩川	多摩川	破堤	河川洪水	下	大田	L	八幡村、外数村堤防破損	八幡村、羽田村外数村	六郷橋流失、田敷川、湯水、堤上湧水、六郷橋堤外湧水流出、羽田村流出40戸	水害被害点18戸強(15日)、13日雨、15日暴風雨、16日強雨	東京市史編委 災編p.65	
393		台風	1878	明治11	9.16	9	16	浅川、荒川、綾瀬湖川、黒沢川、柳瀬川	浅川、荒川、綾瀬湖川、黒沢川、柳瀬川	多摩川	多摩川	破堤	河川洪水	下	大田	L	八幡村、外数村堤防決壊	羽田村他外数村	羽田 長照寺流失	不通	大田区史年表 (多摩川誌)	
393	台風	台風	1878	明治11	9.14-17	9	14~17	浅川、荒川、綾瀬湖川、黒沢川、柳瀬川	浅川、荒川、綾瀬湖川、黒沢川、柳瀬川	多摩川	多摩川	破堤、洪水	河川洪水	下	大田	L	八幡村堤	羽田	六郷橋流失、田敷川、湯水、堤上湧水、六郷橋堤外2戸流失、羽田村流出40戸	東急(1977)		
393	台風	台風	1878	明治11	9.14-17	9	14~17	浅川、荒川、綾瀬湖川、黒沢川、柳瀬川	浅川、荒川、綾瀬湖川、黒沢川、柳瀬川	荒川	荒川	洪水	河川洪水				成増、岩淵、千住、嵐久、須崎、日暮里	流出40戸	低地湧水15尺(屋久)宅地廻り3尺(屋久)	東急(1977)		
393		台風	1878	明治11	9.15	9	15	浅川、荒川、綾瀬湖川、黒沢川、柳瀬川	浅川、荒川、綾瀬湖川、黒沢川、柳瀬川	多摩川	多摩川	洪水	河川洪水	上	府中	L		狛立村	狛立村盛久村用水路沿路元洪水侵入り大増	洪水	狛立村盛久村用水路沿路元洪水侵入り大増	
393	大雨	台風	1878	明治11	9.15	9	15	浅川、多摩川、荒川、綾瀬湖川、柳瀬川	浅川、多摩川、荒川、綾瀬湖川、柳瀬川	入間川	入間川				青梅		小曾木村	橋々、水車の家流失		市川家日記 p.181		
393	大雨	台風	1878	明治11	9.15	9	15	浅川、多摩川、荒川、綾瀬湖川、柳瀬川	浅川、多摩川、荒川、綾瀬湖川、柳瀬川	荒川	荒川	破堤	河川洪水								星野家日記 (埼玉)	
393	大雨	台風	1878	明治11	9.15	9	15	浅川、多摩川、荒川、綾瀬湖川、柳瀬川	浅川、多摩川、荒川、綾瀬湖川、柳瀬川	荒川	荒川	破堤、溢水	河川洪水				赤ノ川、通戸寺村地内破堤		床上湧水120戸、1,350町歩に被害		川島郷土史 (埼玉)	
393	大雨	台風	1878	明治11	9.15	9	15	浅川、多摩川、荒川、綾瀬湖川、柳瀬川	浅川、多摩川、荒川、綾瀬湖川、柳瀬川	荒川	荒川						足立郡田島村辺	出水	出水	浦和市史(埼玉)		
393	暴風雨	台風	1878	明治11	9.15-16	9	15.16	浅川、多摩川、黒沢川、綾瀬湖川、柳瀬川	浅川、多摩川、黒沢川、綾瀬湖川、柳瀬川	荒川	荒川						下谷	湯水家屋240軒、深妻山谷屋付近ノ低地出水往還通ぜず	暴風	東京市史編委 災編p.65		
393	暴風雨	台風	1878	明治11	9.14-16	9	14~16	浅川、多摩川、黒沢川、綾瀬湖川、柳瀬川	浅川、多摩川、黒沢川、綾瀬湖川、柳瀬川									各河川氾濫				

No.	天候	水害原因	発生年(西暦)	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(河渠)	他の発生水体(溝渠)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地域	現行政区	左岸/右岸	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
394			1880		明治13	10	10									青梅	小曾木村	民家倒壊、山林、竹林、作物被害。近年稀な大あらし			市川家日記 p.187	1880から81年冬。西東京、隅田川結氷3.0cm
394	暴風雨		1880		明治13	10.4	10	4									東京	家屋倒壊、死傷者			日下部No.517	
394	暴風雨		1880		明治13	10.4	10	4									神奈川	各洪水、崖崩れ、堤防決壊。糠浜浜上90cm浸水			日下部No.517	
394	暴風雨		1880		明治13	10.4	10	4									千葉八幡	高潮	近畿、東海道も暴風雨		日下部No.517	
395			1882		明治15				多摩川(六段川)			多摩川	溢水	河水	下				農作物流失		長島(1993)	
396	烈風疾雨	台風	1884		明治17	9.15	9	15	多摩川		富士川(9.15)	多摩川	洪水	河水	上	福生	龍川、福生、祥島村、祥島	新坂田地漸く福の頭3.3寸を頭すだけの冠水、高庭場や各合軒は水屋根に達す。祥島分九ヶ村用水水門破れ、本流水門に向き、龍津寺下を流下、それから河原に達す。河原では毎朝屋敷に壁水浸りし跡4尺余。	非常の出水。福生では2本の樹木根こきになりまより裏へ通る門倒れる。	多摩自覚石川 酒造文書6巻.p3		
396	大雨風	台風	1884		明治17	9.15	9	15	浅川	多摩川、蒲葉、荒川、古利根川、檜湖川		多摩川	出水	河水		八王子				石川日記		
396		台風	1884		明治17	9.15	9	15	多摩川	浅川、蒲葉、荒川、古利根川、檜湖川		多摩川	破堤、洪水、高湖	河水	下	川崎、大田	川崎御幸村、堤、羽田、新田堤			東急(1977)		
396		台風	1884		明治17	9.15	9	15	蒲葉	多摩川		荒川	溢水				本所入江、鷹戸、南郷湖岸堤防			東京市史編纂 災編p.124		
396	暴風雨	台風	1884		明治17	9.15	9	15	大川	本所、深川区、諸川		荒川					日本橋区、豊洲5丁乃	浸水		東京市史編纂 災編p.116		
396	大風雨	台風	1884		明治17	9.15	9	15	荒川	多摩川		荒川								田中千弥日記(第五)		
396	台風	台風	1884		明治17	9.15	9	15	古利根川、檜湖川	多摩川		利根川、荒川								八湖市史(第五)		
396	台風	台風	1884		明治17	9.16	9	16	浅川			多摩川	大水	出水ほか		八王子				石川日記		
396	暴風雨	台風	1884		明治17	9.17	9	17	多摩川			多摩川	溢水	出水ほか		大田		荏原郡溝村地先	凡そ9尺出水、乾漕流失	東京市史編纂 災編p.123		
396	暴風雨	台風	1884		明治17	9.17	9	17	多摩川			多摩川	出水	河水		大田	対岸	荏原郡志川内地先	量水標丈7尺5寸	東京市史編纂 災編p.124		

No	天候	発生原因	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(東)	他の発生水体(東海)	水系	直接原因	洪水型	発生地形成	現行政区	左岸/右岸	堤岸/溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
396	暴風雨	台風	1884	明治17	9.17	9	17	多摩川	江戸川		多摩川	破堤	河川洪水		大田	L	羽田灘 細野地 先凡長 30間 鈴木新 田地先 ノ所、 抗出等 破損	羽田灘師 町地先			東京市史編委 災編p.124	
396	台風	台風	1884	明治17	9.17	9	17	多摩川	都幾川		多摩川	破堤、洪水、津浪	河川洪水	下	大田	L	佐原郡 吉川村 羽田灘 師町地 崎30間、 鈴木新 田				東京市史編委 災編(多摩川 誌)	
396	暴風雨	台風	1884	明治17	9.18	9	18											廻町区家屋全潰1 棟、日本橋区家屋 全潰1棟、半潰1 棟、京橋区納屋半 潰1棟、本郷区家屋 全潰11棟半潰3棟等		東京市史編委 災編p.116		
396	暴風雨	台風	1884	明治17	9.18	9	18	多摩川			多摩川	破堤	河川洪水		大田	L	落村地 先凡45 間 望部村 赤地先 凡50間 程欠損				東京市史編委 災編p.147	
396	暴風雨	台風	1884	明治17	9.18	9	18	多摩川			多摩川	内水型 氾濫							玉川上水水源18日 午前多摩川本流平 水面上り3尺3寸増 水、同所水神山松 野流失、19日平水 面より尚2尺余増 水	東京市史編委 災編p.147		
396	暴風雨	台風	1884	明治17	9	9	多摩川	都幾川	新幾川		多摩川	高潮、破堤	河川洪水	下	大田、川 崎	九/R	瀬幸村 長桑村 地内堤 破壞			増水	神奈川県災害 誌、 川島郷土史 (埼玉)	
396	台風	台風	1884	明治17	9.17- 18	9	17,18	都幾川	多摩川		入間川	破堤	河川洪水								東京市史 災編p.152	
396	暴風雨	台風	1884	明治17	9.15	9	15														東京市史編委 災編p.152	
396	暴風雨	台風	1884	明治17	9.15	9	15	利根川、 相模川、 荒川			利根川 相模川 荒川										日下部No.524	
397	大雨天	台風	1885	明治18	7.1	7	1	浅川	多摩川	富士川 (7.1)	多摩川	大水	出水ほ か							増水	石川日記	
397	大風雨	台風	1885	明治18	7.1	7	1	多摩川	浅川、 荒川、 利根川		多摩川	洪水	下	大田	L			増水1丈5寸。六郷 橋流失、利木、葎 橋に流れ着、この ため流失	大満水	東京市史編委 災編p.155		



No	天候	発生原因	発生年(西暦)	生西(暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(関東)	他の発生水体(東海)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地域	現行政区	左岸/右岸	流域部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
397	大雨	台風	1885	明治18	7.1	7	6~1	1	多摩川	荒川、利根川		多摩川	洪水	河川洪水	上山	青梅				新千歳支存流失、鶴下方筋は80年米の大水	戸田橋、千住大橋、高妻橋流失	市川家日記 p.199	
397	暴風雨	台風	1885	明治18	7.1-2	7	6~1	1,2											関東地方	増水、出水。山崩れ、崖崩れ、耕地、家屋被害		日下部No.525	
397	大雨	台風	1885	明治18	6.29-7.1	6~1	29~1	荒川	荒川	多摩川		荒川							秩父地方	洪水		田中千弥日記(埼玉)	
397	暴風雨	台風	1885	明治18	6.29-7.1	6~1	29~1	利根川	多摩川	多摩川		利根川	破堤	河川洪水					新郷地内羽生用水取入口堤防破壊	小麦、緑作に被害		羽生市史(埼玉)	
397	台風	台風	1885	明治18	6.29-7.1	6~1	29~1	荒川	多摩川	多摩川		荒川	破堤	河川洪水					人家浸水		川島郷土史(埼玉)		
398	大雨天	大雨	1885	明治18	9.17	9		17	浅川			多摩川	出水	出水ほか		八王子				水出る		石川日記	
399	大雨天	台風	1886	明治19	9.16	9		16	浅川			多摩川	出水	出水ほか		八王子				出水		石川日記	千葉県下6月から豊懸、群馬県利根郡6~8月旱魃
399	台風	台風	1886	明治19	9.16-17	9		16,17	川口川			多摩川	大水	出水ほか		八王子			川口	大水		唐公海蔵(八王子市史附編)	
399	台風	台風	1886	明治19	9.17	9		17	黒沢川			入間川		出水ほか		青梅		小曾木村	大水、田畑、通決溝		市川家日記 p.202		
400	大雨天	大雨	1889	明治22	7.1	7		1	浅川			多摩川	出水	出水ほか		八王子				水出る		石川日記	
401	大風雨(南風)	台風	1889	明治22	9.11	9		11	黒沢川			入間川	風	風雪	上山	青梅		小曾木村	田畑諸作物、民家多荒らし。御岳山御師林氏宅地崩れ、2人死亡の群判		市川家日記 p.208		
401	暴風雨	台風	1889	明治22	9.13-9.14	9		13,14	多摩川	荒川、利根川		多摩川	破堤	河川洪水	上	立川	立川		農作物被害		立川(多摩川誌)		
401	台風	台風	1889	明治22	9	9			多摩川			多摩川			上山	青梅			御狐山林氏宅地崩れ12人志望。民家倒壊、山林、田畑作物被害。下成木土崩れ。住吉神社鎌倉倒れる		市川家日記 p.208		
401	9日以上の雨	台風	1889	明治22	9.11-12	9		11,12	荒川	多摩川		荒川						秩父郡内	大水		田中千弥日記(埼玉)		
401	暴風雨	台風	1889	明治22	9.11-12	9		11,12	荒川	多摩川		荒川								足立郡笠岡村11日暴風雨	戸田市史(埼玉)		
401	台風	台風	1889	明治22	9.11-12	9		11,12	利根川	多摩川		利根川	破堤	河川洪水				川辺村本郷地内破堤			羽生市史(埼玉)		
401	暴風雨	台風	1889	明治22	9.11-14	9		11~14												増水、堤防決壊。家屋浸水、流失、田畑流失、煙草、山崩れ、崖崩れ	日下部No.530		

No	天候	水害原因	発生年(西暦)	年号	旧暦日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(東)	他の発生水体(東海)	水系	直落原因	洪水型	発生地発地	現行政区	左岸 右岸	堤・ 溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
401	暴風雨	台風	1889	明治22	9.12	9	12	多摩川(六郷川)	荒川、隅田川、利根川	荒川、利根川	多摩川	河川洪水	河川洪水	大田	大田				暴風		東京市史編纂 災編p200	
401	暴風雨	台風	1889	明治22	9	9	多摩川(六郷川)				多摩川	河川洪水	下	太田、川崎	川	L/R	羽田村 羽田内20 間余浜 間余浜 綾町久 綾町久 八幡津 水	救助を求める者500 余人。沿岸の認知 見聞鉄道中止	出水	神奈川県災害 誌、[長島 (1983)]		
402	台風	台風	1890	明治23	8.22- 24	8	22~24	多摩川	荒川、利根川	荒川、利根川	多摩川	河川洪水	下	大田区	L		六郷村元高 津川、町 煙、矢口 村元失 生元失 元失古 口早、安 市早、安 津早、安	一面氾濫、人家540 戸床上口乃至3尺 程も浸水。鉄道線 路以西は杉線路に 達られ、蒲田村裏 手の線路を切断し たため、浸水早ま る。六郷村堤防外 人家35戸、羽田村 52戸、元村15戸計 100戸床上或は橋先 浸水も、人家に異 常なし。六郷村堤 防外の戸建屋1棟 流失	非常の出水、1丈8 尺	東京市史編纂 災編p211		
402	台風	台風	1890	明治23	8.22- 24	8	22~24	荒川	多摩川	多摩川	荒川	内水型 氾濫						床上床下浸水		東京市史編纂 災編p213		
402	大雨	台風	1890	明治23	8.22- 24	8	22~24	利根川	多摩川、 荒川	多摩川、 荒川	利根川	河川洪水						大被害		北埼玉郡誌(埼 玉)		
402	台風	台風	1890	明治23	8.22- 24	8	22~24	利根川			利根川							浸水		行田市史(埼 玉)		
402	台風	台風	1890	明治23	8.22- 24	8	22~24											死者16人、家屋流 失72戸		県議会史(埼 玉)		
402	台風	台風	1890	明治23	8	8	多摩川				多摩川	洪水	上	昭島	L				洪水	昭島市史附録		
402	大雨	台風	1890	明治23	8.23	8	23	那珂川、 利根川、 渡良瀬川、 荒川			多摩川							増水、破堤、氾濫		日下部No.531		

No.	天候	発生年(西暦)	発生年号	旧暦日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(河川、湖、海)	他の発生水体(湖、海)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地域	現行政区	左岸/右岸	被害・破壊・沿岸・港流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
403	大雨	1891	明治24	6.22	6	22	多摩川	荒川、利根川	荒川、利根川	多摩川		河川洪水	下	大田	L		大塚村河原橋辺	9戸以下1尺程度まで、人畜田畑に異状なし	矢口村辺平水より3尺、同村幸吉市街にては川越陸路のため水着1丈2尺、大塚村9尺6寸河原橋辺往還に溢れる。	東京市史稿変災編p219	
403		1891	明治24	6.20-21	6	20	利根川	多摩川	多摩川	利根川	破壊	河川洪水				村吉大塚村堤防が所てきる		20日朝より降雨、21日烈風	羽生市史(稿五)		
403	大雨	1891	明治24	6.21	6	21	多摩川	相模川、利根川	相模川、利根川	多摩川	増水	出水ほか				21ヶ所		増水	日下部No.532		
403	大雨	1891	明治24	6.21	6	21	利根川	多摩川	多摩川	利根川	破壊	河川洪水						大水、民家、道路、橋、山林、田畑被害	市川家日記 p.212		
404	大風雨(雹)	1891	明治24	9	9		多摩川	多摩川	多摩川	多摩川	大水	出水ほか						9尺5寸増水	東京市史稿変災編p222		
404	暴風雨	1891	明治24	10.1	10	1.0	多摩川	多摩川	多摩川	多摩川	増水							増水	東京市史稿変災編p222		
404	暴風雨	1891	明治24	9.30	9	30	荒川	荒川	荒川	荒川	破壊	河川洪水				3ヶ所		増水	東京市史稿変災編p222		
404	暴風雨	1891	明治24	9.30	9	30	多摩川	多摩川	多摩川	多摩川								群馬も破壊、田畑に土砂。日氏9年頃から大正元年間7年間に大正9年までの暴風雨で甚大	東京市史稿変災編p221		
405	暴風雨	1892	明治25	7	7		多摩川	多摩川	多摩川	多摩川	破壊	河川洪水	上	府中	L	西府村中河原地先堤防が甚		大水	府中市歴史年表		
405	暴風雨	1892	明治25	7.22-23	7	22.23	多摩川	相模川、荒川	相模川、荒川	多摩川	増水	出水ほか						増水	日下部No.534		
406	台風	1892	明治25	8	8		多摩川	多摩川	多摩川	多摩川	破壊	河川洪水	上	府中	L	多摩村柳立地先堤防が甚		増水	府中市歴史年表		
407	大風雨	1895	明治27	8.11	8	11	多摩川	多摩川	多摩川	多摩川	破壊	河川洪水	上	福生	L	龍川	堤防崩下の方4、50間崩れ、内の桑原1枚流失	大水	多摩自傳石川酒造文書6巻、p144		
407	暴風雨	1895	明治27	8.11	8	11	多摩川	荒川、利根川	荒川、利根川	多摩川	破壊	河川洪水	下	大田	L	在原郡矢口村大字下丸子宮沢地先二重堤防の崩壊	六郷多摩川堤防内、一舟海水4.8戸、庄上海水に至も人畜被害なし。耕地甚く甚多水作物損害多	増水。六郷橋際水量1丈2尺5寸	東京市史稿変災編p248		
407	暴風雨	1895	明治27	8.9-17	8.9-17	9-17	多摩川	荒川、利根川	荒川、利根川	多摩川	破壊	河川洪水				21ヶ所、浅川筋5ヶ所		内務大臣宛て東京府知事水害報告書	東京市史稿変災編p251		
407	暴風雨	1895	明治27	8.10-11	8	10.11	利根川	多摩川	多摩川	利根川							北埼玉郡内	家屋流失、堤防に欠所	羽生市史(稿五)		

No.	天候	水害原因	発生年(西暦)	発生時刻(西暦)	日露月日	西暦月	西暦日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(関東)	他の発生水体(東海)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地域	現行政区	左岸/右岸	流域・河川	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候	
407	暴風雨	台風	1895	明治27 8.10-11	8	10	11													関東地方	増水、堤防決壊、田畑、家屋に被害、死傷者		日下部No.536		
408	大雨	台風	1895	明治28 9.8	9	8				浅川	多摩川、荒川、元荒川		多摩川	増水	出水ほか		八王子					糸ほど出水		石川日記	
409	嵐	暴風雨	1896	明治29 8.18	8	18				多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L					多摩自慢石川 酒造文書6 巻,p206		
410	大雨	台風	1896	明治29 9.9	9	9				多摩川			多摩川	溢水	河川溢水	上	福生	L	熊川		大水、新橋下大入、堤の上まで増水	大水	多摩自慢石川 酒造文書6 巻,p207		
410	雨	台風	1896	明治29 9.9	9	9				多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L	熊川		多摩川通行不能	出水	多摩自慢石川 酒造文書6 巻,p208		
410	雨	台風	1896	明治29 9.11	9	11				多摩川			多摩川			上	福生	L	熊川				多摩自慢石川 酒造文書6 巻,p208		
410	大風雨	台風	1896	明治29 9.12	9	12				多摩川			多摩川	破堤	河川洪水	上	福生	L	熊川		10割程度流失、追々欠けA200個流失		多摩自慢石川 酒造文書6 巻,p208		
410	台風	台風	1896	明治29 9.8-9	9	8.9				多摩川	浅川、元荒川、利根川	大井川(9.10)	多摩川	破堤、溢水	河川洪水	下	大田	L	六郷	六郷村、八幡塚、蒲田村内御、田村内御、園、中村	平水より1丈5尺増水、八幡塚：5.8尺、蒲田内御：2.8尺、田村内御：2.8尺、上野水住、民立ち起き	家屋流失、人畜死傷なし。	東京市史編纂 災編p265		
410	暴風雨	台風	1896	明治29 9.8-9.16	9	8-16																	東京市史編纂 災編p266		
410	大雨	台風	1896	明治29 9.7-8.10	9	7.8.10				荒川			入間川			上山	青梅			小曾木村	大水		市川家日記 p.224		
410	台風	台風	1896	明治29 9.7-12	9	7-12				荒川	多摩川、浅川		荒川	破堤	河川洪水				市ノ川堤崩壊10ヶ所、荒川41ヶ所破堤				皇議会史(埼玉)		
410	台風	台風	1896	明治29 9.7-12	9	7-12				荒川			荒川							川柳村、大相模村	川柳村、大相模村ではこの月洪水19玉		越谷市史(埼玉)		
410	台風	台風	1896	明治29 9.10-9.11	9	10.11				荒川			荒川							戸田橋郷増水2丈1尺3寸		東京市史編纂 災編p268			
410	台風	台風	1896	明治29 9.8	9	8				多摩川			多摩川			上	昭島	L			洪水		昭島市史附編		
410	台風	台風	1896	明治29 9.8	9	8				多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L			出水		多摩自慢石川 酒造文書6 巻,p241		
410	大暴風雨	台風	1896	明治29 9	9					北芝川			多摩川	洪水	河川洪水		八王子		大幡(恩方村)		諸国水害頗多し。秋田、青森、福岡の3県津波被害多し		唐松日記(八王子市史附編)		

No.	天候	水害原因	発生年(西暦)	発生年月日	西暦月	西暦日	西暦日	発生水体	他の発生水体(関東)	他の発生水体(東海)	水系	直接原因	流水型	発源地	現行政区	右岸	左岸	破堤・溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
410	暴風雨	台風	1896	9.8-16	9	8-16	8~16	多摩川、利根川、荒川			多摩川、利根川、荒川									出水、堤防決壊		日下部No.539	
410		台風	1896	9.20頃	9	20	20	荒川			入間川				青梅					大水。20町歩の畑へ水出る	80才の古老も記憶にない。水深最大8尺	市川家日記 p.224	
411	大雨	大雨	1897	9.3	9	3	3	浅川			多摩川	出水ほか	出水ほか	八王子						水出	日間	石川日記	
412	大風	台風	1897	9.9	9	9	9	多摩川			多摩川	出水	上	福生	福生	L			俣野堤長屋少々潰。出水は本年度。出水一杯、水車の台所にて8寸、昨年9/8の出水より1尺程少ない	8夜非常の大雨。出水。普通文書5巻、p241	多摩自傳石川		
412	暴風雨	台風	1897	9.8-9	9	8,9	8,9	多摩川	荒川、利根川		多摩川	河川溢水								溢流		東京市史稿変 災編p283	
412	暴風雨	台風	1897	9.7-11	9	7~11	7~11	荒川			荒川								浸水	戸田橋際平水より9/7:6尺2分、9/8:8尺5分、9/10:1丈6尺6分、千住本橋際9/10:4尺6寸、9/11:5尺7寸	東京市史稿変 災編p283		
412	暴風雨	台風	1897	9.8-9	9			利根川			利根川	破堤							大出水			加須市史(埼玉)	
412	暴風雨	台風	1897	9.8-9	9	8,9	8,9												増水、氾濫	風雲香しく、高潮も	日下部No.540		
413		台風	1898	8.24-26	8	24	24	多摩川			多摩川	破堤	上	調布	調布	L	調布町、布田		出水、ニヶ嶺ブ切元欠損	非常召集で食い止める	堀毛(多摩川誌)		
413	雨	台風	1898	8.25	8	25	25	多摩川			多摩川	破堤	上	福生	福生	L	熊川		午後より出水、6時頃に至り今年初の大水。堤防少々破損	多摩自傳石川 通達文書6巻、p269			
413	雨	台風	1898	8.26	8	26	26	多摩川			多摩川	河川溢水	上	福生	福生	L	福生、押立		増水多摩川5.1m、六郷川4.5m	多摩自傳石川 通達文書6巻、p269			
413	大雨、台風	台風	1898	8.24-26	8	24	24	多摩川	利根川、荒川		多摩川	出水	上	川崎	川崎	R			出水、取り入れ口大破損		東京市史稿変 災編文書(堀毛(多摩川誌))		
413	大雨、台風	台風	1898	8.24-26	8	24~26	24~26	利根川、荒川	多摩川		利根川、荒川								出水	1日~6日大雨。6日台風株父、前橋を過ぎる。株父の総雨量309mm、8日葉巻本の水位22.8尺	荒川出水に關する調査書(埼玉)		
413	大雨、台風	台風	1898	8.24-26	8	247	247	利根川	多摩川		利根川								和島村浸水575戸流失11、川辺村470戸流失101戸		羽生市史(埼玉)		

No	天候	発生原因	発生 年号 (西暦)	年号 (西暦)	旧暦日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生 水体(東)	他の発生 水体(東海)	水系	直接 原因	洪水型	発生地 形地域	現行政区	左岸/ 右岸	破堤・ 溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候	
414	晴	台風	1898	明治31	9.7	9	7	多摩川			多摩川	破堤	河川洪水	上	福生	L	龍川13ヶ 所程	龍川	水害平水から1.1~2 倍増加、海部屋丸 水、明治16年以來 になき大水	多摩白濁石川 流況文書6 巻、p.70			
414	暴風雨	台風	1898	明治31	9.6-7	9	6,7					出水	出水ほか				東京、横 浜	家屋浸水、死者等 今日2名、傷者10名	無	日下部No.541			
414	暴風雨	台風	1898	明治31	9.13~ 17	9	13~17	多摩川	荒川、利 根川	富士川 (9.10)	多摩川	出水						東京府多摩川の水 被害少なからず	東京府史稿要 災編p.300	東京日新 聞、ニヶ領用 水権編(長島 (1993))			
414	暴風雨	台風	1898	明治31	9	9		多摩川			多摩川	破堤	河川洪水	上から 下		L/R	羽田村、 矢口村、 北多摩郡 調布村、 二子、溝 口	満潮時に羽田村浸 水家屋58軒、矢口 村浸水家屋95戸、 羽田村40町歩、 井天橋流失、二 子、溝口方面浸 水。ニヶ領用水権 河原取水口穴破損					
415	不止雨 天	台風	1899	明治32	10.6	10	6	浅川	多摩川		多摩川				八王子				水多く出る特別異 通り水害も無之	石川日記			
415	強雨~ 暴風雨	台風	1899	明治32	10.6-7	10	6,7	多摩川	浅川、荒 川		多摩川	破堤	河川洪水	上		八尺用 水路		新狹間、南部 崖流失	4~7日大雨、熊谷 風7日東京、熊谷 を渡る。佐台田の 水位は7日9.5尺、 8日22.2尺	梅毛(多摩川 誌) 荒川出水に關 する調査書(埼 玉)			
415	台風	台風	1899	明治32	10.4-7	10	4~7	荒川	多摩川、 浅川		荒川						西森地方	柳木、家屋、火災 電燈の傾倒、電 灯、電話線切断		日下部No.543			
415	暴風雨	台風	1899	明治32	10.7	10	7											羽田村大海と菱 じ、浸水家屋多 数、穴守稲荷社殿 水中に。川崎町田 畑浸水、家屋浸 水。六郷川堤留中 の筏50艘流失	東京日新 聞、[長島 (1993)]				
415	台風	台風	1899	明治32	10	10		多摩川(六 郷川)			多摩川	破堤、 溢水	河川洪水				羽田村						
416	霖雨	霖雨	1901	明治34	7.1	7	1	多摩川			多摩川	破堤	河川洪水	上	府中	多摩村 柳立堤 防欠損		拝島止む、福生 森山の権を外す、		府中市歴史年 表 武蔵府中 郷土文書12巻 多摩白濁石川 流況文書6 巻、p.62			
416	大雨	霖雨	1901	明治34	7.1	7	1	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	L	福生	L	拝島、福 生、		出水				
417	大雨	大雨	1901	明治34	9.3	9	3	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	L	福生	L	龍川	出水、橋を上げる ほどに至らず		多摩白濁石川 流況文書6 巻、p.78			

No.	天候	水害発生原因	発生年(西暦)	発生年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(河川)	他の発生水体(湖沼)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地域	現行政区	左岸/右岸	破壊・溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	氣候
418	大雨	大雨	1902	明治35	8.8	8	8.9	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上	福生	L	坂木、牛土、兵以風下通過	熊川、多摩橋	多摩川橋60本(3間)ノ内18本上ヶ他は流失、平井川分は全て流失。坂木、土手尻の堤防小破。牛土以下堰通6ヶ所くつれ、網ヶ谷下田一面海	前夜より非常の大雨	多摩自慢石川酒造文書6巻、p415	
419	雨	雨	1902	明治35	9.6	9	6,7	多摩川			多摩川		上	福生	L			坂木上高砂工事、立籠80間外籠水制1ヶ所出来上る		多摩自慢石川酒造文書6巻、p418		
419	雨、風少々	雨	1902	明治35	9.7	9	7	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L		多摩橋	夜12時から多摩川橋が崩れ、差から堰水坑流れる	出水	多摩自慢石川酒造文書6巻、p418	
419	雨天	雨	1902	明治35	9.7	9	7	浅川			多摩川	出水	出水ほか	上	八王子	L			宿大村葺川原子供2人流れ死川流有		石川日記	
419	雨	雨	1902	明治35	9.12	9	12	多摩川			多摩川	洪水	内水型氾濫	上	川崎	R		上河原	急峻低切全部流失取り入れ口狭り割面所埋砂壅		稲木(多摩川説)	
420	細雨	雨	1902	明治35	9.25	9	25						出水ほか						多摩川橋出水で流失、架設完成		多摩自慢石川酒造文書6巻、p417	
420	嵐ふく	暴風雨	1902	明治35	9.28	9	28	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上	福生	L			長橋坂(歩行橋)2本流失	急に出水	多摩自慢石川酒造文書6巻、p420	
420	晴		1902	明治35	9.29	9	29						風雪	上	福生	L			木小や下や枯し滝の崩つば瓦少し落つ、八兵衛畑の榎木2本倒木、他に雪なし。	翌明けまで風ふく。	多摩自慢石川酒造文書6巻、p420	
420	暴風雨	暴風雨	1902	明治35	9	9		多摩川			多摩川		上	沼島	L				大洪水		昭島市委附編	
418	大雨	大雨	1902	明治35	8	8		多摩川			多摩川	壊堤	河川洪水	上	府中	L		西府村、四ヶ谷、中河原、多摩村是	種籾、坂護岸等破損流失	出水	府中市歴史年表 武蔵府中叢書第12巻	
420	暴風雨	暴風雨	1902	明治35	9	9		多摩川			多摩川	壊堤	河川洪水	上	府中	L		多摩村常久堤防穴壅	出水	府中市歴史年表 武蔵府中叢書第12巻		
420	暴風雨	暴風雨	1902	明治35	9	9		多摩川			多摩川	出水	上	稲城	R		北多摩郡内決壊	稲田村	稲田村二ヶ谷用水導上河原取水口激流で破損	出水	二ヶ谷用水導綱長島(1993)	
420	暴風雨	暴風雨	1902	明治35	9	9		多摩川			多摩川	出水	河川溢水	下	太田	L		北多摩郡内決壊	川崎大森間電車不通。六郷村60戸浸水。	出水	二ヶ谷用水導綱長島(1993)	
420	大雨	暴風雨	1903	明治36	9.23	9	23	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上	福生	L		多摩橋	橋上ける、新版下水車履浸水	出水、本年初めての大水	多摩自慢石川酒造文書6巻、p452	
421	雨	雨	1904	明治37	5.2	5	2	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上	福生	L		多摩橋	出水。橋杭頭まで埋水。川止め	前日大雨、終日雨。出水	多摩自慢石川酒造文書6巻、p473	

No	天候	水害原因	発生年(西暦)	発生年(西暦)	発生年(西暦)	西暦月	西暦日	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体系	他の発生水体系(東海)	他の発生水体系(東海)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地域	現行政区	左岸/右岸	河川/湖沼	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
422	風、雨 降り止み、夜 降る	風雨	1904	明治37	7.9	7	7.9	明治37	7	9	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上	福生	L		多摩橋	橋を上げる	出水	多摩自慢石川 酒造文書6 巻,p480	
422	風雨	風雨	1904	明治37	7.10	7	7.10	明治37	7	10	多摩川	富士川 (7.10)		多摩川	洪水	河川洪水	上	福生	L			堤防等の方々崩し 堤まで抜ける	不出水	多摩自慢石川 酒造文書6 巻,p480	
422	風雨	風雨	1904	明治37	7.10	7	7.10	明治37	7	10	多摩川			多摩川	出水	内水型 氾濫	上	国立	L	谷原四ツ 谷・天神 橋の下河 原		田用水氾濫	不出水	多摩自慢石川 酒造文書6 巻,p480	
422	風雨	風雨	1904	明治37	7.11	7	7.11	明治37	7	11	多摩川			多摩川	堤堤	河川洪水	上	福生	L			五日市道下堤金 堤、谷原1枚だけ 壊れ、堤は頭少し残 り元の穴口は五日 市道より二ノ宮 中央を貫通したる 処を穴口とし、其 南突堤堤6、70軒流 失	出水	多摩自慢石川 酒造文書6 巻,p481	
423	風雨	風雨	1904	明治37	9.17	9	9.17	明治37	9	17	多摩川			多摩川	出水	風雪	上	福生	L	熊川		唐宅藤形坂少し くられ、酒造本蔵へ 神社の煙の枯れ枝 落ち瓦14枚損傷	出水	多摩自慢石川 酒造文書6 巻,p487	
424	終日雨	雨	1905	明治38	7.12	7	7.12	明治38	7	12	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L			舟留まる	出水	多摩自慢石川 酒造文書6 巻,p487	
425	小嵐	暴風雨	1906	明治39	7.14	7	7.14	明治39	7	14	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L			熊川橋上がる	前日大雨、出水	多摩自慢石川 酒造文書6 巻,p487	
425	曇り、 午後2 時から 大雨	暴風雨	1906	明治39	7.15	7	7.15	明治39	7	15	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上	福生	L	熊川		畑の作高低なく流 失		多摩自慢石川 酒造文書6 巻,p487	
425	大雨	暴風雨	1906	明治39	7.16	7	7.16	明治39	7	16	多摩川	富士川 (7.17)		多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L			運船一時止まる、 馬船一艘流失		多摩自慢石川 酒造文書6 巻,p484	
425	大雨天	暴風雨	1906	明治39	7.14	7	7.14	明治39	7	14	川口川			多摩川	出水	出水ほか	上	八王子	L	川口		大水、栗の餅付一 面に流れる		多摩自慢石川 酒造文書6 巻,p484	
425	大雨天	暴風雨	1906	明治39	7.15	7	7.15	明治39	7	15	浅川			多摩川	出水	出水ほか	上	八王子	L	河原ノ 福、下宿		満水、栗の餅付一 面に流れる		多摩自慢石川 酒造文書6 巻,p484	
426	雨	雨	1906	明治39	7.26- 7.29	7	7.26- 7.29	明治39	7	26~29	荒川			荒川	出水	内水型 氾濫				北豊島 郡、南足 立郡の沿 岸即ち並 木に隣接 区内玉池 町外5ヶ町		床上浸水、流失家 屋5棟溺死者1人。 水量2丈3尺	出水	東京市史稿要 災編p372	
427	大雨天	台風	1906	明治39	8.24	8	8.24	明治39	8	24	多摩川	浅川、元 荒川、綾 瀬川		多摩川	洪水	河川洪水	下	大田	L	六郷川沿 岸		砂利船百重流出、 六郷川架橋中京浜 電鉄専用橋約35m にわたり流失	増水多摩川15.1m、 六郷川4.5m	多摩川註	



No	天候	発生 水害原因 (西暦)	発生 年号 (西暦)	旧暦月 日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生 水体(東 海)	他の発生 水体(東 海)	水系	直接 原因	洪水型	発生地 形地域	現行政区	右岸 /破堤・ 溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
427	暴風雨	台風	明治39	8.24	8	24				多摩川		出水ほか		八王子			狭道竈路、積栗、 家屋の破壊、船始 の難破など頗る多 く、各地の河川溢 流し、洪水、山崩 れ等あり、家屋の 浸水致えされし		東京市高度 災編p374	
427		台風	明治39	8.24	8	24	浅川	多摩川、 元荒川、 綾瀬川		多摩川	満水	出水ほか		八王子			満水		石川日記	
427		台風	明治39	8.24	8	24	川口川			多摩川	大水	河川洪 水		八王子		川口村	大水	米類不作、平均3分 位	唐松石舟儀(八 王子市史附編)	
427	雨降 り	台風	明治39	8.25	8	25	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生		熊川	出水、夕刻から架 橋を上げる	出水、本年2度目	多摩川 酒造文書6 巻、p564	
427	雨降 りにて 終日雨	台風	明治39	8.26	8	26	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生		熊川	渡舟止む		多摩川 酒造文書6 巻、p564	
427	雨降 り	台風	明治39	8.27	8	27	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生		熊川	本年初めての出水		多摩川 酒造文書6 巻、p564	
427	晴	台風	明治39	8.29	8	29	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生			多摩川又不通		多摩川 酒造文書6 巻、p565	
427	台風	台風	明治39	8.22- 24	8	22~24	元荒川、 綾瀬川	多摩川、 浅川		荒川	堤	河川洪 水			元荒川 筋4ヶ 所、綾 瀬川筋 2ヶ所 堤防破 損、比 企郡堤 防破壊8 所		溺死者2人、田畑浸 水大里郡5080奈 町、比企郡1368 町、入間郡13,917 町		荒川水害年表	
428	雨	雨	明治39	9.13	9	13					出水	河川洪 水	上	福生		多摩橋	橋上げる	出水	多摩川 酒造文書6 巻、p569	
429	大雨	大雨	明治39	10.24	10	24	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生		多摩橋	橋上げる	出水	多摩川 酒造文書6 巻、p573	
430	大雨	大雨	明治40	7.13	7	13	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生		多摩橋	橋上げる		多摩川 酒造文書6 巻、p601	
431	雨	雨	明治40	8.5	8	5	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生		熊川	何分か出水	出水	多摩川 酒造文書6 巻、p603	
432	時々雨 晴	雨	明治40	8.1	8	1	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生		熊川	少し増水黒濁る	前日山万大雨	多摩川 酒造文書6 巻、p603	
433			明治40	8.11	8	11	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生		熊川	出水、早朝橋を半 分はすず	前日大雨大雨	多摩川 酒造文書6 巻、p604	

No.	天候	水害原因	発生年(西暦)	年号	旧暦日	西暦月	西暦日	発生水体系	発生水体系(東)	他の発生水体系(東)	水系	直接原因	洪水型	発生地 形地域	現行政区	左岸/右岸	破壊・浸透 箇所	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
433			1907	明治40	8.16	8	16					破壊	河川洪水	上	福生	上	破堤	熊川、 揖島	河原の舟着水、水車場台地及び5寸浸水、堤防と舟着水環、揖島渡折流失	前日大風で小瀬時々大雨。出来多く	多摩自衛隊石川 派遣文書6 巻,p604	
434	風雨	台風	1907	明治40	8.24	8	24	多摩川			多摩川	破堤	河川洪水	上	福生	L	熊川、 揖島、 大神	熊川、 揖島、 大神	堤防下の方穴壊、堤防抜目の露筋より流失、同時に船積小屋及構材置場等流失、それより上流松原谷所を突破して細い谷戸へ向かい細い谷戸、水車場は河川の中央となり、熊川村50町歩の団地一時に多摩川の水流となり、流水水車場建物に突き当たり、夕刻一の水門潰倒。詳細は島田屋の下宮沢・大神等も大損、立川鉄道橋破壊、揖島八王子間電柱流失で電信不通、中央線各所トンネル不通	出水甚だしい。49年前本年の大水に次ぐ、この時の出水は今回より3尺以上の大水で熊川下田地全部流失	多摩自衛隊石川 派遣文書6 巻,p605	
434	時々小降り	台風	1907	明治40	8.25	8	25	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上	福生	L	熊川		出水3尺程度水せしも残った稲見え、新坂下は激流にて水車場は中央より切断し、西半分は迂回したる徳水中に倒れあり、平均3尺以上水中にあり、対岸小川堤防も穴環	多摩自衛隊石川 派遣文書6 巻,p606		
434	少々小降り	台風	1907	明治40	8.26	8	26	多摩川		魯士川(8.25)	多摩川	洪水	河川洪水		秋留野			秋川通橋梁1ヶ所も壊れず流失、牛沼橋も流失		多摩自衛隊石川 派遣文書6 巻,p607		
434	晴	台風	1907	明治40	8.27	8	27	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水		福生	L		川瀬種々に変わり新坂下より水車場までの中央に堰流、田6.7枚欠ける	多摩自衛隊石川 派遣文書6 巻,p608			

No	天候	災害原因	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(東)	他の発生水体(東海)	水系	直撃原因	洪水型	発生地形地域	現行政区	左岸/右岸	堤防・溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
434	台風	台風	1907	明治40	8.24	8	24	多摩川	利根川、 渡良瀬川 荒川		多摩川	破堤	河川洪水	上山、下	青梅町、 沼島、 大田	L		青梅町、 六郷	青梅万年橋幸橋、 羽田村宇治木新田、 各々橋幸橋、八幡 塚中村家流失		東京朝日8/25 付付	
434	台風	台風	1907	明治40	8.25	8	25	多摩川	利根川、 渡良瀬川 荒川		多摩川	破堤、 洪水、 溢水	河川洪水	上、中	八王子 日野、 狛江、 大田	L/R	北多摩郡 世田、小 宮村、八 王子、八 王子、八 王子、大 野、西多 摩郡宮 下、江村 以 上堤防	東京横浜間不通、 世田：1x5尺増水、 立川間不通、小宮、 村字要員：家屋1 戸、電柱1本、橋 梁10戸、流 失、浅川村 田、家屋2戸、 流失、田畑欠 了浸水	以上、多摩川沿岸、 被褥、布町50町、 村、沼蓋面積4.474 町歩	東京朝日8/26 付付		
434	台風	台風	1907	明治40	8.26	8	26	多摩川	利根川、 渡良瀬川 荒川		多摩川	洪水	河川洪水	下	大田	L	矢口 蒲田方面	浸水		東京朝日8/27 付付		
434	台風	台風	1907	明治40	8.26	8	26	多摩川	利根川、 渡良瀬川 荒川		多摩川	洪水	河川洪水	上山	青梅			民家、 田畑作物被 害大		青梅の自然1 p.353 東京市史編委 災編p383		
434	台風	台風	1907	明治40	8.22- 28	8	22~2 8	多摩川	利根川、 荒川		多摩川	出水	出水ほ か						本州中部及関東東 部の河川氾濫、 東京、横須、橋 野、山梨等諸河 に於いては、近年 の洪水災害の流 失又は浸水被害 なからず、鉄道電 線の破損、積雪の 流失等頗る多く、 交通社絶し通信は 一時不通農作物は 著しき被害被る。			

No.	天候	水害原因	発生年(西暦)	発生年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(東)	他の発生水体(東)	水系	直接原因	洪水型	発生地 形地域	現行政区	左岸/右岸	堤防・ 湛流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
434		台風	1907	明治40																多摩川水源(甲斐国北都留郡丹羽)18/23:220mm、8/24:213mmなど関東地方各地8/12、8/28の間多量の降雨続く	東京市史稿室 災編p389	
434	大雨	台風	1907	明治40	8.22-28	8	22~28	多摩川	その他の 河川		多摩川	破堤	河川洪水						家屋田畑の浸水、及堤防道路橋梁等の破壊流失等、頗る多く、40余年以来未曾有の大洪水、被害中最大のものには多摩川通や矢口村六郷村の堤壊決壊、鉄道線断し及東海道を壊断して、大盛り町羽田村等の一面を浸す。	東京市史稿室 災編p396		
434		台風	1907	明治40	8.23-26	8	23~26												「東京府下窪原郡方面は、大森以西と海と交じ、多摩川と鶴見川は遂に相合して激浪一面漲り、川崎町は勿論、大師河原、田島、所田、御幸其他諸村は殆ど茫々たる蓄海	「横浜貿易新報」(長島,1994a)		
434	台風	台風	1907	明治40	8	8		多摩川			多摩川	破堤	河川洪水	西府村 中河原 地先堤 防欠壊	府中				府中市歴史年表			
434	暴風 雨	台風	1907	明治40	8.21-28	8	21~28	利根川、 蓮島瀬川	多摩川			破堤	河川洪水	大里郡 森会 村沼村地 先堤、堤 兵瀬川 本堤破 壊	府中			川辺村で水位19.3尺	21日暴風雨、24日大洪水	北埼玉郡史(第五)		
434		台風	1907	明治40	8.25	8	25												大洪水	石川日記		
434	台風	台風	1907	明治40	8.21-28	8	21~28	荒川	多摩川、 利根川、 蓮島瀬川										22~28日で秩父の雨量923mm、荒川佐合田の24日の水位12.4尺、25日24尺	荒川出水に因する調査書(第五)		

No	天候	災害原因	発生 年(西 暦)	年号	旧暦月 日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生 水体(関 東)	他の発生 水体(東 海)	水系	直接 原因	洪水型	発生地 形地域	現行政区	左岸/ 右岸	被災地域	被災状況	摘要	文 献	気 候
434		台風	1907	明治40	8.21- 28	8	21~28		多摩川、 利根川、 渡良瀬川			堤堰	河川洪 水			左岸 荒川 通り 村水、大 塚村 堤堰				戸田市史(靖 玉)	
435	大雨	暴風雨	1907	明治40	9.18	9	18	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L		2尺程出水		多摩白礫石川 酒造文書6 巻,p611	
435	強風大 雨	暴風雨	1907	明治40	9.17、 18	9	17,18										市内所々	出水、芝、赤坂、 牛込、小石川、下 谷、浅草、深川の 内浸水若くは崖石 垣崩壊等の害を被 りたる所少なから ず		東京市史編要 災編p423	
			1907	明治40														全国の風水災史上 顯著、明治8年・大 正元年被害高第3 位、6249万596円	東京市史編要 災編p424		
436	雨	雨	1908	明治41	9.4	9	4	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L	多摩橋	多摩川橋板を上げ る		多摩白礫石川 酒造文書6 巻,p653	
437	晴	雨	1908	明治41	10.3	10	3	多摩川			多摩川	洪水	河川洪 水	上	福生	L	多摩橋	前日12時多摩川橋 上げ、一部流失		多摩白礫石川 酒造文書6 巻,p655	
438	雨	雨	1909	明治42	5.14	5	14	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L	多摩橋	多摩川橋板上げる		多摩白礫石川 酒造文書6 巻,p683	
438	雨	雨	1909	明治42	5.16	5	16	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L		多摩川橋上げる		多摩白礫石川 酒造文書6 巻,p683	
439			1909	明治42	8	8		多摩川			多摩川		河川溢 水	上山	青梅			近在浸水民家多 数		青梅の自然1 p.353	
440			1910	明治43	7.10	7	10	浅川			多摩川	洪水	河川洪 水		八王子		浅川村	大水、原民家1軒流 失		石川日記誤司 家文書(八王子 市史附編)	
441	大雨	台風	1910	明治43	8.9	8	9	多摩川	富士川 (8.7)		多摩川	堤堰	河川洪 水	上	福生	L		出水		多摩白礫石川 酒造文書6 巻,p721	
441	大雨	台風	1910	明治43	8.10			多摩川			多摩川	堤堰	河川洪 水	上	福生	L	熊川	出水堤堰崩壊り石 を懸え、松木にて 圍立3尺、雑樹にて 岸上。真福寺下一 部分掘見えす及大 堀へ入り角二枚稻 見えす。水車前通 石壁5、6間崩壊。松 木にて法先沈床上 水深凡1尺、南下 尻にて8尺位		多摩白礫石川 酒造文書6 巻,p721	

No.	天候	水害原因	発生 年(西 暦)	年号	旧暦 日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生 水体(東 海)	他の発生 水体(関 東)	発生水体 (東 海)	発生地 形地域	現行政区	左岸/ 右岸	破壊・ 溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
441	快晴	台風	1910	明治43	8.11	8	11	多摩川			多摩川	河川洪水	福生	L	宮沢前	熊川 宮沢前	拜島9ヶ村以掃流 矢、翌夜前まで水 入り、翌夜前堤切 れ阿弥寺床下滞 水	昨夜8時から9時出 水 水害高、本朝減水 堤防無事、去40年 大水を餘き稀なる 大水	多摩川 通巻文書6 巻、P122	
441	雨	台風	1910	明治43	8.14	8	14	多摩川			多摩川	出水ほか	福生	L		熊川	出水	出水	多摩川 通巻文書6 巻、P22	
441	大雨	台風	1910	明治43	8.9	8	9	浅川			多摩川		八王子				濁水	石川日記		
441	大雨	台風	1910	明治43	8.10	8	10	浅川	多摩川、 荒川		多摩川	河川洪水	八王子				深沢金次郎家へ、 欠込大騒ぎ、流 失、福田半三郎殿 屬敷欠込	石川日記		
441	台風	台風	1910	明治43	8.11	8	11	多摩川			多摩川	河川溢 水	大田	L			六郷川、又3尺5寸	東京朝日8/11 東京朝日8/12		
441	台風	台風	1910	明治43	8.12	8	12	多摩川			多摩川	洪水、 河川溢 水、破 堤			萩原大 和田橋 六郷堤 防	8尺7寸濁水、萩伊 国橋流失、萩原大 和田橋破堤流失、多 摩川、生村、由井 村、福城村各60 戸、小宮村要須百 65戸、元八王子方面 20 戸、小宮村60 戸、八王子平子安 50戸、由井村120戸 浸水、	皇國物産相導 書(八王子市 史附編)			
441	大雨	大雨	1910	明治43	8.10	8	10					河川洪水			堤南平 80間流 失		出	八王子	皇國物産相導 書(八王子市 史附編)	
441	大雨	大雨	1910	明治43	8.13	8	13					河川洪水					全国洪水出子、家 屋堤防諸橋流失、 被害多し、古今未 曾有の洪水	八王子市相 導附(八王子 市史附編)		
441	台風	台風	1910	明治43	8.8-15	8	8~15	多摩川	浅川、 荒川		多摩川	河川洪水					被災市町村数55、 北害面積10,500町	多摩川誌	東京市史編纂 4編、P455	
441	台風	台風	1910	明治43	8.10.1	8	10.11	市内諸河 川									濁水、平地面の出 水の深さ13丈1尺、 被害全市の浸水建 物棟数12万2265 棟、戸数14万2271 戸、浸破建物56 棟、死傷27人、行 方不明3人	東京市史編纂 4編、P455		
441	台風	台風	1910	明治43	8.10.1	8	10.11	荒川	利根川		荒川	河川洪水			壊決	下台、 浅草、 本所、 深川、 牛込、 小石川、 本郷	濁水、平地面の出 水の深さ13丈1尺、 被害全市の浸水建 物棟数12万2265 棟、戸数14万2271 戸、浸破建物56 棟、死傷27人、行 方不明3人	東京市史編纂 4編、P455		

No.	天候	発生 年(西 暦)	発生 年号	旧暦月 日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生 水体(東 海)	他の発生 水体(東 海)	水系	直接 原因	洪水型	発生地 形地域	現行政区	右岸 左岸	破堤・ 溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
441	台風	1910	明治43	8.10. <sup>1</sup> / <sub>1</sub>	8	10.11	利根川	荒川	利根川	利根川	壊決	壊決	下谷、 浅草、 浅草所、 深川、 牛込、 小石川、 本郷	下谷、 浅草、 浅草所、 深川、 牛込、 小石川、 本郷	壊決	壊決	濁水、平塚面の出 水の浸き127R。 東京全市の濁水建 物総額12万2265 棟、戸数14万2271 戸、遺構建物36 棟、死傷27人、行 方不明3人	出水	東京市史編纂 災編455		
441	台風	1910	明治43	8.10	8	10	多摩川		多摩川	多摩川	砂埋	河川洪 水	大森、 羽田、 大師河原 川崎及そ の付近	大森、 羽田、 大師河原 川崎及そ の付近	欠潰	欠潰	濁流襲う		東京市史編纂 災編470		
441	台風	1910	明治43	8.13	8	13	多摩川		多摩川	多摩川	洪水、 溢水	河川洪 水	上、下	府中	L	浅川皆 濁橋架 堤防約5 間	大森方面：田畑冠 水、入野井村濁水 戸数800戸、浅川大和 田橋下流防排水工 人夫3割し流され行 方不明、皆瀬橋付 近：濁水家床白戸 住民避難		東京朝日8/13		
441	台風	1910	明治43	8	8	多摩川		多摩川	多摩川	多摩川	洪水	河川洪 水	上	府中	L	家屋、耕地被害甚 大		府中市歴史年 表			
441	台風	1910	明治43	8.14	8	14	多摩川		多摩川	多摩川	洪水	河川洪 水	下	川崎	R	砂子濁水、大森鶴 尾雨不通、濁水家 屋床上2673、床下 濁水1678		東京朝日8/15			
441	台風	1910	明治43	8.15	8	15	多摩川		多摩川	多摩川	洪水、 溢水	河川洪 水	下	大田	L	涌田以南不通		東京朝日8/15			
441	台風	1910	明治43	8.15	8	15	多摩川		多摩川	多摩川	砂埋	河川洪 水	上から 下	八王子、 立川、府 中、川崎	L/R	立川付近より上 流：沿岸各所砂礫 層真堆積、田畑流 失埋没多矣。橋 生、群島付近で河 道大幅転移、行政 界不明。南浅川橋 上、水無瀬橋下 各々右岸堤決壊で 濁水平野面での浸 水深1~1.5m、道 0.5~1日冠水。 平野下位冠水。 上位冠水1~ 1.5m 濁水。	洪水流は坂戸-中新 城-下小田中自然堤 防列を乗り越え、 下小田-耕地-江か 下を結ぶ旧河道沿 いに矢上川に流 入、鶴見川洪水流 と合流、デルタ流 と合流、デルタ流 流川崎河原野-居手 野多幸谷旧河道つ たいに逆巻を橋 切り、鶴見川に合 流、濁水被害				
441	台風	1910	明治43	8.15	8	15	多摩川		多摩川	多摩川	砂埋	河川洪 水	上から 下	八王子、 立川、府 中、川崎	L/R	南浅川 橋上、 水無瀬 橋下、 各々右 岸堤決 壊、濁 水平野 面での 浸水深 1~1.5 m、道 0.5~1 日冠水。 平野下 位冠水。 上位冠 水1~1. 5m 濁 水。	立川付近より上 流：沿岸各所砂礫 層真堆積、田畑流 失埋没多矣。橋 生、群島付近で河 道大幅転移、行政 界不明。南浅川橋 上、水無瀬橋下 各々右岸堤決壊で 濁水平野面での浸 水深1~1.5m、道 0.5~1日冠水。 平野下位冠水。 上位冠水1~ 1.5m 濁水。				
441	台風	1910	明治43	8	8	多摩川		多摩川	多摩川	多摩川	濁水	出水ほ か	上山	青梅			濁水		青梅の自然I p.353		

No	天候	発生原因	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(関東)	他の発生水体(東海)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地域	現行政区	左岸/右岸	浸流部・砂浜	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候	
441	大風雨	台風	1910	明治43	8.1-16	8	1~16	荒川	多摩川、浅川		荒川	破壊	河川洪水				10日の大崩壊の被害は、荒川より上流の堤防で破壊		死者324人、住居流失15,920戸、住家浸水84,598戸、被害は、8日より山手から、親戚橋10日の水位32尺、谷上28.2尺、家橋20.8尺、県下の24%に浸水	2個の台風と低気圧の襲撃による大風雨で県下に大水害。8-11日雨脚も衰え、11日雨脚も衰え、11日、野上は	埼玉県水害史(埼玉)		
442	雨	雨	1910	明治43	9.8	9	8	多摩川			多摩川	出水	上		福生	L			夜明多摩川橋上げ、午後又掛ける	昨夜出水	多摩川橋上げ		
442	雨	雨	1910	明治43	10.14	10	14						上		福生	L	多摩川		多摩川橋小破		多摩川橋上げ		
443	大雨	大雨	1911	明治44	6.19	6	19												負傷者11人、行方不明1人、建物全壊97棟、半壊59棟、破損562棟、浸水8253戸		多摩川橋板上げる	多摩川橋上げ	
443	大雨	大雨	1911	明治44	6.30	6	30	多摩川			多摩川	出水	上		福生	L	多摩川		多摩川橋板上げる		多摩川橋上げ		
	暴風雨	台風	1911	明治44	7.26	7	26							高津洲					沼川橋大破、死者52人、負傷者48人、行方不明10人、建物全壊345棟、半壊63棟、破損803棟、流失11棟、浸水36041戸、道路破損22ヶ所、橋梁破損4		沼川橋大破、死者52人、負傷者48人、行方不明10人、建物全壊345棟、半壊63棟、破損803棟、流失11棟、浸水36041戸、道路破損22ヶ所、橋梁破損4	沼川橋大破	
	暴風雨	台風	1911	明治44	8.10	8	10							1ヶ所					死者3人、負傷者3人、行方不明1人、建物全壊8棟、半壊14棟、破損15棟、流失23棟、浸水73716戸、道路破損22ヶ所、橋梁流失11		死者3人、負傷者3人、行方不明1人、建物全壊8棟、半壊14棟、破損15棟、流失23棟、浸水73716戸、道路破損22ヶ所、橋梁流失11	東京市史編纂	
444	大風雨	台風	1911	明治44	7.25	7	25	浅川			多摩川	内水型 内水型 内水型			八王子				甘里は水引給水源出水の為壊れる		石川日記		
444	大風雨	台風	1911	明治44	7.26	7	25	浅川			多摩川	内水型 内水型			八王子				新堀水源地に前川大に破損出来水止る		石川日記		
444	大風雨	台風	1911	明治44	7.25	7	25												台風による。最大風速19.6m/s、降水量0		埼玉県気象観測所(埼玉)		
444	晴	台風	1911	明治44	7.26	7	26	多摩川			多摩川	河川洪水	上		福生	L	41年工事の蛇籠護岸30間崩壊		前日11時から多摩川橋上げ、橋脚3間、舟1艘流失		多摩川橋上げ		



No.	天候	発生年(西暦)	発生年月	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(河川)	他の発生水体(湖沼)	発生水体(湖沼)	発生地域	現行政区	左岸 右岸	破壊・ 溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
	大風雨	1911	明治44	8.4-5	8	4.5										流失家屋2、床上浸水909戸	台風による	埼玉縣警察年報(埼玉)	
445	大雨	1911	明治44	8.9	9		浅川	富士川(8.8.9)		多摩川	増水	内水型 氾濫	上		八王子		新設廿里前の閘破れる、去月25日の新設廿里前の閘水引煙の水門被害、新聞上各所に水害沢山有り	石川日記	
	大雨	1911	明治44	8.8-9	8	8.9										県内各地に被害	前線による	埼玉縣警察年報(埼玉)	
445	曇	1911	明治44	8.10	8	10.00	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上		福生		出水。本流は昨年から二ノ宮社から森田勲米屋の眞向に下り、松木から2500部下へ打付け40年程大水にせし本流は急し本日頭後水向は砂利高くなり、小流の運行を流る	多摩川河川 通過文書6 巻、p746	
445		1911	明治44	8	8		多摩川			多摩川		上						昭島市史附編	
	暴風大雨	1912	明治45	6.17	6	17	古川											東京市安藤安災災編098	
446	大雨	1912	明治45	9.1	9	1	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上		福生		多摩川橋上げ	多摩川河川 通過文書6 巻、p790	
446	雨	1912	明治45	9.2	9	2	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上		福生		多摩川橋上げ	多摩川河川 通過文書6 巻、p794	
446	嵐	1912	明治45	9.3	9	3	多摩川			多摩川	出水	風害	上		福生		前夜大雨大風、朝もも強く10時頃止む	多摩川河川 通過文書6 巻、p794	
447	台風	1913	大正2	8.27	8	27	六郷川			多摩川	破壊	河川洪水	下		大田		約300haに被害、400戸床上浸水。早稲、中稲5割減収	昭島新報・緊急(1977)	
	台風	1913	大正2				多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上		府中		田畑に被害	府中市歴史年報	
447	大暴風雨	1913	大正2	8	8		多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	下		大田		六郷橋流失	昭島市史(大田区市史年報)	
447	大風雨	1913	大正2	8.25-27	8	25~27	荒川			荒川							支社16、床上浸水16,789戸、全壊家屋114戸	昭島市史(大田区市史附編)	
447	台風	1913	大正2	8.26	8	26	川口川			多摩川					八王子		洪水	昭島市史(八王子市史附編)	
447	雨	1913	大正2	8.26	8	26	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上		福生		多摩川橋上げ	昭島市史(八王子市史附編)	

No	天候	水害原因	発生年(西暦)	発生年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(西東)	他の発生水体(東南)	水系	直接原因	洪水型	発生地形地盤	現行政区	左岸/破堤・崖/堤防	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
447	大雨	台風	1913	大正2	8.27	8	27	多摩川			多摩川			上	福生	L	龍川	下屋敷朝水堰下妻樹柳石、俣更地橋本利石、下の水車床上浸水	北風激しく風体を為す	多摩自慢石川通造文書6巻,p827	
448	細雨	雨	1913	大正2	9.12	9	12										牛浜堰下水床石垣崩壊	前夜雨ニテ	多摩自慢石川通造文書6巻,p827		
	驟雨午後止む	雨	1914	大正3	7.12	7	12	多摩川			多摩川			上	福生	L		出水程に至らず		多摩自慢石川通造文書6巻,p850	
449	台風	台風	1914	大正3				多摩川			多摩川	破堤	河川洪水	上	府中	L	多摩村常盤久、甲立	出水		府中市歴史年表	
449	台風	台風	1914	大正3	8	8		多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上山	青梅			大洪水	青梅の自然1 p.353		
449	暴風	台風	1914	大正3	8.9	8	9	川口川			多摩川				八王子		川口	洪水	鷹松日待原(八王子市史附編)		
449	大風雨	台風	1914	大正3	8.10-15	8	10~15	荒川			荒川	破堤	河川洪水					全壊流失70戸、床上浸水4,754戸、速18m/s	埼玉県気象年報(埼玉)		
	大風雨	台風	1914	大正3	8.29-30	8	29,30	荒川	富士川(8.29)		荒川	破堤	河川洪水					死者13、全壊流失家屋80戸、床上浸水13,983戸	埼玉県気象年報(埼玉)		
449	風雨	台風	1914	大正3	8.3	8	3	浅川			多摩川	破堤	河川洪水		八王子			洪水	石川日記(八王子市史附編)		
451	雨	大雨	1915	大正4	8.4	8	4	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L		レール、多摩川橋上げる	多摩自慢石川通造文書6巻,p879		
451	大雨午後晴	大雨	1915	大正4	8.6	8	6	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L		出水は本日午後水制4ヶ所の内1ヶ所丈け、元付け張石2間程見える、3ヶ所は水中、小川当番普請の下欠ける	多摩自慢石川通造文書6巻,p879		
452			1915	大正4	9.8	9	8	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L		橋脚出水、積雪なし川止め	多摩自慢石川通造文書6巻,p882		
452			1915	大正4	9.9	9	9	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L		出水容易に壊せず	多摩自慢石川通造文書6巻,p883		
453	大雨	大雨	1915	大正4	10.7	10	7	多摩川			多摩川	洪水	河川洪水	上	福生	L		6軒の浸水本流失	多摩自慢石川通造文書6巻,p887		
454	霖雨	霖雨	1916	大正5	6.26	6	26	多摩川			多摩川	増水	出水ほか	上	福生	L	熊川	2尺余増水	多摩自慢石川通造文書7巻,p89		
455	雨	雨	1916	大正5	7.28	7	28	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L	熊川	朝向藤上げ、夕霧本橋上る	多摩自慢石川通造文書7巻,p13		
455	雨	雨	1916	大正5	7.29	7	29	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L	熊川	出水	多摩自慢石川通造文書7巻,p13		

No	天候	水害原因	発生年(西暦)	発生年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(河川)	他の発生水体(渠)	水系	直接原因	洪水型	発生地	現行地区	左岸	右岸	破壊・溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
455	雨のち曇	雨	1916	大正5	7.30	7	30	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L			熊川	出水、樫木元からの分遣流失、分家屋シヤクロ相2本倒れる、停車場横5本倒れる	出水	多摩自衛石川 派遣文書7 巻,p14	
456	快晴	雨	1917	大正6	7.8	7	8	多摩川			多摩川	増水	出水ほか	上	福生	L			熊川	前日上流降雨		多摩自衛石川 派遣文書7 巻,p41	
457	嵐	台風	1917	大正6	9.30	9	30	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L				出水、香梅にては、俵井戸が崩折る。稲荷下湯屋庭垣、倒れかける。桑新堀え倒れる。上手工小や倒れる		多摩自衛石川 派遣文書7 巻,p47	
457	大風雨	台風	1917	大正6	9.30	9	30	浅川			多摩川	洪水	河川洪水							洪水		石川日記(八王子市史附編) 大田区年	
457	大暴風雨	台風	1917	大正6	10.1	10	1					高潮	高潮	下	大田				羽田、梶台、大森、入新井	家屋流失			
457	台風	台風	1917	大正6	10.1	10	1													全壊家屋831戸	台風浦和付近通過、島大風速29m/s、荒川通り美谷本の水位22尺	埼玉県気象年報(埼玉)	
458	曇	雨	1918	大正7	8.1	8	1	多摩川			多摩川	増水	出水ほか	上	福生	L				僅かに増水		多摩自衛石川 派遣文書7 巻,p73	
459	雨	雨	1919	大正8	7.7	7	7	多摩川			多摩川	出水	内水型 氾濫	上	福生	L				出水田用水下まで流れたすく		多摩自衛石川 派遣文書7 巻,p10	
460			1919	大正8	7.15	7	15	浅川			多摩川	堤	河川洪水		八王子				浅川村原	出水		石川日記(八王子市史附編)	
461			1919	大正8	8.27	8	27	多摩川			多摩川	堤	河川洪水	上	府中	L						四ッ谷下墜き 護岸大破	
462			1920	大正9				浅川			多摩川	出水	内水型 氾濫		八王子					出水原々、水路セキ破損有り		石川日記(八王子市史附編)	
463	強雨	大雨	1921	大正10	9.25	9	25	浅川			多摩川	堤	河川洪水		八王子					川水大出、栗陸地多少いたむ		石川日記(八王子市史附編)	
463			1921	大正10	9.26	9	26	多摩川			多摩川	出水	出水ほか		立川、日野					立川日野間川止		石川日記(八王子市史附編)	
464			1922	大正11	8.24-25	8	24, 25	浅川			多摩川	大水	河川洪水		八王子					川筋大水出、洪水		石川日記(八王子市史附編)	
465	台風	台風	1924	大正13	9.17	9	17	六郷川			多摩川	洪水	河川洪水	下						六郷橋墜落、流失	川崎付近で5.1mの水量計水没	多摩自衛石川 派遣文書7 巻,p261	
465	小雨のち曇り	台風	1924	大正13	9.17	9	17	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L		熊川	出水一面の水となる、堤防礫石6尺下まで		多摩自衛石川 派遣文書7 巻,p261		
466	曇時々霧	大雨	1925	大正14	7.7	7	7	多摩川			多摩川	増水	出水ほか	上	福生	L		熊川	少し増水		多摩自衛石川 派遣文書7 巻,p279		
466	大雨	大雨	1925	大正14	7.10	7	10	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	L		熊川	橋上りける		多摩自衛石川 派遣文書7 巻,p279		

表1 多摩川洪水氾濫年表 (2)

No	天候	水害原因	発生年(西暦)	年号	旧暦月日	西暦月	西暦日	発生水体	他の発生水体(関東)	他の発生水体(東海)	水系	直接原因	洪水型	発生地・氾濫地域	行政区	左岸/右岸	堤防・溢流部	被災地域	被災状況	摘要	文献	気候
467	朝まで大雨、朝2時頃雷鳴、朝止み曇	大雨	1925	大正14	8.15	8	15	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	福生		熊川、二ノ宮	橋上げる、五日市街道二ノ宮辺崩壊、午後まで不通、熊川の堤防内の盛土崩壊、佐佐の田、八五七歩上岸、土砂37所崩壊、落石2穴位、稲刈へず	出水	多摩川自慢石川通達文書7巻, p.282	
467	雨又半晴風あり	大雨	1925	大正14	8.17	8	17	多摩川			多摩川	増水	出水ほか	上	福生	福生			増水、堤張石3尺掛り	増水、名国大暴風雨の報あり	多摩川自慢石川通達文書7巻, p.282	
468	雨時々止み夜大雨	雨	1925	大正14	8.23	8	23	多摩川			多摩川	出水	出水ほか	上	福生	福生		熊川	橋上げる		多摩川自慢石川通達文書7巻, p.281	

年表引用文献

- (昭島) ; 昭島市史編纂検討委員会(1978)昭島市史.昭島市,1551pp.  
昭島市史資料編,昭島市教育委員会(1980)昭島市史資料編 中野久次郎「諸用日記控」付・長徳元年「用留」.昭島市,195pp.  
昭島市史資料編 中野久次郎「諸用日記控」付・長徳元年「用留」(1979);昭島市教育委員会編,195pp  
昭島市古文書調査報告書2築地村・並木家所蔵史料集8(1984);昭島市境域委員会社会教育部社会教育課編(1984)昭島市古文書調査報告書2築地村・並木家所蔵史料集8.昭島市教育委員会,122pp.  
(荒川年);埼玉県(1988)「荒川 人文Ⅱ-荒川総合調査報告書3-」.埼玉県,766pp  
(小塚);小塚光治(1968) 上、中、下は巻を示す  
(大田区);大田区史編さん委員会(1992)大田区史中巻.大田区,1181pp.  
(大田年);大田区史年表  
大田区史護国寺・薬王寺文書;東京都大田区史編さん委員会(1987)大田区史(資料編)護国寺・薬王寺文書.東京都大田区,358pp.  
(埼玉);埼玉県(1986)「新編埼玉県史 別編3 自然」,埼玉県560pp  
秋川市史編纂委員会(1983)秋川市史.秋川市,1638pp.  
秋間健郎(1978)北浅川をたどる.多摩のあゆみ.No.13,多摩信用金庫,pp.46-49  
昭島市;昭島市史(1978)昭島市史編さん委員会  
昭島市史附編;昭島市史(1978)昭島市史編さん委員会,638pp.  
粟沢○右衛門源定静一代記(粟沢豊一家文書)  
万諸相場附時之変化記(八木豊家文書)  
武州小野路組合村村風災書上帳;町田市小野路小島資料館所蔵  
大悲願寺過去帳(大悲願寺文書)  
遠藤吉次(1975)武州多摩郡押立村年貢割付状及び皆済目録の分析.府中市郷土館紀要,創刊号,44-117  
遠藤吉次(1979)府中市域における江戸後期の凶作史料,府中市郷土館紀要,第5号,67-225  
深瀬昭一( );川崎研究No.6  
福生市史 上巻;福生市(1993),福生市史編さん委員会,東京都福生市,1112pp.  
福生市資料編 近代(1992);福生市史編さん委員会,東京都福生市,500pp.  
福生市資料編 近代 2(1994);福生市史編さん委員会,東京都福生市,444pp.  
「府中の用水」武蔵府中叢書4;府中市企画調整部企画課(1976)「府中の用水」武蔵府中叢書4,府中市史下巻;府中市,1974,pp1370  
府中市史上巻;府中市,1968,pp1002  
風災取調書上帳;府中市博物館所蔵.府中市新宿・菊地家文書  
儀三郎日記 幕末の元締 安政6年から慶応4年まで(1998),あきる野市五日市郷土館編集,あきる野市教育委員会,363pp.  
御宮用日記;和泉村行宝院住職慶元による 狛江市史料集十  
羽村町史;羽村町史編纂委員会(1974)羽村町史.羽村市,915pp.  
羽田;橋爪英麿(1975)羽田史誌稿.羽田神社,376pp.  
橋本政三家文書「貞享3年6月4日大荒田畑山崩人馬家屋舗水損荒地改書上下書帳」  
橋本家日記(村の古文書1 地方文化資料第17集)  
八王子市史 附編(1968);八王子市史編纂委員会(1968)八王子市史 附編.八王子市役所,556pp.  
林 巖(1977)四ツ屋村の寛永12年検地帳について.府中市立郷土館紀要.第3号.35-  
日野市史料集近世3支配編;日野市 1986  
平川家文書2;大田区史(資料編)平川家文書2(1976),東京都大田区史編さん委員会編,東京都大田区,1104  
比留間一郎(1982)多摩川洪水と青柳島の変遷.多摩のあゆみ,第28号,48-52  
稲毛;稲毛川崎二ヶ領用水事績 山田蔵太郎 稲毛川崎二ヶ領普通水利組合(1930)  
稲城市史;稲城市(1991)971pp.  
石川:八王子市教育委員会(1979)石川日記(1) 郷土資料館資料シリーズ第18号.八王子市教育委員会  
石川:八王子市教育委員会(1980)石川日記(2) 郷土資料館資料シリーズ第19号.八王子市教育委員会  
石川:八王子市教育委員会(1981)石川日記(3) 郷土資料館資料シリーズ第20号.八王子市教育委員会  
石川:八王子市教育委員会(1982)石川日記(4) 郷土資料館資料シリーズ第21号.八王子市教育委員会  
石川:八王子市教育委員会(1983)石川日記(5) 郷土資料館資料シリーズ第22号.八王子市教育委員会  
石川:八王子市教育委員会(1984)石川日記(6) 郷土資料館資料シリーズ第23号.八王子市教育委員会  
石川:八王子市教育委員会(1985)石川日記(7) 郷土資料館資料シリーズ第24号.八王子市教育委員会  
石川:八王子市教育委員会(1986)石川日記(8) 郷土資料館資料シリーズ第25号.八王子市教育委員会  
石川:八王子市教育委員会(1987)石川日記(9) 郷土資料館資料シリーズ第26号.八王子市教育委員会  
石川:八王子市教育委員会(1988)石川日記(10) 郷土資料館資料シリーズ第27号.八王子市教育委員会  
石川:八王子市教育委員会(1990)石川日記(11) 郷土資料館資料シリーズ第28号.八王子市教育委員会  
石川:八王子市教育委員会(1991)石川日記(12) 郷土資料館資料シリーズ第29号.八王子市教育委員会  
石川:八王子市教育委員会(1992)石川日記(13) 郷土資料館資料シリーズ第30号.八王子市教育委員会  
石川:八王子市教育委員会(1993)石川日記(14) 郷土資料館資料シリーズ第31号.八王子市教育委員会  
石川:八王子市教育委員会(1994)石川日記(15) 郷土資料館資料シリーズ第32号.八王子市教育委員会  
市川家日記;「青梅市史料集第46号 西多摩郡人物誌 法鑑 身ノ上一代記 市川家日記」(1996),青梅市郷土博物館編集,青梅市教育委員会,65-238

神奈川県神社庁(1981)神奈川県神社誌,神奈川県神社庁,464pp.  
 川崎市:川崎市役所(1968)川崎市史.川崎市役所,(931pp.  
 菊地(1964);菊地山哉.多摩川の洪水史 水利科学. No.39,水利科学研究所  
 北川家文書2;東京都大田區史編さん委員会(1985)大田區史(資料編)北川家文書2.東京都大田區,514pp.  
 北川家文書3;東京都大田區史編さん委員会( )大田區史(資料編)北川家文書3.東京都大田區,491pp.  
 北川家文書4;東京都大田區史編さん委員会(1987)大田區史(資料編)北川家文書4.東京都大田區,532pp.  
 狛江市:狛江市水害史.  
 狛江市;狛江市(1975)狛江市史料集第4.狛江市.狛江市,356pp.  
 小杉村;寛政2年小杉村村方書上帳、天保弁記(安藤平作蔵)  
 皇國物産歳々相場書(木下暉郎「八王子地方における近世物産の相場」多摩史談八ノ一・二  
 公私日記:立川市教育委員会(1972)鈴木平九郎「公私日記」第1冊 天保8年.立川市教育委員会,105pp.  
 公私日記:立川市教育委員会(1973)鈴木平九郎「公私日記」第2冊 天保9年.立川市教育委員会,135pp.  
 公私日記:立川市教育委員会(1974)鈴木平九郎「公私日記」第3冊 天保10年.立川市教育委員会,109pp.  
 公私日記:立川市教育委員会(1974)鈴木平九郎「公私日記」第4冊 天保11年.立川市教育委員会,96pp.  
 公私日記:立川市教育委員会(1975)鈴木平九郎「公私日記」第5冊 天保12年.立川市教育委員会,108pp.  
 公私日記:立川市教育委員会(1976)鈴木平九郎「公私日記」第6冊 天保13年.立川市教育委員会,98pp.  
 公私日記:立川市教育委員会(1976)鈴木平九郎「公私日記」第7冊 天保14年.立川市教育委員会,121pp.  
 公私日記:立川市教育委員会(1976)鈴木平九郎「公私日記」第8冊 天保15年.立川市教育委員会,109pp.  
 公私日記:立川市教育委員会(1978)鈴木平九郎「公私日記」第9冊 弘化3年.立川市教育委員会,142pp.  
 公私日記:立川市教育委員会(1978)鈴木平九郎「公私日記」第10冊 弘化4年.立川市教育委員会,136pp.  
 公私日記:立川市教育委員会(1979)鈴木平九郎「公私日記」第11冊 弘化5年.立川市教育委員会,168pp.  
 公私日記:立川市教育委員会(1979)鈴木平九郎「公私日記」第12冊 嘉永2年.立川市教育委員会,184pp.  
 公私日記:立川市教育委員会(1980)鈴木平九郎「公私日記」第13冊 嘉永3年.立川市教育委員会,154pp.  
 公私日記:立川市教育委員会(1980)鈴木平九郎「公私日記」第14冊 嘉永4年.立川市教育委員会,186pp.  
 公私日記:立川市教育委員会(1981)鈴木平九郎「公私日記」第15冊 嘉永5年.立川市教育委員会,  
 公私世田谷年代記(乾、坤);世田谷区史料 第一集,61-194  
 小塚光治(1962)川崎史話 上巻 多摩史談会,248pp.  
 小塚光治(1965)川崎史話 中巻 多摩史談会  
 小塚光治(1967)川崎史話 下巻 多摩史談会  
 国立市史 中巻;国立市(1991)  
 区史平川家文書1;東京都大田區史編さん委員会(1975)大田區史(資料編)平川家文書1.東京都大田  
 区史平川家文書2;東京都大田區史編さん委員会(1976)大田區史(資料編)平川家文書2.東京都大田  
 区史平川家文書3;東京都大田區史編さん委員会(1977)大田區史(資料編)平川家文書3.東京都大田  
 区史平川家文書4;東京都大田區史編さん委員会(1978)大田區史(資料編)平川家文書4.東京都大田  
 区史平川家文書5;東京都大田區史編さん委員会(1979)大田區史(資料編)平川家文書5.東京都大田  
 旧多摩郡鎌田村名主橋本家文書目録災害;東京都世田谷区教育委員会(世田谷区立郷土資料館)(1983)旧多  
 摩郡鎌田村名主橋本家文書目録.東京都世田谷区教育委員会,173pp.  
 三田義春三田義春(1977);世田谷区の用水と河川.東京都世田谷区教育委員会,33pp.  
 長島保(1992)多摩川の治水.多摩川(大田區郷土の会),32,64-69  
 長島保(1992)多摩川の治水と築堤運動.川崎関係史料集,第10集  
 長島保(1993)多摩川の治水(二).多摩川(大田區郷土の会),33,34,90-93  
 長島保(1994)多摩川の治水(三).多摩川(大田區郷土の会),35,78-82  
 長島保(1994)多摩川の治水(四).多摩川(大田區郷土の会),36,56-59  
 長島保(1996)多摩川の治水(五).多摩川(大田區郷土の会),38,64-67  
 内務省:内務省土木局 土木工要録(1881)復刻 恒和出版(1976)  
 内務省土木局;土木工要録(1881)復刻 恒和出版(1976)  
 恩方村村史年表(1955)恩方中学校  
 大森区史;大森区役所(1939)  
 大田區史;大田區役所(1951)大田區史.大田區役所,1205pp.  
 大田區:大田區史年表 大田區役所編(1968)  
 大田區史中巻;大田區役所(1992)大田區史編さん委員会  
 清助日記:日野市教育委員会(1997)河野清助日記 一 慶応二~四年.日野市教育委員会,134pp.  
 正統桑都日記(内閣文庫蔵);塩野適斎(1972,1973)桑都日記 正,統.鈴木龍二記念刊行会  
 世田谷区史上巻 1962 世田谷区;東京都世田谷区(1962)世田谷区史上巻.東京都世田谷区,  
 世田谷区史料 ;第一集,1955,  
 世田谷区立郷土資料館編(1985)世田谷区史料叢書 第一巻,492pp.  
 世田谷区立郷土資料館編(19 )世田谷区史料叢書 第三巻, pp.  
 世田谷区立郷土資料館編(1989)世田谷区史料叢書 第四巻,444pp.  
 世田谷区立郷土資料館編(1990)世田谷区史料叢書 ;第五巻,516pp.  
 世田谷区立郷土資料館編(1991)世田谷区史料叢書 ;第六巻,537pp.  
 世田谷区立郷土資料館編(1992)世田谷区史料叢書 ;第七巻,548pp.  
 世田谷区立郷土資料館編(1993)世田谷区史料叢書 ;第八巻,521pp.  
 世田谷区立郷土資料館編(199 )世田谷区史料叢書 ;第九巻, pp.

清水兵四郎家文書「享保十年申ノ十一月十四日八王子中市相場附」  
 新編埼玉県史別冊3自然；埼玉県（1986）。「新編埼玉県史 別冊3 自然」，埼玉県560pp.  
 水害：建設省国土地理院（1963）水害予防対策土地条件調査報告書，109pp.  
 水害年譜（荒川年）；大塚一男 近世における荒川中流域の水害と治水 所収の水害年譜  
 玉川満水荒年数覚書；石川善太郎家文書 昭島市史附編（1978）昭島市 638pp.  
 多摩川誌；多摩川誌編集委員会編集（1986）、財団法人河川環境管理財団、1992pp.  
 多満自慢石川酒造文書第一巻（1985）；多仁 照廣編集，霞出版社，511pp.  
 多満自慢石川酒造文書第二巻（1986）；多仁 照廣編集，霞出版社，pp.  
 多満自慢石川酒造文書第三巻（1988）；多仁 照廣編集，霞出版社，pp.  
 多満自慢石川酒造文書第四巻（1989）；多仁 照廣編集，霞出版社，pp.  
 多満自慢石川酒造文書第五巻（1990）；多仁 照廣編集，霞出版社，564pp.  
 多満自慢石川酒造文書第六巻（1994）；多仁 照廣編集，霞出版社，945pp.  
 多満自慢石川酒造文書第七巻（1996）；多仁 照廣編集，霞出版社，481pp.  
 多摩市史資料編二p.453「安政6年9月玉川出水につき流失もの吟味取下げ願」  
 多摩市史 資料編二（1995）多摩市史編集委員会，多摩市，pp.640  
 多摩市史資料編二p.542「天保7年8月 田畑不作につき減免願書」  
 谷合氏見聞録 付・伊勢道中記 青梅市史料州19号 1974 青梅市文化財保護委員会編 131pp.  
 立川：立川市史編集委員会（1969）立川市史，立川市，1331pp.  
 東海寺文書；東京都大田区史編さん委員会（1988）大田区史（資料編）東海寺文書，東京都大田区，415pp.  
 東国；菊地山哉（1967）東国の歴史と史跡.  
 東京市史稿（1915）：東京市史稿変災篇第二 東京市役所，pp1002  
 東京市史稿（1915）：東京市史稿変災篇第三 東京市役所，pp1224  
 東京都神社名鑑（上巻）（1986）東京都神社庁編纂発行，662pp  
 東京都神社名鑑（下巻）（1986）東京都神社庁編纂発行  
 東急（1976）；多摩川76資料集 東急環境浄化財団  
 東急（1977）：とうきゅう環境浄化財団「多摩川'77」資料編；東京都建設局「東京の中小河川」  
 調布市史 中巻；調布市 1992  
 松本茂樹（2000）洪水史からみた大井川平野における洪水の特徴と船型屋敷・屋敷林，『山地・河川の自然と文化赤石山地の焼畑文化と東海型河川の洪水』大明堂，81-114

---

「たまがわ こうずい かんきょうへんどう 多摩川の洪水と環境変動 — きんせい たまがわこうずいし かんしんせいだんきゅう 近世多摩川洪水史と完新世段丘 —」

(研究助成・一般研究VOL. 23—No.129)

著者 ます ぶち かず お 増 渕 和 夫  
発行日 2002年3月31日  
発行 財団法人 とうきゅう環境浄化財団  
〒150-0002  
渋谷区渋谷1-16-14 (渋谷地下鉄ビル内)  
TEL (03)3400-9142  
FAX (03)3400-9141

---